

平成 16 年度
自然公園等施設整備委託
地域再生調査報告書

平成 17 年 3 月

神 奈 川 県
日 本 大 学

目次

1. 調査計画の概要
2. 活動状況
 - (1) 基礎調査グループ(全体調整を含めて)
 - (2) ツーリズム・環境教育グループ
 - (3) なりわい再生グループ
 - (4) 暮らし再生グループ
3. 調査の中間結果
 - (1) 基礎調査・市町村ワークショップ・地域再生フォーラム
 - (2) ツーリズム・環境教育学習
 - (3) なりわい複合再生
 - (4) 暮らし再生
4. 成果発表など
 - (1) 丹沢大山総合調査関連のセミナーとシンポジウムにて
 - (2) 関連学会発表
5. 今後の予定(来年度の調査予定等)
 - (1) 基礎調査・市町村ワークショップ・地域再生フォーラム(全体調整を含む)
 - (2) ツーリズム・環境教育
 - (3) なりわい複合再生
 - (4) 暮らし再生
6. 各調査の報告
 - (1) 基礎調査・市町村ワークショップ・地域再生フォーラム
 - (2) ツーリズム・環境学習調査
 - (3) 山のなりわい調査
 - (4) 暮らしの再生調査

1. 調査計画の概要

今回の丹沢大山総合調査は、丹沢大山地域のブナ再生、シカの保護等の動植物、土・水の保全・循環・再生のための調査だけでなく、丹沢大山の自然と人間に関する社会科学的で総合的な調査を、地域再生調査として含んでいるのが特徴である。丹沢大山地域での自然環境を保全し、生き物と共生し、地域の社会経済の活性化につながる登山や観光のあり方、丹沢版のエコツーリズムの進展、丹沢大山地域に暮らす人達の暮らしの再生、森林資源を活用した地域の生業の再生等についての課題と再生シナリオ、アクションを考えることが目的である。

丹沢大山地域での自然再生は、丹沢大山への地域社会の継続的な関わりの中で可能となる。1992年の地球環境サミット以降、地球上の全ての人間活動は、環境・経済・社会の総合的關係の上での持続性を獲得することが世界的に求められている。今回の丹沢大山総合調査における、地域再生チームの基本的な視点もここにある。ブナ枯れ、シカの保護対策、登山に伴う自然環境への負荷となるオーバーユース対策、麓集落での農業や暮らしへの鳥獣被害対策、森林業の複合的な再生、過疎化高齢化での山間集落での活性化対策の方向性をこの複合的で総合的な視点から解いていく。地域社会の維持、新たな再生を模索しながら、丹沢大山地域における自然の「保全」と「利用」のバランスを考え、丹沢大山の総合的再生の方策を示していきたい。

以上の主旨の元に、地域再生調査チームは、関連市町村を単位とした土地利用、人口、産業等の基礎的資料整理、関連8市町村の地域再生に関する施策整理や課題の基礎的研究を進めると同時に、①オーバーユースに関する登山実態、環境施設等の実態に関するツーリズム・環境教育学習、②林業及び森林資源を活用した山のなりわい再生、③鳥獣被害対策と農業・食の復活、水・住文化の再生による山麓での暮らし再生の3つの地域再生をテーマに、その課題や今後の展望について研究し、検討を進めてきた。また、これらの課題抽出やビジョン作成を、地域再生チームの調査員だけでなく、市町村行政、地域の関連住民、企業等の幅広い参加を得て、市町村ワークショップや、地域再生フォーラムの形式で検討した。このような多様な主体の参加型での調査方式により、調査を通して、丹沢大山の地域再生アクション主体者の発掘とそのネットワークの構築が可能となると考える。来年度は、この参加型調査方式を継続すると同時に、より具体的な社会実験的取組も入れて、より実効性のある地域再生のための政策提案を構築していきたい。

(文責：糸長浩司)

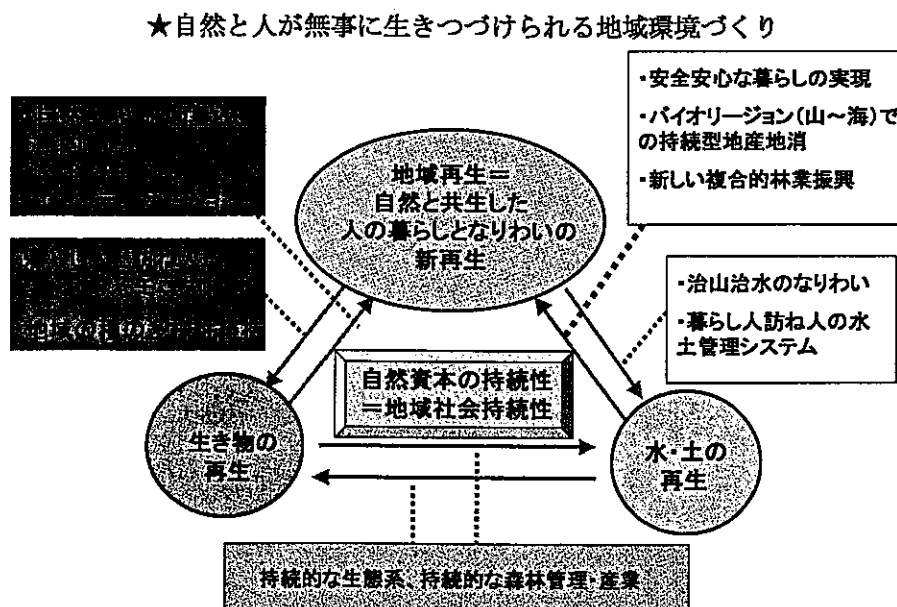


図 1.1 丹沢大山総合調査での地域再生調査の位置づけ

| 目的 | <p>「丹沢大山地域での自然再生は、地域社会の継続的な関わりの中で可能になる」、「自然と人が無事に生きつづけられる丹沢再生」を基本テーマとし、地域社会・経済の再生・維持を模索しながら、自然の「利用」や「保全」のバランスを考えつつ、丹沢大山再生の課題とシナリオを明確にする。そのために、人間がかかわってきた自然や産業、歴史、文化などの地域資源に関する基本データの整理・分析、地域住民を含めた多様な関係者の協働により、地域再生の課題の明確化、再生シナリオ・行動計画の策定を目的とし、かつこの調査過程を通じてその担い手・組織のネットワークを育成する。</p> <p>(目標) ① 地域資源、情報の収集・整理・地図化と分析 ② 特定3課題(ツーリズム環境教育・山のなりわい再生・暮らし再生)別の実態把握と解析 ③ 特定3課題を核とした地域再生シナリオと行動計画づくり ④ 人・組織・ネットワークの育成</p> | | | | | | | | | | | |
|---------------------------|--|---|--|---|------|--------|----------------|-------------------------------|--------------------------|-----------------------------|---------------------------|----------------------------------|
| 体系 | 基本調査 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域基本指標調査 人口・土地利用変化、地域資源、社会指標、経済指標、地域組織、ツーリズム・観光関連施設の分布etc ○ ツーリズムと環境教育学習 登山道・登山数等のオーバーユース・ツーリズム実態、環境教育プログラム・ニーズ調査、ビジョン作成 ○ 山のなりわい再生戦略 森林資源の賦存量調査、県の森林施策調査、森林バイオマス資源賦存量調査、課題と再生ビジョン作成 ○ 暮らしの再生(歴史・生活・文化の再生) 丹沢の生活文化の歴史把握、農と食・水・住・集落・景観の復活課題とビジョン作成等 | | | | | | | | | | |
| 組織 | <p>調査チームリーダー：糸長浩司(調査員31名)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 50%;">基本調査</th> <th style="width: 50%;">特定課題調査</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>① 地域情報整理：糸長研究室</td> <td>④ ツーリズムと環境教育学習：GL糸長・池野・有川etc.</td> </tr> <tr> <td>② 市町村フォーラム運営：糸長研究室・橋本・奥村</td> <td>⑤ 山のなりわい再生戦略：GL富村・佐藤・川又etc.</td> </tr> <tr> <td>③ 地域再生フォーラム運営：糸長研究室・橋本・奥村</td> <td>⑥ 暮らしの再生(歴史・生活・文化再生)：GL糸長・栗原etc.</td> </tr> </tbody> </table> | | | | 基本調査 | 特定課題調査 | ① 地域情報整理：糸長研究室 | ④ ツーリズムと環境教育学習：GL糸長・池野・有川etc. | ② 市町村フォーラム運営：糸長研究室・橋本・奥村 | ⑤ 山のなりわい再生戦略：GL富村・佐藤・川又etc. | ③ 地域再生フォーラム運営：糸長研究室・橋本・奥村 | ⑥ 暮らしの再生(歴史・生活・文化再生)：GL糸長・栗原etc. |
| 基本調査 | 特定課題調査 | | | | | | | | | | | |
| ① 地域情報整理：糸長研究室 | ④ ツーリズムと環境教育学習：GL糸長・池野・有川etc. | | | | | | | | | | | |
| ② 市町村フォーラム運営：糸長研究室・橋本・奥村 | ⑤ 山のなりわい再生戦略：GL富村・佐藤・川又etc. | | | | | | | | | | | |
| ③ 地域再生フォーラム運営：糸長研究室・橋本・奥村 | ⑥ 暮らしの再生(歴史・生活・文化再生)：GL糸長・栗原etc. | | | | | | | | | | | |
| 全体計画 | 項目 | 2004年度 | 2005年度 | 2006年度 | | | | | | | | |
| | 基本調査 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域目録情報の収集・整理 ○ 特定課題別基礎調査・GIS化 ○ 市町村WSでの課題整理 ○ 地域再生フォーラム開催 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域目録情報の収集・整理の継続・地図化・解析 ○ 市町村WSの継続と調整 ○ 地域再生フォーラム開催継続 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 基礎調査成果の冊子化で、エコツーリズムの教材活用 ○ 市町村WS+地域再生フォーラムでの合意形成 | | | | | | | | |
| | 特定課題調査 | <ul style="list-style-type: none"> ○ ツーリズムと環境教育学習 登山道荒廃・整備状況、登山・キャンプ利用実態意識、環境教育学習施設実態、エコツーリズム先進事例調査、オーバーユース課題整理 ○ 山のなりわい再生複合戦略 森林荒廃調査、森林資源、林業施策、上下連携、バイオマス活用、なりわい再生組織展望 ○ 暮らしの再生 農と食の歴史文化、水・住・集落空間と利用文化、鳥獣被害実態意識、モデル地区での地域参加WS | <ul style="list-style-type: none"> ○ 各特定課題別での継続調査 ○ 各特定課題別でのビジョン展開のための条件整理 ○ モデル地区別での詳細な再生シナリオの作成 ○ 市町村WS、地域再生フォーラムとの連携による再生ビジョン・シナリオの具体的な検討 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 各特定課題別での地域再生シナリオの確定 ○ シナリオを実現するための各行動計画の確定 ○ 特定課題別での政策提案の確定 | | | | | | | | |
| | 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域空間変容・地域資源地図 ○ 特定課題別実態調査結果(登山道・登山者数・環境教育実態、森林資源実態モデル解析、モデル地区での暮らし歴史と実態) ○ 特定課題別再生シナリオの方向性提示(政策提案(案)を含む) | <ul style="list-style-type: none"> ○ 基礎調査結果の拡充 ○ 特定課題再生戦略の確定 ・ 地域再生シナリオ ・ 地域再生政策案の合意形成 ○ 地域再生行動総合計画案 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域再生行動計画策定 ○ 地域再生のための政策提案 ○ モデル地区での具体的な再生行動計画の確定 | | | | | | | | |

2. 活動状況

(1) 基礎調査グループ（全体調整を含めて）

- ① 8市町村の関係部局への聞き取り調査
- ② 市町村WS開催（8市町村行政職員参加、2回）2004年8月27日、12月10日、実施に当たっては、各調査グループ別の分科会の実施
- ③ 地域再生フォーラムの開催（一回目25名、二回目15名参加）、2004年10月16日、05年2月20日、実施に当たっては、各調査グループ別の分科会の実施
- ④ 基礎資料（土地利用変化、人口動態等）の収集と解析
- ⑤ 地域再生チーム調査員全員参加の調整会議（二ヶ月毎に開催）

(2) ツーリズム・環境教育グループ

① 登山道等施設実態調査

県民参加による登山道実態・荒廃状況調査（04年10月～12月、32名協力で12路線）、登山道利用人数調査（04年11月13, 14, 16, 20, 21日）、登山道施設（50路線）の整備実績状況把握

② 登山者の利用実態意識調査

丹沢ボランティアネットワーク（04年9月実施、回答423名）

一般登山客（04年10月～12月実施、回答88名）へのアンケート実施

③ キャンプ利用者の意思調査：主要8キャンプ場アンケート調査（04年8月実施、回答者313名）

④ 山小屋経営者とのワークショップ（05年3月14日）

④ 丹沢大山地域での環境教育学習施設活動に関する実態と意識の聞き取り調査

県立ビジターセンター、18施設36団体計54件中アンケートの回収33件

⑤ 環境施設関係者を集めたワークショップ開催（1月26日）

⑥ エコツーリズムの国内先進事例の収集と現地調査

ホールアース自然学校、いしかわ自然学校、東京都奥多摩地域、足尾環境学習センター、乗鞍山麓・五色原、屋久島（環境文化村、YNAC（屋久島野外活動総合センター）等）

⑦ GISによる登山道施設・環境教育関連施設等のデジタル情報化

⑧ 丹沢ボラネットの湧水54地点調査での水質分析での陽イオン分析協力

(3) なりわい再生グループ

① サブテーマ別調査（間伐実証調査も含む）

林業、木質バイオマス、広葉樹林活用、森林ビジネス、間伐材収穫・利用、森林構成・GIS、川上川下連携、権利関係等のテーマで、現地調査、現地での間伐実証調査

② 循環型森林資源活用ワークショップ（12月13日）

(4) 暮らし再生G

① 食文化史調査として、i. 完新世以後の遺跡・遺物の踏査、ii. 発掘調査報告書等の検討、iii. 食具・聞き書き資料の調査

② 地域資源把握、農業経営の広域概査、松田町寄地区で農地・農業者聞き取り・鳥獣被害実施調査、住民参加ワークショップ松田町ミカンオーナー制、「秦野市田原ふるさと公園」実査、旧生活改良普及員から地域食文化ヒアリング、「東地区農産物直売センター」等食アンケート調査、直売関係者のヒアリング調査の実施

③ 地域開発経営実証調査としてモデル地区松田町寄地区でWS（12月5日）

④ 鳥獣被害実態アンケート調査を松田町寄地区、津久井町青根地区で実施

⑤ モデル集落調査として、山北町玄倉地区で水・住空間・集落空間詳細調査

⑥ 地域再生の総合的課題と再生シナリオ作成のモデル地区として津久井町青根地区を選定し、青根地区振興協議会住民との協働WS実施（2月6日）

（文責：糸長浩司）

3. 調査の中間結果

(1) 基礎調査・市町村ワークショップ・地域再生フォーラム

1) 基礎調査

(1) 丹沢大山の8市町村での土地利用変化からみた都市化状況

都市化状況：丹沢地域8市町村の1976～1997年の土地利用変化(GIS)で宅地化は3792haで、厚木市が39%で秦野市、伊勢原市と続く。宅地化されたのは農地が56%、林地が34%である。愛川町、津久井町、山北町、松田町、清川村等の山麓地域の町村で100ha前後の林地が宅地に変化し、平地の農地だけでなく、山際での住宅地化による都市化も丹沢地域の特徴である。

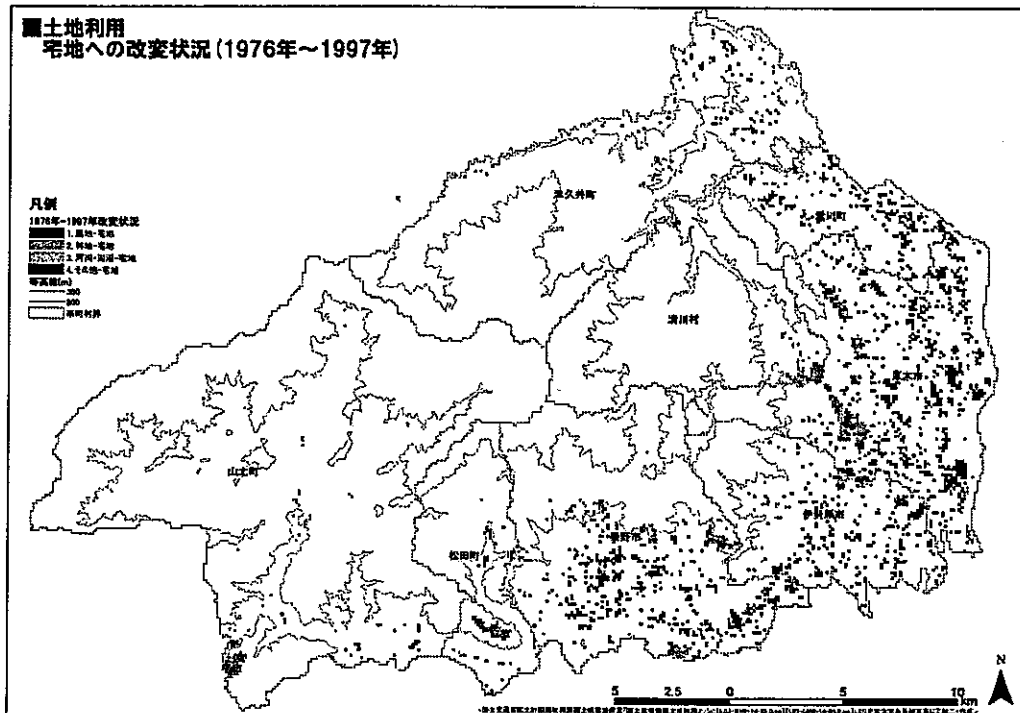


図 1.1
8市町村
での土地
利用変化
と都市化

(2) 丹沢大山国立公園内での土地利用変化

丹沢大山国立公園は、特別保護地区、第1種特別地域、第2種特別地域、第3種特別地域に分けられる。1976年～1997年での宅地への改変状況をみると、第2種特別地域で1ha、第3種特別地域で41haの宅地への土地利用改変がみられた。

その他(荒地)への改変状況をみると、特別保護地区内では65ha(3.5%)、第1種特別地域は26ha(1.3%)、第2種特別地域は46ha(0.9%)、74haと面積的に最も荒地化している第3種特別地域は74ha(0.4%)の改変であり、特別保護地区内での荒地への改変率が高いことが伺える。

(3) 人口動態

厚木市、秦野市、伊勢原市を中心都市とする約60万地域であり、1965年度から2001年度での人口動態を見ると、現在も厚木市、伊勢原市での人口増加傾向にあるが、その増加率は前期と比較すると落ち着いてきている。一方で、松田町、山北町のように、停滞か減少傾向の山麓町がある。また、その他の町では増加傾向にあるが、山間地域での人口減少も高齢化傾向にある町村もある。

(4) 観光客動態

1984年から2001年での観光客動向を分析した。8市町村合計で1200万以上の観光客が訪れ、宿泊客は60万人、日帰り客は1000万人を超えている。全盛期では、1300万人を超える観光客で、宿泊客も80万人を超えた年もあった。近年は、観光客数は概ね横這いの状況であるが、宿泊客の減少が目につく。この期間での観光客増加率は、全体で1.16倍であるのに対して、宿泊客増加率は0.9の減少し、日帰り客は1.16倍で増加し、日帰り傾向での観光客が多い。厚木市、松田町、秦野市等での宿泊客の減少に対して、津久井町では、絶対数は少ないが、宿泊客の増加傾向がある。また、清川村は、宮が瀬ダムの影響により、日帰り客の増加率が際だっている。

表 1.1 8 市町村の人口動態

| 市町村名 | 2001 年 人口数 | 人口増加 率 | 前期人口 増加率 | 後期人口 増加率 |
|------|---------------|-----------|-------------|-------------|
| 愛川町 | 42670 | 2.95 | 2.37 | 1.22 |
| 伊勢原市 | 99392 | 3.25 | 2.46 | 1.30 |
| 厚木市 | 217718 | 3.64 | 2.79 | 1.27 |
| 山北町 | 13512 | 0.89 | 0.92 | 0.96 |
| 松田町 | 12866 | 1.13 | 1.12 | 1.00 |
| 秦野市 | 167617 | 2.94 | 2.39 | 1.20 |
| 清川村 | 3488 | 1.24 | 1.00 | 1.26 |
| 津久井町 | 30176 | 2.24 | 1.76 | 1.24 |
| 全体 | 587439 | 2.87 | 2.27 | 1.24 |

- ① 人口増加率=2001 年人口/1965 年人口
- ② 前期人口増加率=1984 年人口/1965 年人口
- ③ 後期人口増加率=2001 年人口/1985 年人口

表 1.2 8 市町村の観光人口動態

| 市町村名 | 2002 年観 光客数 | ①観光客 増加率 | ②宿泊客 増加率 | ③日帰り 客増加率 |
|------|----------------|-------------|-------------|--------------|
| 愛川町 | 995 | 0.97 | 0.83 | 0.98 |
| 伊勢原市 | 1447 | 0.75 | 0.96 | 0.74 |
| 厚木市 | 2300 | 1.08 | 0.66 | 1.1 |
| 山北町 | 1656 | 1 | 1 | 1 |
| 松田町 | 545 | 1.14 | 0.63 | 1.25 |
| 秦野市 | 1899 | 1.28 | 0.78 | 1.3 |
| 清川村 | 2692 | 2.68 | 0.96 | 2.74 |
| 津久井町 | 878 | 0.9 | 1.23 | 0.87 |
| 全体 | 12412 | 1.16 | 0.9 | 1.16 |

- ① 観光客増加率=1994~2002 年の年間観光客平均/
1994~2002 年の年間観光客平均
- ② 宿泊客増加率も上の同様の計算
- ③ 日帰り客増加率も上の同様の計算

(5) 丹沢大山地域 8 市町村での地域再生に関する特徴ある事業調査

各市町村での独自性ある地域再生の試みがされている。麓集落での里山づくり、自然体験等での交流活動及び鳥獣被害対策に関するものが目立つ。

| 市町村名 | 地域再生に関する特色ある事業（住民活動も含む） |
|------|---|
| 秦野市 | 「秋の神奈川再発見キャンペーン」協賛事業（丹沢山麓「そば打ち体験と温泉満喫ツアー」）、ネイチャー発見隊、生き物の里、里地里山保全再生モデル地域事業（環境省自然環境局）、里山づくり推進事業（神奈川県）、照葉樹の森づくり事業、地下水汚染対策、荒廃・遊休農地解消対策事業、アグリサポート（援農制度）事業 |
| 厚木市 | 自然学習拠点整備による再生計画（七沢地区のロープウェー計画）、仮称）七沢ふるさと食文化村構想基本計画、七沢自然教室、厚木市エコ・レクの里構想（飯山・東丹沢温泉郷および飯山、七沢地区とその周辺）、里山マルチライブプラン事業、里山保全推進事業（七沢） |
| 伊勢原市 | 「ワークショップ形式による公園の計画づくり」（主体は神奈川県）、そばづくり農業体験事業、市民活動林整備事業（高森）、谷戸田保全整備事業/谷戸田オーナー制度（日向・小易）、みかんの木オーナー制度（比々多地区）、地場産野菜料理コンテスト、歴史解説アドバイザー養成事業、歴史文化財散策コースの整備 |
| 松田町 | 自然館事業（西平畑公園）、花木植栽事業（寄地区）、寄自然休養村「ホタルを育てる会」、みかんの木オーナー制度、寄自然休養村養魚組合 |
| 山北町 | 中山間整備事業による里山づくり、県産木造公共施設の整備、山北町土地利用に関する基本条例、7 地区別での地域住民による地域づくり、 |
| 愛川町 | 水源地域交流の里づくり（神奈川県）、里山保全推進事業（神奈川県、八菅山地区）、愛川町自治基本条例、有害鳥獣対策用備品購入費補助金、 |
| 清川村 | 水源地域交流の里づくり（神奈川県、宮ヶ瀬）、 |
| 津久井町 | サイクリングツアー（津久井ー横浜間水道みち）、水源地域交流の里づくり（神奈川県、青根）、中道志川トラスト運動（中道志川トラスト協会、道志川（拠点：道志川の家）、「遥かな友に」道志川合唱祭（青根の自然休養村）、東海・首都圏自然歩道管理委託事業、グリーンカレッジつくい、道志川とまり隊、わくわく冒険隊（中野）、有害鳥獣対策 |

（糸長浩司、關正貴、橋本忠義）

2) 市町村ワークショップ

丹沢大山地域の 8 市町村の企画課、産業課、観光課、教育関係課等の職員の参加で開催した 2 回のワークショップの成果概要を以下に述べる。

(1) 第一回市町村WS

1) 魅力マップづくり

①現状：愛川・厚木では、七沢温泉、自然教室などをはじめ施設が多数ある。伊勢原・秦野では、名水スポットや眺望の良い場所があり、ウォークラリーもある。松田・山北では、古いものでは「やぶさめ」等の山のハイキングコースや水、新しいものでは丹沢湖のイベントがある。津久井・清川では、東海自然道など、丹沢山ルートに人気がある。環境学習などの拠点に1年中人が訪れてくる。

②総括：山の方に魅力が集中するが、里山の方につながっていない。点だけではなく面として広がりも欲しい。山岳も重要であるが、麓と山岳をつなぐことが今後のテーマとなる。

2) なりわい面影マップづくり

①現状：愛川・厚木には古い石切場があるが、石切、石材等の産業遺構の他はあまりない。伊勢原・秦野では、たばこ乾燥室、炭焼き小屋などがある。山北はかつて林業鉄道、江戸後期の用水の遺構があった。棚田が減った。製材所は津久井に4箇所、清川に1箇所、清川では地産地消が行われている。

②総括：この地域は歴史的に林業が成立していたのかどうか。山の材を使う技術があったはずだし、丹沢大山の人達はなりわいを3つ〜4つぐらい持っていたのではないかと。ダムで消えたものもあろう。山を生かした新しいなりわいの知恵と技術を作っていく必要がある。

3) 人材マップづくり

①現状：愛川・厚木では、黄金井酒造さん、温泉の中村さん、「たまいかん」のおかみさん、産業フロンティアなどの人材を集めるとよい。伊勢原・秦野では、山小屋のオヤジさん。ふるさと公園ソバ職人。森林組合。伝統工芸の凧、コマなど。四十八瀬川自然村の共同管理や、自治会で植樹、伊勢原の集落単位の活動も見られる。松田・山北では、ヤマメの養殖、マムシの養殖などがある。お茶（足柄茶）が多い。津久井・清川では、鳥獣保護を猟友会が担っている。伝統芸能が残っている場所がある。

②総括：誰がどんな役割を担っていけるのかを明らかに、新たな人材とそれらの人材をつなげる。

(2) 第2回市町村WS

各調査グループでのテーマを絞り、課題とその解決のための政策提案につながるものを抽出した。

1) 観光（ツーリズム）・環境教育学習

■検討内容：登山ツーリズム

| 課題 | 提案 |
|---|---|
| 観光振興と山のツーリズム政策が一致していない。 登山等の山のツーリズムと麓の観光との分離と連携をどう図るか 各市町村に観光担当者はいるが、登山対策・オーバーユース対策等の担当者はいない | |
| (登山オーバーユース) 登山方法とルートの整理 登山者用トイレの整備と管理の方法 | <ul style="list-style-type: none"> 登山道巡視員派遣制度の継続等でオーバーユース対策手法として活用、人材育成等 今年度から始めた自然環境保護センターと地元市町村行政担当者との話し合いの場拡充 |
| (観光振興) 登山客は麓の観光客とは別であり、ほとんどお金を地元におとさない。 登山振興策と地元の観光振興を分離して考えるか。新たな登山関連、山関連の地元経済振興につながる観光客を掘り起こすか。 | <ul style="list-style-type: none"> 丹沢大山地域での8市町村間の情報ネットワーク、マーケティングなどの連携の育成 ex. るるぶ 各橋町村が独自に取り組んでいる、麓での観光ボランティアガイド育成の共通・連携化 |

2) なりわい再生（循環型森林資源活用）

■検討内容：①. 里山での今後の森林管理のあり方、②. その中での市町村の役割

| 課題 | 提案 |
|---|---|
| 拡大造林したが、山の関わりが減少したこと | <ul style="list-style-type: none"> 山への係わり復活、林産物の再生産 |
| 不在地主所有者、持ち主が複雑になりすぎている | <ul style="list-style-type: none"> 市町村・森林組合での洗い出し |
| 丹沢南麓では市民活動の場としての里山づくり 津久井・山北には林業残るが小規模 | <ul style="list-style-type: none"> 里山山村の復活、都市民との連携 山への係わり復活、林産物の再生産 |
| 県産材のコスト高 | <ul style="list-style-type: none"> 林業の集約化、流通ルートの簡素化 |

| | |
|------------|--|
| 県産材の普及PR不足 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 町内材活用 ・ 安定供給をするために供給体制を整える ・ 使える林道を復活する ・ 林業を林道に集約させれば使えるのでは… |
|------------|--|

3)暮らし再生（歴史・生活・文化）

■検討項目：①郷土食おこし（食育）、②鳥獣被害、③山の風景・町並づくり

| 課題 | 提案 |
|---|---|
| (鳥獣被害について) ・サル、シカ、イノシシの保護優先策と種の保存基準 ・山ビル被害が同時に拡大している(野焼きができない) ・柵である程度防げるが河川や幹線道路では難しい | この項目が最も深刻で9割ついやした。 ・暮らしの面からの基準づくりによる法制度の改正 ・広域的な対策、説明(教育)、山の利用法を考える |
| (集落の風景・街並みづくり) ・鳥獣対策の柵が景観を壊している ・田畑荒れ風景よくない ・かつてあった各集落の特色がなくなる | ・荒廃農地の再生 |
| (農業振興)鳥獣被害との結びつき ・受皿の必要性、担い手の形成 ・農業を簡単にとらえている人多い | ・現組織、制度の見直し、情報機関を広域で作る必要あり ・食育事業を地域で進める。 |

(糸長浩司、橋本忠義、奥村玄)



写真 1.1 第1回市町村WS

写真 1.2 第2回市町村WS

写真 1.3 地域再生フォーラム

3) 地域再生フォーラム

(1) 第一回成果概要

1) ツーリズム・環境教育

登山道、水環境、山と里、管理、観光と里山景観、キャンプ場、子どもの環境教育等が話題となった。

- ・ オーバーユースの問題に対し、分散的な登山計画が必要。
- ・ 丹沢の乾燥化について、データをとる必要がある。
- ・ 「山の神」の分布を調べて、里山、暮らしにとっての丹沢大山地域での全体像が描けるのではないか。
- ・ どこを守り、どこを使い、どこを再生すればいいか、丹沢大山地域での新しいゾーニングが必要。
- ・ 里山の言葉は安易に使わないほうがよい。里山は人がだまって入ることはいけないとされている。
- ・ いい景観を残して、休み、交流し、体験できる環境、観光を考えたい。量より質の問題だ。
- ・ キャンプ場のマナーの問題は、利用客と経営者の双方の問題だ。
- ・ いろいろ体験できる小屋が丹沢大山地域に分散的にほしい。「33ヶ所巡り」の感じで使えるとよい。
- ・ 子どもが自然とふれあうことで感性をよみがえらせることが必要。…など

2) なりわい再生

丹沢の林業の履歴、林業の現状、新たな試み、これからの丹沢への展望等が話題となった。

- ・ ケヤキ、モミ、ツガ等の天然木を出荷し、昭和30年代後半から林業で食べられなくなった。
- ・ 雑木林であったところへ国策でスギ、ヒノキを植え、その結果、植えすぎて荒れている。
- ・ 今の山がどのくらいのキャパシティがあるのかきちんと捉えることが課題。
- ・ 丹沢は林道密度が低い→端材を出さず緑のリサイクルをする、山に返し樹木の育成に役立てるなど、丹沢での多様な利用が考えられる企業があるとよい。ヒノキ油は売れている。
- ・ 特徴的な材を建材として使うなど市場を狙ってチャンスを創出する。

- ・10～20年後、絶対に価値が出る、夢を見よう！！→この間の補充を行政で！ …など

3)くらし再生

鳥獣被害の現状や要因、その対応策や、生態系の乱れ、調査の進め方等が話題となった。

- ・農作物の被害や土壌の荒廃など、シカ、サル、イノシシ、ヒル等の被害に悩まされている。
- ・里山が崩れ、山の食が崩れた。里山が荒れて、山から直に里になってしまった。
- ・広葉樹林（ドングリなど）が無くなっている。鳥獣の食べ物ではないスギなど針葉樹林が多い。
- ・アシタバ、ノブキ等を里山に植え、鳥獣が嫌いなものを植え、里山より上に鳥獣の食べ物を植える。
- ・広葉樹林の減少、上流の激流、様々な場所での放流、導水管による沢水の枯渇、ダムによる水循環の分断などが生態系の荒廃をおこしている。道志川には昔はカジカがいたが、現在はいない。
- ・方向性と実態の違い。実態が明確にされないと意味が無いのではないか。
- ・調査項目や課題を整理する必要がある。時間設定・生き物・水など、どれに重点を置くのか。

(2)第2回地域再生フォーラムの成果

2004年度の調査結果を各グループでパワーポイントで説明し、個別、総括的質疑討論をした。

1)ツーリズム・環境教育

オーバーユースの歴史、背景、登山道荒廃状況、利用者意識、オーバーユース対策について、2004年度の調査報告をした。これに対して、登山靴は、登山道荒廃の原因のひとつなのかの質問があった。

2)なりわい再生

神奈川県森林概要、国産材流通、担い手、森林荒廃、所有者不明、境界不明私有地等の問題を提示し、環境保全型森林経営プラン樹立、野生動物管理事業の必要性、丹沢での生業再生の取り組みの展望等を報告した。森林バイオマスの活用目標量の設定とシカ肉の質問があった。

3)暮らし再生

「農と食の復興」、「住の復興」調査、青根地区ワークショップ等の成果を報告した。それに対して、「間伐材による花粉症の影響について」、「鳥獣被害のデータのおさえ方について」の質疑があった。

4)基礎調査・市町村ワークショップ・地域再生フォーラムについて

土地利用変化等の分析結果、今での市町村WS、地域再生フォーラム成果を報告した。今後は8市町村に出前的な企画を検討することが話題となった。

5)総括討論

「なりわい再生」にテーマを絞り総合討議を行った。議論を深めるため、「神奈川県で林業が成り立つのか？林業はいらないのか？」の問題提起がなされ、以下のような意見が出た。

- ・林業を確保する場合、どの程度、どのようなやり方、どのような生産なのか明確にする必要がある。
- ・丹沢の県有林、私有林をこれからどのような林にしていくのか。
- ・50年後を予想した時、林業はいるのか、いないのか。今後の具体的な目標をたてる必要がある。
- ・現在は外材に負け、保護伐採になってきているが、今後国産材が脚光を浴びるかもしれない。
- ・丹沢大山で林業をなりわいとしている37事業体の約400人の現状と問題。
- ・元々、神奈川は人工林での林業でまわしてきたのではなく、広葉樹を抜き伐りしてきたところ。人工林を撤退し、広葉樹利用産業に変えたらどうか。
- ・または、国産材の供給を担うために50年間準備するために人工林を残しておく。
- ・財産区有林が多い丹沢。その地域特性をふまえた議論が必要。(林業及び森林環境としての観点など)
- ・S30年代はどこの山に行ってもとてもきれいだった。そのような山に今は再生することはできない。

以上の点から下記のようにまとめた。これからは、鳥獣被害の問題を含めて複雑な自然生態系を理解し、一方で登山者や狩猟者などとの対応、森林整備、森林ドクター、林業を担っていけるように総合的森林管理技術者の育成が必要となっている。丹沢大山の森林の環境資源を総合的に評価し、森林環境資源を総合的に使用するなりわいの創造とその技術者の育成である。今までの狭い意味での林業とは違う新しい森林管理業、あるいはそれを持続的に使っていく暮らし人そういうスタイルを発信していかなければいけない。

(※長浩司、橋本忠義、奥村玄)

(2) ツーリズム・環境教育学習

大都市近郊で交通利便性の高い地域にもかかわらず、1000m以上の山々を抱える丹沢大山地域は多くの来訪者、登山客が訪れる貴重な場所である。近代的な登山が始まる以前から、大山信仰を始めとした信仰、山伏修行の山であり、歴史的には人との関わりの深い山間地域でもある。近年の中高年齢層の登山ブーム、アウトドア・レクリエーションブーム、ドライブ等により丹沢大山へのホリデー、ツーリズム等、都市的暮らしと自然的暮らしの両立を求める人達の訪れる場ともなっている。と同時に、オーバーユース等、自然保全・再生との両立の上で多くの課題を抱えている。ツーリズム・環境教育グループでは、登山実態、オーバーユース実態、登山者・レク客の意識、ビジターセンター等交流体験施設、環境教育プログラム、先進的なエコツアープログラム等の調査により、丹沢大山での自然再生・環境教育をテーマとした、持続可能な「丹沢大山エコツーリズム・エデュケーション」の構想を検討するための調査を進めた。また、一方的な奥山へのツーリズムを里地・里山ツーリズムへと転換させていくことも重要な視点と位置づけている。

1) 登山道荒廃実態調査

人が歩けば道になり、大勢が歩くと道は掘れてしまう。そして雨が流れ侵食が進む。歩きにくいところを避けて、登山コースを少し外れて植物の上を誰かが歩き出すと、その跡を他の人も歩いて、登山道の幅員が広がり、植生の退行が進む。オーバーユース（過剰利用）と呼ばれる現象が表れる。これに対して、木道や丸太階段、土嚢や石による路面舗装などの施設は、登山者の安全な歩行を確保するとともに、オーバーユースに対して自然環境の保護を目的としている。

平成16年9月23日と10月2日に、秦野ビジターセンター・大倉尾根線において、ボランティア登録がなされた県民を対象とした調査方法のレクチャーを実施した。指定された26路線（東海自然歩道は4路線、丹沢主脈線は4路線、首都圏自然歩道は2路線に分離）について「植生退行状況」「登山道侵食状況」「丸太階段・水切りの荒廃状況」を調査シートに記入するものとした。県民参加による調査員は、都合のつく時に、好きな路線を選んで、登山を楽しみながら調査票に記入、郵送する。県民参加による32票、12路線についての調査票の返送があった。

荒廃状況において、植生退行状況をはかる度合いの指標では、「1. 登山道の拡幅は見られないが、あっても平均0.2m未満」、「2. 登山道の拡幅が平均0.2~1m」、「3. 登山道の拡幅が平均1~3m」、「4. 登山道の拡幅が平均3m以上」のうち、4との評価が、西丹沢山稜線の大室山分岐点に対して指摘され、また、同路線において犬越路では3と評価されている。また、東海自然歩道における西沢公園橋、蛙ヶ丸山頂、大滝峠上、鳥屋方面分岐、丹沢主脈線における丹沢山頂、蛭ヶ岳山頂、大倉尾根線における一本松、駒止茶屋上部、つつじ新道線における石棚分岐、丹沢三峰線における丹沢山の各地点が、3と評価されている。

また、登山道侵食度をはかる度合いの指標では、「3. 全般に登山道の侵食が進み、周辺地盤との高低差が平均50cm~1.0m」の評価が、東海自然歩道における520mピーク及び姫次、首都圏自然歩道の見晴台及び九十九曲中間点、大倉尾根線の大倉登山口に対して指摘されている。

設置されている丸太階段数とその荒廃状況についての評価では、荒廃状況の指標である「1. 腐食なし、踏み面の段差もごくわずか」、「2. 傷が目立つ、踏み面の段差は10cm以内」、「腐朽進む、踏み面の一部の土が抜ける」、「4. ハードル化した階段が目立つ」のうち、4との評価が、二俣鍋割線における鍋割山頂、西丹沢山稜線犬越路上1221mピーク~大室山分岐中間点及び前大室に対して指摘されている。また、東海自然歩道における善六ノタワ、一軒家避難小屋上、姫次、首都圏自然歩道における半原越、土山峠分岐、640mピーク、宮ヶ瀬越、九十九曲中間点、丹沢主脈線における日高、蛭ヶ岳~地蔵平の中間点、地蔵平、大倉尾根線における一本松、西丹沢山稜線における大室山分岐点、3と評価されている。

また、水切の設置数及びその機能評価では、機能していない(0%)との評価が、東海自然歩道

における善六ノタワ、丹沢主脈線における棚沢ノ頭、地蔵平、原小屋平、西丹沢山稜線における犬越路上 1221m ピーク～大室山分岐中間点、大室山分岐点、つつじ新道線のゴウラ沢出合に対して指摘された。

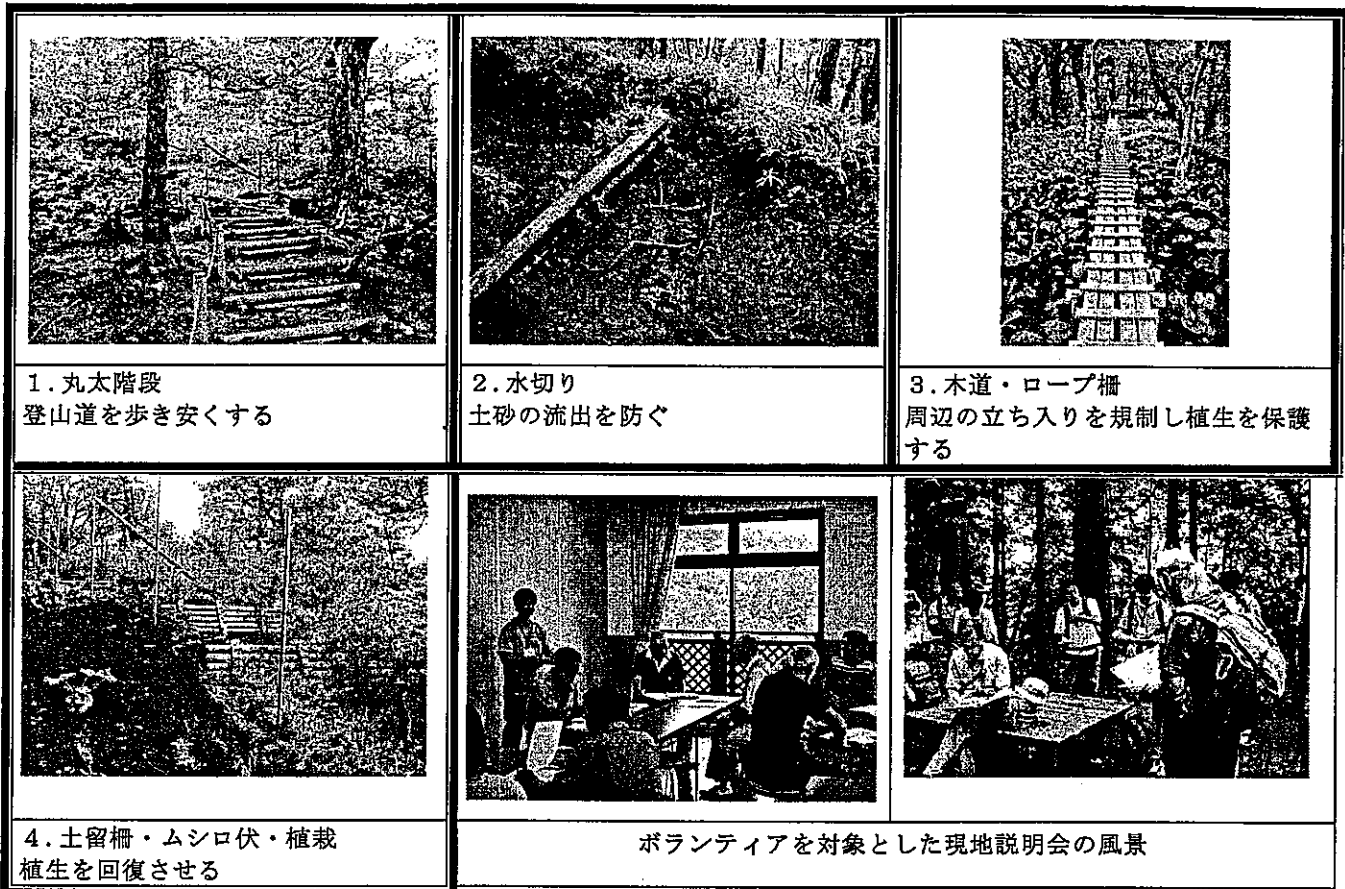


写真 2.1 登山道等施設の種類の調査説明

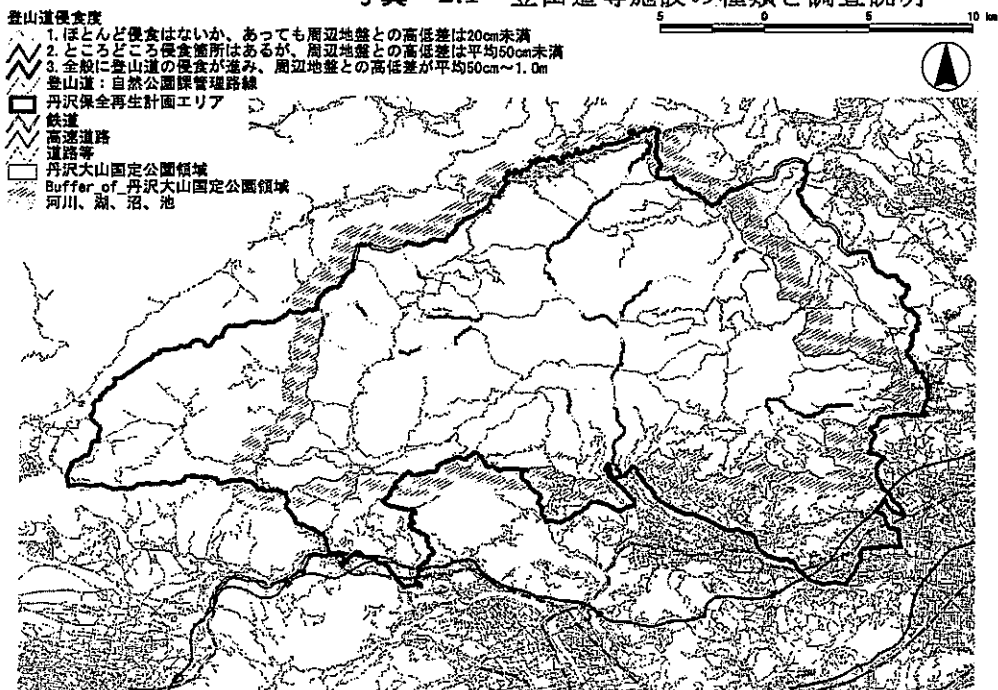


図 2.1 県民参加での評価による登山道侵食度

室山分岐中間点及び前大室に対して指摘されている。また、東海自然歩道における善六ノタワ、一軒家避難小屋上、姫次、首都圏自然歩道における半原越、土山峠分岐、640m ピーク、宮ヶ瀬越、九十九曲中間点、丹沢主脈線における日高、蛭が岳～地蔵平の中間点、地蔵平、大倉尾根線

における一本松、西丹沢山稜線における大室山分岐点が、3と評価されている。

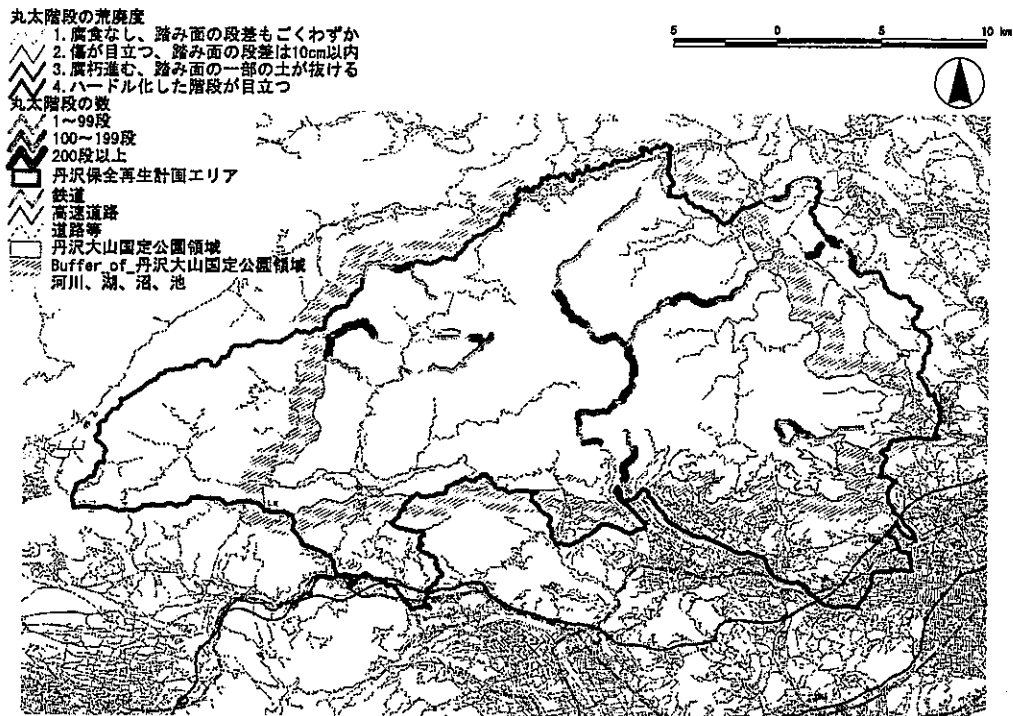


図 2.2 県民参加による丸太階段数とその荒廃度評価

(糸長浩司、藤沢直樹、杉浦高志、池野正、有川百合子、濱口勝哉、協力：自然環境保全センター吉田直哉)

2) 登山道利用人数調査

丹沢・大山地域での登山者数を把握するために、主な山頂に入ってくる人数と出ていく人数をカウントした。「丹沢大山ボランティアネットワーク」の協力のもとに（丹沢大山ボランティアネットワークの「みろく山の会」・「日本勤労者山岳連盟」・「丹沢自然保護協会」・「西丹沢の自然にふれあう会」・「北丹沢山岳センター」63名、「人材バンク」登録者2名、神奈川県自然環境保全センター1名、日本大学5名の計70人で調査）、9山頂、30箇所でもカウンター調査を11月13、14、16、20、21日の何れで実施した。計測時間は、朝9時～14時00分15時である。

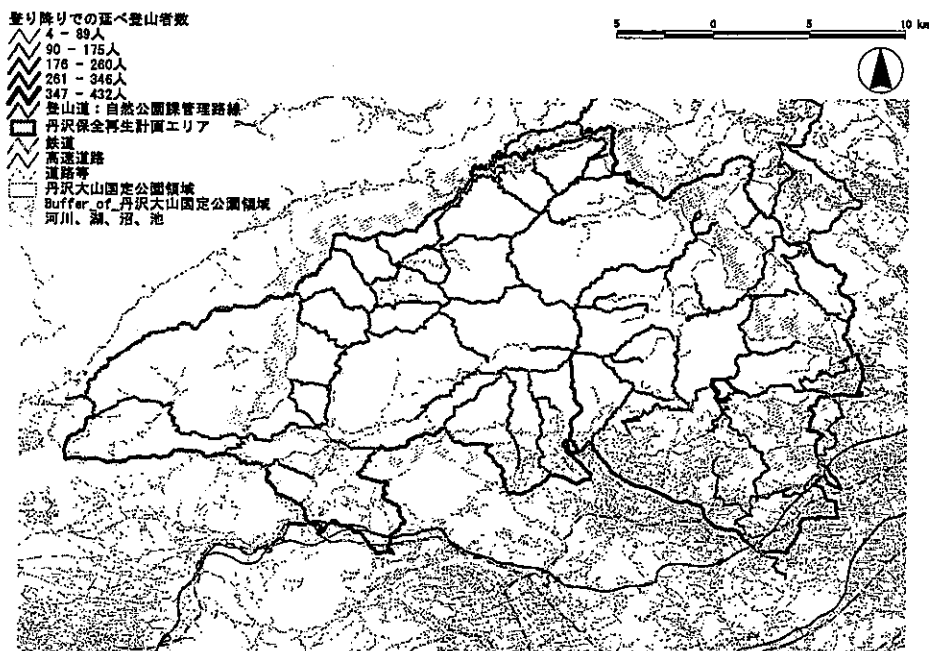


図 2.3 登山道利用人数 (パーソントリップ)

9 山頂及び登山道 30 箇所を実施した登山者数調査では、延べ 2,713 人（登り 1,314 人、下り 1,399 人）の登山客がカウントされた。このうち「下社大山線」の大山⇄下社区間の延べ 432 人（登り 247 人、下り 185 人）、同線大山⇄見晴台区間延べ 279 人（登り 92 人、下り 187 人）、「大倉尾根線」の塔の岳⇄大倉区間での延べ 312 人（登り 110 人、下り 202 人）、「丹沢主脈線」の塔の岳⇄大倉区間での 192 人（登り 100 人・下り 92 人）と、いわゆる表丹沢への登山客の集中が確認された。

表 2.1 各登山路線での利用人数

| 山頂 | 調査地点 | 方向 | 登り(人) | 下り(人) | 延べ数(人) |
|------|----------------|---------------|-------|-------|--------|
| 大山 | 大山東分岐見晴台側 | 大山⇄見晴台 | 92 | 187 | 279 |
| | 大山東分岐唐沢峠側 | 大山⇄唐沢峠 | 0 | 4 | 4 |
| | 大山南分岐ヤビツ峠側 | 大山⇄ヤビツ峠 | 84 | 26 | 110 |
| | 大山南分岐下社側 | 大山⇄下社 | 247 | 185 | 432 |
| 岳ノ台 | 岳ノ台 | 岳ノ台⇄ヤビツ峠 | 13 | 6 | 19 |
| 三ノ塔 | 三ノ塔分岐付近 | ニノ塔→(三ノ塔)→塔ノ岳 | 96 | — | 96 |
| | 表尾根線上 | 塔ノ岳→(三ノ塔)→ニノ塔 | — | 40 | 40 |
| | 三ノ塔分岐付近 | 牛首→(三ノ塔)→塔ノ岳 | 10 | — | 10 |
| | 三ノ塔尾根線上 | 塔ノ岳→(三ノ塔)→牛首 | — | 27 | 27 |
| 塔ノ岳 | 塔ノ岳分岐新大日側 | 塔ノ岳⇄新大日 | 42 | 42 | 84 |
| | 金冷シ分岐花立側 | 塔ノ岳⇄大倉 | 110 | 202 | 312 |
| | 塔ノ岳分岐丹沢山側 | 塔ノ岳⇄丹沢山 | 100 | 92 | 192 |
| | 塔ノ岳分岐熊木沢出合側 | 塔ノ岳⇄熊木沢出合 | 16 | 6 | 22 |
| 鍋割山 | 鍋割山分岐小丸側 | 鍋割山⇄塔ノ岳 | 76 | 66 | 142 |
| | 鍋割山分岐鍋割峠側 | 鍋割山⇄雨山峠 | 13 | 14 | 27 |
| | 鍋割山分岐後山乗越側 | 鍋割山⇄後沢乗越 | 83 | 90 | 173 |
| 丹沢山 | 丹沢山北分岐瀬戸沢ノ頭側 | 丹沢山⇄本間ノ頭 | 8 | 22 | 30 |
| | 丹沢山北分岐天王寺尾根側 | 丹沢山⇄天王寺尾根 | 36 | 41 | 77 |
| | 丹沢山分岐不動ノ峰側 | 丹沢山⇄蛭ヶ岳 | 100 | 92 | 192 |
| 蛭ヶ岳 | 蛭ヶ岳分岐鬼ヶ岩ノ頭側 | 蛭ヶ岳⇄丹沢山 | 85 | 27 | 112 |
| | 蛭ヶ岳分岐地蔵平側 | 蛭ヶ岳⇄姪次 | 14 | 70 | 84 |
| | 蛭ヶ岳分岐ミカゲ沢ノ頭側 | 蛭ヶ岳⇄檜洞丸 | 14 | 30 | 44 |
| 檜洞丸 | 檜洞丸分岐熊笹ノ峰側 | 檜洞丸⇄犬越路 | 1 | 24 | 25 |
| | 檜洞丸分岐金山谷乗越側 | 檜洞丸⇄蛭ヶ岳 | 0 | 16 | 16 |
| | 檜洞丸南分岐ゴーラ沢出合側 | 檜洞丸⇄西丹沢自然教室 | 54 | 15 | 69 |
| | テシロノ頭北分岐檜洞丸側 | 檜洞丸⇄石棚山 | — | — | — |
| | テシロノ頭北分岐中ノ沢乗越側 | 檜洞丸⇄ユーシンロッジ | — | — | — |
| 加入道山 | 大室山西分岐加入道山側 | 加入道山⇄大室山 | — | — | — |
| | 大室山西分岐犬越路側 | 大室山分岐⇄犬越路 | 1 | 34 | 35 |
| | 加入道山南分岐道志村側 | 加入道山⇄道志村 | 5 | 5 | 10 |
| | 白石峠北分岐加入道山側 | 加入道山⇄水晶沢ノ頭 | — | — | — |
| | 白石峠北分岐用木沢出合側 | 白石峠分岐⇄用木沢出合 | 1 | 30 | 31 |
| 合計 | | | 1,314 | 1,399 | 2,713 |

(藤沢直樹、杉浦高志、糸長浩司、池野正、有川百合子、濱口勝哉)

3) 登山者の登山及びオーバーユース意識調査（アンケートによる）

(1) 丹沢大山ボランティアネットワーク関係者の意識

「丹沢大山ボランティアネットワーク」35団体、610名を対象としたアンケート調査を実施し、32団体、423名（回収率：団体91%、個人69%）からの返送があった。

① 属性

年齢層では、60歳代が全体の52.0%と最も多く、50歳代25.5%、70歳以上6.9%、40歳代5.9%とつぐ。30歳以下が少ない。男性が61.0%、女性が35.9%であった。居住地は、神奈川県が89%と最も多く、ついで東京が8%である。職業別では、無職が28.1%と最も多く、会社員19.9%、専業主婦15.4%、主婦（仕事をもっている）12.8%とつぐ。農業（専業）の回答は無い。

② 登山の目的

主とする登山全般の目的（スタイル、複数回答3項目まで）は、ハイキングが50.1%で最も多く、縦走が35.2%、健康維持・増進が34.3%、自然観察が32.9%、景色を眺めるが31.0%である。丹沢大山地域に対して、山歩きを楽しむ場所のとしての期待が伺える。

③ 丹沢大山の魅力、危機感

丹沢大山地域での登山回数は、20回以上が49.2%、10～20回が18.9%、2～5回が15.4%、6～10回が12.5%とつぐ。初めてが1.2%であり、かなりの回数丹沢大山で登山をしてきた登山者が多いことが伺える。また、丹沢大山の好きな場所上位10の箇所を、今回は抽出した。多いほうから順に「大山」が129人で最も多く、「塔ノ岳」が111人、「鍋割山」が84人、「檜洞丸」が77人、「蛭ヶ岳」が58人、「西丹沢」が45人、「丹沢山」が41人、「表尾根」が27人、「大山三峰」が23人、「三ノ塔」が19人とであり、表丹沢の人气が高い。

丹沢大山の魅力は、四季の自然の移ろいが61.9%と最も多く、次いで、富士山が見える53.7%、丹沢の山並みが48.7%であり、丹沢の（感覚的あるいは遠景での）自然環境への魅力が高い傾向にある。その一方で、非難小屋や登山道等施設、山小屋、鹿・動物など、具体的な魅力は低い傾向にある。また、都心に近いが41.6%で、バスの便がよいが31.4%、車で入りやすい17.5%、などの都市近郊で便利な（都市生活に近い）自然としての魅力の傾向がある。

丹沢大山で変化意識は近年10年からが多く、ブナの立ち枯れが26.2%で最も多く、斜面地の崩壊が18.0%、登山道の侵食が17.2%、鹿の繁殖が15.0%、植生の退行が7.3%とつぐ。

④ 丹沢大山の登山道等施設整備について

回答のあった登山ルートを自然公園課が管理する50路線に分類、整理したところ、延べ883の回答のうち、大倉尾根線との回答が308最も多く、表尾根線93、鍋割山稜線72、丹沢主脈線53、二俣鍋割線48、東海自然歩道43との回答が次ぐ。登山道が歩きづらい理由は、丸太による階段が歩きにくいのが38.5%が最も多く、登山道の土が露出していて滑りやすいが27.2%、登山道が陥没して歩幅が取りにくいのが22.7%、石を敷き詰めた登山道が歩きにくいのが22.2%である。

⑤ オーバーユース及び対策意識

登山による自然への影響意識を5段階で尋ねた。「登山道はずれて歩く」では、「顕著な影響」が43.7%と最も多く、次いで、「影響がある」28.6%である。「ゴミのポイ捨て」では、「顕著な影響」が45.2%と最も多く、次いで、「影響がある」が32.4%である。「野外でのトイレ」では、「顕著な影響」が35.5%と最も多く、次いで、「影響がある」27.4%である。「動物にエサを与える」では、「顕著な影響」が40.7%と最も多く、次いで、「影響がある」が28.6%である。以上4項目すべてにおいて、自然環境への影響の認識が高いことが伺える。しかしながら、この中では、「野外のトイレ」への影響の認識が比較的低いことが伺えるが、トイレ整備がされているため、実際の野外での用たしの実態が少ないことによるものとも考えられる。

丹沢の自然環境を維持・再生への取り組み意識は、「登山道から外れて歩かない」が74.2%と最も多い。ついで、「用をたした際の紙を持ち帰る」52.2%、「自然環境保全活動（登山道等維持

管理を含む)」51.3%である。登山の行為にかかわる維持・再生にたいする意識が高い。用をたした際の紙の持ちかえりには高いが、し尿自体の持ち帰りには抵抗がある。

丹沢の山への入山料意識では、「金銭面での丹沢の自然環境保全に支援をするとしたら」の問いには、一回につき一人、100円が40.9%と最も多い。ついで、200円22.0%、200円以上17.5%であり、将来的な入山料徴収への抵抗感は少ないといえる。

(2)一般登山者の意識

一般登山者意識を、「みろく山の会」と「西丹沢の自然にふれあう会」の協力で、塔の岳山頂と西丹沢自然教室の2箇所アンケート調査を定期的実施し、88名の回答を得た。

①属性

60歳代が31.4%と最も多く、50歳代30.2%、40歳代18.6%とつぎ、30歳代以下15.2%いた。男性66.3%、女性30.2%で、居住地は、神奈川県61.6%と最も多く、東京29.1%である。会社員30.2%と最も多く、その他27.9%、主婦17.4%とつぐ。ボラネットと比較すると、平均年齢はやや若く、会社員などが多い。居住地は東京都民がやや多い傾向にある。

②登山の目的

今回の登山の目的（複数回答3項目まで）は、景色を眺める27.9%で最も多く、健康維持・増進26.7%、ハイキング23.3%、とにかく頂上を目指す22.1%とついで。ボラネットと比較すると、とにかく頂上を目指すはやや上回っており、ハイキング、縦走が下回った。

③丹沢大山の魅力

丹沢大山地域での登山回数は、21回以上43.0%、11～20回11.6%、6～10回16.3%、2～5回20.9%とつぐ。初めて3.5%であり、かなりの回数丹沢大山で登山をしてきた登山者が多い。

丹沢大山の魅力は、富士山が見えるが62.8%と最も多く、次いで、丹沢の山並みが46.5%、四季の自然の移ろいが37.2%であり、丹沢の（感覚的あるいは遠景での）自然環境への魅力が高い傾向にある。その一方で、非難小屋や登山道等施設、山小屋、鹿・動物など、具体的な魅力は低い傾向にある。また、都心に近いが34.9%、バスの便がよいが27.9%、車で入り易いが17.4%、などの都市近郊で便利な（都市生活に近い）自然としての魅力の傾向がある。ボラネットとほぼ同じ傾向であるが、富士山が見えるが上回っており、四季の移ろいが下回った。

④丹沢大山の登山道等施設整備について

調査時に回答者が選択していた登山ルートを自然公園課が管理する50路線に分類、整理したところ、延べ190の回答のうち、大倉尾根線との回答が83と最も多く、表尾根線が35、東海自然歩道が24、寄ユーション線が13、二俣鍋割線が8とつぐ。塔の岳山頂と西丹沢自然教室という調査実施箇所にも影響されるが、表丹沢での登山客が大倉尾根線⇄丹沢山頂⇄表尾根線に集中している。また、西丹沢では利用登山道が比較的分散していることが伺える。

登山道の整備状況で、歩きづらい理由としては、丸太による階段が歩きにくい45.3%と最も多く、登山道の土が露出していて滑りやすい29.1%、石を敷き詰めた登山道が歩きにくい20.9%、登山道の荒廃により歩きにくい19.8%で、ボラネットワークとほぼ同じ傾向となった。

⑤オーバーユース及び対策意識

登山等由来による自然環境への影響意識では、「登山道はずれて歩く」では、「影響ある」39.5%と最も多く、ついで、「非常にある」37.2%である。「ゴミのポイ捨て」では、「非常にある」32.6%、「影響ある」32.6%で最も多い。「野外でのトイレ」では、あるが41.9%と最も多く、非常にあるが22.1%である。「動物に餌を与える」では、あるが39.5%と最も多く、ついで、非常にあるが30.2%である。「自家用車による乗り入れ」では、あるが38.4%と最も多く、ついで少しあるが23.3%、非常にあるが22.1%である。5項目全てにおいて認識が高い。しかしながら、この中では、「自家用車による乗り入れ」による影響の認識が比較的低い。

丹沢の自然環境を維持・再生への取り組み意識は、登山道から外れて歩かない80.2%と最も多い。トイレで用を足した紙をもちかえる32.6%、自然環境保全活動（登山道等維持管理を含む）

30.2%である。登山の行為にかかわる維持・再生にたいする意識が高い。用をたした際の紙の持ちかえりが高いが、し尿自体の持ち帰りには抵抗がある。ボラネットと比較すると、登山道から外れて歩かない以外の解答が少ない傾向にある。

丹沢の山への入山料の支払う意向として、「金銭面での丹沢の自然環境保全に支援をしたら」の問いには、一回につき一人、100円が39.5%と最も多い。ついで、200円以上19.8%、200円16.3%、50円16.3%であり、ボラネットとほぼ同じ傾向であった。

(杉浦高志、藤沢直樹、糸長浩司、池野正、有川百合子、濱口勝哉)

4) キャンパーの意識

丹沢・大山地域は、神奈川県の水源地域であり、そこから多くの河川が流れている一方で、沢登りやキャンプなどの水辺でのレクリエーションが盛んな地域でもある。そこで、ツーリズムや身近なリゾート整備、子ども達の森林・河川を活用した環境教育学習のあり方を検討するための調査として、丹沢・大山地域でのキャンプにかかわる利用者の実態及び意識調査をアンケート形式で実施した。

表 2.2 調査対象地

調査日：2004年8月16・17日

| 地域 | キャンプサイト | 票数 (内訳) | 総評数 |
|----|-----------------------------|------------|-------------|
| 東 | 宮ヶ瀬：清川村立 金沢キャンプ場 | | 38票 |
| 西 | 西丹沢：丹沢湖キャンプサイト・大滝キャンプ場・河川敷 | 17票+15票+8票 | 40票 |
| 南 | 秦野：滝沢園キャンプ場・戸川公園 寄：丹沢清流荘 | 39票+96票 | 135票 51票 |
| 北 | 青根：緑の休暇村 青根キャンプ場 | | 49票 |
| 計 | | | 313票 |

①属性

30歳代が37.4%と最も多く、20歳代23.3%、40歳代16.6%、10歳代8.9%である。50歳代、60歳以上は少ない。男性48.2%、女性47.0%でほぼ同比率である。居住地は、神奈川県83%と最も多く、東京都13%である。会社員35.4%と最も多く、主婦28.5%、学生16.0%である。

キャンプ人数は10人未満72.2%と最も多い。家族づれ45.4%や友人42.4%が多い。30歳代をはじめとする若い家族や友人と訪れている事が、属性との関係から伺える。

②キャンプの往路と食材調達等

自宅からキャンプ場までの往復での立ち寄り箇所に対する回答サンプル数は123人であった。往路では、「コンビニエンスストア」や「スーパー・量販店」に寄り、キャンプの食材や用品を購入している。帰りによる場所として、「温泉」との回答があった。

キャンプ時の食材調達は、自宅から持参(近所のスーパー・店舗で購入)が65.8%と最も多い。ついで、キャンプ場近辺のスーパー・店舗で購入が21.1%、自家から持参(自家栽培の食材)が15.3%である。キャンプ場近辺の農家の産直販売で購入は、最も少なく1.0%である。キャンプによる地域経済への寄与度は低いといえる。また、食材等購入費は、1万円未満が35.1%と最も多く、1～2万円未満が25.2%、2～3万円未満13.4%とつぐ。

③キャンプの楽しみと魅力

丹沢大山地域でキャンプの楽しみは、水辺での水遊び72.8%が最も多く、野外での食事71.6%、自然の涼感を楽しむ65.2%とつぐ。丹沢大山地域でのキャンプの魅力は、自然の涼感69.3%と最も多く、ついで、丹沢の山並み33.5%、沢・滝・溪流51.8%であり、丹沢の(感覚的あるいは遠景での)自然環境への魅力が高い傾向にある。その一方で、湧水や魚釣り、鹿・動物など、具体的な魅力は低い傾向にある。また、車で入りやすい38.3%、都市・市街地に近い26.8%、

場内施設の充実 17.9%などの都市近郊で便利であるが、自然もあるという魅力があげられる。

④オーバーユース及び対策意識

キャンプ行為に伴う自然環境への影響等の意識をみると、「キャンプ場外の山林等を散策することでの生き物や動物への影響」では、「少しある」41.5%と最も多く、ついで、「ある」30.0%である。「ゴミのポイ捨てによる環境破壊」では、「非常にある」47.9%と最も多く、ついで、「ある」30.4%である。「野外でのトイレやシャワー、炊事による水質や下流部への影響」では、「ある」42.5%と最も多く、ついで、「少しある」27.2%である。「動物にエサを与えることでの影響」では、「ある」36.7%と最も多く、ついで、「少しある」27.8%とつぐ。「個々での自動車で乗り入れることによる影響」では、「ある」37.7%が最も多く、ついで、「少しある」33.9%である。

自然環境への影響意識は、「ゴミのポイ捨てによる環境破壊」が最も多く、「野外でのトイレやシャワー、炊事による水質や下流部への影響」、「動物にエサを与えることでの動物への影響」とつぐ。「キャンプ場外の山林等を散策することでの生き物や動物への影響」、「個々での自動車で乗り入れることによる影響」は、強く意識されていない。また、水質への影響に関しては、少ない人の行為でも大きな影響を及ぼすことを考えると過半数を超える程度の意識ではまだ、十分なオーバーユース対策意識とはいえず、今後のキャンパー達への環境教育の必要性が指摘できる。

丹沢大山の自然環境の維持・再生、丹沢大山地域の暮らしや経済の向上に関して関与できそうな事柄への問いには、「ゴミの持ち帰りを徹底する」86.6%と最も多い。「周辺の植生を踏み荒らさない」55.9%、「炊事やシャワー時にはエコ石鹸（洗剤）を使う」39.3%が次ぎ、ゴミ問題への意識は高いが、キャンプ行為に伴う植生保護、水質改善等の意識はまだ高くない。「トイレで用をたした紙を持ち帰る」5.8%と最も少なく、トイレ行為への意識高揚が必要である。

(杉浦高志、藤沢直樹、糸長浩司、濱口勝哉)

5) 湧水の水質調査

丹沢ボラネットによる県民参加での登山道沿いの湧水 54 箇所の水質調査に協力し、窒素、リン等の陽イオンの分析を担当した。丹沢ボラネットの報告によると 32 箇所で大腸菌群が発見され、地域再生チームでの陽イオン分析では、TN 平均 0.6mg/L、最高値 1.6mg/L で、その内、NO3-N がほとんどであり、水質上の課題が多少あった。来年度も継続し、分析と評価をしたい。

(糸長浩司、有川百合子、池野正)

6) 丹沢大山地域での環境教育・学習の実態と展望

(1) ビジターセンター等施設への聞き取り調査

エコツアー・環境教育学習活動に近い活動主体の県立ビジターセンター（VC）4ヶ所の現場職員の聞き取り調査を実施した。それぞれの施設は明確な活動目標を持ち、立地条件や来訪者の分析にあわせた活動を実施し、来訪者は県内近郊からが多く、学校団体のニーズ対応が多い。

表 2.4 ヒアリング調査結果の概要

| | 実施プログラムについて | 来訪者について |
|-------------------|---|---|
| 宮ヶ瀬VC 04年9月28日 | イベントプログラムとして、スライド解説・レクチャー・ビデオ解説を予約制で随時実施。ミニ自然教室として、毎週土・日不定期に、1時間ほどの内容で湖畔園地周辺にて実施し一般参加者が多い。クラフト教室を随時実施。公募型自然教室として、日帰り行事で湖畔園地エリア、林道や周辺森林でテーマをしばった自然観察の実施。 | 観光目的の一般客と学校団体の利用が多い。来訪者は比較的遠方からが多いが、主は県内（横浜・横須賀）からの来訪が多い。 |

| | | |
|-----------------------------|---|---|
| <p>秦野VC 04年9月28日</p> | <p>イベントプログラムとして、スライド解説を、土・日・祝日に事前申し込みで対応、館内で実施。ミニ自然教室として、月1回（第4日曜日）に2時間程度の内容で、都市公園内で実施。リピーターは時には2～5割。公募型自然教室は、ほぼ毎月1回、日帰り行事で、主に周辺の山域の自然観察ハイク（屋外行事も有り）などを実施。</p> | <p>自然体験の希望者は少なく、都市公園の利用者が主。春秋は登山者、夏は都市公園利用の家族連れが多い。周辺キャンプ場や山小屋、山岳スポーツセンター宿泊利用者の来訪もある。県内近場からの利用者が多く、年齢層には偏りはさほどない。都市公園利用リピーターが多い。</p> |
| <p>丹沢湖VC 04年9月29日</p> | <p>イベントプログラムとして、企画展を年6回実施。ここでは収集・調査資料を展示の他、季節的な情報も展示解説。ビデオ解説・スライド解説・レクチャーも依頼に応じて随時管内にて実施。ミニ自然教室として、月2回、2つのボランティアグループにより敷地内及び周辺で実施しリピーターは多い。公募型自然教室を年数回実施。</p> | <p>かつては登山口として主流であったが、現在登山客は少ない。遠足などの団体利用も他のVCに比較すると少ない。来訪者の年齢層は高い。夏場は周辺のキャンプ場利用者の利用が多く、秋は紅葉のために自然を求めてくる人が多くなる。ツツジや紅葉などの情報の問い合わせは多い。</p> |
| <p>西丹沢自然教室 04年9月30日</p> | <p>イベントプログラムは、施設の仕様書中に項目がない。教室の連絡手段である電話子機が使える範囲内の野外で、登山者への自然情報提供やガイドトークを実施（週末に1回、月4～5回）。テーマは植物や岩石・動物に関する内容。家族や小グループ（登山客が半数以上）への対応が多く好評。ボランティア（西丹沢の自然にふれあう会）が、夏休みに朗読会・観察会を実施。</p> | <p>登山者が中心（半数以上）。5～9人の小グループが多いが、ツアー登山の来訪者もある。夏場は、キャンプ場利用者が7割ほど、他の季節では、ドライブや中川温泉からの観光客。 登山口としてバスの運行時間（登山者の行動時間）と自然教室の活動時間が重なっている。</p> |

(2) 丹沢大山地域での環境教育施設活動実態

① 施設の概要及び利用者・団体の概要について

施設分布では南丹沢、特に秦野市に14施設中5施設が設置されており、北丹沢にはほとんど施設の設置はない。国定公園内の施設は6施設、国定公園外の施設は8施設であり、国定公園内の施設でも公園周辺部に設置されている。施設を活用したツーリズム・環境教育学習を展開する場合には、国定公園内部（山岳部）よりも公園周辺部（山麓部）での活動が中心になることが予想される。現在、年間の全施設利用者合計がのべ40万人を超え、交通の便が比較的良好いため、山麓部の施設活用は大きな可能性がある。施設利用者は施設周辺市町村の他、周辺都市部からも比較的目立ち、丹沢大山地域の利点として都市部に近く、都市部からの来訪が期待できる。来訪者の年齢層は20才までと40代から50代が多く、ファミリーでの利用が多いことが考えられる。

団体の活動参加会員は丹沢大山周辺市町村以外の市町村から、50代～60代を中心とした比較的年齢の高い人たちであった。この理由は、子育てなどが一段落し、ある程度時間に余裕があり、明確な目的をもって（団体の活動のテーマに共感し）活動に参加し、団体設立当初からメンバーの世代交代が行われていないなどの理由が考えられるが、詳細なデータの分析が必要である。

② 自然体験プログラムの実施について

12施設・17団体で自然体験活動プログラムが提供され、施設アンケートでは10施設が、団体アンケートでは17団体総てがそれぞれの組織による企画運営実施の形を取っていた。また、団体アンケートでは15団体が一般に向けてプログラムを提供していた。多数の施設・団体がそれぞれに自然体験活動プログラムの企画運営をし、一般参加者向けにすでに実施されている。エコツーリズム・環境教育学習に準ずる活動が本地域ではすでに多数提供されており、それらを企画立案、運営実施するノウハウやプログラムの蓄積がある。今後は、プログラムの質のばらつきがないようにすること、自然再生のテーマやメッセージの関連性をつけるしくみが必要である。ま

た、将来地域内にエコツーリズム・環境教育学習の民間事業者が出た場合に、プログラムの参加費用が現在の公的機関やボランティア団体の提供するあまり採算を意識していない参加費用と格差が出る可能性があり、事業として成立する参加料金の設定についても検討する必要がある。

③活動の広報及び参加者について

活動広報は、施設では市町村の広報紙の回答が多く、ついで全国版新聞とホームページであった。団体はホームページでの広報が最も多く、ついで会員向け情報誌・市町村広報であった。広報は従来の新聞や広報紙に加えて、インターネットがすでに効力を発揮している。参加者の来訪地域は施設・団体とも周辺市町村以外の県内からという回答が周辺市町村に並んで多かった。横浜・川崎・平塚などで、県内の周辺大都市からの活動参加者獲得がポイントとなるといえる。

施設・団体共に20才までと50代～60代が多いが、特に偏りなしという回答もあり、全年齢層からの参加がある。子ども向けの活動も活発である。施設には東京からの来訪が比較的多かったが、活動参加者は東京からの参加はなかった。年齢層では利用者・参加者の間に違いはない。

④指導者について

12施設・18団体ではそれぞれ指導者を抱え、のべ人数は628人であった。指導者養成も4施設で行われ、指導者の資格は、神奈川県森林インストラクター、NPO法人自然体験活動推進協議会(CONE)の初級リーダー、(財)自然保護協会(NACS-J)の自然観察指導員や救急法関係の資格が多く、それらの認定のための研修会に参加という回答が多い。団体は、それぞれの団体の活動テーマにあわせた資格(林業技師など)を持っているという回答があった。これら指導者の活用を考える時、それぞれの団体で独自に指導者を育成しているケースもあり、質のばらつきがないようにするために、育成のカリキュラムをある程度統一するなどの仕組みが必要である。

⑤団体対応について

11施設・12団体が団体対応を実施していた。ニーズがあるのに実施していないという回答はなく、ニーズがあれば積極的に対応しているものと思われる。また、指導者の派遣も7施設・11団体で行っており、本地域では団体に対する対応は活発に行われ、団体からのニーズも少なくないことがうかがえる。また、団体対応では学校団体への対応が少なくなく、施設アンケートで「学校団体に向けてプログラム集や先生向けの資料を準備している」と答えた施設が5施設あり、学校団体の利用が多いことがうかがわれる。都市圏から近いこと、環境教育学習というテーマ、地域の素材から考えると、学校団体の利用誘致は本地域の大きな方向性の一つになるとと思われる。

⑥その他

8施設・13団体が団体対応以外で他の団体や施設との連携があるという。施設では周辺施設との連携が中心であり、団体では丹沢大山ボランティアネットワークが機能しているようだ。しかし、丹沢大山地域全体として、施設・団体間の連携は確立されておらず、特に施設間では市町村内での連携が中心で、丹沢大山地域というくくりはあまり明確ではない。また、施設では7施設が評価の機会を設けており、ほとんどは実施後の参加者へのアンケートのみであった。本地域での地域再生・自然再生をねらいとしたツーリズム・環境教育学習を考える上では、テーマの設定やプログラムの実施、活動の把握や効果評価などで地域間の連携は欠かすことができず、ツーリズム・環境教育学習運営・推進のネットワークづくり、またそのしくみの策定が早急に望まれる。

(3)環境教育施設・団体連携でのエコツーリズム化に関する考察

すでに自然再生を目的としたエコツーリズム・環境教育学習に準じるような自然体験活動が各施設・団体により企画実施され、指導者も相当数そろっている。それらの情報・プログラム・人材を活用する形を考え、オーバーユースが問題になっている山岳地域ではなく、まず、施設・団体の活動が活発な山麓～周辺市町村地域でのプログラム開発と受け入れのしくみづくりを整えることが考えられる。ただし、公的機関やボランティア団体が主な指導者・プログラムの提供元であり、運営費や参加費が民間の基準より安くなる傾向にあり、その調整が問題となろう。

現在、活動参加者は周辺市町村～県内の来訪が多く、大都市圏に近く、丹沢大山地域の特徴から、県内及び首都圏をターゲットに環境・生活関連、手軽な自然体験のテーマ設定が望ましい。現在、周辺地域の団体、特に学校団体への対応が多く、今後も、より幅広く、学校団体に野外学習の場として紹介し、更に、登山体験、山岳自然環境学習に発展させることが望ましい。

ただ、現状では丹沢太山周辺地域での施設、団体のネットワークは不十分であり、地域全体として環境教育学習・エコツーリズムのテーマの伝えかた、その中で、各施設・団体のプログラムの役割を明確にしていく必要がある。さらに、地域内での施設・人材・プログラムなど、エコツーリズム・環境教育学習関連情報の一元化的情報提供のしくみが必要である。更に、プログラムや指導者の質にばらつきが出ないようにするための、人材育成としくみづくりが必要である。そのためにも、地域でエコツーリズム・環境教育学習をすすめていく上でのガイドラインの早急な策定や、上記をとりまとめて運営し、プログラム開発や指導者育成を担っていくコーディネーター組織やネットワークの確立が必要となっている。(田畑伊織、糸長浩司)

8) 丹沢大山地域でのエコツーリズム化に関する先進地調査

(1) ホールアース自然学校 (静岡県)

静岡県にある民間の自然学校でエコツアーにも取り組み、学校団体の受け入れに実績がある。学校団体対応の場合には特に旅行会社の「教育旅行」というジャンルでのしくみづくりと、学校の活動時間と費用にあわせたプログラム提供の必要性について参考情報を得た。

(2) いしかわ自然学校 (石川県)

県庁の部局間連携事業として始動し、全県域を対象に市町村の自然保護、環境、青少年、教育、観光、農水等の部門や、民間の自然愛好団体、地域団体、山岳ガイドやダイビングなどの民間事業者などの様々な主体がこれまで提供してきた体験交流型のプログラムで一定の基準(基本理念・コンセプト)を満たすものは「いしかわ自然学校」の名のもとに体系化されている。(社)いしかわ自然学校事務局が、推進、PR・広報、各プログラムへの支援や調整の他、体験プログラムのインストラクター育成のためのスクール運営などを実施している。課題は県庁の官主導で進めてきたため、行政の予算削減によって活動(プログラム)自体の見直しや削減の危機にある。プログラムの評価も含めた第三者的組織の必要性が、差し迫った問題としてある。

(3) 東京都奥多摩地域

林業家で森林インストラクターの原島幹典氏、町営の体験型宿泊施設「ねねんぼう」の職員で多様な体験プログラム開発者北山郁人氏、都立自然公園「山のふるさと村」を中心に自然体験プログラムを企画運営実施している奥多摩ネイチャースクール担当の自然教育研究センター杉本幸子氏にヒアリングした。都立自然公園・林業家等の地元住民・団体が自然・文化をテーマにプログラム提供し、事業の立ち上げや地元との関係づくり、ツアーの素材の価値を明確している。

(4) 足尾環境学習センター (栃木県)

1996年に「足尾に緑を育てる会」を設置し、1997年に足尾町は「全町地域博物館化構想(エコミュージアム構想)」を策定し、2000年に「足尾環境学習センター」を整備した。「足尾に緑を育てる会」は「体験植樹」を受け入れ、2004年度は448団体6,313名の申込を受け付けている。

(5) 乗鞍山麓・五色ヶ原 (岐阜県旧丹生川村)

わが国発の入山人数制限・認定ガイド同行の義務づけ・完全予約制を導入した新しい管理システムの自然遊歩道を導入した(2004年)。平成13年からこのエリアの植物調査を実施し、その後3年かけて歩道やエコトイレなどの施設を整備した。ガイドは有料で10人までの1グループに1人つく。10日前までの予約で、ガイドは自然・地形の知識だけでなく、救急救命の訓練も受けている。利用料金はガイド料など込みで1人あたり8,800円からで、グループの人数により変わる。

(6) 屋久島エコツーリズム

縄文杉保護、世界遺産登録のなかで、民間のエコツアーガイド付き屋久島型のエコツーリズムがある。林業の島から屋久島自然・エコツアー観光の島への転換中、現在、島と環境・経済・社会の方向性について、島内の合意形成期である。オーバーユース対策、自然環境と共存した観光経済循環・波及のあり方を、島民参加、集落で参加できる里エコツーリズム、エコツアーガイド育成と認定等が、環境省の「エコツーリズム推進協議会」モデル調査で検討中である。ボランティア的な参加での研究者達の支援も大きく、地元及び研究者たちが取り組んだ環境保全活動が、県、行政、産業レベルに発展したが、一部行政レベルでの施設型対応の限界も指摘され、今後の、住民、業者、行政の協働により、新しい島の暮らし・産業（観光）・文化の構築が期待される。

(田畑伊織、糸長浩司、藤沢直樹、杉浦高志)

9) 丹沢大山のオーバーユース対策とエコツーリズム化に向けて

オーバーユースは「自然環境の許容量を超えた過剰な利用現象」であり、再生能力の弱い山岳自然生態系の再生能力・自己回復能力を超えた人間の直接的過剰利用と定義できよう。丹沢大山の登山・ツーリズムは、国体を契機とした登山ブームに始まり、国定公園、県立公園指定、大都市近郊の自然、小田急線の鉄道整備等の地理的条件により、手軽な登山・ツーリズムのメッカとして利用され、特定登山道への空間的、時間的な過剰集中、ゴミ・し尿問題等が課題となっている。このような状況に対して、公園管理主体の県による荒廃登山道整備事業の継続的な実施や、丹沢大山ボランティアネットワークや個々の環境団体の活動によるゴミ収集活動、登山道補修活動、植林等の自然回復運動も参加に行われるようになり、官民での協働的な対策行動が活発である。

丹沢大山地域でのオーバーユース対策の課題は以下に整理できる。

- ① 登山コース別での登山客の年間総数の把握
- ② 登山道周囲、河川キャンプ場周囲への自然環境への影響の把握とその対策
- ③ 表丹沢等の特定登山コースの空間的集中化、利用時期の集中化への対処
→登山ルートの調整、一部の季節的閉鎖、国定公園内での利用調整区域設定等
- ④ 個人登山、ツアー登山、山岳マラソン、沢登り、キャンプ利用等の多様な利用形態への対処
- ⑤ 登山者・山小屋・キャンプ場からのし尿・ゴミ・排水（だいぶ改善はされているが）対策
- ⑥ 道路網整備によるキャンプ、車でのツーリズム増加への対処
- ⑦ 登山道の効率的、継続的な整備・管理手法、及び適応型管理方法の開発
→登山道カルテ整備による計画的整備、登山者・山小屋経営者参加型の適応管理手法開発
- ⑧ 登山者、キャンパー、山小屋経営者、観光業者、市町村担当者等への丹沢大山の自然及びオーバーユースに関する環境学習の普及活動の推進
- ⑨ 登山道管理、総合的なオーバーユース対策のための、県、市町村、山小屋経営者、観光業者等の連携による管理・運営体制づくり
→登山道巡視員派遣制度の活用、国定公園、県立公園等の官民による協働的な管理機構等の創設の検討等
- ⑩ 登山・ツーリズムが、丹沢大山地域の自然環境保全・再生につながり、かつ、地域の経済・社会の活性化に寄与するような、丹沢大山型のエコツーリズム政策の展開
→自然ガイド付き登山ツアー、麓の環境施設や団体との連携による山岳ツーリズム、里山ツーリズムとの連携等

以上のような個別的オーバーユース対策は、丹沢大山でのエコツーリズム的な展開に収れんする方向で総合的な政策検討を進めるべきであり、そのポイントとして以下がある。

- ① 丹沢大山の山岳ツーリズム（登山、沢登りツーリズム）と、麓ツーリズム（キャンプ、里山ツーリズム等）に関する基本的方針の策定
- ② 自然公園法での保護・利用のゾーニングと利用規制・誘導策の検討
- ③ NPOの参画を含めた自然公園エリアの官民による協働的管理システムの構築

(糸長浩司)

(3) なりわい複合再生

1) 神奈川県森林・林業

県の森林面積は 95,276ha、森林率 39%、人工林率 38%で、年間素材生産量 24 千 m^3 、全体的に全産業で林業の占める割合は微小で、林業県ではないともいわれている。ただ、森林のほとんどが、丹沢や箱根など県の水源域に分布し、水や木材など資源的にも、環境的にも重要な役割を果たしている。丹沢地域の森林は、全県の約 50%強、面積は 41,734ha であり、土地所有は、私有林が 32%、県関係公有林が 26%、国有林が 22%で、小規模所有者が圧倒的に多く、5ha 未満所有者数が 80%に達する。

県全体で、40 年前は 16 万 m^3 に対して 2003 年で 19,000 m^3 で針葉樹の生産は 10,000 m^3 を切りつつある。面積割合でからすると、丹沢での針葉樹生産は 5,000 m^3 程度と想定される。5ha 以上の所有者の森林面積は約 30,000ha で、丹沢では 15,000ha ぐらいと見積もれる。人工林にすると 6,000ha で、接道人工林はその 37%で 2,220ha である。造林は 25ha で森林面積全体の 0.02%であり、除間伐は 1,256ha、要除間伐対象森林 (21 年生から 50 年生、18,851ha) の 6.7%で、森林全体の 61%、20,000ha が管理不足といえる。間伐を 10 年に 1 回の割合とすると 63%であり、除間伐率は倍に延ばす必要ある (年間 2,000ha)。丹沢では 1,000ha が目標となろう。

素材価格はこの 20 年でスギ中丸太で約 50%の下落、ヒノキ中丸太で約 55%の下落を示す。さらに、過去 3 年の木材市場価格は、17%~37%までの下落である。特に、スギ中目材の下落が激しい。ここ 10 年間では、ラワン丸太、米つが丸太とも国産材の素材価格を超え、高い傾向が続いている。製材品価格も同様の傾向を示すが、ここ 20 年のスギ正角は約 15%、ヒノキ正角は約 35%の下落で、素材価格ほど低下率が高くない。米つが正角は 5 年ほど前からスギ正角の製材品価格より高くなっている。国産材の価格は外材より低くなっているにもかかわらず、その需要が低迷しているのは、安定供給などの流通上等の構造的な問題が解決されないためと考えられる。

住宅着工戸数は 1970 年の 14 万戸数から最近 10 万戸数へと減じているが、最近 10 年は横這いで推移している。このうち木造住宅率は一時期の 70%を下回るものの、最近 10 年は約 40%と横這いの傾向を示している。このような木造住宅着工戸数の下げ止まりに対して、県産材の供給能力が著しく落ちており、県内の需要量の 0.6%しか賄っていない。一方、神奈川県森林の林業労働力を見ると、事業体数 37、就労者数 383 人、平均年齢約 55 歳、60 歳以上が 35%以上を占める (平成 14 年 3 月)。全国平均 65 歳以上の高齢化率は 25%まで上昇している。

2) 関東大震災から 80 年続く森林の荒廃

丹沢山地一体は関東大震災時に 30 度以上の急斜面が悉く崩壊し、森林は緩傾斜地のみに残存するという一大荒廃地を作った。以後、大雨のたびに土石流が発生し、今もなおお札掛上部等に崩壊地が残るものの、瓦礫の急斜面は安定し、シデ類を中心とする二次林に回復してきている。丹沢山地は、震災の回復をみせているものの、後で述べるように人工林の管理不足、シカの増殖等により、土壌流出が止まらず、森林砂漠化ともいえる荒廃状態が続いている。



1996 年 (平成 8 年) : 拡大造林が伸長し、手遅れ林が増える。



1980 年 (昭和 55 年) : 拡大造林が増え、草地化が進む。



1954 年 (昭和 29 年) : 関東大震災の崩壊跡が多く残る。

3) 現在は緩傾斜地からの粘土質土壌からの侵食が深刻

森林回復の一方で、戦後拡大造林が進み、多くが草地化する中で、平地性のシカが過剰増殖したものと考えられ、特に緩斜面に残る森林の下層植生が食い荒らされた。丹沢名物の藪地獄もシカの食用となり消失の始まりになったのもこの時期で、人工林の成長と手入れ不足による裸地化がシルト系土壌の流亡をさらに促進したものと考えられる。堂平を中心とする札掛地区は20度未満の緩傾斜地が多く、残積性の火山灰粘性土壌とシカの生息密度も高いことが予想され、土壌の表面流出が盛んである。

4) 荒廃林の強度間伐が全域で必要

以下の林分を除いた民有人工林を踏査（実地踏査、遠望による確認、その他のいずれか）により荒廃現況を把握した。①広葉樹、竹林、伐採地などスギ、ヒノキ以外の森林、②森林計画対象外森林、③県営林（別途調査）、④国有林、官行造林、⑤公団造林、⑥企業庁造林

表 3.1 荒廃現況判定基準

| ランク | 判定基準 |
|-----|---|
| A | 森林の手入れが適性に行われており、木材生産及び森林の多面的機能の発揮の面で模範となる森林 |
| B | これまで森林の手入れが適度に実施されているが、ここ数年間手入れの形跡が無く、森林を適正に管理していくためには、数年のうちに何らかの手入れが必要な森林。または、近年、森林の手入れがなされているが、木材生産あるいは森林の多面的機能発揮の面で模範とまでは成り得ない森林 |
| C | 長期にわたり森林の手入れの形跡がなく、林床植生に乏しい、あるいは表土の流出が見られるなど良好な管理が成されておらず、木材生産または森林の多面的機能を発揮するためには、数回の手入れが必要な森林 |
| D | 荒廃が進み、劣勢木を整理すると人工林として成林する見込みがない森林。獣害などによる疎林。放置され既に広葉樹に優占されている森林 |

(1) 丹沢大山地域の森林荒廃現況

箇所数ベースで見ると、「良好」な管理が行われていると評価された林分は全体では15%と少なく、「管理が実施されている」を併せても全体の1/3に満たない。最も多いのが「管理が不良」林分で、全体の2/3に達している。荒廃現況を概観すると、「良好」な管理が行われていると評価された林分は、丹沢大山外縁部の低標高地域にまとまって分布する地域がみられる。それらは、北丹沢では水沢川流域、東丹沢は宮ヶ瀬金沢、中津川流域、南丹沢は四十八瀬川流域、西丹沢では河内川流域などである。

(2) 中流域別の森林荒廃現況

ランク C、D（荒廃森林）の箇所数割合を中流域別に見ると、ほとんどの流域で5割以上の林分が荒廃した林分に該当している。北丹沢の道志川、串川、東丹沢の宮ヶ瀬ダム下流、西丹沢の玄倉、中川、皆瀬川などで荒廃が進んでいると考えられる。現在では人工林のみならず、緩傾斜面でのブナなどの広葉樹林が荒廃化した。特に、人工林の管理は遅れ、小規模所有者地の里山では林業離れからその荒廃が一段と進んでいる。このための強間伐実施が必要で、林地に光を届け、林床植生の繁茂を促す必要がある。ここで障害になるのがシカの存在で、シカの防止策をパッチ状に配置しながら、シカと下層植生の同居を図る試験が広域で行なわなければならない。当然強間伐した材はその場での土留工に使用し、枝葉も敷き詰めて雨滴の拡散を図るような工夫が必要である。緩傾斜地（傾斜30度未満）にある人工林の分布状況を抽出した。この地域が循環的に人工林資源を利用できる範囲を示すと同時に、緩傾斜であってシカの害を被りやすい、また管理の遅れた地域として緊急的な間伐が必要な地域を表すものと考えている。

これらの荒廃林の材質についてH16年に一度も手入れのしていない森林整備を足柄上郡中井町で実施した（施業面積0.42ha、間伐率42%、37年生スギ材、選木、伐倒、整理）。品質については構造材、

または板材として利用に耐えられるものの品質ではなかった。

今後、神奈川県では間伐材に搬出利用を促進する計画であるが、手入れの進んでいない低品質の間伐材の生産の増加が見込まれる。2次加工としてのパルプ材、製炭材、バイオマスエネルギー材、エンジニアウッド（OSB、OSL、MDF）材のための製造設備の整備が急務である。

「丹沢山地のニホンジカ生息地におけるスギ・ヒノキ高齢林での間伐後4年間の下層植生の変化」（田村 淳・山根正伸：神奈川県自環保セ）による調査結果では、間伐後の光環境の改善が報告され、また徐々に林冠の閉鎖に伴って、相対光量子束密度の低減が観測されている。また同調査では、シカの生息地でも間伐により下層植生現存量とシカの利用可能量は増加するが、本調査のようにシカの密度が高いところでは、柵内での年々のより一層の増加傾向が観察され、また柵内と比較して柵外では不嗜好植物の相対量が増加すると判断されている。

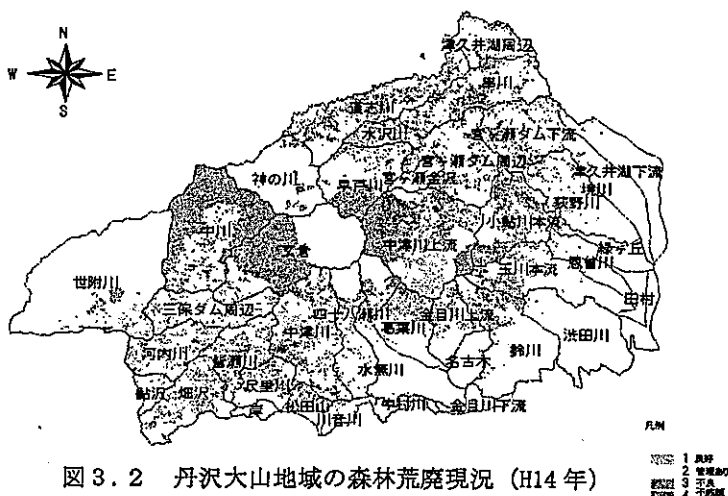


図 3.2 丹沢大山地域の森林荒廃現況 (H14年)

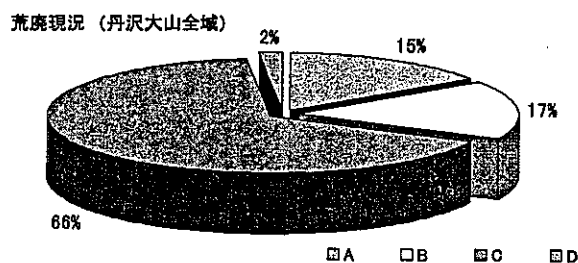


図 3.3 丹沢大山地域の森林荒廃現況割合 (H14年、箇所数割合)

札幌県有林での調査結果（2000年）では、明治44年に植栽されたヒノキ林、ha当たりの立木本数は2,124本で、同林齢からすると350%多く、そのため平均直径も60%までしか成長していない。約90年間数度の間伐しか実行されておらず、超過密林となって、林床植物もなく、被圧された枯損木も多い。土壌流失も激しく、そのためA₀層は0.3cmと極めて薄く、A層も20cmと薄い。ほとんどの樹木が50~100cm根上がりし、倒木も見られる。周辺のモミ・ツガ林も同様に枯損・風倒木が頻発して見られる。

また、酒匂川上流、中津川の源流である寄水源の森林での調査結果では、林冠が約20%以上開けば、下層植生の植物種数も周辺の二次林と同様の種構成を呈することを示している。

以上のように、シカの生息密度の低い地域やシカ柵内では、間伐された林分では当初植物現存量が増加し、時間が経つにつれ植物種数が増加する傾向にある。周辺の二次林と同様の植物相を示せば、人工林でも生物多様性が高くなることが分かってきている。

荒廃林における強間伐の実行は必須条件であり、シカを避ける柵を如何に設けるか、また土壌面での雨滴浸食防止のためのA₀層の形成も必須条件であり、除間伐木をチップにして地表面を被うことも選択肢の一つとしてあげられる。

5) 地形因子による森林区分の確定

地形因子からの森林利用計画区域の確定にあたり2つの地理的分布特性図を選択した。まず人による自然介入の程度を把握するための指標として、「自然環境情報GIS第二版」（1:50,000/環境庁自然保護局/平成11年3月）の植生自然度図を選択した。森林利用および、国土保全、シカによる荒廃が進む林地等が図れる傾斜の指標として、「数値地図50mメッシュ（標高）」（1:25,000/国土地理院/平成13年5月）を選択した。植生自然度図と傾斜区分図をオーバーレイし、地形因子に基づく森林区分を確定した。結果、6種類に分類できた。植林地の⑥と二次林の⑦・⑧をまず選択し、林地利用

が可能またはシカの被害を被りやすい傾斜区分が 0～30° 未満である領域を、地形因子に基づく森林区分とした。この区分において緩傾斜な植林地は、13,001.6ha (27.1%) を占めていた。また、緩傾斜な二次林は 16,957.9ha (35.3%) を占めていた。

表 3.2 地形因子に基づく森林区分面積

| 植生自然度 傾斜区分 | ⑥ (植林地) | ⑦・⑧ (二次林) | ⑨ (自然林) | 合計 |
|---------------|----------------------------------|----------------------------------|--------------------------------|------------------------|
| 0 ～ 30° | 緩傾斜な植林地 13,001.6ha (27.1%) | 緩傾斜な二次林 16,957.9ha (35.3%) | 緩傾斜な自然林 3,788.2ha (7.9%) | 33,747.8ha (70.3%) |
| 30° 以上 | 急傾斜な植林地 3,834.1ha (8.0%) | 急傾斜な二次林 7,977.1ha (16.6%) | 急傾斜な自然林 2,430.6ha (5.1%) | 14,241.8ha (29.7%) |
| 合計 | 16,835.7ha (35.1%) | 24,935.0ha (52.0%) | 6,218.8ha (13.0%) | 47,989.6ha (100.0%) |

6) 多くの私有林の所有者不明、境界不明

私有林は、所有者や境界が、分割その他により不確かなものが多いと考えられる。その分布は、丹沢の山麓地域にまとまっている。所有形態別の面積割合をみると、全体の 6 割強が公的所有形態であり境界情報が確かであることがわかる。また、私有林は 32%あり、一方、水源確保林は全体の 4%とわずかで、私有林の所有者情報の確定は進んでいないことがわかる。中流域別に見ると、私有林の占める割合が 80%を超える流域は、10 流域（境川、渋田川、田村、緑ヶ丘、恩曾川、鈴川、津久井湖下流、荻野川、宮ヶ瀬ダム下流、小鮎川本流）で、おもに里山に位置する。60%を超える流域は、4 流域（津久井湖周辺、玉川本流、串川、道志川）で山麓部地域に位置する。

ちなみに、山北町湯触地区におけるシカ柵の設置状況はシカ柵延長距離 2,037.7m でその内訳は以下のとおりである。この 2km の区間の中に所有者が 64 あり、私有林の平均所有面積は 1.6ha、最小は 99m²、最大は 11.2ha であって、山麓部の所有者の細分化の状況が伺われる。

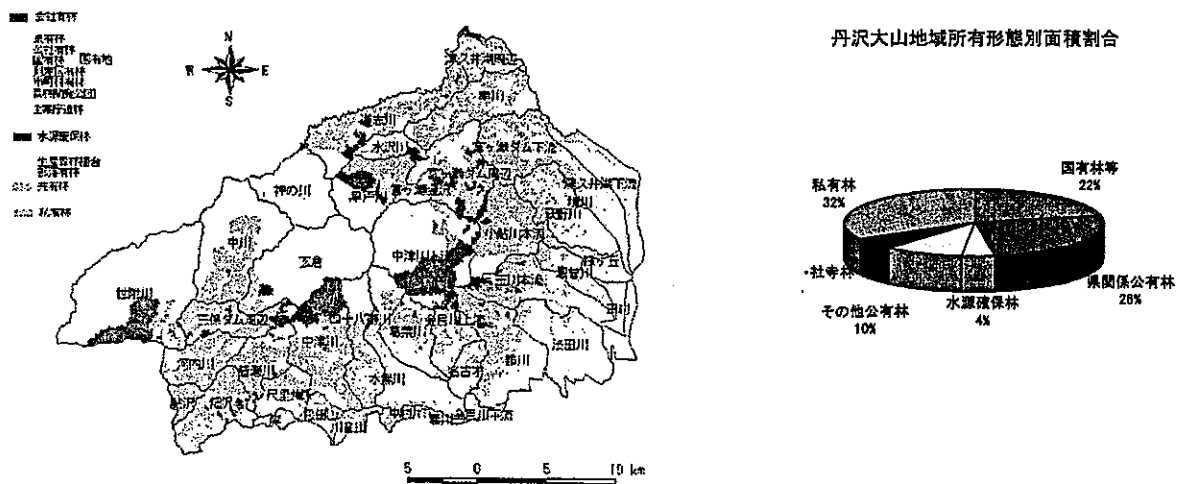


図 3.4 丹沢大山地域の所有形態（水源確保林は H14 年度分まで）

7) まともな林業が長く行われず、補助金による保育作業が中心

(1) 水源の森林づくり事業について

1) 基本的な考え方

水源地域の森林は、これまで木材生産などの林業活動を通じて守り育てられてきた。しかしながら

近年、家庭燃料が薪から石油やガスに、家屋も木材中心から新建材等に変わるなど私たちの生活様式の変化や安価な外国産木材の輸入などのため、林業経営が難しくなり、手入の行き届かない森林が増えてきた。このままでは、木材生産機能はもとより、森林のもつ水源かん養等さまざまな公益的機能の低下が懸念されることから、神奈川県では、森林所有者等をはじめ県民・企業・団体の皆様の理解と協力のもと、水源地域の私有林の公的管理・支援を推進している。

2) 水源の森林エリア

水源の森林づくりは、城山ダム、宮ヶ瀬ダム及び三保ダムの上流を中心とした約 62,300ha を対象エリアとして、私有林に対して公的管理・支援を行い、公益的機能の高い森林づくりを目指している。

① エリアの設定

平成9年4月1日から水源の森林づくりを進めるにあたり、事業を展開する地域を明確にするため、神奈川県治山計画区（昭和61年4月設定。以下「単位流域」という。）を単位として、基準1から3のいずれかに該当するものを水源の森林エリアとして設定した。その後、平成12年4月1日及び平成15年4月1日付けでエリアの見直しを行い、現在、水源の森林エリアは約 62,300ha である。

② エリアの概要

設定したエリアは、県内 362 単位流域のうち、藤野町ほか 14 市町村にまたがる 192 単位流域となっている。エリア内の森林面積は概ね 62,344ha で、このうち私有林は 41,410ha となっている。エリア内の森林は地域の特徴から、城山ダム流域、宮ヶ瀬ダム流域、三保ダム流域、相模川流域、酒匂川流域、表丹沢流域の 6 流域に区分されている。

表 3.3 水源の森林エリアの内訳（単位：ha）

| 区分 | 水源の森林エリア | 城山ダム流域 | 宮ヶ瀬ダム流域 | 三保ダム流域 | 相模川流域 | 表丹沢流域 | 酒匂川流域 |
|-------|----------|--------|---------|--------|-------|-------|--------|
| 全森林面積 | 62,344 | 14,712 | 10,200 | 15,200 | 3,155 | 3,000 | 16,077 |
| 国・公有林 | 20,934 | 2,167 | 3,400 | 10,700 | 384 | 600 | 3,683 |
| 私有林 | 41,410 | 12,545 | 6,800 | 4,500 | 2,771 | 2,400 | 12,394 |

3) 森林づくりの4つの手法

水源の森林づくりでは、森林所有者の理解・協力のもと、4つの手法（協力協約、水源協定林、水源分収林、買取り）で私有林の公的管理・支援を行っている。

表 3.4 水源の森林づくりの4つの手法

| | |
|-------|---------------------------------|
| 協力協約 | 森林所有者が行う森林整備の経費の一部を助成する。 |
| 水源協定林 | 森林所有者との協定（借り上げなど）により森林を整備する。 |
| 水源分収林 | 森林所有者との分収契約により森林を整備する。 |
| 買取り | 貴重な森林や水源地域の保全上重要な森林を買入れ、保全整備する。 |

4) 水源の森林づくり進捗状況（平成15年度までの実績）

森林のもつ水源かん養機能などの維持向上をめざして、平成9年度から始まった「かながわ水源の森林づくり」事業は、この4月で8年目を迎えた。水源の森林づくり事業では、水源地域の私有林を確保事業（水源分収林、水源協定林（森林の借上げなど）、買取り、協力協約（森林整備に対する補助）により、水源林として確保し、整備している。

5) 水源林として確保した面積

平成9～15年度の7か年で確保した森林は、5,564ha で計画全体(28,900ha)に対して 19.3%の進捗率となっている。平成10年の確保事業で 817ha と突出しているのは、寄水源の森の買取りである。

6) 水源林として整備した面積

平成9～15年度の7か年で整備した森林は4,487haで、確保した森林(5,564ha)に対して80.6%の整備率となっている。

表 3.5 水源林として整備した森林面積

| 年度 | H9 | H10 | H11 | H12 | H13 | H14 | H15 | 合計 |
|---------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 整備面積 (ha) | 283 | 332 | 506 | 766 | 788 | 982 | 828 | 4,487 |
| 内、確保森林 (ha) | 69 | 146 | 213 | 403 | 505 | 629 | 448 | 2,412 |
| 内、協力協約森林 (ha) | 215 | 186 | 294 | 363 | 283 | 353 | 381 | 2,075 |

(2)一般林業・地域林業としての補助等(森づくりの支援制度)

林業に対するさまざまな制度がある。ここでは、代表的な制度を紹介する。自然保護奨励金:300,000千円(昭和49年から1万円/ha、財産区、共用林の活動に使用。固定資産税相当分。平成16年度は私有林1.2万円/ha、計3,400万円)、緑をつくる基本構想(昭和49年)→トラスト基金(昭和60年)→かながわ森林基金(平成2年より。平成16年現在71億円)に変化、森林プラン(平成6年)→水源の森づくり事業(平成9年、森林行政の大転換の契機期)、林業改善資金予算(特別会計):30,000千円(16年度)、造林補助金:丹沢地域には約15億と推定、県林道整備、市町村林道に補助金、水源環境税(近い将来)、かながわ木づかい運動:県民に対する木材消費を喚起する運動等である。

表 3.6 平成16年度予算(特別会計)

| 区分 | 事業名 | 予算額 (千円) | 事業内容等 | 備考 |
|------------|-------------|-----------|--|---|
| 水源林づくり事業会計 | 水源林整備推進事業費 | 2,722 | ・県内産の優良な種苗の育成確保 | |
| | 県民運動推進事業費 | 3,109 | ・体験型イベントの実施や各種広報媒体を活用した事業のPR | |
| | 水源林確保事業費 | 853,851 | ・「水源林確保推進員」の配置 ・水源林の確保整備を円滑に行うための事前調査等 ・水源地域の私有林において、水源分収林、水源協定林及び買入れを行い、整備対象森林を確保する | 候補地事前調査 941ha 水源分収林 50ha 水源協定林 343ha 買取り 36ha |
| | 水源林整備事業費 | 463,188 | ・水源分収林、水源協定林等で確保した森林の整備 ・協力協約を締結した森林の整備に対する助成 | 確保森林の整備 320ha 協力協約の締結 221ha 協力協約整備への助成 454ha |
| | 水源地域森林整備事業費 | 85,453 | ・国の補助事業を導入し、確保した森林の整備 | 確保森林の整備 18ha 「やどりき水源林」の整備 42ha |
| | 県土開発公社償還金 | 130,397 | ・県土地開発公社資金で取得した「やどりき水源林」の償還金 | |
| | 事業費計 | 1,538,720 | 水道事業会計からの充当 500,000千円 | |

県の平成13年度の間伐実施成績は、実施面積949ha、間伐材利用3,136 m³である。県では神奈川県の間伐の利用促進を重点課題としている。また、法改正による林業事業体、NPOが森林整備の担い手に参加できることになり、H17年度に向けて事業体に事業説明会を開催することになった。しかし、これらの間伐情報を一元的に管理するシステムの整備が必要となっている。

(3)丹沢地域での緊急を要する間伐に関わる経費

丹沢大山地域における人工林の面積を17,000haと推定し、県全体の林齢構成を持つと仮定し、主伐期を80年として収穫コスト等を計算した。ただし、全山が利用でき、材を収穫するという理想的状況を前提としている。その結果、調整伐費・利用間伐費は10年間合計で14億円、年間1.5億円と見積もられ、総収穫の年間コストは約8億円と見積もられる。

丹沢大山地域の森林・林業に係る経費は県の予算で約30億円と推定されるため、適正林業を推進するには十分な予算配分となっており、反対に非効率的な予算消化が浮かび出る。ただ、現場発生木材のうち調整伐材を土壌侵食防止などに使用し、土留め柵の設置に使うとなれば、新たに年間4億円の増加となる（「間伐材の土留柵の利用量推定と費用の算定」増谷、2005）。

8) 山側からの生産が安定せず、川下側も使いづらい

丹沢山地では、県を主とする造林補助金及び水源の森林協力協約等公的な森林整備に限られ、それも捨て切り間伐などの保育に集中し、生産量も5,000m³もない。生産は主に県有林で行われ、製材所へ直接搬入するなど流通の簡素化も図られているが、安定的に供給できずに、川下との連携も薄い。川下に木材の一大消費地を抱えながら、県産木材自給率は0.6%と極めて微量な消費に留まっている。

表 3.7 県産木材自給率

| 素材生産量 (人工林) | 県内製材工場 入荷量 | 県内製材工場 出荷量 (A) | 県内需要量 (B) | 県産材 自給率 (A/B) |
|---------------------|----------------------|----------------------|------------------------|---------------------|
| 8,000m ³ | 6,000 m ³ | 3,200 m ³ | 539,000 m ³ | 0.6% |

川上と川下との不連続な関係を改善すべく、県と県森連で組織する「かながわ森林・木材業活性化協議会」が平成7年8月設立され、「かながわ県産木材産地認証制度」が生産、加工、消費の各段階の事業者等を対象に産地認証によって県産材の利用促進を図っている。また、「地域再生・なりわいグループ」でも、川上から川下までの関係者全てを包含する組織の立ち上げが必要として、「循環型森林資源活用フォーラム」を開き関係者からの意見を伺った。以下に主な意見を示す。

- ・一本一本個性を大切に育てた育て方…例) オーナー制。→多様なメニューのある森づくりが重要
- ・おじいさんの代では、冬場に木を売って、夏場なんにもせずに農業をやってそれで食べていた。昭和40年代の前半からはだめになった。もうからなくなったので手を入れられなくなった。工務店、建具屋、製材、みんなある程度儲かっているのに所有者だけ儲かっていない。儲かればもうちょっとなんとかかなる。
- ・5年くらいまえから地元の若い人に素材生産の仕事を教えていこうということで雇いはじめているが、なかなか定着しないというのが現実。
- ・人の目につく里に近いところからやっていくべきだ。群馬では集落から300m以上離れたところ無視していこうという話になっている。三重県のゾーニングもそのような考え方だ。村道沿いだけ。すべてを管理するというのは無理である。やる気のあるところ、目につくところ。
- ・里山は本来の機能を持たせるために、もう少し間伐をしないといけない。広葉樹で県産材ということを考えていく必要もあるのではないだろうか。
- ・国産材無垢の材料（田辺産材直接入荷）、自然素材100%で家を建てている。国産材、無垢材、自然素材を使える工務店は少ない。坪単価も52万円でやっている。活動というか経営の中で、ユーザー教育が重要だと感じている。丹沢にどういう木があるかも一般の消費者は知らない。そのため消

費者向けのセミナーを月1回やって、本物がどういうものかを知っていただくようにしている。年間20棟くらいしかできていないが、それでも、お客さまを不幸にするような、不健康にするような家をつくらないようにするという使命感をもってやっている。

- ・丹沢の木を96%使った家を建てた。構造材100%で地場産材（一部箱根）を使って年間20~25棟立てている。（700~800m³県有林から入手）700m³ほど地場材をつかっている。県森連の林業センターから購入しているものが多い。昭和64年に木材加工、乾燥機等を補助金なしで導入している。製材から一貫生産している。平成13年林野庁長官賞を、経営合理化ということでもらった。
- ・「職人」と書いて「つくりて宣言」という雑誌をつくった。魅力的な家をいかにして供給するかということが大事。いいものを安くということをやめないといけないと考えている。質の高い住宅をたてて、デザインで付加価値を高めようとしている。

なお、山田純（なりわい再生調査員、国民森林会議常任幹事）は生産から消費に関わる流通問題を中心に次のような課題と提案を行っている。以下に抜粋する。

- ①先進林業地—後発林業地間の格差と後発林業地の森林整備
- ②資源政策から経営政策へ—途上国型の遅れた産業構造からの転換
- ③生産と利用の相互呼応における新しい循環を
- ④エコシステムマネジメントと野生動物の管理
- ⑤長伐期施業その他補足的な注意の必要なものについて
- ⑥森作りと家作り—「かながわ職人の森」のコンセプト
 - A. 木材価格の再建
 - a. 下流でのコスト吸収を前提とした再生産可能な木材価格の優先設定
 - b. 建築主体や建築環境などの条件整備
 - c. 高度なデザイン・技術を前提とした地域一体性による付加価値の山元への還元
 - d. 下流（利用法）の整備と林業商品像の再建
 - B. 山のデザインと家などへの利用
 - C. 顧客とデザイン—発祥過程の正常化
 - D. スtockヤードの重要性
 - E. 職人の森の使命

9) 利用可能なバイオマス資源も不足

林道密度も公道を除いて6.3m/haと低く、市町村道に至っては維持管理がされていないものも多くなり、さらに荒廃した森林の増加などを受けて、やや豊富な賦存量に比して利用可能量は微小なものとなっている。これは、林業の基盤整備が遅れているためである。

また、製材所がここ5年間で半減したこともあり、製材廃材量も少なく、木質バイオマス利用資源も圧倒的に不足しているといわざるを得ない。1997年の製材工場数は107であったが、2002年には60に減り、素材入荷量も44千m³から18千m³と激減している。神奈川県製の材業は全国的にみても衰退速度が極めて速い。製材所廃材のうち発生量の多いものは、背板類、オガ粉、樹皮の3種類である。この中で背板の発生量が最も多いが、農家やキャンプ場で薪として有償、無償提供されるものが多い。オガ粉は家畜敷料として商品価値があり、約2,500円/tで畜産農家に販売されることが多い。樹皮はほとんど利用されなく、焼却か産業廃棄物として処分されている。木質ペレットを安定的に生産する規模にもない。

以下に、林道や公道から片幅200mまでの接道部の森林を対象とした木質バイオマス賦存量を森林基本図（1:5,000/神奈川県/平成15年）と森林簿（神奈川県/平成15年）を採用しGISにより重ねあわせにより求めた。ただし、これらの木質バイオマス賦存量は、実際に私有林の境界不明、林道の荒廃、収穫コスト高などで多くが利用できない状況で、バイオマス利用可能量は少ない。津久井地区で実際

に搬出できるか実証実験を行った結果では、丹沢全体として地形が急峻であるために物理的に引き出しが不可能であり、また、木材生産がほとんどないため、副産物としてのバイオマスが出ない等の困難性がある（須藤・佐藤・前野）。

表 3.8 丹沢地域における木質バイオマス賦存量

| 接道部森林面積 | 蓄積 | 成長量 |
|----------|-------------------------|-------------------------|
| 18,470ha | 3,936,000m ³ | 75,752m ³ /年 |

その背景としては、林業従事者の減少、林業の構造不況業種化、都市部が近いがゆえの労働力流出、雑木林は協力協約の条件が針葉樹より厳しいために管理が手薄、林道の荒廃で材を引き出しにくい、私有林の所有者が不明のまま荒廃した場所の増加が指摘できる。また、昭和62年の雪害時の林道から200mほどの地域で材を引き出し、その後再植林した結果、森林の奥が高樹齢で林道沿いが若齢という複層林の状態になっているところがある等が指摘できる。

これらのバイオマス利用の解決方法として、近場で炭生産以外に、その複合的な利用を考える。

- ①炭焼きをエコツアーの一環としてプログラムに組み込む
- ②丹沢の溪流を利用して水車小屋をかける。この小屋に石臼を設置して炭を粉に挽く
- ③水車小屋の設置には国土交通省の許認可が必要と思われるが、「水車特区」を申請する
- ④粉炭は住宅の調湿材として県産材とパッケージにして販売する。またシャンプーや石鹸その他の用途としても利用をはかる
- ⑤水車に関しては、これもエコツアーや環境学習、地域交流の場とする

10) 林業の担い手育成がますます困難に

まともな林業が行われない地域で、首都圏に直結した地域では林業の担い手はますます少なくなっているのも当然の現象である。地域に根ざす生業の再生が軌道に乗らない限り、また森林再生に集中的な投資がない限り、若者の職場としての山林を提供できない状況となっている。林業担い手問題とその背景を次に指摘できる（佐藤）。

(1) 林業労働者育成における問題

- 1) 通年仕事量が確保できず、倒産や経営規模の縮小等の企業多い。また、他産業の入札における参入も多く、従来森林企業を圧迫している。
- 2) 労働の厳しさや危険面から、新規労働力の育成が難しい。
- 3) 上記2)を解決するため、給料、休暇等の処遇の改善は困難。

(2) 地域における問題

- 1) 従来兼業の生活基盤（林業、農業、その他の産業）が崩壊している。
- 2) 少子高齢化に伴う山里離れ等、集落の過疎化が進んでいる。
- 3) 長引く林業不況の中で、地域、森林所有者が林業にかける希望や熱意を失っている。

(3) 素材生産における問題

- 1) 地底が急峻であり、集材コストがかかる。
- 2) 森林所有面積が小さく、高性能機械等の使用が難しく集材コストがかかる。
- 3) 木材市場が遠く、運搬コストがかかる。
- 4) 地元における加工体制（製材、工務店等）が崩壊している。
- 5) 林道等の路網の整備が遅れている。（町、森林組合管理の林道の未整備多い）

(4) 私有林における問題

- 1) 長引く林業不振による山離れから境界の不明が多い。
- 2) 林業不振による山への意識離れが顕著である。
- 3) 相続による山の細分化や不在山主も多い。
- 4) 整備は補助金を主体としたもので他の整備はほとんどなく、素材生産は伴わない。また、行った

としても、山主の還元までには至らない。

5) 所有面積が小さく、急峻な地形が多い。素材生産の効率性悪い。また、路網の整備は困難。

6) 従来の森林組合の機能が発揮されず、組合員の山は荒廃。

1 1) 数多いボランティアも個々に活動

都市民の中から自然志向派が生れてきており、森林に関するボランティアも数多くなってきている。しかしながら、各グループは個々のフィールドと仲間に執着し、横断的な取り組みまでに発展していない。特に、林業の担い手としてボランティアの参画をどう求めるかは、これからの仕掛け次第である。

1 2) 環境保全型森林経営プランの必要性

地利・地位級および法規制により森林を地帯区分し、林業を軸とした活動の場を明らかにするとともに、水源涵養機能など環境保全機能を増進させる各種公的支援策により森林所有者（経営者）の直接収入や地域経済の活性化を実現することが必要となっている。

1 3) 野生動物管理事業

シカ・イノシシのポピュレーションコントロールや獣害の予防、そして野生生物にとり健全な環境に山林を変えていくという視点から、野生動物の管理を複合的な生業の一環としてとらえる。これも里山の活性化と自然との調和という相矛盾しそうな課題を解決する一つの糸口として提示できる。この中で、シカやイノシシを積極的に食肉として流通するようなシステムづくりも考えられる。

1 4) 丹沢森林管理機構の設立・運営

行政から市民までが丹沢の自然と生業を応援するサポーターとしての役目を担い、県民から広く会員を募集して資金と人材を集め、丹沢の森林と林業に関わる生業や暮らしを一元的に管理または認証・監視する機構を設立するで、効率的・集中的・横断的な管理が持続するものと考えられる。

1 5) 丹沢での生業再生の多面的な取れ組みとその発展

丹沢山地に人の暮らしが無くなっていることや、周辺部も都市に顔を向けた生活をしており、自然資源には比較的恵まれるものの、人的資源が枯渇状態にあり、丹沢での生業再生の大きな障壁となっている。以下に、丹沢での生業再生の契機となる事業について現時点で提案できるものを上げてみる。

- ・シルク活用技術への参画
- ・竹ファイバー等利用技術開発
- ・関連企業の CSR への参画
- ・森林再生ファンド
- ・サントリービール用水の採取
- ・足柄茶とともに丹沢茶のブランド化
- ・昆虫力（蚕・蜜蜂・蠅等）、微生物力（発酵）
- ・ヒノキ精油の抽出
- ・市民を対象にした「伐採ツアー」
- ・農業、水産業との連携
- ・地域材、流域材認証
- ・林業起業家組織化へのアプローチ
- ・山麓新村での暮らしモデルを構築

（まとめ：富村周平、協力：佐藤好延、川又正人、須藤章、牧大介、増谷利博、山田純、奥村玄、松村正治、前野真吾、中村高規、大河和夏、浅井美香、楠田詠子）

(4) 暮らし再生

丹沢大山地域がかつて農林漁業や多様な行事で「にぎやか」であったころの暮らしを取りもどす(=再生する)ために、地域資源としての歴史、文化等を活かしつつ、自然や動植物と共生する(棲み分けをする)暮らしの「復興(=ルネッサンス)」を目指した地域づくりのシナリオを描いてゆく。①農業の振興策、あたらしい食文化の提案、鹿などの鳥獣を食する文化創造、②湧水文化・親水文化とツーリズムの検討、③山里暮らし文化の魅力の再発見と発信、定住化策、里山・山里のツーリズム・交流振興、④鳥獣との棲み分け、⑤歴史と暮らしの文化再考ツーリズムの検討である。

「水の復興」、「食の復興」、「住(まうこと)の復興」をメインに、プラス「大山街道(文化)」(含江ノ島街道)に関する調査を実施した。「水の復興」は、秦野市大倉・養毛、山北町玄倉、津久井町青根、「食の復興」は、秦野市大倉・養毛、松田町寄・宮地・田代・虫沢、津久井町青根・鳥居原、「住の復興」は、山北町玄倉、津久井町青根をモデル地区とした。すべての班に共通のモデル地区、津久井町青根においては、地区住民とともに復興を目指した将来像を考えてゆくためにワークショップを複数回開催してゆく。第1回目は、青根地区の過去と現在における状況から、魅力の発見=「宝探し」をおこない、また課題についても整理した。

1) 暮らしの歴史環境調査

暮らしの環境歴史年表からは、丹沢大山地域における暮らしの環境を変化させた歴史的出来事について把握できた。具体的には、丹沢大山地域におけるインフラの整備は、明治後期から大正、昭和初期にかけて急速におこなわれており、とくに鉄道の開通・廃止が暮らしに大きな影響をあたえていたことや、またレクリエーション施設は、戦後にキャンプ場や山小屋が開設されはじめ、その後、昭和30~40年代に登山やキャンプの流行により数多くの施設がつけられたことなどが把握できた。

表 4.1 暮らしの歴史環境概要表 (山北町・津久井町)

| | 山北町 | 津久井町 |
|------------|---|---|
| 山仕事 | ・山でのなりわいについて: 重野、養、養波、炭焼き、採通 | ・青根村・牧野村の山について ・青根山の入会について ・青根の茅場について ・津久井の炭焼きについて |
| 野良仕事 | ・焼畑について ・採作について ・お茶の整備について | ・津久井町の農業の発展について: ・焼畑農業、新地開拓、養毛の発達、産業組合運動の始まり、 ・経河尾正指定村、戦時下の農業政策、戦後の農業、農作物の発展 ・青根の水田について ・堆肥の作りかについて |
| 水仕事 | ・川での漁撈について ・せき等について: ・せき、フネ(ミズフネ・水舟)、フネバタ・フナバタ・ヨシバ ・用水について ・水に対する意識について | ・河川について ・把握川の整備について ・舟運と養毛について ・水車について |
| 住まい | ・玄倉の住居の実測図面: ・配膳図 ・住居空間について: ・風呂、コエー、クラヤ、ムロ ・墓について: ・墓の形態、個人もとの墓、個人墓地の分割、寄墓と共同墓地 | ・青根の住居の実測図面: ・配膳図、ムロの平面図・断面図 ・ムロについて |
| 集落組織・共同仕事 | ・七平普請について ・運賃について ・郡衆どうしの関係について ・移住者について | ・自治組織について ・税金について ・青根の組について ・青根地域振興協議会について |
| 民俗・祭り・行事・講 | ・水神講について ・共同行事の概要について | ・年中行事について ・講について: ・山の神講、富士講、牧草講、武州御岳講、地神講、養影講、天神講、権柄講、 ・えびす講、吉峰講、大山講、つぐろい講、金尾講、二十三講、三峰講、御飯講、 ・太子講、その他の講 ・青根の寺院について ・青根の墓、庚寺について ・諏訪神社について ・縮いについて ・青根でのイベントについて ・山の復興について ・温泉について ・その他の地域振興について |
| 鳥獣被害 | ・山の動物と狩猟について: ・秋田県の組織、猟の役割、地区ごとの狩猟、猟師 ・イナシについて: ・年数、習性、農作物への被害、駆除方法 ・鳥獣被害の状況について ・鳥獣被害対策について: ・対策法、玄倉での対策用網の実測図面(平面図・断面図) | ・津久井の動物について: ・哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、鳥類 ・農作物の被害: ・季節ごと、動物ごとの被害面積、被害量、被害額 ・青根での鳥獣被害対策実施: ・網の位置、形状、材料(構造体、ネット)等の関係 |
| 食文化 | ・食文化について | ・食文化について: ・食材の調達、調理法、かつての状況 |
| 自然活用の技 | | |
| 住空間 | ・山北における暮らしについて: ・交通、人、施設 ・玄倉における暮らしについて: ・かつての暮らしの様子、生活面 ・玄倉の集落空間について: ・既存の地図と実測による図面、土地利用等の状況 | ・青根の集落空間について: ・歴史と沿革、昔の集落・生活面、現状 ・青根養久和集落と上野田・上青根集落について: ・既存の地図と実測による図面、土地利用等の状況 ・神ノ川について ・青根における暮らしについて: ・生活面、交通アクセス、交通問題、少子化問題 |

暮らしの概要表では、山仕事としては山でのなりわいや炭焼きなど、野良仕事としては焼畑や畑作、農業の変遷など、水仕事としてはセギやミズフネ、水車、漁撈や船運など、住まいについては裏庭やムロなど、集落組織・共同仕事についてはセギ普請や道普請、自治組織など、民俗・祭り・行事・講については年中行事やいろいろな講など、鳥獣被害については山の動物と狩猟、被害の現況や対策の現況など、住空間は集落空間やそこでの暮らしなどの項目で、それぞれについての整理をしている。

(藤田亜季、鈴木教子、木本恭子、關正貴、栗原伸治、糸長浩司)

3) 「食の復興」調査

調査は、食と農の面から、丹沢地域の復興をはかる方法を導出することを目的とする。調査の視座として次の諸点を設定した。1) 地域の風土の培われた食農の文化的個性を重視し、地域の味を基本とする食文化を復興する。2) コンビニ・ジャンクフード化でなく、本物の味づくりを基本とする。3) 地域の農業経営を、システムの組み替えにより活性化をはかる。4) 要因分析でなく問題解決手法の開発を重視し、参加型 R&D の手法である地域開発経営実証調査法を軸とする。調査は幅広い内容が求められたので、図に示した構造を設定し、実施した。調査は受け入れ側の都合に沿って随時実施し、下記構造に位置づけた。

(1) 食文化史調査

丹沢地域は、縄文式土器が敷き詰められたように出土した大山神社上社周辺をはじめ頂上部まで遺跡が残っている。遺跡からは石製農具が出土し (写真 4.1)、耕地跡が広範囲に広がるなど、縄文アグロフォレストリが盛んであったことが確認された (写真 4.2)。このことは、現在の丹沢の自然は人跡未踏の自然ではなく、“社会化された自然” が基盤になっていることを示している。人と自然との関係を示す歴史資料として、諏訪神社 (写真 4.3) が八幡神社を凌ぐ分布密度である点が注目される。「山」を人が管理し、四つ足動物をタブーとした期間も、シカ、イノシシなど動物を食べる長野方面の文化が色濃く入っていた地域とみられる (写真 4.4)。

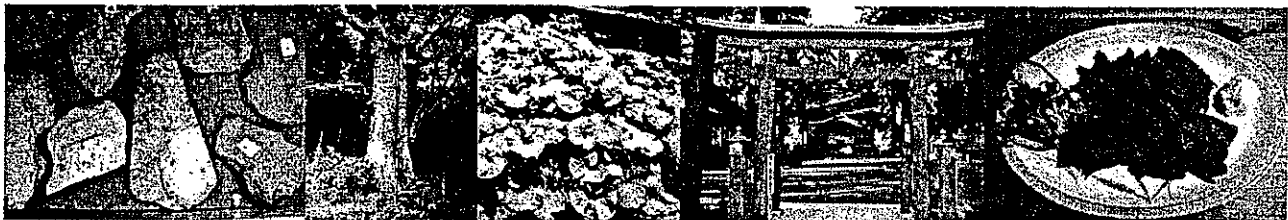


写真 4.1 打製石鍬

写真 4.2 橡・野蕈

写真 4.3 青根の諏訪社

写真 4.4 鹿刺

(2) 食生活調査

夏は、そば、素麺、うどんの消費量が米の消費量を上回るなど丹沢地域は今日なお粉食地域である。ミトリマゼなど麦・雑穀を混ぜたご飯は見られなくなったが、酒饅頭を含め、粉食文化の色彩を今日なお色濃く残している。

(3) 食農資源調査

松田町寄での調査結果からは、量的まとまりを持つ資源は無いが、のぶきなど数少ない日本自生の野菜の種類が多くみられる点に特徴がある。少量多品種の食農資源を活かす方法として、0_ラーニングがある。寄地区では市村自然塾など社会的資源もあり、発展しやすい環境にある。

(4) 食農体験調査

松田町ミカンオーナー制度は順調に伸びている。これは、現地に来てミカン狩りを体験してもらうことを優先するサービス方法にある。富士山、箱根、相模湾が一望できる景観の中でのミカン狩りは、身体障害者など弱者の人気の高い。秦野そば研究会のそば打ちは、丹沢そばを店で食べるだけでなく自分でつくる楽しみを提供したものである。好評で、施設に入りきれない注文がある。そば生産から調理まで一貫した体験を射程にしており、現地で本物の味の食を総合的に楽しめる場づくりによる地域復興が期待できる。

(5) 農業経営調査

松田町寄地区で、すべての農地を実査する農地利用現況確認調査、農業経営ヒアリング調査、野生動物の被害調査システム検討のためのプレテストを実施した。

農地利用現況確認調査の結果、①中津川沿岸の低地で水田の利用再編と都市化に伴う耕作放棄地が、②集落との接点部で野生動物の被害に伴う耕作放棄地化、③山との接点部の畑の耕作放棄地化が認められた。課題として、a. 野生動物の被害対策と、b. 耕作放棄地を0_ラーニングの用地土地として利用する社会システムの整備が重要であることが確認された。野生動物被害から限界地は拡大し、定年後のリタイア農業であることもあって、経営できない農地が多く出てきている。農地法による貸借を行う意思は無いが、返還に問題が生じない貸し付け希望が確認された。

市場の狭隘性を打破するために観光農園を行っている農業経営へのヒアリングの結果、松田山南面と対照的に寄地区は客が減少していた。その原因として、芋掘り、栗拾いだけでは顧客満足を得られないことがあげられた。0_ラーニングプログラムの充実と、食べる楽しみとセットにすることが課題となっている。

(6) 食システム調査

地域の味を醸し出すローカルフードシステムの整備を目的に、ステークホルダーの相互関係を捉えることにした。今年度は、①秦野市「東地区農産物直売センター」に荷を出している農家のヒアリング調査と、消費者へのアンケート調査、②直売農産物の消費者でもある「そば処東雲」の消費者へのアンケート調査を実施した。

傾斜地の小圃場区画で行う高齢者の農業経営であり、市場競争力が低いという不利な点を、農業公園で直売所を行うことにより利点に変えることがはかられている。平日と休日で消費者の性格が異なる。セグメントマーケティングを軸としたマーケティングマネジメントが課題となる。地元食材を多く用いた「そば処東雲」の丹沢そばは、味にこだわって作っている点が評価されている。そば打ち体験も好評だが、施設が狭すぎて注文を断らざるを得ない事態が生じている。規模を拡大して、そば処東雲等をサテライトとした0_ラーニングネットワークシステムの構築をはかることが課題である。

(7) 丹沢暮らし復興実証調査

2004年12月5日に、寄地区自然休養村運営協議会の役員を中心に第1回ワークショップを実施した。地区の意見を反映するためと、検討したことを着実に実行に移すため、自然休養村運営協議会だけでなく自治会等の組織を集合した受け皿を地元で作ることになる。自然休養村に関係する組織を中心に町づくりにかかわる組織が多数作られているが、横の連携が不十分な点が指摘された。

(日暮晃一、堀田志津子)

3) 「水・住の復興」調査

(1) 生活圏域調査

モデル地区である山北町玄倉および津久井町青根に関する文献により、両地区の婚姻圏をはじめとする生活圏域について調査した。また、現地調査においても、インタビューによりそれらについての調査をおこなった。

山北町玄倉は、山北町の東部にあり、鍋割山を背に、北は津久井町に接する。大部分は山岳地であり、平坦な場所は少なく、山林が多い。集落は、南を流れる玄倉川と、鍋割山の山麓の間にある南側の傾斜地である。玄倉が属する三保地区は、人口663人、世帯数219世帯(2005年2月現在)である。住民の生活圏は、開成町や大松田、御殿場、松田、秦野一帯であり、生活圏は御殿場方面と松田、秦野方面の二方向へと広がっている。婚姻圏としても、この一帯とのつながりが強く、さらに道志とのつながりも強かった。かつて、この一帯から道志に女性が嫁いだ場合、道志では「相模の国から嫁が来た」と喜ばれたという。

津久井町青根は、津久井町の南西にあり、袖平山、黍殻山、焼山などの連邦を背に、南は山北町、北は藤野町に接する。大部分は山岳地であり、平坦な場所は少なく、山林・原野が多い。集落は北を流れる道志川沿いと、黍殻山の北西の山麓の間にある北側の傾斜地である。人口664人、世帯数232

世帯(2005年2月現在)である。住民の生活圏は、相模原・八王子へと広がっている。婚姻については、青根内部でおこなわれる場合も多いが、道志から女性が嫁いでくる場合もひじょうに多かった。女性は、「(道志川の)川下に嫁ぐのがよい」と言われていたらしく、青根出身の女性が青野原など川下の集落に嫁ぐケースも多かったという。

(2)集落空間調査

白地図をもとに、道路と住居の実測調査、土地利用調査を現地でおこない、この結果と e-Tanzawa からダウンロードした航空写真により、集落図を作成した。この集落図をもとに、生活空間(人が住み、おもに生活行為を行う空間)、生産空間(経済的収入や食料などの生活の糧となるものを得る空間)、山間集落ではとくに重要だと考えられる道路(古道)と水路(川)の計4つの要素より、集落空間構成とその系譜について考察した。

○集落空間構成： 山北町玄倉の集落空間構成としては、以下のことがあげられる。①集落の中心軸は道路である。②道路に沿って水路が流れる。③道路・水路を軸にして、道路・水路、生活空間、生産空間の順で、左右対称に集落空間が構成される。④水路は集落の中心軸に対して、垂直にも交わる。津久井町青根の音久和の集落空間構成としては、以下のことがあげられる。①集落の中心軸は道路(古道)である。②道路(古道)に沿って水路が流れる。③生産空間を中心として、同心円状に生活空間、道路(古道)・水路、そしてそのまわりに生産空間が点在する。また、上野田・上青根の集落空間構成としては、以下のことがあげられる。①集落の中心軸は道路(古道)である。②道路(古道)に沿って生活空間が存在する。③集落の生産空間には水路(川)が流れている。なお、両者の集落空間構成の共通点としては、以下のことが考えられる。①道路を中心軸とする。②中心軸の道路に沿って生活空間が存在する。③古道により集落空間が規定されている。また、中心軸の道路に沿って水路が流れている場合が多く、道路だけでなく、水路によっても集落空間構成が強く規定されている。

○青根地区の集落空間の系譜

青根地区は、複数の集落が集まってできた地区であり、行政界では西から音久和、上野田(上野+上原)、上青根、橋津原・東野、荒丸の5集落であるが、東野と橋津原、荒井と平丸には個々の生活空間があり、地理的にも離れて存在し、音久和、上野田、上青根、東野、橋津原、平丸、荒井の7つの集落に分かれていると考えられる。この7つの集落について、2500分の1の白地図をもちいて、上記とおなじく、生活空間、生産空間、道路(古道)、水路(川)の計4つの要素から集落空間構成を把握した。すべての集落が沢に属しており、7つの集落が古道でつながっている。なお、青根地区にはかつて多くの水車があり、水車は日常的に利用されていたことが文献調査により明らかになっている。

青根地区は、落ち武者によって音久和が最初に形成され、その後徐々に東に向かって集落が形成されたと言われている。屋号も、音久和には屋敷に関するものが多いのに対し、そのほかの集落ではサカヤ・カジヤなどが多い。また、「折花姫伝説」があり、青根地区のいたるところに伝説にまつわる場所があるが、伝説の主人公、折花姫の一族については、武田の落ち武者とする説、平家の落ち武者とする説、小田原からきたとする説、小田原へ行く途中とする説など、さまざまである。しかし、伝説にまつわる刀や焼き物なども実在し、現在、津久井町その真相について調査をおこなっている。

(3)住居空間調査

住居の裏庭、菜園、およびムロの実測調査とインタビュー調査により、住居空間のつかい方について把握した。自給自足の補助としての生産物が菜園で多く栽培されている。初冬に実測およびインタビュー調査をおこなったお宅の菜園では、野菜、果物類としては、大根や白菜、道志菜、かも菜、ほうれん草などが栽培されていた。このほか住居からすこし離れてところにある畑では、にんじん、ごぼう、小松菜、春菊、モロヘイヤ、ブロッコリー、瓜、トマト、スイカ、ヤーコン、きゅうり、なす、エンドウなどを栽培している。かつてはトウモロコシもつくっていたが、熊、ハクビシン、カラスにやられたため止め、サツマイモは現在つくっていないが、近所の人にもらって、ムロで保存している。これらの野菜を買うことはなく、あまったものは、子どもたちや近所とわけあっており、料理(家庭でつくったもの)の交換という近所づきあいもある。

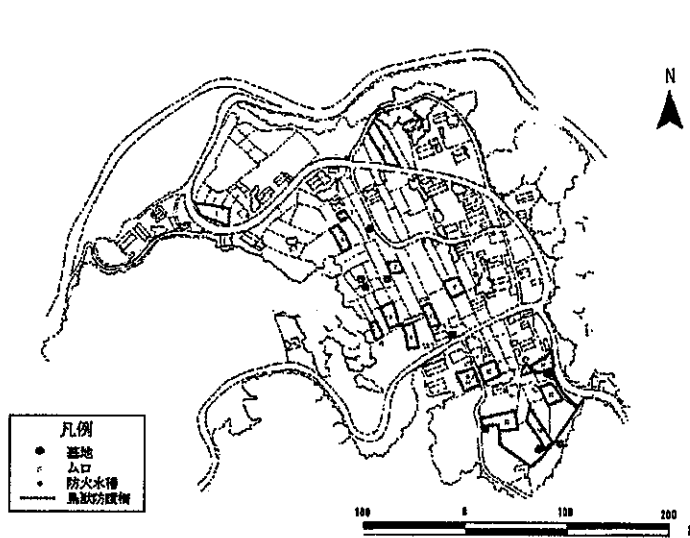


図 4.1 津久井町青根音久和の集落空間構成

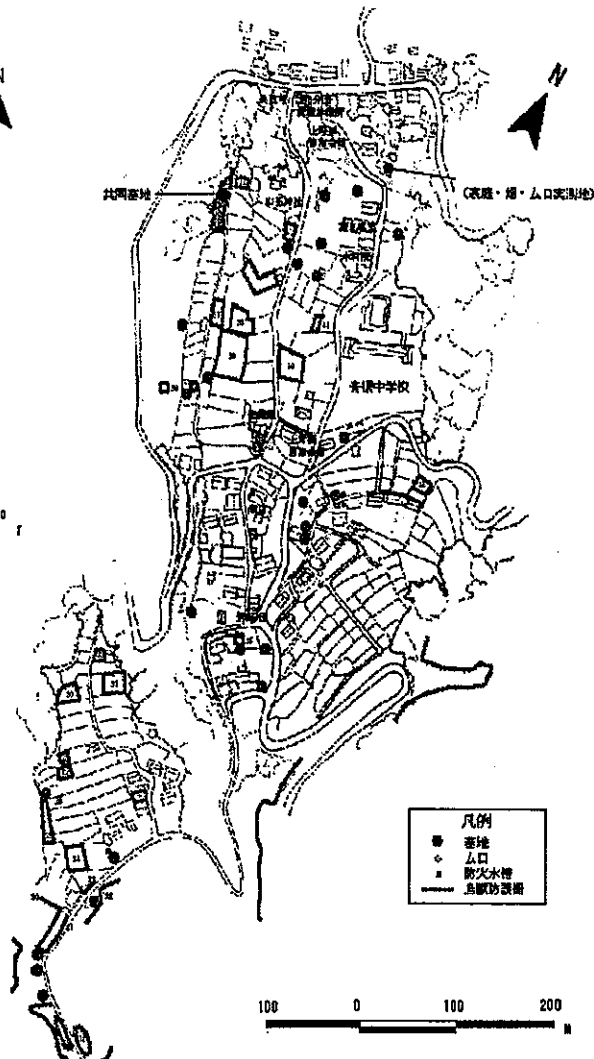


図 4.2 津久井町青根上野田・上青根の集落空間構成

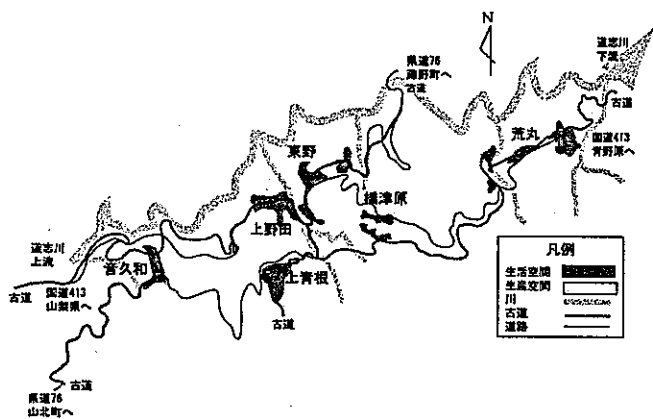


図 4.3 青根地区7集落の集落空間構成

燃料類の補助として、薪や竹を使用している。薪には山の間伐材、枝打ち、家のまわりの邪魔な木、庭木（虫に食われて枯れたもの）等を使用し、竹は裏庭（北側）の竹林の竹を使用している。竹は1年に5、6本使用しているという。これらを燃料として、裏庭のカマドで、ご飯、赤飯、さつまいも、まんじゅう（酒まんじゅう）、餅などをつかっており、使用後の灰や炭は畑にまいている。

（木本恭子、藤田亜季、鈴木教子、栗原伸治、關正貴、糸長浩司、橋本忠美）

4) 鳥獣被害実態及び対策調査

(1) 実態調査

モデル地区である津久井町青根の音久和および上野田・上青根集落において、鳥獣被害の防護柵に関する悉皆調査をおこなった。調査項目は、集落における設置場所、柵の材料（構造体と壁面）、柵内でつくられている作物についてで、写真とともに一覧表にし、また番号をつけて集落図と対応させた。

音久和集落では計17箇所、上野田・上青根集落では計28箇所鳥獣被害の防護柵が確認できた。集落図上でみれば、音久和では、集落中央部にある生産空間に多くの柵がみられる。ここは、かつて桑畑があったところで、養蚕業の衰退と近年の鳥獣被害により、荒地となっているところや畑であっても柵が張られているところが多くなっている。柵は、このほか山際にも多くみられる。また、上青では山際と東西の崖の手前で多くみられ、上野田では上青根側に広がる畑地に大規模なものがみられる。これら計45箇所の防護柵設置に関する分析の結果、設置場所は約半数が畑地、ついで水田（約20%）が多く、そこで栽培されている農作物（冬季）は、大根、ネギ、リンゴ、白菜の順に多い。

防護柵のおもな構造体は、単管パイプ（約 55%）、異型鉄筋（約 30%）となっており、また壁面はポリエチレン製のネット（約 75%）が圧倒的に多い。

（鈴木教子、木本恭子、藤田亜季、栗原伸治、關正貴、糸長浩司）

(2) 意識調査

モデル地区である松田町寄地区および津久井町青根地区において、鳥獣被害の意識に関するアンケート調査をおこなった。寄ではJA全会員に対してJA経由での配布・回収を、青根では津久井町青根支所、各自治会経由での配布、郵送による回収をおこなった。

○松田町寄地区

配布枚数 244 枚のうち回収枚数 119 枚である。回答者はほとんどが男性であり、約 80%が 50 代～80 代の高齢者である。被害は平成 10 年頃から増加し、シカ、イノシシ被害が多い。被害は地域全体におよぶが、ついで「山際」が 4 割と高い。96%の農家で被害があり、63%がとてもひどく、落花生、トウモロコシ、サツマイモの被害が上位で、これらの栽培を中止している農家も多い。「農業は現在のまま続ける」が約半数を占め、縮小は 3 割である。被害届けは 8 割が提出していない。その理由として、「届けても何もしてくれないから」が多かった。対策は「柵の設置」、「狩猟」（地元の猟友会）であり、対策で被害が減ったのは 8 割である。地域全体での対策必要性は 7 割で、行政への要望は「新しい防護柵の設置」、「有害獣駆除規制の改善」が過半数を占めた。「農地と山野を柵で区別する（当面は）、鳥獣が住みやすい山に（将来的には）」など、鳥獣との共生関係を模索する意見もある。

○津久井町青根地区

総配布枚数は全世帯数の 233 枚、回収枚数は 77 枚である。回答者のうち 65%が男性であり、約 9 割が 50～80 代の高齢者である。被害は平成 10 年頃から増加し、シカ、ハクビシン、カラス、イノシシ被害が約 7 割を占める。被害は「山際」が 36%とひどい。農作物の栽培は自給を主とする世帯が 65%で、8 割が被害を受けており、33%がとてもひどいと回答している。トウモロコシ、サツマイモの被害が上位で、これらの栽培を中止している農家も多い。「農業は現在のまま続ける」が 61%を占め、「縮小する」は 17%である。被害届けは 71%が提出していない。その理由として、「届けても何もしてくれない」が多かった。対策は「柵の設置」、「狩猟」（猟友会）が主である。地域全体での対策必要性は約 76%であり、行政に対する要望は「新しい防護柵の設置」、「有害獣駆除規制の改善」が過半数を占めた。

○寄と青根の被害意識の比較

被害は、「とてもひどい」が寄 58%、青根 33%、「さほどではない」が寄で 6%に対し、青根では 30%と、寄よりも青根では被害の度合いは小さい。被害が増加した年はどちらも平成 10 年頃が最も多い回答が得られ、この年に何らかの環境変化が起こったと考えられる。柵の材料の調達には共に「買う」が最も多い回答だが、「山から採る」が寄 31%、青根 12%であった。さらに、地元の山からの木材資源の使用は「使用したい」と考える人が寄 38%、青根 22%と意識の違いがうかがえる。被害届けはどちらもほとんどが提出しておらず、「出しても何もしてくれない」という理由が多かった。他にも「行政への期待はしていない」と読み取れる回答が多数あった。

（鈴木教子、糸長浩司、日暮晃一、栗原伸治）

5) 津久井町青根地区における魅力・課題に関するワークショップ

「かつて青根地区が農林漁業や多様な行事で『にぎやか』であったころの暮らしを取りもどすために、地域資源としての歴史、文化等の再生方策、ならびに自然や動植物と共生した（棲み分けをした）地域づくりのイメージと将来像を考えることを目的とし、第 1 回目は青根地区の過去と現在の状況、地区の魅力の発見＝『宝探し』、土地利用状況、課題を整理する」目的で、青根地域振興協議会との共催により、2005 年 2 月 6 日（日）に青根公民館にてワークショップを開催した。青根地区住民は計 35 名が参加し、地域再生チームからはスタッフ計 15 名が参加し、4 グループに分かれて実施した。

地区の魅力・課題・夢の作業の結果として、青年から壮年男性グループでの話し合いを例にすれば、

魅力としては空気・水・景色などの自然環境の良さと人の良さ、生活環境の良さが挙げられた。夢としては、道の整備をはじめとする交通対策がなされることや、コンビニなどの便利な生活環境づくりが挙げられた。課題としては、交通の便の悪さ、人口の減少などの地区の活力低下、枯れた水の復活などの自然環境の悪化が挙げられた。

それらの箇所を地図に落とす作業では、「宝」となる地域資源が、青根地区全体に点在しており、なかでも、川―集落―山際―山という集落立地の断面構成のなかで、集落から山際にかけての空間で、より多くの地域資源が確認することができた。

以上より、集落から山際にかけてのエリアにおける「スローライフ」等をキーワードとした地域づくりの方向性が提案された。

①魅力→ [点線] ②夢→ [白] ③課題→ [斜線]

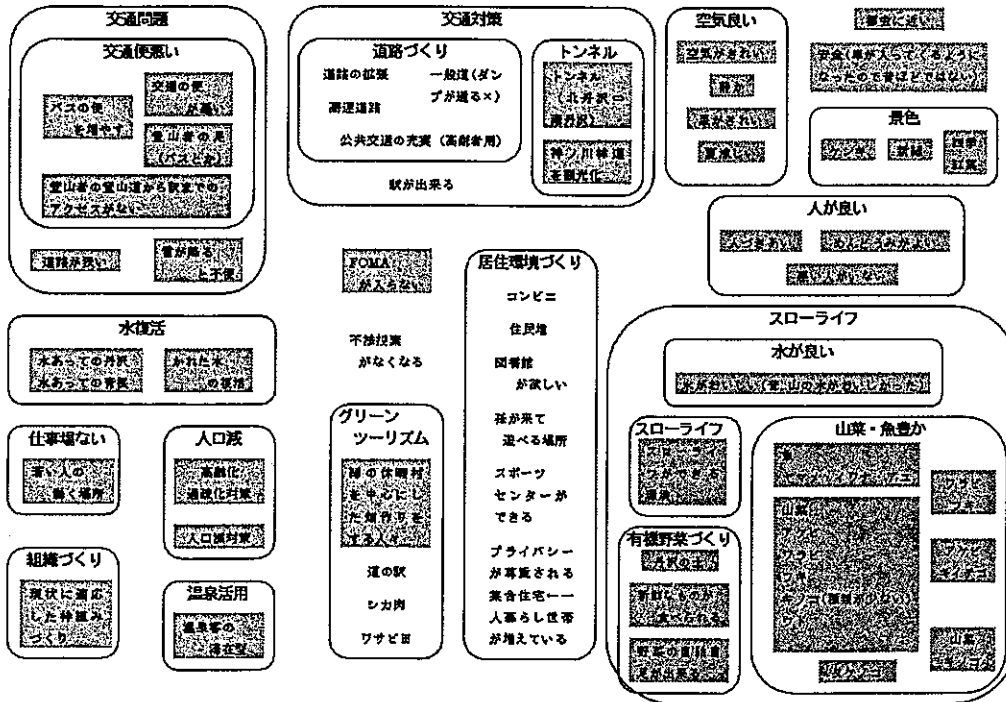


図 4.4 青根地区WSでの男青年～壮年グループの成果



写真 4.5 青根地区WS様子 (左から趣旨説明時、話し合い時2枚、話し合いの結果の発表時)

(栗原伸治、糸長浩司、関正貴、鈴木教子、木本恭子、藤田亜季
橋本忠美、日暮晃一、堀田志津子、池田寛二、大倉季久)

6) 考察

(1) 丹沢の農・食の復興

丹沢は、縄文時代以降、人が手の管理により維持されてきた所であり、今後とも人が適正に管理していくことが必要な地域である。現在、丹沢地域の里地は、耕作放棄により「山が降りる」現象が顕著に進んでいる。住民が、集落機能が存続できる期間として、松田町寄地区で 10 年、津久井町青根地区で 3～5 年とみているように、集落存続の危機に直面している。農業普及センターの職員の中に「山に戻せば良い」という意見も聞かれたが、この発言は、「山が降りる」現象は地域での生活が衰退するだけでなく、荒廃した山林が広がるだけで、縄文時代から続いてきた人による適正な管理を失う

ことを意味することを理解していない暴言といわざるを得ない。今日生じている「山が降りる」は、①農業に対する野生動物の被害と、②地域産業の発展を阻む社会システムをあげることができる。

農業に対する動物の被害問題は、“檻の中の農業”か耕作放棄かの選択を迫られるほど酷くなったのは7年前頃と、新しい問題であることが判明した。被害の酷さは、松田町寄地区の農地はシカ、イノシシの足跡をみない農地は無いと言って過言でないことが如実に示している。しかし、効用の問題から被害届が出されていないため、実態がまったくわからず、対策の見直しと有効な対策の検討が出来ない状況にある。そこで、農業に対する野生動物の被害問題を緊急重点課題とし1)被害実態の把握調査、2)現在までに行われた被害対策・被害対応の実態調査、3)被害を与えている動物の生態調査、4)関係諸機関を招集し戦略会議を開き、総合対策の検討および速やかな対策の実施、が求められる。日常的に発生する被害実態を把握するために、直ちに次のシステム開発を行う必要がある。

これは、①1筆単位に現地調査を行い、台帳を作成するとともに、②GPS付き携帯電話(カメラ)で被害状況をWeb GIS上に表示させるとともに、③携帯電話からのデータを自動的に被害データベースに登録し、④地域マネジメントシステムに直結する地域空間ポータルへのせる、システムである。携帯電話を活用した農産物のトレーサビリティと農業GISのノウハウが蓄積されているので、このシステムは短時間に開発可能である。コンピュータシステム用基本台帳に、1筆単位で野生動物の被害対策の自衛策とその効果、柵等の設置の契機、被害にかかわる環境条件と経営条件、今後の利用意向に関するデータを入力する。そのための現地実査をし、データ整備を行う担当職員が必要となる。このデータが、被害を与えている動物の生態を把握する際の傍証データとして活用できると考えられる。

こうして収集されたデータで被害対策を講じることは無論のこと、遊休化が見込まれる農地を把握し、野生動物が隣にいながら被害が軽減される農業システムとディア・ウォッチングなど隣に野生動物がいることを地域復興に活用した地域マネジメントシステム、の整備に活用することが重要である。

社会システムの問題として、シカ料理を地域特産にしようとするとな法制上の問題が出てくる。野生動物の屠畜場設置の問題とあわせて整備する必要がある。また、農地の耕作放棄地化への対策として、「土地利用調整」のみならず「農業の担い手」や「地域振興」を含めた総合型農業公社を設置し、これをマネジメントの核とするアウトソーシング農業が育つよう制度を整備することが求められる。

里地の農業は、市場の狭隘性、低生産性圃場での少量生産といった問題を抱えている。しかし、「いかに美味しく食べるか」を体験を通して提供した場合、大きな可能性を秘めている。a.丹沢大山食のサミット、b.丹沢大山食フェア、c.お袋の味コンテスト、d.丹沢大山の味料理教室、e.“山”で食べ物探し、からなる「丹沢大山食の文化祭」を開催し、地物と味をアピールする必要がある。(日暮晃一)

(2)住・水・集落の暮らし復興

一方、「住・水・集落の復興」の視点からは、モデル地区における水辺空間・親水空間もふくめた生活空間の過去と現在が明らかになりつつある。とくに津久井町青根地区においては、「伝説」もふくめた歴史との対応から、集落空間の平面構成の系譜について明らかにした。また、ワークショップにより地域資源の「発見」＝再発見と、それらが点在する断面構成上、重要なエリアが明らかになった。

今後、青根地区における暮らしの再生⇒復興(ルネッサンス)にむけたシナリオを描くにあたっては、この集落空間の平面構成の系譜と断面構成でのポイントをつなげることが、つまりこれらの空間的な連携をはかってゆくことがキーになると考えられる。そのときには当然、現在暮らしのなかでの緊急課題としてあげられる鳥獣被害の問題も関係してくる。青根地区では文献調査と現地調査をつづけ、第2回目のワークショップでは青根地区の活性化のためのビジョンづくりを、第3回目では青根地区の総合的な保全・活性化計画づくりをおこなってゆく予定である。

また、ほかのモデル地区においてもさらなる調査を継続してゆき、さらに現在作成中の「暮らしの環境歴史年表」を完成させることにより、丹沢大山地域における暮らし再生グループのモデル地区の位置づけ、ならびに地区どおしのつながりがさらに明確になると考えられる。それらのことが、丹沢大山地域全体における暮らし再生⇒復興(ルネッサンス)にむけたシナリオづくりにつながるものと期待している。

(栗原伸治)

4. 成果発表など

(1) 丹沢大山総合調査関連のセミナーとシンポジウムにて

①丹沢大山再生セミナー発表（2回目、4回目）

富村周平・佐藤好延：丹沢大山の「山のなりわい再生」に向けて」

糸長浩司・吉田直哉・杉浦高志：丹沢大山のツーリズム実態と展望を考える

②丹沢大山のオーバーユースを考えるー尾瀬・屋久島から学ぶシンポジウム

糸長浩司：丹沢大山でのオーバーユース問題認識とエコツーリズムに向けて

吉田直哉：丹沢大山のオーバーユース対策～『これまで』と『これから』～

有川百合子：コメント／丹沢のオーバーユース対策

(2) 関連学会発表

(1)農村計画学会 2005 年度春期大会（2005 年 4 月 2 日）で下記論文発表予定

①藤沢直樹・糸長浩司・杉浦高志・濱口勝哉、丹沢大山地域における県民参加による登山実態把握と過剰利用対策への考察

②杉浦高志・糸長浩司・藤沢直樹・濱口勝哉、丹沢大山における登山・キャンプ利用実態と意識に関する研究

③前野真吾・糸長浩司：地域環境配慮型カスケード的複合利用資源としての森林木質バイオマス賦存量の推計手法に関する研究

④栗原伸治・糸長浩司・關正貴・鈴木教子・木本恭子・藤田亜希、津久井町青根地区の集落空間をめぐるプリコラージュ

(2)堀田志津子、「食の復興」を戦略とする地域再生、『地域農業経営戦略研究』第3号（予定）

（文責：糸長浩司）

5. 今後の予定（来年度以降の調査予定等）

(1) 基礎調査・市町村ワークショップ・地域再生フォーラム（全体調整を含む）

基礎調査では、①丹沢大山地域での土地利用変化の等高線別での分析等を含めて、地域資源・地域環境変化のマップ化と分析の継続、②関係8市町村への聞き取り調査継続での丹沢大山地域に関係する行政計画・政策に関する課題の抽出、③地域再生チーム内で検討した各再生シナリオをテーマで、市町村WS、地域再生フォーラム、また、現地での他の調査チームとの合同によるテーマ別ミニシンポジウムを開催する。④関係市町村、地域住民への丹沢大山問題の共有化の促進と個々の市町村での丹沢大山の環境や景観等に影響を及ぼす可能性の高い開発計画等（EX:厚木ロープウェイ計画等）に関しての論議を継続し、丹沢地域再生の基本的方針の調整と地域再生ビジョンの策定を行う。

(2) ツーリズム・環境教育

登山者、及びの山小屋経営者等の協力体制により登山道荒廃の実態、植生退行・回復実態を把握し、登山道管理データをGIS情報として整理し、今後の適切な施工・管理手法を検討する。また、通年で登山実態調査を継続し、実質的な登山者数の確定と、それに伴うオーバーユースの実態とその構造について明確にする。

また、利用者の意識のみならず、観光レクリエーション業者へのアンケート・ヒヤリング・ワークショップ等を実施し、マスツーリズムの現状と課題を明確にする。また、丹沢ボラネットと協力して湧水の水質調査を継続実施し、登山と湧水の間接的関係を探る。以上の調査より丹沢大山版オーバーユースの実態を明確にし、その解決のための利用調整等を含めた、丹沢大山の適正利用の方針・ゾーニング、対策、国定公園の協働的管理システム等の施策を明確にする。

環境教育に関しては、学校での環境教育実態、里山活動実態等の調査を実施し、また、各施設や団

体プログラムのポジショニング・環境教育学習のテーマ設定等を検討し、施設及びボランティア団体等のネットワークによる丹沢大山地域での総合的な環境教育学習体制づくりを明確にする。

更に、エコツーリズムに関する先進事例地調査を継続し、オーバーユース対策と環境教育を相互連携された、エコガイド付きエコツーリズム、自然環境再生型ツーリズム等の丹沢大山版エコツーリズム推進のためのシステム構築と施策内容を明確にする。以上のオーバーユース対策と丹沢版エコツーリズムの政策提案に関しては、政策検討グループや他の調査チームとの合同により、その具体的な施策方向について検討する。

(3) なりわい複合再生

森林状況、荒廃状況調査では、①林道沿森林資源構成、②荒廃林の集中する地形条件の再調査、光環境の調査、③モデル地区である津久井地区について森林構造の変遷調査、④荒廃林に対する標準的な施業方法の提案、⑤効果的なシカ柵の構造や設置方法の検討である。

私有林強間伐課題に関しては、①丹沢大山での森林管理の緊急性を明らかにし、集中的林業地帯のゾーニングと森林管理方法の検討、②所有者・境界不明の私有林に関する超法規的管理権の付与や管理方法のあり方を検討である。

森林・林業政策の見直しに関しては、①県の森林・林業政策の再確認と丹沢への将来的展望の明確化、②ゾーニングによる環境保全型林業経営検討、③丹沢森林管理機構（仮）の設立に向けた取り組み検討、④山の生業の中核を成す林業事業者形態の改善や今後のあり方の検討である。

県産材利用促進に関しては、①利害関係者マップを完成させ、流域やアクセス性を基にした生産－消費ブロックの確定、②各ブロックでの生産・加工・消費に関する将来ビジョンの作成、③シナリオ別バイオマス資源賦存量、④除間伐材の建築・土木的利用可能性、⑤川上川下関係者交流会、「循環型森林資源活用フォーラム」での意見交換の継続と丹沢森林管理機構内での位置づけである。

森林管理業の担い手育成としては、①職人マップの作成（前出の利害関係者マップと連動して）、②生業を再生するための職人集団最適化の検討、③野生動物管理システムのシナリオ作成、④山麓生業未来型暮らしモデル、丹沢山麓職人エコビレッジ構想を検討する。

以上のテーマに関して、他の調査チームと関連するテーマに関しては、合同の調査体制を組み、なりわい再生の政策を検討する。

(4) 暮らし再生

「農・食の復興」では、①食生活に関する民俗調査、②「じばさんず」、丹沢観光農業研究会会員農園等でのマーケティングリサーチ、③市村自然塾、そば打ち体験者等のヒアリング、④地域マネジメントを担う諸組織へのヒアリング調査、⑤松田町寄地域での地域マネジメント実証法による調査（ワークショップを含む）、⑥鳥獣被害のGPS的調査手法の開発を予定し、⑦生き物再生チームと、例えば青根地区や寄地区等の同一の地区を対象とした、鳥獣被害状況調査や地区住民とのWSを開催し、共通認識とその対策方策について共通認識を深める。

「水・住・集落の暮らし復興」では、丹沢大山地域における暮らしを総合的にとらえるために、さらなる文献調査をすすめてゆき、丹沢大山地域8市町村それぞれの「環境歴史年表」および「暮らしの概要表」を完成させる。また、モデル地区においては、さらなる現地調査をすすめてゆく。津久井町青根、松田町寄地区では、ワークショップを複数回おこない、地区住民とともに、自然との共生及び「暮らしの復興」に向けたシナリオを描いてゆく。そのうえで、丹沢大山地域全体に地域ベースで、自然と人が無事にいきつづけられるための暮らし再生（復興）のシナリオを検討する。

（文責：糸長浩司）

6. 各調査の報告

(1) 基礎調査・市町村ワークショップ・地域再生フォーラム

目 次

． 目的

- 1．丹沢大山総合調査の目的
- 2．地域再生調査チームの調査目的
- 3．本調査の目的

． 実施概要

- 1．市町村ヒアリング
- 2．市町村ワークショップ
- 3．地域再生フォーラム

． 記録

- 1．市町村ヒアリング
 - (1)市町村位置図
 - (2)市町村事前ヒアリングのまとめ
 - (3)市町村ワークショップへの事前説明議事録
 - (4)各市町村における地域再生に関する特色ある事業
 - (5)市町村の開発計画概要
- 2．市町村ワークショップ
 - (1)第1回市町村ワークショップ
 - (2)第2回市町村ワークショップ
 - (3)概要パンフレット
- 3．地域再生フォーラム
 - (1)第1回地域再生フォーラム
 - (2)第2回地域再生フォーラム
 - (3)概要パンフレット

資料．

- 1．依頼文
 - (1)市町村ヒアリング
 - (2)市町村ワークショップ
 - (3)地域再生フォーラム

・ 目的

1．丹沢大山総合調査の目的

神奈川県では、平成 16 年度から衰退の進む丹沢山地の保全・再生に向けて、県民、NPO、学識者、行政関係者で構成される丹沢大山総合調査実行委員会の下に丹沢大山総合調査団を編成し、丹沢大山地域の自然、地域の再生に向けた「丹沢大山総合調査」をスタートさせた。

この調査は丹沢山地の動植物、土壌や水循環の再生だけでなく、丹沢大山地域に暮らす人達の暮らしの再生、地域の再生、森林資源を活用した地域の生業の再生も大きなテーマとなっている。

2．地域再生調査チームの調査目的

「地域再生調査チーム」は、地域の再生をテーマとした調査チームとして結成され、調査活動を進めている。

調査における主要テーマは ツーリズム・環境教育学習、山のなりわい再生、暮らしの再生の三つである。その課題や今後の展望について研究し、検討を進めている。

丹沢大山地域での自然再生は、地域社会の継続的な関わりの中で可能になる。自然環境、社会、経済の総合的な持続性の確立を目指し、地域社会の再生・維持を模索しながら、自然の「利用」と「保全」のバランスを考え丹沢大山再生を実現することを基本視点とする。

この基本視点に立った地域再生に向け、以下の 3 つを調査目的とする。

- 1．地域社会歴史文化資源の分析
- 2．地域再生シナリオと行動計画の策定
- 3．地域再生事業の担い手育成

3．本調査の目的

【市町村の開発計画概要のヒアリング調査】

丹沢大山の 8 市町村（秦野市、厚木市、伊勢原市、松田町、山北町、愛川町、清川村、津久井町）における、丹沢大山地域再生に関する事業を把握を行い、今後の基本的方針の調整や政策提案に向けた検討資料とするとともに、これらの情報を県、8 市町村で共有し、広域連携に向けたネットワークの構築を目指す。

【市町村ワークショップ】

丹沢大山の 8 市町村の行政職員と地域再生調査チームの合同ワークショップを開催し、丹沢の現状を把握するとともに、丹沢大山地域の再生に向けた「将来ビジョン」について検討する。丹沢大山に関係する県民参加による「地域再生フォーラム」と連携して、相互の成果を反映させながら進めていく。

【地域再生フォーラム】

丹沢大山地域に暮らす人達や関心の高い人達の参加を受けて、地域再生チームが検討している、丹沢大山地域の再生に向けた課題やビジョンについて紹介すると同時に、丹沢大山の地域再生に関しての意見交換を行う。また、地域再生フォーラムの創設・開催によって、参加された人々や組織の地域再生に向けたネットワークが育まれることを目標としている。

このフォーラムは丹沢大山の 8 市町村の行政職員参加による「市町村ワークショップ」と連携して、相互の成果を反映させながら進めていく

．実施概要

１．市町村ヒアリング

【目的】

丹沢大山総合調査及び、市町村ワークショップ、地域再生フォーラムの主旨説明と協力依頼を行うとともに、８市町村の概要についてヒアリングを行う。

また、今後の対応窓口等の確認を行う。

【ヒアリング項目】

| テーマ | 内容 |
|-----------------|------------------------|
| まちの概要・取り組み・意識など | 人口・生活圏・総合計画等・丹沢への取り組み等 |
| 観光・教育・ツーリズム | 観光、環境教育、ツーリズムの現状・市民農園等 |
| 山のなりわい | 里山環境・管理の状況・山の資源化・事業等 |
| 暮らし | 集落環境・鳥獣被害・農業・水環境等 |

【ヒアリング日程と担当課】

| 自治体名 | 日時 | 担当課 (ヒアリング日程調整の窓口) | 担当課 (ヒアリング時に指定された 今後の窓口) |
|------|-------------------------|----------------------------|--------------------------------|
| 秦野市 | 2004年8月2日(月) 13:00～ | 企画課(國広氏) | 企画課(國広氏) |
| 厚木市 | 2004年8月3日(火) 11:00～ | 企画課(伊藤氏) 石川主幹兼企画政策係長が対応 | 企画課 |
| 伊勢原市 | 2004年8月3日(火) 15:30～ | 企画調整課(佐藤課長補佐) | 未定 |
| 松田町 | 2004年8月2日(月) 15:00～ | 企画財政課(杉田企画財政課長) | 未定(内部検討) |
| 山北町 | 2004年8月16日(月) 13:30～ | 企画課(大野企画課長) | 企画課、産業観光課のどちらでもよい |
| 愛川町 | 2004年8月5日(木) 11:00～ | 企画政策課 | 企画政策課 |
| 清川村 | 2004年8月3日(火) 13:00～ | 企画財政課(朝倉氏) | 企画財政課 |
| 津久井町 | 2004年8月5日(木) 13:30～ | 企画政策室(大熊氏) | 企画政策室 |

【各自治体との調整プロセス】

| 年月 | 内容 | 連絡先 | 手段 |
|------------------------|---|---|------------------|
| 2004年 7月中旬 | ・丹沢大山総合調査、市町村ワークショップなど の主旨説明及び協力依頼 ・事前ヒアリングへの協力依頼 | 丹沢大山総合調査実行委員会の 各市町村の委員 各市町村の企画担当課長等 | 郵送 |
| 2004年 7月下旬～ 8月上旬 | ・事前ヒアリングの日程調整 | 上記表の日程調整の担当課 | 電話 ファックス 等 |

2. 市町村ワークショップ

【目的】

丹沢大山の8市町村職員の協力により丹沢の現状を把握するとともに、丹沢大山地域の再生に向けた「(行政版) 将来ビジョン」について検討する。

また、第1回市町村ワークショップ後に開催される地域再生フォーラムは、地域住民の参加を想定しているため、丹沢大山地域に暮らす人達や関心の高い人達としてあげられた人々のデータを、地域再生フォーラムへの参加依頼検討資料として活用する。

【概要】

| | 第1回市町村ワークショップ | 第2回市町村ワークショップ |
|---------|--|---|
| 日時 | 2004年8月27日(金) 13:30~16:30 | 2004年12月10日(金) 13:30~16:30 |
| 場所 | 神奈川県自然環境保全センター 大講堂 | 自然環境保全センター 大講堂 |
| 参加者 | 丹沢大山の8市町村職員 計22名 (企画、観光、農林業の行政担当者) | 丹沢大山の8市町村職員 計23名 (企画、観光、農林業、建設、教育、生涯学習の行政担当者) |
| プログラム概要 | 壁アンケート実施 開会のあいさつ 趣旨説明 スタッフ紹介 壁アンケート紹介 作業説明 水系別のグループごとにマップ作成 ・マップA: 魅力マップ ・マップB: 人材マップ ・マップC: 悩みマップ ・マップD: なりわい面影マップ ・マップE: 悩みマップ ・マップF: 暮らしの知恵マップ 発表 アンケート | 開会のあいさつ 今日のプログラム説明 ・全体で各テーマの論点を共有 ・アウトプットの設定 グループ討議 ・観光(ツーリズム)・環境教育学習グループ ・なりわい再生(循環型森林資源活用)グループ ・暮らし再生(歴史・生活・文化)グループ 発表とまとめ ・グループごとに発表 ・もっと聞きたいことなどについて付箋をつける 今後の進め方 閉会のあいさつ |

【各自治体との調整プロセス】

| 年月 | 内容 | 連絡先 | 手段 |
|----------------|---|--------------|----------------------|
| 2004年 8月中旬 | ・市町村ワークショップへの参加依頼 (ワークショップ実施プログラム添付) | 各市町村の企画担当課長等 | 郵送 |
| 2004年 8月下旬 | ・市町村ワークショップへの参加者確認 | 各市町村の企画担当等 | 電話 ファックス Eメール等 |
| 2004年 10月下旬 | (第1回地域再生フォーラム協力のお礼) ・第2回市町村ワークショップへの参加依頼 | 各市町村の企画担当等 | 郵送 |

3. 地域再生フォーラム

【目的】

丹沢大山地域に暮らす人達や関心の高い人達の参加を受けて、地域再生チームが検討している、丹沢大山地域の再生に向けた課題やビジョンについて紹介すると同時に、丹沢大山地域の再生についての意見交換を行う。

また、地域再生フォーラムの創設・開催によって、参加された人々や組織の地域再生に向けたネットワークが育まれることを目標としている。

【概要】

| | 第1回地域再生フォーラム | 第2回地域再生フォーラム |
|---------|--|---|
| 日時 | 2004年10月16日(金) 13:00~17:00 | 2005年2月20日(日) 13:30~17:00 |
| 場所 | 神奈川県自然環境保全センター 大講堂 | 自然環境保全センター 大講堂 |
| 参加者 | ・第1回市町村ワークショップであげられた地域住民の皆さん ・地域再生調査チーム関係者から推薦された皆さん 計25名 | ・第1回フォーラム同様、第1回市町村ワークショップで特色のある人材としてあげられた地域住民の皆さん ・地域再生調査チーム関係者から推薦された皆さん 計15名 |
| プログラム概要 | 開会のあいさつ 丹沢総合調査と地域再生フォーラムの概要説明 第1回地域再生フォーラムの目的と進め方 地域再生チームの調査中間報告 質議 グループに分かれての討議 全体討論 閉会のあいさつ | 開会のあいさつ 地域再生チームの2004年度調査結果の概要報告 1) ツーリズム・環境教育グループ 2) なりわい再生グループ 3) 暮らし再生グループ 4) 基礎調査/市町村ワークショップ・地域再生フォーラム第一回及び政策的提案について 関心テーマへの意見カード記入と張り込み 政策提案での関心テーマへの意見を付箋に記入し、各グループ別の模造紙に張り込む。 テーマ別討論 ～のグループ及び、政策提案に関して、参加者の主要な関心テーマを優先して総合討論 5. 閉会のあいさつ |

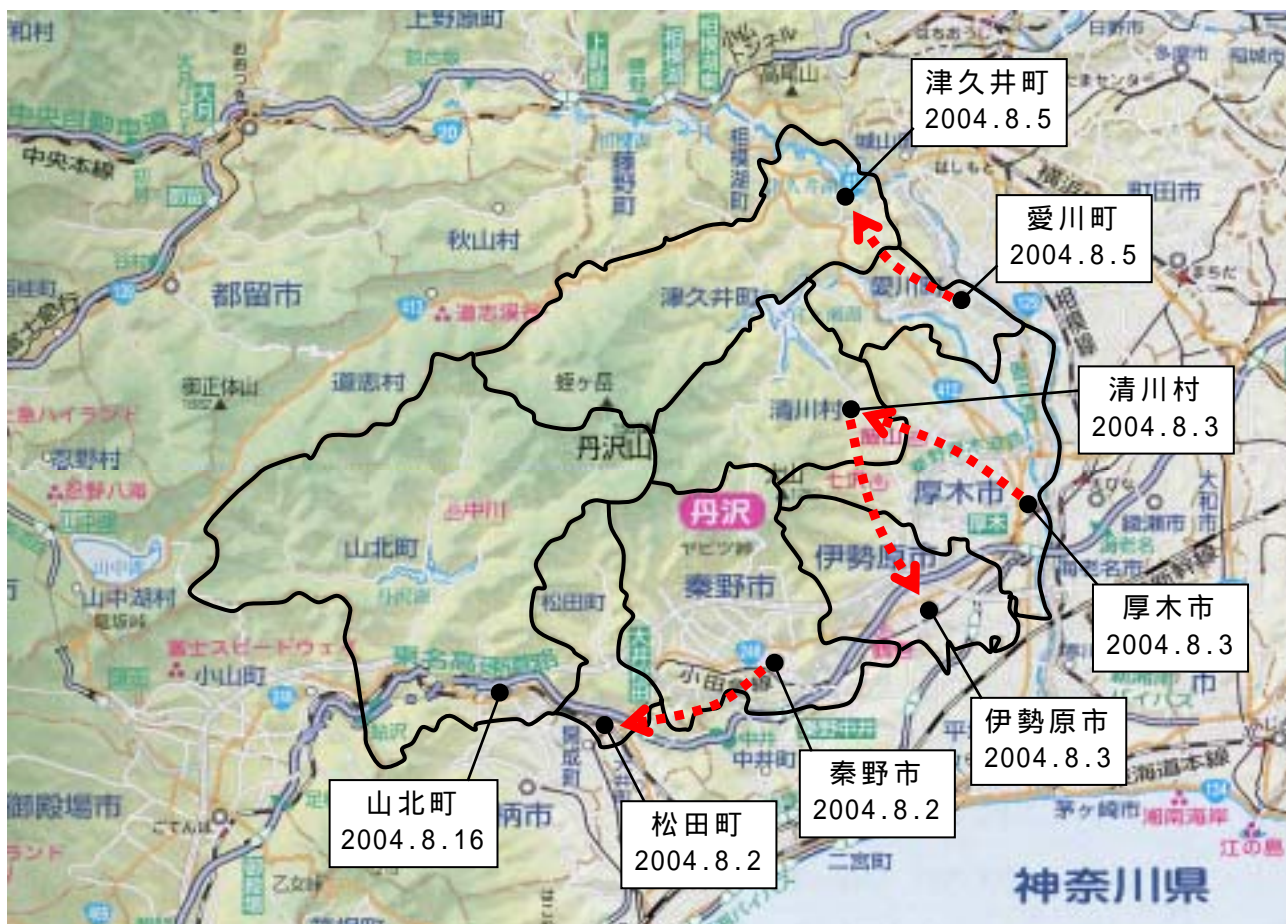
【各自治体及びフォーラム参加依頼者との調整プロセス】

| 年月 | 内容 | 連絡先 | 手段 |
|-------------------------|---|--|----------------------|
| 2004年9月上旬 | ・第1回市町村ワークショップであげられた人材のリストの確認(修正・追加など) | ・各市町村の企画担当等 | 郵送 |
| 2004年9月中旬 | ・人材リストの中より、地域再生フォーラムへの参加依頼候補者の絞り込み作業の依頼 | ・各市町村の企画担当等 | 電話 ファックス Eメール等 |
| 2004年9月下旬 ~ 10月上旬 | ・丹沢大山総合調査、地域再生フォーラムなどの主旨説明及び参加依頼 | ・第1回市町村ワークショップであげられた地域住民の皆さん(絞り込み後) ・地域再生調査チーム関係者から推薦された皆さん | 郵送 |
| 2004年10月下旬 | ・第1回地域再生フォーラム参加のお礼 ・地域再生に関するアンケート | ・第1回地域再生フォーラム参加者 | 郵送 |
| 2004年10月下旬 | ・第1回地域再生フォーラム協力のお礼(第2回市町村ワークショップへの参加依頼) | ・各市町村の企画担当等 | 郵送 |

・ 記録

1 . 市町村ヒアリング

(1) 市町村位置図



| | まちの概要・取り組み・意識・他 | 観光・教育・ツーリズム | 山のなりわい | 暮らし |
|--|--|---|---|---|
| <p>秦野市</p> <p>1.日時 2004年8月2日(月)13:00~</p> <p>2.場所 秦野市役所</p> <p>3.参加者 秦野市:企画課、國廣氏 観光課、大津氏 森林づくり課、栗原氏 調査チーム:糸長 橋本 日暮 西村 関 濱口 鈴木</p> | <p>秦野市について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人口はほぼ横ばい。特に過疎化しているところはない。南地区は区画整理をしたため、増加が見られる。北側の山の方は調整区域なので農業をやらないと住めない。 ・合併の予定はない。 ・旧村単位で7地区に分かれており、自治会は200余り。都市計画マスタープランでは、この7地区にわけているはずであるが、流域単位でも特徴があるため、地区わけについてはこれから検討するところだ。 <p>総合計画について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5ヵ年ごと、基本構想は15ヵ年ごとに策定している。2010年に人口19万2千人と推計していたが、現実との開きが出ており、調整、見直しが課題となっている。 <p>本調査について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本調査の概要については、はじめて聞いた。 <p>イベントについて</p> <p>9月にたばこ祭りがある。たばこの生産は昭和59年に終わっているが、現在も名称はそのまま残し、昭和23年から続く伝統行事となっている。花火もやり、市外からも来る。</p> | <p>観光について</p> <p>登山が中心で沢やキャンプ場に行く人もいる。山に入る人は年間約40万人(年4回2,5,8,11月にヤビツ、大倉で調査)で中高年が中心。近年は横ばいかやや下降。以前より大倉の方に人が来る傾向(戸川公園ができたから?)。しかし、登山客の大半は小田急線に来て、バスに乗り、山に登って持参の弁当を食べて帰るだけで、いわゆる「ゴミは落とすけど金は落とさない」状態。11月に小田急、神奈中とともに、秋の神奈川キャンペーンとしてツアーを行う。ふるさと公園や鶴巻温泉に行く予定。他市町村と、丹沢大山観光キャンペーン推進協議会をつくり、ポスターやパンフレットの作成やキャンペーンをしている。</p> <p>環境教育について</p> <p>菩提の葛葉青少年野外センターで、子供たちがキャンプをしている。</p> <p>調査に向けて</p> <p>キャンプ場はすべて民営で、調査をするなら、滝沢園キャンプ場、ボスコオートキャンプ場が良いのではないかと。集落調査はふれあい農園やふるさと公園のあたり、大倉、蓑毛、東田原などが良いのではないかと。</p> | <p>山について</p> <p>森林づくり課が今年できた。標高300m以上に関しては、国や県がやっている。それ以下の里山の、森林の20%にあたる部分の整備検討を行っている。私有林に関しては、間伐への補助は行っているが、森林組合に委託。林業家の登録は1件あるが、県産材を扱っているわけではない。県内の木材使用は推奨はしているものがあるが、利益はでない。土木の型枠で使っているという話も聞くが...。山北の駅前の施設では使っている。</p> <p>里山について</p> <p>20%が里山と言われている地域。環境省の里地里山モデル地域事業で、秦野市が全国4つのモデル地に秦野市が指定されている。県の里山推進モデル事業でも名古木(ながぬき)が指定され、地域の人による地域づくりを進めていく。今年は計画段階で、協議会を立ち上げる予定。</p> | <p>鳥獣被害について</p> <p>シカ、イノシシ、ハクビシン、カラスなどの鳥類により、農作物が荒らされている。以前は冬だけだったが、近年は1年中出るようになった。</p> <p>農業について</p> <p>特産物はソバや落花生など。たばこはもう作ってない。市民農園は、ふれあい農園というのがある。</p> <p>水について</p> <p>水道は全国でも横浜、函館について3番目に開通。10年かけて名水(弘法の清水)を復活させた。芦ノ湖の1.5倍の水量を保有しており水は豊富。地下水70パーセント、県の水30パーセント。湧水多数あり。環境保全課による湧水マップがある。観光サイドでは、護摩屋敷の水、葛葉の水、竜神の泉、若竹の泉を象徴的に案内している。</p> |
| <p>伊勢原市</p> <p>1.日時 2004年8月3日(火) 15:30~17:00</p> <p>2.場所 伊勢原市役所</p> <p>3.参加者 伊勢原市:企画調整課 佐藤、観光課観光振興係 佐藤 日本大学:糸長 橋本 日暮 関 濱口 鈴木</p> | <p>伊勢原市について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・阿夫利ルネッサンスというものがある。 ・街道は川崎交通事務所が整備している。 ・伊勢原市は大山の標高1,251m、市域南端標高10mで落差が激しい土地である。 <p>総合計画について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合計画の概要は? 「やま」「おか」「まち」「さと」の地域別計画がある。 ・農林の地域のエリア付けは? 日比田、大滝がある。 | <p>観光について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・丹沢のプロモーションビデオを作って新宿や横浜で流している。 ・大山観光のツアーが減った。逆に登山客が増えた。修験者も前と比べると、団体では来なくなったし減少した。大山には夏休みに子供会が来る。 <p>ツーリズム・環境教育について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育的な視点での活動する場合の場所やソフトな展開は? <p>観光で歴史、地域資源を見ながら「自然と歴史の散策ゾーン」をつくらうとしている。太田道灌の墓と農村環境、日向薬師(日本三大薬師)を見所にエコツアーのようなものを育てられないか、検討中。「自然と歴史の散策ゾーン」ではホトケノジョウが生息できるようにしようと考えている。</p> <p>県青年の家が7~8年前市に移管されたがうまく活用できていない。この先活用できないか。ふれあいの森?? 広場を使ってはいけないか。西部に県立公園の計画がある。都市計画公園は難しく、自然公園的な計画をしようとしている。WS形式で新しい公園の形式に変えた。</p> <p>市民農園について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市街化区域は開発されて保全の手がない。東名高速の北は調整区域である。市民農園は民間で行っているものしかない。 | <p>里山について</p> <p>里山は市独自にボランティアで保全している(東富岡あたり)。山の中腹はみかんを植えて、里山として存在するようにしている。里山は民地なので同意を得ないといけない。</p> | <p>鳥獣被害について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一昨年山ビル、サル、シカがひどい。宮ヶ瀬ダムが出来てから、シカが降りてきて、それに山ビルもついてきてしまった。 ・伊勢原カントリーでシカが食べれる。 ・大山はもともと禁猟区であった。 ・シカは逃げてきたのではないかと? <p>農業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農地の有休地化の対応は? ・市民農園+農業公園のようなものを作って人を入れる。 ・農業への経費は自然保全のためでもある。 |

| | まちの概要・取り組み・意識・他 | 観光・教育・ツーリズム | 山のなりわい | 暮らし |
|---|---|---|---|--|
| <p>厚木市</p> <p>1.日時 2004年8月3日(火) 11:00~12:00</p> <p>2.場所 厚木市役所</p> <p>3.参加者 厚木市:企画課主幹石井、副主幹伊藤 日本大学:系長 橋本 日暮 関 濱口 鈴木]</p> | <p>厚木市について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・愛甲郡(厚木、愛川、清川)はそれぞれ裕福なので合併はない。 ・七沢、飯山の人々は市内に大体勤めている。 ・黄金井酒造(美味しいさがみビール開発もしている。)の社長さんは詳しいとのこと。七沢でマスカ栽培をしている井内さんも詳しい。 <p>総合計画について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ファンタスティックやまなみ:今年、来年度に計画している。予算総15億。ロープウェイを不動尻~広沢寺まで建設する。神奈川新聞や朝日新聞に載っている。お年寄り、障害者のために山頂まで登れるようにするため。また、地域再生、観光のため。現在は広沢寺までバスがでている。中高年の観光資源としてハイキングコースがある。自然を生かした中で観光振興をしたい。 ・食文化村構想(七沢のみ):昨年。観光客の呼び込みのため。(温泉があるが観光客が少なくなった。)鳥獣被害が大きいために、どのような作物を生産、加工していけるか実験的に生産している。東農大が協力している。 ・エコレク構想 ・里山マルチライブプラン:棚田の保全、里山復活のため。七沢地区、飯山地区を対象に、実験的に色々試している。(紅葉を植えたり) <p>厚木からみた大山のイメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大山はシンボルであり、ハイキングの山である。厚木からは大山しか見えないので、丹沢という感じではない。大山の玄関は秦野 伊勢原 厚木?というように移り変わらせたいのか? | <p>ツーリズム・環境教育について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・七沢自然教室という市営の自然学習教室がある(屋外)。小・中学生の体験学習に使用される。 ・ツーリズムについては具体的なものはない。直売所、直営はない。七沢に山の駅がある。七沢、小野にはそれぞれ観光協会がある。目玉はないのでゴルフと温泉パックでツアーを組んだりしている。 ・市営キャンプ場は「弁天の森」というキャンプ場だけ。利用者は市内の人々である。トラブル等はなし。 | <p>山のなりわい</p> | <p>暮らし</p> <p>鳥獣被害について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シカ、サルの被害が大きい。七沢ではヒルの被害が大きい。 ・サルの追っ払い隊が山沿いにある。農業政策が担当している。市からある程度のお金はでている。シカは柵のみ対策をとっている。 <p>水について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔から県営がほとんど。子供に教える場合はダム(宮ヶ瀬)からくるんだよと言うことが多い。水源という意識はあまりない。 |
| <p>松田町</p> <p>1.日時 2004年8月2日(月) 15:00~</p> <p>2.場所 松田町役場</p> <p>3.参加者 松田町:企画財政課、杉田氏、吉田氏 産業観光課、石井氏 調査チーム:系長 橋本 日暮 西村 関 濱口 鈴木</p> | <p>松田町について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人口は1万3千である。バブル期に人口が増えた。最明寺公園から北は都市計画区域外の白地である。 ・一番奥の集落である稲郷は、今も住民がおり、建て替えて家が増えているくらいだ。 ・自治会は集落ごとにある。 <p>総合計画について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成13年より総合計画が始まり、現在16、17、18年の後期部分である。大きなテーマは自然環境である。 <p>本調査について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行政側の対応窓口 <p>丹沢大山総合調査実行委員会には産業建設部長の村井氏が出席している。今後の地域再生チームとの連絡の窓口を決めていただきたい。</p> <p>企画は全体の調整であり、農業や商工だと産業観光課である。どこが窓口となるか内部検討したい。</p> <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やどりぎ大橋あたりの川が異臭がするが、原因はなにか? ・近くには、水源林の中のトイレがあるが、それではないだろう。よくわからない | <p>観光について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間の観光客数は40万人だが、根拠はわからない。 ・観光祭りは、大名行列や川での花火などが行なわれる。 ・ハーブガーデンは町直営である。1月の終わりにカワズザクラが咲き、それが来訪者のピークになる。2、3年前からライトアップもしている。その他、5月の若葉祭り、6月のハーブ、10月のセージまつり、産業祭り、12月のクリスマスの電飾などがある。 ・グリーンツーリズムは、前町長が力を入れており官主導で行なわれたが、ハーブガーデンとハーブ研究会が残っただけだ。 ・キャンプ場は民間のものがいくつかある。地元や秦野市の人が地主で経営している。ます釣り場もある。 ・のこぎり山の登山口はけっこう人が来ている。入山者数は、富士急行の乗車人数を調べればわかるのではないかと。地元の人は乗らない。 <p>環境教育について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水源林の保全で、県とタイアップで植林を行なった。 ・町独自の子ども向けのプログラムはない。インストラクター養成等もない。 <p>市民農園について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・栗拾いの客が急に減っているのは、イノシシやシカに栗を食べられて減ったためだ。平成5 | <p>山について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森林は民有、県有が入り交じっている。昔からの集落共有林もけっこうある。 ・クヌギが育たない。雑草に負けてしまう。 | <p>鳥獣被害について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭和53年以降被害が見られ、イノシシ、シカ、ハクビシンの被害がある。 ・被害状況は県の環境部でまとめている。 ・イノシシは鉄砲が打てて優秀な犬が5、6頭いないととれない。人間のにおいを嫌う習性がある。 ・シカはどこでも出る。東名の上あたりで餌を食べていたりする。シカは県の許可でとっている。車にぶつかっても平気で逃げていく。昔は主産がタバコだったので、シカの害もなかったのではないかと。 ・ハクビシンは身が軽く穴も掘るので、蚊屋のような檻をつくらないと防げない。ビワなどの果実がねらわれるが、ここではサトイモである。 ・サルは市街地に出たことがあるが、一週間もいなかった。 ・ヒルの被害は松田ではない。山北ではあると聞いている。 ・動物の被害が多すぎて農業への意欲がわかない。サツマイモの被害がすでにでている。以前は大きなものが食べられたが、今は大きくなる前に食べてしまう。 ・対策として、10年前に寄地区の一部でシカ柵をつくったが、今再設置をしている。地面を掘りトタン板を入れる工法である。シカ柵は、今年度までは県の整備で行なわれる。 ・柵をつくっても沢などから入ってくるので、 |

| | まちの概要・取り組み・意識・他 | 観光・教育・ツーリズム | 山のなりわい | 暮らし |
|-----|-----------------|--|--------|---|
| 松田町 | | <p>年に山で宅地開発が始まったことも関係しているだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タバコの生産のあと、温度が高くなく霧がでる気候が適していることや高収入があがるということで、50年代に寄地区でお茶の生産が始まった。 ・市民農園を希望された農家に対し、事務的補助だけ行政で行なっている。 ・みやまの里は第三セクターの協議会がある。 ・市民農園利用者は、平成3～4年頃が多く、横浜などからも来ていたが、最近は各地にあるので、減っている。ふれあい農園はかつては抽選だったが、今は余っている状況だ。 ・やどりぎ村民パスポートは終了した。 | | <p>基本的にすみわけが必要だ。荒廃地になるところをいかすなどの案もあるがいざ実施となるとなかなかできない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シカの駆除頭数は県で定めており、松田町は20頭である。駆除は猟友会が行なっているが猟友会も高齢化している。一週間に1頭程度しか捕れない。捕ったシカは、自分で食べたり民宿に売ったりしている。駆除したシカを市場ベースにのせることまでは考えていない。PR程度だ。シカは凍らせて、シカ刺しにするとおいしい。 ・苗木に保護材を巻いても、材の高さよりも上に出たところが食べられる。 <p>農業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勤め先が近いので、農業に身が入らない。施設的にはいろいろ整備してきたが定年後ほそぼそとやっている程度だ。山との接点に畑がある。昔はみかん畑がたくさんあったが後継者減で、現在は寄(やどりぎ)地区で少し行なっている。 ・農業の新規参入者はいない。機械化が導入できる農地が山の部分にないためだ。また、松田には田もない。 ・温度差が少ないので花卉栽培に適しているのではないか？(糸長) <p>資材、電気、水を持ってくることが大変であり、道路整備も必要となる。養鶏場をつくる時にも道路を自分たちでつくっていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・松田町の農家が高齢化し、今の施設をどうするかということが課題で、お金を落とししてもらったところまでは考えられない。 <p>水について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町の飲料水は湧水である。湧水は町うちに3箇所あり、枯れずに豊富である。県の水道は使っていない。 ・寄は800世帯で、町では流域下水道の整備を予定している。湯の沢団地までひっぱり予定である。 <p>調査に向けて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・暮らし再生部会のモデル地区調査として、寄地区に入りたい。そこに根ざして生活している人たちがいる、エコツーリズムの拠点である、ビオトープがあるなどが対象とする理由だ。調査に際し、農家を対象とした食生活に関するアンケートをかけたい。地域に入る際、間を取り持ってほしい。(日暮) <p>寄地区(湯の沢を含む)は850世帯である。そのうち400世帯はあとから入ってきた。農家だけを選択するのは難しいのでは？JAはあるが婦人部会は解散している。新住民が多いのは、中津川沿い、彌勒寺のあたりである。湯の沢をのぞき、寄そのものは650世帯である。月に一度自治会長との会合があるのでその時に話す。アンケートをかける最低1ヶ月前には連絡ほしい。</p> |

| | まちの概要・取り組み・意識・他 | 観光・教育・ツーリズム | 山のなりわい | 暮らし |
|--|---|---|--|---|
| <p>山北町</p> <p>1.日時 2004年8月2日(月) 13:30~15:00 2.場所 山北町役場 3.出席者 秦野市：企画課(大野氏) 産業観光課(石田氏) 調査チーム：日本大学生物資源科学部(系長、関)</p> | <p>山北町について</p> <ul style="list-style-type: none"> 観光等での近隣自治体の付き合いは丹沢関連自治体よりも酒匂川流域自治体の方が多い。津久井などとはトンネルを掘るとい話もあるが付き合いが薄い。 御殿場から沼津間は本数が多いが、神奈川県側は本数が少ない。名物の鮎寿司弁当を復活させようと小田原市の企画課が動いている。 <p>総合計画について</p> <ul style="list-style-type: none"> 町内の地域づくり(2月開始)については第4次総合計画中期のなかで7地区に分けて平行してうごいている。 この中で里山づくりも産業観光課が担当して標高300m程度のところで、いろいろな植林をして自然を保つことなどを行っている。清水地区で国の中山間整備事業にのってやっている また、国有林活用プロジェクトとして国有林の活性化できないかという考えでおこなっている。 これらとは別に地域再生としては、自分の地区は自分で何とかしなさいよということで、自主性を持たせ2月に7地区での住民の組織をつくりうごいている。何らかで地域の中では町の職員が関わることもある。地域がいかに自主的に自立できるかが考えにある。 これらの地区は7地区に分かれ、山北、向原、岸、平山、共和、清水、三保である。山北町全体で自治会が大きく6つあるが、山北地区の自治会のなかで平山という場所が別地区にわかれている。 <p>土地利用計画条例について</p> <ul style="list-style-type: none"> 山北町では「山北町土地利用に関する基本条例」を3月に策定した。5つのゾーニングに分けておこなっている。 <p>丹沢エリアの三保地区は、「三保ダム・丹沢湖周辺環境創生ゾーン」で、体験学習の森エリア、自然観察の森エリア等が設定されている。</p> <ul style="list-style-type: none"> 現在、実際におこなっている事業として、国有林ふれあいプロジェクト、県の事業の一環としての尾根のふれあい牧場整備、郵政公社の簡保の事業などがある。 このほか高松地区では地域に会う考え方で畜産団地を整備。道路のアクセスの問題もあるが国の補助、国以外の補助を模索している。 暮らしに即した動きとしては、7地区の各地区で地域づくりとして開発ではなく、地区の活性化を目指し、地域を見直すことを目的としている。 これらは、総合計画内にできるもの、長期になるものもある。期間は平成12年~平成26年(15年間)。15年間のうち総合計画の骨は変わらないが、内部は5年の後に手直しを加えていく。 | <p>観光について</p> <ul style="list-style-type: none"> 中川温泉：課題は、やる気のある無いにより旅館に差がでている。湯治客ではない。行楽客であり、秋に多い。日帰りの登山客などは町立の「ぶなの湯」がある。町の持っていた源泉を生かすために開設された。地元との料金のバランスをとりながらやっている。この場合の交通は、自家用車でくる場合もあり、バスの場合もある。 もみじ祭り：猪なべ、10人あたり1鍋。30年程度の歴史を持つ。中川地区パーベキューセンターにて開催。 <p>広報</p> <ul style="list-style-type: none"> ツアーは、旅館系と鉄道系が多い。 戦略として行事的なものを宣伝している。例)桜まつり、山開き、西丹沢の山開き、酒水の滝祭り 登山客、キャンプ場の日帰りが増えている。 経済性 <p>直売所としては、「とれたて山ちゃん」：東山北駅近くの国道246号沿いに、町がつくり組合が運営。地元農家30~40名くらい参加。</p> <ul style="list-style-type: none"> 道の駅：直売所あり。清水地区振興会運営 キャンプ客は、食料などはほとんどコンビニで購入してくる。以前は地元店もあったが売れないため店が少なくなった。無人販売所などは農業自体が少ないためない。 ダムができる前から三保は農でなく林で生計を立てていた。山菜などは舞茸くらい。 <p>観光客の動向</p> <ul style="list-style-type: none"> 年間の観光客数は各施設(旅館、キャンプ場、ビジターセンター)と観光行事の際の参加人数にて算出している。 東京方面、横浜方面の人が多い。 行政側のネットワーク <p>観光協会</p> <p>山荘キャンプ場連絡協議会</p> <p>これらは丹沢の山小屋の連絡協議会とは別組織。町独自。総会をおこない年次報告などをだす。観光協会の事務局は駅前。</p> <ul style="list-style-type: none"> ハイキングコースのネットワーク化構想 <p>麓としては大野山ハイキングコース、高松山ハイキングコース、不老山ハイキングコースがある。また、丹沢の奥には東海自然歩道がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ネットワークを形成するには、下る必要あり。 交流 <p>共和地区深沢集落：本屋の有燐堂が主導でそば打ち体験 春2回、秋2回の年4回おこなっている。現在は自主的に口コミを通して15人~20人の参加がある。小学校の体験学習など蕎麦畑は結構ある。</p> <p>品川区と交流。ひだまりの里、一坪農園など。町民からの要請で始まった。</p> <ul style="list-style-type: none"> その他 <p>駅前の商店街は10数年と協議して再開発はしないという話であったが、ジアック(水源開発)の協力もあり、今年度調査をおこない、来年度の実施計画化を目指している。</p> <p>今年度(16年度)はバスの反転地交流センターというインフォメーションセンター的なものを地元材を使用してつくる計画がある。</p> | <p>山について</p> <ul style="list-style-type: none"> 後継者、搬入の問題がある。犬越路も通れない。森林組合も杉、檜よりも雑木林を重視するように変わってきている。 神奈川県今の県知事も地元の材を重要視するような話をしているが、具体性が薄い。 山北駅前に建設予定の情報施設は、町内産の材を活用する予定。 丹沢は急峻で手入れが難しい、水源林と材の活用。これらと比べると水源林に指定してもらうほうが楽である。 森林整備計画がある。公有林が多い。尾根沿いには県有林。若干低いところに民有林がある。ほとんどが私有林。財産区も少しある。森林整備計画は市町村単位。 担当は産業観光課農林班。グリーンツーも産業観光課。 <p>山の資源化および森林組合について</p> <ul style="list-style-type: none"> 風車の話もあるが、なかなか実施段階にはいかない。 材自体があまり出ていない。 製材所は山北に一軒ある。地元材も扱っているはず。 森林組合があり、森林組合で伐採したものは地元へ直接卸さず秦野市渋沢の県森連の貯木場へもっていく。 森林組合の合併の話は全くない。理由としては、県の事業の公的管理の仕事がある。枝打ち、間伐が主。植林はしていない。山北には佐藤草木のような会社はない。山北は財産区、共有林の管理が多い。 <p>森林体験・学習プログラムについて</p> <ul style="list-style-type: none"> 清水小学校で一度ある。中川小では実施されていない。 山村留学に関しては交流の話はあるが実際に実施されてはいない。 | <p>鳥獣被害について</p> <ul style="list-style-type: none"> 鹿を中心として時折猿がでる。多いのは三保、清水。山ビルはいない。 <p>集落環境について</p> <ul style="list-style-type: none"> 町内唯一の消滅集落として、大又集落：昭和20年代に消滅。営林署の関係で移転。その後移転先もダムで埋まり移転。 碓氷の上には集落は元々なかった。 里山を管理しながら昔の面影を残す地区は共和地区八丁。非常に小さい集落、1~2世帯の集落の塊がちよくちよくとある。 |

| | まちの概要・取り組み・意識・他 | 観光・教育・ツーリズム | 山のなりわい | 暮らし |
|---|--|--|---|--|
| <p>愛川町</p> <p>1.日時 2004年8月5日(木) 11:00~</p> <p>2.場所 愛川町役場</p> <p>3.参加者 愛川町:企画政策課、齋藤氏、中村氏 商工観光課、馬場氏、白井氏、高原氏 調査チーム:糸長 橋本 日暮 西村 関 濱口 鈴木</p> | <p>愛川町について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中産間地域に入るかどうかという地域である。景観条例はない。半原が30年に合併し、今の形になった。半原は昔、絹繊維で発展したが、現在は南部の中津に人口の2/3が移った。工業団地があり外国人居住者、特にブラジル人が多い。地元の生活圏は厚木である。 ・県立あいかわ公園に、つつじ祭り実行委員会がある。あいかわ公園は工芸村等は未完成であるが、平成18年にオープン約束をしており、一昨年に仮オープンしている。 ・レインボープラザに、協議会がある。レインボープラザは交流の里づくり計画の「環境学習の里」として整備された。 ・地元の生活圏は厚木である。 ・河川沿いは本厚木からの車が多い。 ・農業的でありながら、一方市場もある。都会でも山でもなくむずかしい地域と思う。(日暮) ・半原は絹繊維で発展した。200年の歴史があり、かつては燃糸(?)の全国シェアが80%であった。 ・工業団地あり、外国人居住者多い。(ブラジル人3,000人、1,000人程度) <p>本調査について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行政側の対応窓口 丹沢大山総合調査実行委員会には環境課長の細野氏が出席している。今後の地域再生チームとの連絡の窓口を決めていただきたい。各市町村ともまずは、企画課をお願いしている。 企画が窓口となって、必要な部署へ連絡する。 ・本調査の概要について：興味有 町としての丹沢への取り組み ・企画サイドでは、愛川、秦野、伊勢原、厚木、清川の5つで広域行政連絡会をつくっている。昨年は登山道の道標をつくり、今年は、各市町村の花マップをつくる予定である。 ・平成13年より水源地域交流事業を行なっている。ハードよりもソフトプログラム型である。今回、丹沢版のプログラム開発を考えており、専門家もチームに入っている。県が考えている丹沢は上のほうだが、できるだけふもとで交流できないかと考えている。(糸長) 水源環境税について ・水源環境税は何に使えるかという感じである。 ・県より水源環境にどのように関わっているかというアンケート調査が入っている。合併浄化槽の設置や、山の下刈りなどと回答している。今年は、水源環境税を具体にあてるのにどんな事業対象メニューがあるかという設問が増えている。 ・7月27、28日に会合があり、県の水源担当課長から税制担当に話があった。(愛川町は欠席) | <p>観光について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・愛川、秦野、伊勢原、松田、厚木、清川、山北で丹沢大山観光キャンペーン推進協議会をつくっている。 ・入込数は年間100万人(清川の200万人とは別である)。これはカウントした数字である。ダムの建設により入込数が一時下がった。ダム建設の前は、中津川渓谷でキャンプが多かった。平塚から中央バスの直行便もあった。関東邪馬溪に認知されていた。時々、渓谷はもうないの?と問い合わせの電話がある。今はレインボープラザに来る程度だ。 ・バーベキューの河川の利用状況はプロットすればわかる。 ・昨年は登山道の道標を作り、今年は各市町村の花マップを作る予定である。 <p>環境教育について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県立愛川ふれあいの村には、子どもたちが7~800人訪れる。利用の上位は全部、横浜市などの他の市である。 ・繊維会館で藍染めの体験ができる。 | <p>山について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町で森林整備計画をたてている。 ・森林組合は、受託事業のみである。町からの助成で除間伐を行なっている。 ・愛川産材を出して生計をたてている人はいない。 ・以前に大きな雪害があり、5カ年かけて復旧した。20年ものの材などが折れた。 ・財産区はないが、学校や組合が持っているところはある。学校林となっている所がある。 ・集落有林は4つくらいに分かれている。 <p>里山について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・里山の事業にも手をつけていこうとしている。PRだけでなく、先生の話のようなことも大切ととらえている。 ・来年度は県の里山事業に指定される。5つのうち3つは決まっており、昨年から手をあげていた。八管山(はずげさん)地区で行なう。2年目は体制づくりにあてる。 | <p>鳥獣被害について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山沿いに多い。被害については農政課の担当である。 ・サルは3つのグループがあり、八管山のグループは三十数頭いる。厚木と行ったり来たりしている。人的被害がないと駆除できない。国、県へ要望をあげている。手段として電気柵があるが、周辺、10mは伐採する必要がある。 ・シカが多い。シカ柵を林業組合で整備した。町や県でも補助を出している。ハイカーが柵を開けっ放しにすると効果がないが、重りで開閉するように改良されてきている。 ・ヤマビルの被害はあまり聞いていないが、半原地域である。サルや人について移動する。農作業をしていて着くこともある。 <p>水、河川について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ダムは飲料水と洪水調整の目的でつくられたが、河川敷を見ると、アカシアなど樹木や雑草・ゴミの不法投棄など新しい問題が生じている。また、コケが乾いて白川になったり、河原の砂利が不足する問題もある。草ぼうぼうで、昔の河原のイメージがない。雑草の火事も心配だ。今は野焼きもできない。自然保護団体は草を刈ると野鳥が卵を産めないというのが、どうなのかという思いだ。 ・ダムをつくる時、田代までは水源地域にエリア指定してもらっている。 ・平成13年より水源地域交流事業を行っている。現在はハード面よりソフトプログラムに力を入れている。 調査に向けて ・石神社があるが、町に石切り屋はあるか?(日暮) ない。八管山は修験の山であり、八管神社への行脚道がある。 ・この町は諏訪神社が多い。これは武田の関係でシカを食べる信仰がある。神社の調査資料がほしい。(日暮) 教育委員会の郷土史でまとめている。武田は、三増(みませ)で一大山岳戦をしている。 |

| | まちの概要・取り組み・意識・他 | 観光・教育・ツーリズム | 山のなりわい | 暮らし |
|--|--|--|--|---|
| <p>津久井町</p> <p>1.日時 2004年8月5日(木) 13:30~</p> <p>2.場所 津久井町役場</p> <p>3.参加者 津久井町:企画政策室、大熊氏、井上氏 環境課、内貴氏、矢口氏 産業経済課、榎田氏 調査チーム:系長 橋本 日暮 西村 関 濱口 鈴木</p> | <p>津久井町について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピークは3万4000人?だったが、現在2万9千人に減っている。4年前がピークで、バブル後も伸びていたが、最近では長男でも町を出る。橋本に大規模な高層マンションがいき、便利なので出ていく。青根で今年生まれた子どもは2人だけだ。 ・小学校は7校、中学校は5校ある。中野小児童数は1300人から現在、800人に減っている。 ・昭和30年に津久井湖ができた。水源地であるがゆえの制約があり、リサーチインテリジェントパークや工業団地がつかれない。法人税もほとんどない。それゆえ、バブルの影響もほとんどなかった。 ・鳥居原ふれあいの家は、建物は町で整備したが、運営は地元である。 ・62の自治会があり、13世帯から890世帯で構成される。 ・昔は炭焼きと林業の町だった。富士の方へ持っていった。 ・60~70代は農林業に従事し、それ以外は勤めている。 ・生活圏は相模原市。相模原市の事業所へ勤めている人が多い。 ・鳥屋は、売り出されて地権者がバラバラになっている。 <p>町では町史の編さんをしているところである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町の基本計画のダイジェスト版があるが、丹沢の話はあまりふれられていない。 ・町として水源文化都市構想を掲げているが、実現する財源がない。もともと炭焼きと林業の町で、観光には力を入れていなかった。 ・合併により大きな都市になった上で新たな住まい方になる。中核市が水源を持つことで、県内でも意見を持てる市になれる。経済力、財源を持って来られる。合併にかけている。合併後、権利はそっくり引き継ぐかたちである。 ・国定公園以外は都市計画区域だが、線引きされていない。 ・地元の生活圏は相模原市である。 <p>本調査について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行政側の対応窓口 実行委員会には環境課長の曾根氏が出席している。今後の地域再生チームとの連絡の窓口を決めていただきたい。 ・企画が窓口となって、必要な部署へ連絡する。 ・本調査の概要について:初めて聞いた。丹沢という意識があまりない。丹沢というより宮ヶ瀬周辺。 <p>町としての丹沢への取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企画サイドでは丹沢への直接的政策はない。 ・水源地域交流の里づくりで、青根に温泉施設の建設を進めている(温泉はでている)。今までは道志川鮎まつり、名人匠の鮎釣り教室等、子どもやファミリーを対象とした取り組みをしている。 | <p>観光について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担当は商業経済課である。 ・入込客数は減少傾向だったが、最近増えてきた。宮が瀬に観光施設ができたことが関係している。 ・位置的に、多摩の方が近い。県民より都民が来る。 ・丹沢の登山客の北の出入り口だが、それを対象にしたことはない。 ・津久井町には、いちばん高い山があり、東海自然道も一番長いのだが(いかせていない)。 ・シカが運ぶヤマビルのせいで、登山客が減った。 ・バスを廃止したため、登山客が困っている。 ・津久井町は、首都圏に近すぎて、日帰り観光が可能なため、宿泊施設がほとんどない。 ・金を落とす施設がなく、観光センターも古い。観光への投資もない。 ・キャンプ場の利用者数は維持している。去年は長雨の影響があって少なかった。キャンプ場はみな民間・組合であり、町営はない。オートキャンプ場はない?。 ・避暑地でも避寒地でもないため、難しい。 ・別荘として所有している人も何人かいる。 ・ガラス工芸をやっている人がぼつぼつといる。 ・長者舎は人は住んでいないが、泊まることはできる。 ・丹沢観光センターはお金にならないため、撤退した。キャンプ場、宿泊施設、マス釣り場などがあつた。 ・青根は、リンゴ園もあり“緑の休暇村”事業を行なっている。 ・郷土資料館は郡のもので、現在は倉庫化し、整理されていない。アユの魚ろう道具がある。 ・三ヶ木(みかげ)は、関東の稲作の発祥地であり、また魚ろうがある。魚ろう道具は白山の観光センターにも展示がある。 ・津久井城址は公園になっている。 <p>環境教育について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水道みちを使って、自転車で横浜までいく活動を子どもたちが行なっている。 ・鳥屋中学校では、山に入り、枝打ちや下刈りを一緒にやっている。 ・水源地域交流の里づくりでは、青根に温泉施設を建設中で、道志川鮎祭り、鮎釣り教室など、子供やファミリー向けにやっている <p>市民農園について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市民農園は、遠くは横浜からの利用者がある。 | <p>山について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・津久井郡林業組合があるが、管理というほど何かしているわけではない。津久井の木を切り出していない。 ・6つの旧村で、財産区がある。 ・藤野町の財産区が青根にある。 ・山北方面へ行く神ノ川林道は、途中で通行止めになっている。危険なところがあるが、歩いていくことはできる。 | <p>鳥獣被害について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シカ、サル、イノシシ、ハクビシンなどの被害がある。 ・サルは道志川を越して来ている。4つの群があり、鳥屋(とや)で40~50頭である。 ・シカの駆除頭数は、県から町に割り当てられ、メスで20~25頭である。捕ったシカは新しければ生で食べる。知り合いから分けてもらう。駆除の他、11月中旬から2月の中旬までの猟の期間中、猟区で捕る。地元の人が案内役となる。入猟の料金をとっている。 ・ヒルも最近里に下りてきている。 <p>農業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業は高齢者はやっているが、若者は勤めに出ている。荒廃地調査はやっているが、地図があるかはわからない。 <p>水について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道志川は津久井に入ってから水道取水している。 ・ダムが2つあるがこれがガンとなっている。湧水が豊富だが、水道が整備されたのは、去年だ。青根が一番水源が豊富であり、いい水が流れている。傾斜地なので、流れがはやい。家の横を流れ、洗濯をしたり、スイカを冷やしたりしている。 ・青野原は、山が少ないため、水が少ない。 <p>調査に向けて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農地の荒廃地調査は行なっている。地図があるかは、わからない。 ・大山阿利山が石切りの神様である関係で、石屋があるか調べている。(日暮) 砂利屋さんはある。しかし、町域的には相模湖になる。 ・シカを食べる信仰のある諏訪神社の分布を知りたい。(日暮) 神社、仏閣の調査は教育委員会で行なっている。青根に諏訪神社がある。 |

| | まちの概要・取り組み・意識・他 | 観光・教育・ツーリズム | 山のなりわい | 暮らし |
|---|--|---|---|--|
| <p>清川村</p> <p>1.日時 2004年8月3日(火) 13:00~14:30</p> <p>2.場所 清川村役場</p> <p>3.参加者 清川村役場:企画財政課副主幹折田、産業観光課伊藤、他3名 [日本大学:系長 橋本 日暮 関 濱口 鈴木]</p> | <p>清川村について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やまなみグッズ じかに関係するものはないが、三峰焼き(陶芸)(認定を受けている)、梅ワイン(季節限定で年間3000本程度しかつくりえない)がある。これらをいかに飽きられずに続けられるか、定着できるかが問題点。企画開発は商工協会や観光課が行っている。 ・労力 労力の都会への流出が問題となっている。 ・さがみビールのようなレストラン開発は? 村としてはやっていないが個人趣向でログハウスがあったりする。道の駅のようなものを検討している。 ・宮ヶ瀬交流館に歴史的なものがおいてある。 ・提案として 丹沢達人リストを作ると面白いのでは? 国交省によるダムの水源地域活性化ビジョン報告書のその後 ・3町村のイベントを開いている。ソフトの充実が求められる。推進協議会がある。進行台帳をもとに進めている。(5年先、10年先の進行) 本調査について ・行政側の対応窓口 企画財政課が行う。 | <p>観光について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・継続し、いかに飽きのこない観光業をするかが問題となっている。 ・宮ヶ瀬ダム ダム完成がH12年12月。建設が注目されてきた。建設当時は全国規模で見学などに来っていた。建設の経過を見に来るリピーターがいた。国はダム完成後、3町村(清川村、津久井町、愛川町)にダムを任せた。村では駐車場を有料にしたりした。清川村の観光は通過型である。ダムの湖面管理は財団が行っている。流木をポットにしたり、展示をしたりしている。 ・キャンプ場 キャンプ場は五カ所ほどある。中でも唐沢キャンプ場は大きい。村営では金沢キャンプ場があり、目の前に釣り場がある。キャンパーは厚木や愛川方面から訪れる。 ・登山客 三峰、媒ヶ谷などから山に入る。ハイカーは仏果山から愛川にぬける。オーバーユースをいかに抑えながら人を山に入れるかが問題である。立ち入り禁止区域に湧水があり、それを求めて入って行ってしまふ。登山者などのモラルが重要である。 ・観光客 H15年の観光客数2,376,000人(年間)、17,000人が宿泊客。宿泊はほとんどがキャンプ客。夏休み、GW、紅葉シーズン、クリスマスに来る。クリスマスは山梨や八王子からも来る。 ・アクセス 車では、中央道でも東名高速からでも来れるので便利だが、バスや電車からのアクセスが乏しい。バリアフリーに対応していない。 ・宮ヶ瀬ビジターセンターとのつながりは? あまりない。山へのガイドのニーズが村にあがったりはしない。山に住んでいた人にインストラクターを勤めてもらい、リピーターを作るという話は村の中でダムが出来るときにもちあがった。 | <p>山について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山の村外所有者(ha数は少ない)が多い。炭焼きについて 個人で行っている。今炭焼きのブームで多く炭焼き場は六ヶ所ほどある。木の種類はクヌギ、ナラ。 ・水源のエネルギー利用は(チップ、ペレット)? ない。なりわいの利用は県ではあるが、村ではない。組合でもコストがかかってできない。そのために間伐材はそのまま置いてくる。 | <p>鳥獣被害について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山ビル 山ビルの問題が一番深刻である。五年前からひどくなってきた。防除事業はあるが効果的なものはない。昔はヒル沢だけのものが広がってしまった。現在では全域に分布し、ヒルがでないところは湖だけである。住居地にも、家の中にまででる。 ・シカ シカ駆除後の活用方法はないか。今は廃棄している。制度の見直しが必要である。 農業について ・有休農地のデータは? ない。豚をやっている。現在はほとんど兼業である。鳥獣からの豚への被害はないが、豚の臭いで苦情が来た事がある。 ・土づくりの戦略(農業的な)は? ない。 |

(3) 市町村WSへの事前説明議事録

秦野市

1. 日時 2004年8月2日(月) 13:00~

2. 場所 秦野市役所

3. 参加者 秦野市：企画課、國廣氏 観光課、大津氏
森林づくり課、栗原氏

調査チーム：系長 橋本 日暮 西村 関 濱口 鈴木

4. 丹沢大山総合調査趣旨説明(系長)

- ・丹沢大山総合調査は、丹沢大山国定公園とその周辺エリアを対象に、自然再生をメインテーマとして、県サイドで行われる。10年前にも行われたが、今回は、自然再生だけでなく、地域に暮らす人たちがどのように丹沢大山に積極的にかかわるかということを考える「地域再生」が新たに視点として加わり、私たちは、その地域再生チームとして調査活動を行っている。
- ・丹沢大山総合調査は、神奈川県自然保護センターが統括している。組織体制は、上部に、行政、学識経験者、企業、市民から構成される実行委員会があり、意思決定機関として機能する。その下に調査団があり、生き物の再生チーム、水と土の再生チーム、地域の再生チーム、情報を集め公開するチームの4つに分かれている。また、調査結果を受け、県へ政策を提案していく調査企画部会(政策検討ワーキンググループ)がある。(例えば、水源環境税をどう使うかなど。私(系長)は水源環境税検討委員会の委員をしているが、そこでは使い方として、丹沢大山の再生にむけた基金づくりがあがっている。)
- ・この事業は環境省と県(国定公園調査費等)の予算を合わせ、1億数千万の事業費がついている。
- ・10年前の調査のアウトプットとして、行政の縦割り機構を超えた神奈川県自然保護センターができたこと、シカ柵が整備されたことがあげられる。
- ・調査期間は2004年度から2年半である。2004年は基礎調査と再生ビジョンづくり、2005年はこれらを固めて、2006年度前半に行動計画をたてる。
- ・地域再生チームでは、丹沢大山の8市町村を対象に35、6名で調査を行う。地域資源の活用による観光等を検討する「ツーリズムと環境教育学習チーム」、林業やエネルギーなどの活用等を検討する「山のなりわい再生複合戦略チーム」、暮らしの魅力の再発見等を検討する「暮らしの再生チーム」の3つに分かれる。また、基礎調査の整理をするワーキンググループがある。これらの他に、市民との関わりの場として、地域再生フォーラムを年2回開催する。このフォーラムの前段として、行政職員を対象とした市町村ワークショップを年2回開催し、情報収集や今後の展開について話し合う。

5. 協力依頼(系長)

- ・事前通知の通り、8月27日に第1回市町村ワークショップを開催する。地域の課題や魅力を調査し、共有する。各市町村の企画、観光、農林関係の部署から数名ずつ参加願いたい。第2回ワークショップは、総合的ビジョンの話し合いをテーマに9月の開催を予定している。継続的に付き合っただけの方、丹沢大山にかかわりの強い方にお願いたい。

- ・ 基礎調査に必要な資料等は、今後、リスト化して依頼するので対応願いたい。(対応窓口は当面は企画課國廣氏)

6. ヒアリング内容

本調査の概要について：はじめて聞いた。

イベント：9月にたばこ祭りがある。たばこの生産は昭和59年に終わっているが、現在も名称はそのまま残し、昭和23年から続く伝統行事となっている。花火もやり、市外からも来る。

人口：人口はほぼ横ばい。特に過疎化しているところはない。南地区は区画整理をしたため、増加が見られる。北側の山の方は調整区域なので農業をやらないと住めない。

計画：総合計画は5ヵ年ごと、基本構想は15ヵ年ごとに策定している。2010年に人口19万2千人と推計していたが、現実との開きが出ており、調整、見直しが課題となっている。

合併：合併の予定はない。

自治組織：旧村単位で7地区に分かれており、自治会は200余り。都市計画マスタープランでは、この7地区にわけているはずであるが、流域単位でも特徴があるため、地区わけについてはこれから検討するところだ。

農業：特産物はソバや落花生など。たばこはもう作っていない。市民農園は、ふれあい農園というのがある。

鳥獣被害：シカ、イノシシ、ハクビシン、カラスなどの鳥類により、農作物が荒らされている。以前は冬だけだったが、近年は1年中出るようになった。

森林：森林づくり課が今年できた。標高300m以上に関しては、国や県がやっている。それ以下の里山の、森林の20%にあたる部分の整備検討を行っている。私有林に関しては、間伐への補助は行っているが、森林組合に委託。林業家の登録は1件あるが、県産材を扱っているわけではない。県内の木材使用は推奨はしているものの、あまり普及していない(森林づくり公社があるが、利益はでない。土木の型枠で使っているという話も聞くが...)。山北の駅前の施設では使っている。

里山：20%が里山と言われている地域。環境省の里地里山モデル地域事業で、秦野市が全国4つのモデル地に秦野市が指定されている。県の里山推進モデル事業でも名古屋(ながめき)が指定され、地域の人による地域づくりを進めていく。今年は計画段階で、協議会を立ち上げる予定。

水：水道は全国でも横浜、函館についで3番目に開通。10年かけて名水(弘法の清水)を復活させた。芦ノ湖の1.5倍の水量を保有しており水は豊富。地下水70パーセント、県の水30パーセント。湧水多数あり。環境保全課による湧水マップがある。観光サイドでは、護摩屋敷の水、葛葉の水、竜神の泉、若竹の泉を象徴的に案内している。

観光：登山が中心で沢やキャンプ場に行く人もいる。山に入る人は年間約40万人(年4回2,5,8,11月にヤビツ、大倉で調査)で中高年が中心。近年は横ばいかやや下降。以前より大倉の方に人が来る傾向(戸川公園ができたから?)。しかし、登山客の大半は小田急線に来て、バスに乗り、山に登って持参の弁当を食べて帰るだけで、いわゆる「ゴミは落とすけど金は落とさない」状態。11月に小田急、神奈中とともに、秋の神奈川キャンペーンとしてツアーを行う。ふるさと公園や鶴巻温泉に行く予定。他市町村

と、丹沢大山観光キャンペーン推進協議会をつくり、ポスターやパンフレットの作成やキャンペーンをしている。

環境教育：菩提の葛葉青少年野外センターで、子供たちがキャンプをしている。

調査：キャンプ場はすべて民営で、調査をするなら、滝沢園キャンプ場、ボスコオートキャンプ場が良いのではないか。集落調査はふれあい農園やふるさと公園のあたり、大倉、蓑毛、東田原などが良いのではないか。

伊勢原市

1. 日時 2004年8月3日(火) 15:30~17:00
2. 場所 伊勢原市役所
3. 参加者 伊勢原市役所:企画調整課 佐藤氏 観光課観光振興係 佐藤氏
調査チーム:糸長 橋本 日暮 關 濱口 鈴木

4. 丹沢大山総合調査主旨説明(糸長)

(省略)

5. 協力依頼(糸長)

(省略)

6. 伊勢原市について

- ・阿夫利ルネッサンスというものがある。
- ・街道は川崎交通事務所が整備している。
- ・伊勢原市は大山の標高1,251m、市城南端標高10mで落差が激しい土地である。

[総合計画]

- ・総合計画の概要は?
「やま」「おか」「まち」「さと」の地域別計画がある。
- ・農林の地域のエリア付けは?日比田、大滝がある。
- ・里山について
里山は市独自にボランティアで保全している(東富岡あたり)。山の中腹はみかんを植えて、里山として存在するようにしている。里山は民地なので同意を得ないといけない。
- ・市街化区域は開発されて保全の手がない。東名高速の北は調整区域である。市民農園は民間で行っているものしかない。

[ツーリズム・環境教育]

- ・教育的な視点での活動する場合の場所やソフトな展開は?
観光で歴史、地域資源を見ながら「自然と歴史の散策ゾーン」をつくらうとしている。太田道灌の墓と農村環境、日向薬師(日本三大薬師)を見所にエコツアーのようなものを育てられないか、検討中。「自然と歴史の散策ゾーン」ではホトケノジョウが生息できるようにしようと考えている。
県青年の家が7~8年前市に移管されたがうまく活用できていない。この先活用できないか。ふれあいの森??広場を使ってはいけないか。西部に県立公園の計画がある。都市計画公園は難しく、自然公園的な計画をしようとしている。WS形式で新しい公園の形式に変えた。

[観光]

- ・丹沢のプロモーションビデオを作って新宿や横浜で流している。
- ・大山観光のツアーが減った。逆に登山客が増えた。修験者も前と比べると、団体では来なくなったし減少した。大山には夏休みに子供会が来る。

[農業]

- ・ 農地の有休地化の対応は？
市民農園 + 農業公園のようなものを作って人を入れる。
- ・ 農業への経費は自然保全のためでもある。

[鳥獣被害]

- ・ 一昨年から山ビル、サル、シカがひどい。宮ヶ瀬ダムが出来てから、シカが降りてきて、
それに山ビルもついてきてしまった。
- ・ 伊勢原カントリーでシカが食べられる。
- ・ 大山はもともと禁猟区であった。
- ・ シカは逃げてきたのではないか？

厚木市

1. 日時 2004年8月3日(火) 11:00~12:00
2. 場所 厚木市役所
3. 参加者 厚木市役所：企画課主幹石井氏、副主幹伊藤氏
調査チーム：糸長 橋本 日暮 關 濱口 鈴木
4. 丹沢大山総合調査主旨説明(糸長)
(省略)
5. 協力依頼(糸長)
(省略)

6. 厚木市について

[総合計画]

- ・ファンタスティックやまなみ：今年、来年度に計画している。予算総15億。ロープウェイを不動尻～広沢寺まで建設する。神奈川新聞や朝日新聞に載っている。お年寄り、障害者のために山頂まで登れるようにするため。また、地域再生、観光のため。現在は広沢寺までバスがでている。中高年の観光資源としてハイキングコースがある。自然を生かした中で観光振興をしたい。
- ・食文化村構想(七沢のみ)：昨年から。観光客の呼び込みのため。(温泉があるが観光客が少なくなった。)鳥獣被害が大きいために、どのような作物を生産、加工していけるか実験的に生産している。東農大が協力している。
- ・エコレク構想
- ・里山マルチライブプラン：棚田の保全、里山復活のため。七沢地区、飯山地区を対象に、実験的に色々試している。(紅葉を植えたり)

[鳥獣被害]

- ・シカ、サルの被害が大きい。七沢ではヒルの被害が大きい。
- ・サルの追っ払い隊が山沿いにある。農業政策が担当している。市からある程度のお金はでている。シカは柵のみ対策をとっている。

[キャンプ場]

- ・市営は「弁天の森」というキャンプ場だけ。利用者は市内の人々である。トラブル等はなし。

[厚木からみた大山のイメージ]

- ・大山はシンボルであり、ハイキングの山である。厚木からは大山しか見えないので、丹沢という感じではない。大山の玄関は秦野 伊勢原 厚木?というように移り変わらせた方がいいのか?

[里山]

- ・七沢、飯山の人々は市内に大体勤めている。

[ツーリズム・環境教育]

- ・七沢自然教室という市営の自然学習教室がある(屋外)。小・中学生の体験学習に使用される。

- ・ツーリズムについては具体的なものはない。直売所、直営はない。七沢に山の駅がある。七沢、小野にはそれぞれ観光協会がある。目玉はないのでゴルフと温泉パックでツアーを組んだりしている。

[合併]

- ・愛甲郡（厚木、愛川、清川）はそれぞれ裕福なので合併はない。

[水源]

- ・昔から県営がほとんど。子供に教える場合はダム（宮ヶ瀬）からくるんだよと言うことが多い。水源という意識はあまりない。

[地元詳しい方]

- ・黄金井酒造（美味しいさがみビール開発もしている。）の社長さんは詳しいとのこと。七沢でマス栽培をしている井内さんも詳しい。

[窓口]

企画課で行う。

松田町

1. 日時 2004年8月2日(月)15:00~

2. 場所 松田町役場

3. 参加者 松田町：企画財政課、杉田氏、吉田氏 産業観光課、石井氏
調査チーム：糸長 橋本 日暮 西村 関 濱口 鈴木

4. 丹沢大山総合調査趣旨説明(糸長)

5. 協力依頼

- ・事前通知の通り、8月27日に第1回市町村ワークショップを開催する。地域の課題や魅力を調査し共有する。各市町村の企画、観光、農林関係の部署から数名ずつ参加願いたい。第2回ワークショップは、総合的ビジョンの話し合いをテーマに9月の開催を予定している。継続的につきあっていただける方、丹沢大山に関わりの強い方をお願いしたい。

産業観光課からは、県の白井氏に欠席の電話連絡をした。次の日が観光祭りのため準備で都合がつかない。企画からは何人か出席できる。

- ・基礎調査に必要な資料等は、今後、リスト化して依頼するので対応願いたい。

6. 行政側の対応窓口

- ・丹沢大山総合調査実行委員会には産業建設部長の村井氏が出席している。今後の地域再生チームとの連絡の窓口を決めていただきたい。

企画は全体の調整であり、農業や商工だと産業観光課である。どこが窓口となるか内部検討したい。

7. 聞き取り内容

[松田町の概要(人口、計画など)]

- ・人口は1万3千である。バブル期に人口が増えた。最明寺公園から北は都市計画区域外の白地である。
- ・一番奥の集落である稲郷は、今も住民がおり、建て替えて家が増えているくらいだ。
- ・平成13年より総合計画が始まり、現在16、17、18年の後期部分である。大きなテーマは自然環境である。

[観光について]

- ・年間の観光客数は40万人だが、根拠はわからない。
- ・観光祭りは、大名行列や川での花火などが行なわれる。
- ・ハーブガーデンは町直営である。1月の終わりにカワズザクラが咲き、それが来訪者のピークになる。2、3年前からライトアップもしている。その他、5月の若葉祭り、6月のハーブ、10月のセージまつり、産業祭り、12月のクリスマスの電飾などがある。
- ・グリーンツーリズムは、前町長が力を入れており官主導で行なわれたが、ハーブガーデンとハーブ研究会が残っただけだ。
- ・キャンプ場は民間のものがいくつもある。地元や秦野市の人々が地主で経営している。まず釣り場もある。
- ・のこぎり山の登山口はけっこう人が来ている。入山者数は、富士急行の乗車人数を調べればわかるのではないかと。地元の人には乗らない。

[森林について]

- ・森林は民有、県有が入り交じっている。昔からの集落共有林もけっこうある。
- ・クヌギが育たない。雑草に負けてしまう。

[農業、市民農園について]

- ・勤め先が近いため、農業に身が入らない。施設的にはいろいろ整備してきたが定年後ほそぼそとやっている程度だ。山との接点に畑がある。昔はみかん畑がたくさんあったが後継者減で、現在は寄（やどりぎ）地区で少し行なっている。
- ・農業の新規参入者はいない。機械化が導入できる農地が山の部分にないためだ。また、松田には田もない。
- ・温度差が少ないので花卉栽培に適しているのではないか？（糸長）
資材、電気、水を持ってるのが大変であり、道路整備も必要となる。養鶏場をつくる時にも道路を自分たちでつくっていた。
- ・栗拾いの客が急に減っているのは、イノシシやシカに栗を食べられて減ったためだ。平成5年に山で宅地開発が始まったことも関係しているだろう。
- ・タバコの生産のあと、温度が高くなり霧がでる気候が適していることや高収入があがるということで、50年代に寄地区でお茶の生産が始まった。
- ・松田町の農家が高齢化し、今の施設をどうするかというところが課題で、お金を落としてもらうところまでは考えられない。
- ・市民農園を希望された農家に対し、事務的補助だけ行政で行なっている。
- ・みやまの里は第三セクターの協議会がある。
- ・市民農園利用者は、平成3～4年頃が多く、横浜などからも来ていたが、最近各地にあるので、減っている。ふれあい農園はかつては抽選だったが、今は余っている状況だ。
- ・やどりぎ村民パスポートは終了した。

[鳥獣被害について]

- ・昭和53年以降被害が見られ、イノシシ、シカ、ハクビシンの被害がある。
- ・被害状況は県の環境部でまとめている。
- ・イノシシは鉄砲が打って優秀な犬が5、6頭いないととれない。人間のにおいを嫌う習性がある。
- ・シカはどこでも出る。東名の上あたりで餌を食べていたりする。シカは県の許可でとっている。車にぶつかっても平気で逃げていく。昔は主産がタバコだったので、シカの害もなかったのではないか。
- ・ハクビシンは身が軽く穴も掘るので、蚊屋のような檻をつくらないと防げない。ピワなどの果実がねられるが、ここではサトイモである。
- ・サルは市街地に出たことがあるが、一週間もいなかった。
- ・ヒルの被害は松田ではない。山北ではあると聞いている。
- ・動物の被害が多すぎて農業への意欲がわからない。サツマイモの被害がすでにでている。以前は大きなものが食べられたが、今は大きくなる前に食べてしまう。
- ・対策として、10年前に寄地区の一部でシカ柵をつくったが、今再設置をしている。地面を掘りトタン板を入れる工法である。シカ柵は、今年度までは県の整備で行なわれる。
- ・柵をつくっても沢などから入ってくるので、基本的にすみわけが必要だ。荒廃地になる

ところをいかすなどの案もあるがいざ実施となるとなかなかできない。

- ・シカの駆除頭数は県で定めており、松田町は20頭である。駆除は猟友会が行なっているが猟友会も高齢化している。一週間に1頭程度しか捕れない。捕ったシカは、自分で食べたり民宿に売ったりしている。駆除したシカを市場ベースにのせることまでは考えていない。PR程度だ。シカは凍らせて、シカ刺しにするとおいしい。
- ・苗木に保護材を巻いても、材の高さよりも上に出たところが食べられる。

[水について]

- ・町の飲料水は湧水である。湧水は町うちに3箇所あり、枯れずに豊富である。県の水道は使っていない。
- ・寄は800世帯で、町では流域下水道の整備を予定している。湯の沢団地までひっぱり予定である。

[環境教育について]

- ・水源林の保全で、県とタイアップで植林を行なった。
- ・町独自の子ども向けのプログラムはない。インストラクター養成等もない。

[自治組織について]

- ・自治会は集落ごとにある。

[調査に向けて]

- ・暮らし再生部会のモデル地区調査として、寄地区に入りたい。そこに根ざして生活している人たちがいる、エコツーリズムの拠点である、ビオトープがあるなどが対象とする理由だ。調査に際し、農家を対象とした食生活に関するアンケートをかけたい。地域に入る際、間を取り持ってほしい。(日暮)

寄地区(湯の沢を含む)は850世帯である。そのうち400世帯はあとから入ってきた。農家だけを選択するのは難しいのでは?JAはあるが婦人部会は解散している。新住民が多いのは、中津川沿い、彌勒寺のあたりである。湯の沢をのぞき、寄そのものは650世帯である。月に一度自治会長との会合があるのでその時に話す。アンケートをかける最低1ヶ月前には連絡ほしい。

[その他]

- ・やどりぎ大橋あたりの川が異臭がするが、原因はなにか?

近くには、水源林の中のトイレがあるが、それではないだろう。よくわからない

山北町

1. 日時 2004年8月16日(月)13:30~15:00
2. 場所 山北町役場
3. 出席者 秦野市：企画課 大野氏、産業観光課 石田氏
調査チーム：日本大学生物資源科学部 系長、関

4. 調査の主旨説明

(省略)

5. 協力依頼

(省略)

6. 行政側の対応窓口

- ・企画課、産業観光課のどちらでもよい。窓口の決定までは言及せず。

7. 聞き取り内容

[町としての丹沢への取り組み]

地域づくりと地域活性化

- ・町内の地域づくり(2月開始)については第4次統合計画中期のなかで7地区に分けて平行してうごいている。
- ・この中で里山づくりも産業観光課が担当して標高300m程度のところで、いろいろな植林をして自然を保つことなどを行っている。清水地区で国の中山間整備事業にのってやっている
- ・また、国有林活用プロジェクトとして国有林の活性化できないかという考えでおこなっている。
- ・これらとは別に地域再生としては、自分の地区は自分で何とかしなさいよということで、自主性を持たせ2月に7地区での住民の組織をつくりうごいている。何らかで地域の中では町の職員が関わることもある。地域がいかにかに自主的に自立できるかが考えにある。
- ・これらの地区は7地区に分かれ、山北、向原、岸、平山、共和、清水、三保である。山北町全体で自治会が大きく6つあるが、山北地区の自治会のなかで平山という場所が別地区にわかれている。

土地利用計画条例

- ・山北町では「山北町土地利用に関する基本条例」を3月に策定した。5つのゾーニングに分けておこなっている。
- ・丹沢エリアの三保地区は、「三保ダム・丹沢湖周辺環境創生ゾーン」で、体験学習の森エリア、自然観察の森エリア等が設定されている。
- ・現在、実際におこなっている事業として、国有林ふれあいプロジェクト、県の事業の一環としての尾根のふれあい牧場整備、郵政公社の簡保の事業などがある。
- ・このほか高松地区では地域に会う考え方で畜産団地を整備。道路のアクセスの問題もあるが国の補助、国以外の補助を模索している。
- ・暮らしに即した動きとしては、7地区の各地区で地域づくりとして開発ではなく、地

区の活性化を目指し、地域を見直すことを目的としている。

- ・これらは、総合計画内にできるもの、長期になるものもある。期間は平成12年～平成26年(15年間)。15年間のうち総合計画の骨は変わらないが、内部は5年の後に手直しを加えていく。

[山の現状等]

山の今

- ・後継者、搬入の問題がある。犬越路も通れない。森林組合も杉、檜よりも雑木林を重視するように変わってきている。
- ・神奈川県の中の県知事も地元の材を重要視するような話をしているが、具体性が薄い。
- ・山北駅前に建設予定の情報施設は、町内産の材を活用する予定。
- ・丹沢は急峻で手入れが難しい、水源林と材の活用。これらと比べると水源林に指定してもらおうほうが楽である。
- ・森林整備計画がある。公有林が多い。尾根沿いには県有林。若干低いところに民有林がある。ほとんどが私有林。財産区も少しある。森林整備計画は市町村単位。
- ・担当は産業観光課農林班。グリーンツーも産業観光課。

山の資源化および森林組合

- ・風車の話もあるが、なかなか実施段階にはいかない。
- ・材自体があまり出ていない。
- ・製材所は山北に一軒ある。地元材も扱っているはず。
- ・森林組合があり、森林組合で伐採したものは地元へ直接卸さず秦野市渋沢の県森連の貯木場へもっていく。
- ・森林組合の合併の話は全くない。理由としては、県の事業の公的管理の仕事がある。枝打ち、間伐が主。植林はしていない。山北には佐藤草木のような会社はない。山北は財産区、共有林の管理が多い。

森林体験・学習プログラム

- ・清水小学校で一度ある。中川小では実施されていない。
- ・山村留学に関しては交流の話はあるが実際に実施されてはいない。

[観光]

観光地およびイベント

- ・中川温泉：課題は、やる気のある無いにより旅館に差がでてきている。湯治客ではない。行楽客であり、秋に多い。日帰りの登山客などは町立の「ぶなの湯」がある。町の持っていた源泉を生かすために開設された。地元との料金のバランスをとりながらやっている。この場合の交通は、自家用車でくる場合もあるし、バスの場合もある。
- ・もみじ祭り：猪なべ、10人あたり1鍋。30年程度の歴史を持つ。中川地区バーベキューセンターにて開催。

広報

- ・ツアーは、旅館系ツアーと鉄道系ツアーが多い。
- ・町では戦略として行事的なものを宣伝している。
例)桜まつり、山開き、西丹沢の山開き、酒水の滝祭り

- ・登山客、キャンプ場の日帰りが増えている。

経済性

- ・直売所としては、「とれたて山ちゃん」：東山北駅近くの国道 246 号沿いに、町がつくり組合が運営。地元農家 30～40 名くらい参加。
- ・道の駅：直売所あり。清水地区振興会運営
- ・キャンプ客は、食料などはほとんどコンビニで購入してくる。以前は地元店もあったが売れないため店が少なくなった。無人販売所などは農業自体が少ないためない。
- ・ダムができる前から三保は農でなく林で生計を立てていた。山菜などは舞茸くらい。

観光客の動向

- ・年間の観光客数は各施設(旅館、キャンプ場、ビジターセンター)と観光行事の際の参加人数にて算出している。
- ・東京方面、横浜方面の人が多い。

行政側のネットワーク

- ・観光協会
- ・山荘キャンプ場連絡協議会
- ・これらは丹沢の山小屋の連絡協議会とは別組織。町独自。総会をおこない年次報告などをだす。観光協会の事務局は駅前。

ハイキングコースのネットワーク化構想

- ・麓としては大野山ハイキングコース、高松山ハイキングコース、不老山ハイキングコースがある。また、丹沢の奥には東海自然歩道がある。
- ・ネットワークとしてつなげるとすると一度下りないと無理。

その他

- ・駅前の商店街は 10 数年と協議して再開発はしないという話であったが、ジアック(水源開発)の協力もあり、今年度調査をおこない、来年度の実施計画化を目指している。
- ・今年度(16 年度)はバスの反転地交流センターというインフォメーションセンター的なものを地元材を使用してつくる計画がある。

[地域間交流および都市農村交流]

- ・観光等での近隣自治体の付き合いは丹沢関連自治体よりも酒匂川流域自治体の方が多い。津久井などとはトンネルを掘るという話もあるが付き合いが薄い。
- ・共和地区深沢集落：本屋の有隣堂が主導でそば打ち体験 春 2 回、秋 2 回の年 4 回おこなっている。現在は自主的に口コミを通して 15 人～20 人の参加がある。小学校の体験学習など蕎麦畑は結構ある。
- ・品川区と交流。ひだまりの里、一坪農園など。町民からの要請で始まった。

[集落環境]

- ・町内唯一の消滅集落として、大又集落：昭和 20 年代に消滅。営林署の関係で移転。その後移転先もダムで埋まり移転。
- ・箒沢の上には集落は元々なかった。
- ・里山を管理しながら昔の面影を残す地区は共和地区八丁。非常に小さい集落、1～2 世帯の集落の塊がちよくちよくとある。

[鳥獣被害]

- ・鹿を中心として時折猿がでる。多いのは三保、清水。山ビルはいない。

[交通等]

- ・御殿場から沼津間は本数が多いが、神奈川県側は本数が少ない。名物の鮎寿司弁当を復活させようと小田原市の企画課が動いている。

愛川町

1. 日時 2004年8月5日(木) 11:00～

2. 場所 愛川町役場

3. 参加者 愛川町：企画政策課、齋藤氏、中村氏 商工観光課、馬場氏、白井氏、高原氏

調査チーム：糸長 橋本 日暮 西村 関 濱口 鈴木

4. 丹沢大山総合調査趣旨説明(糸長)

(省略)

5. 協力依頼(糸長)

(省略) 窓口は企画政策課

6. ヒアリング内容

[行政側の対応窓口]

・丹沢大山総合調査実行委員会には環境課長の細野氏が出席している。今後の地域再生チームとの連絡の窓口を決めていただきたい。各市町村ともまずは、企画課にお願いしている。

企画が窓口となって、必要な部署へ連絡する。

・本調査の概要について：興味有

[愛川町の概要(人口、計画など)]

・愛川町について：中産間地域に入るかどうかという地域である。景観条例はない。半原が30年に合併し、今の形になった。半原は昔、絹繊維で発展したが、現在は南部の中津に人口の2/3が移った。工業団地があり外国人居住者、特にブラジル人が多い。地元の生活圏は厚木である。

[町としての丹沢への取り組み]

・企画サイドでは、愛川、秦野、伊勢原、厚木、清川の5つで広域行政連絡会をつくっている。昨年は登山道の道標をつくり、今年は、各市町村の花マップをつくる予定である。

・平成13年より水源地域交流事業を行なっている。ハードよりもソフトプログラム型である。

今回、丹沢版のプログラム開発を考えており、専門家もチームに入っている。県が考えている丹沢は上のほうだが、できるだけふもとの交流できないかと考えている。(糸長)

[観光について]

・愛川、秦野、伊勢原、松田、厚木、清川、山北で丹沢大山観光キャンペーン推進協議会をつくっている。

・入込数は年間100万人(清川の200万人とは別である)。これはカウントした数字である。ダム建設により入込数が一時下がった。ダム建設の前は、中津川渓谷でキャンプが多かった。平塚から神央バスの直行便もあった。関東邪馬溪に認知されていた。時々、渓谷はもうないの？と問い合わせの電話がある。今はレインボープラザに来る程度だ。

・パーベキューの河川の利用状況はプロットすればわかる。

・昨年は登山道の道標を作り、今年は各市町村の花マップを作る予定である。

[森林について]

- ・町で森林整備計画をたてている。
- ・里山の事業にも手をつけていこうとしている。PRだけでなく、先生の話のようなことも大切ととらえている。
- ・来年度は県の里山事業に指定される。5つのうち3つは決まっており、昨年から手をあげていた。八管山（はずげさん）地区で行なう。2年目は体制づくりにあてる。
- ・森林組合は、受託事業のみである。町からの助成で除間伐を行なっている。
- ・愛川産材を出して生計をたてている人はいない。
- ・以前に大きな雪害があり、5カ年かけて復旧した。20年ものの材などが折れた。
- ・財産区はないが、学校や組合が持っているところはある。学校林となっている所がある。
- ・集落有林は4つくらいに分かれている。

[農業について]

- ・一次産業が減っている。町は3400haであるが、そのうち890haが市街化区域だ。後継者が育たず、基盤整備してもやり手がいらない。特別な産物もない。
- ・遊休農地調査は行なっている。

[鳥獣被害について]

- ・山沿いに多い。被害については農政課の担当である。
- ・サルは3つのグループがあり、八管山のグループは三十数頭いる。厚木と行ったり来たりしている。人的被害がないと駆除できない。国、県へ要望をあげている。手段として電気柵があるが、周辺、10mは伐採する必要がある。
- ・シカが多い。シカ柵を林業組合で整備した。町や県でも補助を出している。ハイカーが柵を開けっ放しにすると効果がないが、重りで開閉するように改良されてきている。
- ・ヤマビルの被害はあまり聞いていないが、半原地域である。サルや人について移動する。農作業をしていて着くこともある。

[水、河川について]

- ・ダムは飲料水と洪水調整の目的でつくられたが、河川敷を見ると、アカシアなど樹木や雑草・ゴミの不法投棄など新しい問題が生じている。また、コケが乾いて白川になったり、河原の砂利が不足する問題もある。草ぼうぼうで、昔の河原のイメージがない。雑草の火事も心配だ。今は野焼きもできない。自然保護団体は草を刈ると野鳥が卵を産めないというが、どうなのかという思いだ。
- ・ダムをつくる時、田代までは水源地域にエリア指定してもらっている。
- ・平成13年より水源地域交流事業を行っている。現在はハード面よりソフトプログラムに力を入れている。

[水源環境税について]

- ・水源環境税は何に使えるかという感じである。
- ・県より水源環境にどのように関わっているかというアンケート調査が入っている。合併浄化槽の設置や、山の下刈りなどと回答している。今年は、水源環境税を具体にあてるのにどんな事業対象メニューがあるかという設問が増えている。
- ・7月27、28日に会合があり、県の水源担当課長から税制担当に話があった。（愛川町は欠席）

[環境教育について]

- ・ 県立愛川ふれあいの村には、子どもたちが7～800人訪れる。利用の上位は全部、横浜市などの他の市である。
- ・ 繊維会館で藍染めの体験ができる。

[地域の管理運営組織について]

- ・ 県立あいかわ公園に、つつじ祭り実行委員会がある。あいかわ公園は工芸村等は未完成であるが、平成18年にオープンの約束をしており、一昨年に仮オープンしている。
- ・ レインボープラザに、協議会がある。レインボープラザは交流の里づくり計画の「環境学習の里」として整備された。

[調査に向けて]

- ・ 石神社があるが、町に石切り屋はあるか？（日暮）
ない。八菅山は修験の山であり、八菅神社への行脚道がある。
- ・ この町は諏訪神社が多い。これは武田の関係でシカを食べる信仰がある。神社の調査資料がほしい。（日暮）
教育委員会の郷土史でまとめている。武田は、三増（みませ）で一大山岳戦をしている。

[その他]

- ・ 地元の生活圏は厚木である。
- ・ 河川沿いは本厚木からの車が多い。
- ・ 農業的でありながら、一方市場もある。都会でも山でもなくむずかしい地域と思う。（日暮）
- ・ 半原は絹繊維で発展した。200年の歴史があり、かつては撚糸（？）の全国シェアが80%であった。
- ・ 工業団地あり、外国人居住者多い。（ブラジル人3,000人、1,000人程度）

津久井町

1. 日時 2004年8月5日(木) 13:30~
2. 場所 津久井町役場
3. 参加者 津久井町：企画政策室、大熊氏、井上氏 環境課、内貴氏、矢口氏 産業経済課、榎田氏
調査チーム：糸長 橋本 日暮 西村 関 濱口 鈴木

4. 丹沢大山総合調査趣旨説明(糸長)

(省略)

5. 協力依頼(糸長)

(省略) 窓口は企画政策室

6. ヒアリング内容

[行政側の対応窓口]

- ・実行委員会には環境課長の曾根氏が出席している。今後の地域再生チームとの連絡の窓口を決めていただきたい。
企画が窓口となって、必要な部署へ連絡する。
- ・本調査の概要について：初めて聞いた。丹沢という意識があまりない。丹沢というより宮ヶ瀬周辺。

[津久井町の概要(人口、計画など)]

- ・ピークは3万400人?だったが、現在2万9千人に減っている。4年前がピークで、バブル後も伸びていたが、最近は長男でも町を出る。橋本に大規模な高層マンションが
出き、便利なので出ていく。青根で今年生まれた子どもは2人だけだ。
- ・小学校は7校、中学校は5校ある。中野小児童数は1300人から現在、800人に減っている。
- ・昭和30年に津久井湖ができた。水源地であるがゆえの制約があり、リサーチインテリ
ジェントパークや工業団地がつかれない。法人税もほとんどない。それゆえ、バブルの
影響もほとんどなかった。
- ・町の基本計画のダイジェスト版があるが、丹沢の話はあまりふれられていない。
- ・町として水源文化都市構想を掲げているが、実現する財源がない。もともと炭焼きと林
業の町で、観光には力を入れていなかった。
- ・合併により大きな都市になった上で新たな住まい方になる。中核市が水源を持つことで、
県内でも意見を持てる市になれる。経済力、財源を持って来られる。合併にかけている。
合併後、権利はそっくり引き継ぐかたちである。
- ・国定公園以外は都市計画区域だが、線引きされていない。
- ・地元の生活圏は相模原市である。

[町としての丹沢への取り組み]

- ・企画サイドでは丹沢への直接的政策はない。
- ・水源地域交流の里づくりで、青根に温泉施設の建設を進めている(温泉はでている)。今
までは道志川鮎まつり、名人匠の鮎釣り教室等、子どもやファミリーを対象とした取り
組みをしている。

[観光について]

- ・担当は商業経済課である。
- ・入込客数は減少傾向だったが、最近増えてきた。宮が瀬に観光施設ができたことが関係している。
- ・位置的に、多摩の方が近い。県民より都民が来る。
- ・丹沢の登山客の北の出入り口だが、それを対象にしたことはない。
- ・津久井町には、いちばん高い山があり、東海自然道も一番長いのだが(いかせていない)。
- ・シカが運ぶヤマビルのせいで、登山客が減った。
- ・バスを廃止したため、登山客が困っている。
- ・津久井町は、首都圏に近すぎて、日帰り観光が可能なため、宿泊施設がほとんどない。
- ・金を落とす施設がなく、観光センターも古い。観光への投資もない。
- ・キャンプ場の利用者数は維持している。去年は長雨の影響があって少なかった。キャンプ場はみな民間・組合であり、町営はない。オートキャンプ場はない？。
- ・避暑地でも避寒地でもないため、難しい。
- ・別荘として所有している人も何人かいる。
- ・ガラス工芸をやっている人がぼつぼつとはいる。
- ・長者舎は人は住んでいないが、泊まることはできる。
- ・丹沢観光センターはお金にならないため、撤退した。キャンプ場、宿泊施設、マス釣り場などがあった。
- ・青根は、リンゴ園もあり“緑の休暇村”事業を行なっている。
- ・郷土資料館は郡のもので、現在は倉庫化し、整理されていない。アユの魚ろう道具がある。
- ・三ヶ木(みかげ)は、関東の稲作の発祥地であり、また魚ろうがある。魚ろう道具は白山の観光センターにも展示がある。
- ・津久井城址は公園になっている。

[森林について]

- ・津久井郡林業組合があるが、管理というほど何かしているわけではない。津久井の木を切り出してはいない。
- ・6つの旧村で、財産区がある。
- ・藤野町の財産区が青根にある。
- ・山北方面へ行く神ノ川林道は、途中で通行止めになっている。危険なところがあるが、歩いていくことはできる。

[農業、市民農園について]

- ・市民農園は、遠くは横浜からの利用者がある。
- ・農業は高齢者はやっているが、若者は勤めに出ている。荒廃地調査はやっているが、地図があるかはわからない。

[鳥獣被害について]

- ・シカ、サル、イノシシ、ハクビシンなどの被害がある。
- ・サルは道志川を越して来ている。4つの群があり、鳥屋(とや)で40～50頭である。
- ・シカの駆除頭数は、県から町に割り当てられ、メスで20～25頭である。捕ったシカ

は新しければ生で食べる。知り合いから分けてもらう。駆除の他、11月中旬から2月の中旬までの猟の期間中、猟区で捕る。地元の人が案内役となる。入猟の料金をとっている。

- ・ヒルも最近里に下りてきている。

[水、河川について]

- ・道志川は津久井に入ってから水道取水している。
- ・ダムが2つあるがこれがガンとなっている。湧水が豊富だが、水道が整備されたのは、去年だ。青根が一番水源が豊富であり、いい水が流れている。傾斜地なので、流れがはやい。家の横を流れ、洗濯をしたり、スイカを冷やしたりしている。
- ・青野原は、山が少ないため、水が少ない。

[環境教育について]

- ・水道みちを使って、自転車で横浜までいく活動を子どもたちが行なっている。
- ・鳥屋中学校では、山に入り、枝打ちや下刈りを一緒にやっている。
- ・水源地域交流の里づくりでは、青根に温泉施設を建設中で、道志川鮎祭り、鮎釣り教室など、子供やファミリー向けにやっている

[地域の管理運営組織について]

- ・鳥居原ふれあいの家は、建物は町で整備したが、運営は地元である。

[自治組織について]

- ・62の自治会があり、13世帯から890世帯で構成される。

[調査に向けて]

- ・農地の荒廃地調査は行なっている。地図があるかは、わからない。
- ・大山阿利山が石切りの神様である関係で、石屋があるか調べている。

(日暮)

砂利屋さんはある。しかし、町域的には相模湖になる。

- ・シカを食べる信仰のある諏訪神社の分布を知りたい。(日暮)

神社、仏閣の調査は教育委員会で行なっている。青根に諏訪神社がある。

[その他]

- ・昔は炭焼きと林業の町だった。富士の方へ持って行っていった。
- ・60~70代は農林業に従事し、それ以外は勤めている。
- ・生活圏は相模原市。相模原市の事業所へ勤めている人が多い。
- ・鳥屋は、売り出されて地権者がバラバラになっている。
- ・町では町史の編さんをしているところである。

清川村

1. 日時 2004年8月3日(火) 13:00~14:30
2. 場所 清川村役場
3. 参加者 清川村役場：企画財政課副主幹折田氏、産業観光課伊藤氏
他3名
調査チーム：糸長 橋本 日暮 關 濱口 鈴木

4. 丹沢大山総合調査主旨説明(糸長)

(省略)

5. 協力依頼(糸長)

(省略)

6. 清川村について

[鳥獣被害]

・山ビル

山ビルの問題が一番深刻である。五年前からひどくなってきた。防除事業はあるが効果的なものはない。昔はヒル沢だけのものが広がってしまった。現在では全域に分布し、ヒルがでないところは湖だけである。住居地にも、家の中にまででる。

・シカ

シカ駆除後の活用方法はないか。今は廃棄している。制度の見直しが必要である。

[観光]

・継続し、いかに飽きのこない観光業をするかが問題となっている。

・宮ヶ瀬ダム

ダム完成がH12年12月。建設が注目されてきた。建設当時は全国規模で見学などに来ていた。建設の経過を見に来るリピーターがいた。国はダム完成後、3町村(清川村、津久井町、愛川町)にダムを任せた。村では駐車場を有料にしたりした。清川村の観光は通過型である。ダムの湖面管理は財団が行っている。流木をポットにしたり、展示をしたりしている。

・キャンプ場

キャンプ場は五カ所ほどある。中でも唐沢キャンプ場は大きい。村営では金沢キャンプ場があり、目の前に釣り場がある。キャンパーは厚木や愛川方面から訪れる。

・登山客

三峰、媒ヶ谷などから山に入る。ハイカーは仏果山から愛川にぬける。オーバーユースをいかに抑えながら人を山に入れるかが問題である。立ち入り禁止区域に湧水があり、それを求めて入って行ってしまふ。登山者などのモラルが重要である。

・観光客

H15年の観光客数2,376,000人(年間)、17,000人が宿泊客。宿泊はほとんどがキャンプ客。

夏休み、GW、紅葉シーズン、クリスマスに来る。クリスマスは山梨や八王子からも来

る。

- ・アクセス

車では、中央道でも東名高速からでも来れるので便利だが、バスや電車からのアクセスが乏しい。バリアフリーに対応していない。

- ・宮が瀬ビジターセンターとのつながりは？

あまりない。山へのガイドのニーズが村にあがったりはしない。山に住んでいた人にインストラクターを勤めてもらい、リピーターを作るという話は村の中でダムが出来るときにもちあがった。

[地域産業]

- ・やまなみグッズ

じかに関係するものはないが、三峰焼き（陶芸）（認定を受けている）、梅ワイン（季節限定で年間 3000 本程度しかつくれる）がある。これらをいかに飽きられずに続けられるか、定着できるかが問題点。企画開発は商工協会や観光課が行っている。

- ・労力

労力の都会への流出が問題となっている。

- ・さがみビールのようなレストラン開発は？

村としてはやっていないが個人趣向でログハウスがあったりする。道の駅のようなものを検討している。

- ・宮ヶ瀬交流館に歴史的なものがおいてある。

- ・提案として

丹沢達人リストを作ると面白いのでは？

[農業]

- ・有休農地のデータは？

ない。豚をやっている。現在はほとんど兼業である。鳥獣からの豚への被害はないが、豚の臭いで苦情が来た事がある。

- ・炭焼きについて

個人で行っている。今炭焼きのブームで多く炭焼き場は六ヶ所ほどある。木の種類はクヌギ、ナラ。

- ・水源のエネルギー利用は（チップ、ペレット）？

ない。なりわいの利用は県ではあるが、村ではない。組合でもコストがかかってできない。そのために間伐材はそのまま置いてくる。

- ・土づくりの戦略（農業的な）は？

ない。

- ・山の村外所有者（ha 数は少ない）が多い。

[国交省によるダムの水源地域活性化ビジョン報告書のその後]

- ・3 町村のイベントを開いている。ソフトの充実が求められる。推進協議会がある。進行台帳をもとに進めている。（5 年先、10 年先の進行）

[窓口]

企画財政課が行う。

(4) 各市町村における地域再生に関する特色ある事業 丹沢大山総合調査/地域再生調査 第2回市町村ワークショップ資料(補足版) 2004.12.10(内容については、現在、各市町村と調整中の部分があります)

| テーマ | 市町村名または組織名 | 番号 | 事業名等(どこの事業か) | 場所 | 内容 |
|----------------------------|--|-----------------------|--|---|--|
| A. 観光(ツーリズム)・ 環境教育学習 | 丹沢大山観光キャンペーン 推進協議会 (愛川、秦野、伊勢原、松 田、厚木、清川、山北) | | | | ポスターやパンフレットの作成、キャンペーンの実施 丹沢のプロモーションビデオの作成 ・新宿等で流している |
| | 広域行政連絡会 (愛川、秦野、伊勢原、厚 木、清川) | | | | 登山道の道標づくり 各市町村の花マップ(今年予定) |
| | 秦野市 | 秦-A1 | 丹沢まつり | 県立秦野戸川公園 市立西中学校他 | 秦野市の観光資源である丹沢を広く紹介するために実施 ・1.丹沢まつり(山開式、前夜祭)4月第3土・日 2.桜まつり 3.鶴巻温泉春まつり 4.ポッカ駅伝 |
| | | 秦-A2 | 「秋の神奈川再発見キャン ペーン」協賛事業 丹沢山麓「そば打ち体験と温泉 満喫ツアー」 (神奈川県、県観光協会、秦野市、 秦野市産経協会、交通事業者(小 田急、神奈中、湘南神奈交)、観 光関連事業者(小田急トラベル)) | 田原ふるさと公園 金井酒造 鶴巻温泉弘法の里湯 | 秋の神奈川キャンペーンツアー ・小田急、神奈中と組みツアー(ふるさと公園、鶴巻温泉など)を行なう予定 官民一体となり体験観光 ・秦野の特産である、そばを使った「そば打ち体験」や名水を活かした「醸造所見学」等、お手軽に利用できる秦野の魅力を体験 |
| | | 秦-A3 | ネイチャー発見隊 (秦野市) | 全域 | ネイチャー発見隊による生き物調査 ・市民が身近な生き物を知らべることにより、自然に対する関心を持ち、環境問題を考える機会をつくる |
| | | 秦-A4 | 生き物の里 (秦野市) | 柳川字星屋 | 「生き物の里」の指定 ・希少なまたは貴重な生き物が生息し、または生息している水辺地等を保護するため、その土地の所有者等の同意を得て、生き物の里として指定す る |
| | 厚木市 | 厚-A1 | 自然学習拠点整備による 再生計画(厚木市) | 七沢 | ロープウェイの建設 ・お年寄りや障害者の方が山頂までのぼれるように |
| | | 厚-A2 | (仮称)七沢ふるさと 食文化村構想基本計画 | 七沢 | 食文化村構想(七沢) ・温泉があるが観光客が少なくなったので、呼び込みのため |
| | | 厚-C1 と重複 | 厚木市) | | |
| | | 厚-A3 | 七沢自然教室(厚木市) | 七沢 | 七沢自然教室 ・市営の自然学習教室(屋外) |
| | 厚-A4 | 厚木市エコ・レクの里構想 (厚木市) | 飯山・東丹沢温泉郷 および飯山、 七沢地区とその周辺 | 自然観察や歴史を学ぶ滞在型の観光としての「エコツーリズム」 気軽に余暇を利用し心にうおいやすらぎをあたえる「観光、レクリエーション」 | |
| | 伊勢原市 | 伊-A1 | 「ワークショップ形式による公 園の計画づくり」 (主体は神奈川県) | | ワークショップ形式による公園の計画づくり ・西部の県立公園の計画を自然公園的な計画に |
| | | 伊-A2 | そばづくり農業体験事業 (伊勢原市) | | 荒廃した農地を利用して、そばづくりの農業体験・そば打ち体験を実施 |
| | 松田町 | 松-A1 | 自然館事業 (松田町) | 西平畑公園 | 主として小学生を対象とした環境教育事業 ・通年実施 |
| | | 松-A2 | 市町村交流事業 (松田町) | | 港区、千葉県光町との交流事業 ・まつりにおける地場産品の出品・販売 |
| | | 松-A3 | 花木植栽事業 (松田町) | 寄地区 | 中津川周辺等における桜の植栽事業 |
| | 松田町 (寄自然休養村 「ホタルを育てる会」) | 松-A4 | 寄自然休養村 「ホタルを育てる会」 (寄自然休養村 「ホタルを育てる会」) | 寄地区「中津川周辺」 | 「ホタルの夕べ」開催、河川清掃、水質検査活動等 |
| | 山北町 | 山-A1 | | | そば打ち体験 ・本屋の有隣堂が主導で年4回実施。 |
| | | 山-A2 | | | 品川区と交流 ・ひだまりの里、一坪農園など。町民からの要請ではじまった。 |
| | | 山-A3 | | 山北町駅前商店街 | 駅前商店街の再開発 ・来年度、実施計画化 |

| テーマ | 市町村名または組織名 | 番号 | 事業名等(どこの事業か) | 場所 | 内容 |
|---------------------------|------------------------------|------|-----------------------------------|---------------------|--|
| A 観光(ツーリズム)・ 環境教育学習 | 愛川町 (* 水源地域交流の里づくり推進協議会) | 愛-A1 | 水源地域交流の里づくり (神奈川県) | レインボープラザ | 「半原系の里」 ・交流の里づくり事業「半原系の里文化祭」を開催し系のまち半原を紹介。レインボープラザでは、藍染め、手織り、手すき和紙づくりを体験できる。 |
| | | 愛-A2 | | 県立あいかわ公園 | 「環境学習の里」 ・交流の里づくり事業「あいかわ公園つつじ祭り」を開催し地域と都市との交流を図る。 |
| | 清川村 (* 水源地域交流の里づくり推進協議会) | 清-A1 | 水源地域交流の里づくり (神奈川県) | 宮ヶ瀬 | |
| | 津久井町 | 津-A1 | サイクリングツアー (津久井町、生涯学習課) | 津久井 - 横浜間 水道みち | 日本の近代水道の発祥の地である横浜水道の水道みちを辿って横浜往復をするサイクリングツアー。道志川の清流が支えた横浜港の発展、当時の人々の意気を体験を通して学ぶ。 |
| | | 津-A2 | 水源地域交流の里づくり (神奈川県、町産業経済課) | 青根 | 青根地区活性化拠点交流施設(青根温泉施設)建設中 上下流自治体間交流事業 横須賀市民との交流の促進 陶芸教室など |
| | | 津-A3 | 中道志川トラスト運動 (中道志川トラスト協会、環境課) | 道志川 (拠点: 道志川の家) | 水源の川、鼻曲がりアユの伝承の残る川のよみがえりを図る。地域の人たちで協会を組織。稚アユ放流、河川美化、川とのふれあいのイベント企画。 |
| | | 津-A4 | 東海・首都圏自然歩道管理委託事業 (津久井町、産業経済課) | 町内自然歩道 | 巡視、草刈業務の実施 |
| | | 津-A5 | 津久井湖さくらまつり事業 (観光協会、産業経済課) | 町立津久井湖城山公園 | 城山・津久井両町の観光協会が合同で実施。 花火の打ち上げ、ステージイベント、特産物展、フリーマーケットなど |

市町村ヒアリングで伺った内容

丹沢大山総合調査の中で情報収集された内容

各市町村より新たに教えていただいた内容

* 水源地域交流の里づくり推進協議会(清川、愛川、津久井、山北、相模湖、藤野、城山) 事務局: 神奈川県企画部土地水資源対策課

| テーマ | 市町村名または組織名 | 番号 | 事業名等(どこの事業か) | 場所 | 内容 |
|---------------------------|------------|------|---------------------------|------------|--|
| B. なりわい (循環型森林資源活用) | 秦野市 | 秦-B1 | 里地里山保全再生モデル地域事業(環境省自然環境局) | 秦野市等 | 環境省では平成16年度から新たに「里地里山保全再生モデル事業調査」を開始することとし、モデル事業実施地域として4地域を選定しその一つが「秦野市等」です。平成16、17年度に地域戦略の策定、試行的に実施、平成18年度から本格実施となります。 |
| | | 秦-B2 | 里山推進モデル事業(神奈川県) | 秦野市名古木地区 | 農家、地域住民及び都市住民など幅広い県民と神奈川県や市町村との協働により里山を保全し「農」「林」の再生や地域の活性化を図る。この為、平成16年度から里山保全推進事業を3年間実施、平成17年度から里山支援モデル事業を2年間実施する。 |
| | | 秦-B3 | 照葉樹の森づくり事業(秦野市) | | 「照葉樹の森」の復活と拡大 ・市民参加による照葉樹の植栽を行い、照葉樹林の復活と拡大を図る 丹沢山地の緑の保全と再生は様々な恩恵を受けている私たちの重要な使命であります。照葉樹の森づくり事業はその一端を担うものとして、今後も深緑の森の復活と拡大を目指し、市民、事業者、行政の協働により展開します。 |
| | 厚木市 | 厚-B1 | 里山マルチライブプラン事業(厚木市) | 荻野、七沢 | 棚田の保全、里山の復活 ・棚田の保全、里山の復活に向け実験的に実施(紅葉をうえるなど) 里山と人との関わりを再構築し、より豊かな自然環境を保全 ・地域並びに一般市民から環境ボランティアを募集し、里山文化を体験しながら、自然環境保全活動の高揚を図る |
| | | 厚-B2 | 里山保全推進事業(厚木市) | 七沢 | 自然とのふれあいができる環境学習の場や機会を提供 ・自然の仕組みや自然との関わり方を理解し環境保全に対する関心を高める(炭焼き体験) |
| | 伊勢原市 | 伊-B1 | 市民活動林整備事業(伊勢原市) | 高森 | ボーイスカウトによる里山保全 |
| | 山北町 | 山-B1 | 中山間整備事業(農林水産省補助事業) | | 国の中山間整備事業(里山づくり) ・標高300m程度のところで、いろいろな植林をして自然を保つ |
| | | 山-B2 | | 三保地区(丹沢湖畔) | 森林ボランティア ・森林の持つ大切な役割を知ってもらおうと、間伐・枝打ち当の林業作業を行うボランティアを募集 |
| | | 山-B3 | | | 町内産の材の活用 ・山北町駅前に建設予定の情報施設に活用予定 |
| | 愛川町 | 愛-B1 | 里山保全推進事業(神奈川県) | 八菅山地区 | 県の里山保全推進事業(八菅山地区) ・来年度に指定、再来年度、里山支援モデル事業 |
| | 津久井町 | 津-B1 | 水源の森林づくり事業(神奈川県、町産業経済課) | 水源の森林エリア | 県の水源の森林づくり事業(協力協約事業) 森林所有者自らが行う森林整備に対し支援を行う。 |

市町村ヒアリングで伺った内容

丹沢大山総合調査の中で情報収集された内容

各市町村より新たに教えていただいた内容

| テーマ | 市町村名または組織名 | 番号 | 事業名等(どこの事業か) | 場所 | 内容 |
|-------------------------|---------------------|---------------------|-----------------------------------|-------------|--|
| C. 暮らし (歴史・生活・文化) | 秦野市 | 秦-C1 | 地下水汚染対策 (秦野市) | 全域 | 15年かけて名水百選「秦野盆地湧水群」の復活(平成16年1月1日弘法の清水にて復活宣言) 「秦野市地下水汚染の防止及び浄化に関する条例」を施行 |
| | | 秦-C2 | 荒廃・遊休農地解消対策事業 (秦野市) | | 荒廃・遊休農地を耕作地へ戻す、農地整備後は活用する ・企業の厚生グループなどの参画により耕作地へ戻し、農地整備後は、農家による作付けや、体験農園開設などを行う |
| | | 秦-C3 | アグリサポート(援農制度)事業 (秦野市) | | 農業の新たな担い手を求めて ・援農を希望する市民に農作業の体験研修を行い、農家のニーズに応じた援農の実施によって、労働力の確保を図り、市民の理解を深める |
| | | 秦-C4 | 秦野市地下水総合保全管理計画 (秦野市) | | 健全で持続可能な水循環の創造 ・地下水保全に向けた諸施策の方向性を示す計画 |
| | 厚木市 | 厚-C1 | (仮称)七沢ふるさと 食文化村構想基本計画 (厚木市) | 七沢 | 食文化村構想(七沢) ・鳥獣被害大のため、どのような作物を生産、加工していけるか、東農大の協力で実験的に生産 |
| | | 厚-A2 と重複 厚-C2 | 自立経営農家育成資金 (厚木市) | 市内全域 | 自立経営農家育成のための融資 ・農業経営に必要な資金を低利で融資し、農業経営の安定と向上、農業の振興を図る |
| | 伊勢原市 | 伊-C1 | 谷戸田保全整備事業/谷戸田オーナー制度 (伊勢原市) | 日向・小易 | 荒廃した谷戸田を復元整備して市民の農業体験の場として活用し、原風景の保全を図る ・谷戸田で、「オーナー」としてお米づくりを体験 |
| | | 伊-C2 | みかんの木オーナー制度 (伊勢原市) | 比々多地区 | みかんの木のオーナー(契約者)となり、収穫を楽しむシステム ・収穫までの管理は園主が行う |
| | | 伊-C3 | 地場産野菜料理コンテスト (伊勢原市) | | 「地産地消」を推進し、「健康いせはら21計画」の「野菜を1日350g以上食べる」を実践するために実施 |
| | | 伊-C4 | 歴史解説アドバイザー養成事業 (伊勢原市) | | 伊勢原の文化財に精通した「語り部」的な役割を担うアドバイザーを養成 |
| | | 伊-C5 | 歴史文化財散策コースの整備 (伊勢原市) | | 市内に分布する歴史文化遺産や地域資源を活用した散策コースの設定に向けて、現地調査・解説案内板等の整備を実施予定 |
| | 松田町 (オーナー組合) | 松-C1 | みかんの木オーナー制度 () | | みかんの木のオーナーを募り、収穫を楽しむシステム |
| | 松田町 (寄自然休養村養魚組合) | 松-C2 | 寄自然休養村養魚組合 | 寄地区 | ますの養殖事業 |
| | 山北町 | | | 全域 | 山北町土地利用に関する基本条例 ・5つのゾーニングに分けておこなっている |
| | | | | 全域 | 地域住民による地域づくり ・地域が自主的に自立できるよう、開発ではなく地域活性化を目指し、7地区で住民の組織をつくり、地域づくりをしている |
| | | 山-C1 | | 高松地区 | 地域に合わせた畜産団地整備 ・高松地区で、地域に合う考え方で整備 |
| | 愛川町 | 愛-C1 | 愛川町自治基本条例 (愛川町) | | 自治運営の基本原則を定め、町民参加と情報共有を基本にしながら、町民・議会・町(役場)三者の協働を深めることにより、愛川町のよさを活かした自治を確立する。町民参加の理念や具体的な制度、町政運営の基本的事項などを定めている。 |
| | | 愛-C2 | 有害鳥獣対策用備品購入費補助金(愛川町) | | サル追い払い用電動エアガン購入費の1/2(限度額18000円)を補助する。H16予算額=90000円 |
| | 津久井町 | 津-C1 | グリーンカレッジつくい (津久井町、生涯学習課) | 生涯学習センター他 | 地域の歴史、文化、自然環境について理解を深めていく機会として専門家による講座を開催 (植生、水質、丹沢のシカ、丹沢衝突、古文書、通史、後北条と内藤氏、葉草等) |
| | | 津-C2 | 「遥かな友に」道志川合唱祭 (津久井町、生涯学習課) | 青根緑の休暇村センター | 道志川夫婦園キャンプ場での合宿中に生まれた名曲「遥かな友に」を記念して川畔で開催する野外合唱祭、合唱館があり、キャンプをしながらの練習・参加も可能 |
| | | 津-C3 | アウトドアスポーツ津久井(津久井町、生涯学習センター) | 町内各地 | 地域の特色を活かしたアウトドアイベントを展開。道志川ラフティング、宮ヶ瀬湖カヌー、道志渓谷バードウォッチング他 |
| | | 津-C4 | 宮ヶ瀬マラソン(津久井町、生涯学習課) | 宮ヶ瀬湖北岸道路 | 宮ヶ瀬湖北岸道路を利用して10k、5kなどのコースを設けた町民マラソン大会。宮ヶ瀬湖の自然と空気を思い切り味わう。今年度よりコース変更。 |
| | | 津-C5 | 道志川まとまり隊 (津久井町、生涯学習課) | 道志川の家 | 道志川畔にある道志川の家、一週間宿泊して学校に通う宿泊通学事業。道志川の自然環境を体感するプログラムを中心にして家庭とは違った生活の体験をして郷土への理解を深める。 |
| | | 津-C6 | わくわく冒険隊 (中野三井地区育成会) | 中野 | 里山である中野山に道標を立て、ハイキング道を整備して、現代的な社会環境の中での里山活性化を模索。 |

| | | | | | |
|--|--|------|------------------------------|------------|-------------------------------------|
| | | 津-C7 | 町史編さん事業 (津久井町、企画政策室) | 津久井町内 | 身近な生き物調査 |
| | | 津-C8 | 二口一ネ・里山交流の集い (津久井町、産業経済課) | 東京農工大津久井農場 | 自然体験教室、交流会 |
| | | 津-C9 | 有害鳥獣対策 (津久井町、産業経済課) | 津久井町内 | 有害鳥獣(サル、シカ、イノシシ)の捕獲、追払いの実施、電気柵設置の実施 |

市町村ヒアリングで伺った内容

丹沢大山総合調査の中で情報収集された内容

各市町村より新たに教えていただいた内容

(5) 市町村の開発計画概要

丹沢大山における地域再生に関する事業リスト

丹沢大山総合調査/地域再生調査チーム

| 市町村名または組織名 | 事業名等(どこの事業か) | 場所 | 内容 | 整理番号 |
|------------|--|-------------------------------|--|------|
| 秦野市 | 丹沢まつり | 県立秦野戸川公園 市立西中学校他 | 秦野市の観光資源である丹沢を広く紹介するために実施 ・1.丹沢まつり(山開式、前夜祭)4月第3土・日 2.桜まつり 3.鶴巻温泉春まつり 4.ボッカ駅伝 | 秦-A1 |
| | 「秋の神奈川再発見キャンペーン」協賛事業 丹沢山麓「そば打ち体験と温泉満喫ツアー」 (神奈川県、県観光協会、秦野市、秦野市産経協会、交通事業者(小田急、神奈中、湘南神奈交)、観光関連事業者(小田急トラベル)) | 田原ふるさと公園 金井酒造 鶴巻温泉弘法の里湯 | 秋の神奈川キャンペーンツアー ・小田急、神奈中と組みツアー(ふるさと公園、鶴巻温泉など)を行なう予定 官民一体となり体験観光 ・秦野の特産である、そばを使った「そば打ち体験」や名水を活かした「醸造所見学」等、お手軽に利用できる秦野の魅力を体験 | 秦-A2 |
| | ネイチャー発見隊 (秦野市) | 全域 | ネイチャー発見隊による生き物調査 ・市民が身近な生き物を知らべることにより、自然に対する関心を持ち、環境問題を考える機会をつくる | 秦-A3 |
| | 生き物の里 (秦野市) | 柳川字星屋 | 「生き物の里」の指定 ・希少なまたは貴重な生き物が生息し、または生息している水辺地等を保護するため、その土地の所有者等の同意を得て、生き物の里として指定する | 秦-A4 |
| | 里地里山保全再生モデル地域事業 (環境省自然環境局) | 秦野市等 | 環境省では平成16年度から新たに「里地里山保全再生モデル事業調査」を開始することとし、モデル事業実施地域として4地域を選定しその中の一つが「秦野市等」です。平成16、17年度に地域戦略の策定、試行的に実施、平成18年度から本格実施となります。 | 秦-B1 |
| | 里山づくり推進事業 (神奈川県) | 秦野市名古木地区 | 農家、地域住民及び都市住民など幅広い県民と神奈川県や市町村との協働により里山を保全し「農」「林」の再生や地域の活性化を図る。この為、平成16年度から里山保全推進事業を3年間実施、平成17年度から里山支援モデル事業を2年間実施する。 | 秦-B2 |
| | 照葉樹の森づくり事業 (秦野市) | | 「照葉樹の森」の復活と拡大 ・市民参加による照葉樹の植栽を行い、照葉樹林の復活と拡大を図る 丹沢山地の緑の保全と再生は様々な恩恵を受けている私たちの重要な使命であります。照葉樹の森づくり事業はその一端を担うものとして、今後も深緑の森の復活と拡大を目指し、市民、事業者、行政の協働により展開します。 | 秦-B3 |
| | 地下水汚染対策 (秦野市) | 全域 | 15年かけて名水百選「秦野盆地湧水群」の復活(平成16年1月1日弘法の清水にて復活宣言) 「秦野市地下水汚染の防止及び浄化に関する条例」を施行 | 秦-C1 |
| | 荒廃・遊休農地解消対策事業 (秦野市) | | 荒廃・遊休農地を耕作地へ戻す、農地整備後は活用する ・企業の厚生グループなどの参画により耕作地へ戻し、農地整備後は、農家による作付けや、体験農園開設などを行う | 秦-C2 |
| | アグリサポート(援農制度)事業 (秦野市) | | 農業の新たな担い手を求めて ・援農を希望する市民に農作業の体験研修を行い、農家のニーズに応じた援農の実施によって、労働力の確保を図り、市民の理解を深める | 秦-C3 |
| | 秦野市地下水総合保全管理計画 (秦野市) | | 健全で持続可能な水循環の創造 ・地下水保全に向けた諸施策の方向性を示す計画 | 秦-C4 |
| | 里山ふれあいの森事業の推進 (秦野市) | | 里山林の整備 | 秦-B4 |
| | 私有林の公的管理・支援 (神奈川県、秦野市) | | 水源林の確保・整備 | 秦-B5 |
| | 観光農業の推進 (秦野市) | | 計画策定、観光農業施設整備 | 秦-C5 |

□ ... 「第2回市町村ワークショップ」の開催にあたり、「地域再生に関する特色ある事業」として、事前に各自治体に情報提供や確認をしていただいた事業

■ ... 「神奈川力構想・地域計画」(神奈川県・平成16年12月)に掲載されている事業のうち、□ 以外の事業

| 市町村名または組織名 | 事業名等（どこの事業か） | 場所 | 内容 | 番号 |
|------------|---|------------------------------|--|--------------|
| 厚木市 | 自然学習拠点整備による再生計画（厚木市） | 七沢 | ロープウェイの建設 ・お年寄りや障害者の方が山頂までのぼれるように | 厚-A1 |
| | （仮称）七沢ふるさと食文化村構想基本計画（厚木市） | 七沢 | 食文化村構想（七沢） ・温泉があるが観光客が少なくなったので、呼び込みのため | 厚-A2 厚-C1 |
| | 七沢自然教室（厚木市） | 七沢 | 七沢自然教室 ・市営の自然学習教室（屋外） | 厚-A3 |
| | 厚木市エコ・レクの里構想（厚木市） | 飯山・東丹沢温泉郷 および飯山、七沢地区とその周辺 | 自然観察や歴史を学ぶ滞在型の観光としての「エコツーリズム」 気軽に余暇を利用し心にするおいややすらぎをあたえる「観光、レクリエーション」 | 厚-A4 |
| | 里山マルチライブプラン事業（厚木市） | 荻野、七沢 | 棚田の保全、里山の復活 ・棚田の保全、里山の復活に向け実験的に実施（紅葉をうえるなど） 里山と人との関わりを再構築し、より豊かな自然環境を保全 ・地域並びに一般市民から環境ボランティアを募集し、里山文化を体験しながら、自然環境保全活動の高揚を図る | 厚-B1 |
| | 里山保全推進事業（厚木市） | 七沢 | 自然とのふれあいができる環境学習の場や機会を提供 ・自然の仕組みや自然との関わり方を理解し環境保全に対する関心を高める（炭焼き体験） | 厚-B2 |
| | 自立経営農家育成資金（厚木市） | 市内全域 | 自立経営農家育成のための融資 ・農業経営に必要な資金を低利で融資し、農業経営の安定と向上、農業の振興を図る | 厚-C2 |
| | 自然豊かで安全な水辺作りの推進 ・（仮称）中津川リジョン・パーク計画の推進（厚木市） | | 環境調査、実施設計、整備 | 厚-A5 |
| | 里山づくりの推進 ・七沢地区里山づくり（神奈川県、厚木市） | | 推進体制の整備等、保全活動の実践等 | 厚-B3 |

... 「第2回市町村ワークショップ」の開催にあたり、「地域再生に関する特色ある事業」として、事前に各自治体に情報提供や確認をしていただいた事業

... 「神奈川力構想・地域計画」（神奈川県・平成16年12月）に掲載されている事業のうち、 以外の事業

| 市町村名または組織名 | 事業名等（どこの事業か） | 場所 | 内容 | 番号 |
|------------|-------------------------------------|-------|--|------|
| 伊勢原市 | 「ワークショップ形式による公園の計画づくり」 （主体は神奈川県） | | ワークショップ形式による公園の計画づくり ・西部の県立公園の計画を自然公園的な計画に | 伊-A1 |
| | そばづくり農業体験事業 （伊勢原市） | | 荒廃した農地を利用して、そばづくりの農業体験・そば打ち体験を実施 | 伊-A2 |
| | 市民活動林整備事業 （伊勢原市） | 高森 | ボーイスカウトによる里山保全 | 伊-B1 |
| | 谷戸田保全整備事業/谷戸田オーナー制度 （伊勢原市） | 日向・小易 | 荒廃した谷戸田を復元整備して市民の農業体験の場として活用し、原風景の保全を図る ・谷戸田で、「オーナー」としてお米づくりを体験 | 伊-C1 |
| | みかんの木オーナー制度 （伊勢原市） | 比々多地区 | みかんの木のオーナー（契約者）となり、収穫を楽しむシステム ・収穫までの管理は園主が行う | 伊-C2 |
| | 地場産野菜料理コンテスト （伊勢原市） | | 「地産地消」を推進し、「健康いせはら 21 計画」の「野菜を 1 日 350 g 以上食べる」を実践するために実施 | 伊-C3 |
| | 歴史解説アドバイザー養成事業 （伊勢原市） | | 伊勢原の文化財に精通した「語り部」的な役割を担うアドバイザーを養成 | 伊-C4 |
| | 歴史文化財散策コースの整備 （伊勢原市） | | 市内に分布する歴史文化遺産や地域資源を活用した散策コースの設定に向けて、現地調査・解説案内板等の整備を実施予定 | 伊-C5 |
| | 私有林の公的管理・支援 （神奈川県、伊勢原市） | | 水源林の確保・整備 | 伊-B2 |

... 「第 2 回市町村ワークショップ」の開催にあたり、「地域再生に関する特色ある事業」として、事前に各自治体に情報提供や確認をしていただいた事業

... 「神奈川力構想・地域計画」(神奈川県・平成 16 年 12 月)に掲載されている事業のうち、 以外の事業

| 市町村名または組織名 | 事業名等（どこの事業か） | 場所 | 内容 | 整理番号 |
|------------|--|------------|--------------------------------------|------|
| 松田町 | 自然館事業 （松田町） | 西平畑公園 | 主として小学生を対象とした環境教育事業 ・通年実施 | 松-A1 |
| | 市町村交流事業 （松田町） | | 港区、千葉県光町との交流事業 ・まつりにおける地場産品の出品・販売 | 松-A2 |
| | 花木植栽事業 （松田町） | 寄地区 | 中津川周辺等における桜の植栽事業 | 松-A3 |
| | 寄自然休養村 「ホタルを育てる会」 （寄自然休養村 「ホタルを育てる会」） | 寄地区「中津川周辺」 | 「ホタルの夕べ」開催、河川清掃、水質検査活動等 | 松-A4 |
| | みかんの木オーナー制度 | | みかんの木のオーナーを募り、収穫を楽しむシステム | 松-C1 |
| | 寄自然休養村養魚組合 | 寄地区 | ますの養殖事業 | 松-C2 |
| | 花と水の交流圏の観光・交流スポットなどの整備 ・西平畑公園（松田町） ・中津川周辺（松田町） | | 西平畑公園（進入路改良） 中津川周辺（花木植栽等） | 松-A5 |
| | 川音川親水公園の整備（松田町） | | 関係機関との調整、基本設計、実施設計、整備 | 松-A6 |
| | 私有林の公的管理・支援 （神奈川県、松田町） | | 水源林の確保・整備 | 松-B1 |
| | 寄地区生活排水処理施設計画の推進（松田町） | | 調査検討、関係機関との調整、全体計画見直し・事業認可 | 松-C3 |

□ ... 「第2回市町村ワークショップ」の開催にあたり、「地域再生に関する特色ある事業」として、事前に各自治体に情報提供や確認をいただいた事業

■ ... 「神奈川力構想・地域計画」(神奈川県・平成16年12月)に掲載されている事業のうち、□ 以外の事業

| 市町村名または組織名 | 事業名等（どこの事業か） | 場所 | 内容 | 番号 |
|---------------------------|--|----------------------------|--|------|
| 山北町 | | | そば打ち体験 ・本屋の有隣堂が主導で年4回実施。 | 山-A1 |
| | | | 品川区と交流 ・ひだまりの里、一坪農園など。町民からの要請ではじまった。 | 山-A2 |
| | | 山北町駅前商店街 | 駅前商店街の再開発 ・来年度、実施計画化 | 山-A3 |
| | 中山間整備事業 (農林水産省補助事業) | | 国の中山間整備事業(里山づくり) ・標高300m程度のところで、いろいろな植林をして自然を保つ | 山-B1 |
| | | 三保地区(丹沢湖畔) | 森林ボランティア ・森林の持つ大切な役割を知ってもらおうと、間伐・枝打ち等の林業作業を行うボランティアを募集 | 山-B2 |
| | 県産木造公共施設の整備 (山北町) | | 町内産の材の活用 ・山北町駅前に建設予定の情報施設に活用予定 施設整備 | 山-B3 |
| | 高松地区整備計画の推進 (山北町) | 高松地区 | 地域に合わせた畜産団地整備 ・高松地区で、地域に合う考え方で整備 | 山-C1 |
| | | 全域 | 山北町土地利用に関する基本条例 ・5つのゾーニングに分けておこなっている | 山-C2 |
| | | 全域 | 地域住民による地域づくり ・地域が自主的に自立できるよう、開発ではなく地域活性化を目指し、7地区で住民の組織をつくり、地域づくりをしている | 山-C3 |
| | 花と水の交流圏の観光・交流スポットなどの整備 ・歴史と自然にふれあう公園 (山北町) | | 歴史と自然にふれあう公園など(河村城址散策道整備)、大野山・桜の里づくり(散策路・植栽・東屋の整備) | 山-A4 |
| | 山北つぶらの歳時記の杜整備 ・山北町ふるさと館(山北町) | | 実施設計 | 山-A5 |
| | 水源地域交流基盤の整備 (山北町) | | ふれあい交流広場整備、中川温泉・森林と清流の広場などの整備 | 山-A6 |
| | 河村城址歴史公園の整備 (山北町) | | 整備計画策定、史跡整備、公園整備 | 山-A7 |
| | 私有林の公的管理・支援 (山北町) | | 水源林の確保・整備 | 山-B4 |
| | 岸地区中山間地域総合整備事業の推進(山北町) | | 実施設計、事業実施 | 山-C4 |
| 清水・三保地区生活排水処理施設計画の推進(山北町) | | 調査検討、関係機関との調整、全体計画見直し・事業認可 | 山-C5 | |

...「第2回市町村ワークショップ」の開催にあたり、「地域再生に関する特色ある事業」として、事前に各自治体に情報提供や確認をしていただいた事業

...「神奈川力構想・地域計画」(神奈川県・平成16年12月)に掲載されている事業のうち、 以外の事業

| 市町村名または組織名 | 事業名等（どこの事業か） | 場所 | 内容 | 番号 |
|------------|---|----------|--|------|
| 愛川町 | 水源地域交流の里づくり （神奈川県、水源地域交流の里づくり推進協議会） | レインボープラザ | 「半原系の里」 ・交流の里づくり事業「半原系の里文化祭」を開催し糸のまち半原を紹介。レインボープラザでは、藍染め、手織り、手すき和紙づくりを体験できる。 | 愛-A1 |
| | | 県立あいかわ公園 | 「環境学習の里」 ・交流の里づくり事業「あいかわ公園つつじ祭り」を開催し地域と都市との交流を図る。 | 愛-A2 |
| | 里山保全推進事業 （神奈川県） | 八菅山地区 | 県の里山保全推進事業（八菅山地区） ・来年度に指定、再来年度、里山支援モデル事業 | 愛-B1 |
| | 愛川町自治基本条例 （愛川町） | | 自治運営の基本原則を定め、町民参加と情報共有を基本にしながら、町民・議会・町(役場)三者の協働を深めることにより、愛川町のよさを活かした自治を確立する。町民参加の理念や具体的な制度、町政運営の基本的事項などを定めている。 | 愛-C1 |
| | 有害鳥獣対策用備品購入費補助金 （愛川町） | | サル追い払い用電動エアガン購入費の1/2（限度額18000円）を補助する。H16 予算額 = 90000円 | 愛-C2 |
| | 水源地域上下流間交流の促進 （神奈川県、愛川町） | | 交流事業の実施 | 愛-A3 |
| | 自然豊かで安全な水辺づくりの推進 ・中津川リバーリフレッシュ構想の推進（愛川町） | | 関係機関協議・計画策定 | 愛-A4 |

... 「第2回市町村ワークショップ」の開催にあたり、「地域再生に関する特色ある事業」として、事前に各自治体に情報提供や確認をしていただいた事業

... 「神奈川力構想・地域計画」(神奈川県・平成16年12月)に掲載されている事業のうち、 以外の事業

| 市町村名または組織名 | 事業名等（どこの事業か） | 場所 | 内容 | 番号 |
|------------|--|-----|--|------|
| 清川村 | 水源地域交流の里づくり （神奈川県、水源地域交流の里づくり推進協議会） | 宮ヶ瀬 | 水源地域交流の里づくり ・水源地域自然体験交流イベント「森といっしょに！」体験教室 | 清-A1 |
| | 水源地域上下流間交流の促進 | | 交流事業の実施 | 清-A2 |

... 「第2回市町村ワークショップ」の開催にあたり、「地域再生に関する特色ある事業」として、事前に各自治体に情報提供や確認をいただいた事業

... 「神奈川力構想・地域計画」(神奈川県・平成16年12月)に掲載されている事業のうち、 以外の事業

| 市町村名または組織名 | 事業名等（どこの事業か） | 場所 | 内容 | 番号 |
|------------|--|-------------------|---|------|
| 津久井町 | サイクリングツアー （津久井町、生涯学習課） | 津久井 - 横浜間 水道みち | 日本の近代水道の発祥の地である横浜水道の水道みちを辿って横浜往復をするサイクリングツアー。道志川の清流が支えた横浜港の発展、当時の人々の意気を体験を通して学ぶ。 | 津-A1 |
| | 水源地域交流の里づくり （神奈川県、町産業経済課） | 青根 | 青根地区活性化拠点交流施設（青根温泉施設）建設中 上下流自治体間交流事業 横須賀市民との交流の促進 陶芸教室など | 津-A2 |
| | 中道志川トラスト運動 （中道志川トラスト協会、環境課） | 道志川 （拠点：道志川の家） | 水源の川、鼻曲がりアユの伝承の残る川のおよみがえりを図る。地域の人たちで協会を組織。稚アユ放流、河川美化、川とのふれあいのイベント企画。 | 津-A3 |
| | 東海・首都圏自然歩道管理委託事業 （津久井町、産業経済課） | 町内自然歩道 | 巡視、草刈業務の実施 | 津-A4 |
| | 津久井湖さくらまつり事業 （観光協会、産業経済課） | 町立津久井湖城山公園 | 城山・津久井両町の観光協会が合同で実施。 花火の打ち上げ、ステージイベント、特産物展、フリーマーケットなど | 津-A5 |
| | 水源の森林づくり事業 （神奈川県、町産業経済課） | 水源の森林エリア | 県の水源の森林づくり事業(協力協約事業) 森林所有者自らが行う森林整備に対し支援を行う。 | 津-B1 |
| | グリーンカレッジつくい （津久井町、生涯学習課） | 生涯学習センター他 | 地域の歴史、文化、自然環境について理解を深めていく機会として専門家による講座を開催 （植生、水質、丹沢のシカ、丹沢衝突、古文書、通史、後北条と内藤氏、薬草等） | 津-C1 |
| | 「遥かな友に」道志川合唱祭 （津久井町、生涯学習課） | 青根緑の休暇村 センター | 道志川夫婦園キャンプ場での合宿中に生まれた名曲「遥かな友に」を記念して川畔で開催する野外合唱祭、合唱館があり、キャンプをしながらの練習・参加も可能 | 津-C2 |
| | アウトドアスポーツ津久井 （津久井町、生涯学習センター） | 町内各地 | 地域の特色を活かしたアウトドアイベントを展開。道志川ラフティング、宮ヶ瀬湖カヌー、道志渓谷バードウォッチング他 | 津-C3 |
| | 宮ヶ瀬マラソン （津久井町、生涯学習課） | 宮ヶ瀬湖北岸道路 | 宮ヶ瀬湖北岸道路を利用して10k、5kなどのコースを設けた町民マラソン大会。宮ヶ瀬湖の自然と空気を思い切り味わう。今年度よりコース変更。 | 津-C4 |
| | 道志川とまり隊 （津久井町、生涯学習課） | 道志川の家 | 道志川畔にある道志川の家に、一週間宿泊して学校に通う宿泊通学事業。道志川の自然環境を体感するプログラムを中心にして家庭とは違った生活の体験をして郷土への理解を深める。 | 津-C5 |
| | わくわく冒険隊 （中野三井地区育成会） | 中野 | 里山である中野山に道標を立て、ハイキング道を整備して、現代的な社会環境の中での里山活性化を模索。 | 津-C6 |
| | 町史編さん事業 （津久井町、企画政策室） | 津久井町内 | 身近な生き物調査 | 津-C7 |
| | ニローネ・里山交流の集い （津久井町、産業経済課） | 東京農工大津久井農場 | 自然体験教室、交流会 | 津-C8 |
| | 有害鳥獣対策 （津久井町、産業経済課） | 津久井町内 | 有害鳥獣（サル、シカ、イノシシ）の捕獲、追払いの実施、電気柵設置の実施 | 津-C9 |
| | グリーンツーリズムの推進 ・森林ミュージアム事業実施に伴う体験型観光の推進（津久井町） | | 事業実施 | 津-A6 |

... 「第2回市町村ワークショップ」の開催にあたり、「地域再生に関する特色ある事業」として、事前に各自治体に情報提供や確認をしていただいた事業

... 「神奈川力構想・地域計画」(神奈川県・平成16年12月)に掲載されている事業のうち、 以外の事業

2. 市町村ワークショップ

(1) 第1回市町村ワークショップ

第1回市町村ワークショップの記録

1) 目的

丹沢大山の8市町村（秦野市、厚木市、伊勢原市、松田町、山北町、愛川町、清川村、津久井町）の行政職員と地域再生調査チームの合同ワークショップにより、丹沢の現状を把握するとともに、丹沢大山地域の再生に向けた「(行政版)将来ビジョン」について検討する。

また、第1回市町村ワークショップ後に開催される地域再生フォーラムは、地域住民の参加を想定しているため、丹沢大山地域に暮らす人達や関心の高い人達としてあげられた人々のデータを、地域再生フォーラムへの参加依頼検討資料として活用する。

2) 開催概要

日時：2004.8.27. 13:30~16:30

場所：自然環境保全センター大講堂

参加者：丹沢大山の8市町村職員（企画、観光、農林業の行政担当者）

計22名

「丹沢丸かじり！ 教えてください丹沢の姿」 プログラム

1. 開会のあいさつ

丹沢大山総合調査は住民、行政、ボランティア、研究者の協働で進めたい。

2. 主旨説明

丹沢大山地域8市町村の行政職員の参加で地域の魅力発見をする。

3. 水系別で魅力マップづくり

山北・松田、秦野・伊勢原、厚木・愛川、清川・津久井の4グループで、下記の3つのテーマ毎に、魅力、なりわい、人材を地図に書き込む。

第一テーマ「観光(ツーリズム)・環境教育学習」

第二テーマ「なりわい(循環型森林資源活用)」

第三テーマ「暮らし(歴史・生活・文化)」

4. 発表・全員で共有

5. 今後の進め方

6. 閉会のあいさつ

3) 会場の様子



会場に来た方から壁アンケート「私の丹沢のお褒めマップ」にお答えいただきました。



受付をすませ...



調査の意義をスライドを用いて系長先生が解説されました。



エリア別にテーブルを囲みました。



各グループの成果を窓に貼り出しました。



壁に貼り出せないシートは手で持って...

4) 話し合いの概要

～発表と議論の概要～

【魅力マップ】

現状：愛川・厚木では、七沢温泉、自然教室などをはじめ施設が多数ある。伊勢原・秦野では、名水スポットや眺望の良い場所があり、ウォークラリーも実施している。松田・山北では、古いものとして「やぶさめ」等の山のハイキングコースや水、新しいものとしては丹沢湖のイベントが揚げられる。津久井・清川では、東海自然道など、丹沢へ向かうルートに人気がある。環境学習などの拠点があり1年中多くの人を訪れてくる。

総括：山の方にはたくさん出ているが、今回の大きなテーマとしている里山の方につながっていない。点だけではなくもうちょっと面でとらえていきたい。今回の丹沢総合調査では山が主要な対象となっているが、一方で、ふもととどのようにつながっていくのがテーマだ。(糸長)

【なりわい面影マップ】

現状：愛川・厚木では、古い石切場があり、石切、石材に関する産業遺構の他はあまりない。伊勢原・秦野では、たばこ乾燥室、炭焼き小屋などがあり、炭焼きは今でもやっているようだ。松田・山北では、山北は林業の鉄道をひいていた。江戸後期の用水の遺構があった。棚田が減った。津久井・清川では、製材所が津久井に4箇所、清川に1箇所あり、清川では地産地消が行われている。

総括：かつては林業で食べていたのか。そもそも林業では食べていけなかったのか、いけるのか。皆さん悩まれたのではないか。山の材を使う技術があったはずだと言う人もいる。丹沢大山の人達はなりわいを3つ～4つぐらい持っていたのではないか。ダムで消えたものもあろう。山を生かした新しいなりわいの知恵と技術を作っていく必要がある。(糸長)

【人材マップ】

現状：愛川・厚木では、黄金井酒造さん、温泉の中村さん、「たまいかん」のおかみさん。産業フロンティアなどの人材を集めるとよい。伊勢原・秦野では、山小屋のオヤジさん。ふるさと公園ソバ職人。森林組合。伝統工芸の凧、コマなど。四十八瀬川自然村の共同管理や、自治会で植樹、伊勢原の集落単位の活動も見られる。松田・山北では、ヤマメの養殖、マムシの養殖などがある。お茶(足柄茶)が多い。津久井・清川では、鳥獣保護と猟友会は同じ人が担っている。伝統芸能が残っている場所がある。

総括：誰がどんな役割を担っているのかということをも明らかにしたい。また、新たな人材を掘り出し、人材をつなげていきたい。(糸長)



成果を見ながら糸長先生が総括しました。

2004.8.27.

丹沢大山総合調査での地域再生調査 第一回市町村ワークショップ

於：自然環境保全センター
大講堂

秦野市、厚木市、伊勢原市、松田町、山北町、愛川町、清川村、津久井町

「丹沢丸かじり！ 教えてください丹沢の姿」

プログラム

1. 開会のあいさつ
2. 主旨説明
3. 水系別マップづくり

第一テーマ「観光（ツーリズム）・環境教育学習」

第二テーマ「なりわい（循環型森林資源活用）」

第三テーマ「暮らし（歴史・生活・文化）」

4. 発表・全員で共有
5. 今後の進め方
6. 閉会のあいさつ

「丹沢大山総合調査での地域再生調査」第1回市町村ワークショップ参加者リスト

| 市町村名 | 所属 | 職名 | 氏名 |
|------|----------|-------------|--------|
| 秦野市 | 企画部企画課 | 主幹 | 諸星 勝 |
| | 環境農政部農産課 | 主幹 | 山口 均 |
| | 都市経済部観光課 | 主幹 | 大津 徹 |
| 厚木市 | 経済部農業政策課 | 副主幹 | 雨宮 俊 |
| | 環境部環境総務課 | 課長 | 和田 治美 |
| | 経済部観光政策課 | 主事補 | 高谷 大輔 |
| 伊勢原市 | 企画調整課 | 課長補佐(兼)担当主査 | 佐藤 順 |
| | 農林整備課 | 技師 | 中野 博文 |
| | 商工観光振興課 | 主事 | 佐藤 智一 |
| 松田町 | 総務部企画財政課 | 副主幹 | 吉田 利光 |
| 山北町 | 企画課 | 副主幹 | 山口 裕之 |
| | 産業観光課 | 主査 | 辻 和男 |
| | 産業観光課 | 主査 | 鈴木 康弘 |
| 愛川町 | 総務部企画政策課 | 主任主事 | 中村 秀太郎 |
| | 環境経済部農政課 | 主任主事 | 成井 健浩 |
| 清川村 | 企画財政課 | 主事 | 朝倉義則 |
| | 産業観光課 | 主査 | 岩澤晴夫 |
| 津久井町 | 企画政策室 | 主幹 | 大熊 哲郎 |
| | 産業経済課 | 主査 | 大勝 弘之 |
| | 産業経済課 | 主査 | 深山 功 |
| | 産業経済課 | 主査 | 甘利 康雄 |
| | 環境課 | 課長補佐 | 打貫 隆志 |

ワークショップ運営スタッフリスト

| 所属 | 氏名 |
|---------------|--|
| 日本大学生物資源科学部 | 系長浩司教授、日暮晃一講師、栗原伸治講師、藤沢直樹、關正貴、杉浦高志、遠藤雄介、木本恭子、鈴木教子、濱口勝哉、藤田亜希、 |
| (株)農村・都市計画研究所 | 橋本忠美(生物環境工学科非常勤講師) 奥村玄、西村織香 |

ワークショップ行政スタッフリスト

| 所属 | 氏名 |
|------------|-----------|
| 自然環境保全センター | 原田進 副所長 |
| 企画情報課 | 白井眞 課長 |
| 企画情報課 | 羽太博樹 主査 |
| 自然保護課 | 倉野修 副技幹 |
| 森林経営課 | 滝沢尚史 副技幹 |
| 自然公園課 | 吉田直哉 主任技師 |

ワークショップオブザーバ・参加見学者

| 所属 | 氏名 |
|------------------------------------|----------------------------|
| (有)川又林業 | 川又正人 代表取締役 |
| 同済大学 建築都市計画学院 都市計画学部 | 李 京生(Li Jingsheng) 教授 PH.D |
| 一橋大学大学院 経済学研究科 応用経済専攻 修士課程 | 浅井美香 |
| 東京大学大学院 農学生命科学研究科 森林科学専攻 林政学研究室 | 楠田詠子 |

丹沢大山総合調査での地域再生調査 市町村ワークショップ
第1回実施プログラム

地域再生調査チーム
日本大学系長研究室
農村・都市計画研究所

開催概要

- ・日時：8月27日（金）午後1時30分～4時30分（3時間）
- ・場所：自然環境保全センター 大講堂
- ・参加者：8市町村の企画、農政、観光の担当者各3～5名

進め方

1. 地域別にグループ分けしておく
 - ・8市町村を水系ごとに4つの地域に分け、テーブルについてもらう。
 - 「金目川水系」伊勢原市、秦野市
 - 「酒匂川水系」松田町、山北町
 - 「相模川水系上流部」津久井町、愛川町
 - 「相模川水系下流部」清川村、厚木市
2. 壁アンケート...始まる前のチョット手持ち無沙汰な時間を利用して...入り口付近に模造紙アンケートを用意し、会場に来た方から順に答えてもらう
 - ・“私の丹沢のお奨め”を紹介...あくまで個人の意見として、地図に番号付きのシールを貼る。空間・環境、暮らし・出来事、人、歴史・伝統など。他市町村でもOK.
 - ・同じナンバーが付いている付箋紙に、見出しと内容（推薦の理由）を記入して模造紙に貼る。
 - ・スタッフがグルーピングして、見出しをつける。
3. 開会のあいさつ...10分
 - 開会宣言
 - 趣旨説明
 - ・計画の全体像の理解、共有
 - ・地域と計画集団との協力体制
 - ・計画書からは読み取れない地域の様子
 - ・身近な丹沢の姿～大きなビジョンへの
 - スタッフ紹介

4. 「丹沢丸かじり！教えてください丹沢の姿」

壁アンケートの紹介

作業説明

テーブルに分かれてマッピング

水系別地図をテーマ毎にそれぞれ6枚ずつ使用

設問に答えて、地図に表現する

- ・マーカーで記入
- ・色シールを貼る
- ・付箋紙にサインペンで記入

各テーブルで自己紹介...10分

(グループ作業開始)

第一テーマ「観光(ツーリズム)・環境教育学習」

マップA：魅力マップ

登山口、最近人気のあるルート

- ・マーカーでルートを記入
- ・【青色のシール】...人気の要因となる空間資源(美味しい水、眺望、快適なキャンプ場、釣り場、野草等)の場所に「青色のシール」を貼る
- ・「青色の付箋紙」に名称と人気の理由を付箋紙に書いて引き出す
「町の観光メニュー」「環境学習プログラム」
- ・【緑色のシール】...最近、評判の良い(ユニークな)「町の観光メニュー」「環境学習プログラム」のフィールドにマーキング。ルートは「緑色マーカー」拠点は「緑色シール」を貼る
- ・「緑色の付箋紙」に名称と人気の理由を書いて引き出す

マップB：人材マップ

人材...名物オヤジ、名物オバサン

- ・【茶色のシール】...「その人に会いに来る」という名物オヤジや名物オバサンの住んでいる場所に「茶色のシール」を貼る
- ・「黄色の付箋紙」に氏名(ニックネーム)と説明を書いて引き出す

マップC：悩みマップ

...変化で見るまちの問題点

観光において、最近、困っていること

- ・【赤いシール】...人やまちが最近変わってきたために問題が起きている、という場所に「赤いシール」を貼る
- ・「赤色の付箋紙」に内容を書いて引き出す

第二テーマ「なりわい(循環型森林資源活用)」

マップD：なりわい面影マップ

林業の最盛期の産出量や就業者数を地図中にサインペンでメモする

林業の産業遺構(搬出ルート・手段、製材所、船着場等)

- ・【銀色のシール】...かつての産業遺構の位置に「銀色のシール」を貼る
- ・名称を書き込む

今も残る銘木古木

- ・【茶色のシール】...銘木古木の位置に「茶色のシール」を貼る

張っている林業

- ・【緑色のシール】...どっこい頑張っている、新たな挑戦をしている林業家に「緑色のシール」を貼る
- ・「緑色の付箋紙」に「内容」と「秘訣」を書いて引き出す

農業、水産業、工業、土木などの遺構

- ・【金色のシール】...かつての産業遺構の位置に「金色のシール」を貼る
- ・名称を書き込む

水源

- ・【青色のシール】...現在の水源地に「青色のシール」を貼る
- ・「青色の付箋紙」用途、名称があれば名称を書いて引き出す

枯れてしまった水源

- ・【赤色のシール】...かつては有名だった水源地に「赤色のシール」を貼る
- ・「赤色の付箋紙」衰退の理由、名称があれば名称を書いて引き出す

マップE：山の問題マップ

災害

- ・【水色のシール】...大雨で「地滑り」や「沢又ケ」などの発生する場所に「茶色のシール」を貼る
- ・「青色の付箋紙」に名称と理由を書いて引き出す

特に荒れている山

- ・【赤色のシール】...特に荒廃が目立つ場所に「赤色のシール」を貼る
- ・「赤色の付箋紙」に内容を書いて引き出す

マップB：人材マップ

...第一テーマで用いた「マップB」に加えていく

産業にまつわる人材を教えてください

- ・【緑色のシール】...下記の達人の住んでいるところに「緑色のシール」を貼る
- ・「緑色の付箋紙」に内容を書いて引き出す

参考)

- ・伝統的な建設技術(山、川)を教えてくれる人、場所
- ・丹沢林業の盛衰の歴史に詳しい人
- ・丹沢の達人
- ・新しい山の関連事業を考えている人、始めている人・集団・会社

第三テーマ「暮らし（歴史・生活・文化）」

マップF：暮らしの知恵マップ

風土に根ざした暮らしの知恵

- ・【茶色のシール】…気候風土を反映した作りの家や、現在も息づいている農林水産業の知恵や技術、風景を見ることのできる場所に「茶色のシール」を貼る
- ・「赤色の付箋紙」に特徴を書いて引き出す

伝統的な水処理方法

- ・【青色のシール】…地域に特徴的な水の使い方、処理方法が残っている場所に「水色のシール」を貼る
- ・「青色の付箋紙」に特徴を書いて引き出す

丹沢の名産品

- ・【黄色のシール】…丹沢の特徴を示す工芸品や食べ物のある場所に「黄色のシール」を貼る
- ・「黄色の付箋紙」食べ物の名称と特徴を書いて引き出す

マップB：人材マップ

…第一テーマで用いた「マップB」に加えていく

人材を教えてください

- ・【青色のシール】…下記の達人の住んでいるところに「青色のシール」を貼る
「青色の付箋紙」に内容を書いて引き出す

参考)

- ・今に生きる伝統的な暮らしの技術（衣食住）を教えてくれる人
- ・伝統行事を継続している集落、教えてくれる人
- ・大山詣、信仰の現状（信仰の道、慣習）
- ・別荘、保養等で半定住し始めている人、場所

沢や山や農地の共同管理のしくみ

- ・【赤色のシール】…共同管理のフィールドに「赤色のシール」を貼る
- ・「赤色の付箋紙」に団体名と主な活動内容を書いて貼る

まちづくり活動

- ・【黄色のシール】…活発なまちづくり活動のフィールドに「黄色のシール」を貼る
- ・「黄色の付箋紙」に団体名と主な活動内容を書いて貼る

最後に、「住民気質」を教えてください

- ・人材マップの空いているスペースにマーカーで大きく書いてください

5．発表

テーブルごとに発表

「丹沢を再生するために重要な視点だ」という内容に投票
投票の多いところについて、2～3項目、意見を聞く

6．アンケート

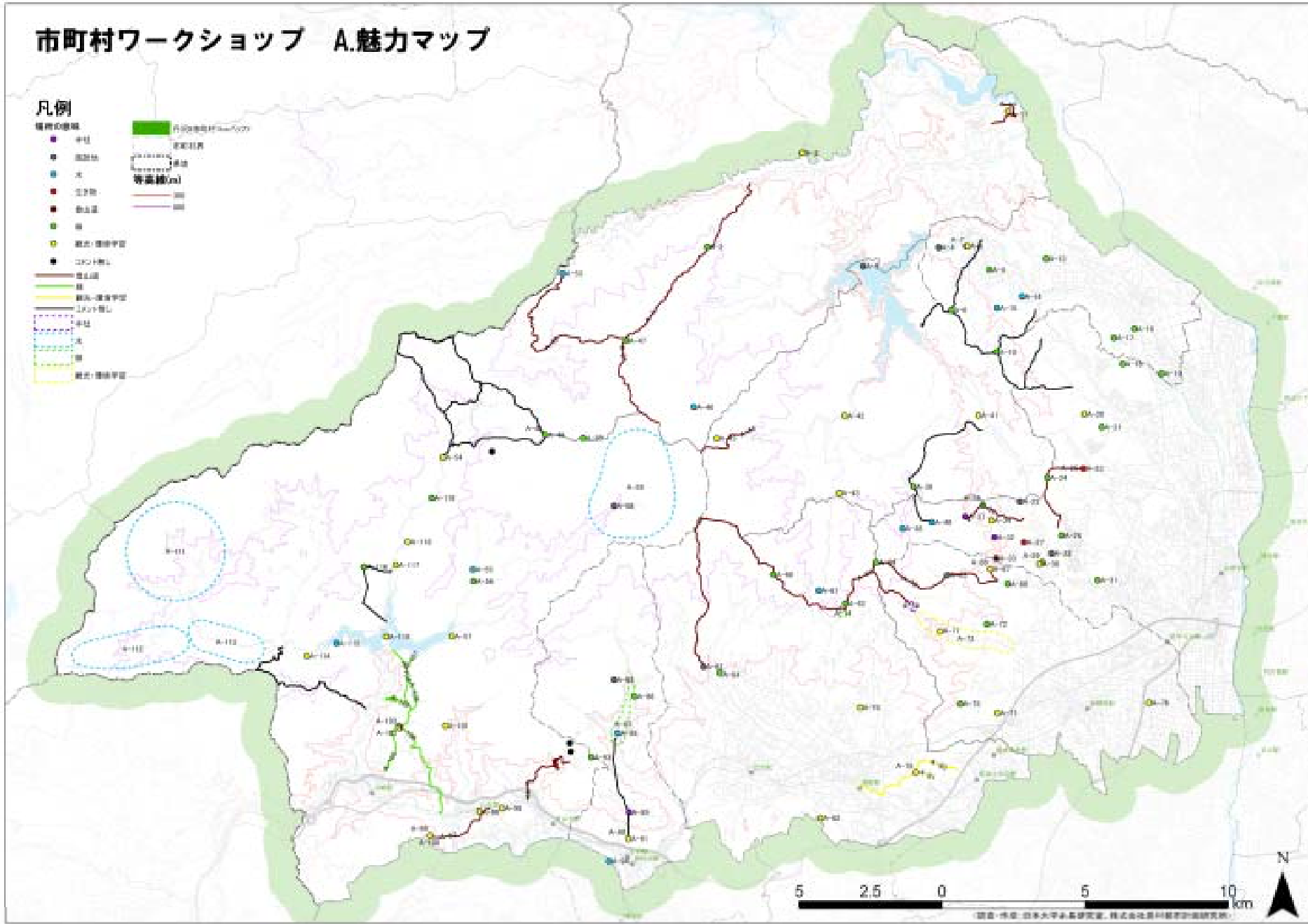
- ・丹沢をテーマとした市町村連携の事業があったら教えてください、など。

以上

市町村ワークショップ A.魅力マップ

凡例

- | | |
|-----------|---------------|
| ● 中核 | ■ 自治体別ワークショップ |
| ● 集落集 | --- 境界 |
| ● 水 | --- 境界 |
| ● 工業地 | --- 境界 |
| ● 農産地 | --- 境界 |
| ● 林 | --- 境界 |
| ● 観光・宿泊予定 | --- 境界 |
| ● コア・ハブ地 | --- 境界 |
| --- 境界 | --- 境界 |
| --- 境界 | --- 境界 |
| --- 境界 | --- 境界 |
| --- 境界 | --- 境界 |
| --- 境界 | --- 境界 |
| --- 境界 | --- 境界 |

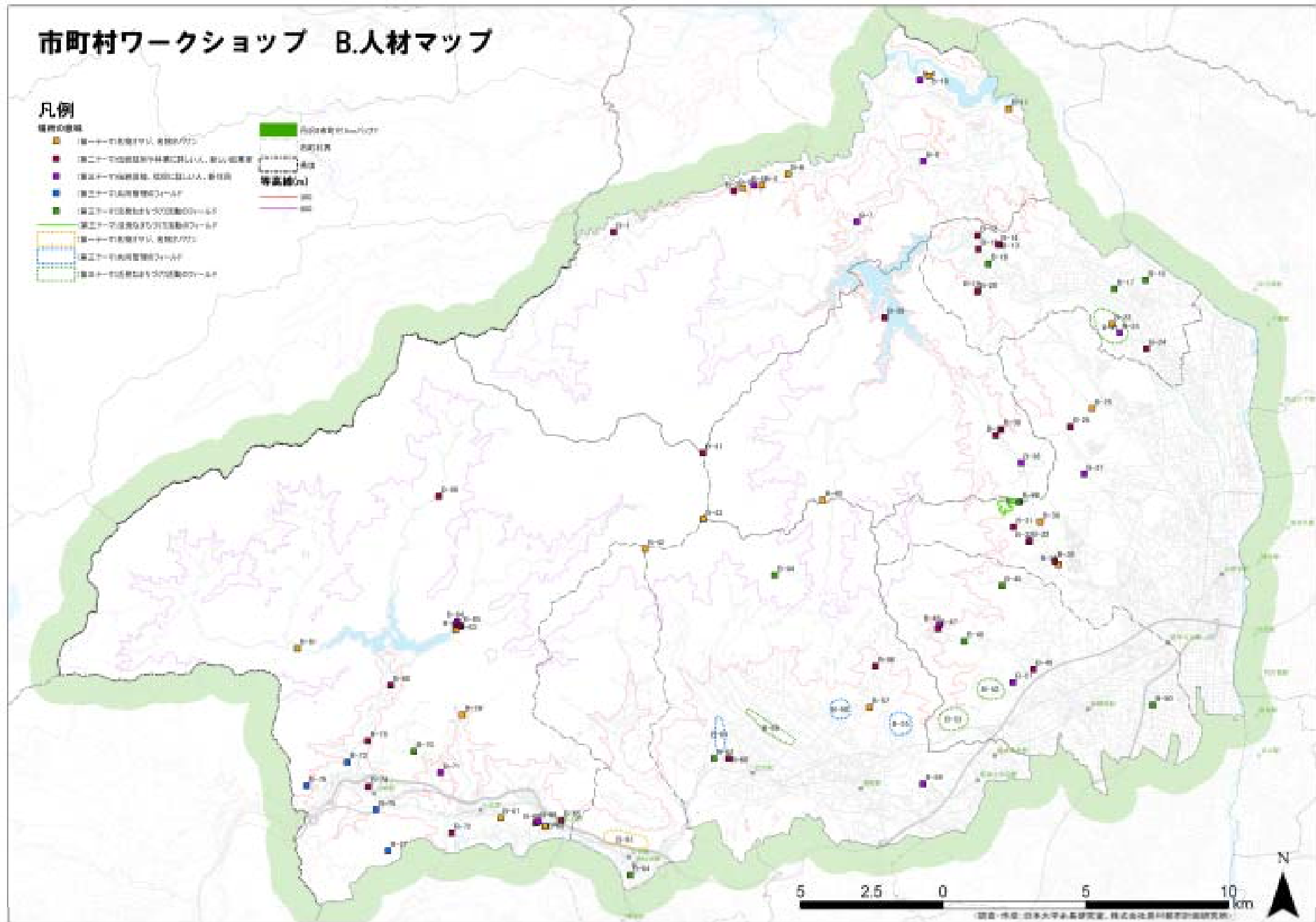


市町村ワークショップ B.人材マップ

凡例

- 種別の特徴
- 職工型で高齢ケア、産前産後
 - 職工型で高齢認知症看護に特化した、新しい介護業
 - 職工型で高齢看護、認知症ケア、新技術
 - 職工型で高齢看護のフィールド
 - 職工型で高齢認知症ケアのフィールド
 - 職工型で高齢認知症ケアのフィールド
 - 職工型で高齢ケア、産前産後
 - 職工型で高齢看護のフィールド
 - 職工型で高齢認知症ケアのフィールド

- 自治体界隈のフィールド
- 自治体界隈
- 自治体界隈
- 等高線(100)
- 等高線(200)

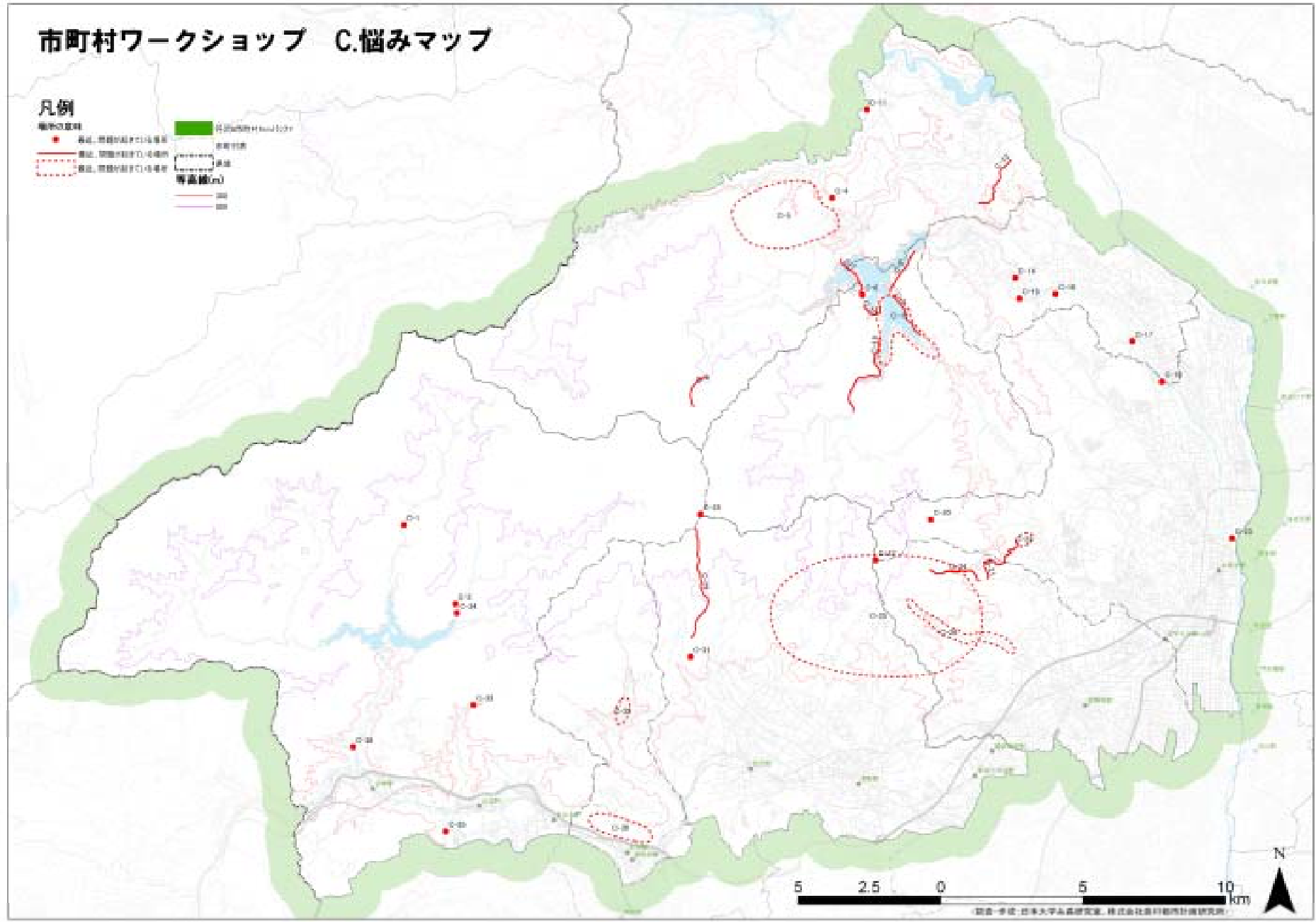


市町村ワークショップ C.悩みマップ

凡例

- 自治体、町界が示されている場所
- 自治体、町界が示されていない場所
- 自治体、町界が示されている場所

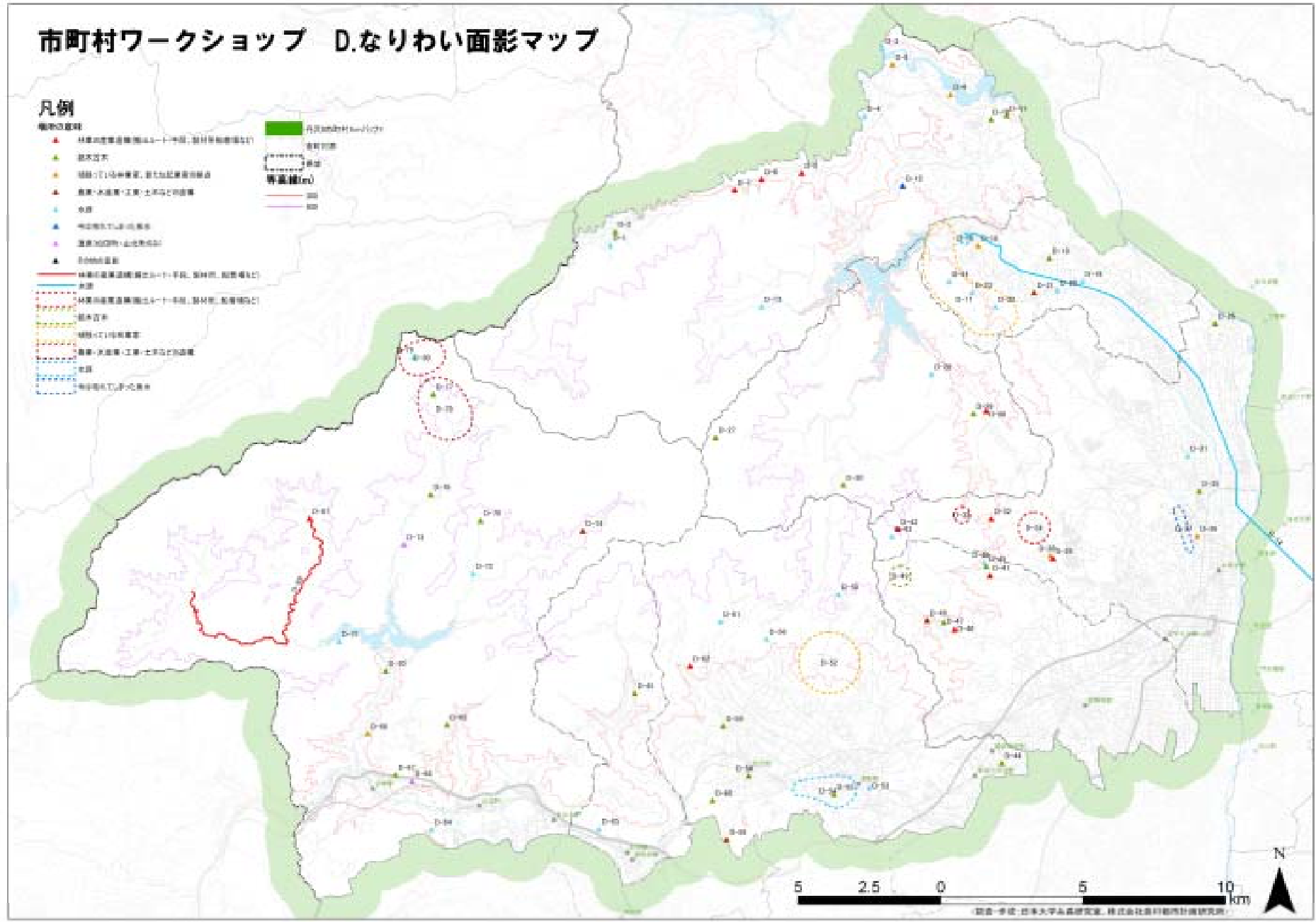
- 自治体、町界が示されている場所
- 自治体、町界が示されていない場所
- 自治体、町界が示されている場所
- 自治体、町界が示されている場所
- 自治体、町界が示されている場所



市町村ワークショップ D.なりわい面影マップ

凡例

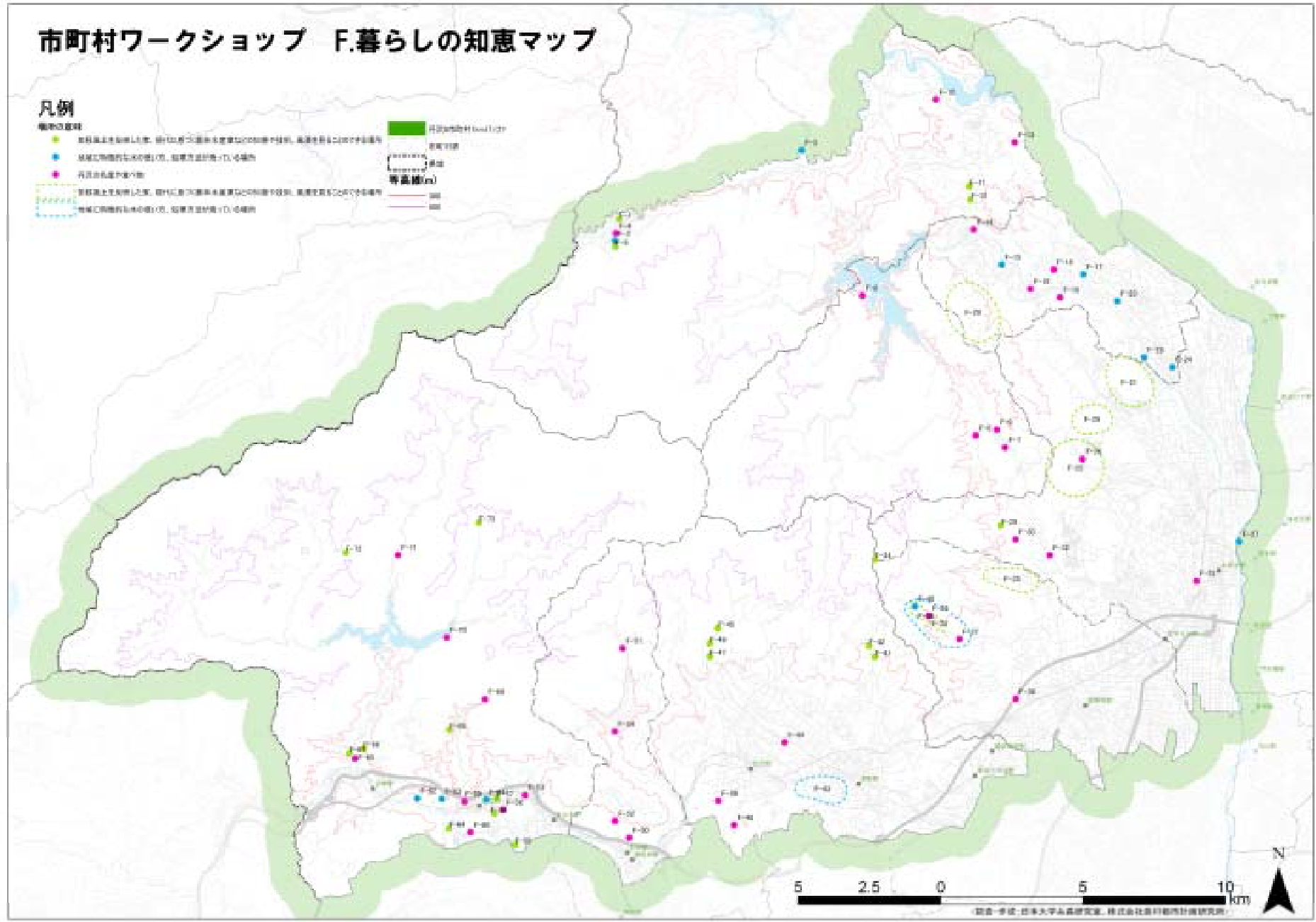
- 場所の区分**
- 林業の産物加工施設（ソーラーパネル、肥料等製造施設など）
 - ▲ 観光交流
 - ▲ 観光（1日中乗車、観光施設等）
 - ▲ 農業（水産物・工業・土産品の生産）
 - ▲ 水産
 - ▲ 観光施設（ホテル、温泉）
 - ▲ 温泉施設（山岳部など）
 - ▲ 自然公園
- 市町村界**
- 林業の産物加工施設（ソーラーパネル、肥料等、製造施設など）
 - 観光交流
 - 観光（1日中乗車、観光施設等）
 - 農業（水産物・工業・土産品の生産）
 - 水産
 - 観光施設（ホテル、温泉）
 - 温泉施設（山岳部など）
 - 自然公園
- 市町村ワークショップ**
- 市町村ワークショップ
- 等高線(m)**
- 500
 - 1000



市町村ワークショップ F.暮らしの知恵マップ

凡例

- 緑色の区域**
- 市界(緑色の線)
 - 町界(黒色の線)
 - 村界(赤色の線)
- 等高線(m)**
- 100
 - 200
 - 300
- 緑色の点**
- 市界(緑色の線)
 - 町界(黒色の線)
 - 村界(赤色の線)
- 赤色の点**
- 市界(緑色の線)
 - 町界(黒色の線)
 - 村界(赤色の線)
- 青色の点**
- 市界(緑色の線)
 - 町界(黒色の線)
 - 村界(赤色の線)
- 黄色の点**
- 市界(緑色の線)
 - 町界(黒色の線)
 - 村界(赤色の線)
- 黒色の点**
- 市界(緑色の線)
 - 町界(黒色の線)
 - 村界(赤色の線)



調査一歩: 熊本大学農産物加工・流通研究センター

A.魅力マップ

| コード番号 | 魅力凡例 | コメント | 情報源 |
|--------|---------|---|-----|
| A - 1 | 登山道 | ・東海自然歩道 | 2 |
| A - 2 | 緑 | ・焼山(眺望良好) | 2 |
| A - 3 | 観光・環境学習 | ・しいたけ植菌(道志川の家)・星空観察会(道志川の家)・タイヤチューブ川くだり(道志川)・(あゆまつり)川の自然観察会・滝探検。牧場沢の大滝。 | 2 |
| A - 4 | 施設他 | ・石小屋ダム(宮ヶ瀬湖の副ダム。周辺の景観。) ・県立愛川公園(植木、新しく整備。) | 1 |
| A - 5 | 施設他 | ・宮ヶ瀬ダム。宮ヶ瀬湖。全国有数のダム。 | 1 |
| A - 6 | 緑 | ・仏果山、眺望。 | 1 |
| A - 7 | 生き物 | ・ホタルの里(半原) | 1 |
| A - 8 | 観光・環境学習 | ・ホタルの里、観察会。 | 1 |
| A - 9 | 緑 | ・新久のツツジ、ミツバツツジ、ゴヨウツツジなど貴重な種を残している。 | 1 |
| A - 10 | 緑 | ・経ヶ岳、ハイキング。 | 1 |
| A - 11 | 観光・環境学習 | ・歴史学習(城山ハイキングルート)。根小屋地区。 | 2 |
| A - 12 | 登山道 | ・城山ハイキングルート | 2 |
| A - 13 | 緑 | ・古戦場 | 1 |
| A - 14 | 水 | ・中津川マス釣り場 | 1 |
| A - 15 | 水 | ・塩川滝(小さく素朴、美しい。伝説あり。) | 1 |
| A - 16 | 緑 | ・下谷しょうぶの里 | 1 |
| A - 17 | 緑 | ・八菅山、いこいの森。(涼しい、眺望。) ・修験道。(八菅山?華巖山?ヶ岳?不動尻?大山?) | 1 |
| A - 18 | 緑 | ・展望台。鳶尾。・三角点で有名な鳶尾ハイキングコース | 1 |
| A - 19 | 緑 | ・坂本青少年広場(中津川沿いの堤防。桜の季節は花見客で賑わう。) | 1 |
| A - 20 | 観光・環境学習 | ・棚田の復活。下草狩り。水路の復旧。ビオトープ。 | 1 |
| A - 21 | 緑 | ・景観。農村風景。 | 1 |
| A - 22 | 施設他 | ・自然教室 | 1 |
| A - 23 | 生き物 | ・たにし料理の飯山温泉郷 | 1 |
| A - 24 | 緑 | ・物見峠の眺望 | 1 |

A.魅力マップ

| コード番号 | 魅力凡例 | コメント | 情報源 |
|--------|---------|---|-----|
| A - 25 | 登山道 | ・飯山白山・巡礼峠コース | 1 |
| A - 26 | 緑 | ・七沢森林公園(雑木林と広場。ハイキング。) | 1 |
| A - 27 | 生き物 | ・ししなべの東丹沢。七沢温泉郷 | 1 |
| A - 28 | 施設他 | ・厚木消防署玉川分署・観光センター | 1 |
| A - 29 | 緑 | ・保全センターの野外施設(谷戸、雑木林)・神奈川リハビリテーション | 1 |
| A - 30 | 観光・環境学習 | ・ミニ観察会など | 1 |
| A - 31 | 緑 | ・小野神社のサクラ | 1 |
| A - 32 | 寺社 | ・広沢寺の岩場。岩登りのゲレンデ。・大釜弁財天 | 1 |
| A - 33 | 登山道 | ・日向山ハイキングコース | 1 |
| A - 34 | 観光・環境学習 | ・棚田の復活。下草狩り。水路の復旧。ビオトープ。 | 1 |
| A - 35 | 緑 | ・鐘ヶ岳。信仰の山。 | 1 |
| A - 36 | 登山道 | ・大山のふもとにある鐘ヶ岳ハイキングコース | 1 |
| A - 37 | 寺社 | ・山の神(鳥居マーク) | 1 |
| A - 38 | 水 | ・知る人ぞ知る唐沢川源流 | 1 |
| A - 39 | 緑 | ・三峰山。岩?。スリル。 | 1 |
| A - 40 | 水 | ・旧不動尻キャンプ場・厚木市唯一の白滝 | 1 |
| A - 41 | 観光・環境学習 | ・シバの大木 | 2 |
| A - 42 | 観光・環境学習 | ・「森といっしょに！」環境学習(村立金沢キャンプ場にて(H15まで)。植樹、つかみどり、枝で工作etc.) | 2 |
| A - 43 | 観光・環境学習 | ・モミの原生林 | 2 |
| A - 44 | 登山道 | ・堂平から丹沢山の山頂ルート・丹沢山塩水林道が整備されているのでアクセスしやすい | 2 |
| A - 45 | 観光・環境学習 | ・ブナの原生林 | 2 |
| A - 46 | 水 | ・早戸大滝(日本の滝100選) | 2 |
| A - 47 | 緑 | ・姫次のカラマツ林 | 2 |
| A - 48 | 緑 | ・檜洞丸(ヒノキボラマル)(ツツジ、シロヤシオ。) | 2 |
| A - 49 | 緑 | ・檜洞丸(白ヤシオツツジ)・ヒノキボラ山頂(ハイキング、登山。) | 3 |

A.魅力マップ

| コード番号 | 魅力凡例 | コメント | 情報源 |
|--------|---------|--|-----|
| A - 50 | 緑 | ・桧洞丸のブナ林 | 2 |
| A - 51 | 登山道 | ・丹沢に抜けるルート(青野原 東海自然歩道) | 2 |
| A - 52 | 登山道 | ・神ノ川林道ルート(青野原 東海自然歩道) | 2 |
| A - 53 | 水 | ・エビラ沢の滝 | 2 |
| A - 54 | 観光・環境学習 | ・西丹沢山開き | 3 |
| A - 55 | 水 | ・美味しい水。小川谷。湧水。 | 3 |
| A - 56 | 緑 | ・小川谷出会(眺望) | 3 |
| A - 57 | 観光・環境学習 | ・カヌーづくり教室 | 3 |
| A - 58 | 施設他 | ・熊木ダム(水がきれい) | 3 |
| A - 59 | 水 | ・溪流釣り。玄倉川流域。(酒匂川漁業共同組合) | 3 |
| A - 60 | 緑 | ・三ノ塔(眺望) | 4 |
| A - 61 | 水 | ・護摩屋敷の水 | 4 |
| A - 62 | 緑 | ・ヤビツ峠・ヤビツ峠登山口。菜の花台。名水。ハンググライダー。 | 4 |
| A - 63 | 登山道 | ・ヤビツ峠?大山山頂(楽に登れる) | 4 |
| A - 64 | 緑 | ・大山(ケーブルカーとの連携。おみやげ。) | 4 |
| A - 65 | 施設他 | ・キャンプ場 | 4 |
| A - 66 | 寺社 | ・日向薬師 | 4 |
| A - 67 | 観光・環境学習 | ・日向薬師(林道)。桜。 | 4 |
| A - 68 | 緑 | ・日陰道(アジサイ。彼岸花。) | 4 |
| A - 69 | 寺社 | ・大山参道(まちなみ(宿坊)。とうふ料理。大山詣り。) | 4 |
| A - 70 | 登山道 | ・大山登山道入口?山頂?雪尾根?日向薬師・大山詣りの歴史的背景、日向薬師の歴史。 | 4 |
| A - 71 | 観光・環境学習 | ・大山温泉。大山温泉開発事業。 | 4 |
| A - 72 | 緑 | ・仁ヶ久保(にがくぼ)林道(眺望がよい) | 4 |
| A - 73 | 観光・環境学習 | ・大山街道ウォークラリー | 4 |
| A - 74 | 緑 | ・菜ノ花台 | 4 |

A.魅力マップ

| コード番号 | 魅力凡例 | コメント | 情報源 |
|--------|---------|---|-----|
| A - 75 | 緑 | ・聖峠(展望がよい) | 4 |
| A - 76 | 観光・環境学習 | ・芝桜 | 4 |
| A - 77 | 観光・環境学習 | ・県立公園整備事業 | 4 |
| A - 78 | 観光・環境学習 | ・ふるさと公園(ソバ打ち、田園風景、首塚。)・東田原(直売所、農地の風景、首塚。) | 4 |
| A - 79 | 観光・環境学習 | ・弘法山 | 4 |
| A - 80 | 観光・環境学習 | ・弘法山公園周辺。ハイキングコース。弦巻温泉、桜、めんよりの里。 | 4 |
| A - 81 | 観光・環境学習 | ・弘法山公園周辺。ハイキングコース。弦巻温泉、桜、めんよりの里。 | 4 |
| A - 82 | 観光・環境学習 | ・震生湖公園(地震(関東大震災)でできた。菜の花。) | 4 |
| A - 83 | 施設他 | ・秦野戸川公園 | 4 |
| A - 84 | 緑 | ・大倉登山口(県立公園、農産物直売、体験農業。) | 4 |
| A - 85 | 登山道 | ・表尾根縦走コース(名水(護摩屋敷き)、鎖場、眺望(塔ノ岳。)) | 4 |
| A - 86 | 緑 | ・スギの大木(神奈川名木百選) | 3 |
| A - 87 | 緑 | ・中津川周辺(桜の地域づくり。キャンプ。) | 3 |
| A - 88 | 水 | ・松田町自然休養村。マス釣り場。 | 3 |
| A - 89 | 寺社 | ・最明寺史跡公園 | 3 |
| A - 90 | 緑 | ・西平畑公園(河津桜まつり、ライトアップ。) | 3 |
| A - 91 | 観光・環境学習 | ・松田町自然館(環境学習) | 3 |
| A - 92 | 施設他 | ・自然じゅく。RICH(子ども向け)。 | 3 |
| A - 93 | 緑 | ・眺望、高松、相模湾。・高松山(ながめがいい) | 3 |
| A - 94 | 水 | ・酒匂川(アユ釣り) | 3 |
| A - 95 | 登山道 | ・高松山ハイキングコース。・ハイキングコース。町内?最明寺?寄 | 3 |
| A - 96 | 観光・環境学習 | ・さくら祭り。山北駅周辺。 | 3 |
| A - 97 | 登山道 | ・河村城ハイキングコース(城あと) | 3 |
| A - 98 | 観光・環境学習 | ・室生神社(やぶさめ神事。11.03。南北朝。) | 3 |
| A - 99 | 緑 | ・洒水の滝ハイキングコース(名水) | 3 |

A.魅力マップ

| コード番号 | 魅力凡例 | コメント | 情報源 |
|---------|---------|-----------------------------|-----|
| A - 100 | 観光・環境学習 | ・洒水の滝まつり。七月末の日。 | 3 |
| A - 101 | 観光・環境学習 | ・お峰入り(国指定無形民俗文化財。5年に1度。) | 3 |
| A - 102 | 緑 | ・大野山(眺めがいい) | 3 |
| A - 103 | 観光・環境学習 | ・大野山山開き・大野山フェスティバル | 3 |
| A - 104 | 緑 | ・大野山ハイキングコース(牧場) | 3 |
| A - 105 | 緑 | ・大野山ハイキングコース(牧場) | 3 |
| A - 106 | 緑 | ・大野山ハイキングコース(牧場) | 3 |
| A - 107 | 緑 | ・大野山ハイキングコース(牧場) | 3 |
| A - 108 | 緑 | ・大野山ハイキングコース(牧場) | 3 |
| A - 109 | 緑 | ・大野山ハイキングコース(牧場) | 3 |
| A - 110 | 観光・環境学習 | ・冬のイルミネーション・丹沢湖花火大会・丹沢湖マラソン | 3 |
| A - 111 | 水 | ・世附川流域(酒匂川漁業共同組合)(溪流釣り) | 3 |
| A - 112 | 水 | ・世附川流域(酒匂川漁業共同組合)(溪流釣り) | 3 |
| A - 113 | 水 | ・世附川流域(酒匂川漁業共同組合)(溪流釣り) | 3 |
| A - 114 | 観光・環境学習 | ・丹沢森の仲間たち | 3 |
| A - 115 | 水 | ・美味しい水。不老山系(湧水) | 3 |
| A - 116 | 緑 | ・ハイキングコース。二本松峠。 | 3 |
| A - 117 | 観光・環境学習 | ・小学校対象に川で体験学習 | 3 |
| A - 118 | 観光・環境学習 | ・もみじ祭 | 3 |
| A - 119 | 緑 | ・箒杉(巨木) | 3 |

B.人材マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|--|-----|
| B - 1 | e | ・Aさん(屋号調査、歴史など) | 2 |
| B - 2 | d | ・中道志川トラスト協会 Bさん(川のトラスト会長) | 2 |
| B - 3 | e | ・Cさん(歴史研究) | 2 |
| B - 4 | d | ・Dさん(あゆつり名人) | 2 |
| B - 5 | f | ・田舎芝居 | 2 |
| B - 6 | d | ・Eさん(炭焼) | 2 |
| B - 7 | f | ・獅子舞 | 2 |
| B - 8 | f | ・お地藏さんが家を巡る | 2 |
| B - 9 | f | ・首長噺 | 2 |
| B - 10 | d | ・Fさん(昆虫写真家) | 2 |
| B - 11 | d | ・城山を愛する会 Gさん | 2 |
| B - 12 | e | ・愛川繊維会館(糸のまち半原) | 1 |
| B - 13 | d | ・愛川町森林組合のベテラン&若い衆 | 1 |
| B - 14 | e | ・愛川町森林組合 | 1 |
| B - 15 | e | ・Gさん(半原宮大工) | 1 |
| B - 16 | h | ・すみれの会('いこい道づくり'道路沿いの清掃、花植え) | 1 |
| B - 17 | h | ・バリアフリー・まち点検実行委員会(公共施設周辺や道路のバリアフリーのための点検をしバリアフリーについての理解を広める) | 1 |
| B - 18 | h | ・大塚壮青会('大塚ふれあいロード'道路沿いの花壇の整備) | 1 |
| B - 19 | d | ・愛川山岳会(地元の山に詳しい) | 1 |
| B - 20 | e | ・Hさん(山の地理) | 1 |
| B - 21 | h | ・里山づくり事業 | 1 |
| B - 22 | d | ・愛川自然ネットワーク | 1 |
| B - 23 | f | ・八菅神社、修験道、善の山岳信仰 | 1 |
| B - 24 | e | ・Iさん(中津ほうき勉強会) | 1 |
| B - 25 | d | ・棚田の復活。厚木市荻野。 | 1 |
| B - 26 | e | ・上飯山のJさん(山の達人(山菜、猟)。イノシシを飼っていた。) | 1 |

B.人材マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|--|-----|
| B - 27 | f | ・飯山の白龍雨乞いの舞。飯山白流太鼓。 | 1 |
| B - 28 | h | ・厚木市立七沢自然教室(小中学生宿泊体験。全国唯一。コースになっている。建たないはずの場に建っている。) | 1 |
| B - 29 | h | ・厚木市立七沢自然教室(小中学生宿泊体験。全国唯一。コースになっている。建たないはずの場に建っている。) | 1 |
| B - 30 | d | ・七沢里山づくりの会 Kさん | 1 |
| B - 31 | e | ・Jさん(鱒釣り場) | 1 |
| B - 32 | e | ・七沢荘 AJさん(七沢温泉。七沢荘。七福神で2000人集めた。) | 1 |
| B - 33 | e | ・玉川館のおかみさん(元湯、檜風呂) | 1 |
| B - 34 | e | ・Kさん(新しい酒造。地ビール。) | 1 |
| B - 35 | d | ・厚木森林組合のベテラン&若い衆 | 1 |
| B - 36 | f | ・青龍祭(実行委員会) 青龍太鼓保存会 雨乞いの祭り | 2 |
| B - 37 | e | ・産業観光課長(山菜。どのシーズンにどこいけばとれるかよく知っている。魚もくわしい。) | 2 |
| B - 38 | e | ・林業について森林組合に問い合わせ(実作業をしていた古老がまだ健在) | 2 |
| B - 39 | e | ・鳥獣保護協会会長、猟友会会長 Lさん(厚木市在住) | 2 |
| B - 40 | d | ・丹沢ホーム Mさん | 2 |
| B - 41 | e | ・丹沢山みやま荘 Nさん(父、丹沢の山師) | 2 |
| B - 42 | d | ・鍋割山荘 Oさん(鍋割山荘主人。ポッカ。) | 4 |
| B - 43 | d | ・塔ノ岳山荘 Pさん(塔ノ岳山荘のオヤジ) | 4 |
| B - 44 | h | ・丹沢自然保護協会(三ノ塔植樹活動。ヤシャブシ、ケヤマハンノキを植える プナ林の再生(参加費をとる)) | 4 |
| B - 45 | h | ・高部屋みどりの里振興会 | 4 |
| B - 46 | f | ・大山の先導師(大山詣の歴史を支えてきた人たち(宿坊を経営し案内もする)。神官の低い位を持つ。) | 4 |
| B - 47 | e | ・大山ゴマの職人さん | 4 |
| B - 48 | h | ・青専研 | 4 |
| B - 49 | e | ・森林組合長 Qさん(山の生き字引) ・組合の作業員 Rさん(林業技術) | 4 |
| B - 50 | h | ・上谷芝桜愛好会((自治会+地域の人々)主体) | 4 |
| B - 51 | f | ・三宮日比田神社(春季例大祭) | 4 |
| B - 52 | h | ・栗原ふれあいの里づくり協議会(地域資源の掘り起こし。地域の有志メンバー。) | 4 |

B.人材マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|---|-----|
| B - 53 | h | ・太郎の郷づくり研究会(地域資源の掘り起こし。地域の有志メンバー。) | 4 |
| B - 54 | f | ・瓜生野百八松明(ウリュウノヒャクハツタイ)(8/14、火祭。瓜生野地区の人々が中心となる)) | 4 |
| B - 55 | g | ・自然塾ドン会(里山棚田管理。NPO。) | 4 |
| B - 56 | e | ・佐藤林業(ヒノキ精油、水、芳香剤、消臭剤。) | 4 |
| B - 57 | d | ・田原ふるさと公園東雲(しのめ) Sさん(ソバ打ち達人、女性。) | 4 |
| B - 58 | g | ・かながわ山里会(棚田・里山・ボランティア) | 4 |
| B - 59 | h | ・戸川・三屋地区。自治会(左岸)。(しだれ桜の植樹) | 4 |
| B - 60 | e | ・Tさん(竹細工) | 4 |
| B - 61 | g | ・四十八瀬川自然村(棚田・里山・ボランティア) | 4 |
| B - 62 | h | ・菖蒲地区。自治会。(河津桜の植樹) | 4 |
| B - 64 | h | ・自然館 Uさん(環境学習(自然観)。生態系管理。) | 3 |
| B - 63 | d | ・自然館 Uさん(環境学習(自然観)。生態系管理。) | 3 |
| B - 65 | e | ・藤井文化財保護委員長 | 3 |
| B - 66 | d | ・Vさん(木工加工) | 3 |
| B - 67 | d | ・Wさん(流鏝馬) | 3 |
| B - 68 | e | ・Xさん(山にくわしい。文化財。) | 3 |
| B - 69 | f | ・世附百万遍念仏保存会(能安寺) | 3 |
| B - 70 | h | ・共和鹿研究会 | 3 |
| B - 71 | f | ・Yさん(お峰入り) | 3 |
| B - 72 | e | ・Zさん(森林インストラクター) | 3 |
| B - 73 | g | ・峰共同茶園(女性) | 3 |
| B - 74 | e | ・AAさん(茶) | 3 |
| B - 75 | g | ・谷ヶ共有林 | 3 |
| B - 76 | g | ・川西部生産森林組合 | 3 |
| B - 77 | g | ・平山照徳会生産森林組合 | 3 |
| B - 78 | e | ・(有)川又林業(森林インストラクター) | 3 |

C.悩みマップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|---|-----|
| C - 1 | i | ・川遊びに来た人のゴミ | 3 |
| C - 2 | i | ・川遊びに来た人のゴミ | 3 |
| C - 3 | i | ・未整備ルート。苦情が多い。 | 2 |
| C - 4 | i | ・ゴミ不法投棄(人気のない道) | 2 |
| C - 5 | i | ・ヤマビル | 2 |
| C - 6 | i | ・宮沢地区暴走族 | 2 |
| C - 7 | i | ・宮沢地区暴走族 | 2 |
| C - 8 | i | ・宮沢地区暴走族 | 2 |
| C - 9 | i | ・宮沢地区暴走族 | 2 |
| C - 10 | i | ・宮沢地区暴走族 | 2 |
| C - 11 | i | ・ゴミ不法投棄。河原でのバーベキュー。 | 2 |
| C - 12 | i | ・禁止区域での釣り(ブラックバス等)。宮ヶ瀬湖。 | 2 |
| C - 13 | i | ・バイクの乗入(ハイキングコース)。モトクロス・トライアル。 | 2 |
| C - 14 | i | ・中津川;バーベキューキャンプ場のゴミ。樹木、雑草の繁茂。ダムによる水量の減少。 | 1 |
| C - 15 | i | ・中津川;バーベキューキャンプ場のゴミ。樹木、雑草の繁茂。ダムによる水量の減少。 | 1 |
| C - 16 | i | ・中津川;バーベキューキャンプ場のゴミ。樹木、雑草の繁茂。ダムによる水量の減少。 | 1 |
| C - 17 | i | ・中津川;バーベキューキャンプ場のゴミ。樹木、雑草の繁茂。ダムによる水量の減少。 | 1 |
| C - 18 | i | ・中津川;バーベキューキャンプ場のゴミ。樹木、雑草の繁茂。ダムによる水量の減少。 | 1 |
| C - 19 | i | ・広場、道路沿いのゴミ等(家電、車)不法投棄。 ・道が細く、車通りが少ない。夜は暗い。 | 2 |
| C - 20 | i | ・不動尻キャンプ場の廃止、荒廃。 | 1 |
| C - 21 | i | ・ゴミの不法投棄。薬師林道。 | 1 |
| C - 22 | i | ・七沢温泉。観光客の減少。 | 1 |
| C - 23 | i | ・河川合流点のゴミの問題。 | 1 |
| C - 24 | i | ・日向林道。不法投棄。 | 4 |
| C - 25 | i | ・ヤマビル発生、被害 | 4 |
| C - 26 | i | ・大山地区における駐車場の確保・アクセス道路の整備。交通渋滞。 | 4 |

C.悩みマップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|------------------------------|-----|
| C - 27 | i | ・大山のバカシカ。人と野生動物のあやまった関係。 | 4 |
| C - 28 | i | ・塔ノ岳の廃山荘 | 4 |
| C - 29 | i | ・大倉尾根。オーバーユースによる登山道。荒廃のシンボル。 | 4 |
| C - 30 | i | ・不法投棄。産廃。 | 3 |
| C - 31 | i | ・不法投棄 | 4 |
| C - 32 | i | ・夏しか客の来ない民宿 | 3 |
| C - 33 | i | ・不法投棄。粗大ゴミ。 | 3 |
| C - 34 | i | ・マナーの悪いキャンプ場客。事故が心配。 | 3 |
| C - 35 | i | ・洒水の滝周辺。違法駐車。 | 3 |
| C - 36 | i | ・ゴミ | 3 |

D.なりわい面影マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|---------------------------|-----|
| D - 1 | n | ・今も出ているがかつての集落水道水源 | 2 |
| D - 2 | k | ・青根の大杉 | 2 |
| D - 3 | n | ・県水の水源 | 2 |
| D - 4 | n | ・横浜市営水道水源 | 2 |
| D - 5 | j | ・4カ所は昔からあった。川沿いにあるのがポイント。 | 2 |
| D - 6 | j | ・4カ所は昔からあった。川沿いにあるのがポイント。 | 2 |
| D - 7 | j | ・4カ所は昔からあった。川沿いにあるのがポイント。 | 2 |
| D - 8 | l | ・組みひも工場 | 2 |
| D - 9 | l | ・組みひも工場 | 2 |
| D - 10 | k | ・根小屋の諏訪神社のスギ | 2 |
| D - 11 | k | ・城山の大杉 | 2 |
| D - 12 | o | ・南沢(なんじゃ)水源。かつての町営水道の水源。 | 2 |
| D - 13 | n | ・県水の水源 | 2 |
| D - 14 | n | ・横須賀水道水源 | 1 |
| D - 15 | n | ・横須賀水道水源 | 1 |
| D - 16 | l | ・愛川村森林組合。今も森の管理。 | 1 |
| D - 17 | l | ・愛川村森林組合。今も森の管理。 | 1 |
| D - 18 | k | ・信玄公旗立松趾碑 | 1 |
| D - 19 | n | ・ワサビ畑(水源)。清水 | 1 |
| D - 20 | n | ・戸倉水源 | 1 |
| D - 21 | m | ・大谷酒造 | 1 |
| D - 22 | n | ・塩川滝の滝つぼは江ノ島につながっている！？ | 1 |
| D - 23 | n | ・水道水源。南山他。簡易水道。 | 1 |
| D - 24 | n | ・水道水源。南山他。簡易水道。 | 1 |
| D - 25 | k | ・依知神社。大イチョウ？ | 1 |
| D - 26 | n | ・堤川林道の途中。飲めるかどうか不明。 | 2 |

D.なりわい面影マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|-----------------------------|-----|
| D - 27 | k | ・ブナの原生林 | 2 |
| D - 28 | j | ・製材所。今でもある。 | 2 |
| D - 29 | k | ・シバの大木 | 2 |
| D - 30 | k | ・モミの原生林 | 2 |
| D - 31 | n | ・富士山の伏流水。三田、ガソリンスタンド。 | 1 |
| D - 32 | j | ・古い石切場の跡。山の神隧道に行く途中の道沿い。 | 1 |
| D - 33 | j | ・古い石切場の跡。山の神隧道に行く途中の道沿い。 | 1 |
| D - 34 | j | ・石材屋さん | 1 |
| D - 35 | k | ・妻田薬師の大楠。妻田小学校の横。 | 1 |
| D - 36 | l | ・厚木ビール | 1 |
| D - 37 | o | ・わき水(枯れた) | 1 |
| D - 38 | l | ・黄金井酒造。さがみビール。 | 1 |
| D - 39 | j | ・厚木市森林組合 | 1 |
| D - 40 | n | ・日向薬師水源。水持ち帰り。 | 1 |
| D - 41 | j | ・石材屋さん | 1 |
| D - 42 | j | ・古い集材あと。 | 1 |
| D - 43 | n | ・唐沢川源流。自然状態の水源。人の汚れもほとんどない。 | 1 |
| D - 44 | k | ・大ケヤキ | 4 |
| D - 45 | k | ・大杉(日向神社) | 4 |
| D - 46 | j | ・炭焼 | 4 |
| D - 47 | k | ・大山ザクラ。樹齢400年。 | 4 |
| D - 48 | m | ・大山ゴマ(今も) | 4 |
| D - 49 | k | ・大山モミの原生林 | 4 |
| D - 50 | n | ・護摩屋敷の水 | 4 |
| D - 51 | n | ・竜神の泉 | 4 |
| D - 52 | l | ・佐藤林業。ヒノキ精油 | 4 |

D.なりわい面影マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|-------------------|-----|
| D - 53 | n | ・弘法の湧水 | 4 |
| D - 54 | n | ・湧水群(生活に各家で使っている) | 4 |
| D - 55 | k | ・桜(南小) | 4 |
| D - 56 | n | ・葛葉の泉 | 4 |
| D - 57 | k | ・イチョウ | 4 |
| D - 58 | m | ・鉱物 | 4 |
| D - 59 | k | ・シイ(桂林寺) | 4 |
| D - 60 | k | ・白山神社の大杉 | 4 |
| D - 61 | k | ・スギの古木 | 4 |
| D - 62 | j | ・炭焼小屋 | 4 |
| D - 63 | n | ・水源 | 3 |
| D - 64 | n | ・平山水源 | 3 |
| D - 65 | k | ・ウラジロガシ | 3 |
| D - 66 | l | ・川又正人(林業) | 3 |
| D - 67 | k | ・頼明ざくら | 3 |
| D - 68 | p | ・都夫良野温泉 | 3 |
| D - 69 | j | ・旧林鉄 | 3 |
| D - 70 | k | ・トチの木 | 3 |
| D - 71 | n | ・不老山の水 | 3 |
| D - 72 | n | ・小川台 | 3 |
| D - 73 | p | ・中川温泉 | 3 |
| D - 74 | m | ・橋、素掘りトンネル(数カ所づつ) | 3 |
| D - 75 | k | ・大正の森(スギ) | 3 |
| D - 76 | k | ・箒杉 | 3 |
| D - 77 | k | ・箒杉 | 3 |
| D - 78 | m | ・炭焼 | 3 |

D.なりわい面影マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|-----------|-----|
| D - 79 | n | ・白石沢 | 3 |
| D - 80 | j | ・(昔)大理石 | 3 |
| D - 81 | j | ・大又沢流域貯木場 | 3 |

E..山の問題マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|---------------------|-----|
| E - 1 | r | ・サル | |
| E - 2 | q | ・林道がふさがれていて歩くしかない場所 | |
| E - 3 | r | ・シカ、イノシシ被害 | |
| E - 4 | r | ・シカ、イノシシ被害 | |
| E - 5 | r | ・シカ、イノシシ被害 | |
| E - 6 | r | ・シカ、イノシシ被害 | |
| E - 7 | q | ・八丁が沢林道(上部)崩落 | |
| E - 8 | q | ・八丁林道崩落 | |
| E - 9 | q | ・H14頃、地すべり | |
| E - 10 | q | ・H14頃、地すべり | |
| E - 11 | q | ・地すべり危険地域 | |
| E - 12 | q | ・流れ盤(林道法面)、景観問題 | |
| E - 13 | r | ・ヒル | |
| E - 14 | r | ・有害鳥獣被害。シカ、サル、イノシシ。 | |
| E - 15 | q | ・片原地区崩落(修復済) | |
| E - 16 | r | ・猿、鹿の被害。広域。 | |
| E - 17 | q | ・活断層 | |
| E - 18 | r | ・保全センターの野外のヤマビル | |
| E - 19 | q | ・道が崩れてきている | |
| E - 20 | q | ・ちょっと崩れている | |
| E - 21 | r | ・ブナの立ち枯れ | |
| E - 22 | q | ・山の法面崩壊。米ヶ沢。 | |
| E - 23 | q | ・洒水の滝。岩盤崩落。 | |
| E - 24 | q | ・S47 被害 | |
| E - 25 | q | ・S47 被害 | |
| E - 26 | q | ・S47 被害 | |

E..山の問題マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|----------------|-----|
| E - 27 | q | ・S47被害 | |
| E - 28 | r | ・ブナの立ち枯れ | |
| E - 29 | r | ・ブナ林の立ち枯れ。酸性雨。 | |
| E - 30 | q | ・神之川林道落石。 | |
| E - 31 | q | ・神之川林道落石。 | |
| E - 32 | q | ・「ガレ場」で歩きにくい | |
| E - 33 | r | ・酸性雨 | |
| E - 34 | r | ・酸性雨 | |
| E - 35 | r | ・酸性雨 | |
| E - 36 | r | ・シカ、イノシシ被害 | |
| E - 37 | r | ・シカ、イノシシ被害 | |
| E - 38 | r | ・シカ、イノシシ被害 | |
| E - 39 | r | ・シカ、イノシシ被害 | |
| E - 40 | r | ・シカ、イノシシ被害 | |
| E - 41 | r | ・サル被害 | |
| E - 42 | r | ・サル被害 | |
| E - 43 | r | ・イノシシ被害 | |
| E - 44 | r | ・イノシシ被害 | |
| E - 45 | r | ・イノシシ被害 | |
| E - 46 | r | ・イノシシ被害 | |
| E - 47 | r | ・イノシシ被害 | |
| E - 48 | r | ・イノシシ被害 | |
| E - 49 | r | ・イノシシ被害 | |
| E - 50 | r | ・イノシシ被害 | |
| E - 51 | r | ・サル、シカ、イノシシ被害 | |
| E - 52 | r | ・サル、シカ、イノシシ被害 | |

E.山の問題マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|---------------|-----|
| E - 53 | r | ・サル、シカ、イノシシ被害 | |
| E - 54 | r | ・サル、シカ、イノシシ被害 | |
| E - 55 | r | ・サル被害 | |
| E - 56 | r | ・シカ被害 | |
| E - 57 | r | ・イノシシ被害 | |

F.暮らしの知恵マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|---|-----|
| F - 1 | s | ・かやぶき屋根 | 2 |
| F - 2 | t | ・青根の水路。野菜を洗ったりする。 | 2 |
| F - 3 | t | ・「赤道を超えても腐らない水」「献上鼻曲がり鮎」の謂れ | 2 |
| F - 4 | u | ・天野とうふ(青根の水でつくる) | 2 |
| F - 5 | s | ・たんぼ(農村風景、津久井にあまりない。) | 2 |
| F - 6 | u | ・美津峰(みつみね)焼(焼物、陶器、やまなみグッズ認定品) | 2 |
| F - 7 | u | ・丹澤みそ(無添加みそ、やまなみグッズ認定品) | 2 |
| F - 8 | u | ・猪なべ、岩魚、山女の串焼(宮ヶ瀬地区) | 2 |
| F - 9 | u | ・梅ワイン、柚ワイン(清川村特産、やまなみグッズ認定品) ・緑茶(煤ヶ谷地区) | 2 |
| F - 10 | u | ・清水酒造 | 2 |
| F - 11 | s | ・お茶工場 | 2 |
| F - 12 | s | ・蕪尾根。畑(農地)風景。 | 2 |
| F - 13 | u | ・久保田酒造 | 2 |
| F - 14 | u | ・生糸、ネクタイ、スカーフ、絹製品(半原、繊維製品) | 1 |
| F - 15 | t | ・ホタルの里 | 1 |
| F - 16 | u | ・卵(中央養鶏場) | 1 |
| F - 17 | t | ・ワサビ水田 | 1 |
| F - 18 | u | ・東の誉?(大矢酒造の地酒) | 1 |
| F - 19 | u | ・海底(おぞこ)和紙 | 1 |
| F - 20 | s | ・地域ぐるみのサル対策。追い払い隊 | 1 |
| F - 21 | s | ・地域ぐるみのサル対策。追い払い隊 | 1 |
| F - 22 | s | ・地域ぐるみのサル対策。追い払い隊 | 1 |
| F - 23 | t | ・水田 | 1 |
| F - 24 | t | ・水田 | 1 |
| F - 25 | t | ・水田 | 1 |
| F - 26 | u | ・飯山のタニシ | 1 |

F.暮らしの知恵マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|-------------------------------|-----|
| F - 27 | t | ・昔の水運。碑がある。 | 1 |
| F - 28 | s | ・棚田、谷戸田の風景 | 1 |
| F - 29 | s | ・棚田、谷戸田の風景 | 1 |
| F - 30 | u | ・しし鍋 | 1 |
| F - 31 | u | ・厚木市民朝市 | 1 |
| F - 32 | u | ・盛升&地ビール | 1 |
| F - 33 | u | ・大山とうふ | 1 |
| F - 34 | s | ・大山に雲がかかると雨が降る | 1 |
| F - 35 | s | ・彼岸花のある風景(田の畦の保護) | 4 |
| F - 36 | u | ・地酒菊勇(きくゆう)(吉川醸造) | 4 |
| F - 37 | u | ・大山コマ ・伽羅ぶき ・大山豆腐 | 4 |
| F - 38 | s | ・大山の宿坊 | 4 |
| F - 39 | u | ・猪鍋 ・鹿刺 ・大山菜 | 4 |
| F - 40 | t | ・山から流れる水をとうふを作るのに使っている(大山とうふ) | 4 |
| F - 41 | s | ・水車(自然観察の森)。緑水庵。 | 4 |
| F - 42 | s | ・御師(おし)の里。蓑毛。 | 4 |
| F - 43 | u | ・地酒白笹(しらささ)(金井酒造) | 4 |
| F - 44 | u | ・路地菊(小菊。仏花。県内1位。) | 4 |
| F - 45 | s | ・堰堤(エンテイ)(石積のセキ。戸川、山ノ神、猿渡。) | 4 |
| F - 46 | s | ・堰堤(エンテイ)(石積のセキ。戸川、山ノ神、猿渡。) | 4 |
| F - 47 | s | ・堰堤(エンテイ)(石積のセキ。戸川、山ノ神、猿渡。) | 4 |
| F - 48 | s | ・堰堤(エンテイ)(石積のセキ。戸川、山ノ神、猿渡。) | 4 |
| F - 49 | u | ・峠漬(漬物) | 4 |
| F - 50 | u | ・八重桜(桜茶に浮かぶ、アイスクリーム。出荷全国1位。) | 4 |
| F - 51 | u | ・西平畑公園(ハーブ館及びハーブ畑(法面)) | 3 |
| F - 52 | u | ・しかさし、猪なべ(民宿) ・お茶 | 3 |

F.暮らしの知恵マップ

| コード番号 | 凡例区分 | コメント | 情報源 |
|--------|------|---------------------------------------|-----|
| F - 53 | u | ・松田山みかん | 3 |
| F - 54 | u | ・地酒丹沢山 | 3 |
| F - 55 | u | ・ます(養殖) | 3 |
| F - 56 | s | ・オオクチ文明西堤(鉄砲水、真すぐぶつける。) | 3 |
| F - 57 | s | ・室生神社 | 3 |
| F - 58 | s | ・鈴木友徳宅 | 3 |
| F - 59 | u | ・スッポン養殖 | 3 |
| F - 60 | u | ・豆腐(栗田)(黄ばく豆腐) | 3 |
| F - 61 | u | ・みかん、みかんワイン、キウイ、イチジク | 3 |
| F - 62 | t | ・ミズフネあるかも？ | 3 |
| F - 63 | t | ・セギ(穴)(酒匂川 山北) | 3 |
| F - 64 | t | ・江戸の堀 | 3 |
| F - 65 | s | ・大日堂 | 3 |
| F - 66 | u | ・足柄茶 | 3 |
| F - 67 | s | ・茶畑(バックに富士山、バックに大野山) | 3 |
| F - 68 | s | ・茶畑(バックに富士山、バックに大野山) | 3 |
| F - 69 | s | ・伝統的住まい。神妙寺 | 3 |
| F - 70 | u | ・ヤマメの養殖(石井城一さん。ヤマメ寿。) | 3 |
| F - 71 | u | ・丹沢まいたけ | 3 |
| F - 72 | u | ・しか刺、ししなべ、ペペレイ刺 | 3 |
| F - 73 | s | ・林業。荒廃森林整備(保安林整備) | 3 |
| F - 74 | s | ・林業(よく手の入った森林)。杉。大正の森。(箱根関所復元公事材料提供。) | 3 |

私の丹沢お奨めマップ

| コード番号 | コメント | 記入者 | マップに記入した会合 |
|--------|----------------------------------|------------|---------------|
| WS1-1 | 渋田川河畔 芝桜の名所 | | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-2 | 宮ヶ瀬湖畔 景観が良い | | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-3 | 津久井湖城山公園の桜 | | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-4 | 横浜水道青山貯水池の桜 | | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-5 | 道志川 津久井町青野原 鮎の碑前河原 川がきれい | | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-6 | 津久井町 三井大橋 景観がよい | | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-7 | 小川谷出合 紅葉・水がきれい | | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-8 | 大野山 眺めがいい | | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-9 | 洒水の滝 涼しくて美しい | | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-10 | 日向 ヒガンバナが見事 | | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-11 | 渋田川 芝桜 | | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-12 | 塩川滝 滝と岩の景観 素朴であるが美しい | | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-13 | 西平畑公園 富士山・相模湾風景 | | 第1回市町村ワークショップ |
| F1-1 | 宮が瀬ダム成 工事(60ha)の思い出、昔の様子など | | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-2 | 水と自然林 | 山田洋子 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-3 | 紅葉がきれい | 西丹会 長久保 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-4 | 原生林 | 落合 公信 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-5 | 神ノ川渓谷 | 前川清治 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-6 | 青野原(中道志川) | | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-7 | 富士山の眺めが良い | | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-8 | 丹沢ホーム周辺の河原。護岸工事のされていないところの景観が好き。 | 山本淳一 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-9 | 西平畑公園。夜景がキレイ。 | 松田町 依田 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-10 | 「やどりぎ水源林」であるので | | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-11 | 私の住んでいる場所。ありふれた場所を大切にしたい。 | | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-12 | いこいの場 | 丸山 公懿 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-13 | 津久井町中野の裏山で里山の魅力がある | | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-14 | 七沢を代表するハイキングコース | 越知(コエチ) 一久 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-15 | 大山山頂。歴史と眺めの良さ | 山口 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-16 | 神奈川県の良い材(木材)の産地 | 吉岡 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-17 | 丹沢に咲くサガミジョウロウと出会う | 小野 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-18 | (コメントなし) | 八木農寿 | 第1回地域再生フォーラム |

| | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|--------------|
| F1-19 | ゆるやかな沢の流れが美しい。学生の頃丹沢の調査でよく歩いた場所なので。 | | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-20 | 姫次～袖平山 丹沢主陵北面の景観がすばらしい | 渡邊 恒美 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-21 | 同角（どうかく）ノ頭（山頂部）構成岩盤と樹林の変化が興味深い | 渡邊 恒美 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-22 | ヤタ屋根上部。若いブナ林あり。 | | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-23 | ブナ林が美しい（臼ヶ岳南陵D1196）但し林床植生は退行 | 渡邊 恒美 | 第1回地域再生フォーラム |

私の丹沢お奨めマップ

| コード番号 | コメント | マップに記入した会合 |
|--------|-------------------------------------|---------------|
| WS1-1 | 渋田川河畔 芝桜の名所 | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-2 | 宮ヶ瀬湖畔 景観が良い | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-3 | 津久井湖城山公園の桜 | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-4 | 横浜水道青山貯水池の桜 | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-5 | 道志川 津久井町青野原 鮎の碑前河原 川がきれい | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-6 | 津久井町 三井大橋 景観がよい | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-7 | 小川谷出合 紅葉・水がきれい | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-8 | 大野山 眺めがいい | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-9 | 洒水の滝 涼しくて美しい | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-10 | 日向 ヒガンバナが見事 | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-11 | 渋田川 芝桜 | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-12 | 塩川滝 滝と岩の景観 素朴であるが美しい | 第1回市町村ワークショップ |
| WS1-13 | 西平畑公園 富士山・相模湾風景 | 第1回市町村ワークショップ |
| F1-1 | 宮ヶ瀬ダム成 工事(60ha)の思い出、昔の様子など | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-2 | 水と自然林 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-3 | 紅葉がきれい | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-4 | 原生林 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-5 | 神ノ川渓谷 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-6 | 青野原(中道志川) | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-7 | 富士山の眺めが良い | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-8 | 丹沢ホーム周辺の河原。護岸工事のされていないところの景観が好き。 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-9 | 西平畑公園。夜景がキレイ。 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-10 | 「やどりぎ水源林」であるので | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-11 | 私の住んでいる場所。ありふれた場所を大切にしたい。 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-12 | いこいの場 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-13 | 津久井町中野の裏山で里山の魅力がある | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-14 | 七沢を代表するハイキングコース | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-15 | 大山山頂。歴史と眺めの良さ | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-16 | 神奈川県の良い材(木材)の産地 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-17 | 丹沢に咲くサガミジョウロウと出会う | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-18 | (コメントなし) | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-19 | ゆるやかな沢の流れが美しい。学生の頃丹沢の調査でよく歩いた場所なので。 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-20 | 姫次~袖平山 丹沢主陵北面の景観がすばらしい | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-21 | 同角(どうかく)ノ頭(山頂部)構成岩盤と樹林の変化が興味深い | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-22 | ヤタ屋根上部。若いブナ林あり。 | 第1回地域再生フォーラム |
| F1-23 | ブナ林が美しい(臼ヶ岳南陵D1196)但し林床植生は退行 | 第1回地域再生フォーラム |

(2) 第2回市町村ワークショップ

第2回市町村ワークショップの記録

1) 目的

丹沢大山の8市町村（秦野市、厚木市、伊勢原市、松田町、山北町、愛川町、清川村、津久井町）の行政職員と地域再生調査チームの合同ワークショップにより、丹沢の現状を把握するとともに、丹沢大山地域の再生に向けた「(行政版)将来ビジョン」について検討する。

8市町村の行政職員がそれぞれ、3つのテーマに分かれ、検討を行うことにより、広域連携の視点からの提案や、各市町村のネットワークの構築を目指す。

2) 開催概要

日時：2004.12.10. 13:30～16:30

場所：自然環境保全センター大講堂

参加者：丹沢大山の8市町村職員

(企画、観光、農林業、建設、教育、生涯学習の行政担当者)

計23名

プログラム

(壁アンケート)

1. 開会のあいさつ

2. 今日のプログラム説明

全体で各テーマの論点を共有

(リーダーが議論のポイントを1分間プレゼ)

アウトプットの設定

3. グループ討議

観光(ツーリズム)・環境教育学習グループ

なりわい再生(循環型森林資源活用)グループ

暮らし再生(歴史・生活・文化)グループ

4. 発表とまとめ

グループごとに発表

もっと聞きたいことなどについて付箋をつける

5. 今後の進め方

6. 閉会のあいさつ

3) 会場の様子



第二回市町村ワークショップでは 8 市町村から 23 名が参加し、3 つのグループに分かれ、テーマに沿って抽出された項目について検討を行いました。

4) 話し合いの概要

～グループ討議の概要～

【観光(ツーリズム)・環境教育学習グループ】

- 検討項目：1. 登山オーバーコースと観光振興策
2. 環境教育・学習の市町村連携方策

| 課 題 | 提 案 |
|---|---|
| 観光振興と山のツーリズム政策が一致していない。登山等の山のツーリズムと麓の観光との分離と連携をどう図るか 各市町村に観光担当者はいるが、登山対策・オーバーコース対策等の担当者はいない | |
| (登山オーバーコース) 登山方法とルートの整理 登山者用トイレの整備と管理の方法 | <ul style="list-style-type: none"> 登山道巡視員派遣制度の継続等でオーバーコース対策手法として活用、人材育成等 今年度から始めた自然環境保護センターと地元市町村行政担当者との話し合いの場拡充 |
| (観光振興) 登山客は麓の観光客とは別であり、ほとんどお金を地元におとさない。 登山振興策と地元の観光振興を分離して考えるか。新たな登山関連、山関連の地元経済振興につながる観光客を掘り起こすか。 | <ul style="list-style-type: none"> 丹沢大山地域での8市町村間の情報ネットワーク、マーケティングなどの連携の育成 ex. るるぶ 各橋町村が独自に取り組んでいる、麓での観光ボランティアガイド育成の共通・連携化 |

【なりわい再生(循環型森林資源活用)グループ】

- 検討項目：1. 里山での今後の森林管理のあり方
2. その中での市町村の役割

| 課 題 | 提 案 |
|---|--|
| ‘40に拡大造林したが’50から山の関わりが減少したこと | <ul style="list-style-type: none"> 山への係わり復活、林産物の再生産 |
| 不在地主所有者、持ち主が複雑になりすぎている | <ul style="list-style-type: none"> 市町村・森林組合での洗い出し |
| 丹沢南麓では市民活動の場としての里山づくり 津久井・山北には林業残るが小規模 | <ul style="list-style-type: none"> 里山山村の復活、都市民との連携 山への係わり復活、林産物の再生産 |
| 県産材のコスト高 | <ul style="list-style-type: none"> 林業の集約化、流通ルートの簡素化 |
| 県産材の普及PR不足 | <ul style="list-style-type: none"> 町内材活用 安定供給をするために供給体制を整える 使える林道を復活する 林業を林道に集約させれば使えるのでは... |

【暮らし再生（歴史・生活・文化）グループ】

- 検討項目：1.郷土食おこし（食育）
 2.鳥獣被害
 3.山の風景・町並づくり

| 課 題 | 提 案 |
|--|---|
| (鳥獣被害について) ・ サル、シカ、イノシシの保護優先策と種の保存基準 ・ 山ビル被害が同時に拡大している(野焼きができない) ・ 柵である程度防げるが河川や幹線道路では難しい | この項目が最も深刻で9割ついやした。 ・ 暮らしの面からの基準づくりによる法制度の改正 ・ 広域的な対策、説明(教育)、山の利用法を考える |
| (集落の風景・街並みづくり) ・ 鳥獣対策の柵が景観を壊している ・ 田畑荒れ風景よくない ・ かつてあった各集落の特色がなくなる | ・ 荒廃農地の再生 |
| (農業振興)鳥獣被害との結びつき ・ 受皿の必要性、担い手の形成 ・ 農業を簡単にとらえている人多い | ・ 現組織、制度の見直し、情報機関を広域で作る必要あり ・ 食育事業を地域で進める。 |

~今後の進め方の概要~

各グループ毎の課題と提案(vision)を整理、2月に地域再生フォーラム、調査団の全体発表会、3月27日県民向け発表会開催。次年度は何をどうするか、提案内容を絞り継続して検討していく。できれば現在の各市町村担当者が継続して関われるシステムを工夫してほしい。

【観光(ツーリズム)・環境教育学習グループ】

県市町村環境教育関連施設へのアンケートをふまえ1月末にワークショップ、政策ワーキングとのオーバーユースの公開シンポを行う。

【なりわい再生(循環型森林資源活用)グループ】

12月に森林組合等と循環型森林資源活用ワークショップ実施、政策ワーキングとのワークショップ実施。

【暮らし再生(歴史・生活・文化)グループ】

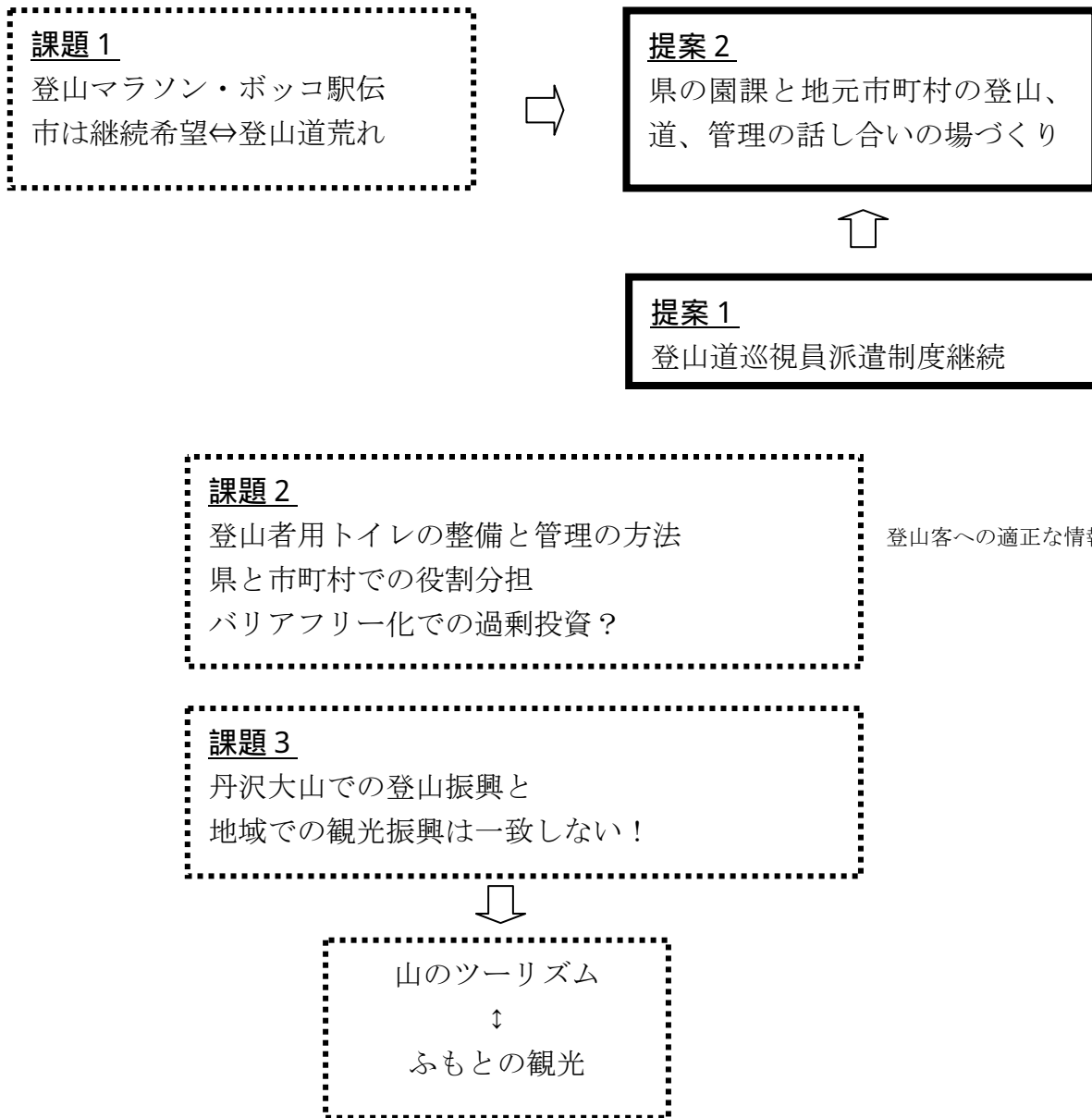
モデル地区にてワークショップや検討会、鳥獣被害の現況を把握のためのアンケート調査を実施。

丹沢大山総合調査での地域再生調査
第2回市町村ワークショップ
(2004.12.10)

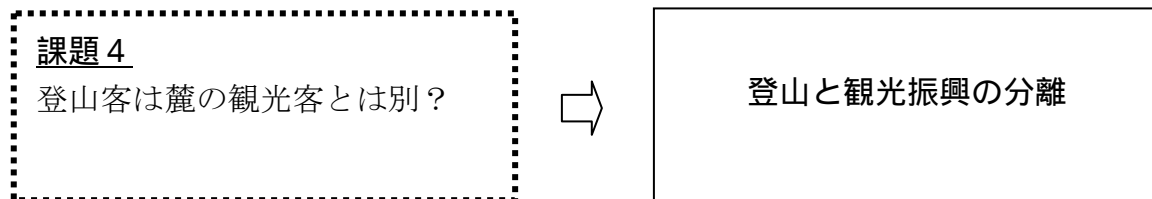
参加者リスト

| 市町村 | 所属 | 役職 | 氏名 | グループ | 備考 |
|------|---------------|-----------|-----------|----------|----|
| 秦野市 | 観光課 | 主幹 | 大津 徹 | ツーリズム | |
| | 森林づくり課 | 主査 | 和田俊雄 | なりわい再生 | |
| | 農産課 | 主任主事 | 石原 豪 | 暮らし再生 | |
| 清川村 | 総務部企画財政課 | 主任主事 | 朝倉義則 | 暮らし再生 | |
| | 建設経済部産業観光課 | 主査 | 岩澤晴夫 | ツーリズム | |
| 愛川町 | 総務部企画政策課 | 主任主事 | 中村秀太郎 | 暮らし再生 | |
| | 環境経済部農政課 | 主任主事 | 成井健浩 | なりわい再生 | |
| | 環境経済部商工観光課 | 主査 | 上村和彦 | ツーリズム | |
| 伊勢原市 | 環境保全課 | 担当主査 | 安藤隆幸 | ツーリズム | |
| | 農政課 | 課長補佐(兼)係長 | 古谷京造 | 暮らし再生 | |
| | 農林整備課 | 課長補佐(兼)係長 | 佐藤 弘 | なりわい再生 | |
| | 商工観光振興課 | 主事 | 佐藤智一 | ツーリズム | |
| | 企画調整課 | 主査 | 吉川武士 | 暮らし再生 | |
| 厚木市 | 経済部観光政策課 | 主事補 | 高谷大輔 | ツーリズム | |
| | 市政企画部企画課 | 副主幹 | 伊藤信行 | 暮らし再生 | |
| 山北町 | 産業建設部産業観光課農林班 | | 辻 和雄 | 暮らし なりわい | |
| | 産業建設部産業観光課農林班 | | 鈴木康弘 | ×欠席 | |
| | 企画総務部企画課政策班 | | 和田薫(代理出席) | ツーリズム | |
| 津久井町 | 企画政策室 | 主幹 | 大熊哲郎 | ツーリズム | |
| | 環境課 | 課長補佐 | 内貴隆志 | ツーリズム | |
| | 産業経済課林政係 | 係長 | 榎田利彦 | なりわい再生 | |
| | 産業経済課 | 主査 | 甘利康雄 | 暮らし再生 | |
| | 産業経済課農政係 | 主査 | 大勝弘之 | 暮らし再生 | |
| 松田町 | 総務部企画財政課 | 主査 | 依田貞彦 | 暮らし再生 | |

・ 登山オーバーユース



・観光振興



丹沢大山での総合的観光振興

提案 3
市町村間の情報ネットワーク連携の育成 ex. るるぶ

提案 4
麓での観光振興の為にボランティアガイド育成の共通連携化

- ・ 山に人が入ると水みちができる
 - ・ 階段がハードル状になる
- 調整中
- ⇒ 上の情報が県につながらない
 - ⇐ 県の情報が市町村につながらない

山のなりわい再生グループ

秦野市 ・「里地里山保全再生モデル事業調査」

検討中

H16・17.地域戦略策定

委員会形式？

約 1000ha ヒノキの人工林も含む

林層転換まではまだ考えていない

生物の多様性の確保...？

市場原理の中で行政が「どこに」「どのように」投入するかがポイント

・「里山推進モデル事業」 H16 ソフト

└─ 地目は農地 H17 ハード

by 農地計画課（農政事務所）県

名古屋（ナガヌキ）

雑木 } 全く手が入っていない
人工林 }

地元ボランティアによる手入
（市としての補助）

個人所有地と契約を予定

・「照葉樹の森」

with 公園緑課

H元～H16 市民を募り、植樹ボランティア

5000本 2800人（延）150～200人/年

* 植樹する場所がなくなってきた（林道建設の際の残土捨て場）

- ・ 交通の便の良いところを選定
- ・ 個人の山については承諾を得ている
- ・ 将来は鎮守の杜に
- ・ 緊急雇用 1839万（H16）
- ・ 森林づくり課

・ 地域林業

神奈川県はほとんどこれになっている。県が窓口になって補助率が good. 年間予算 万

津久井町は補助金ない

・ 一般林業

補助金 年間予算 40万（県負担分の 1/10）

愛川町 ・「里山保全推進事業」（秦野市の1年後スタート）

by 農政事務所 県

半原地区では倍は補助がつく

・ 地域林業 万？/年

・ 水源の森 万？/年

・ 丹沢地区のリーダー的存在だった

製材所、乾燥施設もある <南丹沢>里山型

- ・その他 養鶏場

伊勢原市（農林管理係） 林業の施業

55.72ha

森林 2000ha(人工林 900ha、広葉樹林 1100ha)

・地域林業

補助率（県 50%、市 50%（10%上乘せ））一番高い

他自治体に比べて高いので、来年度は下がる？

補助率が突出

枝打、間伐、別々にカウント 45ha

なかなかすごい！！ but 間伐しても 5 年たつと真っ暗（150ha/年やらなくてはいけない）

・水源の森

補助率（県 80%、市 20%）一番高い 他自治体に比べて高いので、来年度は下がる？

協力協約は 5 ha くらい

・市民活動林整備事業

提案 2

個人所有山全体の 1/3（1ha）

BS による里山保全（日本 BS 伊勢原 1 団 2 団）

市民の誰もが入ってほしいけど、所有者は『1 団体との契約に限定したい』

広葉樹 + シノ竹

シノ竹刈りに 1 年以上

夏場がたいへん！！（1 回/月）

津久井町・一般、地域、水源（伊勢原のような上乘せはない）

今年から「林政係」ができた

財産区が多い

・林道網の整備 活用

課題 2

山北町

・中山間整備事業

町中の森

・森林ボランティア

ヨズク

助役が森林ボランティアの講習会を開く（学校の授業とは別に）

・町内材活用

提案 1

「ふるさと交流センター」(駅前に建設中)

森林館をはじめ山つきに建設してきた



駅前に水と緑を PR

中心街に建設

集成材は県内産

無垢材は町内産 - 担当が伐採立会い

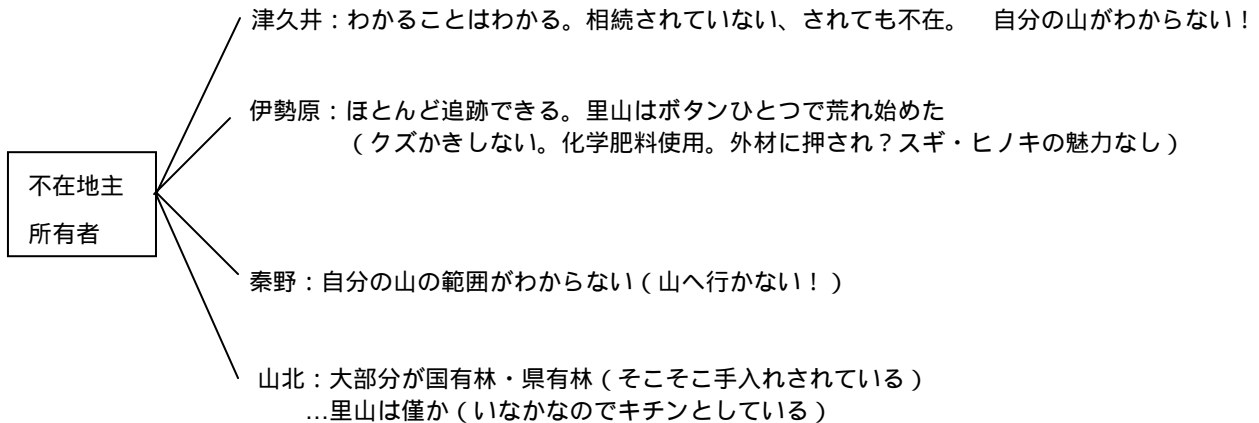
メインの大黒柱（玄倉 4 本（8m もの）、他 52 本）

7 令級の拡大を考えないと、林が離れていく

<北丹沢>林業で頑張る！

<西段沢>公有林が多い(特殊)

- ・一般、地域
多分上乘はゼロ
- ・国有林、県有林の活用



課題 1

拡大造林（40'） 山の関わりが減少（50'）

課題 3

県産材のコスト高

財産区でも手入れをしている！！（山北（わかりやすい） 秦野）
財産区は手入れする人材いない
持ち主が複雑になりすぎている
土地を貸している部分については了解を得るのがたいへん！！
荒廃林の把握 地区ごとの面積割合がわかる
雑木林は定期的に入らないと使えなくなる
どの市町村も森林づくりには関わっている

課題 4

県産材の普及 PR 不足

温泉を作る人が木を使うことを考えない！（縦割り？）
林業をやっている人が知らないのが問題
安定供給をするために供給体制を整える
使える林道を復活する
作業路は底地 底地は個人の底地 使い終わったら個人に返す
林業を林道に集約させれば使えるのでは...
林道が悪いから 山を整備しない
ここ3年がとても厳しい 荒廃林が増加
用材が適齢期になる

暮らし再生グループ

【鳥獣被害】

伊勢原市：秦野とともに H14 に県から 90 km 柵、伊勢原は 20km 整備。

シカの被害は減少。

しかし、河川、道路の箇所が問題。

また、サル 対策は難しい... 1つの地域において 1000 頭

課題 1 (種の保存ライン。国の基準。超えると OK、以下なら保存)

提案 1 暮らしの面からの新しい基準づくり

松田町：対策としてはシカが一番ではないか

山北町：対策として 酒匂川。左シカ、右イノシシ

清川村：イノシシはシカ柵を破る **課題 2**
山ビル（鳥獣が運ぶ）も同時に拡大 山ビルジェット（虫よけの配布（町））

秦野市：人とシカとの住み分け。26km 柵 畑境だと 40~50 km になる。
里に住みつく、人の食べ物は、栄養が高い。対策は、シカのかくれる場所をなくす。
しかし、荒廃地（人さまの土地）を整備 難 **課題 3**
行政 住民 の調整

津久井町：県の環境部でやっている。農政ではやっていない。もっと農政でも。

課題 2' 神奈川は保護が優先 他の県との違い
電気柵が、一番最後。
被害拡大、営農の減少 意識の低下、悪循環

清川村：登山客 山ビルキャリア
広域的な対策
説明（教育） 虫よけ対策をしてもらう **提案 2**

伊勢原市：針 広葉樹への変化の必要性。山の利用。
緑のまち、財団 非公式で研究

清川村：燃やして処理、野焼き 法的規制でムリ 法の改正 **提案 2'**

秦野市：調整する組織について **課題 2'**
山 森林組合、畑 農産課

【集落の風景・街並みづくり】


秦野市：組織での特色。集落がくつつく（連担？） 特色
具体的な対策はまだない。

課題4 各集落特色あった なくなる
田畑荒れる 風景よくない

伊勢原市：日向 あじさい、おおた しばざくら、農政課 あやめの里（15～16年経過）

厚木市：棚田の保全。広沢寺。もみじの植樹。水車 津久井、秦野。
風景と柵との関係

・設置でハイキングコースから見えない様に。

柵が風景景観をそこねる
 逆転の発想
柵によって柵を積極的に利用して風景、景観をつくる

などの動きはない

・かかし 秦野ではやっている。

【農業...誰が】

津久井町：4～5年前から、新規、増す。4～5人
神奈川県農業会議から紹介。埼玉からも、
場所の確保。家の確保（一軒家） 町の動き、対応

松田町：受皿の必要性を感じる（具体的な動きはまだ...）

課題5

山北町：荒廃農地の再生 水田（来年度）

提案5

学校の関係でたまたま。喜一郎新田。

駅前の情報施設。機関車を意識したもの。休憩。

秦野市：マスコミの影響 農家、農業を簡単にとらえる人多い

【食】

伊勢原市：食育 スローフード。そば...女性講師

松田町：御殿場線沿線。テーマ：金の掘り起こし（小田原、静岡）
第2の食産品おこし

(3) 概要パンフレット

丹沢大山総合調査での地域再生調査 第一回市町村ワークショップの記録

秦野市、厚木市、伊勢原市、松田町、山北町、愛川町、清川村、津久井町の行政職員と
地域再生調査チームの合同ワークショップ

日時：2004.8.27.

場所：自然環境保全センター大講堂

「丹沢丸かじり！ 教えてください丹沢の姿」 プログラム

1. 開会のあいさつ
丹沢大山総合調査は住民、行政、ボランティア、研究者の協働で進めたい。
2. 主旨説明
丹沢大山地域8市町村の行政職員の参加で地域の魅力発見をする。
3. 水系別で魅力マップづくり
山北・松田、秦野・伊勢原、厚木・愛川、清川・津久井の4グループで、
下記の3つのテーマ毎に、魅力、なりわい、人材を地図に書き込む。

第一テーマ「観光（ツーリズム）・環境教育学習」

第二テーマ「なりわい（循環型森林資源活用）」

第三テーマ「暮らし（歴史・生活・文化）」

4. 発表・全員で共有
5. 今後の進め方
6. 閉会のあいさつ



各グループの成果を窓に貼り出しました。



壁に貼り出せないシートは手で持って...

～発表と議論の概要～

【魅力マップ】

現状：愛川・厚木では、七沢温泉、自然教室などをはじめ施設が多数ある。伊勢原・秦野では、名水スポットや眺望の良い場所があり、ウォークラリーも実施している。松田・山北では、古いものとして「やぶさめ」等の山のハイキングコースや水、新しいものとしては丹沢湖のイベントが揚げられる。津久井・清川では、東海自然道など、丹沢へ向かうルートに人気がある。環境学習などの拠点があり1年中多くの人を訪れてくる。

総括：山の方にはたくさん出ているが、今回の大きなテーマとしている里山の方につながっていない。点だけではなくもうちょっと面でとらえていきたい。今回の丹沢総合調査では山が主要な対象となっているが、一方で、ふもととどのようにつなぐかというのがテーマだ。（糸長）

【なりわい面影マップ】

現状：愛川・厚木では、古い石切場があり、石切、石材に関する産業遺構の他はあまりない。伊勢原・秦野では、たばこ乾燥室、炭焼き小屋などがあり、炭焼きは今でもやっているようだ。松田・山北では、山北は林業の鉄道をひいていた。江戸後期の用水の遺構があった。棚田が減った。津久井・清川では、製材所が津久井に4箇所、清川に1箇所あり、清川では地産地消が行われている。

総括：かつては林業で食べていたのか。そもそも林業では食べていけなかったのか、いけるのか。皆さん悩まれたのではないかと。山の材を使う技術があったはずだと言う人もいる。丹沢大山の人達はなりわいを3つ～4つくらい持っていたのではないかと。ダムで消えたものもある。山を生かした新しいなりわいの知恵と技術を作っていく必要がある。（糸長）

【人材マップ】

現状：愛川・厚木では、黄金井酒造さん、温泉の中村さん、「たまいかん」のおかみさん。産業フロンティアなどの人材を集めるとよい。伊勢原・秦野では、山小屋のオヤジさん。ふるさと公園ソバ職人。森林組合。伝統工芸の凧、コマなど。四十八瀬川自然村の共同管理や、自治会で植樹、伊勢原の集落単位の活動も見られる。松田・山北では、ヤマメの養殖、マムシの養殖などがある。お茶（足柄茶）が多い。津久井・清川では、鳥獣保護と猟友会は同じ人が担っている。伝統芸能が残っている場所がある。

総括：誰がどんな役割を担っているのかということをも明らかにしたい。また、新たな人材を掘り出し、人材をつなげていきたい。（糸長）



成果を見ながら糸長先生が総括しました。



会場に来た方から壁アンケート「私の丹沢のお褒めマップ」にお答えいただきました。



受付をすませ...



調査の意義をスライドを用いて糸長先生が解説されました。



エリア別にテーブルを囲みました。

丹沢大山総合調査での地域再生調査 第二回市町村ワークショップの記録

——— 秦野市、厚木市、伊勢原市、松田町、山北町、愛川町、清川村、津久井町 ———

日時：2004.12.10. 13:30～16:30

場所：自然環境保全センター大講堂

プログラム

(壁アンケート)

1. 開会のあいさつ
2. 今日のプログラム説明
全体で各テーマの論点を共有(リーダーが議論のポイントを1分間プレゼ)
アウトプットの設定
3. グループ討議

| |
|-----------------------|
| 観光(ツーリズム)・環境教育学習グループ |
| なりわい再生(循環型森林資源活用)グループ |
| 暮らし再生(歴史・生活・文化)グループ |
4. 発表とまとめ
グループごとに発表
もっと聞きたいことなどについて付箋をつける
5. 今後の進め方
6. 閉会のあいさつ



第二回市町村ワークショップでは8市町村から23名が参加し、3つのグループに分かれ、テーマに沿って抽出された項目について検討を行いました。

～グループ討議の概要～

【観光(ツーリズム)・環境教育学習グループ】

検討項目：1. 登山オーバーユースと観光振興策 2. 環境教育・学習の市町村連携方策

| 課題 | 提案 |
|---|---|
| 観光振興と山のツーリズム政策が一致していない。登山等の山のツーリズムと麓の観光との分離と連携をどう図るか 各市町村に観光担当はいるが、登山対策・オーバーユース対策等の担当はいない | |
| (登山オーバーユース) 登山方法とルートの整理 登山者用トイレの整備と管理の方法 | <ul style="list-style-type: none"> 登山道巡視員派遣制度の継続等でオーバーユース対策手法として活用、人材育成等 今年度から始めた自然環境保護センターと地元市町村行政担当者との話し合いの場拡充 |
| (観光振興) 登山客は麓の観光客とは別であり、ほとんどお金を地元におとさない。 登山振興策と地元の観光振興を分離して考えるか。新たな登山関連、山関連の地元経済振興につながる観光客を掘り起こすか。 | <ul style="list-style-type: none"> 丹沢大山地域での8市町村間の情報ネットワーク、マーケティングなどの連携の育成 ex. るるぶ 各橋町村が独自に取り組んでいる、麓での観光ボランティアガイド育成の共通・連携化 |

【なりわい再生(循環型森林資源活用)グループ】

検討項目：1. 里山での今後の森林管理のあり方 2. その中での市町村の役割

| 課題 | 提案 |
|--|--|
| '40に拡大造林したが'50から山の関わりが減少したこと 不在地主所有者、持ち主が複雑になりすぎている | <ul style="list-style-type: none"> 山への係わり復活、林産物の再生産 市町村・森林組合での洗い出し |
| 丹沢南麓では市民活動の場としての里山づくり 津久井・山北には林業残るが小規模 県産材のコスト高 | <ul style="list-style-type: none"> 里山山村の復活、都市民との連携 山への係わり復活、林産物の再生産 林業の集約化、流通ルートの簡素化 |
| 県産材の普及PR不足 | <ul style="list-style-type: none"> 町内材活用 安定供給をするために供給体制を整える 使える林道を復活する 林業を林道に集約させれば使えるのでは... |

【暮らし再生(歴史・生活・文化)グループ】

検討項目：1. 郷土食おこし(食育) 2. 鳥獣被害 3. 山の風景・町並づくり

| 課題 | 提案 |
|--|--|
| (鳥獣被害について) ・ サル、シカ、イノシシの保護優先策と種の保存基準 ・ 山ビル被害が同時に拡大している(野焼きができない) ・ 柵である程度防げるが河川や幹線道路では難しい | この項目が最も深刻で9割ついやした。 <ul style="list-style-type: none"> 暮らしの面からの基準づくりによる法制度の改正 広域的な対策、説明(教育)山の利用法を考える |
| (集落の風景・街並みづくり) ・ 鳥獣対策の柵が景観を壊している ・ 田畑荒れ風景よくない ・ かつてあった各集落の特色がなくなる | <ul style="list-style-type: none"> 荒廃農地の再生 |
| (農業振興)鳥獣被害との結びつき ・ 受皿の必要性、担い手の形成 ・ 農業を簡単にとらえている人多い | <ul style="list-style-type: none"> 現組織、制度の見直し、情報機関を広域で作る必要あり 食育事業を地域で進める。 |

～今後の進め方の概要～

各グループ毎の課題と提案(vision)を整理、2月に地域再生フォーラム、調査団の全体発表会、3月27日県民向け発表会開催。次年度は何をどうするか、提案内容を絞り継続して検討していく。できれば現在の各市町村担当者が継続して関われるシステムを工夫してほしい。

【観光(ツーリズム)・環境教育学習グループ】県市町村環境教育関連施設へのアンケートをふまえ1月末にワークショップ、政策ワーキングとのオーバーユースの公開シンポを行う。

【なりわい再生(循環型森林資源活用)グループ】12月に森林組合等と循環型森林資源活用ワークショップ実施、政策ワーキングとのワークショップ実施。

【暮らし再生(歴史・生活・文化)グループ】モデル地区にてワークショップや検討会、鳥獣被害の現況を把握のためのアンケート調査を実施。

3. 地域再生フォーラム

(1) 第1回地域再生フォーラム

第1回地域再生フォーラムの記録

1) 目的

丹沢大山地域に暮らす人達や関心の高い人達の参加を受けて、地域再生チームが検討している、丹沢大山地域の再生に向けた課題やビジョンについて紹介すると同時に、丹沢大山地域の再生に関する意見交換を行う。

また、地域再生フォーラムの創設・開催によって、参加された人々や組織の地域再生に向けたネットワークが育まれることを目標としている。

2) 開催概要

日時：2004.10.16. 13:30～16:30

場所：自然環境保全センター大講堂

参加者：第1回市町村ワークショップであげられた地域住民の方々
地域再生調査チーム関係者から推薦されたの方々
計25名

プログラム

1. 開会のあいさつ

2. 主旨説明

丹沢大山地域に暮らす人達や関心の高い人達の参加を受けて、地域再生チームが検討している、丹沢大山地域の再生に向けた課題やビジョンについて中間報告すると同時に、意見交換を行いたい。

3. 地域再生チームの調査中間報告

基礎調査（データ、第一回市町村ワークショップ結果）
グループ
ツーリズム・環境教育グループ
なりわい再生グループ
くらし再生グループ

4. 質疑

5. グループに分かれての討議

「ツーリズム・環境教育」「なりわい再生」「くらし再生」の3グループに分かれて話し合う。

6. 全体討論

各グループで討議された内容報告と課題等を紹介する。

7. 閉会のあいさつ

3) 会場の様子



各グループの調査の中間報告を、スクリーンを使って行ないました。



調査についての質疑応答を、全体で行ないました。



関心のあるテーマに分かれて、グループ別で話し合いをしました。



各グループごとに、話し合いの成果を発表しました。

4) 話し合いの概要

～各グループの中間報告の概要～

【基礎調査グループ】

基礎調査としてまとめているマップや統計データの説明

(標高・水系、植生自然度、森林計画、施設、字界、各種統計データ(人口、産業、観光等))

8月に行なった市町村ヒアリング及び市町村ワークショップの概要説明

【ツーリズム・環境教育グループ】

各調査の調査項目、進捗状況等の説明

(登山道・登山、観光リクリエーション、環境教育・学習、エコツーリズム化等の調査)

【なりわい再生グループ】

調査プロセス、目標・課題・解決策・今後の調査等の説明

(目標: 林業の復興、荒廃林の回復、里山産業の復活、新産業への備え)

【くらし再生グループ】

調査の視点、モデル地区、進捗状況、課題、再生ビジョンの説明

(食の復興、水の復興、住の復興、大山街道によるアプローチ)

~ 全体質疑の概要 ~

調査のポイントや基本的な考え方、生態系の問題、管理の問題、今後必要なデータなどの質疑応答

(地域再生のポイント、自然の概念、丹沢の乾燥化、ダムの影響、森林管理の担い手の高齢化への対策、丹沢へアプローチするバスの経年変化のデータ、森林の経年変化のデータなどへの質疑応答)

~ グループ討議・発表の概要 ~

【ツーリズム・環境教育グループ】

登山道、水環境、山と里、管理、観光と里山景観、キャンプ場、子どもの環境教育等が話題となった。

- ・ オーバーユースの問題に対し、分散的な登山計画が必要。
- ・ 丹沢の乾燥化について、データをとる必要がある。
- ・ 「山の神」の分布を調べることで、里山、暮らしにとっての山の丹沢大山地域での全体像が開けるのではないか。
- ・ どこを守り、どこを使い、どこを再生すればいいか。そういう意味での丹沢大山地域での新しいゾーニングが必要。
- ・ 里山という言葉は安易に使わないほうがいいのでは？里山は人がだまって入ることはいけないとされている。
- ・ いい景観を残して、休み、交流し、体験できる環境、観光を考えたい。量より質の問題だ。
- ・ キャンプ場のマナーの問題は、利用客と経営者の双方の問題だ。
- ・ いろいろ体験できるちょっとした小屋が丹沢大山地域に分散的にほしい。「33ヶ所巡り」の感じで使えるとよい。
- ・ 子どもが自然とふれあうことで感性をよみがえらせることが必要。 ...など

【なりわい再生グループ】

丹沢の林業の履歴、林業の現状、新たな試み、これからの丹沢への展望等が話題となった。

- ・ ケヤキ、モミ、ツガ等の天然木を出荷していた。30年代後半から林業で食べられなくなった。
- ・ 現在の建築は外材8割。
- ・ 雑木林であったところへ国策でスギ、ヒノキを植えた。植えすぎて荒れている。
- ・ 内装の不燃化の法律規制が厳しい。木材利用については悲観的
- ・ 今の山がどのくらいのキャパシティがあるのかきちんと捉えることが課題。
- ・ ヒノキ油が売れている。
- ・ 丹沢は林道密度が低い 端材を出さず緑のリサイクルをする、山に返し樹木の育成に役立てるなど、丹沢での多様な利用が考えられる企業があるとよい。
- ・ 特徴的な材を建材として使うなど市場を狙ってチャンス創出。
- ・ 10~20年後、絶対に価値が出る、夢を見よう！！ この間の補充を行政で！ ...など

【くらし再生グループ】

鳥獣被害の現状や要因、その対応策や、生態系の乱れ、調査の進め方等が話題となった。

- ・農作物の被害や土壌の荒廃など、シカ、サル、イノシシ、ヒル等の被害に悩まされている。
- ・里山が崩れ、山の食が崩れた。里山が荒れて、山から直に里になってしまった。
- ・広葉樹林（ドングリなど）が無くなっている。鳥獣の食べ物ではないスギなど針葉樹林が多い。
- ・アシタバ、ノブキ等を里山に取り入れる、鳥獣が嫌いなものを植える、里山より上に鳥獣の食べ物を植える。
- ・広葉樹林の減少、上流の激流、様々な場所での放流、導水管による沢水の枯渇、ダムによる水循環の分断などが生態系の荒廃をおこしている。道志川には昔はカジカがいたが、現在はいない。
- ・方向性と実態の違い。実態が明確にされないと意味が無いのではないか。
- ・調査項目や課題を整理する必要がある。時間設定・生き物・水など、どれに重点を置くのか。 ...など

丹沢大山総合調査
第1回地域再生フォーラム参加者リスト

| 市町村 | 氏名 | 第1回 地域再生 フォーラム 出欠結果 | 第1回地域再生フォーラム におけるグループ | | |
|---------|--------|------------------------------|--------------------------|----------------|---------------|
| | | | 環境教育・ツーリ ズム グループ | なりわい再生 グループ | 暮らし再生 グループ |
| 愛川町 | 佐々木 力夫 | | | | |
| 厚木市 | 山本 淳一 | | | | |
| 厚木市 | 越知 一久 | | | | |
| 厚木市 | 丸山 公懿 | | (推測) | | |
| 厚木市 | 八木 晨寿 | | | | |
| 厚木市 | 吉岡 基二 | | | | |
| 伊勢原市 | 山口 寿則 | | | | |
| 伊勢原市 | 飯塚 正晃 | | | | |
| 清川村 | 長縄 今日子 | * | | | |
| 清川村 | 落合 公信 | | | | |
| 津久井町 | 井上 泰 | * | | | |
| 津久井町 | 前川 清治 | | | | |
| 津久井町 | 安川 源通 | | | | |
| 津久井町 | 山口 文一 | | | | |
| 津久井町 | 山口 政明 | | | | |
| 秦野市 | 佐藤 満 | | | | |
| 秦野市 | 山田 洋子 | | | | |
| 秦野市 | 小野 均 | | | | |
| 松田町(行政) | 依田 貞彦 | * | | | |
| 松田町 | 竹内 清 | | | | |
| 山北町 | 池谷 嘉徳 | | | | |
| 山北町 | 川又 正人 | | | | |
| 横浜市 | 渡邊 恒美 | | | | |
| 横浜市 | 長久保 徹 | | | | |
| 丹沢山 | 中村 道也 | | | | |
| 計 | | 25名 | 9名 | 12名 | 4名 |

: 出席、× : 欠席、 * : 出席だが交通費は受け取ってない

丹沢大山総合調査における地域再生調査 第1回地域再生フォーラム

「ツーリズム・環境教育」グループ討議における課題の整理

| 項目 | 問題点・課題 | 発言内容 |
|-------|--|---|
| 観光 | 観光競争、経済競争の原理から、質の原理を県民合意でつくる どこにも真似できない観光の創出 | <ul style="list-style-type: none"> ・観光より環境に興味を持って、客は訪れるのに、景観の問題やロープウェイ構想がある。 ・マスツーリズムからの切り替え。 |
| 環境教育 | 自然館へ、地域住民によるインタープリターをおく 3ヶ所巡りのような感じで、丹沢に自然館的な小屋をつくる | <ul style="list-style-type: none"> ・地元の人がインタープリターになる。 ・自然館のようなもので、3ヶ所巡りのような感じで、子どもを対象とした、ほったて小屋がほしい。 |
| 登山道 | 分散した登山計画、分散する様な登山道の整備 | <ul style="list-style-type: none"> ・オーバーユースの現象が起きているのは限られた場所。分散した登山計画、分散する様な登山道の整備が必要。 |
| キャンプ | マナー教育やルールづくり キャンプ場経営者の教育も必要 | <ul style="list-style-type: none"> ・キャンプに来る人のゴミの問題。利用者のマナー改善と、キャンプ場経営者の教育が必要。 |
| 里山 | 里山という言葉の定義が曖昧なまま安易に使われている 山の神の分布をおさえることが必要 | <ul style="list-style-type: none"> ・里山という言葉が安易に使われている。愛川では、里山にはだまって入れないが枝を取りに行く時はよいというルールがある。 ・里山は端山。地元での呼び名が、暮らしとの連携になるかもしれない。 ・山の神との関係性を見るため、山の神の分布をおさえる必要がある。 |
| ゾーニング | すみわけのゾーニング、結びつくようなゾーニングが必要 | <ul style="list-style-type: none"> ・この先の100年計画として、すみわけのゾーニング、都市住民のニーズや丹沢のアクションプランに結びつくようなゾーニングが必要だ。 |
| 廃材 | 避難小屋、登山道などの廃材の処理方法の検討 | <ul style="list-style-type: none"> ・避難小屋から飛ばされた屋根、登山道整備のためのワイヤーなど、廃材をどう片付けるか。 |
| 乾燥化 | 丹沢の乾燥化のデータ把握を行ない、対策を考えることが必要 | <ul style="list-style-type: none"> ・丹沢の乾燥化は保水力の低下、森の植生の退行によるものではないか。乾燥化のデータ把握を行ない、対策を考えることが必要。 |

丹沢大山総合調査における地域再生調査 第1回地域再生フォーラム

「なりわい再生」グループ討議における課題の整理

| 項目 | 問題点・課題 | 発言内容 |
|------|---|--|
| 生産 | <p>スギ、ヒノキの植え過ぎで荒れている 50年以下の材ばかりで、企業が入り過ぎても、山がすぐに丸坊主になる可能性がある チップ生産は価格ベースにのらなくなった 実験的に木材の出荷コストを出したら売値より元手がかかった 特徴的な材の活用等で市場を狙いチャンスを作る 林道密度が低い 端材の活用方法の検討 地権者の権利意識が強い</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ここは元々は雑木林であったが、国策でスギ、ヒノキを植えた。→植え過ぎて荒れてきている。 ・50年以下の材ばかり。90年生はまずない。(細い材ばかりなので)2~3の企業で十分に手が回る。それ以上の企業が入ってしまうと、5~10年で丹沢はまた丸坊主になると思う。 ・かつてはチップ生産(7000m³/年)をしていたが、S39年以降(国定公園になってからは)、丹沢から紙は出していない。*価格ベースにのらない。 ・根っこの曲がったところを、建材として使った。市場を狙ってチャンス創出。 ・1.5ヘクタールの山を借りて実験的にコストをはじめてみた。 →間伐率25%、スギ、ヒノキを6m³程度出荷した。20万円で売却したが、元手に25万円かかった。 ・丹沢は林道密度が低い。 →端材を出さず利用する→緑のリサイクルをする企業があると良い(ボード化) →あるいは、山に返して樹木の育成に役立てると良い ・地権者の権利意識が強いのがネックである。 |
| 流通 | <p>加工に重点をおいた、生産から消費までの流通ルートが必要</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・生産→加工→消費までのルートが必要。(加工に人とお金を投入) |
| 木材利用 | <p>法律の規制(不燃)の問題 木材の価値が上がるまでの行政支援が必要</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・木材利用に関しては悲観的。法律の規制が厳しい。(不燃) ・10~20年後、絶対に価値が出る、夢を見よう!!→この間の補充を行政で! |
| 管理 | <p>間伐による保水力のある山づくり</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・国有林の間伐がすごい(95年、バズーカ?)700本/ha →間伐により保水力のある山が作れる |
| 水環境 | <p>川に水がない 広葉樹への変換が必要 メダカ、カジカがいらない 砂防ダムだけに頼らない治山治水を</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・川に水がなくなってしまった!針葉樹を広葉樹に替えていくべきである。 ・メダカ、カジカがいなくなった。 ・治山治水(砂防ダムだけに頼らず)を丁寧に進めてほしい。 |
| 温暖化 | <p>今後の温暖化対策</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・この先10~20年は温暖化対策が重要なテーマとなる。 |
| 行政施策 | <p>林産家認定制度に加えて対策を</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・現在は素材生産はしていない→県では林産家を認定しているが、さらに有効な対策を講じないと、頑張りきれない。あと2年半が勝負。 |

丹沢大山総合調査における地域再生調査 第1回地域再生フォーラム

「暮らし再生」グループ討議における課題の整理

| 項目 | 問題点・課題 | 発言内容 |
|--------|--|--|
| 鳥獣被害 | シカ、イノシシ、サル、ヒル等の被害 農作物への被害、土壌の荒廃 里山の暮らしが崩れ、山の食が崩れている 山に食べるものを植えるべき | <ul style="list-style-type: none"> ・里山が荒れて、山から直に里になってしまった。 ・広葉樹林（ドングリなど）が無くなり、鳥獣の食べ物ではないスギなど針葉樹林が多い。 ・里山より上に鳥獣の食べ物を植えるべき。 ・アシタバ、ノブキなどを里山に取り入れる |
| 水環境 | 生態系の荒廃 上流の激流、様々な場所での放流、導水管による、沢水の枯 渇ダムによる水循環の分断など 実態把握の必要性 | <ul style="list-style-type: none"> ・広葉樹林が少なくなって、生態系が荒廃している。 ・道志川には昔はカジカがいたが、現在はいない。 ・川については方向性と実態は違う。 |
| 今後の進め方 | 調査項目や課題を整理する 重点の検討 | <ul style="list-style-type: none"> ・時間設定・生き物・水など、どれに重点を置くのか。 |

丹沢大山総合調査における地域再生調査 第1回地域再生フォーラム

全体討議における課題の整理

| 項目 | 問題点・課題 | 発言内容 |
|-------|--------------------|--|
| 調査の重点 | どこに重点をおいた地域再生なのか | <ul style="list-style-type: none"> ・地域再生とは、何にポイントをおくのか。森林を守ることに重点をおくならば、広葉樹林の拡大が大切だ。 →森林再生も含め、バランスよく考えていく。(調査チーム) |
| 自然の定義 | 自然をどのように捉えているのか | <ul style="list-style-type: none"> ・自然をどのように捉えているのか →自然の捉え方は難しい。木を切るのか切らないのかということも課題だ。学習の場が必要と思う。(調査チーム) |
| 自然遷移 | 山を自然遷移にまかせてはどうか | <ul style="list-style-type: none"> ・手入れする人が高齢化すれば、自然も手が入らなくなる。山は放っておいてもいいのでは？それも自然の姿ではないか？ →自然の概念も、放っておく自然、使って豊かになる自然など様々だ。自然と人がどう折り合いをつけていくか。高齢化の問題は担い手の問題であるから、交替で考えればよい。その時、地元の財産権の問題などがあるが、このような社会的契約をどう折り合いをつけるかは、行政の制度の問題だ。(調査チーム) |
| 森林の変遷 | 年代を追った森林の変化の把握 | <ul style="list-style-type: none"> ・手入れ不足と言われる山は、かつてかやと(茅場)だったところが多い。鳥獣の被害が問題というが、それだけを取り上げるのではなくこの問題と密接であることを認識すべきだ。 |
| 暮らし | かつての村の暮らし、土地利用の調査 | <ul style="list-style-type: none"> ・旧村役場の文書で戦前の村の植生がわかるものがあり、桑畑の量なども調べられるので参考にしてほしい。 →かつての村の暮らし、土地利用を調べたい。(調査チーム) |
| 交通 | 丹沢へアプローチするバスのデータ把握 | <ul style="list-style-type: none"> ・渋沢から大倉へ行く路線の昭和30年代、50年代、現在のバスの本数と乗降客数を調べてはどうか。 →バスの件は小田急とも検討したい。(調査チーム) |
| ダムの影響 | ダムが水と土の再生に与える影響の把握 | <ul style="list-style-type: none"> ・水と土の再生の問題について。人工湖はそれぞれ人間がつくったダムだが、再生にどのような影響を与えているのかという調査はされているのか。 →災害がこわいと地元が言い作ったものの、土砂で埋まり持たないということが繰り返されている。どのような持続的な人工物が考えられるかということが、政策提案の重要なテーマだ。(調査チーム) |

丹沢大山総合調査 第1回地域再生フォーラムの記録

開催概要

日時：2004年10月16日（土） 午後1時から5時10分（4時間10分）

場所：自然環境保全センター 大講堂

参加者：8市町村関係住民

地域再生チーム調査グループからの推薦者

チーム関係者

主催：丹沢大山総合調査団地域再生チーム

フォーラムの記録

開会のあいさつ

地域再生チームリーダーのあいさつ（糸長）

自然環境保全センターのあいさつ（原）

1．丹沢総合調査と地域再生フォーラムの概要説明

丹沢大山総合調査の概要（糸長）

地域再生チームの調査概要（糸長）

地域再生フォーラムの目的と概要（糸長）

2．第1回地域再生フォーラムの目的と進め方

目的と進め方

- ・全体の流れ及び当日プログラムの説明（糸長）

今日、このフォーラムには地域再生チームのメンバーはあまり来ていない。今お見えの方々は今回初めての参加である。今日の主要な目的は、我々がやってきたことを査定してもらうことだ。それぞれの分野から、厳しい評価や、必要な情報や人材などを教えてほしい。メニューは広げているので、皆さんの関心や活動に関連して、ポジティブ、ネガティブ両方の意見がほしい。

2回目は、今回とその後の詳しい調査を含めて、シナリオに近づけ、年明けに共に討議したい。

参加者紹介

- ・簡単な自己紹介（全員）

3．地域再生チームの調査中間報告（配布資料参照）

基礎調査

[丹沢大山基礎調査マップの概要]

- ・各マップの説明（橋本）

標高・水系図

- ・標高300mのラインは里山のライン、800mのラインはここから上は県立公園と

なるラインである。

・水系は、酒匂川水系、金目川水系、相模川水系に分かれる。私たちは水系ごとの捉え方を大切にしており、市町村ワークショップも水系別でグループに分かれて行った。

植生自然度図

森林計画図（樹種）

森林プランゾーン図

施設図

字界図

・将来はこの情報に統計データを取り込み、地域性を出していきたい。

国定・県立公園区域図

都市計画区域図

丹沢大山総合調査エリア 8 市町村各種統計図

・人口の少ないところは清川村の 3000 人、多いところは厚木市の 22 万人である。

・産業は、愛川町以外は似たような産業構造である。

・延べ観光数の多いところは清川村の 2700 万人である。

[市町村ワークショップの概要]

・市町村ヒアリングの説明（橋本）

8 月上旬に市町村ヒアリングを行った。各市町村の概要や総合計画、「ツーリズム・環境教育」「山のなりわい再生」「暮らし再生」の 3 テーマ等について話を聞いた。丹沢大山総合調査についての認識はこれからという印象を受けた。里山の整備には関心が高く、山のなりわいについてはこれから施策を打ちたいところが多かった。また鳥獣被害の話が多く出た。

・第 1 回市町村ワークショップの説明（奥村）

8 つの市町村から 30 名の行政職員が参加し、丹沢の様々な情報を地図におとす作業を行った。丹沢をテーマに集まることは滅多にないとのことで顔合わせの意味も含め、集まった。水系別に 4 つのグループに分かれ、魅力マップ、なりわい面影マップ、人材マップなどをつくった。

魅力については、自然教室などの施設が多いこと、ウォークラリールート、ハイキングコース、名水、東海自然道などいろいろな歩き方を報告してもらった。総括として、山の上にいろいろな魅力が出ているが里の暮らしとのつながりが見えにくいとの話があった。

なりわいについては、古い石切り場の遺構、煙草の乾燥室、炭焼き小屋、林業の鉄道、江戸後期の用水などがあがった。総括として、丹沢大山では、いろいろな、なりわい手段を組み合わせで持っていたのではないか、その様子を解きほぐしながら新しいビジョンをつくっていききたいとの話があった。

人材については、丹沢で活躍する様々な方の知恵を借りながら地域再生を進めていくために、いろんな視点で紹介いただいた。温泉、お酒をつくっている人、山小屋のおじさん、ソバ職人、森林組合、伝統工芸など様々なテーマに沿った方々を紹介いただいた。

・私の丹沢のおすすめマップの紹介（奥村）

私の好きな丹沢の魅力を市町村ワークショップと今日のフォーラムの受付後に、地図に記してもらった。赤いシールが行政の方が記したところで、山の周辺や町場の方に多い。黄緑のシールは今日みなさんに記してもらったところで、万遍なく山奥まではられており、魅力をよくご存知であると思う。今日は深いお話を聞けると楽しみにしている。

ツーリズム・環境教育グループ

[調査の概要]

・概要（藤沢）

構想を進めていく上で必要となる調査として進めている。「登山道・登山にかかわる調査」は登山に関わる団体へのアンケート調査、「観光リクリエーションにかかわる調査」はキャンプ場やツアー業者へのアンケート調査、「環境教育・学習にかかわる調査」はボランティア団体やビジターセンターのプログラムを整理、「エコツーリズム化にかかわる調査」は国内事例調査と先進事例の視察、「GISによる登山道施設・地域資源等のデジタル情報化」は、デジタルデータをウェブ上に載せることで県民に情報提供したり、整備に向け有効活用してもらう。

・各調査の調査項目、進捗状況等の説明（藤沢）

登山道・登山にかかわる調査

- ・ 登山道実態調査は、丸太階段や水切りが機能しているか、今後どのように整備するか、データベース化するため行っている。ボランティアが山に登ってチェックし、データベース化を図る。好きな時に記入してもらうようにしている。
- ・ 登山道利用人数調査は、丹沢ボランティアネットワークの協力で、9山頂25箇所カウンター調査を実施する。
- ・ 登山道施設の整備状況及びカルテ化は、事務局レベルで整理を行う。利用者ニーズ、侵食状況、特別保護区に入っているかなど、チェックし、これまでの登山道整備のあり方を評価する。これをもとに、一気に整備するのではない、段階的整備を考える。簡単なものはボランティアによる整備を行うなど、丹沢大山における新しい登山道整備のあり方を考える。
- ・ 登山実態等に関わるアンケート調査（団体）は、登山団体の一般登山者へのアンケートで、35団体約600名を対象とし、郵送で行った。登山との関わり - どのような登山のスタイルか、丹沢大山について - 登山回数、魅力、登山者の視点での変遷、施設整備について 丸太階段等施設表か、オーバーユース状況等について調査した。
- ・ 登山実態等に関わるアンケート調査（一般）は、一般の丹沢・大山地域に訪れる登山者を対象とした調査で「みろく山の会」「西丹沢の自然にふれあう会」の協力により実施していく。

観光リクリエーションにかかわる調査

- ・ キャンプにかかわるアンケート調査は、8キャンプサイトで調査員が調査票を渡し書き込む方法で実施し、313票が回収された。キャンプでの楽しみは、

自然の涼感を楽しむ、水辺での遊びなどがあがり、各地区別の傾向はみられない。魅力としては自然がよい、車で入りやすい、都市に近いなどがあがった。キャンプ以外の目的では、ドライブ、自然観察などが多い。オーバーユースに対しては、ゴミのポイ捨てへの意識が高い。再生にかかわれることとしては、ゴミの持ち帰りや、植生を踏み荒らさないことが多い。金銭面での支援ではキャンプ1回につき100~200円が多い。

- ・ 旅行・観光業者に対するアンケート調査は、マスツーリズムからエコツーリズムへの可能性調査である。エコツーリズムは、従来型の観光と違って地元の自然を持続的に活用したいという新しいスタイルである。大手業者もエコツーリズムをいいたしているが、地元の資本がきちんと入った利益追求型にならない方が考えられるか、そういう意味でのアンケート調査である。

環境教育・学習にかかわる調査

- ・ ビジターセンター等施設に対するヒアリングは、ビジターセンターの実施プログラムについてヒアリングした。それぞれ明確な活動目標を持って、来訪者にあわせ実施している。
- ・ ボランティア団体・活動団体に対するアンケート調査は、20施設、50団体にアンケートを実施する。

エコツーリズム化にかかわる調査

- ・ 国内事例収集整理は、先進事例地でのプログラムやフィールドについて調査を行う。「ホールアース自然学校」は、学生団体の受け入れに実績がある。「いしかわ自然学校」は県内で行われている自然体験活動を統括的にまとめている。「東京都奥多摩地域」は丹沢・大山とフィールドも近く、調査チームも活動している。「足尾環境学習センター」は学校団体による植林を行っている。「乗鞍山麓・五色ヶ原」は条件(ガイド)付きで、1日の入山規制を行っている。ガイドがつかないと入れない。
- ・ 先進事例地視察・現地調査は、前述の5つに事例調査に先駆け、屋久島の調査を実施した。屋久島は、かつて林業経済の島であったが、産業経済へ転換中である。オーバーユースに対する対策、環境保全活動が行政レベルに達したものの役所的施設の対応の問題などがある。大学がボランティア的に参加していることでの支えも大きいといえる。

GISによる登山道施設・地域資源等のデジタル情報化

- ・ 登山ルート、展望地図、水系図、施設図、交通図、ボランティアネットワーク図など6つの図面をさくせいする。随時データを追加していく。
- ・ まとめ(糸長)

山のなりわい再生グループ

[調査の概要]

- ・ 調査プロセス、基本的な課題の説明（富村）
 - ・ 問題解決に向け、丹沢における森林林業の成り立ちと履歴、自然的条件を解析する必要があるが、問題はわかっているだろうというところから、問題を提示し、解決方法を討議する、わからないところは調査するというローリングで回していく。現在は課題を出して、留まっている。丹沢の森と林業を知るほど難しい問題が浮かび上がる。今日は木材加工や林業の方が集まっているので、いろいろと意見を聞きたい。
 - ・ 都市近郊林であるがゆえ、林業圏ではないということが、社会的問題としてベーシックにあり、林業家が離れていった。80年代からは回復したが、急傾斜地が崩れ、レキを積んだ。緩傾斜地路線の拡大森林も含め、シルト系火山灰が日常的に流れることによる荒廃が見られる。シルト系火山灰は自然的条件であり、時間的に放っておくとますます荒廃する。
 - ・ 経済的にも林業を切ろうという条件の中でなりわいを考えていく。荒廃した林を基本間伐なりして、なりわいとして木を使っていく方策をどこかで考えなければいけない。来年の今ごろ明るい報告が出ていけばいい。時間をおいてみなさんと議論して考えていきたい。
- ・ 基本的な課題
 - 森林の荒廃は関東大震災から80年続く
 - 現在は緩傾斜地からの粘土質土壌からの侵食が深刻
 - 荒廃林の強度間伐が全域で必要
 - 多くの私有林の所有者不明、境界不明
 - まともな林業が長く行なわれず、補助金による保育作業が中心
 - 山側からの生産が安定せず、川下側も使いづらい
 - 利用可能なバイオマス資源も不足
 - 林業の担い手育成がますます困難に
 - 丹沢地域に山の暮らしがほとんど無くなってきている
 - 数多いボランティアも個々に活動
 - 公的資金の効率的・集中的活用
 - 地域資源の再掘り起こし
 - 都市民を巻き込んだ新産業・新村の創出の必要性
 - 行政・市民・ボランティア等が協働して管理する機構づくり
 - 1000年を生きるプラン（化石資源・エネルギーからの脱却）
- ・ 所有権を抜き、管理権を行使していくことを考えていく。所有者を集め集団間伐をしていく。少数の林業家がかんばっているだけという現状がある。上流下流のギャップが、林業だけでなく大きい。
- ・ まとめ（糸長）

暮らし再生グループ

[調査の概要]

- ・ 概要、調査目的、内容（視点、モデル地区、進捗状況）(栗原)
- ・ 丹沢大山地域における暮らしの再生からルネッサンスを目指して、現地調査をもとにそのシナリオを描く。シナリオを描くにあたり、農業の振興策、新しい食文化の提案、鹿など鳥獣を食する文化創造、湧水文化・親水文化とツーリズムの検討、山里暮らし文化の魅力の再評価と発信、定住化策、里山・山里ツーリズム・交流振興、鳥獣との棲み分け、歴史と暮らしの文化再考ツーリズムの検討をポイントとしている。
- ・ アプローチは、水、食、住の3本の柱と大山街道である。それぞれが現在を把握し、その上で魅力、暮らしの再発見をし、将来を見据えた再生、ルネッサンスを考える。
- ・ 江ノ島街道が大山街道と関係しており、江ノ島街道が日大キャンパスから近いことや、丹沢大山がキャンパスから見えることなどから、モチベーションがあがっている。
- ・ 調査は食、住を中心に行っている。「食の復興」は、農（縄文農耕、山、農業）、食（食文化、食生活）という2つの視点で行っている。「住の復興」は、生活圏域、生活空間、生活道具という視点で行っている。
- ・ 進捗状況は、4～6月は文献調査、その後は現地調査を行っている。
- ・ 中間結果

「食の復興班」(日暮)

山を捉える3軸（山を暮らしの糧にする、山を楽しむ、山を尊ぶ）、コントローラーとしての人で方向を考える

・ 食の側面から生活を良くするには、調査して構想を出すこと。食事様式だけ見ても復興は困難で、消費、流通、生産を一体に捉えていく。生産の条件、環境、トイレの問題まで捉える。

・ 現地主義で行っている。現地を見て、話して、方向を考える。その中でもモデル調査地区はべたで歩く。

・ この地域における特徴、改善点、特産品などを調べる。特産品を改善の核にするには？生産と連動させるには？

“山”の食事ルネッサンス（粉食文化）

・ 夏はそばが米を上回る地域。縄文時代、粉を挽く石は西丹沢でとられていた。横浜、東京方面に出していた。一万年近い歴史を持つ。

・ かつては貧しさの象徴だったが、本来の食生活の豊さの象徴にしたい。それを進めるには食材生産をどうするか。この地域の農業環境はきびしい。斜面等で生産状況悪い耕地、市場が狭隘、鳥獣被害がひどい、庭いじりの農業など。だからこそいきる道、方法がある。

“山”の農業ルネッサンス（丹沢・大山オルタナティブツーリズム）

・ 自然とどう折り合いをつけるか。人間の暮らしが軸になって、そこから自然を考える。だから自然をつぶしてはいけない。本当の共生とは、動物が上に

いられる環境だ。

- ・バッファゾーンの農業のやり方を考える。
 - ・オーバーユースに対しては、登山しなくても下で楽しめる場所をつくる。
 - ・この地域の農業は一万年の歴史を持っている。平地よりはるかに盛んであった。石でつくったクワが大量に出てくる、黒ぼくが多い。
 - ・バッファゾーンとしての「まほろばの園生」ゾーンは、縄文アグロフォレストリ、健康祈願の山、本草・アロマセラピー、リフレッシュ農業などの要素が入る。
 - ・「山の棚田」は、風を見る、近づくと虫が飛ぶなど、日本の原風景を残すところである。
 - ・「山裾の農業」は、多様な活動、そのオルタナティブである。多様なことにより高度化していく。
 - ・山の農業ルネッサンスというのが調査の方向である。

「住の復興班」(栗原)

調査資料一覧

集落図(玄倉)

- ・調査は玄倉が中心だが、青根、蓑毛での調査も加えシナリオ化していきたい。
- ・過去、現状を把握し、現地を歩き集落図をおこす。
- ・玄倉では、水に関するもの、畑でなにを作っているか、何に対する防護柵などを調べている。
- ・課題(調査許可書、生活技術士の件)、再生ビジョン(栗原)
 - ・いろいろなところをたらいまわしにされ、許可書を求められる。
 - ・食の調査では、生活技術士に費用がかかる。
 - ・シナリオ案にもとづき、ワークショップを開催し、地元の人と一緒に考えて修正していく。

4. 質疑

質疑に向けて

- ・まとめ(糸長)

全体について意見、質問をいただきたい。私は丹沢・大山への関わりがあまりなかったため地域再生をどう考えていけばいいのかと考えている。事業としては、2003年度よりワークショップが始まり、生き物の再生だけではなく地域の活力が必要だとの声があがり、地域再生がテーマとして加わった。予算は環境省の自然再生を使っているので人間再生には使えないが、自然再生には人間再生が必要との捉え方をしている。どのようにするかについては、国定公園や林業を切り口として考えている。県有林はモデル的取り組みも見られるが、私有林はない。総合的な山の評価の視点が弱い。地元の暮らしを見ると、例えば猿害などは、猿が住むところに団地をつくる、山で食べるものがなく里におりてくるなど、様々な原因がある。解決の方向を地域総意で考える必要がある。山の民、里の民、都

市の民が大きなフレームとなっていない。行政のレベルでも、このようなテーマは初めての取り組みという状況だ。私たちチームのできることは、まず、課題の整理と再生に向けたシナリオの提案と捉えている。

質疑応答

[質疑応答 1]

・ 質疑（落合）

地域再生とは、何にポイントをおくのか。森林を守ることに重点をおくならば、広葉樹林の拡大が大切だ。

登山道は昔のままがいい。尾根に行くのが登山道であるのに、最近は私有地でも、中腹の道を抜けていく。

レジャーを楽しむ定年後の人が多い。定年後の県の職員など、元気な人に山の手入れをしてもらっては？

・ 応答（糸長）

森林再生も含め、バランスよく考えていく。解決の方策はいろいろ出ているが、問題はどこに公共事業としてお金を落とすかだ。政策、プログラム、事業投資と切り離して考えたい。

[質疑応答 2]

・ 質疑（不明）

丹沢全体の水位は下がっているのか。乾燥化は進んでいるのか。

・ 応答（糸長）

乾燥化は、土と水のチームの担当で、東と西に分かれて調査している。関連として、先日の報告会で青木先生より、里山のダニが山の上のほうへあがっており、地球温暖化の影響で、昔と今の山が違うとの話があった。

11月に他チームとの合同のセミナーが予定されているが、ぜひ出席いただき、森林再生のことも、話題にしてほしい。

[質疑応答 3]

・ 質疑（不明）

自然をどのように捉えているのか。（聞き取れず、要確認）

・ 応答（糸長）

自然の捉え方は難しい。木を切るのか切らないのかということも課題だ。学習の場が必要と思う。

[質疑応答 4]

・ 質疑（津久井町・井上）

ツーリズム・環境教育の分野で、丹沢にアプローチするバスの状況のデータが抜けている。今は、県と町がお金を出し合い、路線を維持している。渋沢から大倉へ行く路線の昭和30年代、50年代、現在のバスの本数と乗降客数を調べてはどうか。

玄倉集落の報告があったが、そこは炭焼きと養蚕が主産業だった。旧村役場の文書で戦前の村の植生がわかるものがあり、桑畑の量なども調べられる。参考に

してはどうか。

・ 応答（糸長）

バスの件は小田急とも検討したい。

かつての村の暮らし、土地利用を調べたい。明治の迅速図でも山をどこまで使っていたかわかる。私は藤野町に入って活動しており、昔の航空写真を見たが、かなり活用している。山からひいてきたのはここ20年である。

[質疑応答 5]

・ 質疑（不明）

高齢化の要素をこの調査の中でどう捉えているか。アグリは自然、カルチャーは手入れ、手入れする人が高齢化すれば、自然も手が入らなくなる？山は放っておいてもいいのでは？それも自然の姿ではないか？（聞き取れず、要確認）

・ 応答（日暮）

寄地区には調査に入っているが、栗林にあしたばを植えるなど、古い時代にも山を農耕に使った形跡がある。山は昔から人が管理してきた。それを止めないでいくべきだ。

高齢化の問題だが、外部の人もふくめ、高齢者の力を活用するシステムをつくっていったらどうか。

・ 応答（糸長）

自然の概念も、放っておく自然、使って豊かになる自然など様々だ。対馬の集落に行った時、荒廃しアシ原になった農地を見て、自然が豊かだと言ったら、地域の人に、「昔の方が豊かだった、私たちは糧になるものがないと豊かではない」と言われた。

オーバーユースの問題。縄文の時代と今では人口密度も違う。

自然と人がどう折り合いをつけていくか。高齢化の問題は担い手の問題であるから、交替で考えればよい。地元の問題だから地元の人がやるということではなく、やりたい人、やらなくてはならないと思う人などが関わればいい。その時、地元の財産権の問題などがあるが、このような社会的契約をどう折り合いをつけるか、それは行政の制度の問題である。

[質疑応答 6]

・ 質疑（中村？）

データとして、年代を追った森林の変化を入れてほしい。昭和40頃までは、かやと（茅場）が残っていたが、時代がかわり利用されなくなって、スギ・ヒノキの林に変わった。手入れ不足と言われる山は、かつてかやとだったところが多い。鳥獣の被害が問題というが、それだけを取り上げるのではなくこの問題と密接であることを認識すべきだ。都市の人口はもとに戻せないが、山岳部の森林をもとにもどすことは、努力すればできる。

・ 応答（富山）

津久井の写真を入手している。詳細に判読すれば、・・・（聞き取れず、要確認）

[質疑応答 7]

・ 質疑（中道志川トラスト協会・前川）

水と土の再生の問題について。人工湖はそれぞれ人間がつくったダムだが、再生にどう影響与えているのかという調査はされているのか。

道志川は再生不能の状況であり、ダムの70%は役にたたず、下流で力いっぱい運動してもだめだ。道志川黒書をつくりたいくらいだ。

・ 応答（糸長）

ダムについては、土と水の再生チームでは調査していないが、生き物の再生チームでは、砂防えん堤として大きなテーマになっている。問題だとして以前から指摘されているものの、つくり続けられており、行政の公共事業のあり方が問われている。災害がこわいと地元が言い作ったものの、土砂で埋まり持たないということが繰り返されている。どのような持続的な人工物が考えられるかということが、政策提案の重要なテーマだ。丹沢だけではなく全国的な問題だ。氾濫したら農地補償するようなアメリカ式もあるが、どこで地域合意できるかどうかであろう。河川法も変わったので、今までのような土建中心ではない、物事の進め方が考えられるのではないか。

先日の生き物チームの報告にあったが、ハコネサンショウウオは、産卵の時には完全な暗黒の環境が必要で、それには土石流の中が一番いいそうである。人間のニーズと自然の多様なニーズをどこで折り合いをつけるかというのは、単純な話ではない。

企画部会の政策担当の **はやみ** 先生の言っているエコロジカルマネジメント・・・（以下不明）

5 . グループに分かれての討議

* 各参加者は、3グループの中で関心の高いグループへ行って、グループ討議を行なう。

* 内容は別紙の各グループのまとめを参照

[グループ討議]

- ・ ツーリズム・環境教育グループ（進行：糸長）
- ・ 山のなりわい再生グループ（進行：富山）
- ・ 暮らし再生グループ（進行：栗原）

6 . 全体討論

* 各グループでの討議された内容報告と課題等の紹介を行なう。

* 内容は別紙の各グループのまとめを参照

[各グループの発表]

- ・ 暮らし再生グループ（発表：栗原）

暮らし再生グループが提案した、再生に向けた5つのポイントについて意見交換をした。

まず鳥獣被害について。サルは、昔はいなかったのに今はいる、イノシシやシカがヒルを連れてくる、シカが栗を食べるので収穫できないなど。サルは学習してしまっているの、サル自体の暮らし再生も必要ではないか。

川では、カジカやアユが減っている。また、アユが戦闘性を失い、生態系が変わってきているため、川を整備しなければならない。

ポイント 「鳥獣との棲み分け」については、棲み分けより鳥獣を生き物として捉えた方がいいとの方向性が出た。

サルがなぜ出てくるのかということ、ブアツファゾーンとしての里山が蝕まれているということだ。里山にアシタバを植える、鳥獣の嫌う食物を植えるなどの対応が考えられる。また広葉樹を植えることは、山の再生ともつながる。

川の整備はポイント 「湧水文化・親水文化とツーリズムの検討」が関係してくる。これができて、ポイント 「歴史と暮らしの文化再考ツーリズム」につながるのではないかと。

調査については、ダムや、ダムがつくられたことによる変化など、実態把握の必要性がある。また、課題や調査項目をわけて整理し、歴史的に暮らしを把握すること、時間設定、水、生き物など、どこかに重点を決めて進めたほうが良いとの指摘があった。

・山のなりわい再生グループ（発表：奥村）

かつてはチップを7000m³/年、生産していたが、昭和39年に国定公園になってからは、丹沢からは紙は出していない。昔はそういう産業があったが、価格ベースに乗らなくなった。

佐藤林業さんの話では、今は、択伐により2~3000m³が出ているとのことだ。

ヒノキ油もけっこう売れている。北海道や山口ではヒノキの葉を出しており、いろいろな形で売りつくす工夫がされている。

丹沢は林道密度が低いので、そのためには端材を出さず利用しつくす工夫や、山に返すなど、資源を無駄なく使うことが大事だ。

全山歩かれた八木さんからは、寺院建築をしようにも、ヒノキは吉野、チークはビルマ、ピーラーはカナダ、カナダ産が台湾経由で入ってきたりと、日本の材はほとんど使われないのが現状との話があった。

かつて震災の時には、中津川の流木が川中に敷き詰められ、いなばの白ウサギのように、その上を歩けるほど、モミ、ツガが流れてきた、

そもそも深川の方に1日3回、1回2本モミ、ツガを出したのが、ここでの（私の？）林業のってもいい。

国策でスギ、ヒノキになって50年たち、植えすぎもあり、手入れもせず荒れている。

昔はほとんど農林業兼業で、家庭でもニワトリ、豚、牛をかっていて、上手いサイクルで生活していた。

1.5haの山を借りて間伐材を出し、20万で売ったが、経費に25万かった。採算ベースに乗らない。山の手入れには100%補助金がつくにもかかわらず、そのような体制が整備されていないのが大きな課題だ。

俳句用の短冊に使われたり、根っこのまがり建築用材として重宝がられたりと、今の市場をにらみながら、いろいろな形で売り出すことが大事だ。

世界の用材は危機的状況にあるため、10~20年持ちこたえれば、この先はバラ色

の夢が見られる。我慢する瀬策を行政で頑張ってもらいたい。

地権者の権利意識が強く、実際活動している人がいくら手入れしたくても、入りにくい。

今年はイノシカが異常にすごい。昨年まではそんなに見なかったことから、違いを見つけて原因を探る必要がある。

治山治水については、砂防ダムに頼らず、丁寧に進めていく必要がある。そもそも川に水がなくなった。メダカ、カジカがいなくなった。針葉樹から広葉樹にかえていく必要がある。

生産から消費者へのパイプをつくる。その途中で加工という付加価値をいつけることが大事だが、これがけっこう大変という話もある。

木材利用を考えると、阪神大震災の時も相場はあがらなかった。法律の不燃に対する規制も厳しく、木材が使いにくいなど、悲観的要素がある。

丹沢は50年以下の材ばかりで、90年性の凄みのある木が少ない。総量はそんなに多くないはずで、2~3の企業でまわしていける。あまり活用するとすぐ丸坊主になる。どのくらいのキャパシティがあるか調べる必要がある。

・ ツーリズム・環境教育グループ（発表：系長）

登山道について。以前はやぶだったところがなくなり、今ではどこでも歩ける。オーバーユースが問題だが、点的に集めるのではなく、分散的な登山計画が必要だ。

水について。丹沢の乾燥化がどうなっているのか、データを採りたいとの提案があった。

山と里について。際を里山という。入る時にお神酒を上げていた。昔はどのくらいまで入っていたのか。「山の神」の分布を調べることで全体像が開けるのでは。今日の資料にも300mのラインが示してあるが、大体そのあたりになる。言葉の問題で言うと、里山というのは研究者が使いはじめ広まったが、この辺では、端山といい、際を意味する。自分たちの暮らしの里を意味する。昔は、里山は国が管理していて勝手に入れなかったが、山は共有林的な形で使っていた。里山という言葉が安易に使わない方がいいという提案があった。

管理について。どこを守り、どこを使い、どこを再生すればいいか。昔の里山のゾーニングではなく、そういう新しい意味でのゾーニングを、検討する。管理したい人や水源保水も含め新しい視点で考えた方がいい。

里山の景観がらみでの観光について。ロープウェイの問題が、伊勢原との競いの中で厚木から出て来た。一方で地元の旅館業は若い人達も含め反対である。大山、七沢は丹沢大山の入り口である。いい景観を残し、休んでもらい、交流し、体験する。昔と違い、癒しや憩いの時代、人が来ればいいという状況ではなくなった。量より質の問題だ。環境、観光のことを考えたい。意見を出す場がほしい。

私（系長）は、丹沢という大きな山の塊の麓をどうするかという行政の合意を含めた競い合いが必要ではないかと思う。里山レベルのゾーニング、質の保全、育成を我々の大きな仕事としてやっていかないとならない。

キャンプ場について。マナーが悪い。利用者だけでなく経営者側の問題がある。山で一生懸命ボランティア活動しても麓が悲惨だ。水源の場所でもあるから、環境

教育を含め、やらなくてはならない。

子どもの環境教育を含めての提案として、ちょっとした小屋があって、いろいろな体験できるような「丹沢大山33箇所巡り」が出された。自然環境保護センターの改修の話がある。改修して何をするかというと、いろいろ学べたり、体験できたり、資料の保存、8市町村集っているのだから、丹沢全体での環境教育、ツーリズム、ネットワーク、拠点づくり、ポイントづくりなど。その上で、子どもたちがそこへ行って藪くぐりを楽しむ。子どもの頃のそのような体験が忘れられないという話があった。自然とふれあうことで、感性を蘇らせる、そこをしっかりとやれば、10~20年経ってもまた守ってくれる人も出て来る。目先のことよりも、子どもの目線に降りて考えることが大事だ。

[感想]

・感想(系長)

今日は大勢のいい方々に出会えた。市町村ワークショップで推薦していただき、多様な人たちが集った。1回ではもったいないので、それぞれ勉強会のようなセミナーが開けたらと思う。

丹沢のフィールドは逃げないので、それぞれの目的で何ができるかを考えたい。情報や人材の交換がすすんでいけばいい。それがチームの目的でもある。いいスタートが切れたと思う。

今日のフォーラムで足りなかった部分も多くある。こんな資料がある、こんなことが言いたいなど、ぜひ声をお寄せいただきたい。

ケーブルカーのことが話題になったが、丹沢についてのプラス、マイナスをすべて出そうと思う。賛成、反対があってもいい。それがフォーラムである。フォーラムでは「こうしなさい」とは言えない。自分達で進めていきながら、それをどう築きあげるか。次の世代に責任を持てるストーリーを立てられるか。そして失敗を見直せる柔軟な構想を持つべきだ。

・感想(ツーリズム・環境教育グループ/山本)

今日は思い憂いを抱いて来たが発言の機会があったことを嬉しく思う。県からの依頼で1冊にまとめられると思うが、具体化され、県の方でも進めていただくことを願いたい。

・感想(山のなりわい再生グループ/)

探究心の強い会だと思いました。

・感想(山のなりわい再生グループ/)

間口が広い。私たちの中心は森林だ。森林再生に向けて、一番なのは木造建築だ。建築まで突っ込んでできればいい。木造建築で自然と使われれば山もよくなる。

・感想(暮らし再生グループ/山田)

勉強させていただいた。秦野市におり、裏山が丹沢山であるのに関心が低かったことを反省している。水の問題は仕事と切り離せないため、山との関係をしっかりと持ちたい。ますます研究が続くことを望んでいる。

[閉会あいさつ]

・あいさつ(系長)

生き物チームのセミナーの際、丹沢の水は10年前よりきれいになっているとの報告があった。カジカは減っており東側はゼロだが、水質を判断する川底の生物は厳しい数字ではないそうだ。しかし、温暖化により里山のダニが山の上へあがったり、ブナの林床の悪いところのダニの数が青山の街路樹と同程度の貧相な状態など、病んでいるといえる。

熊本のダム問題で、行政が反対派とともに雨の保水量を調べたところ、針葉樹と広葉樹の差がなかったそうだ。また3年前、学術会議の委員が大洪水の時は、山はすくってきれないと言っている。山の保水状況は一概にいえず、それぞれの沢を丹念に調べる必要があるのだろう。丹沢ではそういうことと捉えている。山は難しい。農業土木では、渇水期に山は救ってくれないと言う。樹木も水を吸うため、山より畑の方が水が出る。このように複雑であるが、勉強していきたい。

次回は1月頃を予定している。参加願いたい。

[アンケート]

*今日のフォーラムへの感想、意見を付せん紙に記入する。

丹沢大山総合調査 第1回地域再生フォーラム ツーリズム・環境教育学習グループ討議のまとめ

2004/10/16(土)・神奈川県自然環境保全センター

記録担当：杉浦 高志（日本大学）

安川さん（津久井）

子供たちに対する環境教育学習を実施。

（主に虫を中心とした環境教育。虫は、昆虫、オオムラサキ、里山と関連したこと。）
教材づくりのニーズなどでおこなっているがネットワークはできていない。

渡辺 恒美さん（地図作成）

ツーリズム登山道の問題は、りんしょうの減退の為。どこでも歩けるようになってしまったのは、林植生が変化したためで、丹沢でも、オーバーユースの現象が起こっているのは、限られた場所。そこに人が多く入っている。分散した登山計画と分散する様な登山道の整備が必要。

丹沢の乾燥化。全体としては減っていない。保水力の低下によるものではないか。または、森の植生の退行によるものではないか。データの把握が必要なのではないか。そこから対策を考えていく必要がある。相模・道志・宮ヶ瀬では特に水の枯渇が目立つ。

佐々木さん

丹沢を歩いて、非難小屋や山小屋の修繕や廃棄物の処理をしている。今の現業では、台風で屋根が飛ばされた非難小屋が何ヶ所もある。登山道整備のために用いられているワイヤーが木に絡んでしまっている場所もある。その際の廃材をどう片付けるのか。

里山という言葉の扱い方。安易に使われているような気がする。里山かはやまなのか。

里山には、人がだまって入ることはいけないとされている。山に木の枝を取りに行く時は良い。愛川町にはそういったルールがある。結界的な里山の利用。（里山と山と人との境界）

里山と集落のせめぎあい。 おみき（竹でつくったもの）が境。それは上下で分けていた。だいたい300メートルのラインに沿っている。宅地があった（押・引のライン）からも、山の神との関係性を見るために、山の神の分布をおさえる必要がある。

小野さん（四十八瀬）

この先の100年計画として、すみわけのゾーニングを考える。樹木・水系・ツーリズムを現実のゾーニングのなかでみていくことが必要。放置されている、単なるゾーニングはないのか。都市住民のニーズ・丹沢大山全体でいけるアクションプランにつながるような、結びつくようなゾーニングが必要。例としても、マークした木はどうにでもなる。切ることも出来るのが現実。

長久保さん（西丹沢）

キャンプに来る人のゴミの問題。車で来る。キャンプ場はゴミだらけ（産業廃棄物・缶・

タバコ)。これからは、環境教育に対して力をいれていく。利用者のマナーを改善していくことも必要だが、キャンプ場経営者の教育のしていかななくてはならない。しかし、権利の問題がついてまわるが・・・。利権の問題で、なかなか手が出せない。

焚き火で石が割れる。川で普通洗剤で皿を洗って帰る。などの利用者の意識を変える。

経営者の教育。の両面で、教育が必要。マナー教育やルールづくり。現在、モデルとなるキャンプ場は、余りない。キャンプ場でのモデル像。

厚木観光協会

山本さん（七沢温泉で旅館）

食の文化による観光協会との連携。七沢は、首都圏のオアシスではないか。観光客は、環境に興味を持っているために訪れる。観光より環境。電柱・看板の風景・景観の問題。ロープウェイづくりの問題。再生の中で、考え直すところではないか。ロープウェイ構想。シャトルバスで行って、ロープウェイへ。観光競争。経済競争の原理から、質の原理を県民の合意でつくっていく。マスツーリズムからの切り替え。旅館は、そういう場所にしたい。観光地は、客がはいればいいわけではない。温泉・みやげ・食事というのが多い。どこにも真似できない観光の創出を。～らしさ。マスツーリズムではない対応の旅館。七沢の良さをもつ場所としてのツーリズム。10軒の旅館のなかでも、若い人達の意識は高い。毎月1回会合を開いているが、若い人達もロープウェイには反対している。

井上さん

丹沢は自分（地元）だけのものではない。里山は端山。地元での呼び名、暮らしとの連携になるかもしれない。WSでなぜ、生涯学習の人達をよばなかったのか。

松田さん（松田町・企画課）

自然館にインタープリターがいるようにしましょう。地元の人がインタープリターになる。ほったて小屋みたいなものを丹沢にほしい。自然館みたいなもので、33ヶ所めぐりのような感じで。対象は子供。幼児と学校の連携。主としては、ビジターセンター的な仕事ではあるが、遠足の目的地になるような場所として。なぜかというと、子供は30°位の坂下りが好きで、よく遊ぶ。

丹沢の好きなところは、肌で感じ取れる自然。

環境学習の大切なポイントは、3つ。1.感性。1.大事なものであるということ。1.どのように使うか。感性はとても大事。小さい子供にはよくわかる。子供が見えているのは、5メートル程度。子供にとって、面白い景観をつくっていく。こどもは、ほっておいても自分で楽しみを見つける。先生にほめられること。おいしい食べ物の発見。好きな所（人）と大事な所（人）をつくっていく。

丹沢での地産知消の可能性。自然に逆す部分・人が使う部分。里山・森林育成・保全の

3本をしっかりとしたい。300メートルの里山ライン。今後の生活で必要なのか。必要性の有無を探ることも大切。かかわりたい里山を発見する。魅力探し。人工林・自然林の話も、水源・保水の有無の必要性の話が必要。

丹沢大山総合調査 第1回地域再生フォーラム
なりわい再生グループ討議のまとめ

【丹沢の林業の履歴】

- ・ 全山を歩いた経験がある。昭和 30～40 年ころまでは笹が多くて歩きにくかった。
- ・ 谷へ落として水を溜めて、一気に落とした。「シュラ場」。出荷したのはケヤキ、モミ、ツガ等の天然木に限定されていた。(明治から始めていた) ここの広葉樹は質が悪かった？
- ・ 戦前、深川に 3 回／日、出したのが丹沢における(私の?) 林業の始まり。モミ・ツガを 1 回 2 本ずつ程度出した。
- ・ かつてはチップ生産(7000m³／年)をしていたが、S39 年以降(国定公園になってからは、丹沢から紙は出ていない。* 価格ベースにのらない。
- ・ 戸谷地区、青根財区の伐倒をして出したので、丹沢とは関わり深い！
- ・ 関東大震災時、中津川の流木の上を歩いて渡れた。(主にモミ、ツガ。今も札掛の上にある。)
- ・ S26 年ころから津久井で相模川に出して平塚に運んだ。スギ、ヒノキ。
しかし、30 年代後半から林業で食べられなくなった
- ・ 「美林の麓に寒村なし」と言われた。ほとんどの人が農林兼業。炭焼→焼畑→シカ打ち。家庭で鶏、豚、牛。うまくいっていた。

【林業の現状】

- ・ 現在は素材生産はしていない→県では林産家を認定しているが、あと 2 年半が勝負。その間に有効な施策がないと、林産家は続かなくなる可能性がある。
- ・ 主な産地はヨズクである。(?)
- ・ 箱根の県有林から間伐材を 2000～3000 m³を択伐している。
- ・ 現在の建築は外材 8 割
 - 寺院建築 ヒノキ 吉野
 - ピーラー カナダ、台湾、中国
 - チーク ビルマ(政府直轄材)
- ・ →ここは元々は雑木林であったが、国策でスギ、ヒノキを植えた。→植え過ぎて荒れてきている。
- ・ 補助金による出荷なので山主に還元できないのが問題である。
(以下別添レジメ参照)

| | | | |
|-----|----|-----|-------------------------|
| 補助金 | 県 | 6 割 | } という体制であるが、うまく使われていない。 |
| | 水源 | 2 割 | |
| | 町 | 2 割 | |
- ・ 野生のイノシシがすごい(今年は異常！)
- ・ 治山治水(砂防ダムだけに頼らず)を丁寧に進めてほしい。川に水がなくなってしまう！！針葉樹を広葉樹に替えていくべきである。メダカ、カジカがいなくなった
- ・ 国有林の間伐がすごい。95 年に、バズーカ(?)で 700 本／ha を間伐した。

→間伐により保水力のある山が作れる

- ・木材利用に関しては悲観的

→法律の規制が厳しい（すぐに内装の不燃化を求められる）

例）阪神大震災でも木材相場は上がらなかった。

→50年以下の材ばかり。90年生はまずいない。丹沢においては、供給側は2〜3の企業があれば十分手が回る。それ以上入ったとしても、5〜10年で丹沢はまた丸坊主になると思う。

？どのくらいのキャパシティがあるのかをきちんと捉えることが課題。

【新たな試み】

- ・素材生産、加工、製材をしている。→ヒノキ油が売れてる（健康に良い）
- ・山口氏の1.5ヘクタールの山を借りて実験的にコストをはじいてみた。→間伐率25%、スギ、ヒノキを6m³程度出荷した。20万円で売却したが、元手に25万円かかった。
- ・地権者の権利意識が強いのがネックである。炭をつくって売っている（by ボランティア）


【これからの丹沢への展望】

- ・「木は街から六本木から！」をテーマと考えている。
- ・この先10〜20年は温暖化対策が重要なテーマとなる。

* 丹沢は林道密度が低い

→端材を出さず利用する→緑のリサイクルをする企業があると良い（ボード化）

→あるいは、山に返して樹木の育成に役立てると良い

- ・例）北海道、山口（ヒノキの葉を刺身の下に敷く）などの事例がある。→丹沢でも多様な利用が考えられる
- ・俳諧の短冊や色紙にして販売したらどうか。
- ・根っこの曲がったところを、八王子で建材として使った  市場を狙ってチャンス創出

（製材費はずい分かかるけど）

- ・10〜20年後、絶対に価値が出る、夢を見よう！！→この間の補充を行政で！
アフリカでもユーカリと〇〇だけしか育たない！世界的に見れば、需要は絶対ある。
- ・生産→加工→消費までのルートが必要
※「加工」に人とお金を投入したらよい！

第1回地域再生フォーラム 暮らし再生グループ議事録

日時：2004年10月16日（土）

場所：自然環境保全センター

参加者：（敬称略、順不同）

前川（中道志川トラスト協会）

長縄（宮ヶ瀬ビジターセンター）

山田（秦野そば研究会）

飯塚（太郎の里づくり協議会）

事務局：

白井、橋本、西村、日暮、栗原、堀田、關、鈴木、木本、藤田

内容：

鳥獣被害

[被害の状況]

- ・鳥獣に悩まされている。
- ・津久井に最近、野シカが三匹下りてきた。
- ・シカ・イノシシが蛭を一緒に連れてくる。
- ・蛭が出ると土壌が荒廃する。
- ・シカやサルは、里山にある栗を食べている。

[被害の要因]

- ・里山が崩れ、山の食が崩れた。里山が荒れて、山から直に里になってしまった。もとに戻すのは無理。
- ・里山の暮らしが崩れている。
- ・食べ物が育たない。
- ・人間が下がってきたということも言える。
- ・防護柵をしても山に食べるものがない。
- ・広葉樹林（ドングリなど）が無くなっている。
- ・鳥獣の食べ物ではないスギなど針葉樹林が多い。
- ・手入れがされていないため、樫で山が暗くなった。

[対応策]

- ・アシタバ、ノブキなどを里山に取り入れて、鳥獣対策をするのは良い。
- ・鳥獣が嫌いなものなどを植えて対策する。
- ・里山より上に鳥獣の食べ物を植えるべき。

[その他]

- ・昔はサルなどいなかった。
- ・サルが学習しているため、里山を復興してもどうにもならないのではないかと。

生態系の乱れ

[乱れの状況]

- ・広葉樹林が少なくなって、生態系が荒廃している。
- ・道志川には昔はカジカがいたが、現在はいない。

[乱れの要因]

- ・道志ダム（奥相模湖）は7割がヘドロで埋まっていて3割しか機能していない。
- ・上流では激流が流れるため、魚の生態系が崩壊している。
- ・ダムは水の循環が出来ていない。
- ・水の循環を断っている。
- ・県の人から話を聞いたところ、丹沢に関わる川は放流が様々な場所で行われており、生態系が滅茶苦茶ということであった。
- ・導水管の設置によって沢水が枯渇した。青根・青野原・鳥屋が深刻である。

[その他]

- ・実態が明確にされないと意味が無いのではないか。
- ・治水・利水・生活環境に関係してくる。

今後の進め方

[調査項目・課題の整理]

- ・調査項目や課題を整理する必要がある。
- ・歴史にどういう暮らしがあったのかなど調査項目を整理する。

[重点の検討]

- ・時間設定・生き物・水など、どれに重点を置くのか。
- ・全部やるのは難しいので、一番の課題を出す。

[その他]

- ・川については方向性と実態は違う。
- ・ダムをどうみるのか。関わり方などを考えてもらいたい。

丹沢大山総合調査での地域再生調査 第1回地域再生フォーラム(2004.10.16)

参加者アンケートまとめ

調査の進め方について

[今後検討したい内容、関心のある内容]

- ・アカデミックなツーリズムも検討してほしい。
- ・地域再生。過去から学ぶ。これまでの丹沢山麓の自然と人との関わりの歴史をしっかりと掘り起こすことが出発点になるかと思いました。前回、前々回の丹沢総合調査報告書等これまでのデータもしっかり読み起こしたいものです。
- ・ダムが与える影響についてその実態調査も含めて取り組まれることを望みたい。(前川)
- ・ポイントとなるテーマ、課題にデータをこれから加えてほしい。(保全センター 山根)

[体制]

- ・水源の森林整備課・林務課との連携を深めていく必要がある。

[課題]

- ・暮らしの再生の調査。検討項目の絞り込み。

フォーラムの進め方について

[フォーラムの議事進行、開催方法など]

- ・短時間で出席者に説明をしなければならないのはわかりますが、事務局側の話が長すぎます。それぞれ出席者は丹沢大山にたずさわっている方々ばかりなので、もっと多才な人々の話しを拝聴する時間を持つべきです。大学の講義ではないのだから・・・
- ・非常に有意義な会だったと思います。しゃべり足りない人が多いと思うので、意見発表の場をもっと設けたらいいと思いました。
- ・おもしろい会でしたが時間がない。もっと回数を増やしてもよいと思う。人材についてはまだまだいると思います。2、3心あたりがありますので紹介させていただきます。

[フォーラムの成果の反映]

- ・今日、各々の意見をまとめて今後、行政とどうすり合わせて、ください。
- ・思い憂いを発言する好機でした。このフォーラムのまとめを見た段階で具体化してほしいと思います。(山本淳一)

具体的な提案

[林業]

- ・林業の再生 素材の搬出、加工(製材、乾燥、モルダー) 建築の知識を必要とする。さらに建築には森林の生態から地球環境までの知識。最終的には木造建築に外材でなく地域材を使う事に結びつける。建築に国産材が使われれば自然と林業者 森林所有にも還元される。
- ・山の恵みを大切にす産業のシステムを行政と共に方向づけ出来ればと考えます。会の活動に役立てたく思います。(四十八瀬川自然村 小野)

[環境学習、ツーリズム]

- ・環境教育とは知識を提供することではない。それは体験の中からみずから学びとること

である。自然環境の中にみずからをなげ入れることが大切ではないだろうか。その場をどう提供するか。(飯塚)

・環境学習とツーリズム。山の上で取り組むキーワードは「今おきている現象を来ている人に伝えていく」こと。そのためのマナー啓発でありエコツーリズム導入。山の麓で取り組むキーワードは「環境学習のネットワーク化」。環境学習をやりたい人や、やれる技能・知識をもっている人はたくさんいるのだから、取り組むべきはそれを「つなぐ」役割を育てること。(保全センター 吉田直哉)

・広い意味での環境学習を軸とした丹沢大山をぐるりとつなぐネットワークの実現と、このネットワークを運営するシステムの構築を目指していきたいと思った。

[景観]

・丹沢登山道の景観伐採は必要かなと思っています。(津久井町町史 井上泰)

感想

[良かった、参考になったなど]

・初めての参加でしたがいろいろな勉強が巾広く出来ました。山々に囲まれている私達ですがあまりに関心がうすかったように反省しています。大勢の関心がもたれたらいいと思います。

・丹沢に対する「情熱の現実」に触れさせていただきました。丹沢の一隅でもよい、少しずつでもよい、やっていきたい。

・第1回フォーラムに参加して各種の意見が聞け、初めての参加で勉強になった。次回はもう少し頭の中を整理して参加したいと思います。丹沢主脈に18才のときに登ってから今まで丹沢を愛して来た。今が大切とき、充実した時でした。

・細部に渡った話し合いが出来、非常に良いフォーラムであった。今までこのような調査ははじめてである。

・とてもよい場に参加できた。もう一度資料を読みなおし考えをまとめて自分たちの活動に生かすと共に、このフォーラムにも提出していきたい。

・多分野の方々のご意見、学識者先生の視点の広い有意義なお話を伺えよい勉強ができました。これからもよろしく願います。

・丹沢大山に於ける全般的な事を聞き大分参考になりました。(丸山)

・大変有意義なフォーラムでした。またぜひ開催して下さい。丹沢の保全と再生に向けてドンドン前進していきたいと思います！

・このフォーラムを通じて丹沢大山についての調査状況を知り勉強になりました。また、いろいろな人たちの意見を聞けてたいへん参考になり、ありがたく思っています。(佐藤林業 佐藤満)

・丹沢・大山との関わりが薄いですが、林業・木材産業の方々の参加があり、様々な意見を伺えた。

[その他]

・木の話の中で世界中の流通の中で調達して居るが日本の桧、檜が一番美しい。(八木農寿)

・計画を立てようとする側と、動植物の本来の姿こそが自然なのだという現場側の意見がどうも一致しないように感じた。現地調査をもっとしてほしいという意見があったが、そ

れだけでは吸収しきれない問題がたくさんあるように感じた。暮らす人間の為の丹沢なのか動植物の為の丹沢なのか？そんな基本的な疑問を抱いてしまった。(暮らし再生班)

丹沢大山総合調査における
地域再生に関するアンケートまとめ（回答を内容別に整理）
（第1回地域再生フォーラム終了後、参加者に郵送）

1. 丹沢大山総合調査に対する期待

[総合調査の意義、位置付け]

- ・ 東京文化圏にあり、前に、世界屈指の動物相を持つ大きな池（相模湾）を持ち、地味豊かな沖積層の庭（相模・足柄平野）を持つ本県にとって、当然、裏山（丹沢・大山）をわがこととして眺め、活用し、宝物として、子や孫にゆずっていきたい。そのための今回の調査だとも思う。
- ・ 昭和39年（1964）の「丹沢大山学術調査」が国定公園指定のための調査とすると、平成9年（1997）の「丹沢大山自然環境総合調査」は指定後30年経った段階での、自然破壊・環境破壊の状況調査、初の本格的な学術調査であったと思っています。今回は、さらに10年経った上での確認調査と捕らえると、宮ヶ瀬ダム建設の悪影響を考え併せ、非常にタイムリーで、喜ばしい限りと思っています。

[総合調査の進め方]

- ・ 期待しています。中途半端にならないようお願いします。
- ・ 今回の総合調査は、問題相互の関連を広い視野でとらえ、緊急性のある問題から着手し、経過観察により修正を加えて行くモニタリング方式など、その手法、提言には、大きな期待をよせています。
- ・ 県は本腰で計画をおこし、具現化に向けて動く、そして、丹沢大山地域の自治体や地域も計画を理解し一本化して推しすすめることを望む。
- ・ 今までの色々な調査が実施されていると思われるが一部の目的だけのものでありその目的に都合の良い調査が大半である。よって今調査は前調査には拘らず、全くの白紙の状態で見え方を調査して頂きたい。

[総合調査の内容・成果]

- ・ 丹沢山地の自然環境変化の原因は、我々の都市的な生活にあるとすれば、それを調査することにより、どのような自然環境の変化が起きているかを把握することができ、また、その調査を元に私たちが多様な生物を育む豊かな丹沢山地を守るために、何をすべきかが見えてくると期待できます。
- ・ 未来に向けて丹沢大山とわたしたちがどうかかわっていくかどう向きあうべきかの指針が示されることを期待しています。そして少しでも早くその具体策が見い出されることをのぞみます。
- ・ 丹沢大山地域の緑地空間を県政の中でどのように位置付けていくのか。この地域の持つ意味とは何か。そのことを明確にする作業をしていただきたい。
- ・ 都市近郊の素材生産型の林業が環境型の都市林業に再生する為の方策が、丹沢大山総合調査によって明らかにされるのか期待している。
- ・ 津久井町は自然環境に恵まれているといわれている。しかしながら交通面など生活環境は年々悪化しているのか、人口は減少している。その結果、様々な問題が浮き上がってくるが、市町村の合併で解決できるのかのようにいう人もいる。だが、この

地域の特性を再認識することを怠って、合併や企業の誘致などで問題を解決することができるとは思えない。今回の総合調査により、この地域特性を生かした再生の方向性を明確にでき、指標を示していただくことを大いに期待している。

[総合調査の課題]

- ・ 県民参加を謳い文句にしている点については、どこまで実効性・有効性を持つものなのか、一部重要なのは報告書が出たあとのアフターケアなのではないかという疑問がありますが、特に目くじらを立てて問題にすることもないと思っています。一番気になっているのは、人文・社会的な部分が增強されているという点です。調査チームの意気込みやリーダーの考え方がどうこうという話ではなくて、こういう問題設定の仕方自体・考え方の出発点に、特に行政的な面ですが、「利・活用の復権」とでもいうような意識がどこかに潜んでいないか不安になります。人間が議論される時、どうしても「自然としての人間」という面は忘れられて、開発か自然保護かという二項対立的な不毛な議論にながれてしまわないか心配です。

[その他]

- ・ 私は今、風土と意識の関係に関心を持っています。都市空間の増大とともに意識の都市化が急激に進んでいるように思います。そのことがいろいろな軋轢を生んでいます。都市という自他分離の世界が、自然という自他一如の世界を必要としているのだと思います。21世紀にふさわしい価値観を構築していく上で風土という要素は絶対不可欠のものだと考えています。そのような観点からこの地域を見つめて行って欲しいと思います。
- ・ 今日 10/24(日)足柄上郡大井町中央公民館での「県西地区ふれあいミーティング」でも、松沢知事の本調査に対する期待が大であることを直接聞きました。
- ・ この40数年、丹沢「山地図」の修正調査に携わり、個々の事象について学術的勉強はできませんでしたが、全域に亘る変化は、概念的ながら見つめ続けてきました。また、都市化の迫る山地の利用する立場の相違からの意見、行動の相克も見聞してきました。近年の丹沢は、自然の避け得ない侵食の問題も含め、対策を急がねばならない問題が、あまりにも多いことを痛感しています。

2. 地域再生チームの調査に対する期待

[地域再生調査の体制]

- ・ 地元の大学の研究室が中心になってのチームであることに期待感が大きい。
- ・ 個人では取組む事が困難な事項が、組織、行政が関与する事によって調査が深まるのではないかと。

[地域再生調査の進め方]

- ・ 足で調査し、フォーラムで情報を得るなど、資料を集められた、その成果には大いに期待いたします。今、七沢は厚木市による食文化村構想があり、「日暮先生」のお話に関心を持ちました。ご助言もいただきたいところです。
- ・ 現行行為に左右されるのではなく地形的又は位置的或いは地域の本来必要的見地から地域の再生に最善の方法を調査検討願いたい。

[地域再生調査の内容・成果]

- ・ 地史や植生、生態学的なことをベースにしているが、中心に“人間”のなりわいが置かれているところに親しみがある。
- ・ 全体としての再生プログラムはとても重要ですが、テーマごとに細部での再生プログラムのようなことが見えてくることを期待しています。
- ・ 人々の営みが風景を作り出しています。その風景が人々の心に作用します。次の世代にどのような風景を引き継いでいくのか。その為のポイントとなる要点とは何か。そのような観点での調査を期待します。(飯塚正晃)
- ・ 各地の人々が集まり、話し合うことにより意見、情報や、知識を得ることができ、また地域再生をしてゆく手段が見えてくると期待できます。(尙佐藤林業 佐藤満)
- ・ 丹沢との関わりは、地図編集を媒体に利用者への紹介と安全を図ることを第一の目的として、山地部の状況調査を主としてきましたが、自然環境管理の視点から、人の都市的生活、経済活動と自然環境、とくに都市部住民と山麓地域住民との関わりを見つめていくことの重要性は感じていました。今回の地域再生調査には、大きな期待をもち、勉強させていただきたいと願っています。(渡邊恒美)
- ・ 丹沢全域の総合調査として、初めて地域の歴史民俗を含む調査が行われるのは大変良いと思う。丹沢山地という場所で人がどのように自然資源を利用してきたのか、できる限り整理してほしい。

[地域再生調査の課題]

- ・ 地域再生フォーラムに参加させていただいて、説明をお聞きし、それなりには理解したつもりではいたのですが、その後のグループ討議での話合いもおもしろくお聞きし、発言もしていたのですが、やはり目的が良くわからない、さらにこのフォーラム及び地域再生チームの活動がどこにどのような影響を与えるのかという結果も見えてこない。自分自身が変われば世界は変わるのでよという理屈もありますが、量の質への転化という問題も難しいし、良くわからないことばかりといった心境です。なぜ疑問ばかりになるかというと、「地域再生」という言葉の問題にあると思います。まず、「地域」、丹沢大山を地域でくくれるかという問題です。普通「地域」というと生活圏であるとか、通婚圏であるとか、行政単位とか、歴史性とかいった何らかの均質性を持った単位についてという言葉であると思うのですが、丹沢大

山国定公園域にあてはめるのは難しい気がします。強いて共通性を挙げるとすると、山があることだけであり、富士山のような共通性のある山ではなく丹沢という山塊・山並みでは共通性を持たせることが難しいと思っています。「やまなみ五湖ネットワーク」といった取組みもありましたが、一体性の感じられない点大きい。言葉（方言）も違うし、生活（暮らし）も違うという気がします。さらに「再生」の問題、何を再生するのかという点です。再生というと以前あったものを復活させるイメージが強いのですが、時代に合わず不必要となった生活・暮らしの技術やスタイルをそのまま復活させようとしても手間がかかるだけですので、当然に今に合わせた、もしくは今の生活の変更をせまるという意味での、将来を見据えたライフスタイル（？）の提案というような事になるのかなと思っていますので、どちらかというところ「新生」・「復興」（ルネサンス）という方が合っている気がします。「新再生」という言葉を使っている所もありましたが、その意味なのかなと思っています。いずれにしても「再生」すべき「地域」が、丹沢大山というくくりでは存在していないと思われる点から、非常に理解困難なテーマと言えなくも有りません。一応、現時点の私の理解としては、丹沢大山地域には、様々な地域社会が重層的に成立していて、それらの地域社会の内、より丹沢という山に密着して成立している地域社会を、より密着していた時期の生活・暮らし・文化を再構成することにより、現在に持ち込むことができ、将来見据えてより良く自然環境に共生できる暮らしを探ること。それぞれの地域社会でそれらの作業を行った上で、「山」という共通点を持った「丹沢大山」というより広域的な新たな地域社会を提案・創造していく。こんな感じかなと思っています。この考え方が的を射ているのかは分かりませんが、いずれにしても、大変な作業・仕事だなと思います。ひたすら、頑張ってくださいという外はありません。

[その他]

- ・ 熱意が見えてとても良い。(山口文一)

3. 地域再生に関する具体的な計画や取組に関するアイデア

[環境教育・ツーリズム関連]

- ・ 「環境」関係33ヶ所めぐりの札所、 - 用手帳、スタンプ等、完了証 メディアへの発表。
- ・ 既存の「資料館」等は参 として利用し、本人は自分のノート（宿泊施設）で勉強する - 素朴な合宿。スギヒノキ材 - 留守番なし。案内はボランティアあるいはかながわ森林インストラクター。
- ・ 自然を生かした再生。 自然の中に老人ホームや身体障害者などの更生施設があったらいいと思う。自然の中で学ばせるための都会の児童の誘致など、どうか知ら？
- ・ 現在、県営（仮称）伊勢原方面公園の計画が進行しています。この公園は今までの県立公園とは手法を変えて借地方式による公園で緑地空間を最大限に生かした形になるかと思えます。この公園を核として地域の将来構想を考えていこうということで研究会の元で検討がなされています。この公園計画地の近くに恵泉女子短期大学がありますが、今この大学の撤退が具体化しようとしています。この大学は園芸を主とし寮が完備されています。この大学施設を自然体験の学習の場として生かすような形で検討をお願いしたい。
- ・ 識者の方々から言い尽くされていることですが、都市部住民と山麓地住民との意識の乖離 - 林業、砂防の問題にしても、自然環境に関心をお持ちの方の中でさえ、その重要性に理解いただけない面が見られる現実があります。その間の理解を得る取り組みの一例として、将来を託す子供への自然観察学習、触れ合い体験の機会拡大を図る。この時、教師、とくに父母の理解、できれば巻き込みを図れば成功例が多い。以上、断片的、飛躍的意見で恐縮です。
- ・ 私は観光業を営みますが、従来の観光の考え方が「できるだけ多い集客」であったとすれば、丹沢大山は首都圏にあって「環境」と置きかえて考えることが大事、国土交通省の言う電柱の埋設化、看板の規制など原風景の維持。古民家や集落の保存、土地の産物による伝統食の提供等々想いすることはある。七沢をテーマパーク化するロープウェイ計画は言語道断である。（

[山のなりわい再生関連]

- ・ 私は林業を営んでおり、林業のことしかわかりませんが最近では、民有林の立木を間伐材として買い上げております。山林の中に日が入ることで、立ち木も育ち、下草も繁殖し、水源涵養機能も増し、豊かな森林になると考えています。

[暮らし再生関連]

- ・ 丹沢・大山の「麓の生活」と同時に、平野、海岸線からの「古代人」の視線を外したくない。特に、「高い、尖っている」ことへの畏敬と信仰が「カミ」（多分かみなり、落雷のおそれ）との関係で見られての国分寺やお宮の配置の必然性。（海老名耕地の大通りが全部大山の頂上を指している）
- ・ あまり、これといったアイデアはありませんが、 水車小屋の復活。明治～昭和初期頃まで、水車は最も先進的な動力源であった。精穀・精米はもちろん、乾繭・揚返し・撚糸・製糸・機織りなどの養蚕・織物業や木挽きなどあらゆる事業の動力源になっており、水車税は県税の主要な税源の一つであり、明治34年度の神奈川県

の税表には、水車税の内訳に、電車用・電灯用・煙草刻用・ラムネ製造用などといった区分けが存在していた（末尾至行『日本の水車』「第6話 明治・大正期における神奈川県の水車事情」）。水車による水力発電から始まった電気事業が統合・統制政策により数社の寡占体制になる中、動力源は電気にとってかわられ、水車小屋は姿を消してしまった。小規模発電も含め、水車小屋の復活が出来ればと思う。観光用の水輪だけが回っている小屋ではなく、搗臼・挽臼なども使える動力機能を持ったものができれば、小麦粉（うどん粉）・そば粉を挽き、それでうどんやそばを打って、誰でも食べられるようにすると良い。小規模水力発電に加え、小型風力発電・太陽光発電なども加え、動力源・電源も全てまかなえる形になると良い。製麺器の復活。水車でうどん粉づくりにも関連してくるが、津久井地域は水田が少なく、ほぼ畑作地域であった。そこで作られていたのは小麦であり、主食はうどんといっても良い位で、一部地域を除き、夕食は「ひんずりだし」（引きずりだし）という煮込みうどんが普通であった。大抵、一軒に一台は製麺器、小型の手回し式製麺器があった。今は捨ててしまったり、埃をかぶっていたりすると思われる製麺器に光を当て、水車小屋で挽いたうどん粉を元にうどんを作ってもらい、食べてもらう。

- ・ 今回の調査は、関東大震災や拡大造林、高度経済成長期を迎える以前の丹沢の姿を炭焼き、川漁等、実際、山野に分け入り肌で感じてこられた古老たちから聞き取る、最後の大きなチャンスと思われる。これまでの文献を整理するとともに、生の声を多く集め、今後の丹沢と人との関わりを考える礎として頂きたい。

[地域再生調査の体制]

- ・ フォーラム参加の市民団体が少ない（他はわかりませんが伊勢原市内の団体の）気がしました。行政が全て把握しているとは思えないので、市民団体からの情報等をこまめに集めたほうが良いのではと思います。伊勢原市の場合、市の環境保全課に情報があります。
- ・ 森林組合（県連合会）、県の第三セクター又は任意団体（外郭団体）の力を借用する方法もあるのではないかと。

[地域再生調査の内容・成果]

- ・ 丹沢大山の確実に残すべき自然エリアと観光又はレクリエーションとしての活用できるエリア並びに人間が生活するため利活用するエリアの区分け。[残すべき自然エリア] 全てを自然のままとし、動植物がありのままに生殖する部分（原則一般人は入山禁止し部分的に動植物の餌となる植物を植栽）。[観光又はレクリエーションとして活用できるエリア] 現在登山並びに沢登り等で使用している稜線並びに谷等を含み里山の部分並びにキャンプ等野外活動可能部分（必要最小限の面積とする）。[人間が生活するため利活用するエリア] 大型野生動物の駆除を確実に実施できるエリアとし観光又はレクリエーションとして自由に活用できる部分。営業目的の針葉樹林は伐採後原則広葉樹とし景観並びに水源の確保を図る（丹沢は首都圏に近く本来の林業目的山林よりは人間の癒しの場の山林が適するのではないかと）
- ・ 地域資源の整理を行うにあたり、自然、産業、歴史、文化などの発掘を行政や地元

の人材だけでは偏りがちになるので、多様な方々の調査が必要と思われる。他地域から移り住み、その地域に愛着を持つ方々のアイディアは再生に必要なものと思われる。[現在行っている具体的な計画や取り組み] 自然環境を生かした新たな憩いの場づくり、環境学習の再発掘などを行っている地域情報の収集とネットワークづくり。[これから取り組むもの] 新たな特産物の発掘。

[その他]

- ・ 一施設に一つの特徴

4. 地域再生チームの調査に関して、ご本人か、所属団体が協力できそうな内容

[調査全般]

| 内容 | 協力者 |
|---|--|
| 具体的な提案があれば対応について検討ができると思います。 | 飯塚正晃 |
| 所属の一つ丹沢資料保存会...メンバーに丹沢に関わる精通者、各地区地元の活動家の方々がおられるので、内容によりご協力いただけたらと思います。なお、現在、今回調査の公募調査事業の一環として採用いただいた「丹沢写真・資料展」を来年5つき～秋にかけて6～7箇所順次、開催する予定で準備を進めているところです。 | 渡邊恒美 (丹沢資料保存会) |
| 思いつきませんが要請があれば参加協力をしたい。 | 山本淳一 |
| 「ふるさと宮ヶ瀬を語り継ぐ会」又、個人として宮ヶ瀬の古老の紹介、宮ヶ瀬に関する情報提供。「丹沢資料保存会」として、丹沢に関する資料、文献(主に山岳関係)の紹介。県立宮ヶ瀬ビジターセンター、又は個人として、丹沢で活動している自然関連団体の紹介。 | 長縄今日子 (県立宮ヶ瀬ビジターセンター/ふるさと宮ヶ瀬を語り継ぐ会/丹沢資料保存会) |
| 地域の昔の状態並びに現状の説明程度 | 越知一久 (七沢里山作りの会) |

[環境教育・ツーリズム関連]

| 内容 | 協力者 |
|--|--------------------------|
| 西丹沢の一環としての松田山西平畑公園からの足柄平野のランドスケープ ・地史的、歴史的な視点 ・伊豆諸島と地球の半径との視点 ・紙、国府津 - 松田断層の地形 ・西丹沢からの洪水と清流と人々との生活のあと | 竹内清・ (松田町自然館前館長) |
| 松田町子どもの館、自然館、ハーブ館の施設利用 | 竹内清・ (松田町自然館前館長) |
| 個人として...現在まで携わってきた山地図修正調査、モニタリング活動から、ほぼ全域についての状況、変化について概念的ではあるが、把握しているので、ツーリズム関連調査に... | 渡邊恒美 |
| ビジターセンターの持っている自然情報、自然体験活動に関する情報提供など。 | 長縄今日子 (県立宮ヶ瀬ビジターセンター) |
| 3. にあげた取り組み(*自然環境を生かした新たな憩いの場づくり、環境学習の再発掘などを行っている地域情報の収集とネットワークづくり)を行っているので、それに関する調査などは協力できると思います。また、子どもたちの自然体験に関するものもあれば。 | 安川源通 |

[山のなりわい再生関連]

| 内容 | 協力者 |
|------------------------------------|----------------|
| 里山、二次林の実態（主に大山 地区、三の宮地区）を調べる こと | 山口寿則 |
| 荒廃した山林の再生に関して。 | 佐藤満 （有佐藤林業） |

[暮らし再生関連]

| 内容 | 協力者 |
|---|-------------------------|
| 西丹沢の一環としての松田山西平畑公園からの足柄平野のランド スケープ ・西丹沢からの洪水と清流と人々との生活のあと | 竹内清・ （松田町自然館前館 長） |
| 津久井町リンゴ生産組合。各集落の自治会。 | 山口文一 |
| 町史編さん係におりますので、津久井地区の歴史関係の資料はあ る程度分かりますので、必要があれば御連絡をいただければ回答 できると思います。 | 井上泰 |

5. 地域再生チームに提供できそうな情報や資料

[調査全般]

| 内容 | 協力者 |
|---|--|
| 伊勢原市の場合、市の環境保全課に情報があります。市民団体のうち「大山を科学する会」「結の会」(ゆいのかい)などは力になると思います。連絡先は市、環境保全課で。 | 山口寿則 |
| 個人としては、前述の山地図調査関係。丹沢資料保存会では、収集活動が緒についた段階で十分とは言えないが、調査目録などにより、提供できるものがあると思います。 | 渡邊恒美 |
| 「ふるさと宮ヶ瀬を語り継ぐ会」又、個人として宮ヶ瀬の古老の紹介、宮ヶ瀬に関する情報提供。「丹沢資料保存会」として、丹沢に関する資料、文献(主に山岳関係)の紹介。県立宮ヶ瀬ビジターセンター、又は個人として、丹沢で活動している自然関連団体の紹介。 | 長縄今日子 (県立宮ヶ瀬ビジターセンター/ふるさと宮ヶ瀬を語り継ぐ会/丹沢資料保存会) |

[環境教育・ツーリズム関連]

| 内容 | 協力者 |
|---|--------------------------|
| 丹沢・大山の裾まわりの一環としての松田町の観光資料 松田山の自然観察路創造のときの野鳥、植物資料 | 竹内清 (松田町自然館前館長) |
| 県営公園設置に伴う地域活性化プラン[事務局：伊勢原都市総務課] | 飯塚正晃 |
| ビジターセンターの持っている自然情報、自然体験活動に関する情報提供など。 | 長縄今日子 (県立宮ヶ瀬ビジターセンター) |
| 情報としての確であるかどうかは解りませんが、[津久井町で野外活動をしているグループのホームページ] URL: http://WWW14.plala.or.jp/tqi-sato/ 今春作成した中野町の「中野山であいマップ」を同封いたしました。 | 安川源通 |

[山のなりわい再生関連]

| 内容 | 協力者 |
|-------------|-----------------|
| 木材に関する情報、資料 | 佐藤満) (有佐藤林業) |

[暮らし再生関連]

| 内容 | 協力者 |
|---|--------------------|
| 松田山の住居址の発掘文献 | 竹内清 (松田町自然館前館長) |
| 津久井郡広域行政組合発行/樹木と景勝、養蚕と炭焼き、その他 津久井町教育委員会発行/津久井町の歴史今昔、津久井町の地名、津久井町の古道、その他 | 山口文一 |
| 町史編さん係におりますので、津久井地区の歴史関係の資料はある程度分かりますので、必要があれば御連絡をいただければ回答できると思います。なお、フォーラムでも発言しましたが、桑園調査簿等の資料が町内各支所の資料として残っています。津久井町域は、迅速測図がありません。明治25年の二万分一正式地形図が一番古い地形図になります(別紙資料)。古い時期の土地利用について、余り有効な資料がない中で、一筆毎に記載されている桑園調査簿はかなり有効な資料ではないかと思っています。 | 井上泰 |

6 . その他

- ・ 10 年位前、県が丹沢大山津久井を「やまなみ地域」として計画されたことがあります（やまなみ五湖・五感マップも発表された）関連は...
- ・ 先日（10/16）は、大変すばらしい構想や考え方を聞かせていただきありがとうございました。
- ・ 過日開催されました地域再生フォーラムに参加させていただき、ありがとうございました。その後アンケートのご依頼に対する回答がたいへん遅くなり、申し訳ありませんが、何とかまとめてみました。私の場合、たいへん消化不良でわからない点多々ありますのでお許し下さい。フォーラム時いただいた資料や自然保護センターより送付いただいた「調査計画書（抜粋）」など読んでみっていますが、私自身まだまだ勉強不足のところが多く、的外れの回答もあると思います。今後、微力ながら協力させていただければと思いますし、特に津久井町の活性化に役立てばと思っていますので、調査などご指導いただければ協力していきたいと思っています。どうぞ、よろしく願いいたします。

7 . 添付資料

- ・ 大一軍管地方迅速測図作成範囲：浜田弘明「相模原市立博物館所蔵「迅速測図」について」『相模原市立博物館研究報告第8集』（平成11年3月31日相模原市立博物館）（井上泰）
- ・ 「中野山であいマップ（発行：津久井町役場健康福祉課）」（安川源通）

(2) 第 2 回地域再生フォーラム
第 2 回地域再生フォーラムの記録

(1) 目的

丹沢大山地域に暮らす人達や関心の高い人達の参加を受けて、地域再生チームが検討している、丹沢大山地域の再生に向けた課題やビジョンについて紹介すると同時に、丹沢大山の地域再生に関しての意見交換を行う。

また、地域再生フォーラムの創設・開催によって、参加された人々や組織の地域再生に向けたネットワークが育まれることを目標としている。

(2) 開催概要

日 時：2005.2.20. 13：30～17：00

場 所：自然環境保全センター大講堂

参加者：第 1 回フォーラム同様、第 1 回市町村ワークショップで特色のある人材としてあげられた地域住民の方々、地域再生調査チーム関係者から推薦された
の方々

計 1 5 名

プログラム

1 . 開会のあいさつ

神奈川県自然環境保全センター
地域再生チームリーダー

2 . 地域再生チームの 2 0 0 4 年度調査結果の概要報告

ツーリズム・環境教育グループ
なりわい再生グループ
暮らし再生グループ

基礎調査 / 市町村ワークショップ・地域再生フォーラム第一回及び政策的提案
について

3 . 関心テーマへの意見カード記入と張り込み

休憩を兼ねて、3つのグループ(~)での関心テーマ、政策提案での関心テーマへの意見を付箋に記入し、各グループ別の模造紙に張り込む。

4 . テーマ別討論

~ のグループ及び、政策提案に関して、参加者の主要な関心テーマを優先して総合討論

5 . 閉会のあいさつ

(3) 会場の様子



各グループの調査の中身をスライドを使って報告を行いました。



調査についての質疑応答を、全体で行ないました。



関心のあるテーマへの意見カード記入と張り込みを行いました。



参加者全員が円卓形式で意見交換を行いました。

(4) 話し合いの概要

【調査結果】

(各グループに報告をうけての質疑)

「ツーリズム・環境教育グループ」では、登山の荒廃の原因として登山靴があるのではと話題となった。「なりわい再生グループ」では、森林バイオマスの活用目標量の設定とシカ肉について話題があった。「暮らし再生グループ」では、鳥獣被害のデータのおさえ方が話題となった。「地域再生フォーラム」に関しては、今後は8市町村に出前的な企画を検討することが話題となった。

(意見交換)

・関心テーマへの意見カードを参加者が記入した後、「なりわい再生」にテーマを絞り総合討議を行った。

・議論を深めるため、あえて「神奈川県で林業が成り立つのか？林業はいらないのか？」の提起がなされた。次に「林業者は必要か？」へと議論が進み、古い森林産業の改新の必要性、今までの狭い意味での林業とは違う新しい環境の視点を持った森林管理業の方向、新しい担い手をつくる必要があるなどの意見交換を行った。

丹沢大山総合調査に関わる地域再生調査

第2回地域再生フォーラム参加者リスト

| 市町村 | 組織名 | 氏名 | 第2回F出欠 |
|------|----------------|-------|--------|
| 厚木市 | | 高倉 秀基 | |
| 伊勢原市 | 太郎の郷づくり協議会 | 飯塚 正晃 | |
| 伊勢原市 | 丹沢森林育成会 | 小堀 長次 | |
| 伊勢原市 | 丹沢森林育成会(小堀氏同伴) | 山田喜久雄 | |
| 小田原市 | 国民森林会議事務局長 | 山田 純 | |
| 津久井町 | | 井上 泰 | |
| 津久井町 | | 安川 源通 | |
| 秦野市 | 秦野ビジターセンター | 青木雄司 | |
| 山北町 | | 池谷 嘉徳 | |
| 横浜市 | | 植木 知司 | |
| 横浜市 | 丹沢資料保存会 副代表 | 渡邊 恒美 | |
| 横浜市 | 小林住宅工業 | 小林 康雄 | |
| 山北町 | 丹沢「森の仲間たち」 | 川又 正人 | |
| 山北町 | (有)野木材木店 | 野木 | |
| 秦野市 | 神奈川県森林土木建設業協会 | 上村 利昌 | |
| 計 | | | 15名 |

出席(交通費は支払っていない人)

出席(交通費を支払った人)

丹沢大山総合調査 地域再生フォーラム

第2回議事録

日時： 2月20日（日）午後1時00分～5時00分（4時間）

場所： 自然環境保全センター 大講堂

参加者： 8市町村関係住民、地域再生チーム調査グループからの推薦者、調査チーム関係者

1. 地域再生チームの2004年度調査結果の概要報告

ツーリズム・環境教育グループ

【発表】

- ・ オーバーユースの歴史、背景を説明し山岳、麓、その他に分類し現状と課題を提示。
- ・ 16年度オーバーユースとエコツーリズム化関連調査の報告。
（登山道・登山、水質、観光リクリエーション、環境教育・学習、エコツーリズム化等の調査報告）

【質疑】

- ・ 質疑（オレンジの服の方）
丹沢大山総合調査の対象地域は自然公園を主体としていますが、ツーリズムではどこまで対象を広げていますか？
- ・ 応答（糸長）
市町村でいうと、8市町村全域です。
- ・ 質疑（山田）
丹沢の登山道がだいぶ荒れている。昔はじか足袋であれば、考えられなかったことだ。オーバーユースの問題は、靴の改善が必要としているのではないかという意見があった。そうでなければ動きやすく、しかも足元を傷めないような靴の提案があっても良いのでは。国体があったころから、キャラバン（登山靴）の使用が増えてきた。じか足袋であれば、木の根を傷めることもなかった。
笹を傷めるのはキャラバンという指摘がある。
- ・ 応答（糸長）
実証してみたい。多分、じか足袋であると、凸凹が多く歩きづらいのでは。
- ・ 応答（ボラネット）
足の安全から考えると、足を濡らしてしまうと、事故の原因になる。
- ・ 質疑（糸長）
登山道を整備する側から踏圧などを考慮した整備方法はありますか？
- ・ 応答（吉田）
丹沢でたくさんの方が上る大倉尾根や表尾根に階段化が進んでいるのは、大勢の人が歩いて登山道が崩れてしまうのを防ぐという一つの方法です。場当たりの対策にすぎません。それ以上のことまでは踏み込んでない。
- ・ 応答（渡邊）
踏み跡のない場所では、明らかにじか足袋の方が良い。草原で30人が一列に歩くと

踏み跡は付くが、根までは傷めない。しかし、現在県が管理している登山道は長年踏み固められている所は、全部ではないが、歩いていると頭への響き方が違う。それより、そのようなところに雨水を流さないようにすることが大事。

独断ですが、じか足袋は、関東ロームのような滑りやすいところや、一枚岩の表層が風化してざらついている部分には非常に弱い。履物を元に戻すということは難しいのではないか。

なりわい再生グループ

【発表】

- ・ 神奈川県森林の概要。国産材の流通、担い手、森林荒廃、所有者不明、境界不明の私有地、ボランティアのネットワーク等の問題を提示。
- ・ 環境保全型森林経営プラン樹立、野生動物管理事業の必要性を説明。
- ・ 丹沢での生業再生の取り組み事例の説明

【質疑】

- ・ 質疑（山田）

バイオマスについて、発表されていたような結論づけてしまうと、二進も三進もいかなさような気がします。木材資源として利用できるものはないのか？これから資源としての劣化がどんどん進んでいくと考えられているのですよね。

特に私有林の手入れを考えた場合は、少しでもお金にしていく必要があると考え、何とかしてバイオマス等で燃料にでもしてお金にしていかなければいけないという一方で要請がある。そのための理屈を作っていかなければならない。その辺を踏込んで対応策を考えていかなければいけないのでは。

例えば、新聞で、東京都でビルのエコ運動というものを強化してこれからビルを建てる場合は、数値化をし、評価の高いビルには将来的には補助金などを考えているのでは。例えば大きなビルで、バイオマスを利用すればエコ評価が高くなるという手法もあるのではないか？特に CO2 の排出や重油や石油を直接または間接的に燃やしているビルは多いのではないか。なんとか方策を考えていかなければいけないと思います。

300mから 800m 林業の地域と設定しているが、600m くらいまではかなり厳しい、範囲がこれから広がっていくのではないか。標高要素を入れていく必要があるのでは。

動物関係、シカの対応、シカ柵を全部広げていくのはどうか？

- ・ 応答（富村）

今後の取り組みに向けて課題を抽出しているところ。しかし、目標量を決めていかなければいけない。林業が集中するところなどある程度ゾーニングして集中的に行っていけば、一定の面積は得られる。それ以外に手の入らないところは順番に行っていく。

そのために、丹沢から 1 万 m³ くらい出す目標を設定しています。その 1 万 m³ をどうするか。来年度前向きに検討していく。

シカの研究をしているところもあります。シカをどういうふうにしていくか、目標を決め、スケジュールを立てて行く。来年度はシナリオ作りです。

標高に関しては温暖化の影響もあるので流動的、バッファーをどうするか考えていかなければならない。

・ 応答（須藤）

シカについて数も少ない、商品としてやっていくというのは問題があるのでは。みんなで食べて学ぶ。山の食育ということで、地域の人や学校みんなでシカをばらして食べていく。豚を解体して食べることをしているところもある。かなり際どいカタチではあるが、そういったカタチでシカとの付き合い方を考える場所にしていく。

暮らし再生グループ

【発表】

- ・ グループ全体の調査概要：テーマ・方向性の確認、活動内容・状況
- ・ 「食の復興」班（秦野市東田原、松田町の食システム調査）「住の復興」班（津久井町青根地区の集落空間構成）、鳥獣被害（津久井町青根の防護柵、松田町寄でのアンケート）の調査報告
- ・ 津久井町青根地区でのワークショップ：概要、結果、まとめ

【質疑】

・ 質疑（不明）

間伐材による花粉症の影響について

・ 応答（富村）

生物は生存本能があるので間伐をしない手遅れの林は一本一本の木が弱っている。弱っている木には、花粉の着花能力が増えていることが実証されている。埼玉県の林業試験場では、間伐したことによっての種の量を調べていて、間伐を適正にやった方が少ないという結果が出ています。それと、花粉つかないような品種の改良もされている。間伐をしたら花粉の量が増えるのでは、と言われているが、現実にはわからない。適正間伐とは、林間が20%あくくらいの間伐をつづけていれば、大丈夫だろうと言われている。

・ 質疑（須藤）

鳥獣害の件で、津久井郡の藤野から北の方、日本獣医畜産大学の羽山先生が指導して、農業推進課と提携してサルサル作戦（サルが去る）ということをやっている。間伐材を使って、サルが来ないように柵を作ったりして、そこそこ成果がでてきている。ということを知っている。そのような事例を聞いてきてほしい。そこで大事なことは、あちらは、奥多摩から来ている軍団なのだが、3つぐらいグループがあり攻めてきている。そのような状況で10匹や20匹捕ってもしょうがない。ということを知っている。地元の人たちに説明をしている。地元の役所では、自然保護の団体がサルをかわいがるので百姓が大変なおもいをしている。という。最初に取り組む時にきちんとおさえていかないといけない。

・ 応答（栗原）

対策については、次年度の課題で、まずモデル地区においてどういう実態なのか、住民が鳥獣被害に関してどのような意識があるのか知るために今年度調査しました。生き物のチーム方に質問ですが、サルの戦いのようなことがありますか？

・ 応答（糸長）

サルに対して言うと、羽山先生と話しをした時に、藤野の川向こうのサルはまだこちら側のサルとは交流していなく、全く違う。

寄の方ではサルはいるが、被害としてはまだあまり上がってきていない。具体的に、サルの軍団の調査をしなければいけないだろう。

政策 WG の生き物再生グループとの協議で、今後具体的にシカ、イノシシ、サルも含めて例えば青根のところでどういう状況でどのような被害があるのか、生き物の人たちと一緒に調べていき、論議していくような連携を図っていきたいと思います。しかし、アンケートの自由記入の中に、「住み分けをきちんとやっっていこう」という意見もある。

生き物再生が行っている調査のエリアは、モニタリングが西丹沢と東丹沢のエリアで、私たちが行っている寄や津久井、青根はモニタリングの場所になっていない。次年度は場所をしっかりと決めないといけない。

・ 応答（山根）

モニタリングのエリアは、東西でずれていますが、野生動物の調査は、全県、丹沢全域で行っています。ニホンジカの調査は寄の周辺でもやっています。青根でも一年に一度個体数調査をやっています。サルについても丹沢の個体群は全部神奈川県でサルの管理計画を作成しているのでどんなサルがどんな悪さをしているかを含めて調査をしています。データはあります。

問題はイノシシですが、神奈川県では被害はあるが、騒ぎになるようなことにはなっていない。

今行っている調査の実態を踏まえて野生動物全体の管理をどうするか。という問題と、里での農業、林業のあり方など総合的なあり方を考えるということで、生き物と地域再生が連携していく。

他の動植物調査もコアの部分は東西エリアですが、全県のデータの蓄積はあり、今情報チームで整理していることです。

・ 質疑（山田）

あちこちで、サルの調査を行っているが、聞いてみると調査らしい調査は行っていないと聞きます。サルとイノシシについて、数が増えているのか、群れが移動しているのか、食生活行動に改変が生じているのか知りたい。

・ 応答（山根）

野生動物の場合、問題が大きく3つあり、動物そのもの、生息している環境、人のくらしの問題。人の暮らしは被害の問題。その3つの視点から野生動物の調査をすることになっています。

昔は動物の数が増えた、減っただけでしたが、今は生息環境が変わった。住む場所が変わったり、食べ物が変わったりしている。そして人の暮らしも変わったということも調査している。

そして今、一番調査が進んでいるのは、ニホンジカで、シカ管理計画というものができ、サルも小田原を含めて丹沢、津久井も含めた調査を県で行っています。県としては、野生動物を殺せば被害が無くなるという単純なものではない。というスタンスで山全体の問題である。人の暮らしも問題があるということで総合調査を始めたのです。

3つの視点で、人の暮らしは地域再生、生き物の暮らしは生き物チーム、生息地の問題は、水土チームと地域再生で森林の問題や、土、水の問題をやっています。それが総合調査の内容で、その上に野生動物をかぶせるとよくわかる。先ほどの質問の答えは、

今回の調査で出てくるものです。

・ 質疑（井上）

津久井町の南山と仙洞寺山でサルの移動調査を県で行っています。さらに農協を通して町と県鳥獣被害のデータの集積を産業経済課で行っています。それから、青根地区の狩猟関係者より、青根地区は山が高いためにイノシシがあまりとれないということを知りました。逆に鳥屋、青野原からまわってくる、それを捕るくらい。シカは高いところまで行くが、青根地区ではイノシシはそんなに捕れない。

狩猟関係者にも聞き取りをしたら良いと思います。

・ 応答（日暮）

各市町村で鳥獣被害のデータが上がってきているが、問題は届けのシステムが全ての（ほとんどの）量を網羅しているかということ、かなりかけはなれているという状況。ある程度なんとなくわかってはいるが、本当はどうなのか？ということが知りたい。毎日の被害状況をおさえていかなければ実態はわからない、毎日被害状況をおさえられる仕組みを早急に整備して、その実態を捉えることから始めようと思います。

・ 質疑（系長）

GPS などを使って来年度、試験的にどこかでできそうですか？

・ 応答（日暮）

その開発は携帯の会社と提携して行わなければならないのですが、システム開発としては、非常に簡単。1ヶ月でその製品を納めることも簡単にできます。その専用の携帯を使っていただくとそれがそのまま簡単にデータに入る。是非やっていただきたい。

基礎調査 / 市町村ワークショップ・地域再生フォーラム第一回及び政策的提案について

【発表】

- ・ 土地利用の変化や人口推移をマップや統計データを用いて説明。
- ・ 第1回、第2回市町村ワークショップ、第1回地域再生フォーラムの報告

【質疑】

・ 質疑応答（不明）

このようなフォーラムが行われていること自体よく知らなかった。非常に良いことで、どんどんやってほしいと思います。

基礎調査の範囲としては、ちょっと狭い感じがします。女性のグループにも声をかけて参加を呼びかけたら良いとおもいます。

鳥獣被害の件で、伊勢原の場合、定期的に日にちを決めて、サルの追い払いを行っています。かなりの被害が出ています。実際、数が増えているのか？人と動物が共生するための動物の数、人間の数を総合的に判断しなくてはいけない。ただ、シカが 匹、サルが 匹というだけでなく、それが適正なのかどうか判断をしていかななくてはならない。

もうすこし県民に PR をして、来年からは活発化してもらいたい。

・ 応答（系長）

女性の参加に対して、この地域再生フォーラムの役割としては、県民の方々に知ってもらう前に私たちがやっている調査の方式に対しての軌道修正などある特化した人たちにお声をかけている。一般の県民の参加を広く求めている。そうはいつでも今回で

も 100 人前後の方に呼びかけはしているが、実際は 20 くらいしか集まっていただけない。フォーラムの内容をご理解していただけないか、あるいは、人選を再度選びなおす必要があるのではと思います。また、8 市町村に出前的なことをする必要はあるかもしれない。

総合調査全体では、年に 1、2 回は横浜で集まって報告会を行っています。その時に出前的なミニシンポみたいなことを行う。例えば、鳥獣被害だったら、鳥獣被害のことを話合うそんなミニシンポみたいなことが開ければと思います。

2. 関心テーマへの意見カード記入と張り込み

ツーリズム・環境教育グループ

観光拠点

- ・宮ヶ瀬 - 飯山 - 七沢の観光ラインの確立。(西山登山道)温泉をベースにした観光拠点の線としての整備。
- ・山に近い住宅地近くに観光拠点をつくり、平日通勤、休日観光利用とするバス利用。
- ・市町村の議論をすすめて、点でなく線としての広域的なツーリズムの提案。(愛川、厚木、清川の八菅修験道ツーリングなど)関連ふれあいの道のようなものに付帯施設をつけると地域再生プログラムとして確立できるか。

オーバーユース

- ・丹沢のオーバーユース。北丹沢については、定期バスの減便等により登山客が減少しているのではないかと。増えているのは中高年のみ？
- ・登山道については、雨水排水の対策の徹底で何とかできるのでは？(山村の土壌流出の問題が大きい)
- ・オーバーユースの課題について前回にも話題が出ましたが、登山道のオーバーユースは丹沢全域を見ると片寄りが大きい。環境保全の見地から？の点も考えられるが、まだ静かな方面への誘導等(国有林 etc)分散を図ることはどうか？
- ・オーバーユースの起因について、
 - 登山客の集中によるものか。
 - 土地条件(傾斜等)によるものか。
 - 場所によって浸食がおきないのは何故か。

1、2等の原因の関連性を知りたい。

- ・丹沢検定を作ってみよう。1級～5級ぐらいまで。一般に方に丹沢を正しく理解するための方法として。(資格ブームに便乗する)
- ・里山ツーリズムのあり方。登山客の集客を里山ツーリズム暮らし再生の中での施策につなげることは困難か？(丹沢に対する魅力の違い)

なりわい再生グループ

- ・木質バイオマスの需要量が少ないとの事。どの位でペレット生産が間に合うのか
- ・基本的な、あるいは構造的な問題に一度議論を集約させてみたい。
- ・林道整備は必須なのか 何が最もなりわい再生に対して重要なのか？
- ・林業以外のなりわい(+ ?)の育成戦略

暮らし再生グループ

鳥獣被害について

- ・鳥獣被害対策。地元狩猟者（ハンター）への聞き取りも必要ではないか？
- ・鳥獣害に関して、人の生態、村の年齢層、構成や村周辺土地利用の歴史変遷を調べたほうが良いと思う。
- ・山村におけるサルイノシシの被害状態をより深く検討。
- ・鳥獣被害にあいにくい農作物（田畑）の配置などの実験はできないものか。

環境について

- ・環境保全に関して

川について

里山について

地域資源について

- ・地図にない湧き水や沢、涸れてしまっているのに地図にある沢等、水計の今昔といった調査はしますか？
- ・土地、空間の共同管理の作法、ルールについての調査（水車等の施設も含む）
- ・今丹沢で頑張っている住民、（登山者以外）はいるのか。その人を支援する施策はあるのか？それは本当にツーリズムなのか。

基礎調査 / 市町村ワークショップ・地域再生フォーラム第一回及び政策的提案について

- ・地域再生フォーラムの進め方について心ある人たちにたくさん集まってもらい、前向きな議論をするにはどうしたらいいか。

丹沢の自然に関して心ある人は、今調査に忙しい。

フォーラムの中で3分野に分けてしまうと分野横断的な議論ができない。（しにくい）「暮らし」や「なりわい」の人も「エコツーリズム」の議論に入ってほしい。

- ・地域再生とは、環境が整うこと、整えることかと思います。その時に環境と意識との関係性についても議論を深めていってほしいと思います。

3 . テーマ別討論

(山田) 今日の富村さんのお話にもありましたが、林業が神奈川県で成り立つのか?というのを議論しなくてはならない。林業を成り立たせるという前提でいけば、当然林道を設置するとか、これからの林道を敷設するなどの手を打っていかねばならない。担い手を育成していかねばならないし、林業は生産ですから消費もつくっていかねばいけない、というように非常に大きなテーマとなる。しかし、今の資源の状況、木材価格の状況、世界市場の状況などを考えて、簡単に言えば林業として成り立つ見通しは特に神奈川の場合ないのではないか。70年、80年生の木がいくつもあって、まだなんとか地域の変化に耐えられるところであると良いけれども、そういう所がほとんどない所では、難しい。多少手入れを使っていくらで売れる、ということを考えてたら難しいのでは。という話しがあったような気がします。

林業を確保していくのであれば、このレベルで確保する。こういうやり方で確保する。というような林業というものの絞込み、生産はどこでやるのか、やるとしたらどういう形でやっていくのかそこを明確にしていく必要があると思います。

農協は戦前からあって、農民運動の流れが農協になった。しかし、森林組合というのは、戦後林野庁、上から作ってきたもので、正確ではないのですが、神奈川の林業生産者はそれ以降できてきたような気がします。今後、林業者は神奈川県に必要なのか? (私は本当は必要だと思っていますが) 今の色々な状況を考えてみると、林業を支えていくだけの条件はなくなっているのでは。もしその方向で考えるのであれば、スギ、ヒノキの人工林は間伐をする。間伐をした後は、混交林を定年更新の方向でもっていく、最初はお金がかかるにしても、その後は楽です。自然が自然を作っていく。

そのことによって環境要素を高める。例えば、150年生以降の林を作っていくという方向であれば、サル、シカの問題は今とは違った様相になる。方向を定めるためにどうしていくのか。例えば、三重県では、林道から400m以上はなれた所では、生産の対象にはしない。とはっきり打ち出してきている。群馬県では、集落から300mという切り方をしている。残念だけれども、それ以上は無理だと打ち出してきている。神奈川県はどうするのかまだ、はっきり見出せていないと思います。

300mから800mの標高の範囲で生産と環境保全をどう成り立たせていくのか考えましょうというので少し曖昧です。林業をやろうとすれば、経営を維持されなければいけないから、色々なことをやっていかねばならない。補助金も相当つぎ込まねばならない。それをしないというのであれば、補助金をいろいろな所にまわせるわけです。そのあたりのことについて、議論に結びついていけばと思います。

強度間伐を入れる必要はあるというのは私もそう思っているのですが、今の人工林というのは、もやしで、みんな同じような木を入れているために強弱の区別がつかなくなっている。それだったら、自然淘汰があって強い木が残って弱い木

がなくなって、自然に整っていくというものがあるのだけれど、それではうまくいかない。みんな同じような形に並んでいるところが多いですから、そうではないところもありますけれども、そういうところでは、間伐を機械的に入れるのではなくて、巻き枯らしといって立っている状態を保ちながら、いくつかが枯らしていった最終的にメリハリを持たせながら、つまり風が入っても倒れないような状態にしながら巻き枯らしを進めていくというやり方が必要だと思いますが、普通森林組合の人は、巻き枯らしなんて恥だと思っている人が多いと思います。汚い森林になり、景観もよくないですから、枯れ枝がたくさんついたような林になってしまうのですから。そういうことも含めて、県有林、私有林をこれからどういう林にしていくのかということの基本の論理にして、その中で鳥獣被害の問題とか、森林の利用の問題を考えていけないといけないと思います。

里山に市民をといても、その人工林を生産的な方向に持っていくもので、市民はそのお手伝いをする形で入るのか、そうではないのか。そういうこともまだ明確に見えていないと思います。骨格を明確にして議論をする必要がある。

(系長) 山田さんが先ほどおっしゃったことは、どういう森にするのか？姿が明確でなくて、極端なことをいうと、今までの古い体制の森林イメージをそのままイメージして、その姿を作っていく努力をしているのでは、それは戦後の拡大増林からのつけを含めて、そういった場合は、担い手はどうかというあたりで、山田さんが言いたいのは、極端に言えば、林業とか材を出すということではなくて、環境容量を高めるための産業、なりわいをしっかりつくろう。その中に木を伐ってくるということがあるだろう。ただ、それが、全体の経済が100とすれば10や20くらいかもしれない。今県でははっきり分かりませんが年間で、30億というお金を使っているかもしれない。そのお金が、古い体制の林業を育てようとしているのならば、無駄な投資をしているのかもしれない。一方で、材が出なければ、生き物も、水など元気にならないのならば、計画的に撤退をしていかなければならない。ということだと思います。

(山田) これが共有できるかどうか。

(系長) 富村さん、どのくらいのお金が投資されて、どのくらいの効果があるのでしょうか？

(富村) 細かい数字は分からないのですが、予算ででてるのは、数十億円くらい。事業概費でいったら30億くらい。林道や林業プランが出来てからは、10億くらいと聞いている。ここでは、今後どうすべきか目標をたてる必要がある。時間軸を決めた場合、50年後を予想した時に林業がいるのか？いないのかという議論も必要。国産材の安定供給等で外材に負けていますが、外材も保護伐採になって資源がなくなってきている。限界資源となってきている。そのとき、40%の国産材がある時に脚光をあびるかもしれない。そこらへんも踏まえて議論しなくてははいけない。実際林業、で生きている人が37事業体の400人ほどいますので、そういう人をどういうふうにするのか？県そのものも林業関係者としてなりわいをやっているわけですから、そういう問題もある。

実際、日本全国で林業が成り立っているというところは、東京から片道4時間

くらいのところですよ。バブルの時に他の職業を選択せずに、林業しか選択できなかったところ。それ以外は成り立っていない。神奈川県だけでなく、首都圏の森林が持っている特性。神奈川がどういう選択をするのか、注目される場所。

花粉症が出てきた時期とシカが出てきた時期が共通している。それは、拡大増林した時期に同じような問題が起きている。それは人工林が、何らかの関わりがあるのではと思います。

(系長) 今の話では、富村さんとしては、計画的撤退までは行かないのですね。

(富村) 私は、2つの選択肢を出して議論を進めたらどうかと思います。元々神奈川は人工林をまわすのではなく、広葉樹を抜き伐りしてきたところですので、人工林林業を撤退し広葉樹利用産業に変えていくというのも選択肢の一つですし、国産材と外国材の競争関係において、国産材の供給を担うためにこの50年間準備するために人工林を残しておくという選択肢もある。

(池田) 今のやり取りで疑問に感じたことは、県有林、私有林というベースで丹沢及び神奈川で成り立つのかという問いの立て方ですが、ご承知のように、もう一方では、集落がずっと維持管理してきた財産区というのが丹沢地域に非常に多いわけです。その財産区有林が林業という観点及び森林の環境として高める観点からどういうふうにかえたらよいか、ということも議論に組み込んでいただきたい。

温暖化対策の研究課題ですが、兵庫県は財産区が集落の居住地域に多い地域です、その中の加美町丹治地区では部落の共有林、財産区で管理している森林なのですが、そこに、直接木材の直販制度を設け、直接消費者を招き入れて気に入った木を買ってその木で家を作ったらどうですか？ということをやっている。それは、東京近辺でも広がっているのですが、もう一つ丹治地区で感心させられたことは、木材の価格を木材そのものの森林吸収力によって価格を設定するという形で温暖化対策と結びつけ、消費者にアピールしている。林業としてペイはしていません。せいぜい維持管理費が年間2,300万くらい確保できるという形では林業としては、成り立っていない。ただ、このような新しい試みを始めたことによって、地域の人たちが、森林は新しい時代の中で存続させることができるという意識を持つことができたということは、大きな収穫であった。財産区が多いという地域特性をふまえて議論して行ってほしい。

(系長) 特に丹沢の津久井の方は財産区域があります。佐藤さん、今の山田さんの論議とか、池田先生の論議、財産区への期待とか、森林組合ダメ要因とか色々ありますが、その中で林業をやられている佐藤さん、林業の見通し、姿としてどうですか？

(佐藤) 私もいつも心の中に林業が成り立っていくのだろうか、どういう林業のあり方が良いのか、いつも自分に言い聞かせながら経営をしています。私は、S20年に津久井町の青根で生まれ育ちまして、小さいうちから山に親しんで、高校時代も山でアルバイトをしていました。私の体の中には林業、山で生きるというDNAが染み付いています。あのころのような山を再生しようと思っているのであれば、それは無理です。つまり、人工林も雑木林も全ての山がS30年代くらいになる、簡単に言えば、下駄でも山の中を歩ける。きれいになっていた。それは、大きい山も、小さい山も私有林も県有林も崖地の山でさえ、生活と密着していました。

山をもし、そのように再生しようとしているのであれば、私はできません。それでは、どんな山ができるのかといえば、従来の治山や治水、建築用材を育てるために作ってきた山の他に、二酸化炭素吸収の場とか、生物多様性の場所だとかそういうふうなものに山の捉え方が変わってきている。山で働く私たちの意識も切り替えて林業を成立していかなければならない。

だから、新しい機能の成立させなければならぬという意識も持っています。

(系長) そうなると、林業という言葉は死語になってしまうのではないか。うちの大学前は林学科と言っていましたが、名称を平成 8 年に森林資源学科に変えました。大学は、ユーザーは高校生です。高校生に林業と言っても食いついてこない。それで、森林資源と言ったり、水産学科は海洋資源科学科に変えたり、畜産学科は、動物資源学科に変えました。畜産学科は動物資源学科に変えたら 5 倍の倍率になりました。

(増谷) 私の学生は、東京、神奈川出身が多い。林業といっても全く関心がない。学生が何をしに来るかというところ、一つは環境指向。また、県民の理解を得ることにして、環境を前面に出さないといけぬ。そのためには、ゾーニングが必要で、人間が絶対に入ってはいけないところもあれば、人間が利用していく、そこには、問題となっている、人工林は手を加えて整備していかなくてはならない。昔から、そのようなところは予定調和といって、人間が手を加えたことによって最大に機能を発揮する。それをやらないことには、森林環境財としての意味がなくなる。経済成長というのは、振り子と同じでぶれる。

今は、林業はそのままでは成り立たないと思います。このご時世ですから環境保全での林業というのが私は良いと思います。もう一つ、次の世代、その次の世代になった時には、日本の人工林資源というのがまた脚光を浴びる可能性が十分あると思います。現に私たち森林のことを話していますが、世界的に見れば水。わずかな気候がものすごい水に影響する。現在の経済情勢からいけば、日本の木材は安い、将来的には必ず脚光を浴びるときが来ると思います。

(川又) 今林業はいらぬのか？ということが話し合われていましたが、丹沢の森を見ますと、再造林したり使ったりして大きな木はない。これはどこを見ても育成、途上の木しかない。生産するような林業を話し合われていますが、これでは全然成り立たないので、今丁度世界は持続可能な森林経営ということを出しています。この持続可能な森林経営ということであれば、私どもは成り立つであろうと思います。これは森林の整備を含みますので森林整備業という業が成り立つと思います。林業が成り立つかそうでないかということよりも、現状をきちんと見れば育成途上の森林しかない。それを手入れしていくのも大きな意味で林業ではないか。そうすると、林業、木を伐っていくこと自体で生きていくということは、たやすいことですが、今そのような状況ではないということであれば、先ほど富村さんが言ったカスケード的な利用とか森林クラスターとかそういった概念でもって新しい林業を創造していこうというふうなほうが発展性があるのではないか。森林は林業のためということであれば、なかなか新しい展望は生まれてこないと考えています。

(飯塚) 今の意見に関連してですけれども、林業はいらないのかと言われても、林業の定義が必要となってくる。今定義がかなりはっきりしてきていると思うのですが、最初に言われた時は違和感を感じたのですが、今の議論の中には素直に入っていけるような気がします。それがこれからの林業の本質、主流になっていくのだらうと思います。定年になって色々なところに旅行に行くのですが、観光地の森林がかなり荒れている。日本国中全部です。これはなんとかしなければいけない。という個人個人の盛り上がりというものが今ないのではないかと。今前に座っている方々がこういうことに関心をもっていることにうれしく思います。林業はいらないのかということに、抵抗を感じました。

(植木) 環境材としての要素について、自分たちの意識のなかでの環境との関係を議論してほしい。日本の風土の中から「わび」「さび」が出てきた。自然と人間の係わり合いのなかで、環境が意識に影響を与えることをおさえておくことが大事。今、人の心が荒れていますけれど、都市の空間からそういうものが生まれてきたのかなと思います。普段から環境に接することによって心が癒せる。そういう場を持ち続けることが大事だと思います

(資料保存会) 現在、南洋材、北欧材など外材に太刀打ちできない状態です、世界のグローバルな目を見た場合これからどう変わるかわかりませんが、これからの10年20年後、現在ある森林をどうやって守っていくのか。

少し前のことですが林道を歩いていたら、ゲートがありゲートの横に看板があり、「この林道は林業者のものであり、一般の方の通行を禁じます」と書かれていました。しかし、ゲートが壊れていて、旅行の車など一般自動車が出入りしている。もっと奥に行くと民間業者がミニバイクを持ってきて、そのミニバイクで林の中に入っていく。林道の用途をなしていない。また林道業者にかなりお金をかけているが、林道業者は成果をあげていない。

丹沢は特に県の水源である。人間に必要な水源のある森ですから、水源保護としての森林としておけば、国産材が必要になった時に使うことができる。

(渡邊) 私は、本職は建築の技術者です。公的なものに木材を積極的に使っていくというのはわかっていると思っていましたけれど、私もあまり勉強していませんけれど、今のところ外用材に負けるということは、流通機構の流れの中にネックがあって、国産材が出てこないのではないかと。間伐材の活用について、神奈川県の間伐材であればいいのだが、何が何でも間伐材とすると群馬のほうから来てしまうこともある。森林については、匠や技術者などを断ち切って今の丹沢の自然を誇示できればいいのだが、丹沢の匠や技術者を残していかないといけないのでは。ただ木を売って生活をするのではなく、製造業として技術者の根を絶やさずにしていくことも我々の大きな責務であると考えています。

(系長) 今のことを一言でいうと、森林整備業という言葉がでてきた。これは単純にいうと、今までの林業者は、これからの森林整備業をやる能力があるのかどうか。今までと全然ちがう山を作らなくてはいけないのに、今までの人たちは60代70代という、戦後拡大増林やった時から林業を始めた人たち。その人たちが持っているイメージは、拡大増林で育っているなかでの間伐と木を植えるという仕事を

一所懸命やってきた人たち。これから求められているには、シカの問題色々な問題を含めて非常に複雑な自然生態系を理解しながら、一方では、登山客も来る、鉄砲打ちも来るといったなかで、どういう森林整備業が丹沢でふさわしのか。その姿をはっきりしていかないと、昔の技能者はもしかしたら駄目かもしれない。昔の炭焼きを一所懸命やってきた方は炭を作る、木を見るという技術はあるけれども、実際に山のサルなどの問題を含めてやっていける森林経営者、森林整備、森林ドクターとしての役割を担っていけるのだろうか？例えば、森づくりは人づくりと考えれば、その人づくりのために30億使いましょうといった時に、今の森林製業者、あるいは森林組合の作業員の人たちになってもらうのか、それとも全然違う例えば大学の森林資源学科を出たような人。

環境のことに詳しいけれども、環境を守るために汗水流さなければいけない。そういう技術も必要。そういう意味では新しい担い手を作らなければいけない。

(山田) 私自身は木づかいのできる人、生物素材である木の良さを活かした家づくりができる技術者の方がきちんと木づかいをするなかで、木ていいね、と。しかも現在の技術からすれば、かなり快適で、昔のように燃えやすく、壊れやすく快適でないというようなものではなく、その反対の家づくりができる。ただ、これはしっかりした技術が必要。そうしないと、木というものを内面的から捉えていく力が人間からどんどん薄れていくのではないかと思っている。ただ眺めているだけではなくて、もっと生活の利用の中にそういうものを入れていくことが大事。ところが現実には建築の世界を見ていると、それはどんどん少数派に追い込まれていって、今の林業の世界と一緒に、林業というのは、木に付加価値をつけて使ってもらえるから林業として成り立っているのであって、今のように集成材として何でも貼り付けてしまえば柱でも梁でも構造材として使って、外装だけみたくれを良くしこれで家ですと言ってしまえばそれで木造住宅です。とって通る世の中であれば、いつまでたっても林業なんてなりたたないのではないかと思う。林業を成り立たせるためには、建築の世界でも連携していくことが大事。消費者に本当の木づかいをもって、良いね。と訴えていくにはどうしたら良いのか常々考えていく。

先ほどの言われたことについて、将来ではなく現在日本の林業が大きく変わりつつあるのではないかというふうに思っていることを一度ぶつきたいと思います。

中国の若手の優秀な研究者が言っていたことですが、日本人はバカだ。中国人に任せろ。中国人の力を3つ借りればいい。一つは中国の安い労働力を使って日本の木を加工する。そして日本に輸出すれば、木はきちんと使えます。日本の労働者に拘っているから、日本の林業は再生できないのだ。現実には宮崎県、秋田県は、はける方が良いということでどんどん中国に輸出が始まっている。中国は、お金持ちがいる。13億全員がというわけではないのですが、数千万人はお金持ち。その人たちが、ロシア材、南洋材にあわせて日本のスギヒノキも使いたいと言っている。良い木なので使いたい。中国人に加工させれば、日本で使える建材になります。3分の1で建材(建具)を持っていける。と言われた。

もう一つは中国人を現地で使ったらどうですか？日本で使ったらどうですか。というより、もう始まっているのではないかと思う。というのは、長野に限らず建設産業が非常に不況で、森林の施業に入札で入れるようになった。そこが、森林組合の仕事をどんどん取りつつある。3割から4割とってきている。建設産業のなかでは、外国人労働者は既に入っている。その人たちは、非常に安い賃金で働くものですから、しかも中国人は勉強熱心ですから、日本人があっけにとられるような力でやっていくわけです。昔の安い賃金で林業を成り立たせてきたということが復元できるのでもう一度日本の林業が再生できる。

もう一つは、これだけ自由化と言われている中、日本は林業経営については自由化していない。外国人がやってはいけないことになっている。製品の輸入輸出（加工）は外国人ができる。ところが林業経営はできないが、林業資本経営が日本に入ることができれば、日本の山村は蘇りますよ。といわれた。今、日本の林業経営者が中国と結びつつあるので、遅かれ早かれそのことに気づくかもしれない。

森林組合に任せず、中国の林業チームを呼んで、彼らに全部やらせよう。という発想も出てくるかもしれない。そうすると日本人にとっては、手入れもできないゴミとするしかできなかつた日本の山が、昔の姿に蘇ってしまうかもしれない。だけでも、そこには日本人はいないということにもなりかねないのですが。

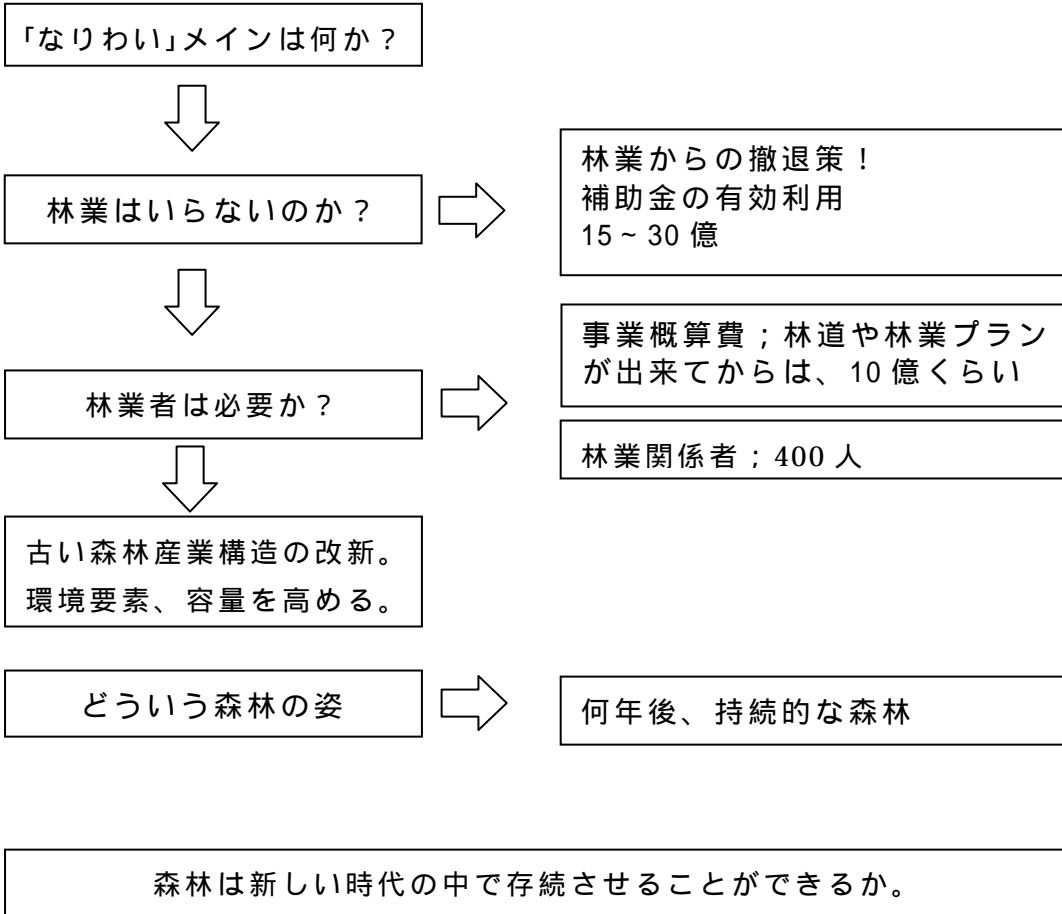
（山田喜久雄）昔の農地解放のように山林開放が入ったほうがいいと思う。そうしないと、今伊勢原市の山の中で伊勢原市以外の地主がかなり多い。東京とか。そういう山が害となっていること確かなので、思い切って戦後の日本のように農地解放の山版をやったほうが、より将来の日本のためには良いのではないかという気がします。

（小林）100%国産材の家をビジネスだけでなく運動としても展開していきたいという考えをもって取り組んでいます。人間は生物であるということが置き忘れられている。かつての日本人は自然の中に神が宿るということで、自然に生物は生かされている。人間が自然を支配しているという感覚はまずい。やはり、自然を敬うという観点から物事の考え方をスタートさせないと、自然環境は人間の単なる所有物のような考え方で、そういったところからビジネス最優先の考え方で、金にならないものは価値がないもの。例えば空き地に1本の木がある。これは無駄以外の何物でもない。伐り倒すにも金がかかる。空き地を使うのにも邪魔。ところがその1本の木を中心に実がなれば鳥来る。木は酸素を出し、二酸化炭素を吸う。根元では色々な菌、土中にも虫がいる。この木を中心に生態があることが、今価値として見向きもされない。単なる無駄なものという感じです。私が思うのは、森林の役割というのを若い人に教育していく必要があると思う。私のところにも19歳のインターンシップの若い女性が1人来ていますが、家づくりに化学物質、化学建材でつくる家づくりと、自然素材でつくる家づくりがあるのだよ。それは住む人にとって健康や安らぎや快適性にすごく違いがあることを学校で習っていますか？と聞くと、私は、大学に来るまで1度も話しも聞いたことがない。自然が私たちにとって大事だということ全く教えていない。特に大学の住宅学と

というのは1週間に1回くらいしかない。特に木材に関しての授業は行われていない。それで1級建築士の資格が取れてしまう。非常にバランスの崩れた日本の姿があるわけです。全国民のほとんどの方が住宅に住むのに、住宅学というのがまずない。まして自然に関する認識が欠落している。とにかくお金が最優先。やはり物事を見直していかないと、森林保護の役割など林業の育成が森林保護につながるということと森林の役割をもっと活性化させるのだということとは、国家的プロジェクトとして取り組みを考えていかないと、土地を持っているものに土地の権利があるのは理解できるけれどもその上に生えている森なり木というものに権利を主張されてしまうと全く手がつけられないので、その辺のところは法律の改善なりして日本の森の活性化が日本の国力につながっていき、国民の健康まで大きな影響があるのだということを特に若い人たちに教育の場で広めていてもらいたい。自然素材の家作りに取り組んでいるものとして是非お願いしたいです。

(系長) 最後に熱いエールありがとうございます。今日はあとツーリズム、基礎調査とあるのですが、地域再生フォーラム2回目でいうと、環境資源を使ってのなりわい、その時、丹沢大山の森林の環境資源をどう評価すべきなのか。持続的な保全と活用の視点でいうと、今までの狭い意味での林業とは違う新しい森林管理業、あるいはそれを持続的に使っていく暮らし人そういうスタイルを発信していかなければいけないだろう。それは最後の小林さんの意見を使わせていただくとすれば、所有と利用ということでは、その境界線をもう少し使っていく、守っていくことを中心とした施策展開も一方では必要になるだろう。とご指摘いただきました。私たちとしては、色々な課題があってそれをどう落とし込めるか、あるいは調査団としては、県に施策の案を定義したりするわけですから、今日のテーマでいうと、今までの林業で何十億というスタイルは全面的に見直しましょう。その中で持続的な公的投資額を今度提案で出していきたいと思います。森づくりは人づくりとあって、人づくりをどうするのかということでは、今ツーリズムや暮らしのほうで、そこに住んでいる人たちをどう巻き込むか、あるいは、関係市町村を巻き込むということでは、山が近くて遠い状況をいかに近くて近い状況にするかということをごちらから発信しないといけない。それがうまくいけば、会場もいっぱいになり席が足りなくなるくらいにしていきたい。

私の感想ですが、今まで日本の歴史にもなかったようなことが起こっている。地球全体がそうですけれども。そういう意味で言ったら創造的なことをしなくてはならない。山田さんからあえて問題を提起するようなことをやっていただきましたけれども、そのような新たな切り込みをしっかりとできない限りいけないのではないかと。そうすると、市民だけでなく行政に関しても相当思い切った決断をしなければいけないのでは。



丹沢大山総合調査での地域再生調査 第一回地域再生フォーラムの記録

日時：2004.10.16.
場所：自然環境保全センター大講堂

プログラム

1. 開会のあいさつ
2. 主旨説明
丹沢大山地域に暮らす人達や関心の高い人達の参加を受けて、地域再生チームが検討している、丹沢大山地域の再生に向けた課題やビジョンについて中間報告すると同時に、意見交換を行いたい。
3. 地域再生チームの調査中間報告
基礎調査（データ、第一回市町村ワークショップ結果）グループ
ツーリズム・環境教育グループ
なりわい再生グループ
くらし再生グループ
4. 質疑
5. グループに分かれての討議
「ツーリズム・環境教育」「なりわい再生」「くらし再生」の3グループに分かれて話し合う。
6. 全体討論
各グループで討議された内容報告と課題等を紹介する。
7. 閉会のあいさつ



各グループの調査の中間報告を、スクリーンを使って行ないました。



調査についての質疑応答を、全体で行ないました。



関心のあるテーマに分かれて、グループ別で話し合いをしました。



各グループごとに、話し合いの成果を発表しました。

～各グループの中間報告の概要～

【基礎調査グループ】

基礎調査としてまとめているマップや統計データの説明
(標高・水系、植生自然度、森林計画、施設、字界、各種統計データ(人口、産業、観光等))
8月に行なった市町村ヒアリング及び市町村ワークショップの概要の説明

【ツーリズム・環境教育グループ】

各調査の調査項目、進捗状況等の説明
(登山道・登山、観光リクリエーション、環境教育・学習、エコツーリズム化等の調査)

【なりわい再生グループ】

調査プロセス、目標・課題・解決策・今後の調査等の説明
(目標：林業の復興、荒廃林の回復、里山産業の復活、新産業への備え)

【くらし再生グループ】

調査の視点、モデル地区、進捗状況、課題、再生ビジョンの説明
(食の復興、水の復興、住の復興、大山街道によるアプローチ)

～全体質疑の概要～

調査のポイントや基本的な考え方、生態系の問題、管理の問題、今後必要なデータなどの質疑応答
(地域再生のポイント、自然の概念、丹沢の乾燥化、ダムの影響、森林管理の担い手の高齢化への対策、丹沢へアプローチするバスの経年変化のデータ、森林の経年変化のデータなどへの質疑応答)

～グループ討議・発表の概要～

【ツーリズム・環境教育グループ】

登山道、水環境、山と里、管理、観光と里山景観、キャンプ場、子どもの環境教育等が話題となった。
・オーバーユースの問題に対し、分散的な登山計画が必要。
・丹沢の乾燥化について、データをとる必要がある。
・「山の神」の分布を調べることで、里山、暮らしにとっての山の丹沢大山地域での全体像が開けるのではないかと。
・どこを守り、どこを使い、どこを再生すればいいか。そういう意味での丹沢大山地域での新しいゾーニングが必要。
・里山という言葉は安易に使わないほうがいいのでは？里山は人がだまって入ることはいけないとされている。
・いい景観を残して、休み、交流し、体験できる環境、観光を考えたい。量より質の問題だ。
・キャンプ場のマナーの問題は、利用者と経営者の双方の問題だ。
・いろいろ体験できるちょっとした小屋が丹沢大山地域に分散的にほしい。「33ヶ所巡り」の感じで使えるとよい。
・子どもが自然とふれあうことで感性をよみがえらせることが必要。 ...など

【なりわい再生グループ】

丹沢の林業の履歴、林業の現状、新たな試み、これからの丹沢への展望等が話題となった。
・ケヤキ、モミ、ツガ等の天然木を出荷していた。30年代後半から林業で食べられなくなった。
・現在の建築は外材8割。
・雑木林であったところへ国策でスギ、ヒノキを植えた。植えずぎて荒れている。
・内装の不燃化の法律規制が厳しい。木材利用については悲観的
・今の山がどのくらいのキャパシティがあるのかきちんと捉えることが課題。
・ヒノキ油が売れている。
・丹沢は林道密度が低い。端材を出さず緑のリサイクルをする、山に返し樹木の育成に役立てるなど、丹沢での多様な利用が考えられる企業があるとよい。
・特徴的な材を建材として使うなど市場を狙ってチャンス創出。
・10～20年後、絶対に価値が出る、夢を見よう！！この間の補充を行政で！ ...など

【くらし再生グループ】

鳥獣被害の現状や要因、その対応策や、生態系の乱れ、調査の進め方等が話題となった。
・農作物の被害や土壌の荒廃など、シカ、サル、イノシシ、ヒル等の被害に悩まされている。
・里山が崩れ、山の食が崩れた。里山が荒れて、山から直に里になってしまった。
・広葉樹林(ドングリなど)が無くなっている。鳥獣の食べ物ではないスギなど針葉樹林が多い。
・アシタバ、ノブキなどを里山に取り入れる、鳥獣が嫌いなものを植える、里山より上に鳥獣の食べ物を植える。
・広葉樹林の減少、上流の激流、様々な場所での放流、導水管による沢水の枯渇、ダムによる水循環の分断などが生態系の荒廃をおこしている。道志川には昔はカジカがいたが、現在はいない。
・方向性と実態の違い。実態が明確にされないという意味が無いのではないかと。
・調査項目や課題を整理する必要がある。時間設定・生き物・水など、どれに重点を置くのか。 ...など

丹沢大山総合調査での地域再生調査 第二回地域再生フォーラムの記録

日時：2005.2.20.
場所：自然環境保全センター大講堂

プログラム

1. 開会のあいさつ

神奈川県自然環境保全センター
地域再生チームリーダー

2. 地域再生チームの2004年度調査結果の概要報告

ツーリズム・環境教育グループ
なりわい再生グループ
暮らし再生グループ

基礎調査 / 市町村ワークショップ・地域再生フォーラム第一回及び政策的提案について

3. 関心テーマへの意見カード記入と張り込み

休憩を兼ねて、3つのグループ(~)での関心テーマ、政策提案での関心テーマへの意見を付箋に記入し、各グループ別の模造紙に張り込む。

4. テーマ別討論

~ のグループに関して、参加者の主要な関心テーマを優先して総合討論

5. 閉会のあいさつ



各グループの調査の中身をスライドを使って報告を行いました。



調査についての質疑応答を、全体で行ないました。



関心のあるテーマへの意見カード記入と張り込みを行いました。



参加者全員が円卓形式で意見交換を行いました。

~各グループの中間報告の概要~

【ツーリズム・環境教育グループ】

- ・オーバーコースの歴史、背景を説明し山岳、麓、その他に分類し現状と課題を提示。
- ・16年度オーバーコースとエコツーリズム化関連調査の報告。
(登山道・登山、水質、観光リクリエーション、環境教育・学習、エコツーリズム化等の調査報告)

~質疑の概要~

- ・登山靴は、登山道荒廃の原因のひとつなのか？

【なりわい再生グループ】

- ・神奈川県の森林の概要。国産材の流通、担い手、森林荒廃、所有者不明、境界不明の私有地、ボランティアのネットワーク等の問題を提示。
- ・環境保全型森林経営プラン樹立、野生動物管理事業の必要性を説明。
- ・丹沢での生業再生の取り組み事例の説明

~質疑の概要~

- ・森林バイオマスの活用目標量の設定とシカ肉について。

【暮らし再生グループ】

- ・グループ全体の調査概要：テーマ・方向性の確認、活動内容・状況
- ・「食の復興」班（秦野市東田原、松田町の食システム調査）「住の復興」班（津久井町青根地区の集落空間構成）、鳥獣被害（津久井町青根の防護柵、松田町寄でのアンケート）の調査報告
- ・津久井町青根地区でのワークショップ：概要、結果、まとめ

~質疑の概要~

- ・間伐材による花粉症の影響について。
- ・鳥獣被害のデータのおさえ方について。

【基礎調査グループ / 市町村ワークショップ・地域再生フォーラム第一回及び政策的提案について】

- ・土地利用の変化や人口推移をマップや統計データを用いて説明。
- ・第1回、第2回市町村ワークショップ、第1回地域再生フォーラムの報告

~質疑の概要~

- ・今後は8市町村に出前的な企画を検討することが話題となった。

~討論の概要~

- 関心テーマへの意見カードに記入した後、「なりわい再生」にテーマを絞り総合討議を行った。
- ・議論を深めるため、「神奈川県で林業が成り立つのか？林業はいらぬのか？」の提起がなされた。
- ・林業を確保する場合、どの程度、どのようなやり方、どのような生産なのか明確にする必要がある。
- ・県有林、私有林をこれからどのような林にしていくのか。
- ・50年後を予想した時、林業はいるのか、いらぬのかを議論し、今後どうすべきか目標をたてる必要がある。
- ・現在は外材に負けているが、保護伐採になってきている。今後国産材が脚光を浴びるかもしれない。
- ・丹沢大山で林業をなりわいとしている37事業体の約400人の現状と問題。
- ・元々神奈川は人工林をまわすのではなく、広葉樹を抜き伐りしてきたところ。人工林を撤退し、広葉樹利用産業に変えたらどうか。
- ・または、国産材の供給を担うために50年間準備するために人工林を残しておく。
- ・財産区有林が多い丹沢。その地域特性をふまえた議論が必要。(林業及び森林の環境としての観点など)
- ・S30年代はどこの山に行ってもとてもきれいだった。そのような山に今は再生することはできない。
- ・これからは、鳥獣被害の問題を含めて複雑な自然生態系を理解し、一方で登山者や狩猟者などの対応等、森林経営者、森林整備、森林ドクターとしての役割を担っていける人が必要。
- ・環境資源を使っただけのなりわい、その時、丹沢大山の森林の環境資源をどう評価すべきなのか。持続的な保全と活用の視点でいうと、今までの狭い意味での林業とは違う新しい森林管理業、あるいはそれを持続的に使っていき暮らし人そういうスタイルを発信していかなければいけないだろう。

(2) ツーリズム・環境学習調査

目次

1. 登山道・登山にかかわる調査
 - ① 登山道実態(荒廃状況)調査
 - ② 登山道利用人数(パーソントリップ)調査

2. 観光レクリエーションにかかわる調査
 - ① キャンプにかかわるアンケート調査

3. 環境教育・学習にかかわる調査
 - ① ビジターセンター等に対するヒアリング
 - ② ボランティア・活動団体に対するアンケート

4. エコ・ツーリズムにかかわる調査
 - ① 国内事例収集整理
 - ② 先進事例地視察・現地調査

丹沢大山総合調査

地域再生調査チーム ツーリズム・環境教育学習グループ 2004年度 中間報告書

大都市近郊で交通利便性の高い地域にもかかわらず、1000m以上の山々を抱える丹沢大山地域は多くの来訪者、登山客が訪れる貴重な場所である。近代的な登山が始まる以前から、大山信仰を始めとした信仰、山伏修行の山であり、歴史的には人との関わりの深い山間地域でもある。近年の中高年齢層の登山ブーム、アウトドア・レクリエーションブーム、ドライブ等により丹沢大山へのホリディー、ツーリズム等、都市的暮らしと自然的暮らしの両立を求める人達の訪れる場ともなっている、と同時に、オーバーユース等、自然保全・再生との両立の上で多くの課題を抱えている。

ツーリズム・環境教育グループでは、登山実態、オーバーユース実態、登山者・レク客の意識、ビジターセンター等交流体験施設、環境教育プログラム、先進的なエコツアープログラム等の調査により、丹沢大山での自然再生・環境教育をテーマとした、持続可能な「丹沢大山エコツーリズム・エデュケーション」の構想を検討するための調査を進めている。また、一方的な奥山へのツーリズムを里地・里山ツーリズムへと転換させていくことも重要な視点と位置づけている。

<平成16年度調査項目>

| 調査項目 | | 調査状況等 |
|-------------------------------------|---|---|
| 1. 登山道・登山にかかわる調査 | | |
| 登山道等 施設実態 調査 | ①登山道実態（荒廃状況）調査 ②登山道利用人数（パーソントリップ）調査 | 県民ボランティアの協力により実施 丹沢ボラネットの協力により9山頂、30箇所でのカウト調査を実施 |
| 利用実態・ 意識調査 | ③登山実態等に係わるアンケート（団体） ④登山実態等に係わるアンケート（一般） | 丹沢ボラネット（35団体、610名）を対象に実施 「みろく山の会」「西丹沢の自然とふれあう会」協力により実施 |
| 2. 観光レクリエーションにかかわる調査 | | |
| 利用実態・ 意識調査 | ①キャンプにかかわるアンケート調査 | 丹沢大山の東西南北8箇所のキャンプサイトで実施 (8月16・17日) |
| 3. 環境教育・学習にかかわる調査 | | |
| 利用実態・ 意識調査 | ①ビジターセンター等に対するヒアリング ②ボランティア・活動団体に対するアンケート | ビジターセンター、西丹沢自然教室を対象に実施 約20施設、約50団体を対象に実施 |
| 4. エコツーリズム化にかかわる調査 | | |
| 情報・資料 収集整理 | ①国内事例収集整理 | 屋久島（鹿児島県） ホールアース（静岡県） いしかわ自然学校（石川県） |
| 先進事例 地調査 | ②先進事例地視察・現地調査 | 屋久島（鹿児島県） ホールアース（静岡県） いしかわ自然学校（石川県） |
| 5. GISによる登山道施設・地域資源等のデジタル情報化 | | |
| 地理情報 化 | 登山道50路線：自然公園課管理路線図 登山道利用人数（パーソントリップ）調査における各路線での延べ登山者数図 ボランティアネットワーク所属者（アンケート回答者）がよく使用する登山道路線図 一般登山者が（アンケート実施時に）使用した登山道路線図 県民参加による登山道実態（荒廃状況）調査結果 一植生退行・侵食度・水切、丸太階段等状況一 ボランティアネットワーク活動図 | |

1. 登山道・登山にかかわる調査

【登山道等施設実態調査】

①登山道実態（荒廃状況）調査

県民参加による丹沢・大山の主要な登山道の荒廃状況のデータベース化

①調査方法

人が歩けば道になり、大勢が歩くと道は掘れてしまう。そして雨が流れ侵食が進む。歩きにくいところを避けて、登山コースを少し外れて植物の上を誰かが歩き出すと、その跡を他の人も歩いて、登山道の幅員が広がり、植生の退行が進み…、オーバーユース（過剰利用）と呼ばれる現象が表れる。

丹沢・大山地域の登山道に設置されている、木道や丸太階段、土嚢や石による路面舗装などの施設は、登山者の安全な歩行を確保するとともに、オーバーユースにより失われる自然環境の保護を目的としている。

本調査では、丹沢・大山地域での登山道及び施設の荒廃状況を把握することでの、より効率的な整備を目指し、県民参加での協力を得た調査を実施した。ここでは、丹沢・大山での登山者ならではの視点をいかした登山道の荒廃状況に関する情報の構築もさることながら、独自のネットワークの中での登山道に対するオーバーユースの意識啓発の場としての試みも期待している。

調査に際して、平成16年9月23日と10月2日に、秦野ビジターセンター・大倉尾根線において、ボランティア登録がなされた県民を対象とした調査方法のレクチャーを実施した（表1）（下写真）。ここでの調査は、指定された26路線（東海自然歩道4路線、丹沢主脈線4路線、首都圏自然歩道2路線に分けた）について「植生退行状況」「登山道侵食状況」「丸太階段・水切りの荒廃状況」を調査シートに記入するものとした。県民参加による調査員は、都合のつく時に、好きな路線を選んで、登山を楽しみながら調査票に記入、郵送にて送付、これらを事務局が集計・分析した。

表 - 1 登山道荒廃状況調査にかかわるボランティア説明会参加者数

| 登山道荒廃状況調査にかかわるボランティア説明会 | | 参加者人数 |
|-------------------------|------------------|-------|
| 9月23日（木） | 秦野ビジターセンター・大倉尾根線 | 15名 |
| 10月2日（土） | 秦野ビジターセンター・大倉尾根線 | 13名 |

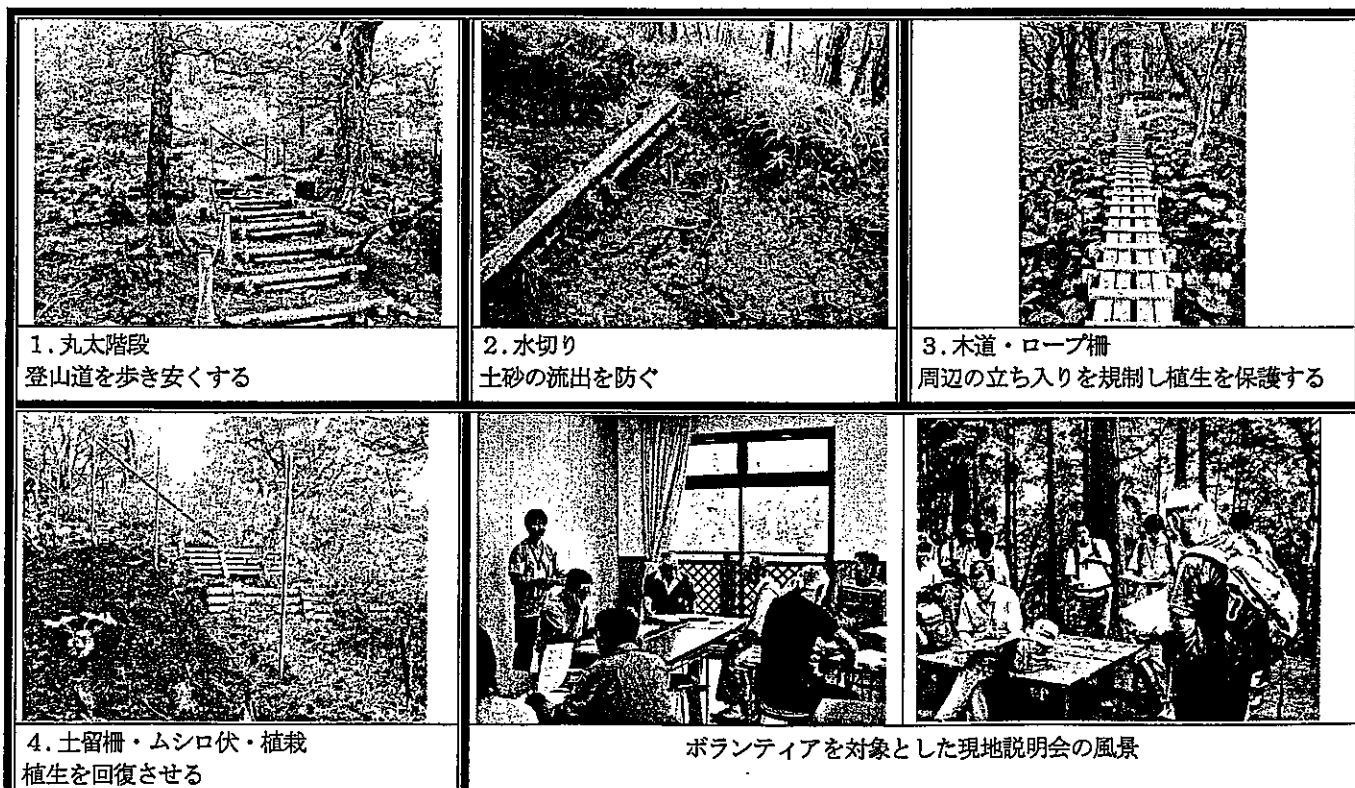


写真 登山道等施設の種類の種類

②結果

県民参加による 32 票, 12 路線についての調査票の返送があった。

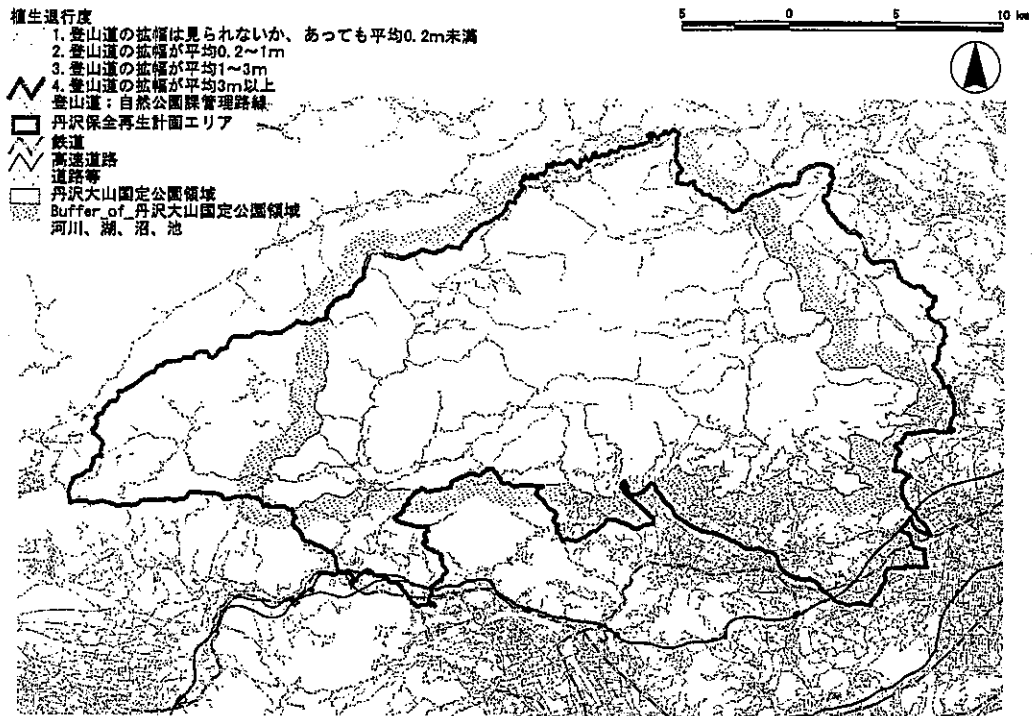
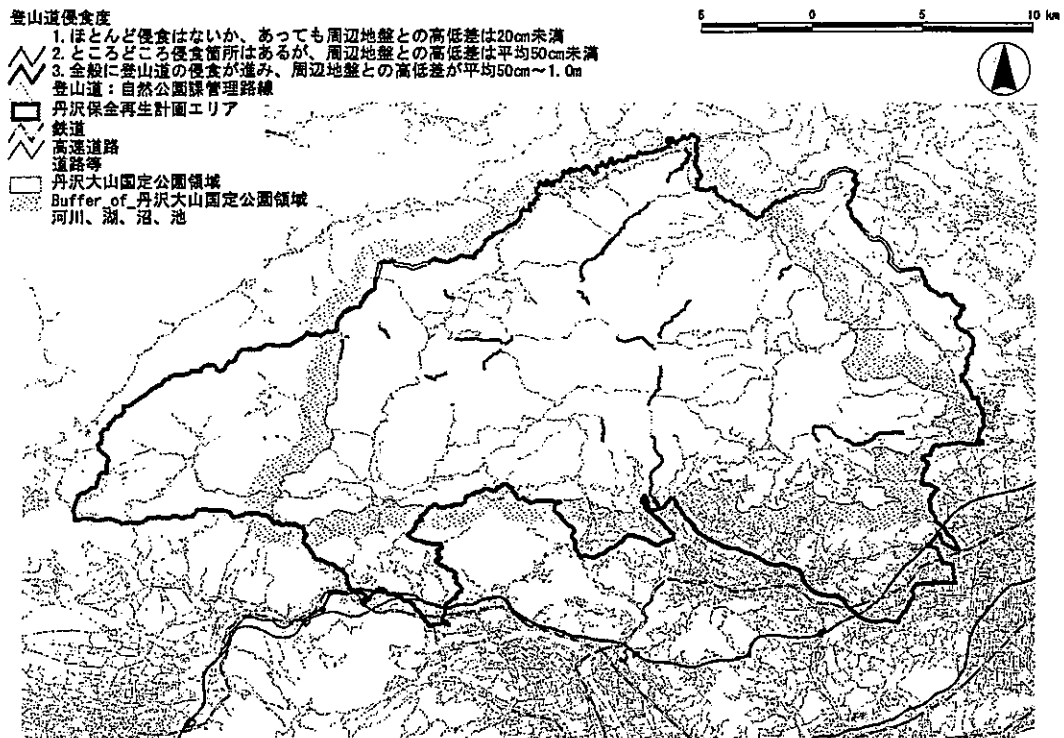


図-1 県民参加での評価による植生退行度

荒廃状況において、植生退行状況をはかる度合いの指標である「1. 登山道の拡幅は見られないが、あっても平均 0.2m 未満」、「2. 登山道の拡幅が平均 0.2~1m」、「3. 登山道の拡幅が平均 1~3m」、「4. 登山道の拡幅が平均 3m 以上」のうち、4 との評価が、西丹沢山稜線の大室山分岐点に対して指摘され、また、同路線において犬超路では 3 と評価されている。また、東海自然歩道における西沢公園橋、蛙ヶ丸山頂、大滝峠上、鳥屋方面分岐、丹沢主脈線における丹沢山頂、蛭ヶ岳山頂、大倉尾根線における一本松、駒止茶屋上部、つつじ新道線における石棚分岐、丹沢三峰線における丹沢山の各地点が、3 と評価されている (図 1)。



図－2 県民参加での評価による登山道侵食度

また、登山道侵食度をはかる度合いの指標である「1. ほとんど侵食はないが、あっても周辺地盤との高低差は20cm未満」、「2. ところどころ侵食箇所はあるが、周辺地盤との高低差は平均50cm未満」、「3. 全般に登山道の侵食が進み、周辺地盤との高低差が平均50cm～1.0m」のうち、3との評価が、東海自然歩道における520mピーク及び姫次、首都圏自然歩道における見晴台及び九十九曲中間点、大倉尾根線における大倉登山口に対して指摘されている（図2）。

施設状況においては、設置されている丸太階段数とその荒廃状況についての評価では、荒廃状況の指標である「1. 腐食なし、踏み面の段差もごくわずか」、「2. 傷が目立つ、踏み面の段差は10cm以内」、「腐朽進む、踏み面の一部の土が抜ける」、「4. ハードル化した階段が目立つ」のうち、4との評価が、二俣鍋割線における鍋割山頂、西丹沢山稜線犬越路上1221mピーク～大室山分岐中間点及び前大室に対して指摘されている。また、東海自然歩道における善六ノタワ、一軒家避難小屋上、姫次、首都圏自然歩道における半原越、土山峠分岐、640mピーク、宮ヶ瀬越、九十九曲中間点、丹沢主脈線における日高、蛭が岳～地蔵平の中間点、地蔵平、大倉尾根線における一本松、西丹沢山稜線における大室山分岐点が、3と評価されている（図3）。

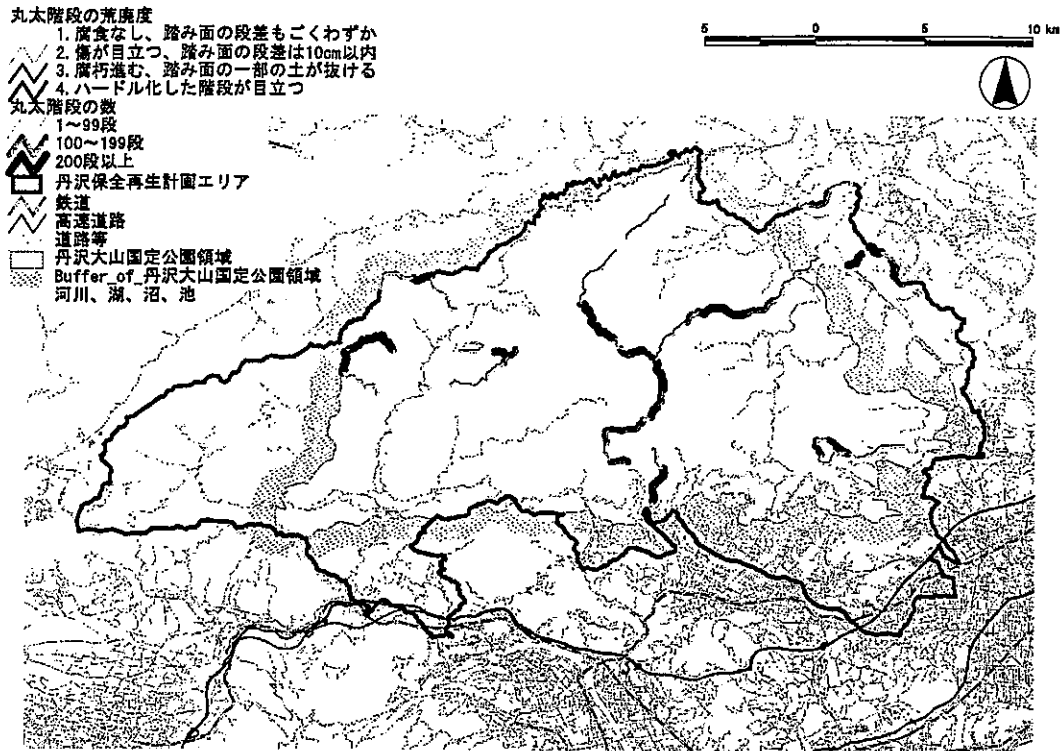


図-3 県民参加による丸太階段数とその荒廃度評価

また、水切の設置数及びその機能評価では、機能していない(0%)との評価が、東海自然歩道における善六ノタワ、丹沢主脈線における棚沢ノ頭、地蔵平、原小屋平、西丹沢山稜線における犬越路上1221mピーク～大室山分岐中間点、大室山分岐点、つつじ新道線におけるゴーラ沢出合に対して指摘された(図4)。

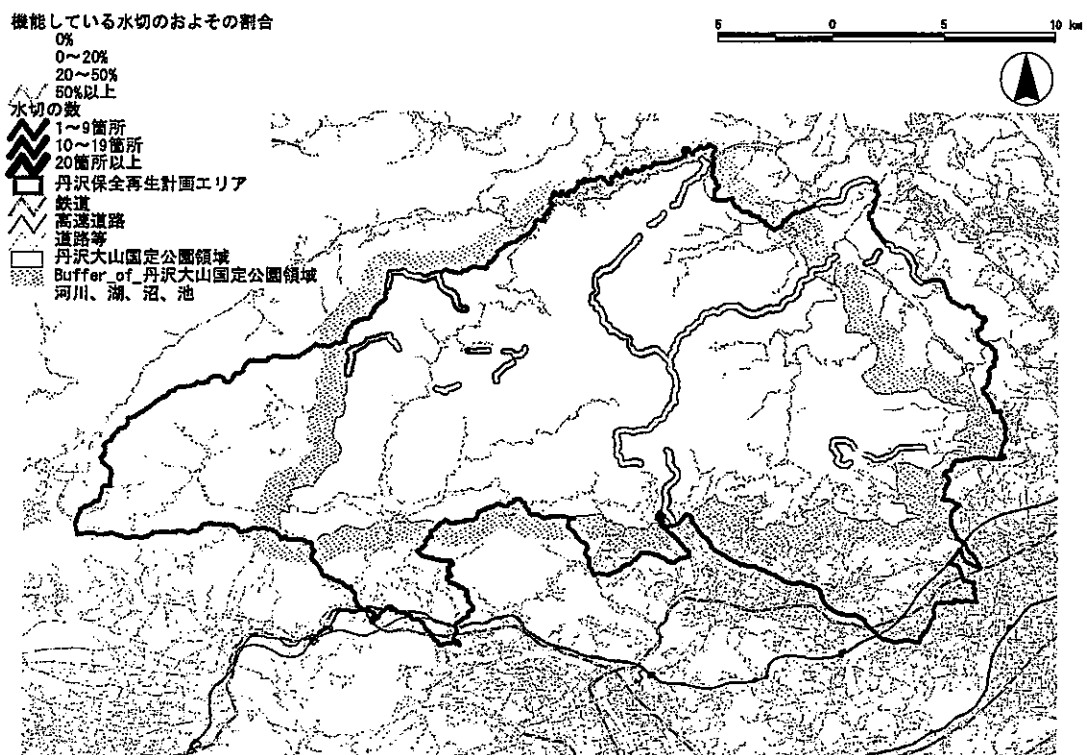


図-4 県民参加による水切数とその機能評価

1. 登山道 - 登山にかかわる調査

【登山道等施設実態調査】

②登山道利用人数（パーソントリップ）調査

ボランティアネットワークとの協働による丹沢・大山の一斉入山調査

①調査方法

オーバーユース把握の一環として、丹沢・大山地域での登山道を行き来する登山者数を把握するために、主な山頂に入ってくる人数と出ていく人数をカウントすることで、丹沢・大山地域の何処に負担がかかっているのかをおおまかに集計・分析した。ここでは、「丹沢大山ボランティアネットワーク」の協力のもとに（今回調査では、丹沢大山ボランティアネットワークの「みろく山の会」・「日本勤労者山岳連盟」・「丹沢自然保護協会」・「西丹沢の自然にふれあう会」・「北丹沢山岳センター」より63名、「人材バンク」登録者より2名、神奈川県自然環境保全センターより1名、日本大学より5名の計70人で調査を実施した。）、以下の9山頂、30箇所でカウンターによる調査を実施し、実施日は、11月13, 14, 16, 20, 21日の何れで実施した。対象とした山頂と計測時間は、以下に示す。

表-2 登山道利用人数調査地点

| 山頂 | 関連箇所の出入りをカウント | 時間 |
|------|------------------------------------|-------------|
| 大山 | 4方面（見晴台，唐沢峠，ヤビツ峠，下社，） | 朝9時～夕方15時まで |
| 岳ノ台 | 菩提峠／ヤビツ峠方面 | 朝9時～夕方15時まで |
| 三ノ岳 | 2方面（二ノ塔，塔ノ岳，烏尾山，牛首方面） | 朝9時～夕方15時まで |
| 塔ノ岳 | 4方面（新大日，大倉，丹沢山，熊木沢出合方面） | 朝9時～夕方15時まで |
| 鍋割山 | 3方面（塔ノ岳，雨山峠，後沢乗越方面） | 朝9時～夕方15時まで |
| 丹沢山 | 3方面（本間ノ頭，天王寺尾根，蛭ヶ岳方面） | 朝9時～夕方15時まで |
| 蛭ヶ岳 | 3方面（丹沢山，姫次，檜洞丸方面） | 朝9時～夕方14時まで |
| 檜洞丸 | 5方面（犬越路，蛭ヶ岳，西丹沢自然教室，石棚山，ユーシンロッジ方面） | 朝9時～夕方14時まで |
| 加入道山 | 5方面（大室山，犬越路，道志村，水晶沢ノ頭，用木沢出合方面） | 朝9時～夕方15時まで |

②結果

2004年11月13,14,16,20,21日に、9山頂及び登山道30箇所で行った登山者数調査では、延べ2,713人（登り1,314人，下り1,399人）の登山客がカウントされた。このうち「下社大山線」の大山⇄下社区間の延べ432人（登り247人，下り185人），同線大山⇄見晴台区間延べ279人（登り92人，下り187人），「大倉尾根線」の塔の岳⇄大倉区間の延べ312人（登り110人，下り202人），「丹沢主脈線」の塔の岳⇄大倉区間の192人（登り100人・下り92人）と、いわゆる表丹沢への登山客の集中が確認された（図5）。

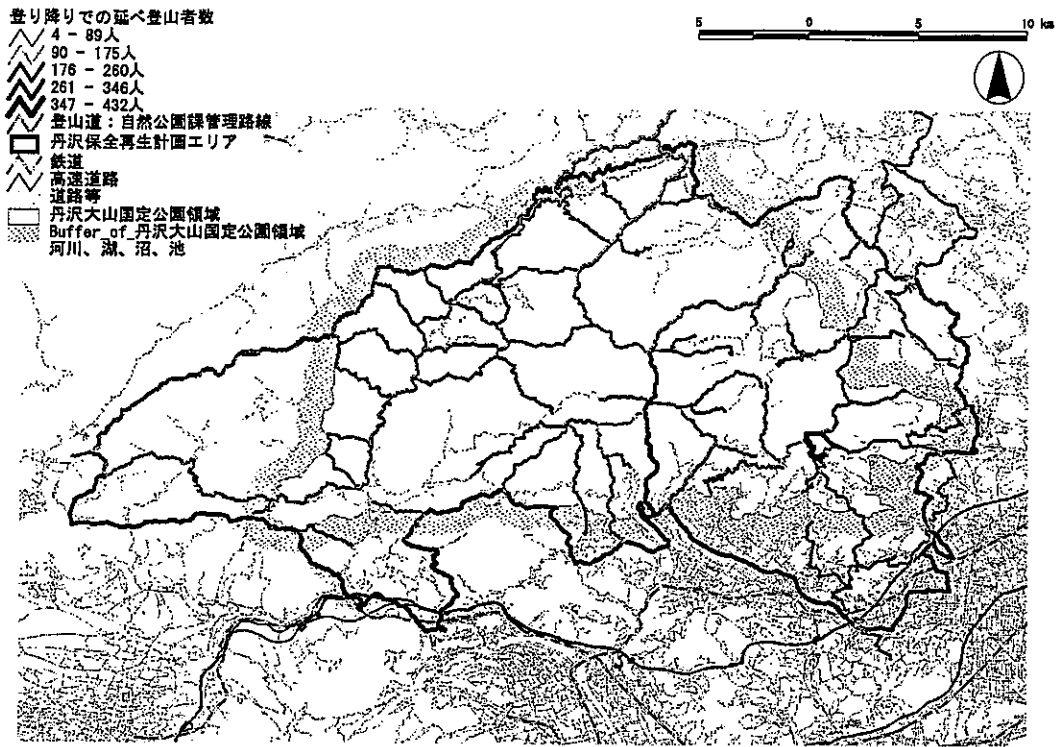


図-5 登山道利用人数 (パーソントリップ)

表-3 各登山路線での利用人数

| 山頂 | 調査地点 | 方向 | 登り(人) | 下り(人) | 延べ数(人) |
|------|----------------|---------------|-------|-------|--------|
| 大山 | 大山東分岐見晴台側 | 大山⇄見晴台 | 92 | 187 | 279 |
| | 大山東分岐唐沢峠側 | 大山⇄唐沢峠 | 0 | 4 | 4 |
| | 大山南分岐ヤビツ峠側 | 大山⇄ヤビツ峠 | 84 | 26 | 110 |
| | 大山南分岐下社側 | 大山⇄下社 | 247 | 185 | 432 |
| 岳ノ台 | 岳ノ台 | 岳ノ台⇄ヤビツ峠 | 13 | 6 | 19 |
| 三ノ塔 | 三ノ塔分岐付近 | ニノ塔→(三ノ塔)→塔ノ岳 | 96 | — | 96 |
| | 表尾根線上 | 塔ノ岳→(三ノ塔)→ニノ塔 | — | 40 | 40 |
| | 三ノ塔分岐付近 | 牛首→(三ノ塔)→塔ノ岳 | 10 | — | 10 |
| | 三ノ塔尾根線上 | 塔ノ岳→(三ノ塔)→牛首 | — | 27 | 27 |
| 塔ノ岳 | 塔ノ岳分岐新大目側 | 塔ノ岳⇄新大目 | 42 | 42 | 84 |
| | 金冷シ分岐花立側 | 塔ノ岳⇄大倉 | 110 | 202 | 312 |
| | 塔ノ岳分岐丹沢山側 | 塔ノ岳⇄丹沢山 | 100 | 92 | 192 |
| | 塔ノ岳分岐熊木沢出合側 | 塔ノ岳⇄熊木沢出合 | 16 | 6 | 22 |
| 鍋割山 | 鍋割山分岐小丸側 | 鍋割山⇄塔ノ岳 | 76 | 66 | 142 |
| | 鍋割山分岐鍋割峠側 | 鍋割山⇄雨山峠 | 13 | 14 | 27 |
| | 鍋割山分岐後山乗越側 | 鍋割山⇄後沢乗越 | 83 | 90 | 173 |
| 丹沢山 | 丹沢山北分岐瀬戸沢ノ頭側 | 丹沢山⇄本間ノ頭 | 8 | 22 | 30 |
| | 丹沢山北分岐天王寺尾根側 | 丹沢山⇄天王寺尾根 | 36 | 41 | 77 |
| | 丹沢山分岐不動ノ峰側 | 丹沢山⇄蛭ヶ岳 | 100 | 92 | 192 |
| 蛭ヶ岳 | 蛭ヶ岳分岐鬼ヶ岩ノ頭側 | 蛭ヶ岳⇄丹沢山 | 85 | 27 | 112 |
| | 蛭ヶ岳分岐地蔵平側 | 蛭ヶ岳⇄姫次 | 14 | 70 | 84 |
| | 蛭ヶ岳分岐ミカゲ沢ノ頭側 | 蛭ヶ岳⇄檜洞丸 | 14 | 30 | 44 |
| 檜洞丸 | 檜洞丸分岐熊笹ノ峰側 | 檜洞丸⇄犬越路 | 1 | 24 | 25 |
| | 檜洞丸分岐金山谷乗越側 | 檜洞丸⇄蛭ヶ岳 | 0 | 16 | 16 |
| | 檜洞丸南分岐ゴーラ沢出合側 | 檜洞丸⇄西丹沢自然教室 | 54 | 15 | 69 |
| | テシロノ頭北分岐檜洞丸側 | 檜洞丸⇄石棚山 | — | — | — |
| | テシロノ頭北分岐中ノ沢乗越側 | 檜洞丸⇄ユーシンロッジ | — | — | — |
| 加入道山 | 大室山西分岐加入道山側 | 加入道山⇄大室山 | — | — | — |
| | 大室山西分岐犬越路側 | 大室山分岐⇄犬越路 | 1 | 34 | 35 |
| | 加入道山南分岐道志村側 | 加入道山⇄道志村 | 5 | 5 | 10 |
| | 白石峠北分岐加入道山側 | 加入道山⇄水晶沢ノ頭 | — | — | — |
| | 白石峠北分岐用木沢出合側 | 白石峠分岐⇄用木沢出合 | 1 | 30 | 31 |
| 合計 | | | 1,314 | 1,399 | 2,713 |

1. 登山道・登山にかかわる調査

【登山道等利用実態・意識調査】

③登山実態等にかかわるアンケート調査（団体）

ボランティアネットワークに所属する35団体（約600名）を対象とした実態・意識調査

①調査方法

丹沢・大山地域での登山にかかわる利用の実態，その利用意識の把握を目的として，「丹沢大山ボランティアネットワーク」35団体，610名を対象としたアンケート調査を実施した。

調査期間は，平成16年8月9日～8月27日とし，各団体の代表者に調査票を郵送，代表者が会員に配布・収集し，事務局に返送する形式をとりました。現時点では，32団体，423名（回収率：団体91%，個人69%）からの返送があった。調査項目は，フェイスシート（属性調査）の他，「登山とのかかわり」「丹沢大山について」「丹沢大山の登山道等施設整備について」の4つの項目についてそれぞれ問いを設置した。

表-4 アンケート調査項目の概要

| 項目 | 設問の概要 |
|---------------------|---|
| 「フェイスシート（属性）」 | 問1～問4：年齢・性別，居住地，職業，所属する団体等について。 |
| 「登山とのかかわり」 | 問5～問9：登山の目的やスタイル（縦走，自然観察，写真・写生など），登山の方法などについて。 |
| 「丹沢大山について」 | 問10～問14：丹沢大山での登山の回数，丹沢大山での登山の魅力，登山者の視点からの丹沢大山の変化などについて。 |
| 「丹沢大山の登山道等施設整備について」 | 問15～問21：登山道の整備状況や丸太階段・水切り，木道・ロープ柵などの施設に対する評価やオーバーユース状況などについて。 |

②結果

属性：回答者の年齢層では，60歳代が全体の52.0%（220人）と最も多く，50歳代25.5%（108人），70歳以上6.9%（29人），40歳代5.9%（25人）次ぐ。今回調査では30歳以下（27人）が少ない。男女比は，男性が61.0%（258人），女性が35.9%（152人）であった。また，居住地は，神奈川県が，89%（379人）と最も多く，次いで東京が8%（33人）である。その他の居住地として，埼玉7人である。さらに職業別では，無職が28.1%（119人）人と最も多く，会社員19.9%（84人），専業主婦15.4%（65人），主婦（仕事をもっている）12.3%（52人）と次ぐ。農業（専業）の回答は無い。

登山とのかかわり：主とする登山の目的（スタイル）を問うたところ（複数回答3項目まで），ハイキングが50.1%（212人）で最も多く，縦走が35.2%（149人），健康維持・増進が34.3%（145人），自然観察が32.9%（139人），景色を眺めるが31.0%（131人）と次いだ。このことから，丹沢大山地域に対して，山歩きを楽しむ場所のとして期待が伺える（図6）。

5-①登山の目的（スタイル） n = 423

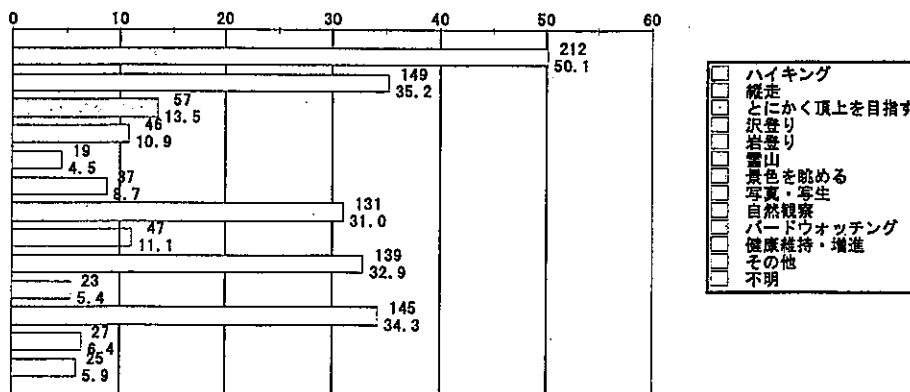


図-6 登山の目的（スタイル）

丹沢大山について：丹沢大山地域での登山回数を問うたところ、20回以上が49.2%（208人）、10～20回が18.9%（80人）、2～5回が15.4%（65人）、6～10回が12.5%（53人）と次ぐ。初めてが1.2%（5人）であり、かなりの回数丹沢大山で登山をしてきた登山者が多いことが伺える（図7）。

また、丹沢大山の好きな場所上位10の箇所を、今回は抽出した。多いほうから順に「大山」が129人で最も多く、「塔ノ岳」が111人、「鍋割山」が84人、「檜洞丸」が77人、「蛭ヶ岳」が58人、「西丹沢」が45人、「丹沢山」が41人、「表尾根」が27人、「大山三峰」が23人、「三ノ塔」が19人と次、この結果から、山そのものを挙げる回答がほとんどであった。

10-①丹沢大山に訪れた回数 n = 423

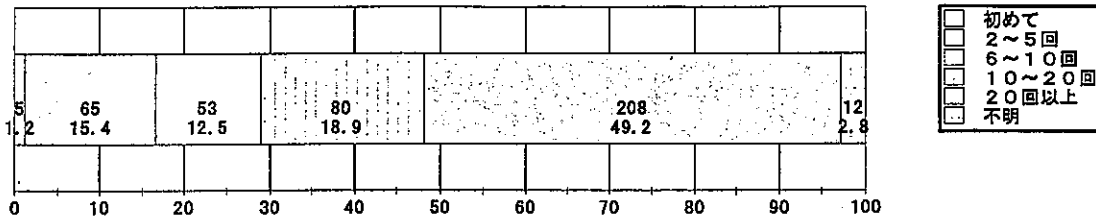


図-7 何年前から丹沢大山を訪れているのか

丹沢大山の魅力は、四季の自然の移ろいが61.9%（262人）と最も多く、次いで、富士山が見える53.7%（227人）、丹沢の山並みが48.7%（206人）であり、丹沢の（感覚的あるいは遠景での）自然環境への魅力が高い傾向にある。その一方で、非難小屋や登山道等施設、山小屋、鹿・動物など、具体的な魅力は低い傾向にある。また、都心に近いが41.6%（176人）で、バスの便がよいが31.4%（133人）、車で入りやすい17.5%（74人）、などの都市近郊で便利な（都市生活に近い）自然としての魅力の傾向がある（図8）。

12-④-1丹沢大山の魅力 n = 423

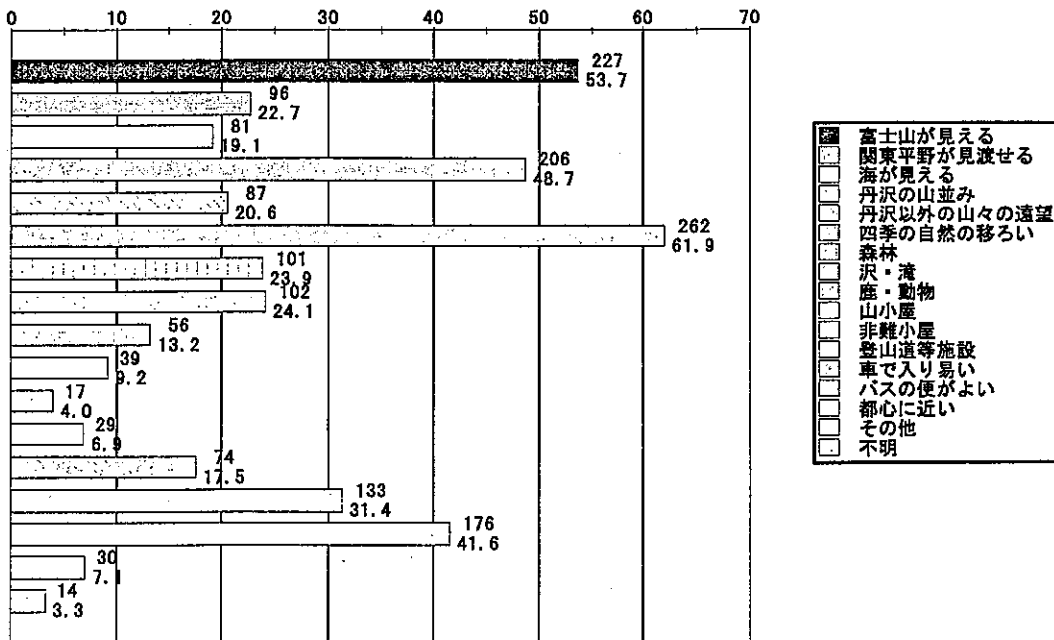


図-8 丹沢大山の魅力

丹沢大山で変化したことでは、ブナの立ち枯れが26.2%（61人）で最も多く、斜面地の崩壊が18.0%（42人）、登山道の侵食が17.2%（40人）、鹿の繁殖が15.0%（35人）、植生の退行が7.3%（31人）と次ぐ（図9）。

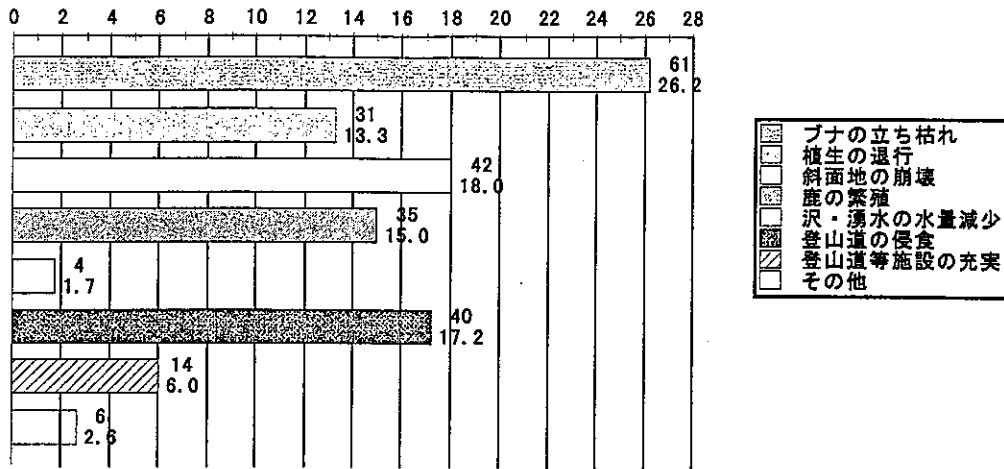


図-9 丹沢大山で変化したこと

丹沢大山の登山道等施設整備について：自由回答された登山ルートを自然公園課が管理する 50 路線に分類、整理したところ、延べ 883 の回答のうち、大倉尾根線との回答が 308 最も多く、表尾根線 93、鍋割山稜線 72、丹沢主脈線 53、二俣鍋割線 48、東海自然歩道 43 との回答が次ぐ（図 10）。

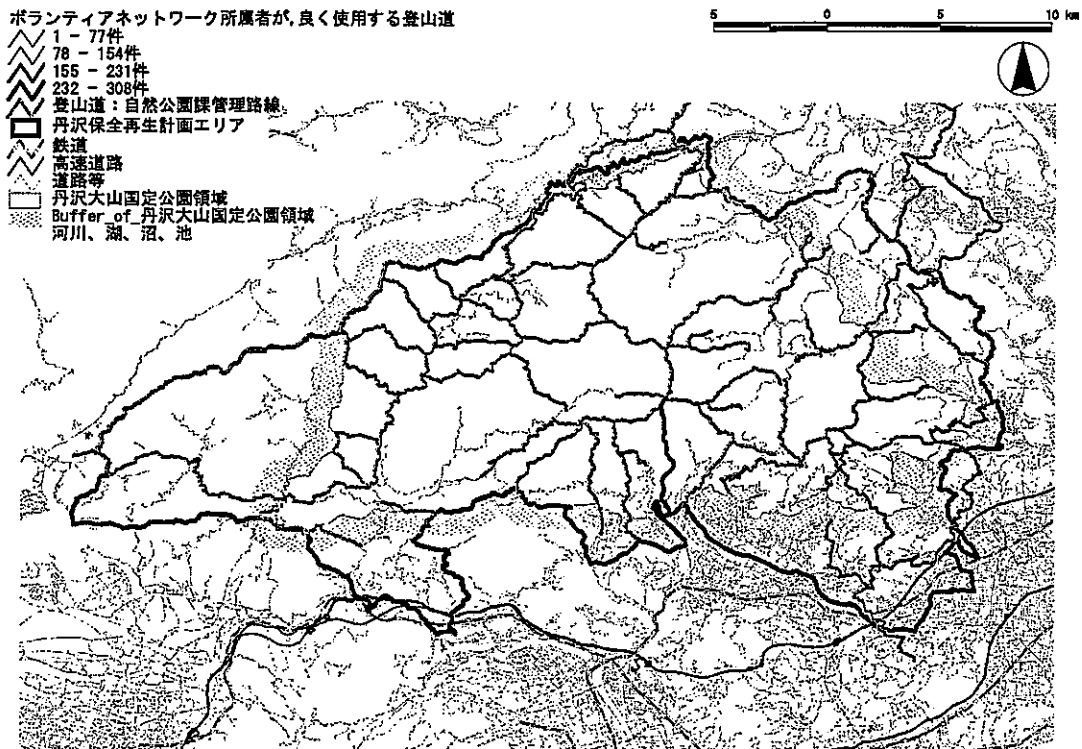


図-10 ボランティアネットワーク所属回答者の使用頻度が高い登山道路線

登山道の整備状況で、歩きづらい理由としては、丸太による階段が歩きにくいのが 38.5% (163 人) が最も多く、登山道の土が露出して滑りやすいが 27.2% (115 人)、登山道が陥没して歩幅が取りにくいのが 22.7% (96 人)、石を敷き詰めた登山道が歩きにくいのが 22.2% (94 人) と次ぐ (図 11)。

15-②-1 登山道の整備状況 n = 423

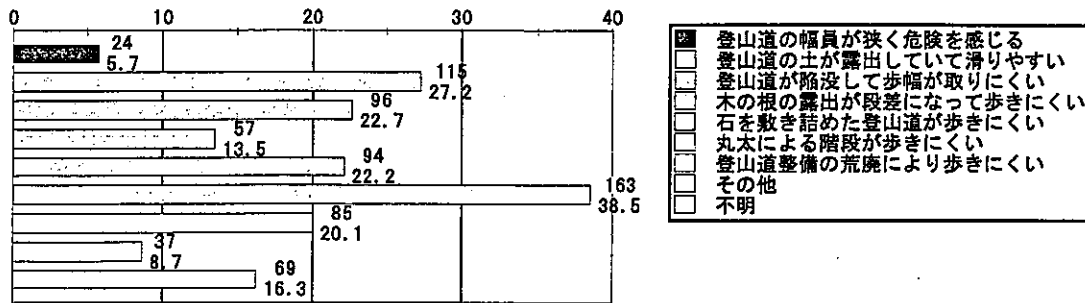


図-11 登山道の整備状況で歩きづらい理由

登山等由来による自然環境への影響について各項目でみると、「登山道をはずれて歩く」では、顕著に影響があるが 43.7% (185 人) と最も多く、次いで、影響がある 28.6% (121 人) である。

「ゴミのポイ捨て」では、顕著に影響があるが 45.2% (191 人) と最も多く、次いで、影響があるが 32.4% (137 人) である。

「野外でのトイレ」では、顕著に影響があるが 35.5% (150 人) と最も多く、次いで、影響がある 27.4% (115 人) である。

「動物にエサを与える」では、顕著に影響があるが 40.7% (172 人) と最も多く、次いで、影響があるが 28.6% (121 人) である。

4項目すべてにおいて、自然環境への影響の認識が高いことが伺える。しかしながら、この中では、「野外のトイレ」への影響の認識が比較的低いことが伺える (図-12)。

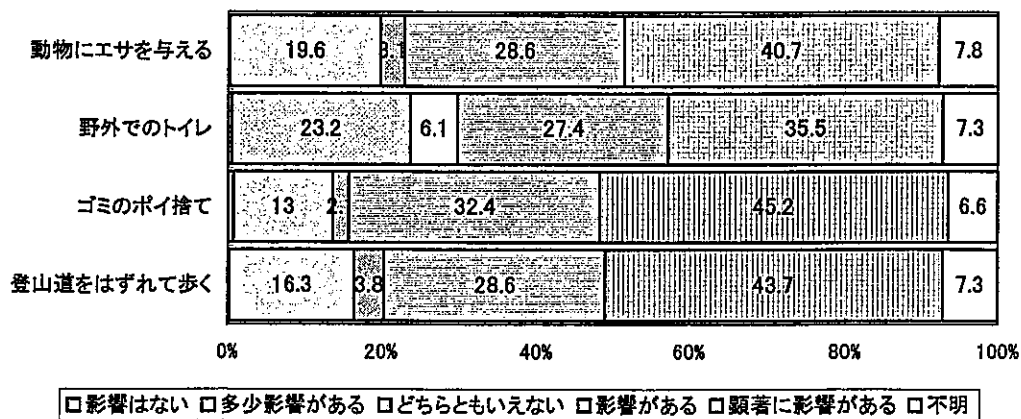


図-12 登山等由来による自然環境への影響

丹沢の自然環境を維持・再生への取り組みについては、登山道から外れて歩かないが 314 人 (74.2%) と最も多い。次いで、用をたした際の紙を持ち帰る 221 人 (52.2%)、自然環境保全活動 (登山道等維持管理を含む) 217 人 (51.3%) である。このことから、登山の行為にかかわる維持・再生にたいする意識が高いことが伺える。用をたした際の紙の持ちかえりが高いが、し尿自体の持ち帰りには抵抗があるように伺われる (図 13)。

20-①-1 丹沢の自然環境を維持・再生 n = 423

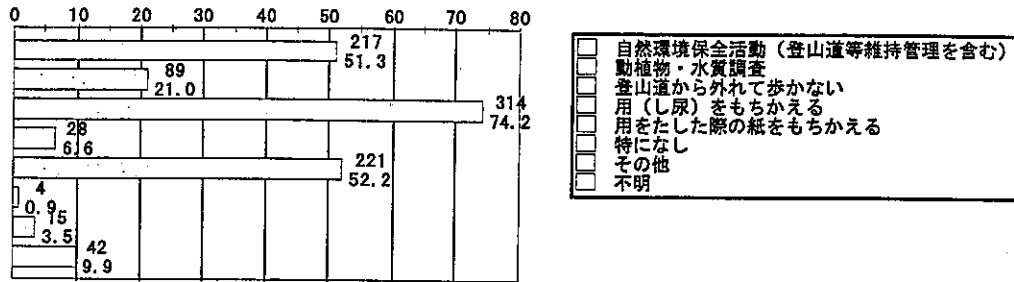


図-13 丹沢大山の自然環境の維持・再生に取り組める事柄

丹沢の山に入山の際に入山料を支払うとし、金銭面での丹沢の自然環境保全に支援をしたらの問いには、一回につき一人、100 円が 40.9% (173 人) と最も多い。次いで、200 円 22.0% (93 人)、200 円以上 17.5% (74 人) である (図 14)。

21-①入山料としての金銭面での支援 n = 423

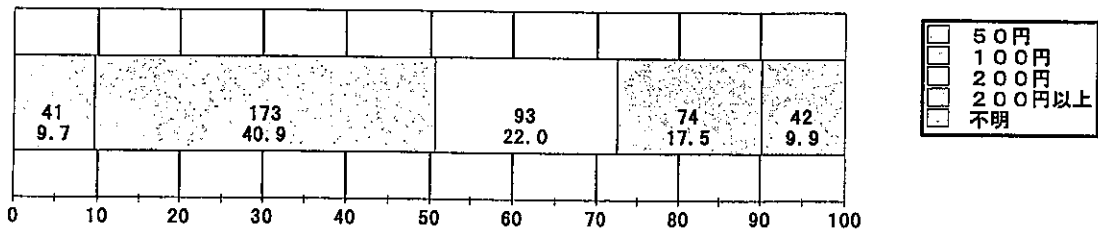


図-14 入山料により金銭での丹沢の自然環境保全への支援

1. 登山道・登山にかかわる調査

【利用実態・意識調査】

④登山実態等にかかわるアンケート調査（一般）

丹沢・大山地域への登山者を対象とした実態・意識調査

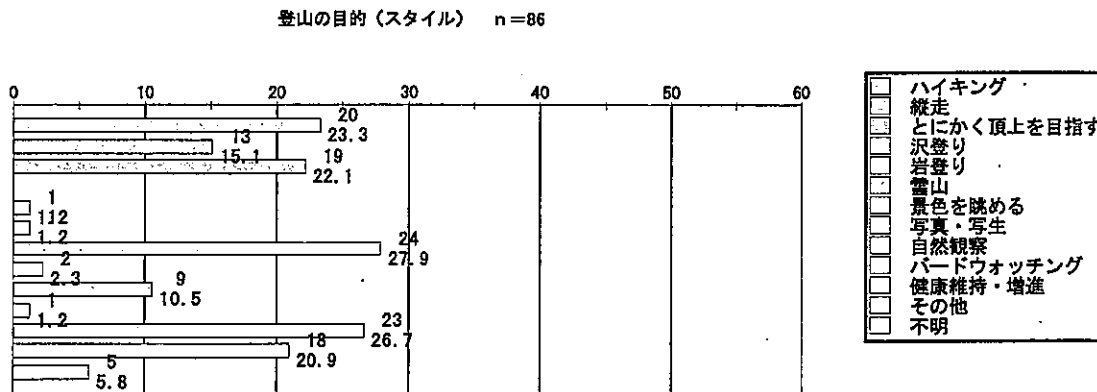
①調査方法

一般の丹沢・大山地域を訪れる登山客を対象とした実態・意識調査も実施した。ここでは、「丹沢ボランティアネットワーク」を対象としたアンケート票を整理して質問項目を減らしたアンケート票を使用して、登山口等で記入してもらう形式をとった。この調査は、「丹沢ボランティアネットワーク」の所属団体の「みろく山の会」と「西丹沢の自然にふれあう会」の協力により、両団体の月例会時に、塔の岳山頂（みろく山の会）と西丹沢自然教室（西丹沢の自然にふれあう会）で定期的に行っている。

②結果

属性：回答者の年齢層では、60歳代が全体の31.4%（27人）と最も多く、50歳代30.2%（26人）、40歳代18.6%（16人）と次ぎ、30歳代以下も15.2%（13人）おり、逆に70歳以上1人（1.2%）であった。男女比は、男性が66.3%（57人）、女性が30.2%（26人）であった。また、居住地は、神奈川県が61.6%（53人）と最も多く、次いで東京が29.1%（25人）である。その他の居住地として山梨2人、埼玉1人である。さらに職業別では、会社員が30.2%（26人）と最も多く、その他27.9%（24人）、主婦17.4%（15人）と次ぐ。農林業の解答は無い。ボランティアネットワークと比較すると、平均年齢はやや若く、会社員などが多い。居住地では東京都民がやや多い傾向にある。男女比にはほとんど差が無かった。

登山とのかかわり：今回の登山の目的（スタイル）を問うたところ、（複数回答3項目まで）、景色を眺めるが27.9%（24人）で最も多く、健康維持・増進が26.7%（23人）、ハイキングが23.3%（20人）、とにかく頂上を目指す22.1%（19人）と次いだ。ボランティアネットワークと比較すると、とにかく頂上を目指すはやや上回っており、ハイキング、縦走が下回った。



図一15 登山の目的（スタイル）

丹沢大山について：丹沢大山地域での登山回数を問うたところ、21回以上が43.0%（37人）、11～20回が11.6%（10人）、6～10回が16.3%（14人）、2～5回が20.9%（18人）と次ぐ。初めてが3.5%（3人）であり、かなりの回数丹沢大山で登山をしてきた登山者が多いことが伺える（図16）。しかし、ボランティアネットワークと比較すると、やや回数が少ない傾向にある。

丹沢大山地域での登山回数 n=86

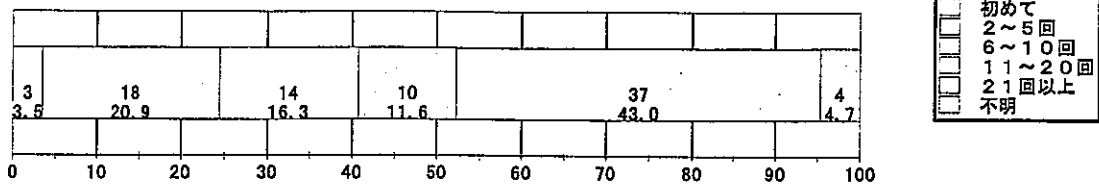


図-16 丹沢大山地域での登山回数

丹沢大山の魅力は、富士山が見えるが62.8% (54人) と最も多く、次いで、丹沢の山並みが46.5% (40人)、四季の自然の移ろいが37.2% (32人) であり、丹沢の(感覚的あるいは遠景での) 自然環境への魅力が高い傾向にある。その一方で、非難小屋や登山道等施設、山小屋、鹿・動物など、具体的な魅力は低い傾向にある。また、都心に近いが34.9% (30人)、バスの便がよいが27.9% (24人)、車で入り易いが17.4% (15人)、などの都市近郊で便利な(都市生活に近い) 自然としての魅力の傾向がある(図17)。ボランティアネットワークとほぼ同じ傾向であるが、富士山が見えるが上回っており、四季の移ろいが下回った。

丹沢大山の魅力 n=86

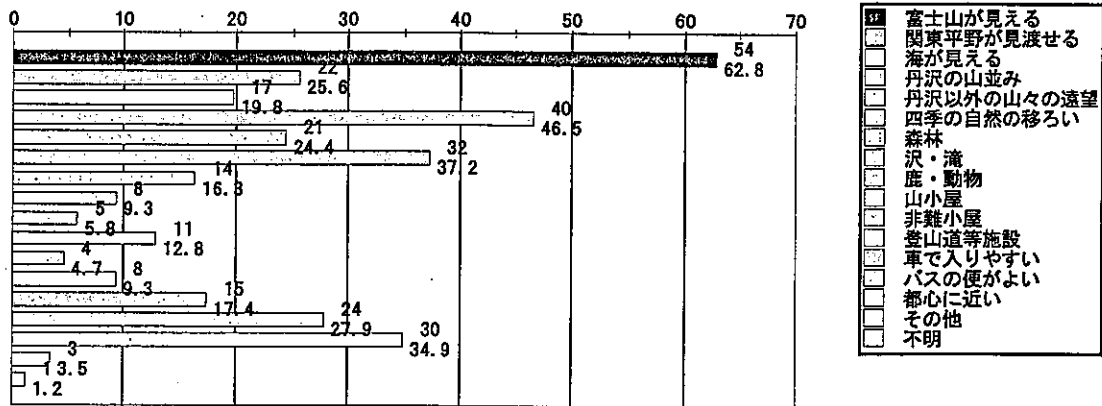


図-17 丹沢大山の魅力

丹沢大山の登山道等施設整備について：調査時に回答者が選択していた登山ルートとの問いに対して自由回答された登山ルートを自然公園課が管理する50路線に分類，整理したところ，延べ190の回答のうち，大倉尾根線との回答が83と最も多く，表尾根線が35，東海自然歩道が24，寄ユーション線が13，二俣鍋割線が8と次ぐ。また，西丹沢山稜線及び丹沢主脈線への回答が，それぞれ1あった。

この結果は，塔の岳山頂と西丹沢自然教室での調査実施によることもあるが，表丹沢での登山客が大倉尾根線⇄丹沢山頂⇄表尾根線に集中していることが伺える。また，西丹沢では利用登山道が比較的分散していることが伺える。

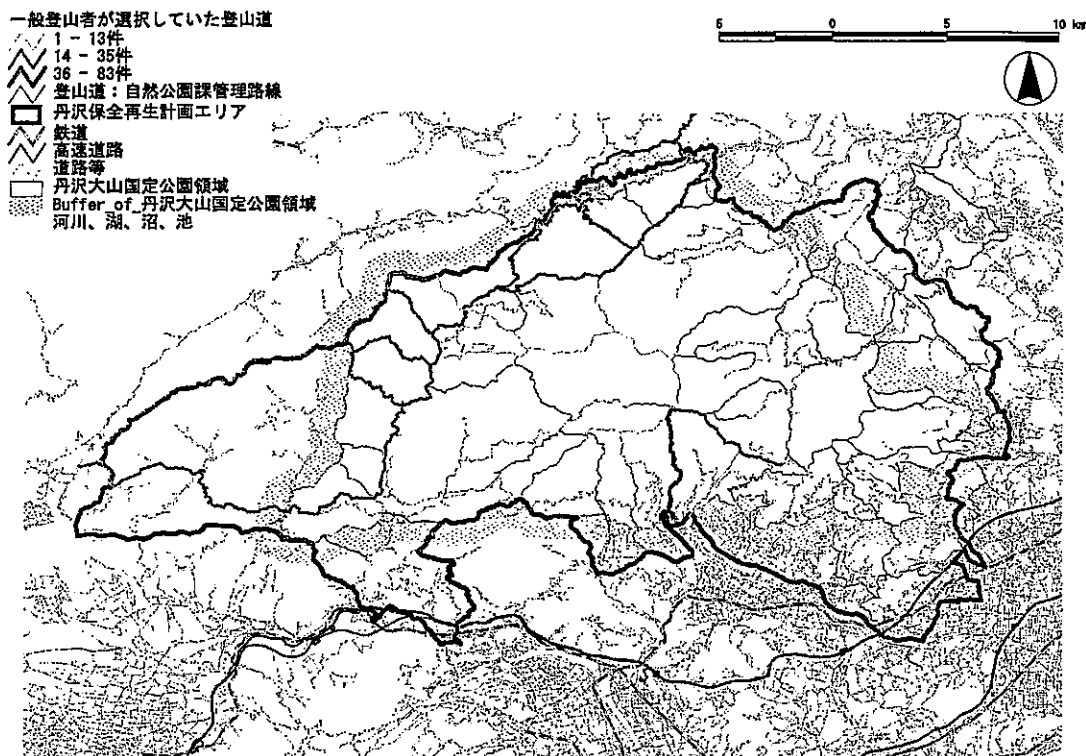


図-18 一般登山者が選択（調査時）していた登山道路線

登山道の整備状況で，歩きづらい理由としては，丸太による階段が歩きにくいと45.3% (39人) と最も多く，登山道の土が露出して滑りやすいと29.1% (25人)，石を敷き詰めた登山道が歩きにくいと20.9% (18人)，登山道の荒廃により歩きにくいと19.8% (17人) と次ぐ (図19)。ボランティアネットワークとほぼ同じ傾向となった。

登山道が歩きづらい理由 n=86

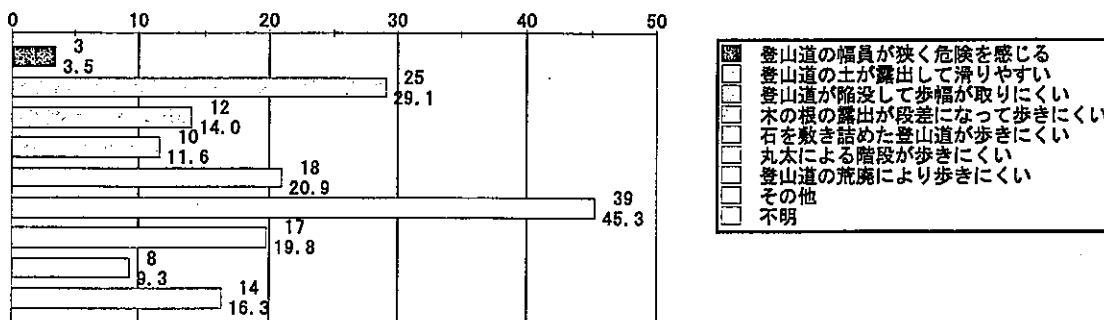


図-19 登山道が歩きづらい理由

登山等由来による自然環境への影響について各項目で見ると、「登山道はずれて歩く」では、あるが39.5% (34人) と最も多く、次いで、非常にあるが% (32人) である。

「ゴミのポイ捨て」では、非常にあるが32.6% (28人), あるが32.6% (28人) で最も多い。

「野外でのトイレ」では、あるが41.9% (36人) と最も多く、次いで、非常にあるが22.1% (19人), 少しあるが16.3% (14人) である。

「動物に餌を与える」では、あるが39.5% (34人) と最も多く、次いで、非常にあるが30.2% (26人) である。

「自家用車による乗り入れ」では、あるが38.4% (33人) と最も多く、次いで少しあるが23.3% (20人), 非常にあるが22.1% (19人) である。

5項目全てにおいて認識が高いことが伺える。しかしながら、この中では、「自家用車による乗り入れ」による影響の認識が比較的低いことが伺える (図20)。

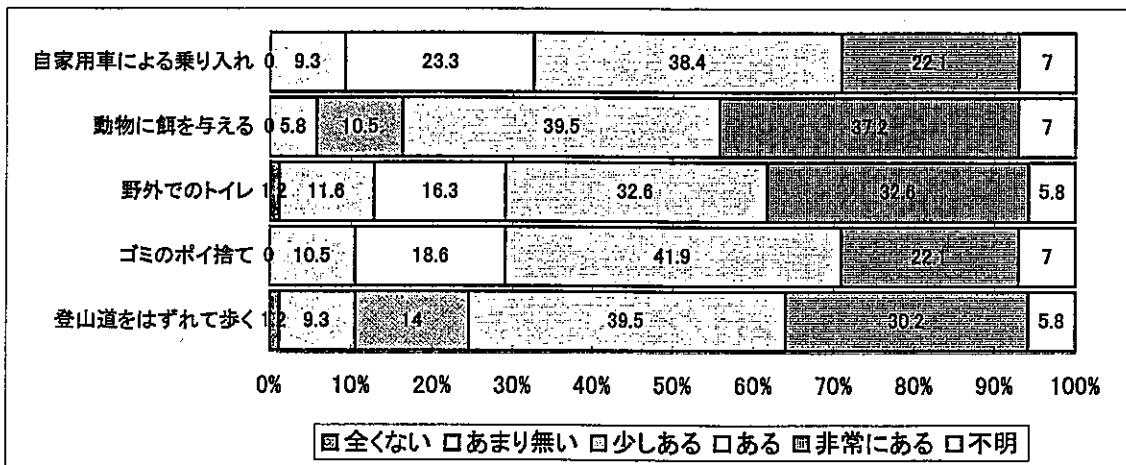


図-20 登山等由来による自然環境への影響

丹沢の自然環境を維持・再生への取り組みについては、登山道から外れて歩かないが69人 (80.2%) と最も多い。次いで、トイレで用を足した紙をもちかえる28人 (32.6%), 自然環境保全活動 (登山道等維持管理を含む) 26人 (30.2%) である。このことから、登山の行為にかかわる維持・再生にたいする意識が高いことが伺える。用をたした際の紙の持ちかえりが高いが、し尿自体の持ち帰りには抵抗があるように伺われる (図21)。ボランティアネットワークと比較すると、登山道から外れて歩かない以外の解答が少ない傾向にある。

丹沢の自然環境の維持・再生への取り組み n=86

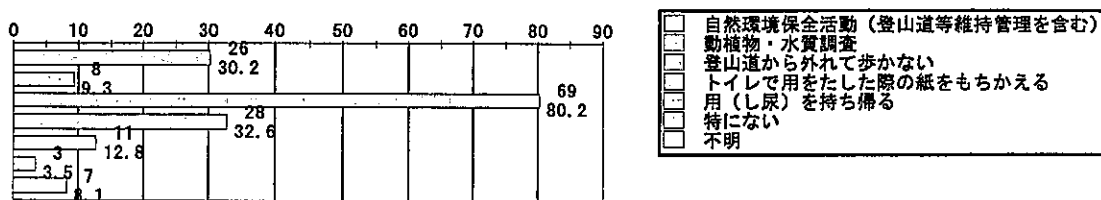


図-21 丹沢の自然環境を維持・再生への取り組み

丹沢の山に入山の際に入山料を支払うとし、金銭面での丹沢の自然環境保全に支援をしたらの問いには、一回につき一人、100円が39.5% (34人) と最も多い。次いで、200円以上19.8% (17人)、200円16.3% (14人)、50円16.3% (14人) である (図22)。ボランティアネットワークとほぼ同じ傾向であった。

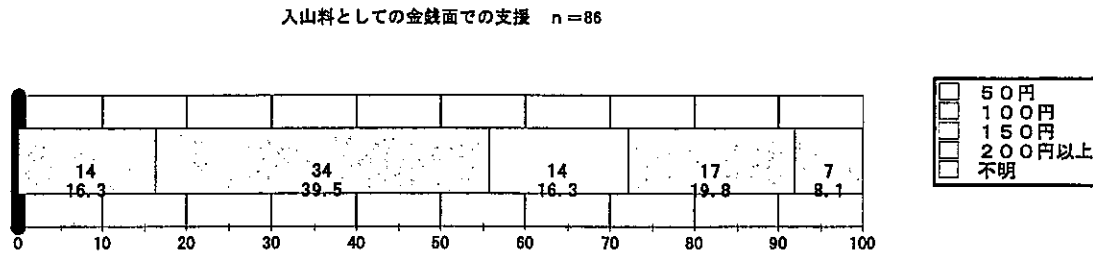


図-22 入山料により金銭での丹沢の自然環境保全への支援

2. 観光レクリエーションにかかわる調査

【利用実態・意識調査】

①キャンプにかかわるアンケート調査

丹沢・大山地域における東西南北，8 キャンプサイトでの利用者に対する実態・意識調査

①調査方法

丹沢・大山地域は，神奈川県の水源地域であり，そこから多くの河川が流れている一方で，沢登りやキャンプなどの水辺でのレクリエーションが盛んな地域でもある。そこで，ツーリズムや身近なリゾート整備，子ども達の森林・河川を活用した環境教育学習のあり方を検討するための調査として，丹沢・大山地域でのキャンプにかかわる利用者の実態及び意識調査をアンケート形式で実施した。

調査内容は「キャンプ場の利用頻度」，「キャンプ（自然とのふれあいを含めた）魅力・課題」，「自然や環境とのかかわり（意識）」について，調査対象地は以下とした。

表-5 調査対象地

調査日：2004年8月16・17日

| 地域 | キャンプサイト | 票数（内訳） | 総評数 |
|----|----------------------------|-------------------|-------|
| 東 | 宮ヶ瀬：清川村立 金沢キャンプ場 | | 38 票 |
| 西 | 西丹沢：丹沢湖キャンプサイト・大滝キャンプ場・河川敷 | 17 票 + 15 票 + 8 票 | 40 票 |
| 南 | 秦野：滝沢園キャンプ場・戸川公園 | 39 票 + 96 票 | 135 票 |
| | 寄：丹沢清流荘 | | 51 票 |
| 北 | 青根：緑の休暇村 青根キャンプ場 | | 49 票 |
| 計 | | | 313 票 |

②結果

調査地域：丹沢大山地域の8つのキャンプサイトにおいて実施し，313票を収集した。これを方位で分類すると，北丹沢15.7%（49票），東丹沢12.1%（39票），西丹沢12.8%（40票），南丹沢59.4%（189票）となった。本調査での丹沢大山地域の東西南北での分析には，南丹沢の票数が多い傾向を踏まえたうえで上記を使用する。

属性：回答者の年齢層は，30歳代が全体の37.4%（117人）と最も多く，20歳代23.3%（72人），40歳代16.6%（52人），10歳代8.9%（28人）と次ぐ。今回調査では，50歳代（17人）及び60歳以上（7人）と回答者が少ない。男女比は，男性が48.2%（151人），女性が47.0%（147人）でありほぼ同比率である。不明が4.8%。回答者の居住地は，神奈川県が83%（247人）と最も多く，次いで東京都が13%（38人）である。その他の居住地として，千葉県5人，茨城県4人，埼玉県1人，静岡県1人，奈良県1人である。回答者の職業は，会社員が35.4%（102人）と最も多く，主婦28.5%（82人），学生16.0%（46人）と次ぐ。農林業の回答は今回無かった。また，最も回答者が多い（117人）30歳代は，主婦44.4%（52人），会社員35.9%（42人）である。

今回（調査を実施した日時）での，訪れた構成は，10人未満が72.2%（226人）と最も多多い。そのメンバーは，家族づれ142人（45.4%）や友人132人（42.4%）が多い。30歳代をはじめとする若い家族や友人と訪れている事が，属性との関係から伺える。

丹沢大山地域でのキャンプについて：丹沢大山地域でキャンプをするうえで，楽しみにしていることは，今回（調査を実施した日時）では，水辺での水遊び228人（72.8%）が最も多く，野外での食事224人（71.6%），自然の涼感を楽しむ204人（65.2%）と次ぐ（図23）。

今回、キャンプでの楽しみ n = 313

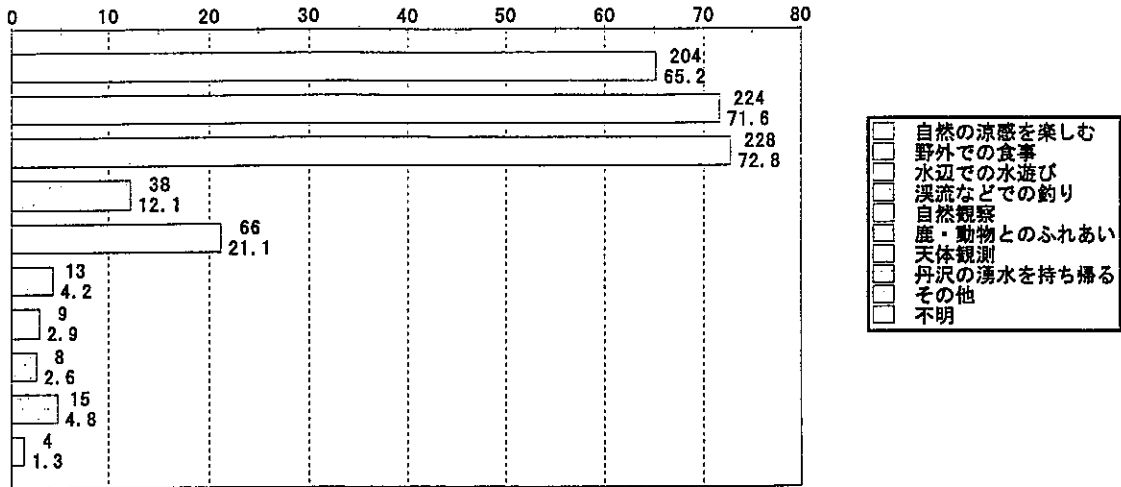


図-23 丹沢大山地域でのキャンプの楽しみ

自宅を出発して、キャンプ場に来るまでに何処かによってきましたか。また、キャンプの後にはどちらに向かうかとの問いに対する回答サンプル数は、123であった。来るまでによった場所として、「コンビニエンスストア」や「スーパー・量販店」の回答から、キャンプの食材や用品を購入してくることが伺える。また、「ビジターセンター（戸川公園を含む）」との回答が25人と多いが、このうち20人は南丹沢のキャンプサイトで、近接する秦野ビジターセンターとの回答である。また、帰りによる場所として、「温泉」との多数回答があった。

キャンプ時の食材調達には、自宅から持参（近所のスーパー・店舗で購入）が206人（65.8%）と最も多い。次いで、キャンプ場近辺のスーパー・店舗で購入が66人（21.1%）、自家から持参（自家栽培の食材）が48人（15.3%）である。キャンプ場近辺の農家の産直販売で購入は、最も少なく3人（1.0%）である（図24）。また、食材等購入費は、1万円未満が35.1%（110人）と最も多く、1～2万円未満が25.2%（79人）、2～3万円未満13.4%（42人）と次ぐ（不明が、16.6%（52人）である）。

キャンプの食材調達

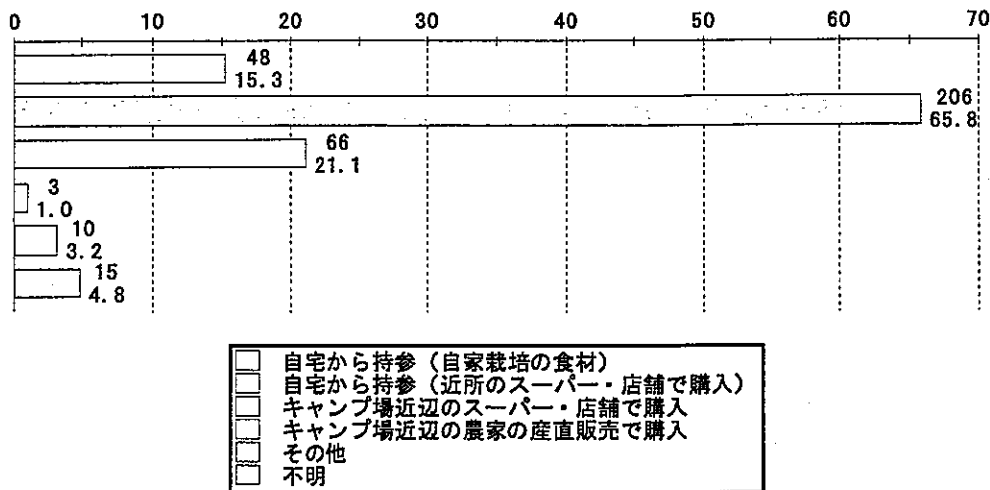
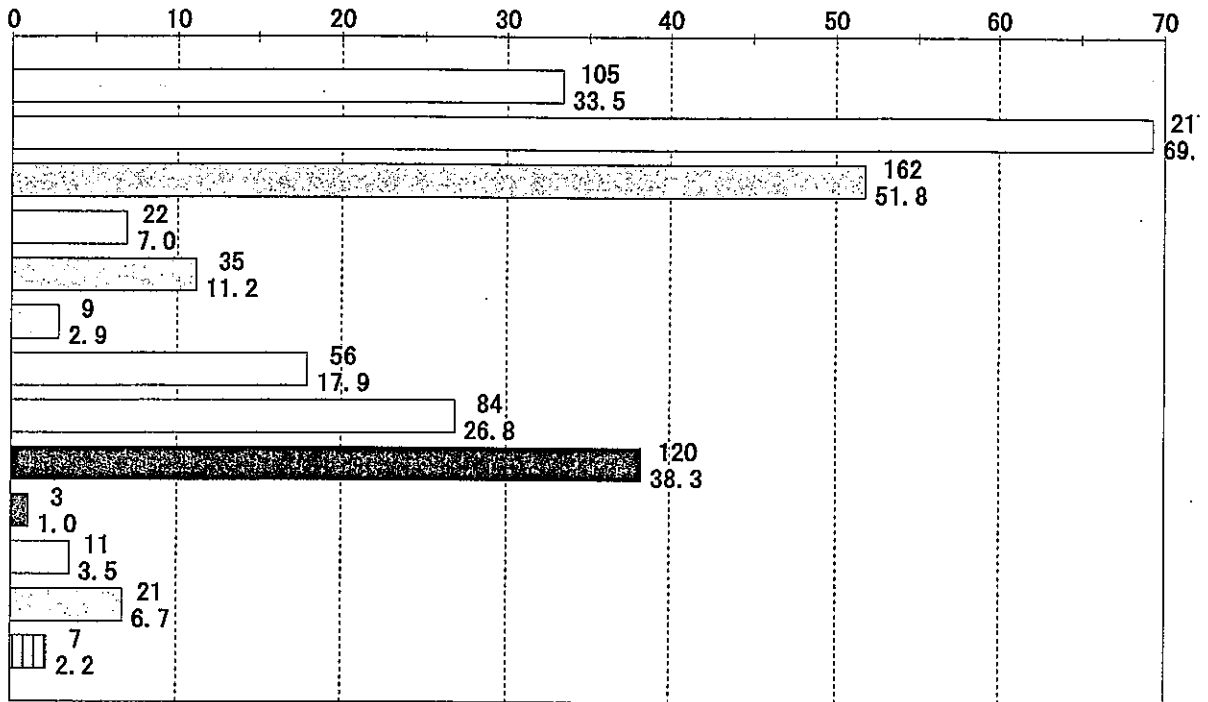


図-24 キャンプの食材調達について

丹沢大山地域へキャンプを訪れる主な魅力は、自然の涼感が217人(69.3%)と最も多く、次いで、丹沢の山並み105人(33.5%)、沢・滝・溪流162人(51.8%)であり、丹沢の(感覚的あるいは遠景での)自然環境への魅力が高い傾向にある。その一方で、湧水や魚釣り、鹿・動物など、具体的な魅力は低い傾向にある。また、車で入りやすい120人(38.3%)、都市・市街地に近い84人(26.8%)、場内施設の充実56人(17.9%)などの都市近郊で便利な(都市生活に近い)自然としての魅力があげられる傾向がある(図25)。

丹沢大山地域へキャンプへ訪れる魅力 n = 313



- 丹沢の山並み
- 自然の涼感
- 沢・滝・溪流
- 湧水
- 魚釣り
- 鹿・動物
- 場内施設の充実 (炊事場/トイレ/温水シャワー/夜間照明/自動販売機等)
- 都市・市街地に近い
- 車で入りやすい
- バスの便がよい
- 周辺の観光地へのアクセスがよい
- その他
- 不明

図-25 丹沢大山地域にキャンプを訪れる魅力

丹沢大山地域での自然や環境へのかかわり：丹沢大山地域では以下のような自然環境への影響がおこっているかとの問いに対して、「キャンプ場外の山林等を散策することでの生き物や動物への影響」では、少しあるが41.5% (130人) と最も多く、次いで、あるが30.0% (94人) である。

「ゴミのポイ捨てによる環境破壊」では、非常にあるが47.9% (150人) と最も多く、次いで、あるが30.4% (95人) である。

「野外でのトイレやシャワー、炊事による水質や下流部への影響」では、あるが42.5% (133人) と最も多く、次いで、少しある27.2% (85人) である。

「動物にエサを与えることでの影響」では、あるが36.7% (115人) と最も多く、次いで、少しある27.8% (87人) と次ぐ。

「個々での自動車で乗り入れることによる影響」では、あるが37.7% (118人) が最も多く、次いで、少しある33.9% (106人) である。

自然環境への影響が、ある・非常にあるに注目してみると、「ゴミのポイ捨てによる環境破壊」が最も多く、「野外でのトイレやシャワー、炊事による水質や下流部への影響」、「動物にエサを与えることでの動物への影響」と次ぐ。「キャンプ場外の山林等を散策することでの生き物や動物への影響」は、さほど強く意識されていないように伺える (図26)。

オーバーユースに対する意識 n=313

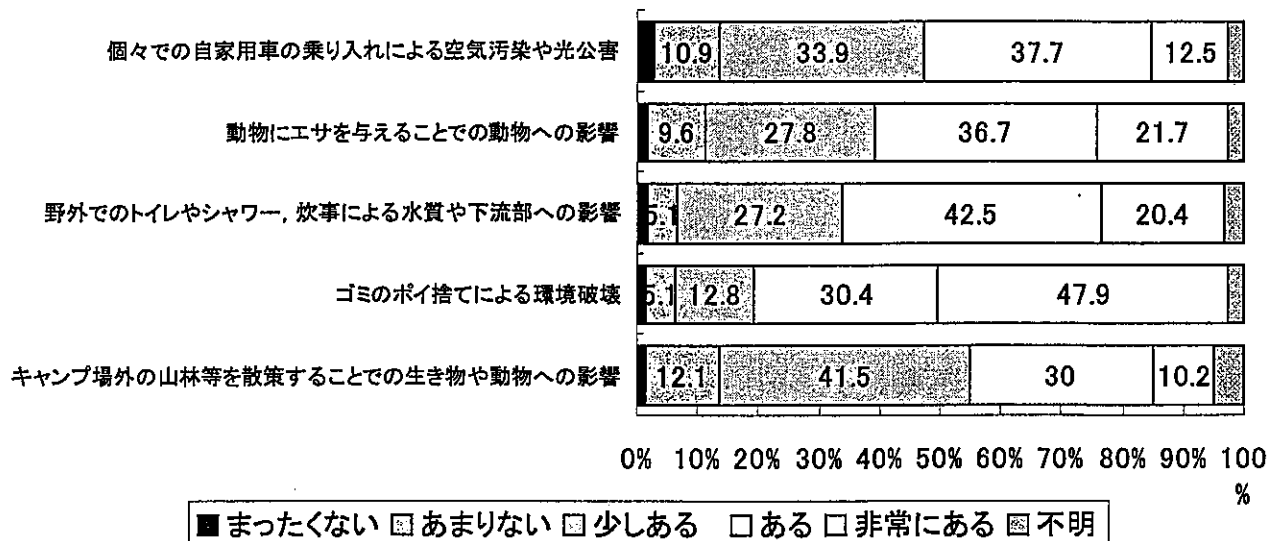


図-26 キャンプ等由来によるオーバーユースに対する意識

丹沢大山の自然環境の維持・再生，丹沢大山地域の暮らしや経済の向上に関して，かかわれそうな事柄との問いには，ゴミの持ち帰りを徹底するが 271 人 (86.6%) と最も多い。周辺の植生を踏み荒らさない 175 人 (55.9%)，炊事やシャワー時にはエコ石鹸 (洗剤) を使う 123 人 (39.3%) が次ぎ，キャンプ場での直接的な行為にかかわることを伺われる。トイレで用をたした紙を持ち帰るは，18 人 (5.8%) と最も少なく，行為に抵抗があることが伺われる (図 27)。

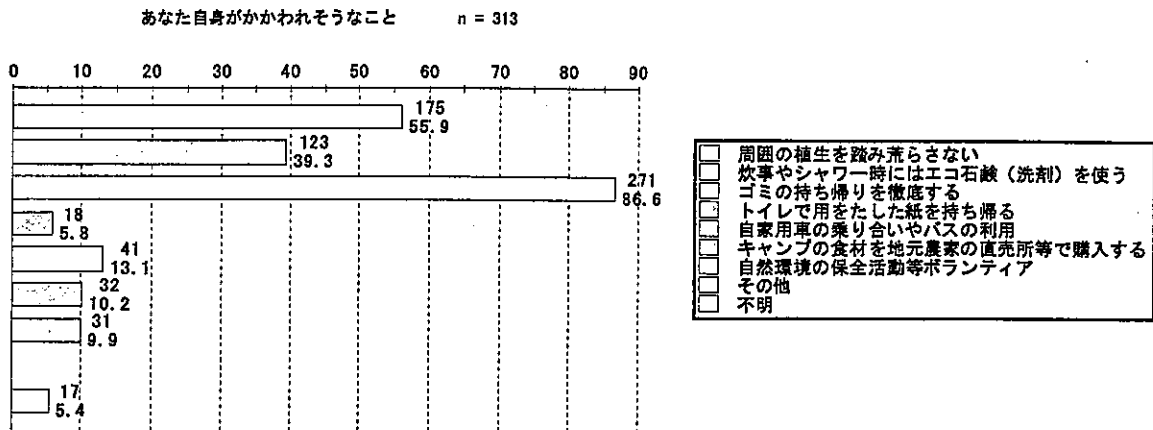


図-27 丹沢大山の自然の維持・再生，暮らしや経済の向上にかかわれそうな事柄



3. 環境教育・学習にかかわる調査

【利用実態・意識調査】

①ビクターセンター等施設に対するヒアリング

丹沢・大山地域で現在展開されている環境教育・学習の把握

①調査方法

エコツアーや環境教育学習の展開による地域再生を検討するにあたり、丹沢地域で現在おこなわれていることの現状把握のためのヒアリング調査を実施しています。

現在までに、エコツアー・環境教育学習活動にもっとも近い活動をおこなっている県立ビクターセンター（V C）4ヶ所の現場職員にヒアリング調査をおこないました。ヒアリング内容は、施設の概要・実施プログラムについて、来訪者・指導者について、団体対応について、などです。

現状では聞き取り内容をカテゴリーごとにまとめています。それぞれの施設では明確な活動目標を持ち、立地条件や来訪者の分析にあわせた活動を実施しています。来訪者は県内近郊からが多く、学校団体からの対応ニーズが多くなっています。

②調査結果

表 ヒアリング調査結果の概要

| | 実施プログラムについて | 来訪者について |
|-----------------------|---|---|
| 宮ヶ瀬V C 04年9月28日調査 | イベントプログラムとして、スライド解説・レクチャー・ビデオ解説を予約制にて随時実施している。ミニ自然教室として、毎週土・日不定期に、1時間ほどの内容で湖畔園地周辺にて実施しており、一般参加者が多い。また、クラフト教室を随時実施している。公募型自然教室として、日帰り行事で湖畔園地エリア、林道や周辺森林でテーマをしばった自然観察を実施している。 | 観光目的の一般客と学校団体の利用が多い。来訪者は比較的遠方からが多いが、主は県内（横浜・横須賀）からの来訪が多い。 |
| 秦野V C 04年9月28日調査 | イベントプログラムとして、スライド解説を、土・日・祝日に事前申し込みで対応、館内で実施している。ミニ自然教室として、月1回（第4日曜日）に2時間程度の内容で、都市公園内で実施している。リピーターは時には2～5割。公募型自然教室は、ほぼ毎月1回、日帰り行事で、主に周辺の山城の自然観察ハイク（屋外行事も有り）などを実施。 | 自然体験の希望者は少なく、都市公園の利用者が主。春秋は登山者、夏は都市公園利用の家族連れが多い。周辺キャンプ場や山小屋、山岳スポーツセンター宿泊利用者の来訪もある。県内近場からの利用者が多く、年齢層には偏りはさほどない。都市公園利用リピーターが多い。 |
| 丹沢湖V C 04年9月29日調査 | イベントプログラムとして、企画展を年6回実施している。ここでは収集・調査資料を展示の他、季節的な情報も展示解説している。ビデオ解説・スライド解説・レクチャーも依頼に応じて随時管内にて実施している。ミニ自然教室として、月2回、2つのボランティアグループにより敷地内及び周辺で実施されておりリピーターは多い。公募型自然教室を年数回実施している。 | かつては登山口として主流であったが、現在登山客は少ない。遠足などの団体利用も他のV Cに比較すると少ない。来訪者の年齢層は高い。夏場は周辺のキャンプ場利用者の利用が多く、秋は紅葉のために自然を求めてくる人が多くなる。ツツジや紅葉などの情報の問い合わせは多い。 |
| 西丹沢自然教室 04年9月30日調査 | イベントプログラムは、施設の仕様書の中に項目がない。教室の連絡手段である電話子機が使える範囲内の野外で、登山者への自然情報提供やガイドトークを実施（週末に1回、月4～5回）している。テーマは植物や岩石・動物に関する内容。家族や小グループ（登山客が半数以上）への対応が多く好評を博している。ボランティア（西丹沢の自然にふれあう会）が、夏休みに朗読会・観察会を実施している。 | 登山者が中心（半数以上）。5～9人の小グループが多いが、ツアー登山の来訪者もある。夏場は、キャンプ場利用者が7割ほど、他の季節では、ドライブや中川温泉からの観光客。登山口としてバスの運行時間（登山者の行動時間）と自然教室の活動時間が重なっている。 |

3 環境教育・学習にかかわる調査

【利用実態・意識調査】

② ボランティア・活動団体に対するアンケート調査

丹沢・大山地域での自然体験活動の実態に関するアンケート調査

① 調査の目的

丹沢大山地域での、エコツーリズム・環境教育学習の展開での地域再生を検討するにあたり、2004年度の調査の目的を丹沢地域で現在行われていることの現状把握とした。具体的な目標を、「今後エコツアー・環境教育学習を機能させていく上での可能性・問題点・課題の抽出」「丹沢地域で現在行われていることの整理」とし、将来的には「各施設・プログラムや活動のポジショニングの試み」をめざすという視点で「丹沢大山環境教育施設活動調査」及び今後丹沢大山地域でエコツーリズム・環境教育学習を機能させていく上で、可能性を検討し、しくみづくりのための有効な検討材料を得るために参考事例収集として「エコツーリズム先進事例地調査」を実施した。

② 調査方法

(1) 「丹沢大山環境教育施設活動実態調査」調査方法

丹沢大山周辺地域で自然体験活動を実施している 23 施設・36 団体を対象にアンケート調査（一部ヒアリング調査；下記参照）を実施した。施設・団体の選出にあたっては、丹沢大山地域で自然体験活動を実施・提供していることを選出基準とし、まず調査グループ内で検討した。さらに、アンケート実施前に県立自然公園施設 5 カ所（西丹沢自然教室・宮ヶ瀬ビジターセンター・秦野ビジターセンター・丹沢湖ビジターセンター・自然保全センター）の現場担当者にアンケートの項目に沿ったヒアリング調査を実施し、アンケートの内容の再検討と調査対象施設・団体の追加情報収集を行った。その上で対象施設・団体に郵送によるアンケートを実施した。54 件の発送アンケートの回収 32 件から、丹沢大山地域での活動の概要、自然体験活動と指導者・参加者、団体対応の実態などについての情報を得た。

③ 実施期間

(1) 「丹沢大山環境教育施設活動実態調査」実施期間

県立自然公園施設へのヒアリングは以下の日程で実施した。

| | |
|---------------|------------|
| 県立宮ヶ瀬ビジターセンター | 2004年9月28日 |
| 県立秦野ビジターセンター | 2004年9月28日 |
| 県立西丹沢自然教室 | 2004年9月29日 |
| 県立丹沢湖ビジターセンター | 2004年9月30日 |
| 県立自然保全センター | 2004年11月7日 |

アンケートの送付は2004年10月15日に発送し、締め切りを2004年10月末日とした。

④ 調査結果

(1) 「丹沢大山環境教育施設活動実態調査」調査結果

1) 県立自然公園施設ヒアリング結果

それぞれ各施設の現場で来訪者対応にあっている解説員にヒアリングを依頼し、実施した。各施設へのヒアリングの内容・回答については、それぞれ以下のように資料編にまとめた。また、それぞれの施設の回答については、下記の「施設アンケートの結果」に合わせてまとめた。

- 県立宮ヶ瀬ビジターセンター
- 県立秦野ビジターセンター
- 県立西丹沢自然教室
- 県立丹沢湖ビジターセンター
- 県立自然保護センター

2) 施設アンケート結果

アンケートの回収 11 件の内、回答のなかった「神奈川県立山岳スポーツセンター」と、丹沢大山地域内に設置されておらず、かつ同地域内でほとんど活動のなかった「神奈川県立生命の星・地球博物館」の 2 件を除き、かつヒアリング調査を実施した県立自然公園施設 5 件をあわせた 14 件について以下にまとめた。

なお、施設アンケートにおける各設問の自由筆記部分については、資料 8 にすべてとりまとめた。

① 施設の概要及び利用者について

施設の概要及び利用者については資料 9 にまとめた。14 施設中、県立の施設が 8 施設（内自然公園施設が 5 施設、宿泊施設を伴い団体受け入れも行っている施設が 3 施設）、市町村立の施設が 6 施設（うち秦野市 4 施設・津久井町 1 施設・松田町 1 施設、宿泊施設を伴い団体受け入れも行っている施設が 2 施設）であった。利用者はいずれも県内からの来訪が多く、施設周辺市町村の他、横浜（5 回答）・川崎（3 回答）・都内（6 回答）からの来訪が目立つ。来訪者の年齢層は回答があったものでは 20 才までが 5 回答と一番多く、ついで 40

代・50 代が 4 回答、60 代が 3 回答、30 代・70 代・特に偏りなしがそれぞれ 2 回答であった。14 施設での全来館者数（年間）はのべ 40 万人をこえる。

② 自然体験活動プログラムの実施について

実施をしているのは 12 施設、かつては実施していた・将来実施していきたいのはそれぞれ 1 施設、実施していないのは 2 施設であった。なお、実施している施設のうち、プログラムは職員による企画運営実施が 10 回答、企画のみでゲストを招聘して実施・場のみの提供でボランティアなどによる実施がそれぞれ 4 回答、その他（自然観察団体との共催）が 1 回答であった。

また、自然体験活動以外に暮らしや歴史遺跡、農業等の文化的な環境体験をテーマにした活動・プログラムを提供している施設は 3 施設であった。

③ 活動の広報及び参加者について

活動の募集広報の掲載先は市町村広報紙が 9 回答で最も多く、ついで全国版新聞（地方欄含む）とホームページがそれぞれ 3 回答、雑誌が 1 回答であった。6 回答あったその他には「県のたより・タウンニュース・DM・施設」という回答があった。また参加者の来訪地域と年齢層は、まず来訪地域は秦野市が 4 回答で最も多く、ついでその他県内が 3 回答、静岡が 2 回答、松田町・山北町・清川村がそれぞれ 1 回答で、3 回答あったその他には「横浜・川崎・開成町・内容によって」という回答があった。年齢層については、20 才までと 50 代が 4 回答で最も多く、ついで 60 代が 3 回答、30 代と 40 代がそれぞれ 2 回答、特に偏りなしが 1 回答であった。その他に「子どもと保護者・親子・高齢者」という回答があった。

④ 指導者について

回答があったのは 12 施設で、アルバイトも含む職員が指導している施設が 10 施設（最も多い指導者数 11 人）、ボランティアもしくは管理委託団体が指導している施設が 3 施設（内 2 施設は職員の指導者なし）であった。指導者の数はのべ 56 人（ボランティア含まず）であった。

また、指導者養成のプログラム（研修会）を実施している施設は 4 施設、実施していない施設は 6 施設であった。

⑤ 団体対応について

団体対応を実施している施設は 11 施設（内定期的な実施は 1 団体、不定期な実施は 10 団体）、実施していない（特にニーズはない）施設は 3 施設であった。また、指導者の派遣を行っている施設は 7 施設、行っていない（特にニーズはない）施設は 4 施設であった。それぞれに「相談はあるが、実施していない」という選択肢に対する回答の選択はなかった。

また、特に学校団体に向けてプログラム集や先生向けの資料を準備している施設は 5 施設、準備していない施設は 5 施設であった。

⑥その他

活動内容に関する評価の機会を設けている施設は7施設、特に設けていない施設は4施設であった。また、活動を行っていく上で団体対応以外で他の団体や施設との連携がある施設は8施設、ない施設は5施設であった。

3) 団体アンケート結果

アンケートの回収 21 件についてとりまとめた。なお、団体アンケートにおける自由筆記部分については資料 10 にすべてとりまとめた。

①団体の概要について

団体の概要については資料 11 にとりまとめた。21 団体中（内丹沢大山ボランティアネットワーク加盟団体 16 団体）、ボランティアグループ（任意団体）が 14 団体、NPO 法人が 5 団体、社団法人が 1 団体、財団法人支部が 1 団体であった。

全団体の会員数は合計で約 3760 名（社団法人の活動参加登録者 5850 名、財団法人支部の会員 3500 名を除く）であった。活動に参加する会員の来訪地域と年齢層については、まず来訪地域では丹沢大山周辺市町村以外の他県内が 29 回答と最も多く、ついで厚木市が 5 回答、秦野市が 4 回答、伊勢原市が 2 回答、相川町・津久井町・東京がそれぞれ 2 回答、山北町が 1 回答であった。年齢層に関しては、50 代が 14 回答、60 代が 13 回答、40 代が 8 回答、20 才まで・20 代・30 代がそれぞれ 4 回答、70 代が 3 回答、特に偏りなしが 1 回答であった。

②自然体験活動プログラムの実施について

実施しているのが 17 団体、将来実施していきたいのが 3 団体、実施していないのが 4 団体であった。実施している 17 団体はすべて各団体の企画運営実施で、会員向けが 2 回答、一般向けが 5 回答、両方に向けてが 10 回答であった。

また、自然体験活動以外に暮らしや歴史遺跡、農業等の文化的な環境体験をテーマにした活動・プログラムを提供している団体は 5 団体であった。

③活動の広報及び参加者について

活動の募集広報の掲載先は、ホームページが 8 回答で最も多く、ついで会員向け情報誌と市町村広報紙がそれぞれ 6 回答、メーリングリストと全国版新聞と雑誌がそれぞれ 4 回答、新聞地方欄が 3 回答であった。7 回答あったその他には「地域内広報、県広報誌「県のたより」、公社パンフレット、ミニコミ誌、公報発行、タウンニュース、自然保護系 NGO 機関誌、大学研究室の HP、神奈川テレビ、マンションの掲示板、機関誌に掲載、口コミ、施設に掲示、不明、会員向け情報誌」という回答があった。また、一般参加者の来訪先と年齢層は、まず来訪先については 13 回答のその他県内が最も多く、ついで厚木市 7 回答、秦野市 4 回答、伊勢原市と津久井町がそれぞれ 2 回答、松田町・山北町・愛川町がそれぞれ 1 回答であった。その他では横浜市（4 回答）、平塚市（2 回答）、川崎市、藤沢市、茅ヶ崎市などがあった。年齢層については 50 代と 60 代がそれぞれ 9 回答で最も多く、ついで 30 代が 5 回答、40 代が 4 回答、20 才までと 20 代が 3 回答、特に偏りなしが 2 回答、70 代以上が 1 回答であった。

④指導者について

回答があったのは 18 団体で、指導者の数はのべ 572 人であった。

⑤団体対応について

団体対応を実施している団体は 12 団体（内定期的の実施が 5 団体、不定期に実施が 6 団体）、実施していない（特にニーズはない）施設は 7 団体であった。また、指導者の派遣を行っている団体は 11 団体（内定期的の実施が 5 団体、不定期に実施は 5 団体）、相談はあるが実施していない団体は 3 団体、行っていない（特にニーズはない）団体は 5 団体であった。

⑥その他

活動を行っていく上で団体対応以外に他の団体や施設との連携がある施設は 13 団体、ない施設は 8 団体であった。

4) アンケートにおけるその他の結果

上記以外にアンケートでは「総合調査に関する期待」「ツーリズム・環境教育学習の場としての丹沢大山地域のイメージ」「地域再生の一環としてのツーリズム・環境教育学習が展開された場合の（各施設・団体の）役割」「アンケートの公表についての希望・意見」を聞いた。この回答については資料12にすべてとりまとめた。

4 エコツーリズム化にかかわる調査

【先進事例地現地調査】

①情報・資料収集整理

先進事例地での取り組みをヒントに、丹沢・大山地域型エコツーリズムを

1) 国内事例収集

①「エコツーリズム先進事例地調査」調査方法

グループ内での検討・チーム内の意見も加味した上で調査の視点を明確にし、以下の5カ所について資料収集と可能な限りヒアリング調査を実施し、丹沢大山地域における検討材料を収集した。

1) ホールアース自然学校（静岡県）

静岡県にある民間の自然学校でエコツアーにも取り組んでいる。学校団体の受け入れに実績があり、学校対応受入数日本一。

学校団体受入れ担当者に受け入れのしくみ、フィールドの適正利用などについてヒアリング調査を実施。



写真



写真



写真

2) いしかわ自然学校（石川県）

県自然保護課が事務局になり、県内で行われている様々な施設・団体の自然体験活動を「いしかわ自然学校」としてまとめ、それぞれをその自然学校のプログラムとして参加者に提供している。指導者養成講座も実施。3年の実績がある。

参加者受け入れやプログラム提供のしくみやその立ち上げ、指導者養成事業などについて資料収集及び県担当者に電話による情報収集（一部プログラム指導者や参加者にヒアリングによる情報収集）を実施。

3) 東京都奥多摩地域（東京都）

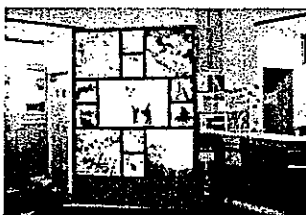
奥多摩地域の山間地で丹沢大山地域とフィールドが近く、状況も似ている。都立自然公園・地元住民・団体が自然・文化をテーマにプログラム提供。

受け入れやプログラム提供のしくみ、その立ち上げについてそれぞれのプログラム実施者にヒアリング調査を実施。



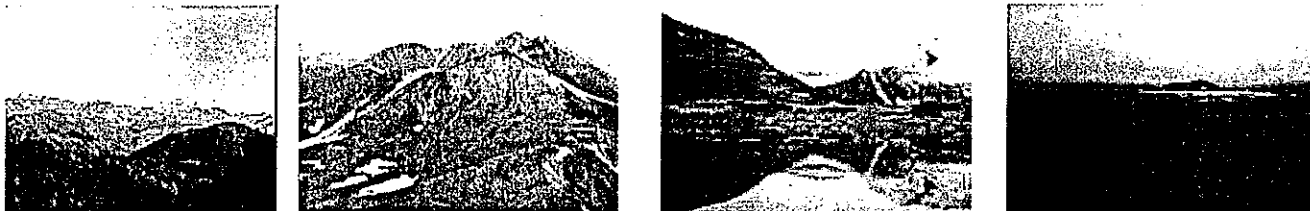
4) 足尾環境学習センター（栃木県）

足尾地区で学校団体による植林をテーマにしたツアーを実施。受け入れやプログラム提供のしくみについて資料収集。



5) 乗鞍山麓・五色ヶ原（岐阜県丹生川村 ※2005年2月に市町村合併し、現在は岐阜県高山市）

日本ではじめて条件（ガイド）付き入山規制を2004年から取り入れている。受け入れやプログラム提供のしくみ、その立ち上げ及びガイド及び参加者の状況について飼料収集及びツアーの予約先である五色ヶ原案内センターへ電話による情報収集。



②「エコツーリズム先進事例地調査」実施期間

それぞれ2004年9月から10月にかけて情報・資料収集を実施し、その後2005年2月まで追加情報・資料収集を実施した。また以下の日程でヒアリング調査を実施した。

ホールアース自然学校 2004年10月12日 現地にて調査実施

東京都奥多摩地域 2004年10月21日及び25日 現地にて調査実施

また、これらの調査に先駆けて、環境省のエコツーリズム推進方策でのモデルにも選ばれている、屋久島地区への視察・現地調査を2004年9月4～7日にかけて実施しています。

③「エコツーリズム先進事例地調査」調査結果

1) ホールアース自然学校

教育旅行部門の責任者である中澤朋代氏に主に学校団体対応を中心にヒアリングを実施した。ヒアリングの結果については資料13にまとめた。

学校団体対応の場合には特に旅行会社の「教育旅行」というジャンルでのしくみづくりと、学校の活動時間と費用にあわせたプログラム提供の必要性について参考情報を得た。

2) いしかわ自然学校

主に資料収集を実施。収集資料については入手資料編7参照。担当の石川県環境安全部自然保護課の榎典雅氏に電話による簡単なヒアリングも実施。運営開始後3年経つがまとまって提出できるような報告書が作成できておらず、しくみ上プログラム実施や参加者人数の把握、プログラムの質の向上や均一化が難しいとのことであった。また、プログラム及び指導者育成講座参加者にも簡単なヒアリングを行ったが、指導者認定講座の修了者は排出されているものの、実際に指導者として活動したり、自然体験活動やエコツアーの事業者として独り立ちしている修了者はあまりいないようだとのことであった。

参考ホームページ：「いしかわ自然学校」

<http://www.pref.ishikawa.jp/shizengakkou/top.htm>

3) 東京都奥多摩地域

林業家で森林インストラクターとしても活発に活動されている原島幹典氏、町営の体験型宿泊施設「ねねんぼう」にて常駐でプログラムを企画運営実施している北山郁人氏、都立の自然公園「山のふるさと村」を中心に自然体験プログラムを企画運営実施している奥多摩ネイチャースクール担当の自然教育研究センター杉本幸子氏にそれぞれ現在の活動とそれに至る経緯について主にヒアリングを実施した。ヒアリングの結果についてはそれぞれ資料14.15.16にまとめた。

それぞれの事業の立ち上げや地元との関係づくり、ツアーの素材の価値を明確にすることなどについて参考情報を得た。

4) 足尾環境学習センター

インターネットによる情報収集を実施した。

「鉱害の原点」足尾銅山は、1973（昭和48）年閉山した。その後、1991年、大手ゼネコンによって、巨大廃棄物処分場を足尾町松木谷に造成する計画を作成されたが、足尾町は、足尾町が再び鉱害の「発

生源」とならないようにと、沿線市町村と共同して反対運動を展開、1998年には計画を事実上中止させた。廃棄物処分場建設に対する反対運動が行われるなかで、1996年には「足尾に緑を育てる会」が設立された(2002年5月からはNPO法人)。1997年には、足尾町は「全町地域博物館化構想(エコミュージアム構想)」を策定し、この構想の一環として、2000年に「足尾環境学習センター」を整備した。

「足尾に緑を育てる会」では発足当初より足尾の山にイベントなどでの植樹を続けていたが、2002年のNPO化をきっかけに「体験植樹」を受け入れるようになった。2004年度は448団体6,313名の申込を受け付けている。現在は「足尾環境学習センター」開館の4月～11月までの間、施設見学とセットで体験植樹を提供している。申込は体験希望校から直接国土交通省渡瀬川河川事務所足尾砂防出張所に連絡をし、打合せをすすめる。日光方面の修学旅行などとあわせての利用も多いようだ。

また、ホームページ上で足尾での植樹に関する環境学習プログラムの教材の提供や栃木県観光協会・日光観光商工課による県内または地域内の教育旅行・体験学習と言うカテゴリでまとめて、他の施設とあわせて情報提供されている。

参考ホームページ：「市町村ガイド」

<http://tochinoki.jp/event-web/syosai/28/02/>

「足尾に緑を育てる会」

<http://www.takatechnical.co.jp/asio/>

「日光体験ツアー 自然・環境・歴史・体験学習」

<http://www.nikko-jp.org/kyoiku/taikentour/4-sizenkankyo.html>

「栃木県観光協会 教育旅行・体験学習」

<http://www.tochigiji.or.jp/try/syosai/sizen/>

5) 乗鞍山麓・五色ヶ原

主に資料収集を実施。収集資料については入手資料編 12 参照。本地域は我が国発の入山人数制限・認定ガイド同行の義務づけ・完全予約制を導入した新しい管理システムの自然遊歩道を導入した。導入にあたっては平成 13 年からこのエリアの植物調査を実施し、その後3年かけて歩道やエコトレなどの施設を整備し、公開となった。ガイドは有料で10人までの1グループに1人つく(1日の人数1コースあたり150人)。10日前までの予約で、ガイドは自然・地形の知識だけでなく、救急救命の訓練も受けている。利用料金はガイド料など込みで1人あたり8,800円からで、グループの人数により変わる。ツアーの予約先になっている五色ヶ原案内センターに電話による簡単なヒアリングも実施。2004年度の対応者数は3,827人で、今年度の利用期間は7月14日から10月31日までだったが、来年度は5月20日から10月31日までに延長するとのことであった。また、本地域はほとんど人の立ち入る場所ではなく、また特に冬期は積雪により立ち入りが不可能な場所であるとのことであった。約30人のガイドの内、ガイドの専業は4～5名であり、冬期は付近のスキー場でスキーガイドをしているとのことであった。

参考ホームページ：「乗鞍山麓五色ヶ原仙人道」

<http://www.hida.jp/goshiki/index.shtml>

4 エコツーリズム化にかかわる調査

【先進事例地現地調査】

②先進事例地視察・現地調査

先進事例地での取り組みをヒントに、丹沢・大山地域型エコツーリズムを

①屋久島調査概要

屋久島のエコツーリズムの歴史

①江戸時代からの自然林の伐採産業／林業の島

・江戸時代で屋久杉 100 万 t 伐採，戦後大伐採期で 100 万 t の伐採，というように林業経済の島であった。

②伐採中止から保全，そして観光・ツーリズムへ

・昭和 30 年代からの大規模自然伐採での森林環境破壊に対する反対運動と保全運動。

・京都大学の霊長類研究からの保全請願活動，地元，柴鐵生氏たちの保全活動などの成果で一部地域の伐採が中止，保全される。

・その後，柴氏たちが中心となり「屋久島林地活用計画」が作成される。その心は，森林伐採の島の産業経済から，森林保全と調和した島の新しい産業文化づくりへの転換をどの様に図っていくかが重要という認識からであった。また当時，「屋久島産業文化研究所（季刊誌『生命の島』出版）」が，日吉氏たちを中心に結成され，屋久島の環境と文化・ツーリズムを考えてきている。

・世界遺産登録により一挙に注目されるころ，当初は島の森林保全に消極的であった鹿児島県も「環境文化村構想」づくりで，屋久島での保全と観光の施策を打ち出す。その結果として「環境文化村センター」，「研修センター」等を施設設置し，屋久島の自然ガイド，資料，人材育成に乗り出す。

これ以前に，屋久島移住者たちによる「エコツアーガイド」に関する民間ベースでの経済活動が動き出している。その先駆的な会社でもある「YNAC」は現在 10 年を経過しており，彼らは独自のエコツアープログラムを開発し，そのフィールドも開発している。現在有名になっている白谷雲水峡も彼らの独自のエコツアーの開発地であると自負している。

2. 屋久島エコツーリズム関連の主体あれこれ

①上屋久・屋久，2つの自治体 → 合併の動き

②環境文化センター（県の財団）

③観光協会（宿泊，民宿，ツアーガイド認定等）

④エコツアー会社，個人レベルのツアーガイド

⑤屋久島産業文化研究所『命の島』発刊

⑥屋久島エコツーリズム推進協議会（環境省のエコツーリズム推進協議会のモデル地区）

⑦大学関係（京都大学を中心とした「オープンフィールドミュージアム構想」→屋久島フィールドワーク）

屋久島アカデミー的存在

●林業の島から屋久島自然・エコツアー観光の島への転換中

明確な島内合意が形成されているわけではなく，世界遺産，自然観光ブーム，一部観光資本の活発な動きに翻弄されている。

●山へのオーバーユース対策，観光経済循環・波及として

島民参加，集落参加できる里エコツーリズム，グリーン・ブルーツーリズムの模索中

●地元及び研究者有志が熱心に取り組んできた環境保全活動が，県，行政レベルに発展したものの役所的，施設の対応による現状の問題

住民，業者，行政での明確な島の暮らし・産業・文化の目標像は模索中か

●ボランティア的な参加での大学アカデミーの支えも大きい

②いしかわ自然学校

①調査目的

丹沢大山地域における、エコツーリズム・環境教育学習の展開での地域再生を検討するために、「今後エコツアー・環境教育学習を機能させていく上での可能性・問題点・課題の抽出」、「丹沢地域で現在行われていることの整理」「各施設・プログラムのポジショニングの試み」を視点に、丹沢大山での可能性を検討することをめざし、先進事例地におけるエコツーリズムの調査をおこなう。

②調査方法

2004年11月6日～7日に開催された、1) 全国積雪寒冷地帯協議会助成事業である「白山ろく エコツーリズムのつどい～雪を活用した地域おこしを考える～」のシンポジウムに参加し、白山地域におけるエコツーリズムへの取り組みを考察するとともに、このシンポジウムの共催でもある、2) (社)いしかわ環境パートナーシップ県民会議(いしかわ自然学校)の梅典雅氏(石川県 自然環境 自然保護課 自然共生推進グループ 主幹)へのヒアリングから、いしかわ自然学校でのエコツーリズム展開の現状と課題から、丹沢大山地域におけるあり方を考察する。

③調査結果

1) シンポジウムのサイドプログラムである、プレ的なエコツーリズムに参加し、インタープリターを務める地域住民にヒアリングを実施した。白山地域では、丹沢大山地域で展開が予想される、「山岳地域の自然体験を目的としたツアー」と「山麓地域での農林業・民族文化・里山などの体験ツアー」を試みていた。本シンポジウムでの、プレ・ツーリズムにおいては後者ツアーでは、小学生の親子の参加者を中心に、集落を里山から鳥瞰しつつ、身近な自然としての裏山の環境保全的機能をはじめ、集落部での自社仏閣、伝統的街並み(建築意匠)、食文化(店先での食材紹介)の解説などが実施されており、参加者に好評のプログラムであった。しかしながら、この企画を実験的に民間旅行者と実施したところ、参加者が得られず成り立たなかったとの回答であった。ここから、「白山」の登山の山としてへの期待(認識)と山麓ツーリズムへのニーズ・客層の違いが同え、丹沢大山地域での展開に際してのプログラムづくりの参考となった。

2) 1)でのシンポジウムの共催者であり、地域住民によるインタープリター育成等を進める「いしかわ自然学校」は、全県域を対象に市町村の自然保護、環境、青少年、教育、観光、農水等の部門や、民間の自然愛好団体、地域団体、山岳ガイドやダイビングなどの民間事業者などの様々な主体がこれまで提供してきたプログラムで一定の基準(基本理念・コンセプト)を満たすものは「いしかわ自然学校」の名のもとに体験を実施、提供している。これにより、各主体はお互いの情報交換などを通じ、それぞれの持ち味や長所を持つ主体間を有機的に連携しながら協働する機会を積極的に作り出しています。また、基準(基本理念・コンセプト)を明確化することで質の高いプログラムの提供を目指している。また、これらのプログラムは、体験内容毎で3つの部会で構成されており、この部会の中で体験スケジュールやメニューなどが調整されています。事務局は、(社)いしかわ自然学校事務局が設けられており、推進、PR・広報、各プログラムへの支援や調整の他、体験プログラムのインストラクター育成のためのスクール運営などを実施している

経緯

平成12年にモデル事業としてスタート。当初は、大人を対象としたエコツーリズムでの対応を考えていた。しかしながら、平成12年2月ごろ「子供すくすくプラン(子供のための健全育成事業)」がたちあげられ、これをきっかけとして子供向けプログラムへの対応が求められた。さらに、県各部局のかかえる子供のための健全育成事業に関係する事柄(既存に展開されてきたグリーンツーリズムや体験学習など)が組み込まれることとなった。

平成13年に本格的に始動し、部局間連携事業として位置づけられ、現在に至っている。

組織

官主導でのスタートから、現在でも石川県自然環境 自然保護課の管轄のもとで事務局は、金沢庁舎・県民エコステーション内に「いしかわ自然学校事務局」が設置されている。

いしかわ自然学校に登録したい業者・団体は、いしかわ自然学校HP内の、「つくりかたマニュアル」にそつ

て、対象・フィールド・体験内容・スタッフなどを記して申し込むと登録される。この申請には、さほど厳しいチェックはない。

いしかわ自然学校に登録している業者・団体は、プログラムの大きなくくりでもある、「子供を対象」・「学び(学習)」・「エコロジーキャンプ」ごとに部会をつくり、このなかで定期的にプログラムの内容調整(日程等)や質の点検を行っている。

また、これらの部会の代表者による総会を実施し、全体としての調整機能を果たしていこうとしている(現在までに1回総会を実施)。

プログラム・インタープリター

プログラムに対する質の評価は、現状では明確ではない。グリーンツーリズムや自然体験、文化・史跡めぐりなどプログラムが多様化するなかで、質の均一化が難しくなっている。

プログラムの苦情は、パンフレットに住所などが載っている「石川自然学校」に、電話での苦情がよせられる。いしかわ自然学校は、単位制をとっており、40単位で卒業。しかしながら、現在までの修了者は、5人。そのうち2人は子供。本来は、継続して参加してほしいため単位制をとりたくはなかった。今後は、卒業者を対象としたマスターコース(特別メニュー)や修了生によるOB会、OBのインタープリター認証等も検討している(石川県自然環境 自然保護課が中心となって、自然学校発足にむけ、平成12年から養成セミナーを年1回実施、養成セミナーは、3泊4日のプログラムで、30名を対象に実施している(1人14,000円の宿泊費・食費は実費)。これらは、Keepに委託をしている)。既存の活動等を寄せ集めたかたちなので、インタープリターの質も差がある。平成15年からは、2泊3日のプログラムで、50人を対象に年2回している。この参加者の30名程度は、学校の先生である(教育委員会の費用)。これらのセミナーにより、500名近いインタープリターを育成している。しかしながら、これはエコロジーキャンプ等のインタープリターであるため、グリーンツーリズム等の指導者の育成にはつなげていない。結果として、「石川自然学校」の全体的な質が平均化されていない。

来訪者への対応等

宣伝媒体としては、入学案内書を使用している。なかに掲載されている、プログラムについては、そのつとに個々の団体・企業がチラシ等を作成して、宣伝している。実際に訪れる来訪者は、家族連れや個人のグループが多い。修学旅行等の受け入れも将来的には検討しているが、受け皿(インタープリター不足など)が問題となっている。プロのインタープリターの育成と確保のための組織・仕組みづくりが、検討課題となっている。プログラムやインタープリターの質の向上や確保により、大学等の授業・実習(演習)としての単位認定に結びつくようにしていきたい。

課題

官主導で進めてきたため、行政の予算削減によって活動(プログラム)自体の見直しや削減の危機にある。プログラムの評価も含めた第三者(コーディネート)的組織の必要性が、差し迫った問題としてある。賠償の請求などをされた際に、その対応窓口をどこが担って、どこで賠償金をみていくのか。責任の問題。料金格差があつて、安いほうに人が流れてしまうという現状がある。行政企画しているプログラムは、一般的なプログラムと比べ安い。

今後の予定

さらなる先進事例地調査を参考に、地域再生をねらいとしたエコツーリズム・環境教育学習のシナリオづくりに向けて、導入・運営のためのしくみづくり、指導者の育成やプログラム作成のしくみづくりの策定などを考えていく。そのために、上述の先進事例地への調査結果を含めて基礎資料として充実させていくために、上記調査のさらなる整理・分析、補完調査、ニーズ調査を実施していく。

2. 考察

(1)「丹沢大山環境教育施設活動実態調査」における考察

①施設の概要及び利用者・団体の概要について

施設の分布に関しては南丹沢、特に秦野市に14施設中5施設が設置されており、北丹沢にはほとんど施設の設置はなかった。また、国定公園内の施設は6施設、国定公園外の施設は8施設であり、国定公園内の施設でも公園周辺部に設置されていた。これらのことより、施設を活用したツーリズム・環境教育学習を展開する場合には、国定公園内部（山岳部）よりも公園周辺部（山麓部）を利用しての活動が中心になることが予想される。また、すでに現在、年間の全施設利用者の合計がのべ40万人を超えること、交通のアプローチが比較的良いこともあり、山麓部の活用は今後大きな可能性があることが期待される。また、施設利用者は施設周辺市町村の他、周辺都市部からも比較的目立ち、丹沢大山地域の利点として都市部に近く、そこからの来訪が期待できることが示唆される。また、来訪者の年齢層については20才までと40代から50代がおおいことにより、ファミリーでの利用が多いことが考えられる。

団体の活動参加会員は丹沢大山周辺市町村以外の市町村から、50代～60代を中心とした比較的年齢の高い人たちであった。この理由については、子育てなどが一段落し、ある程度時間に余裕があり、明確な目的をもって（団体の活動のテーマに共感し）活動に参加している、団体設立当初からメンバーの世代交代が行われていないなどの理由が考えられるが、もっと詳細なデータの分析が必要である。

②自然体験プログラムの実施について

12施設・17団体で自然体験活動プログラムが提供されており、施設アンケートにおいては10施設が、団体アンケートにおいては17団体総てがそれぞれの組織による企画運営実施の形を取っていると回答した。また、団体アンケートでは15団体が一般に向けてプログラムを提供していると回答した。今回のアンケートの回答により、具体的な回数や使っているフィールド、規模、料金等について細かな分析を加えることはできなかったが、丹沢大山地域では上記のように多数の施設・団体がそれぞれに自然体験活動プログラムの企画運営をし、一般参加者向けにすでに実施されていることがわかった。これは、エコツーリズム・環境教育学習に準ずる活動が本地域ではすでに多数提供されており、それらを企画立案、運営実施するノウハウやプログラムの蓄積があると言いうことができるだろう。これらの活用を考えた場合には、プログラムの質のばらつきがないようにすること、自然再生をねらいとしたテーマやメッセージの関連性をつけるしくみが必要である。また、将来地域内にエコツーリズム・環境教育学習の事業者が出てきた場合に、プログラムの参加費用が現在の公的機関やボランティア団体が提供している、あまり採算を意識していないプログラムの参加費用と大きな格差が出る可能性があり、事業として成り立つ参加料金の設定についても検討する必要がある。

③活動の広報及び参加者について

活動の広報については、施設アンケートでは市町村広報紙での広報という回答が多く、ついで全国版新聞とホームページであったが、団体アンケートではホームページでの広報という回答が最も多く、ついで会員向け情報誌・市町村広報であった。このことは、広報に関しては従来の新聞や広報紙に加えて、すでにインターネットを使った広報がすでに効力を発揮していることを示唆している。参加者の来訪地域と年齢層に関しては、来訪地域は施設アンケート・団体アンケートとも周辺市町村以外の県内からという回答が周辺市町村に並んで多かった。具体的には横浜・川崎・平塚などで、ここからもこれら県内の周辺大都市が活動参加者獲得の大きなターゲットになるといえる。また、参加年齢層は施設アンケート・団体アンケート共に20才までと50代～60代という回答が多かったが、それぞれ特に偏りなしという回答もあり、全年齢層からの参加がある。20才までが多いことから、子ども向けの活動も活発に行われていることがうかがわれる。施設の利用者は東京からの来訪が比較的多かったが、活動参加者では東京からの参加の回答はなかった。年齢層については利用者・参加者の間に大きな違いはなかった。団体の会員・活動参加者の間に来訪地域や年齢層に関する違いは見られなかった。

④指導者について

12施設・18団体ではそれぞれ指導者を抱えており、それらののべ人数は628人であった。指導者の養成

も4施設で行われており、本地域の指導者の持っている資格としては、神奈川県森林インストラクター、NPO法人自然体験活動推進協議会（CONE）の初級リーダー、（財）自然保護協会（NACS-J）の自然観察指導員や救急法関係の資格が多く、それらの認定のための研修会に参加という回答が多かった。この他に特に団体に関して、それぞれの団体の活動テーマにあわせた資格（林業技師など）を持っているという回答があった。

これら指導者の活用を考えた場合、それぞれの団体で独自に指導者を育成しているケースもあり、質のばらつきがないようにするために、育成のカリキュラムをある程度統一するなどのしくみづくりが必要である。

⑤団体対応について

11施設・12団体が団体対応を実施していた。ニーズがあるのに実施していないという回答はなかったため、ニーズがあれば積極的に対応しているものと思われる。また、指導者の派遣も7施設・11団体で行っており、このことから、本地域では団体に対する対応は活発に行われており、団体からのニーズも少なくないことがうかがえる。また、団体対応においては学校団体への対応が少なくなく、施設アンケートで「学校団体に向けてプログラム集や先生向けの資料を準備している」と答えた施設が5施設あることから学校団体の利用が多いことがうかがわれる。都市圏から近いことや環境教育学習というテーマ、地域の素材からあわせて考えると、学校団体の利用誘致は本地域の大きな方向性の一つになると思われる。

⑥その他

8施設・13団体が団体対応以外で他の団体や施設との連携があると回答した。施設アンケートの回答では周辺施設との連携が中心であり、団体アンケートの回答では丹沢大山ボランティアネットワークが機能しているようであった。しかし、丹沢大山地域全体として、施設・団体間の連携は確立されておらず、特に施設間においては市町村内での連携が中心で、丹沢大山地域というくくりはあまり明確ではないようである。また、施設では7施設が評価の機会を設けており、ほとんどは実施後の参加者へのアンケートであった。本地域での地域再生・自然再生をねらいとしたツーリズム・環境教育学習を考えるにあたっては、テーマの設定やプログラムの実施、活動の把握や効果測定などにおいて地域間の連携は欠かすことができず、本地域でのツーリズム・環境教育学習運営・推進のネットワークづくり、またそのしくみの策定が早急に望まれる。

(2)「エコツーリズム先進事例地調査」における考察

「ホールアース自然学校」「足尾環境学習センター」「奥多摩ネイチャースクール」で実践されている団体対応、特に学校団体対応のしくみは、参考にすべきところが多い。学校団体対応をマストツーリズムのエコ化という視点で捉え、学校のスタイルに合わせた形で、「教育旅行」という旅行会社のしくみを活かして対応するスタイルはそのまま本地域でも取り入れるべきスタイルと考えられる。しかし、そのためにはフィールドの適正利用のための地域のガイドラインづくりや力量のある指導者の確保、受け入れのためのシステム作りが必要となる。また、「ホールアース自然学校」の場合は東京への、「足尾環境学習センター」では日光への修学旅行団体が立ち寄りやすいという利点があり、丹沢地域では周辺都市部の学校に向けて何らかの来訪の強力なきっかけづくりをする必要がある。さらに、「足尾環境学習センター」が教育旅行・体験学習の利用のために栃木県観光協会・日光観光商工課のホームページで県内・地域内の他の施設と共に情報を提供していたり、教材がダウンロードできるようになっているなど、丹沢大山地域でもいつ（季節・日時）、どこで（どの地域・場所）、誰が（どの施設で・団体で）、誰に（参加対象・人数）、何を（活動の内容・テーマ）、いくら（料金）で提供されているのかが一元化されて情報提供されるようなシステムが必要である。あわせて地域内の宿泊場所やそのキャパシティなどの情報、交通情報などがあると良いと思われる。このような広報はプロモーションの意味も大きい。いくつかの施設では準備されている学校団体・教師向けの資料集（プログラム集）のような、自然再生・地域再生をテーマにした地域内で活用できるプログラム集の整備・提供も効果があると思われる。そのためには現在の地域内の資源を地域内の住人にも関わってもらいつつ、外からの視点でもう一度見直し、新たな価値を付加していく作業が不可欠である。

現在、すでにエコツーリズム・環境教育学習に準ずる活動が多数行われている丹沢大山地域で、現在の自然体験活動プログラムや指導者を活かしていく形を考えると、「いしかわ自然学校」のプログラム提供のしくみは一つのモデルとして本地域でのスタイルに合っていると思われる。丹沢大山地域とフィールドや状況が似て

いる奥多摩地域でも現在すでに様々な自然体験活動プログラムが実施されているが、実施主体同士の連携が取れておらず、地域としてバラバラに広報・提供されている状態で、地域としてのメッセージやテーマが不明瞭である。丹沢大山地域においては、自然再生・地域再生というテーマのもと、ストーリーやねらいを明確にし、それに応じた段階的なプログラムがバランス良く提供できるように連携を計り、それらを提供、申込の受付や実施の振り分け、かつ評価もできるようなコーディネートをし、組織を早急に整備する必要がある。

「乗鞍山麓・五色ヶ原」での入山制限・ガイド同行のしくみは、丹沢大山地域のオーバーユースが問題になっている山岳地帯でのツーリズムとは地域の状況が違うため、今回の調査の内容では十分な参考にはならなかった。今後ガイド料金の設定のしくみや、参加者受け入れ後のガイドへの振り分け、ガイド認定の研修システムについての調査などが必要である。

3. まとめ

「丹沢大山環境教育施設活動実態調査」においては、本地域で各施設・団体により活発に自然体験活動が実施されており、それぞれの施設・団体で指導者をかかえ、企画・運営・実施していることが多いことが解った。対象者としては周辺地域、参加者募集広報としては市町村広報紙・県広報紙が多く、団体では特に会員向け情報誌やホームページが多かった。参加者は施設では丹沢大山周辺市町村から、団体では丹沢大山周辺市町村以外の県内からの来訪・参加が多く、参加が多い年齢層別では施設・団体とも20才までと50代～60代が多かったが、全年齢層からの参加があることが解った。団体対応に関しては施設・団体ともにニーズがあれば実施しており、特に施設では学校団体やボーイスカウト・自治会などの周辺地域からの団体の利用が多い。また、団体でも学校団体を定期的に対応している例が少なくなかった。指導者の派遣に関しても、半数以上の施設・団体で行われていた。他施設・団体との連携は、施設では周辺市町村での連携が多く、団体では丹沢大山ボランティアネットワークでのネットワークが多かった。丹沢大山地域全体としての連携は確立されていないようである。

「エコツーリズム先進事例地調査」では、団体（特に学校団体）を受け入れる際の仕組みづくり（ホールアース自然学校の取材より）、地域全体でのネットワークと提供のしくみづくり（いしかわ自然学校より）、地域の資源の活用とそのプログラム化（東京都奥多摩地域より）などの丹沢大山地域に対しての参考情報が得られた。

以上をふまえ、丹沢大山地域では、すでに自然再生を目的としたエコツーリズム・環境教育学習に準じるような自然体験活動が各施設・団体により企画実施され、指導者も相当数そろっていることから、まずそれらの情報・プログラム・人材を活用する形を考え、さらにオーバーユースが問題になっている山岳地域ではなく、施設・団体の活動が活発な山麓～周辺市町村地域でのプログラム開発と受け入れのしくみづくりを整えていくという形が考えられる。ただし、公的機関やボランティア団体が主な指導者・プログラムの提供先となるため、運営費や参加費が一般的な基準からは安くなってしまっていることが考えられ、その格差をどのように埋めるかが問題となる。

現在の上記活動の参加者は周辺市町村～県内からの来訪が多く、地域の持つ利点として、やはり大都市圏に近いことや、丹沢大山地域の素材から考えても、県内の都市地域をひとつのターゲットに環境・生活との関連によるテーマの設定や、周辺都市圏在住者の手軽な自然体験の場というテーマの設定が望ましいと思われる。

また、現在周辺地域の団体の受け入れも活発に行われており、特に学校団体の対応が多い。このことから、学校団体に野外学習の場として紹介し、誘致していくことは一つの大きな方向性となりうるだろう。

ただし、そのためには現状では丹沢大山周辺地域としてのネットワークが不十分であり、地域全体としてエコツーリズム・環境教育学習においてどのようなテーマを伝えていくのか、各プログラムや施設がそのどの部分を担っていくのかを明確にしていく必要がある。さらに、地域利用者に対しても、地域のどこにどのような施設・人材・プログラムなどがあり、何をしているのかというエコツーリズム・環境教育学習情報を一元化して情報提供するしくみが必要である。また、プログラムや指導者の質にばらつきが出ないようにするしくみが必要である。

そのためにも、地域でエコツーリズム・環境教育学習をすすめていく上でのガイドラインの早急な策定や、上記をとりまとめて運営したり、プログラム開発や指導者育成を担っていくコーディネート組織やネットワークの確立が課題となる。

4. 資料編

- 資料 1. アンケート発送施設・団体と回収結果
- 資料 2. 施設向けアンケート調査票
- 資料 3. 団体向けアンケート調査票
- 資料 4. 県立宮ヶ瀬ビジターセンターヒアリング結果
- 資料 5. 県立秦野ビジターセンターヒアリング結果
- 資料 6. 県立西丹沢自然教室ヒアリング結果
- 資料 7. 県立丹沢湖ビジターセンターヒアリング結果
- 資料 8. 施設アンケートにおける各設問の自由筆記部分の回答
- 資料 9. アンケート回収施設の概要及び利用者について
- 資料 10. 団体アンケートにおける各設問の自由筆記部分の回答
- 資料 11. アンケート回収団体の概要について
- 資料 12. アンケートにおけるその他の回答
- 資料 13. ホールアース自然学校ヒアリング結果
- 資料 14. 奥多摩町原島幹典氏ヒアリング結果
- 資料 15. 体験宿泊施設「ねねんぼう」ヒアリング結果
- 資料 16. 奥多摩ネイチャースクールヒアリング結果
- 資料 17. 入手資料編

(3)山のなりわい調査

目次

1. 目的と実施内容

- (1) 目的
- (2) 実施期間
- (3) 実施項目
- (4) 実施体制
- (5) 実施フロー

2. 課題毎の調査結果

- 2.1 神奈川県の森林・林業
- 2.2 森林の荒廃は関東大震災から80年続く
- 2.3 現在は緩傾斜地からの粘土質土壌からの浸食が深刻
- 2.4 荒廃林の強度間伐が全域で必要
- 2.5 多くの私有林の所有者不明、境界不明
- 2.6 まともな林業が長く行われず、補助金による保育作業が中心
- 2.7 山側からの生産が安定せず、川下側も使いづらい
- 2.8 利用可能なバイオマス資源も不足
- 2.9 林業の担い手育成がますます困難に
- 2.10 数多いボランティアも個々に活動
- 2.11 環境保全型森林経営プラン
- 2.12 野生動物管理事業
- 2.13 丹沢森林管理機構の設立・運営
- 2.14 丹沢での生業再生の取り組み

1. 目的と実施内容

(1) 目的

なりわい複合再生チームでは、丹沢大山の森林・林業に関わる諸課題を徹底的に洗い出し、課題毎に情報を収集し、課題を検証しながら調査を進め、丹沢大山のなりわい再生に資することを目的としている。

(2) 実施期間

業務の実施期間は、平成16年4月～平成17年3月？

(3) 実施項目

- 森林・林業
- 木質バイオマス
- 山の生業
- その他関連事項

(4) 実施体制

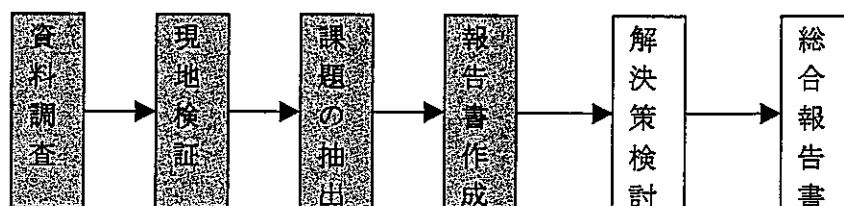
なりわい複合再生チームは以下の調査メンバーで構成されている。

| 名前 | 所属 | 担当 |
|------|------------------|-----------|
| 富村周平 | (株) 富村環境事務所 | 統括 |
| 奥村 玄 | (株) 農村・都市計画研究所 | 事務局 |
| 佐藤好延 | (有) サトウ草木 | 林業 |
| 川又正人 | (有) 川又林業 | 林業 |
| 須藤 章 | NPO 緑のダム北相模 | 木質バイオマス等 |
| 松村正治 | NPO 神奈川森林エネルギー工房 | 広葉樹林活用等 |
| 牧 大介 | (株) UFJ 総合研究所 | 森林ビジネス |
| 増谷利博 | 日本大学教授 | 間伐材収穫・利用等 |
| 大河和夏 | 日本大学 | 同上 |
| 前野真吾 | 日本大学 | 森林構成・GIS |
| 中村高規 | 日本大学 | 川上・川下連携 |
| 浅井美香 | 一橋大学 | 権利関係 |
| 楠田詠子 | 東京大学 | 同上 |
| 山田 純 | 国民森林会議 | 川上・川下連携等 |

その他、県自然環境保全センター3名が行政側の担当となっている。

(5) 実施フロー

調査の流れは以下のフローに従っている。(塗りつぶしが今年度)



2. 課題毎の調査結果

2.1 神奈川県内の森林・林業

表 2.1.1 神奈川県内の森林

| 区分 | 神奈川県 | 全国 | 出典 |
|--------------------|-------------------|-----------------------|---|
| A. 土地面積 | 241,569ha | 37,789,920ha | 国土地理院 (平成15年10月1日現在) |
| B. 人口 | 8,628,787人 | 127,435,350人 | 統計課(平成14年10月1日現在) 総務省統計局 (平成14年10月1日現在) |
| C. 森林面積 | 95,276ha | 25,121,084ha | 林務課(平成15年4月1日現在) 林野庁(平成14年3月31日現在) |
| D. 民有林面積 | 84,415ha | 17,283,155ha | 林務課(平成15年4月1日現在) 林野庁(平成14年3月31日現在) |
| 人工林 | 31,954ha | 7,936,955ha | |
| 天然林 | 48,400ha | 8,522,269ha | |
| その他 | 4,061ha | 747,637ha | |
| 林野率 (C÷A)×100 | 39% | 66% | |
| 一人当たり森林面積 (C÷B) | 110m ² | 1,971m ² | |
| 民有林人工林率 | 38% | 46% | |
| 年間素材生産量 | 24千m ³ | 15,092千m ³ | 農林水産省統計情報部 (平成14年12月31日現在) |

- 県の森林面積は95,276ha、森林率39%、人工林率38%で、年間素材生産量24千m³、全体的には全産業で林業の占める割合は微小で、林業県ではないともいわれている。
- ただ、森林のほとんどが、丹沢や箱根など県の水源域に分布し、水や木材など資源的にも、環境的にも重要な役割を果たしている。
- 丹沢地域の森林は、全県の約50%強、面積は41,734haである。

- 土地所有は、私有林が32%、県関係公有林が26%、国有林が22%となっている。
- 小規模所有者が圧倒的に多く、5ha未満所有者数が80%に達する。

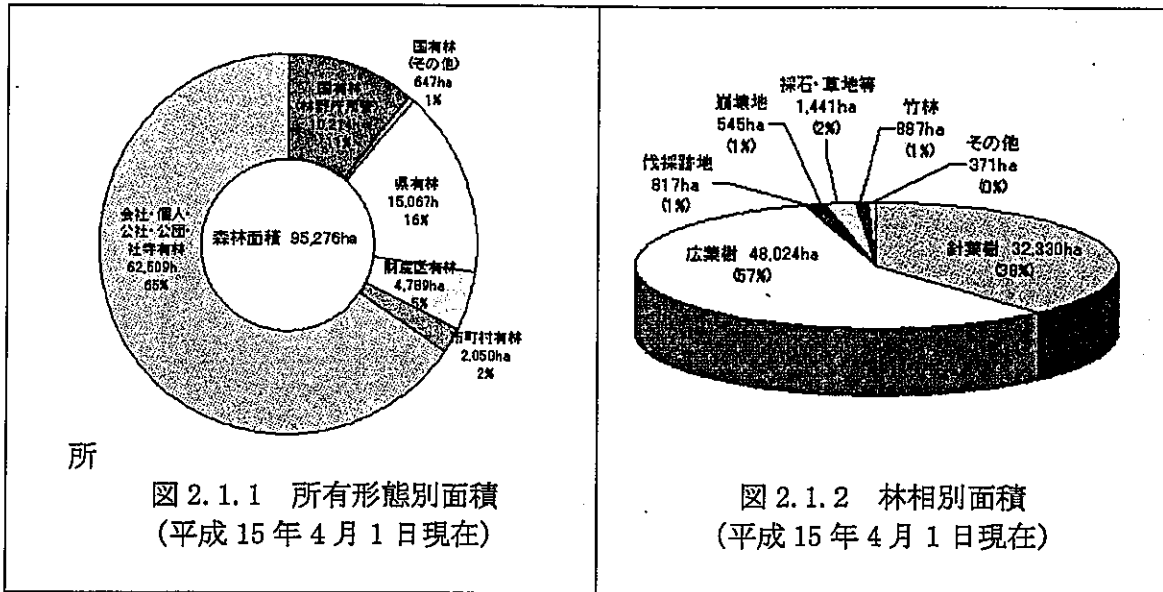


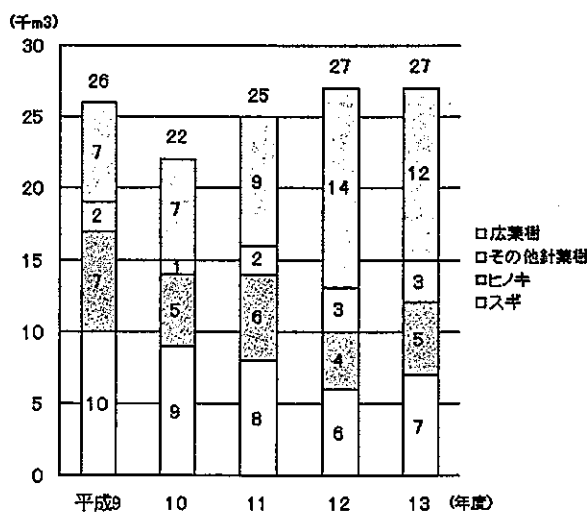
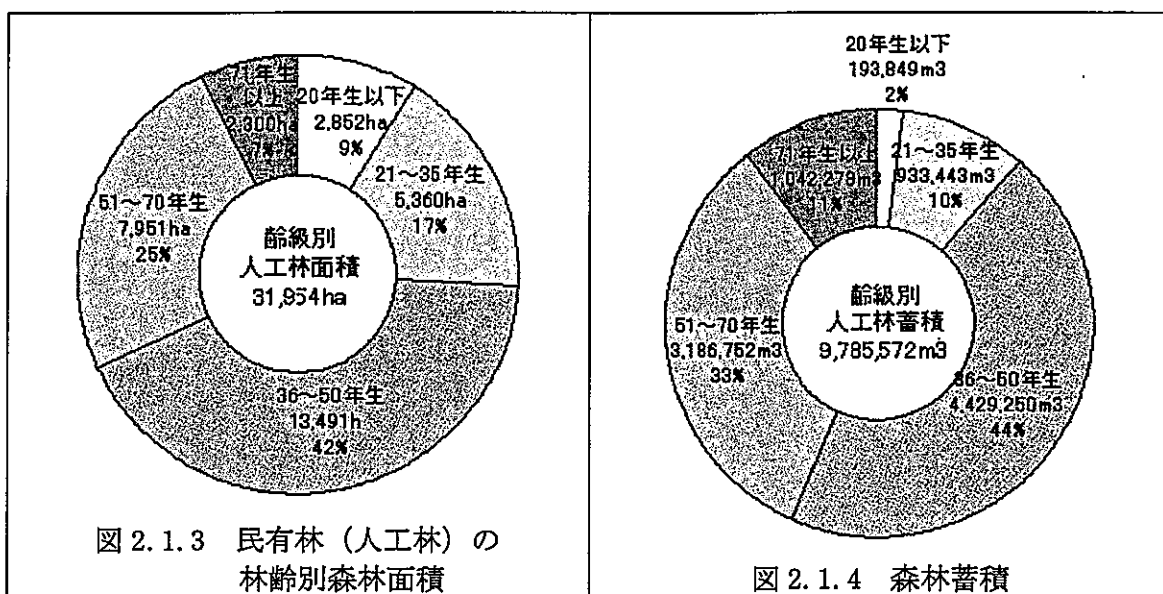
表 2.1.2 丹沢山地の森林資源 (平成 15 年 4 月 1 日現在)

| 区分 | 立木地 | | | | | | | | | | 竹 | 伐採跡地 | 草地 | 無立木地 | | | 計 | 合計 |
|------|----------------|-----------|--------|-----------|--------|------------|------|------|------|------|------|------|-------|--------|----|----|---|----|
| | 針葉樹 (DPF以下) | | 広葉樹 | | 立木地計 | | 面積 | 蓄積 | 面積 | 面積 | | | | 面積 | 面積 | 面積 | | |
| 秦野市 | 2,110 | 713,571 | 2,526 | 298,282 | 4,637 | 1,011,853 | 85 | 52 | 21 | 12 | 18 | 14 | 117 | 4,819 | | | | |
| 厚木市 | 758 | 242,376 | 1,735 | 204,190 | 2,493 | 446,566 | 24 | 17 | 4 | 115 | 3 | 1 | 140 | 2,657 | | | | |
| 伊勢原市 | 1,073 | 333,281 | 832 | 113,526 | 2,005 | 446,807 | 39 | 26 | 4 | - | 3 | - | 35 | 2,078 | | | | |
| 松田町 | 1,336 | 401,111 | 1,463 | 175,851 | 2,799 | 576,962 | 1 | 8 | 13 | 4 | 6 | 24 | 55 | 2,855 | | | | |
| 山北町 | 4,448 | 1,194,247 | 8,758 | 1,128,767 | 13,206 | 2,323,014 | 4 | 23 | 67 | 138 | 204 | 140 | 573 | 13,780 | | | | |
| 寒川町 | 588 | 209,686 | 850 | 100,386 | 1,438 | 310,072 | 13 | 15 | 1 | 51 | 0 | 2 | 69 | 1,520 | | | | |
| 清川村 | 2,447 | 717,229 | 3,698 | 477,670 | 6,145 | 1,194,899 | - | 11 | 25 | 19 | 105 | 45 | 203 | 6,348 | | | | |
| 津久井町 | 4,084 | 1,261,384 | 4,919 | 663,321 | 9,003 | 1,824,705 | 7 | 20 | 30 | - | 146 | 140 | 397 | 9,357 | | | | |
| 合計 | 16,854 | 5,072,885 | 24,880 | 3,162,008 | 41,734 | 8,234,893 | 153 | 174 | 165 | 339 | 487 | 366 | 1,828 | 43,415 | | | | |
| 全県 | 32,230 | 9,897,485 | 46,024 | 6,153,162 | 80,354 | 16,050,657 | 887 | 817 | 855 | 586 | 545 | 371 | 3,174 | 84,415 | | | | |
| 丹沢比 | 52.1 | 51.3 | 51.8 | 51.4 | 51.9 | 51.3 | 17.2 | 21.3 | 19.3 | 57.8 | 69.4 | 98.7 | 48.2 | 51.4 | | | | |
| 人工林率 | 40.4 | | | | | | | | | | | | | | | | | |

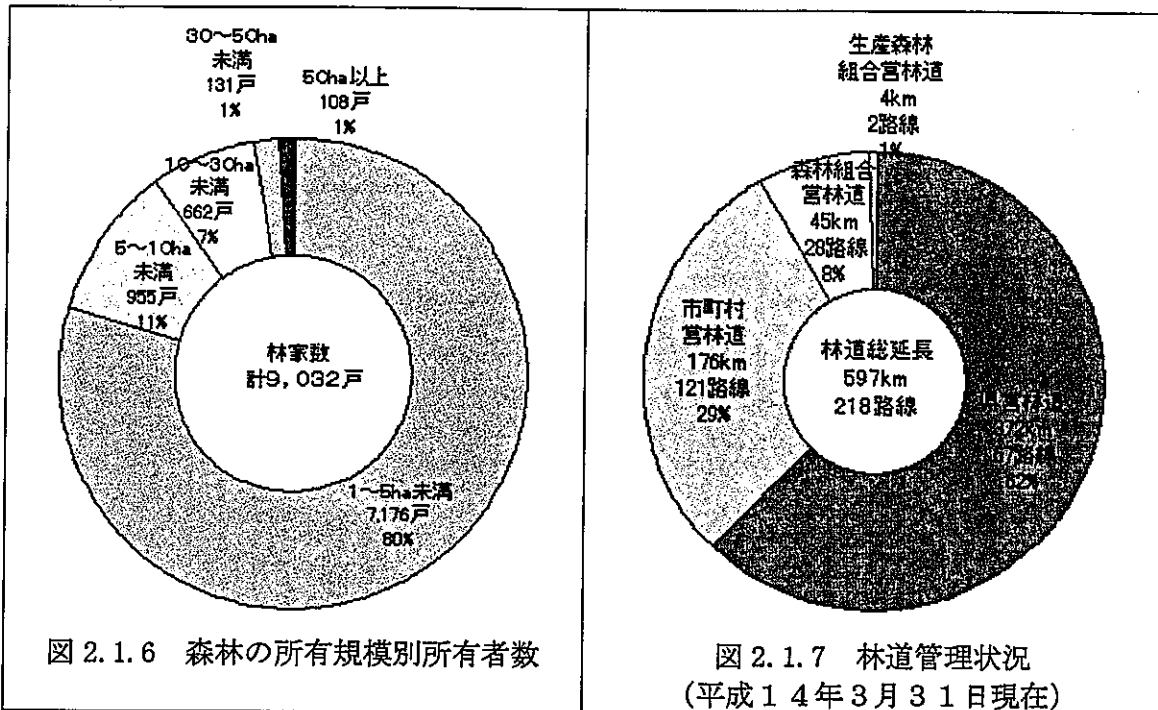
| 区分 | 計 葉 (計 葉) | | | | | | | | | |
|------|-----------|-----------|-------|-----------|-----|--------|------|---------|--------|-----------|
| | スギ | | ヒノキ | | マツ | | 他針葉樹 | | 計 | |
| 秦野市 | 1,098 | 384,687 | 886 | 314,510 | 15 | 4,374 | - | - | 2,110 | 713,571 |
| 厚木市 | 517 | 188,285 | 225 | 49,173 | 11 | 2,668 | 4 | 1,052 | 758 | 242,376 |
| 伊勢原市 | 638 | 220,481 | 354 | 86,730 | 3 | 902 | 78 | 25,158 | 1,073 | 333,281 |
| 松田町 | 871 | 287,223 | 460 | 113,487 | 5 | 291 | - | - | 1,336 | 401,111 |
| 山北町 | 2,512 | 758,907 | 1,893 | 423,111 | 12 | 2,598 | 31 | 9,631 | 4,448 | 1,194,247 |
| 寒川町 | 471 | 178,386 | 108 | 27,865 | 6 | 2,435 | - | - | 588 | 209,686 |
| 清川村 | 1,634 | 519,294 | 610 | 139,112 | 7 | 1,803 | 196 | 57,020 | 2,447 | 717,229 |
| 津久井町 | 2,906 | 958,871 | 961 | 232,351 | 188 | 57,251 | 39 | 11,311 | 4,084 | 1,261,384 |
| 合計 | 10,646 | 3,509,244 | 5,608 | 1,386,948 | 248 | 72,520 | 349 | 104,172 | 16,854 | 5,072,885 |

表 2.1.3 同上 (平成 14 年 10 月 1 日現在)

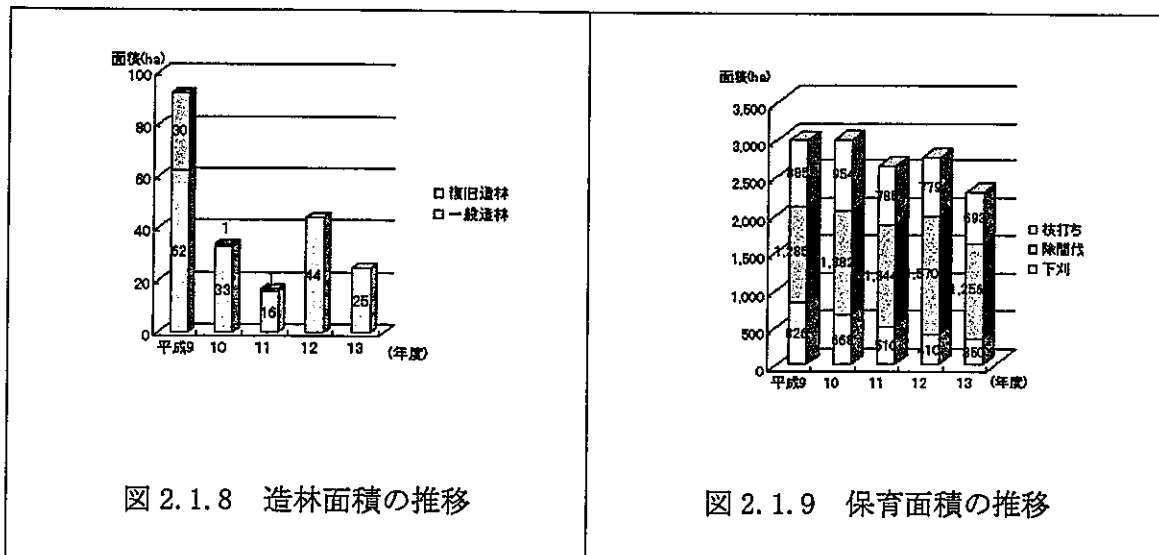
| 区分 | 区域面積 | 人口 | 森林面積 | 国有林 | 民有林 | 地域森林 | 林野率(C | 一人あたりの森林 | 制限林 | 制限林率 |
|------|--------|---------|--------|-------|--------|--------------|-------|----------------|--------|-------|
| | (A) | (B) | (C) | 面積 | 面積 | 森林計画 対象森林 | /A) | 面積 (C/B) | 面積 | (E/D) |
| | ha | 人 | ha | ha | ha | ha | % | m ² | ha | % |
| 秦野市 | 10,361 | 168,431 | 5,482 | 663 | 4,819 | 4,725 | 53 | 325 | 3,536 | 73 |
| 厚木市 | 9,383 | 221,047 | 2,657 | - | 2,657 | 2,508 | 28 | 120 | 1,032 | 39 |
| 伊勢原市 | 5,552 | 100,347 | 2,078 | - | 2,078 | 2,056 | 37 | 207 | 1,437 | 69 |
| 松田町 | 3,775 | 12,772 | 2,855 | - | 2,855 | 2,852 | 76 | 2,236 | 1,964 | 69 |
| 山北町 | 22,470 | 13,194 | 20,276 | 6,497 | 13,780 | 13,778 | 90 | 15,368 | 10,666 | 77 |
| 愛川町 | 3,429 | 42,964 | 1,534 | 14 | 1,520 | 1,482 | 45 | 357 | 1,242 | 82 |
| 清川村 | 7,129 | 3,480 | 6,383 | 34 | 6,349 | 6,349 | 90 | 18,343 | 5,586 | 88 |
| 津久井町 | 12,204 | 29,781 | 10,061 | 704 | 9,357 | 9,316 | 82 | 3,378 | 7,255 | 78 |
| 合 計 | 74,303 | 592,016 | 51,326 | 7,912 | 49,415 | 49,066 | 50 | 40,334 | 32,718 | 72 |



- 40年前は16万 m^3 、2003年(平成15年)19,000 m^3 針葉樹の生産は10,000 m^3 を切りつつある。面積割合からすると、丹沢での針葉樹生産は5,000 m^3 程度と想定される。



- 5ha以上の所有者の森林面積は約30,000haで、丹沢では15,000haぐらいと見積られる。人工林にすると6,000ha。接道人工林はその37%で2,220ha。



- 造林は25ha、森林面積全体の0.02%。
- 除間伐は1,256ha、要除間伐対象森林(21年生から50年生、18,851ha)の6.7%。

- 森林全体の61%、20,000haが管理不足。間伐を10年に1回の割合とすると63%。除間伐率は倍に延ばす必要あり(年間2,000ha)。丹沢では1,000haが目標。

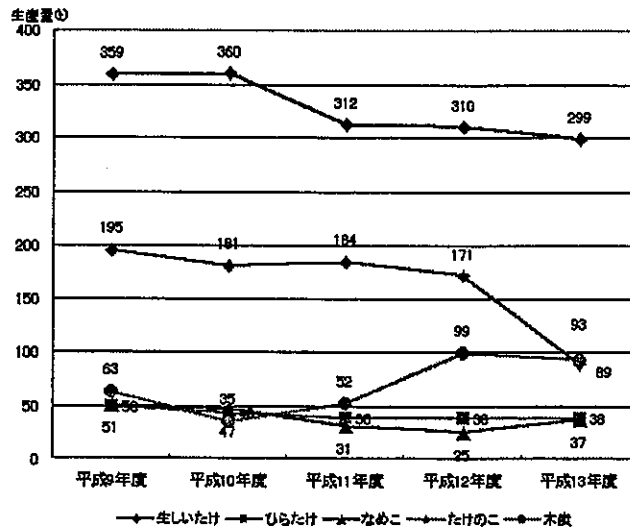


図 2.1.10 主な特用林産物生産量の推移

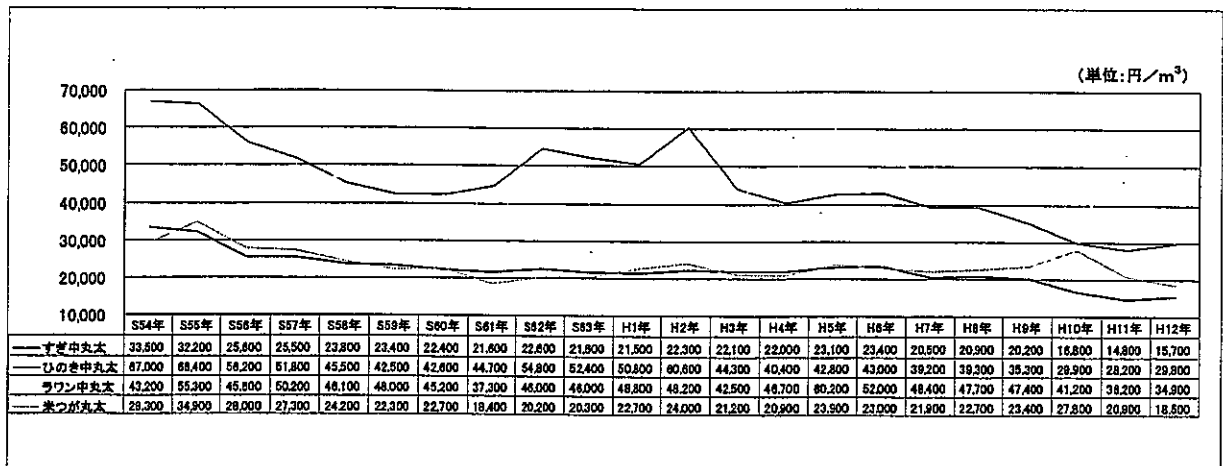


図 2.1.11 神奈川県素材価格の推移 資料：県森連・林業センター調べ

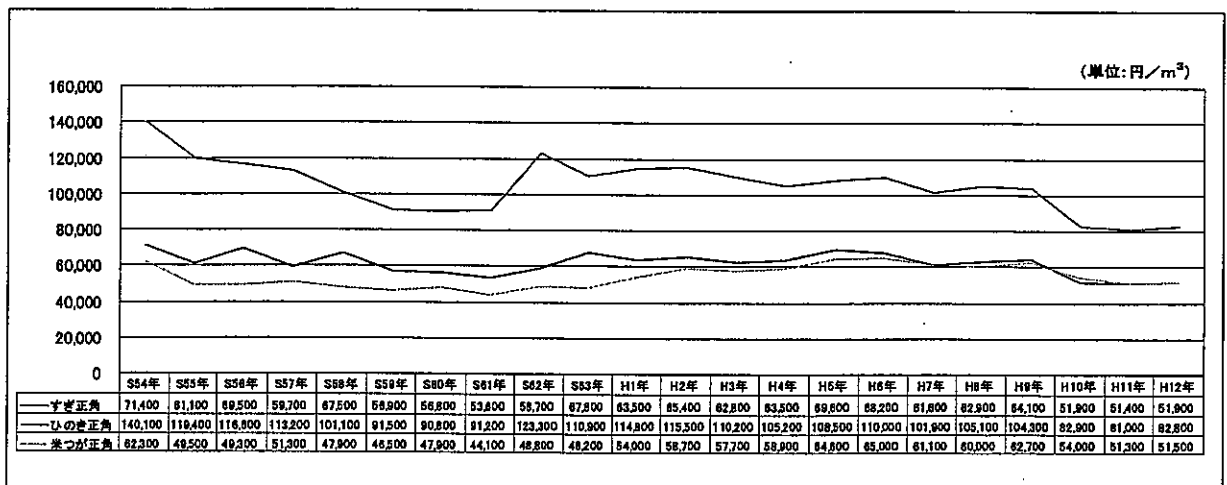


図 2.1.12 神奈川県製材品価格の推移 資料：県森連・林業センター調べ

- 素材価格はこの20年でスギ中丸太で約50%の下落、ヒノキ中丸太で約55%の下落を示す。
- さらに、過去3年の木材市場価格は、17%~37%までの下落である。特に、スギ中目材の下落が激しい(表2.1.4参照)。
- ここ10年間では、ラワン丸太、米つが丸太とも国産材の素材価格を超え、高い傾向が続いている。
- 製材品価格も同様の傾向を示すが、ここ20年のスギ正角は約15%、ヒノキ正角は約35%の下落で、素材価格ほど低下率が高くない。米つが正角は5年ほど前からスギ正角の製材品価格より高くなっている。
- 国産材の価格は外材より低くなっているにもかかわらず、その需要が低迷しているのは、安定供給などの流通上等の構造的な問題が解決されないためと考えられる。

表 2.1.4 神奈川県丸太市場価格

| 樹種 | 長さ | 径級 | 価格 (円/1 m3) | 前月比 | 備考 | 下落率 (過去3年間) |
|---------|------|---------|---------------|--------------|----|-------------|
| スギ | 3.0m | 10~13cm | 5,000~6,000円 | — | 母屋 | 34% |
| | | 14~18cm | 8,000~11,000 | — | 柱 | 27% |
| | | 20cm以上 | 10,000~12,000 | — | 中目 | 30% |
| | 4.0m | 10~13cm | 6,000~8,000 | — | 母屋 | 20% |
| | | 14~18cm | 8,000~11,000 | — | 桁 | 31% |
| | | 20~28cm | 10,000~14,000 | — | 中目 | 39% |
| | | 30cm以上 | 13,000~18,000 | — | 中目 | 36% |
| | | 〃 | 20,000~30,000 | — | 元玉 | 25% |
| | 6.0m | 16~18cm | 15,000~18,000 | — | 通柱 | 18% |
| | ヒノキ | 3.0m | 10~13cm | 7,000~10,000 | — | 母屋 |
| 14~18cm | | | 22,000~25,000 | — | 柱 | 17% |
| 20~28cm | | | 20,000~23,000 | — | 中目 | 18% |
| 30cm以上 | | | 25,000~30,000 | — | 元玉 | 25% |
| 4.0m | | 10~13cm | 11,000~14,000 | — | 母屋 | 30% |
| | | 14~18cm | 22,000~25,000 | — | 土台 | 17% |
| | | 20~28cm | 20,000~25,000 | — | 中目 | 31% |
| | | 30cm以上 | 40,000~80,000 | — | 元玉 | 14%+ |
| 6.0m | | 16~18cm | 28,000~33,000 | — | 通柱 | 27% |

平成16年12月現在、神奈川県森林組合連合会林業センター

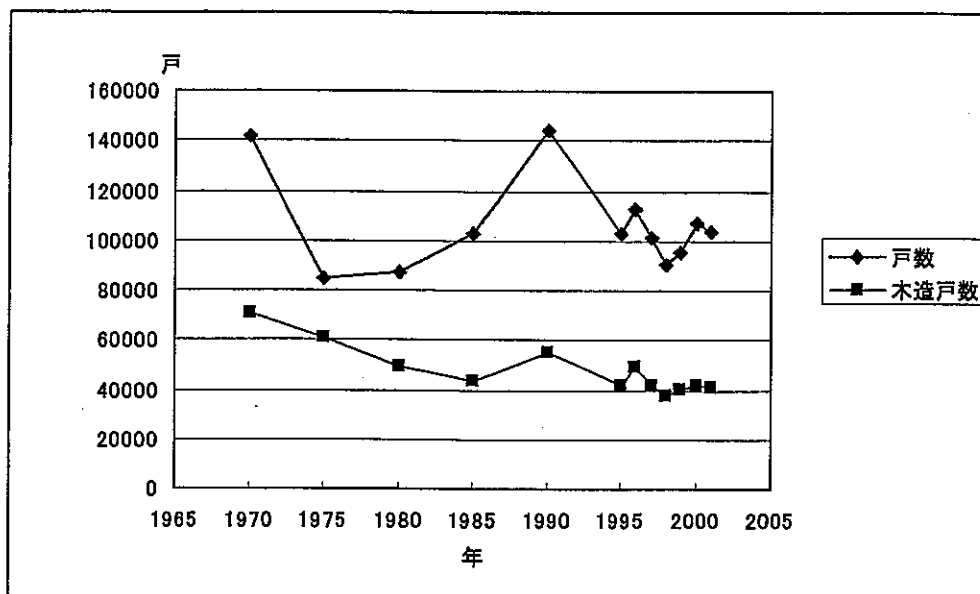


図 2.1.13 神奈川県の新設住宅着工戸数の推移 資料：建築着工統計

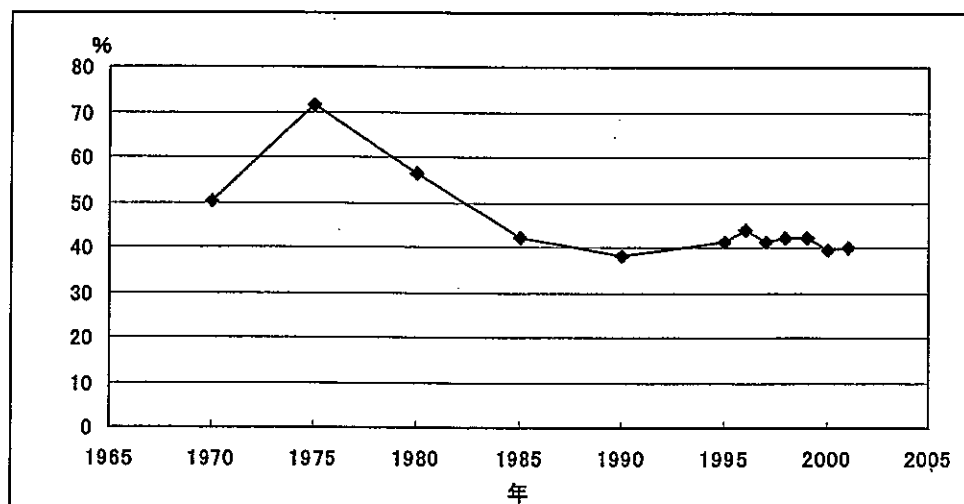


図 2.1.14 神奈川県の木造率の推移 資料：建築着工統計

- 住宅着工戸数は1970年の14万戸数から最近10万戸数へと減じているが、最近横這いで推移している。
- このうち木造住宅率は一時期の70%を下回るものの、最近約40%と横這いの傾向を示している。
- 下記の表 2.6.1 にも示すように、このような木造住宅着工戸数の下げ止まりに対して、県産材の供給能力が著しく落ちており、県内の需要量の0.6%しか賅っていない。
- 一方、神奈川県の実業労働力を見ると、以下の図 2.1.15、2.1.16 に見るように事業体数 37、就労者数 383 人、平均年齢約 55 歳、60 歳以上が 35% 以上を占める（平成

14年3月)。全国平均65歳以上の高齢化率は25%まで上昇している。

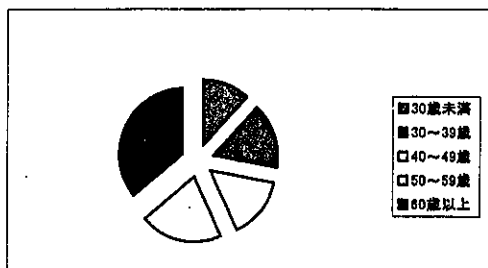


図 2.1.15 林業労働者の年齢別構成

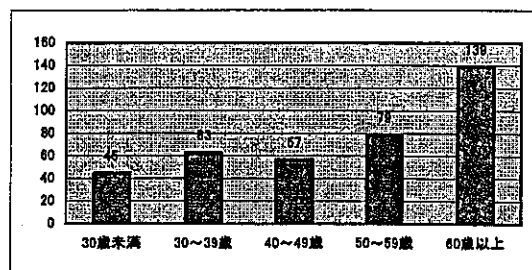
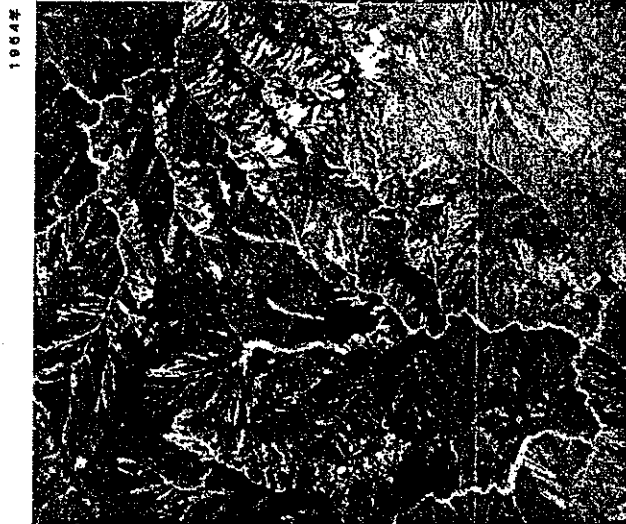


図 2.1.16 年齢別林業労働者数

2.2 森林の荒廃は関東大震災から 80 年続く

上から 1954 年、1980 年、1996 年の航空写真を示す。堂平中心の中津川上流域周辺。



1954 年 (昭和 29 年): 関東大震災の崩壊跡が多く残る。



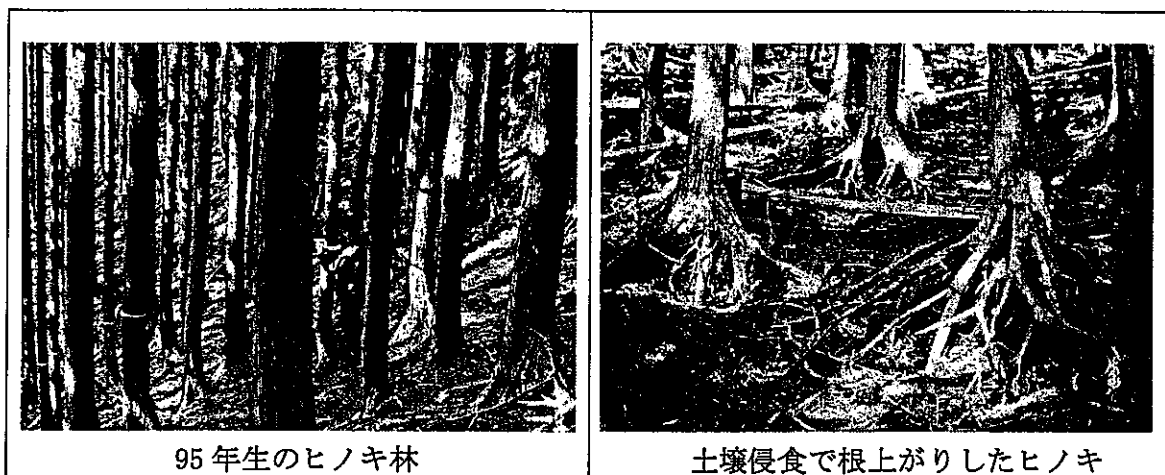
1980 年 (昭和 55 年): 拡大造林が増え、草地化が進む。



1996 年 (平成 8 年): 拡大造林が伸長し、手遅れ林が増える。

- 丹沢山地一体は関東大震災時に 30 度以上の急斜面が悉く崩壊し、森林は緩傾斜地のみに残存するという一大荒廃地を作った。以後、大雨のたびに土石流が発生し、今もなお札掛上部等に崩壊地が残るものの、瓦礫の急斜面は安定し、シデ類を中心とする二次林に回復してきている。
- 丹沢山地は、震災の回復をみせているものの、下で述べるように人工林の管理不足、シカの増殖等により、土壌流出が止まらず、森林砂漠化ともいえる荒廃状態が続いている。

2.3 現在は緩傾斜地からの粘土質土壌からの侵食が深刻



- 森林の回復の一方で、戦後の拡大造林が進み、多くが草地化する中で、平地性のシカが過剰増殖したものと考えられ、特に緩斜面に残る森林の下層植生が食い荒らされた。丹沢名物の藪地獄もシカの食用となり消失の始まりになったのもこの時期で、人工林の成長と手入れ不足による裸地化がシルト系土壌の流亡をさらに促進したものと考えられる。



図 2.3.1 札掛地区緩傾斜地区分図

- 堂平を中心とする札掛地区は 20 度未満の緩傾斜地が多く、残積性の火山灰粘性土壌とシカの生息密度も高いことが予想され、土壌の表面流出が盛んである。

2.4 荒廃林の強度間伐が全域で必要

以下の林分を除いた民有人工林を踏査（実地踏査 遠望による確認 その他）のいずれかにより荒廃現況を把握した。

- ① 広葉樹、竹林、伐採地などスギ、ヒノキ以外の森林、②森林計画対象外森林、③県営林（別途調査）、④国有林、官行造林、⑤公団造林、⑥企業庁造林

表 2.4.1 荒廃現況判定基準

| ランク | 判定基準 |
|-----|---|
| A | 森林の手入れが適性に行われており、木材生産及び森林の多面的機能の発揮の面で模範となる森林 |
| B | これまで森林の手入れが適度に実施されているが、ここ数年間手入れの形跡が無く、森林を適正に管理していくためには、数年のうちに何らかの手入れが必要な森林。または、近年、森林の手入れがなされているが、木材生産あるいは森林の多面的機能発揮の面で模範とまでは成り得ない森林 |
| C | 長期にわたり森林の手入れの形跡がなく、林床植生に乏しい、あるいは表土の流出が見られるなど良好な管理が成されておらず、木材生産または森林の多面的機能を発揮するためには、数回の手入れが必要な森林 |
| D | 荒廃が進み、劣勢木を整理すると人工林として成林する見込みがない森林。獣害などによる疎林。放置され既に広葉樹に優占されている森林 |

(1) 丹沢大山地域の森林荒廃現況

箇所数ベースで見ると、「良好」な管理が行われていると評価された林分は全体では 15%と少なく、「管理が実施されている」を併せても全体の 1/3 に満たない。最も多いのが「管理が不良」林分で、全体の 2/3 に達している。

荒廃現況を概観すると、「良好」な管理が行われていると評価された林分は、丹沢大山外縁部の低標高地域にまとまって分布する地域がみられる。それらは、北丹沢では水沢川流域、東丹沢では宮が瀬金沢、中津川流域、南丹沢では四十八瀬川流域、西丹沢では河内川流域などである。

(2) 中流域別の森林荒廃現況

ランク C、D（荒廃森林）の箇所数割合を中流域別に見ると、ほとんどの流域で 5 割以上の林分が荒廃した林分に該当している。

図 2.3.1 とあわせてみると、北丹沢の道志川、串川、東丹沢の宮ヶ瀬ダム下流、西丹沢の玄倉、中川、皆瀬川などで荒廃が進んでいると考えられる。

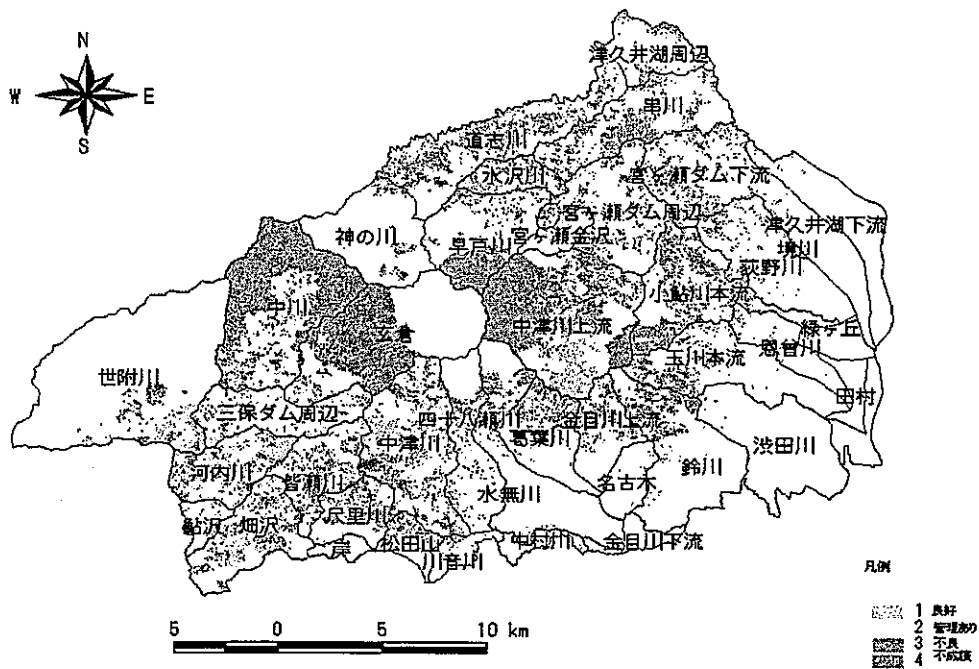


図 2.4.1 丹沢大山地域の森林荒廃現況 (H14 年)

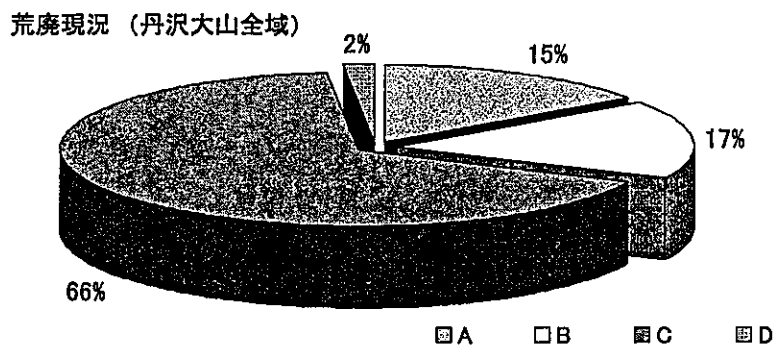


図 2.4.2 丹沢大山地域の森林荒廃現況割合 (H14 年、箇所数割合)

- 現在では人工林のみならず、緩傾斜面でのブナなどの広葉樹林が荒廃化した。特に、人工林の管理は遅れ、小規模所有者地の里山では林業離れからその荒廃が一段と進んでいる。緩傾斜面の分布の事例は図 2.3.1 に示すとおりである。
- このための強間伐実施が必要で、林地に光を届け、林床植生の繁茂を促す必要がある。ここで障害になるのがシカの存在で、シカの防止策をパッチ状に配置しながら、シカと下層植生の同居を図る試験が広域で行なわなければならない。
- 当然強間伐した材はその場での土留工に使用し、枝葉も敷き詰めて雨滴の拡散を図るような工夫が必要である。
- 以下に、緩傾斜地（傾斜 30 度未満）にある人工林の分布状況を抽出した。この地

域が循環的に人工林資源を利用できる範囲を示すと同時に、緩傾斜であってシカの害を被りやすい、また管理の遅れた地域として、緊急的な間伐が必要な地域を表すものと考えている。

【地形因子による森林区分の確定】

地形因子からの森林利用計画区域の確定にあたり 2 つの地理的分布特性図を選択した。まず人による自然介入の程度を把握するための指標として、「自然環境情報 GIS 第二版」(1:50,000/環境庁自然保護局/平成 11 年 3 月)の植生自然度図を選択した。森林利用および、国土保全、シカによる荒廃が進む林地等が図れる傾斜の指標として、「数値地図 50m メッシュ (標高)」(1:25,000/国土地理院/平成 13 年 5 月)を選択した。

植生自然度図と傾斜区分図をオーバーレイし、地形因子に基づく森林区分を確定した(図 2.4.3)。結果、6 種類に分類できた(表 2.4.2)。植林地の⑥と二次林の⑦・⑧をまず選択し、林地利用が可能またはシカの被害を被りやすい傾斜区分が 0~30° 未満である領域を、地形因子に基づく森林区分とした。この区分において緩傾斜な植林地は、13,001.6ha (27.1%) を占めていた。また、緩傾斜な二次林は 16,957.9ha (35.3%) を占めていた(表 2.4.2)。

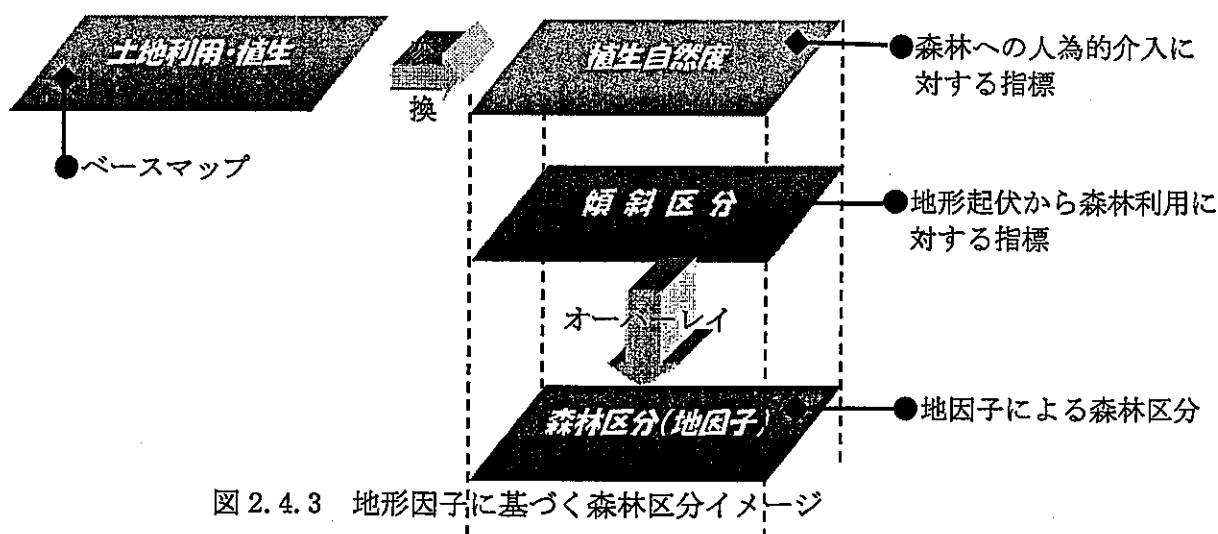


図 2.4.3 地形因子に基づく森林区分イメージ

表 2.4.2 地形因子に基づく森林区分面積

| 植生自然度 傾斜区分 | ⑥ (植林地) | ⑦・⑧ (二次林) | ⑨ (自然林) | 合計 |
|---------------|----------------------------------|----------------------------------|--------------------------------|------------------------|
| 0 ~ 30° | 緩傾斜な植林地 13,001.6ha (27.1%) | 緩傾斜な二次林 16,957.9ha (35.3%) | 緩傾斜な自然林 3,788.2ha (7.9%) | 33,747.8ha (70.3%) |
| 30° 以上 | 急傾斜な植林地 3,834.1ha (8.0%) | 急傾斜な二次林 7,977.1ha (16.6%) | 急傾斜な自然林 2,430.6ha (5.1%) | 14,241.8ha (29.7%) |
| 合計 | 16,835.7ha (35.1%) | 24,935.0ha (52.0%) | 6,218.8ha (13.0%) | 47,989.6ha (100.0%) |

- これらの荒廃林の材質について H16 年に一度も手入れのしていない森林整備を足柄上郡中井町で実施した。(施業面積 0.42ha、間伐率 42%、37 年生材、選木、伐倒、

整理)：品質については構造材、または板材として利用に耐えられるものの品質ではなかった。

- 今後神奈川県では間伐材に搬出利用を促進する計画であるが、手入れの進んでいない低品質の間伐材の生産の増加が見込まれる。2次加工としてのパルプ材、製炭材、バイオマスエネルギー材、エンジニアウッド(OSB、OSL、MDF)材のための製造設備の整備が急務である。
- 「丹沢山地のニホンジカ生息地におけるスギ・ヒノキ高齢林での間伐後4年間の下層植生の変化」(田村 淳・山根正伸：神奈川県自環保セ)による調査結果では、間伐後の光環境の改善が報告され、また徐々に林冠の閉鎖に伴って、相対光量子束密度の低減が観測されている。

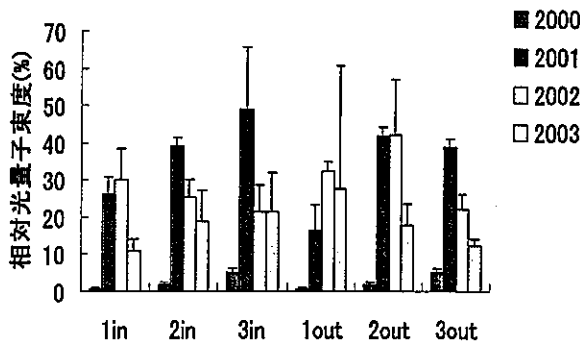


図2.4.3 3調査区の光環境の変化

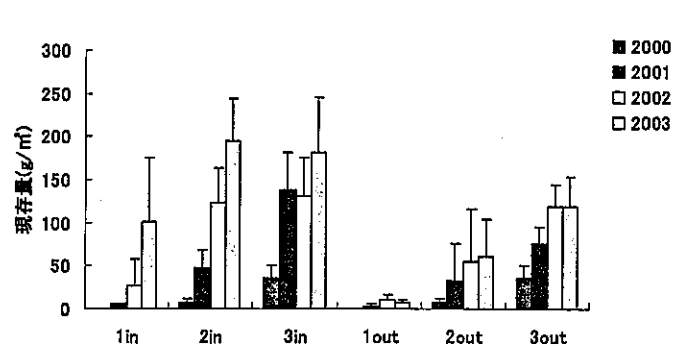


図2.4.4 3調査区の現存量の変化

- また同上調査では、シカの生息地でも間伐により下層植生現存量とシカの利用可能量は増加するが、本調査のようにシカの密度が高いところでは、柵内での年々のより一層の増加傾向が観察され、また柵内と比較して柵外では不嗜好植物の相対量が増加すると判断されている。

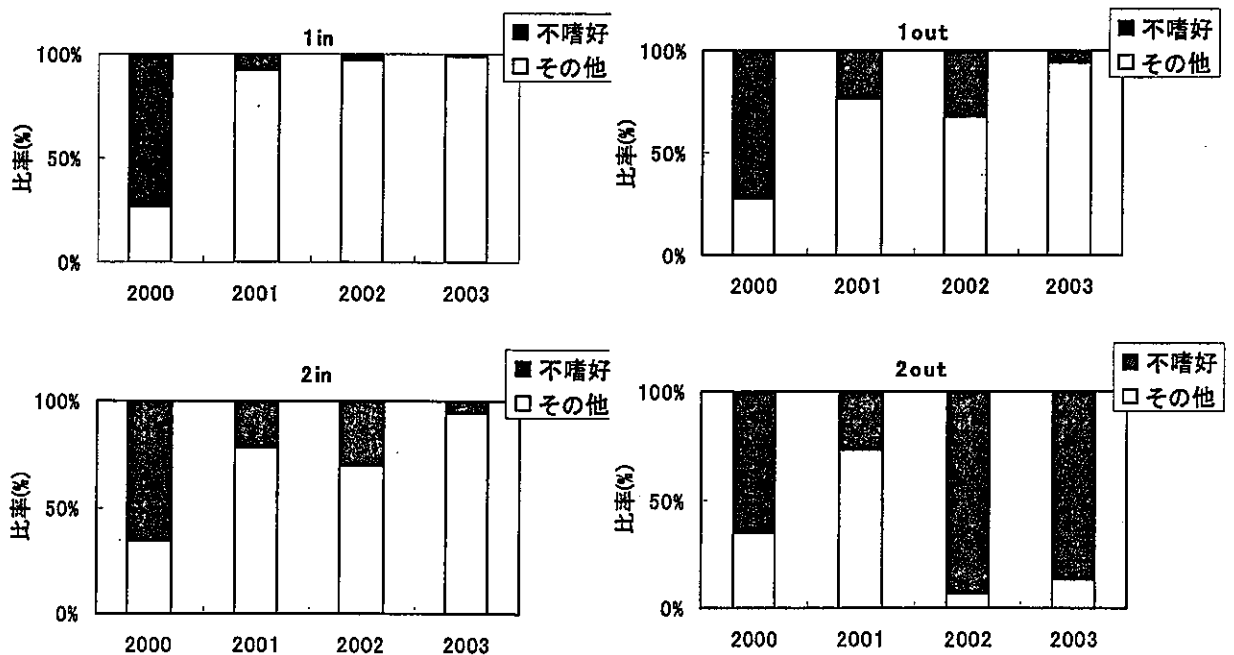


図2.4.5 各調査区における現存量の比率の変化 (不嗜好植物とその他に区分)

- 2004年砂防学会で発表された富士山南麓の人工林調査（「光量子密度による林内評価手法に関する検討」中田 慎, 小川紀一郎, 富田陽子, 小泉市朗, 阿部 聡、「適切な維持管理を視野に入れた樹林の評価に関する検討」富田陽子, 小泉市朗, 阿部 聡, 中田 慎, 小川紀一郎）によると、光環境と下層の植物種数との関係を以下のように解析している。：相対光量子密度と林床の植物種数との関係性では、コドラートの規模による統計学的に有意な差は見られないが、どちらも対数関数で示される高い相関がみられる（図2.4.6）。相対光量子密度1.0付近を境に林床に出現する植物種数が急激に増加し、それ以上の相対光量子密度のもとでは出現する植物種数に大きい差異がみられない傾向がある。このことから、林分内の相対光量子密度が1.0よりも小さくなるような管理をした場合に、林内（林床）に出現する植物種数＝多様性が著しく低くなることが予想される。

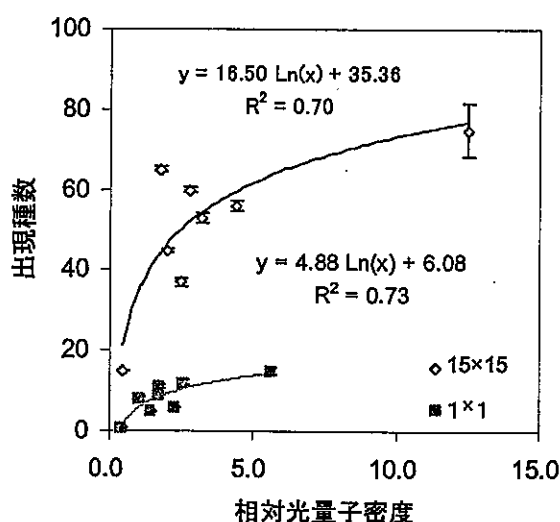


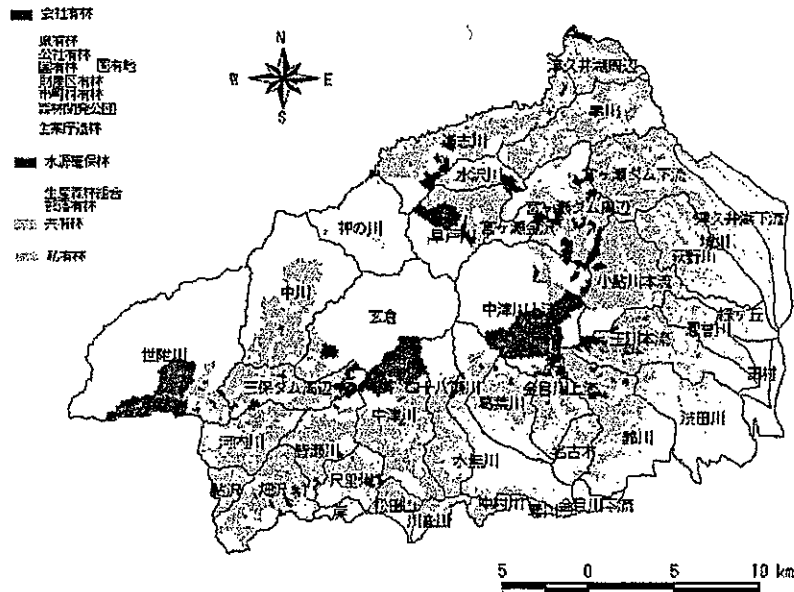
図 2.4.6 相対光量子密度と林床植物種数との関係

- 札幌県有林での調査結果（2000年）では、明治44年に植栽されたヒノキ林、ha当たりの立木本数は2,124本で、同林齢からすると350%多く、そのため平均直径も60%までしか成長していない。約90年間数度の間伐しか実行されておらず、超過密林となって、林床植物もなく、被圧された枯損木も多い。土壌流亡も激しく、そのためA₀層は0.3cmと極めて薄く、A層も20cmと薄い。ほとんどの樹木が50~100cm根上がりし、倒木も見られる。周辺のみ・ツガ林も同様で枯損・風倒木が頻発して見られる。
- また、酒匂川上流、中津川の源流である寄水源の森林での調査結果では、林冠が約20%以上開けば、下層植生の植物種数も周辺の二次林と同様の種構成を呈すことを示している。
- 以上のように、シカの生息密度の低い地域やシカ柵内では、間伐された林分では当初植物現存量が増加し、時間が経つにつれ植物種数が増加する傾向にある。周辺の二次林と同様の植物相を示せば、人工林でも生物多様性が高くなることが分かってきている。
- 荒廃林における強間伐の実行は必須条件であり、シカを避ける柵を如何に設けるか、また土壌面での雨滴浸食防止のためのA₀層の形成も必須条件であり、除間伐木をチップにして地表面を被うことも選択肢の一つとしてあげられる。

2.5 多くの私有林の所有者不明、境界不明

図 2.4.1 に所有形態を、国有、県関係公有林、水源確保林、その他公有林、私有林の分布を示した。このうち私有林は、所有者や境界が、分割その他により不確かなものが多いと考えられる。その分布は、丹沢の山麓地域にまとまっている。所有形態別の面積割合をみると、全体の6割強が公的所有形態であり境界情報が確かであることがわかる(図 2.4.2)。また、私有林は32%あり、一方、水源確保林は全体の4%とわずかで、私有林の所有者情報の確定は進んでいないことがわかる。

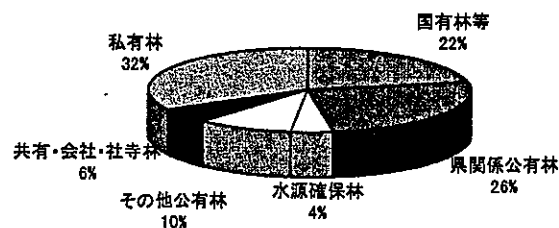
中流域別に見ると、私有林の占める割合が80%を超える流域は、10流域(境川、渋田川、田村、緑ヶ丘、恩曾川、鈴川、津久井湖下流、荻野川、宮ヶ瀬ダム下流、小鮎川本流)で、おもに里山に位置する。60%を超える流域は、4流域(津久井湖周辺、玉川本



流、串川、道志川) で山麓部地域に位置する。

図 2.5.1 丹沢大山地域の所有形態 (水源確保林は H14 年度分まで)

丹沢大山地域所有形態別面積割合



ちなみに、山北町湯触地区におけるシカ柵の設置状況はシカ柵延長距離 2,037.7m での内訳は以下のとおりである。この 2km の区間の中に所有者が 64 あり、私有林の平均所有面積は 1.6ha、最小は 99m²、最大は 11.2ha であって、山麓部の所有者の細分化の状況が伺われる。

表 2.5.1 森林所有形態別広域獣害対策（シカ柵設置）事業（山北町湯触地区）

| 所有形態 | 員数 | 面積 (m ²) |
|------------|----|----------------------|
| 山北町 | 1 | 307 |
| 山北町共和財産区 | 1 | 87,837 |
| 川西東部生産森林組合 | 1 | 194,479 |
| 私有林 | 61 | 95,996 |

2.6 まともな林業が長く行われず、補助金による保育作業が中心

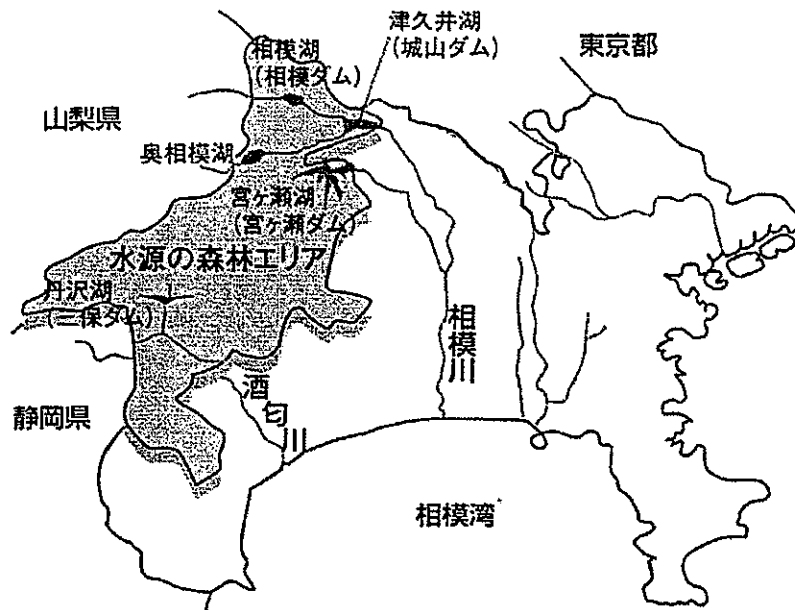
2.6.1 水源の森林づくり事業について

1) 基本的な考え方

- 水源地域の森林は、これまで木材生産などの林業活動を通じて守り育てられてきた。
- しかしながら近年、家庭燃料が薪から石油やガスに、家屋も木材中心から新建材等に変わるなど私たちの生活様式の変化や安価な外国産木材の輸入などのため、林業経営が難しくなり、手入の行き届かない森林が増えてきた。
- このままでは、木材生産機能はもとより、森林のもつ水源かん養等さまざまな公益的機能の低下が懸念されることから、神奈川県では、森林所有者等をはじめ県民・企業・団体の皆様の理解と協力のもと、水源地域の私有林の公的管理・支援を推進している。

2) 水源の森林エリア

- 水源の森林づくりは、城山ダム、宮ヶ瀬ダム及び三保ダムの上流を中心とした約 62,300ha を対象エリアとして、その中の私有林に対して公的管理・支援を行うことにより公益的機能の高い森林づくりを目指している。



① エリアの設定

- 平成9年4月1日から水源の森林づくりを進めるにあたり、事業を展開する地域を明確にするため、神奈川県治山計画区（昭和61年4月設定。以下「単位流域」という。）を単位として、次の基準1から3のいずれかに該当するものを水源の森林エリアとして設定した。その後、平成12年4月1日及び平成15年4月1日付けでエリアの見直しを行い、現在、水源の森林エリアは約62,300haとなっている。

基準1：津久井湖、相模湖、宮ヶ瀬湖、丹沢湖の上流部に位置する単位流域。

基準2：上記に該当しない地域においては、次に掲げる項目のうち3項目以上該当する単位流域。

- 神奈川県水利用図に記載されている取水源の上流部に位置する単位流域。
- 神奈川県森林機能別調査（平成元年3月）において、水源かん養機能評価ランク（5段階）が4以上の森林を有する単位流域。
- 単位流域内の森林面積に対する保安林（森林法第25条第1号、第2号または第3号に係るもの）指定面積比率が、県平均（48%）以上の単位流域。
- 水質汚濁、洪水、土砂流出等により、下流部に位置する他の市町に著しい影響を生ずるおそれのある単位流域。

基準3：基準1及び基準2において設定した地域に隣接した単位流域のうち、基準2に掲げる項目のうち2項目が該当する単位流域であって、単位流域内の森林面積に対する保安林の指定面積比率が県平均以上であって、かつ保安林指定面積に対する水源かん養保安林の指定面積比率が概ね50%以上の単位流域。

② エリアの概要

- 設定したエリアは、県内362単位流域のうち、藤野町ほか14市町村にまたがる192単位流域となっている。
- エリア内の森林面積は概ね62,344haで、このうち私有林は41,410haとなっている。
- エリア内の森林は地域の特徴から、①城山ダム流域、②宮ヶ瀬ダム流域、③三保

ダム流域、④相模川流域⑤酒匂川流域⑥表丹沢流域の6流域に区分されている。

表 2.6.1 水源の森林エリアの内訳 (単位: ha)

| 区分 | 水源の森林エリア | 城山ダム流域 | 宮ヶ瀬ダム流域 | 三保ダム流域 | 相模川流域 | 表丹沢流域 | 酒匂川流域 |
|-------|----------|--------|---------|--------|-------|-------|--------|
| 全森林面積 | 62,344 | 14,712 | 10,200 | 15,200 | 3,155 | 3,000 | 16,077 |
| 国・公有林 | 20,934 | 2,167 | 3,400 | 10,700 | 384 | 600 | 3,683 |
| 私有林 | 41,410 | 12,545 | 6,800 | 4,500 | 2,771 | 2,400 | 12,394 |

3) 森林づくりの4つの手法

水源の森林づくりでは、森林所有者の理解・協力のもと、4つの手法で私有林の公的
管理・支援を行っている。

表 2.6.2 水源の森林づくりの4つの手法

| | |
|-------|---------------------------------|
| 協力協約 | 森林所有者が行う森林整備の経費の一部を助成する。 |
| 水源協定林 | 森林所有者との協定(借り上げなど)により森林を整備する。 |
| 水源分収林 | 森林所有者との分収契約により森林を整備する。 |
| 買取り | 貴重な森林や水源地域の保全上重要な森林を買入れ、保全整備する。 |

4) 水源の森林づくり進捗状況(平成15年度までの実績)

- 森林のもつ水源かん養機能などの維持向上をめざして、平成9年度から始まった「**かながわ水源の森林づくり**」事業は、この4月で8年目を迎えた。水源の森林づくり事業では、水源地域の私有林を確保事業(水源分収林、水源協定林(森林の借上げなど)、買取り、協力協約(森林整備に対する補助)により、水源林として確保し、整備している。

5) 水源林として確保した面積

平成9~15年度の7か年で確保した森林は、5,564haで計画全体(28,900ha)に対して19.3%の進捗率となっている。平成10年の確保事業で817haと突出しているのは、寄水源の森の買取りである。

表 2.6.3 確保森林面積

| 年 度 | H9 | H10 | H11 | H12 | H13 | H14 | H15 | 合 計 |
|------------|-----|-------|-----|-----|-----|------|-----|-------|
| 確保面積(ha) | 872 | 1,261 | 779 | 692 | 684 | 629 | 648 | 5,564 |
| 内、確保事業(ha) | 565 | 817 | 506 | 435 | 464 | 433 | 439 | 3,661 |
| 内、協力協約(ha) | 300 | 188 | 255 | 245 | 217 | 195 | 208 | 1,608 |
| 内、寄附(ha) | 7 | 255 | 18 | 12 | 2 | -0.1 | 1 | 295 |

6) 水源林として整備した面積

平成9～15年度の7か年で整備した森林は4,487haで、確保した森林(5,564ha)に対して80.6%の整備率となっている。

表 2.6.4 整備森林面積

| 年度 | H9 | H10 | H11 | H12 | H13 | H14 | H15 | 合計 |
|----------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 整備面積 (ha) | 283 | 332 | 506 | 766 | 788 | 982 | 828 | 4,487 |
| 内、確保 森林 (ha) | 69 | 146 | 213 | 403 | 505 | 629 | 448 | 2,412 |
| 内、協力 協約森林 (ha) | 215 | 186 | 294 | 363 | 283 | 353 | 381 | 2,075 |

表 2.6.4 平成16年度予算(特別会計)

| 区分 | 事業名 | 予算額 (千円) | 事業内容等 | 備考 |
|------------------------|-----------------|-------------|--|---|
| 水源林 づくり 事業 会計 | 水源林整備推進 事業費 | 2,722 | ・県内産の優良な種苗の育成確保 | |
| | 県民運動推進事 業費 | 3,109 | ・体験型イベントの実施や各種広報媒体を活用した事業のPR | |
| | 水源林確保事業 費 | 853,851 | ・「水源林確保推進員」の配置 ・水源林の確保整備を円滑に行うための事前調査等 ・水源地域の私有林において、水源分収林、水源協定林及び買入れを行い、整備対象森林を確保する | 候補地事前調査 941ha 水源分収林 50ha 水源協定林 343ha 買取り 36ha 確保合計 429ha |
| | 水源林整備事業 費 | 463,188 | ・水源分収林、水源協定林等で確保した森林の整備 ・協力協約を締結した森林の整備に対する助成 | 確保森林の整備 320ha 協力協約の締結 221ha 協力協約整備への助成 454ha |
| | 水源地域森林整 備事業費 | 85,453 | ・国の補助事業を導入し、確保した森林の整備 | 確保森林の整備 18ha 「やどりき水源林」 の整備 42ha |
| | 県土開発公社償 還金 | 130,397 | ・県土地開発公社資金で取得した「やどりき水源林」の償還金 | |
| 事業費計 | | 1,538,720 | 水道事業会計からの充当 500,000千円 | |

2.6.2 一般林業・地域林業としての補助等(森づくりの支援制度)
林業に対するさまざまな制度がある。ここでは、代表的な制度を紹介する。

- 自然保護奨励金：300,000 千円（昭和 49 年から 1 万円/ha、財産区、共用林の活動に使用。固定資産税相当分。平成 16 年度は私有林 1.2 万円/ha、計 3,400 万円）
- 緑をつくる基本構想（昭和 49 年）→トラスト基金（昭和 60 年）→かながわ森林基金（平成 2 年より。平成 16 年現在 71 億円）
- 森林プラン（平成 6 年）→水源の森林づくり事業（平成 9 年）：森林行政の大転換の契機
- 林業改善資金予算（特別会計）：30,000 千円（16 年度）
- 造林補助金：丹沢地域には約 15 億と推定（要確認）？
- 県林道整備、市町村林道に補助金
- 水源環境税：バラまきか？
- かながわ木づかい運動：県民に対する木材消費を喚起する運動

表 2.6.5 森林整備等補助制度（一部）

| 制度名 | 内容 |
|--------------------------------|---|
| 林業改善資金 | <p>森林所有者等が林業経営の改善を図るために、新たに機械を購入したり、間伐などの森林整備をしたり、研修等を受講する際に必要な資金を貸し付けします。</p> <p>○貸し付け条件</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象者 森林所有者、林業事業者、きのこ生産者等 ・貸付利率 無利子 ・貸付期間 3～15年間 |
| 造林補助金 | <p>森林資源を計画的に整備・充実するために、森林所有者等の行う植栽から保育までの作業に補助金を交付しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象となる作業 植林、下刈り、枝打ち、除伐・間伐等 ・補助率 4/10～5/10 ・対象となる森林 林齢や面積などの制限があります |
| 間伐材1本搬出運動 | <p>間伐材の搬出を促進するため、神奈川県森林組合連合会林業センターにおいて、間伐材を1本から買い取ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集荷場所 県森連林業センター（秦野市菖蒲317 TEL0463-88-6767） ・搬入日時 祝祭日、土曜、日曜を除く9:00から16:00 ・搬入方法 自力で搬入（事前に電話すると受け入れがスムーズです。） ・買取り価格 市場価格を参考にしています。 <p><参考>ヒノキ 長さ4m末口10cm 370～530円(平成11年9月現在)</p> |
| ボランティア活動支援 「森林の整備活動支援事業助成金」 | <p>森林ボランティア活動を行う団体を支援します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助成の対象となる活動 <p>森林ボランティア活動に参加する者を広く募集して行う森林整備活動(植え付け、下刈り、間伐等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問い合わせ先 (社)国土緑化推進機構 |

- 県の平成 13 年度の間伐実施成績は、実施面積 949ha、間伐材利用 3,136 m³である。県では神奈川県の間伐の利用促進を重点課題としている。
- また、法改正による林業事業者、NPO が森林整備の担い手に参加できることになり、H17 年度に向けて事業者による事業説明会を開催することになった。しかし、これらの間伐情報

を一元的に管理するシステムの整備が必要となっている。

2.6.3 丹沢地域での緊急を要する間伐に関わる経費

- 丹沢大山地域における人工林の面積を 17,000ha と推定し、県全体の林齢構成を持つと仮定し、主伐期を 80 年として収穫コスト等を計算した (表 2.6.7)。ただし、全山が利用でき、材を収穫するという理想的状況を前提としている。
- その結果、調整伐費・利用間伐費は 10 年間合計で 14 億円、年間 1.5 億円と見積もられ、総収穫の年間コストは約 8 億円と見積もられる。
- 丹沢大山地域の森林・林業に係る経費は県の予算で約 30 億円と推定されるため、適正林業を推進するには十分な予算配分となっており、反対に非効率的な予算消化が浮かび出る。
- ただ、現場発生木材のうち調整伐材を土壌侵食防止などに使用し、土留め柵の設置に使うとなれば、新たに年間 4 億円の増加となる (「間伐材の土留め柵の利用量推定と費用の算定」増谷、2005)。

表 2.6.7 丹沢大山収穫コスト概算予測 (10 年間)

| | | | |
|------------|-----------|-----------|-------------------|
| 面積 (ha) | 17,000 | 費 目 | 千円/ha |
| 下刈り費 | 271,087 | 地ごしらえ費 | 300 |
| 枝打ち費 | 1,959,693 | 植林費 | 700 |
| 調整伐対象面積 | 7,449 | 下刈り費 | 100 |
| 調整伐費 | 1,117,416 | 枝打ち費 | 300 |
| 利用間伐対象面積 | 10,048 | 調整伐・利用間伐費 | 150 |
| 利用間伐費 | 272,410 | 費 目 | 千円/m ³ |
| 調整伐・利用間伐材積 | 305,836 | 山出し費 | 7.5 |
| 山出し費 | 2,293,769 | 搬出費 | 0.6 |
| 運搬費 | 183,502 | | |
| 新植面積 | 1,637 | | |
| 地ごしらえ費 | 491,099 | | |
| 植林費 | 1,145,897 | | |
| 木質収穫コスト合計 | 7,734,872 | | |
| 木質収穫年間コスト | 773,487 | | |

前提条件：

- ①主伐期を 80 年生
- ②30 年生から利用間伐 (間伐材を木材として利用)
- ③30 年までの調整伐 (除間伐) 材と 30 年生以降の端材をバイオマスエネルギーに利用
- ④外材は使用しない
- ⑤現在の人工林のうち、15%を広葉樹に 40 年間で転換 (FSC のバッファゾーン形成、国の環境ゾーニング指針)
- ⑥林齢構成の平準化を行い、循環材の安定供給を目指す
- ⑦天然林 (広葉樹林) の収穫は当面考えない
- ⑧本数調整伐・利用間伐のとも間伐率は材積比 10%
- ⑨間伐は 80 年生まで実施
- ⑩主伐後は速やかに再植林、10 年間 400ha を維持 (人工林面積 * 0.85 * 10 / 80)

- ⑭端材率は立木材積の45%（原木生産～製材工程まで）
- ⑮樹木1m³当たりの重量は700kg（森林総合研究所材質研究室調べ）
- ⑯主伐など木材利用コストは考えない。新植費は林業の継続の観点からここに入れた。
- ⑰下刈りは10年生まで8回、枝打ちは10年生、15年生、20年生、30年生の4回
- ⑱除伐・間伐は調整伐・利用間伐に
- ⑲搬出費は丹沢山地から秦野市までの費用

2.7 山側からの生産が安定せず、川下側も使いづらい

- 丹沢山地では、県を主とする造林補助金及び水源の森林協力協約等公的な森林整備に限られ、それも捨て切り間伐などの保育に集中し、生産量も5,000m³もない。生産は主に県有林で行われ、製材所へ直接搬入することなど流通の簡素化も図られているが、安定的に供給できずに、川下との連携も薄い。
- 川下に木材の一大消費地を抱えながら、県産木材の自給率は0.6%と極めて微量な消費に留まっている。

表 2.7.1 県産木材自給率

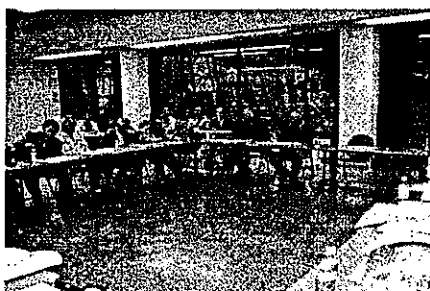
| 素材生産量 (人工林) | 県内製材工場 入荷量 | 県内製材工場 出荷量 (A) | 県内需要量 (B) | 県産材 自給率 (A/B) |
|---------------------|----------------------|----------------------|------------------------|---------------------|
| 8,000m ³ | 6,000 m ³ | 3,200 m ³ | 539,000 m ³ | 0.6% |

- 川上と川下との不連続な関係を改善すべく、県と県森連で組織する「かながわ森林・木材業活性化協議会」が平成7年8月設立され、「かながわ県産木材産地認証制度」が生産、加工、消費の各段階の事業者等を対象に産地認証によって県産材の利用促進を図っている。
- また、「地域再生・なりわいグループ」でも、川上から川下までの関係者全てを包含する組織の立ち上げが必要として、「循環型森林資源活用フォーラム」を開き関係者からの意見を伺った。以下に主な意見を示す。

- このような会議に森林所有者の参加が少ないのは、森林所有者の心を動かすようなものがないからである。
- 一本一本個性を大切に育て方…例) オーナー制。→多様なメニューのある森づくりが重要。
- おじいさんの代では、冬場に木を売って、夏場なんにもせずに農業をやってそれで食べていた。昭和40年代の前半からはだめになった。もうからなくなったので手を入れられなくなった。工務店、建具屋、製材、みんなある程度儲かっているのに所有者だけ儲かっている。儲かればもうちょっとなんとかなる。
- 伐採後に植林をしているが、あとの手入れをしていないせいか、土壌が荒れているせいか、木が育っていない。そのためか、雨がふるとにごった水がそういうところから出てきている。
- 5年くらいまえから地元の若い人に素材生産の仕事を教えていこうということで雇いはじめているが、なかなか定着しないというのが現実。
- 人の目につく里に近いところからやっていくべきだ。群馬では集落から300m以

上離れたところ無視していこうという話になっている。三重県のゾーニングもそのような考え方だ。村道沿いだけ。すべてを管理するというのは無理である。やる気のあるところ、目につくところ。

- 子供のころは薪炭をつくっていた。所有者自身、山の堺が分からないという人がほとんどになっていることが心配。
- 里山は本来の機能を持たせるために、もう少し間伐をしないといけない。広葉樹で県産材ということを考えていく必要もあるのではないだろうか。
- 国産材無垢の材料（田辺産材直接入荷）、自然素材 100%で家を建てている。国産材、無垢材、自然素材を使える工務店は少ない。坪単価も 52 万円でやっている。活動というか経営の中で、ユーザー教育が重要だと感じている。丹沢にどうい木があるかも一般の消費者は知らない。そのため消費者向けのセミナーを月 1 回やって、本物がどういうものかを知っていただくようにしている。年間 20 棟くらいしかできていないが。それでも、お客さまを不幸にするような、不健康にするような家をつくらないようにするという使命感をもってやっている。
- ルートができていれば工務店としては利用しやすい。安定的、継続的に取引ができないと困る。
- 丹沢の木を 96%使った家を建てた。構造材 100%で地場産材（一部箱根）を使って年間 20~25 棟立てている。(700~800m³ 県有林から入手) 700m³ほど地場材をつかっている。県森連の林業センターから購入しているものが多い。昭和 64 年に木材加工、乾燥機等を補助金なしで導入している。製材から一貫生産している。平成 13 年林野庁長官賞を、経営合理化ということでもらった。
- 技術のある山師、大工等の技術者がいない。
- 「職人」と書いて「つくりて宣言」という雑誌をつくった。魅力的な家をいかにして供給するかということが大事。いいものを安くということをやめないといけないと考えている。質の高い住宅をたてて、デザインで付加価値を高めようとしている。



17 名の参加者のみなさんがテーブルを囲んで、自己紹介と意見交換を行いました。

- なお、山田純氏（国民森林会議常任幹事）は生産から消費に関わる流通問題を中心に次のような課題と提案を行っている。

【神奈川の森林・林業をめぐる問題について】

- 今後とも需要の大きさと持続可能な生産との接点を考えると、建材部門においても一定量の輸入は避けられない。外材の適切・適正な利用のほか、競合を避け、すみわけを探ることが必要である。

① 先進林業地－後発林業地間の格差と後発林業地の森林整備

- 神奈川では、森林の総合調査の上で、林分の発達段階論に立って、地域ごとに目標林型を設定した森林計画を作成する必要がある。その中で、目標林型を転換し、水土保持や生物多様性といった公益性の高い森林（老齢段階の天然要素の高い林型）にもっていくものについては、そのための経費（初期投資は高くなるが、その後は天然性が高くなるので低くなる。恒常的は林業収入としては今のところ期待できない）を社会的に支出し、
- 木材生産を目的としたものでも一定の公益性の確保に努めるものは、協力協約なども利用して積極的な整備を図る一方、法的な措置に困難は伴うとしても、森林整備制度の充実にもかかわらずなお公益性の保全に努めず、必要な手入れを放棄しているような森林については強力な措置の導入を検討しなければならない段階に入ってきている。
- 生物多様性を目的とした人工林の設営や木材生産林の中でのそのような森林の配置も考えられるからである。

② 資源政策から経営政策へ－途上国型の遅れた産業構造からの転換

- 未だに低賃金労働とモノカルチャー的素材生産に傾斜している面が強い。杉・檜といった商品価値の高い種の少品種大量単純生産に特化し、また経営の力点を付加価値の上昇の側におかず、労賃など生産コストの抑制の側に置こうとする面が強いのである。
- 経営基盤の統合拡大と高性能機械の導入といった側面に特化していて、付加価値の上昇や上下流一体化による所得還元には余り目を向けるものにはなっていない。
- これからは、難局にありながら、保全と生産と経営が即応し、密着一体となった事業体を形成し、高度な技術に基づく付加価値の高い生産を開拓していく必要がある。そしておそらくそれは、通常の前後関係を捨象した、品物としての接点だけで生産と消費がつながるような市場的流通形態とは異なって、文化や持続という判断の文脈でつながるような新しい流通形態を通じて実現されるであろう。

③ 生産と利用の相互呼応における新しい循環を

- これまで林業者は生産した木材がどのように流通し、利用されるかを見ることはなかった。他方、建築設計関係者も最終消費者も、木材がどのように生産され、それが山村や環境にどのような影響を与えているかを知ることにはなかった。
- 時代は持続と循環、炭素の長期固定が必要な時代となっていた。カスケード型に長期にわたって素材の活用を図るには、木材としてのよさやエネルギー投入の少ない地域材、無垢材の利用がまず筆頭に位置づけられる必要がある。
- タグ化する場合には、その過程を流通業者が支配するのではなく、透明でも公正なものにしていく必要がある。デザインは林業者にとっても消費者にとっても双方にとって決定的に重要なものとして位置づけられる必要がある。
- アートと感性にも優れた職人の存在あるいは職人相互のコラボレーションが欠かせ

ない。100年というような長期仕様を考えるときには、補修が欠かせないが、そこにも職人が必要である。これらは生産労働と生産手段の所有が一致する小規模のマニユファクチャー部門を社会の中に残していくことを意味する。

- 自然と向かい合う林業や森林管理の側でも、日本的な保全と生産の調整を考えたときには、日本のエコシステムマネジメントなどを創造し、駆使できる新しい技術者が必要になっている。
- 近い将来、拡大造林の人工林が一斉に伐期を迎える中、長伐期化が避けられない現況では、木材利用率の高い工法や大径材の利用ルートを開拓しておく必要がある。

④ エコシステムマネジメントと野生動物の管理

- 強度の間伐を通じて、計画に沿ったそれぞれの目標林型を実現していくにしても、現在は野生生物の存在、特にシカによる食害などは無視できない阻害要因になってきている。
- 狩猟や捕獲など当面、個体数の調整は不可避な状況があるが、長期的にはどのような林分配置を図るのか、森林の育成と野生生物の生息地の保全・管理とはどのように整合性を持たせていくのかが問われている。
- 森林が暮らしや生育の場所、生業の場所として重要になり、人の山へのかかわりが増えていくことが、バッファの拡大になる。まず、森林への参入については、森林(林間)都市、ペンション、山の素材を加工して多様な製品を作り出す工芸村の設営などが考えられる。
- また、森林の農業的な利用を考えるのもよいだろう。退職を迎える団塊の世代は村から出た世代だが、かつての農業を知っていて、土地さえあればそこで何かを作りたいとも考えている世代でもある。银杏の栽培、団栗を利用した豚の林冠放牧(混牧林)アオキなど未利用樹種の植木利用などが考えられる。藍その他の葉は、衣類や繊維を明礬で処理しておけば直接叩き染めが出来る。
- シカのような草食動物については、狼がいない今、人間が食べることで頭数制御をするのも一法であろう。杉の人工林の中で冬越しをするカメムシについては、果樹園との間に広葉樹林を配置することが必要である。

⑤ 長伐期施業その他補足的な注意の必要なものについて

- 手入れが遅れ、モヤシ林となっている森林を放置し続けた場合、どういう展開を辿るのかについても、実証的な研究が必要である。また、強度の間伐によりどのような天然更新が期待できるのかについても地域ごとの実証データの積み上げが必要である。その他木材供給技術としての乾燥の問題、新月伐採など貧栄養状態での伐採方法なども。

【森作りと家作りー「かながわ職人の森」のコンセプト】

- 40～50年生ぐらいになっての切り捨て間伐は如何にももったいないと感ぜられても、山への栄養還元や土砂流出に対する防備になりうると考えて、従来通り肯定していくほかない。ただし今後、後述するような、間伐材による家具づくりなど付加価値の高い利用との一体化が進めば、その分間伐材についての経済的評価が変わり、出材利用されるものが増えるという関係にある。

① 木材価格の再建

a 下流でのコスト吸収を前提とした再生産可能な木材価格の優先設定

- 再生産可能な木材価格を設定し、それによる最終木材購入費の、合理化を進めた上でもなお残る増加分については、消費者と行政都で吸収するという考え方。仮に木材価格を優先させて m^3 1万円とし、使用木材量を一軒当たり $25m^3$ とした場合の試算では、

木材価格の上昇は、1.4倍ほど。建築総費用に占める木材費の割合は低いので、価格にして100万円ほどとなるが、合理化できる部分を70%、残りを折半とすれば、消費者の負担増は実質15万円に収まるという試算が稲木清貴氏によりなされている。

b 建築主体や建築環境などの条件整備

- 木材価格を直接変更するのではなく、現在の価格でも、あるいは多少高くなっても、それを受け入れられるような条件を整備していくことが大切だという考え方。
- 例えば、家の中に何でも揃えようとしなくても、公共施設や共のフィールドを充実させることにより、基本的な住宅面積は狭くても、必要な機能は十分に確保できるようにすることも大切である。核家族ではないのに核家族仕様の家をあてがうというのではなく、コーポラティブ・生活協同化で考えていくことも必要である。
- また、室内の用途を固定する必要がないならば、和の伝統に立ち返って、畳・押入れ・納戸・ポータブル家具や什器・建具などによって幾通りもの仕様を可能にすることで、室数や面積に制限はあっても、全体として多様性や機能性を高めていくということも必要である。
- 中古で使いやすく、質も保たれていて、補修もしやすいような、家作りを進める一方、中古市場を膨らませ、建設費の回収が図れるようにしていくことも必要である。季節や時期を定めて、相互に交換していくようなシステムを導入することも考えられて良いだろう。

c 高度なデザイン・技術を前提とした地域一体性による付加価値の山元への還元

- 木材の生産側は利用側（デザイン）の求めている材を効率よく生産し、最終デザイン側は、消費者が十分満足できる品物にしたうえでそれに見合う価格を上乗せする。生じた付加価値を再生産のために山元に還元するという仕組みである。
- 十分な機能性と合理性を有していることや使用性のよさのほか、長期的耐久性、飽きのこないデザイン、愛着性、そして美しいことがデザインに求められる中身である。何を自分の住宅に求めるか、求めないかという問題に際しての思想の軸がしっかりしていることもデザインの決定には欠かせない。

d 下流（利用法）の整備と林業商品像の再建

- 木材価格を再建するには利用過程を再建することが大切で、そのことにより、最終製品段階での付加価値の増大とは別に、素材としての付加価値の高い林業商品像をもう一度明確にすることが必要である。
- 付加価値の高い林業商品が再建できれば、その分コスト吸収能は高まり、生産規模が小さくても対応可能性が高くなる。いたずらに零細林家を糾合して、規模の拡大や高性能機械の導入に努めなくても済むし、生物多様性との折り合いもつけやすくなるのである。

② 山のデザインと家などへの利用

- 神奈川のように林道の整備率が進んでいないところでは、少々極端に言えば、経済的見通しの立たない生産（搬出）は避け、水源の森など環境機能を重視した森作りが進められる。強度の間伐（間伐材の有効利用には力を入れつつも、切り捨て間伐も積極的に位置づける）と天然更新を重視した複層林施業の結果、齢級構成の偏りが減って、老齢林の分布が拡大していく。徐々に老齢樹の混じった美しい賑わいの森が回復していくが、その間、林道の建設速度は下がりゆっくりとその後の利用にそなえていくことになる代わりに散策路などの整備率は高まって、局所へのオーバーユースの問題は緩和される。
- この場合の新しい利用の形成とは、針広両様にわたる中・大径材の利用と多様性利用との二つになる。大径材利用としては、幅広の厚板の床や屋根材としての利用（中で

も比較的見栄えの良いものは内装材としての利用)、6、7寸材の柱角や桁梁での利用(金具に頼らない接合法)、丸太では表わしによる化粧材としての利用などが考えられる。特に、150年以上大径老齢樹材については、針葉樹老齢材の利用に特性のある建具での利用とか広葉樹老齢材の利用に特徴のある家具材での利用が追求されることになるだろう。

- 市場への単木の大量供給を無いようとした付加価値の低い生産は、神奈川の林業のたどる方向ではない。広大な消費者の存在を視野にしっかりと入れて、山元への還元が可能な、付加価値の高い利用(技術的文化的価値の高い生産)と一体になった林業がめざすべき方向であろう。
- 間伐材等利用できる材の利用に努めることはもちろんである。その点、板倉構法は間伐材や中・大径材の利用性という点で数寄屋より優れ、木造建築のめざすべき一方向として位置づける必要がある。



板倉構法による本格木造住宅

③ 顧客とデザイン——発祥過程の正常化

- 少なくとも自分がどういうものを求めているのか大まかにはイメージできている状態を作り出すことは、顧客にとっても、作り手にとっても重要である。その状態になって初めて本当の意味でのデザインの具体化が開始でき、発注の基礎が成立するからである。
- 現在のようなメーカーが事実上のデザインの発注元となっていて、顧客がデザインの発注元でない状態で発注があるというのは不正常な状態であり、不満の残る家作りの原因となる。デザインの発注者はあくまで顧客でなければならない。デザインの源は発注になければならない。
- 職人たちがデザイン性を身に着け、あるいはデザイナーとのつながりを持ち、顧客との対話の中から、技能や技術を発揮しながらものを創造する仕事がどれほど魅力に満ちたものかを多くの人々に見てもらえることができれば、顧客からの発注はメーカーでなく、求めるものを実際に作り出すデザイナー、職人あるいは作り手に向かうことになる。仕事の具体化が、顧客+デザイナー+職人+部材などのメーカー+素材供給

者の順序で広がっていくことが重要である。

- さまざまな教育・学習機会を利用した後に、顧客とデザイナー（性格にはデザインコンサルタント）が対話しながら、デザインを具体化していき、ほぼ具体化された段階で職人が参加し、試作・協議することでほぼ最終デザインが決定されるという過程を定着させる必要がある。また、経済性よりもデザイナーや職人の自発性を重視する、まさに施主といえるような顧客が求められる。この過程を前進させるためには、写真・文献資料のほか、展示・体験施設や模型・試作品などが必要になる。
- 「職人の森」は、メーカーからは独立したデザインセンターである。つまり、生活やデザインなどの学習機会を一般の顧客に提供し、また多くの優秀なデザイナーと契約し、デザインの具体化に努める機関である。ここでは、デザインのさらなる具体化の段階で、特に重要な箇所は職人につなぐことになる。具体化すると、部材メーカーが決定される。この段階では、職人とメーカーがコラボレーションされることになる。「職人の森」がコラボレーションセンターでもあるというのは、そういう理由からである。現状の不正常な発注過程を本来の正常な発注過程へと転換する機能をもつのである。

④ スtockヤードの重要性

- 個別ではストックの難しい素材については、法人側でストックヤードをもち、普段からストックに努めることにし、職人たちが素材準備に忙殺されいい仕事ができないということのないようにしておくことも使命である。ストックは需要調整の役割も持ち、「職人の森」の側が、紹介契約者などからの要望量と合わせて、全体的な購入見通しを立て、それをもとに作成した購入予定表を素材生産者、森林組合・林家などに予め年次単位で提示し、その中で責任のもてる最低限の単価と数量を確定していくことで、安定した供給体制が組めるようにしていくことも肝要である。

⑤ 職人の森の使命

- 「職人の森」の公的な使命の中には、7つぐらいのコンセプトが含まれる。省エネ（低エネルギー）、クリーン（環境を汚染せず、自然生態系の循環に馴染む）、再生可能（資源持続性）、リサイクル（木材なら無垢の利用を優先する）、長期耐久性（ものを百年以上もつようにすること、そこに社会的職人が必要になる根拠がある）、地域関係性（地域の多様な自然的資源をもとにして地域社会を豊に維持していくこと）、そして顧客との直接性（社会の要請を踏まえたうえで、顧客個人からの発注されたデザインだ、実現するように関係者の中でドラマが進むこと。それぞれの人間の精神性に深く関わる行為となる。）などである。

2.8 利用可能なバイオマス資源も不足

- 林道密度も公道を除いて6.3m/haと低く、市町村道に至っては維持管理がされていないものも多くなり、さらに荒廃した森林の増加などを受けて、やや豊富な賦存量に比して利用可能量は微小なものとなっている。これは、林業の基盤整備が遅れているためである。
- また、製材所がここ5年間で半減したこともあり、製材廃材量も少なく、木質バイオマス利用資源も圧倒的に不足しているといわざるを得ない。1997年の製材工場数は107であったが、2002年には60に減り、素材入荷量も44千m³から18千m³と激減している。神奈川県は全国的にみても衰退速度が極めて速い。
- 製材所廃材のうち発生量の多いものは、背板類、オガ粉、樹皮の3種類である。この中で背板の発生量が最も多いが、農家やキャンプ場で薪として有償、無償提供される

ものが多い。オガ粉は家畜敷料として商品価値があり、約 2,500 円/t で畜産農家に販売されることが多い。樹皮はほとんど利用されなく、焼却か産業廃棄物として処分されている。木質ペレットを安定的に生産する規模にもない。

- 以下に、林道や公道から片幅 200m までの接道部の森林を対象とした木質バイオマス賦存量を森林基本図（1：5,000/神奈川県/平成 15 年）と森林簿（神奈川県/平成 15 年）を採用し GIS により重ねあわせにより求めた。

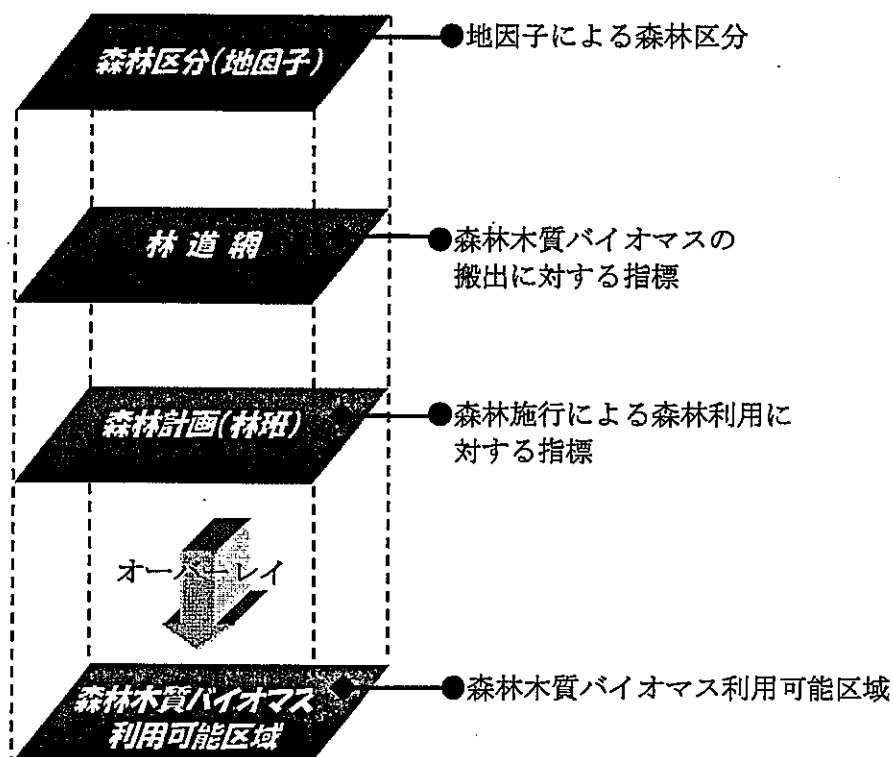


図 2.8.1 森林木質バイオマス賦存量の算定イメージ

表 2.8.1 丹沢地域における木質バイオマス賦存量

| 接道部森林面積 | 蓄積 | 成長量 |
|----------|-------------------------|-------------------------|
| 18,470ha | 3,936,000m ³ | 75,752m ³ /年 |

- ただし、これらの木質バイオマス賦存量は、実際に私有林の境界不明、林道の荒廃、収穫コスト高などで多くが利用できない状況で、バイオマス利用可能量は少ない。津久井地区で実際に搬出できるか実証実験を行った結果（須藤・佐藤・前野）では以下のように、利用の困難性を述べている。
 - 丹沢全体として地形が急峻であるために物理的に引き出しが不可能。
 - 木材生産がほとんどないため、副産物としてのバイオマスが出ない。

- その背景として：
 - ① 林業従事者が減った。
 - ② 構造不況業種化
 - ③ 都市部が近いがゆえの労働力流出
 - ④ 雑木林については協力協約の条件が針葉樹より厳しいこともあって管理が手薄になっている。
 - ⑤ 林道が荒廃して引き出しにくい。
 - ⑥ 私有林の所有者が不明のまま荒廃した場所も増えている。
 - ⑦ 昭和62年の雪害のときに、林道から200mほどの地域で材を引き出した地域がある。材を出したところに再植林した結果、森林の奥が高樹齢で林道沿いが若齢という複層林の状態になっているところがある。
- これらの問題の解決方法として、近場で炭にして、熱源だけでなく、その複合的な利用を提案している。
 - 炭焼きをエコツアーの一環としてプログラムに組み込む。
 - 丹沢の溪流を利用して水車小屋をかける。この小屋に石臼を設置して炭を粉に挽く。
 - 水車小屋の設置には国土交通省の許認可が必要と思われるが、場合によっては「水車特区」を申請して規制緩和をはかる。
 - 粉炭は住宅の調湿材として県産材とパッケージにして販売する。またシャンプーや石鹸その他の用途としても利用をはかる。
 - 水車に関しては、これもエコツアーや環境学習、地域交流の場とする。

2.9 林業の担い手育成がますます困難に

- まともな林業が行われない地域で、首都圏に直結した地域では林業の担い手はますます少なくなっているのも当然の現象である。地域に根ざす生業の再生が軌道に乗らない限り、また森林再生に集中的な投資がない限り、若者の職場としての山林を提供できない状況となっている。
- 津久井地区で林業を生業としている(有)サトウ草木(佐藤好延)の報告によると、林業担い手問題とその背景を次のように説明している。
 - 林業労働者育成における問題
 - (1) 通年仕事量が確保できず、倒産や経営規模の縮小等の企業多い。また、他産業の入札における参入も多く、従来の森林企業を圧迫している。
 - (2) 労働の厳しさや危険面から、新規労働力の育成が難しい。
 - (3) 上記(2)を解決するため、給料、休暇等の処遇の改善は困難。
 - 地域における問題
 - (1) 従来の兼業の生活基盤(林業、農業、その他の産業)が崩壊している。
 - (2) 少子高齢化に伴う山里離れ等、集落の過疎化が進んでいる。
 - (3) 長引く林業不況の中で、地域、森林所有者が林業にかける希望や熱意を失っている。
 - 素材生産における問題
 - (1) 地底が急峻であり、集材コストがかかる。
 - (2) 森林所有面積が小さく、高性能機械等の使用が難しく集材コストがかかる。
 - (3) 木材市場が遠く、運搬コストがかかる。
 - (4) 地元における加工体制(製材、工務店等)が崩壊している。

- (5) 林道等の路網の整備が遅れている。(町、森林組合管理の林道の未整備多い)
- 私有林における問題
 - (1) 長引く林業不振による山離れから境界の不明が多い。
 - (2) 林業不振による山への意識離れが顕著である。
 - (3) 相続による山の細分化や不在山主も多い。
 - (4) 整備は補助金を主体としたもので他の整備はほとんどなく、素材生産は伴わない。また、行ったとしても、山主の還元までには至らない。
 - (5) 所有面積が小さく、急峻な地形が多い。素材生産の効率性悪い。また、路網の整備は困難。
 - (6) 従来の森林組合の機能が発揮されず、組合員の山は荒廃。

2.10 数多いボランティアも個々に活動

- 都市民の中から自然志向派が生れてきており、森林に関するボランティアも数多くなっている。しかしながら、各グループは個々のフィールドと仲間に執着し、横断的な取組みまでに発展していない。特に、林業の担い手としてボランティアの参画をどう求めるかは、これからの仕掛け次第である。

2.11 環境保全型森林経営プラン

- 地利・地位級および法規制により森林を地帯区分し、林業を軸とした活動の場を明らかにするとともに、水源涵養機能など環境保全機能を増進させる各種公的支援策により森林所有者（経営者）の直接収入や地域経済の活性化を実現することが必要となっている。

表 2.11.1 丹沢大山地域における環境保全型森林経営の検討フレーム

| ステージ | ゴール | 内容 | 作業項目 | 作業状況 | |
|------|--------|---------------|---|------------------------------------|-----------------|
| 1 | 問題設定 | 調査研究の意義付け | 丹沢大山地域の課題と環境保全型森林経営の必要性の整理 | 文献調査・関係者聞き取り・意識調査、WS、BS etc | 地域再生WSでの予備討論 |
| 2 | 条件設定 | 調査目的の明確化 | 丹沢大山地域の森林の現状と課題を踏まえて、森林利用のデザインと政策オプションを探る | 利害関係者との対話? | 地域再生WSでの予備討論 |
| | | ゴールに関する合意形成 | 持続的な林業経営と公益機能の発揮のバランスを前提とした適正な保全コストと望ましい各種機能水準の提示 | WS、政策対話 | |
| 3 | 現状分析 | 前提条件検討 | 森林資源、基盤整備、経営環境の検討 | 森林簿その他既存GISデータの解析(図化、集計) | 今回一部作業実施 |
| | | ポテンシャル検討 | コスト、収益、収益性の検討 | 各種資源予測資料、実測収穫コストデータに基づく解析、シミュレーション | 神奈川を対象とした既往研究あり |
| | | | 外部効果(履歴創出、地域経済影響)モデル作成 | 文献調査、モデル構築 | |
| 4 | シナリオ分析 | 地帯区分 | 経済性に基づく地帯区分の検討 | GIS解析 | 文献収集・検討 |
| | | 地帯別経営モデル提示 | 経済林と保全林の施策内容・森林経営方法の提示 | 文献調査・関係者聞き取り | |
| | | 投入算出分析 | 経済林と保全林での中期的なシナリオ別コストと算出(木材および外部効果)のシミュレーション | | |
| 5 | 政策検討 | 政策分析 | 林業振興および環境保全その他の各種政策に関する比較検討、適用条件の検討 | 文献調査、関係者聞き取り | |
| 6 | 政策提示 | 丹沢型森林経営モデルの提示 | 行動計画の提示 | 研究成果のとりまとめと視覚化 | |

2.12 野生動物管理事業

- シカ・イノシシのポピュレーションコントロールや獣害の予防、そして野生生物にとり健全な環境に山林を変えていくという視点から、野生動物の管理を複合的な生業の一環としてとらえる。これも里山の活性化と自然との調和という相矛盾しそうな課題を解決する一つの糸口として提示できる。
- この中で、シカやイノシシを積極的に食肉として流通するようなシステムづくりも提案されている。

2.13 丹沢森林管理機構の設立・運営

- 行政から市民までが丹沢の自然と生業を応援するサポーターとしての役目を担い、県民から広く会員を募集して資金と人材を集め、丹沢の森林と林業に関わる生業や暮らしを一元的に管理または認証・監視する機構を設立することにより、より効率的・集中的・横断的な管理が持続するものと考えられる。

2.14 丹沢での生業再生の取り組み

- 丹沢山地に人の暮らしが無くなっていることや、周辺部も都市に顔を向けた生活をしており、自然資源には比較的恵まれるものの、人的資源が枯渇状態にあり、丹沢での生業再生の大きな障壁となっている。
- 以下に、丹沢での生業再生の契機となる事業について現時点で提案できるものを上げてみる。
- シルク活用技術への参画
- 竹ファイバー等利用技術開発
- 関連企業の CSR への参画
- 森林再生ファンド
- サントリービール用水の採取
- 足柄茶とともに丹沢茶のブランド化
- 昆虫力（蚕・蜜蜂・蠅等）・微生物力（発酵）
- ヒノキ精油の抽出
- 市民を対象にした「伐採ツアー」
- 農業・水産業との連携
- 地域材・流域材認証
- 林業起業家組織化へのアプローチ
- 山麓新村での暮らしモデルを構築

(4) 暮らしの再生調査

目次

1. 目的と実施内容
 - (1) 目的
 - (2) 実施期間
 - (3) 実施項目
 - (4) 実施体制
 - (5) 実施フロー

2. 調査内容
 - (1) 暮らしの歴史環境調査
 - (2) 食の復興調査
 - (3) 「水・住の復興」調査
 - (4) 鳥獣被害対策調査
 - (5) 津久井町青根地区における魅力・課題に関するワークショップ

3. 考察

4. まとめ

5. 引用・参考文献

「丹沢大山総合調査」地域再生チーム 暮らし再生グループ報告書

1. 目的と実施内容

(1) 目的

丹沢大山地域がかつて農林漁業や多様な行事で「にぎやか」であったころの暮らしを取りもどす(=再生する)ために、地域資源としての歴史、文化等を活かしつつ、自然や動植物と共生する(棲み分けをする)暮らしの将来像を、今日的な社会背景も考慮しながら描いてゆく、つまり暮らしの「復興(=ルネッサンス)」を目指した地域づくりのシナリオを描いてゆくことを目的とする。

シナリオのポイントとしては、以下の5点がある。①農業の振興策、あたらしい食文化の提案、鹿などの鳥獣を食する文化創造、②湧水文化・親水文化とツーリズムの検討、③山里暮らし文化の魅力の再発見と発信、定住化策、里山・山里のツーリズム・交流振興、④鳥獣との棲み分け、⑤歴史と暮らしの文化再考ツーリズムの検討。

(2) 実施期間

| | | |
|-------|------|---|
| 2004年 | 4～6月 | グループ内でのテーマ、調査の方向性、体制等を検討 伊勢原、秦野に関する文献資料収集および文献調査 |
| | 6月 | 秦野大倉、養毛にて現地調査 |
| | 6～8月 | 津久井、松田、山北に関する文献資料収集および文献調査 |
| | 7月 | 津久井、松田にて現地調査 |
| | 8月 | 山北にて現地調査 |
| | 9月 | これまでの調査のまとめ |
| | 10月 | 津久井、秦野、松田にて現地調査 |
| | 11月 | 津久井、秦野、松田にて現地調査 奈良県大台ヶ原への現地視察 |
| | 12月 | 津久井、愛川、秦野、松田にて現地調査 松田寄にてワークショップ開催 |
| 2005年 | 1月 | 津久井にて現地調査 松田にて鳥獣被害に関するアンケート調査 |
| | 2月 | 津久井青根にてワークショップ開催 津久井にて鳥獣被害に関するアンケート調査 津久井にて現地調査 |
| | 2～3月 | これまでの調査のまとめ |

(3) 実施項目

グループの共通テーマは「復興(=ルネッサンス)」とし、「水の復興」、「食の復興」、「住(まうこと)の復興」の3項目をメインに、プラス「大山街道(文化)」(含 江ノ島街道)に関する調査を実施している。また、それぞれの項目について、過去と現在の把握、「発見」⇒再発見、将来を見据えた再生⇒復興(=ルネッサンス)という流れを考えている。

なお、暮らしに関する調査は地元に着したかたちで調査をすすめるべきである、との考えから、「水の復興」、「食の復興」、「住の復興」それぞれの調査では、モデル地区を選定している。各班のモデル地区は以下のとおりである。

「水の復興」班：秦野市大倉・蓑毛

山北町玄倉

津久井町青根

「食の復興」班：秦野市大倉・蓑毛

松田町寄・宮地・田代・虫沢

津久井町青根・鳥居原

「住の復興」班：山北町玄倉

津久井町青根

すべての班に共通のモデル地区、津久井町青根においては、地区住民とともに復興を目指した将来像を考えてゆくためにワークショップを複数回開催してゆく。第1回目は、青根地区の過去と現在における状況から、魅力の発見＝「宝探し」をおこない、また課題についても整理した。

(4) 実施体制

今年度の調査は、「食の復興」班（班長：日暮晃一）と「住の復興」班（班長：栗原伸治）が中心にすすめた（ともに、「水の復興」班、「大山街道（文化）」班でやることもカバーしつつ）。「食の復興」班と「住の復興」班の調査の視点は、以下のとおりである。

「食の復興」班：「農」（縄文農耕、山、農業）

「食」（食文化、食生活）

「住の復興」班：生活圏域

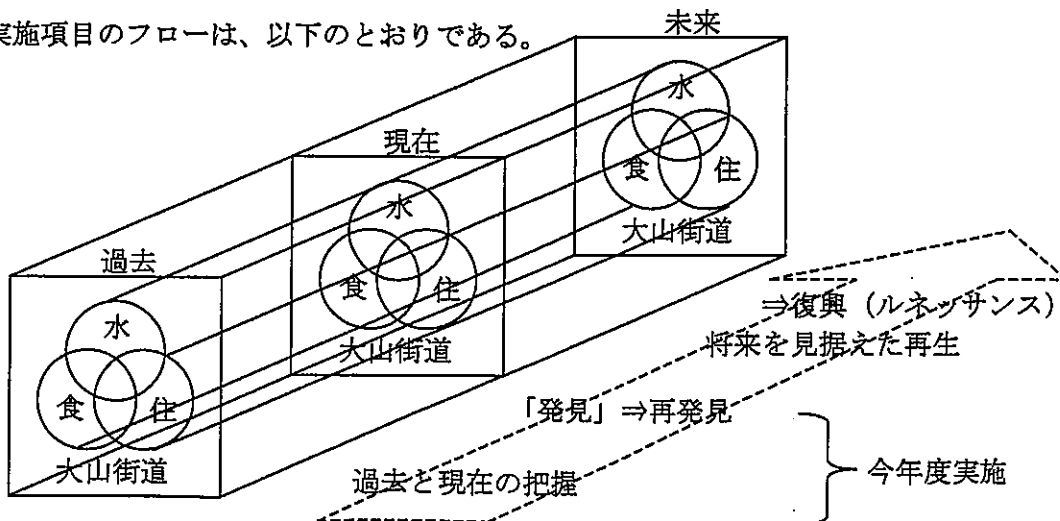
生活空間（集落空間、住居空間、含 水辺空間）

生活道具（生活空間の要素、含 水関係のモノ）

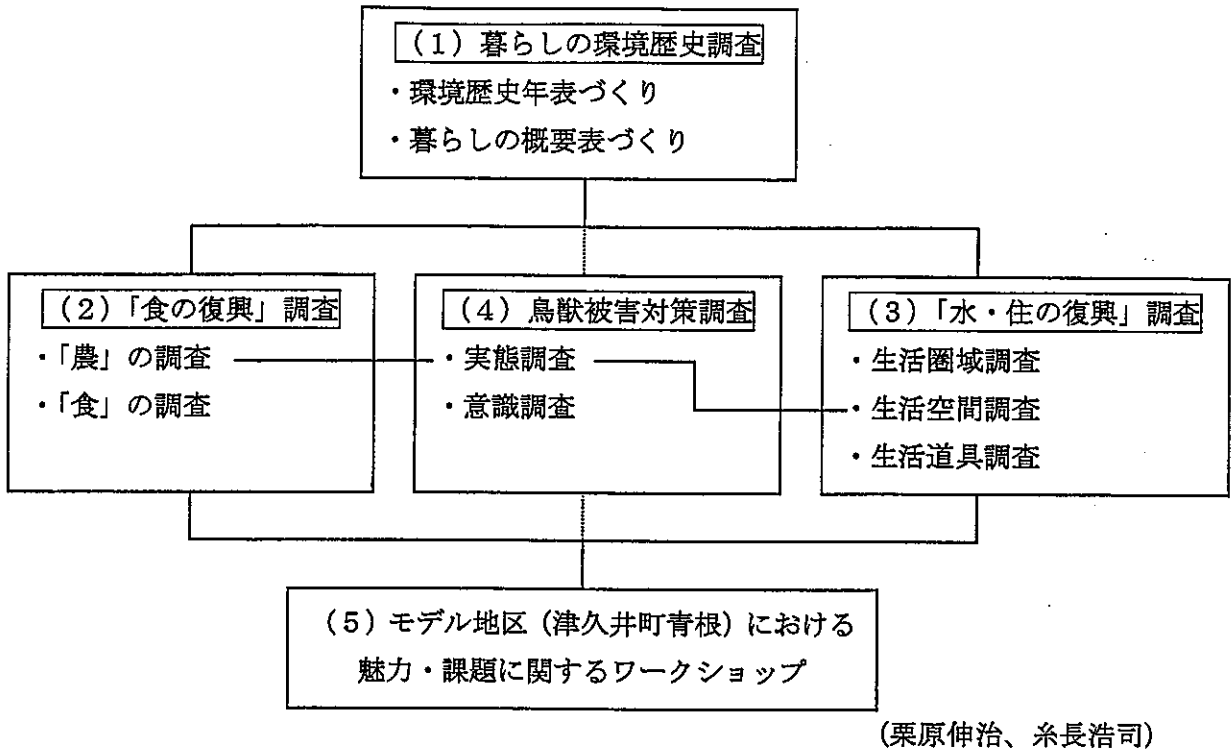
また、市町村ワークショップ等で、暮らしにおける緊急課題として挙げられた鳥獣被害については、各班の共通項目として調査を実施した（責任者：鈴木教子）。調査内容は、被害の実態と意識についてである。

(5) 実施フロー

実施項目のフローは、以下のとおりである。



また、今年度の実施体制のフローは、以下のとおりである。



2. 調査内容

(1) 暮らしの歴史環境調査

①調査方法

おもに市町村史を参考にして、丹沢大山地域8市町村における暮らしの環境歴史年表を作成した（現在も進行中）。また、おなじくおもに市町村史を参考にして、丹沢大山8市町村における暮らしの概要表の作成と、その概要表に出てくる項目のまとめもおこなっている（現在も進行中）。暮らしの概要表では、丹沢大山地域の8市町村における山仕事、野良仕事、水仕事、住まい、集落組織・共同仕事、民俗・祭り・行事・講、鳥獣被害、食文化、自然活用の技、住空間の10項目について、それぞれ該当する項目をあげている。

②調査結果

暮らしの環境歴史年表からは、丹沢大山地域における暮らしの環境を変化させた歴史的出来事について把握できた。具体的には、丹沢大山地域におけるインフラの整備は、明治後期から大正、昭和初期にかけて急速におこなわれており、とくに鉄道の開通・廃止が暮らしに大きな影響をあたえていたことや、またレクリエーション施設については、戦後にキャンプ場や山小屋が開設されはじめ、その後、昭和30～40年代に登山やキャンプの流行により数多くの施設がつけられたことなどが把握できた（資料1）。

暮らしの概要表では、山仕事としては山でのなりわいや炭焼きなど、野良仕事としては焼畑や畑作、農業の変遷など、水仕事としてはセギやミズフネ、水車、漁撈や船運など、住まいについては裏庭やムロなど、集落組織・共同仕事についてはセギ普請や道普請、自治組織など、民俗・祭り・行事・講については年中行事やいろいろな講など、鳥獣被害については山の動物と狩猟、被害の現況や対策の現況など、住空間については集落空間やそこでの暮らしなどの項目があがり、それぞれについての整理をしている（資料2）。

暮らしの概要表（山北町・津久井町）

| | 山北町 | 津久井町 |
|------------|--|---|
| 山仕事 | ・山でのなりわいについて： ・炭野、炭、薪炭、炭焼き、炭通 | ・青根村・枝野村の山について ・青根山の入金について ・青根の茅場について ・津久井の炭焼きについて |
| 野良仕事 | ・炭採について ・畑作について ・お茶の栽培について | ・津久井町の農業の衰退について： ・炭畑農業、耕地面積、養蚕の衰退、産業組合運動の始まり、 ・経済更正指定村、戦時下の農業政策、戦後の農業、農作物の衰退 ・青根の水田について ・堆肥の作り方について |
| 水仕事 | ・川での漁撈について ・セギ等について： ・セギ、フネ(ミズフネ・水舟)、フネバタ・フナバタ・ミズバ ・用水について ・水に対する意識について | ・河川について ・祖傳川の漁撈について ・舟運と筏運について ・水車について |
| 住まい | ・玄倉の住居の実測図面： ・配置図 ・住居空間について： ・敷敷、コエー、クラヤ、ムロ ・墓について： ・墓の形態、個人ももの墓、個人墓地の分割、寄墓と共同墓地 | ・青根の住居の実測図面： ・配置図、ムロの平面図・断面図 ・ムロについて |
| 集落組織・共同仕事 | ・セギ音頭について ・道音頭について ・部落どうしの関係について ・移住者について | ・自治組織について ・資金について ・青根の組について ・青根地域振興協議会について |
| 民俗・祭り・行事・講 | ・水神講について ・共同行事の概要について | ・年中行事について ・講について： ・山の神講、富士講、秋葉講、数州御岳講、地神講、聖影講、天神講、聖務講、 ・えびす講、古峰講、大山講、つくろい講、金屋講、二十三講、三峰講、御座講、 ・太子講、その他の講 ・青根の寺院について ・青根の墓、廃寺について ・諏訪神社について ・結いについて ・青根でのイベントについて ・山の信仰について ・温泉について ・その他の地域振興について |
| 鳥獣被害 | ・山の動物と狩猟について： ・鉄砲猟の組織、猟の役割、地区ごとの猟種、猟師 ・イノシシについて： ・年表、習性、農作物への被害、駆除方法 ・鳥獣被害の現状について ・鳥獣被害対策について： ・対策法、玄倉での対策用種の実測図面(平面図・断面図) | ・津久井の動物について： ・哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、鳥類 ・農作物の被害： ・季節ごと、動物ごとの被害面積、被害量、被害額 ・青根での鳥獣被害対策実験： ・種的位置、形状、材料(構造物、ネット)等の関係 |
| 食文化 | ・食文化について | ・食文化について： ・食材の調達、調理法、かつての状況 |
| 自然活用の技 | | |
| 住空間 | ・山北における暮らしについて： ・交通、人、施設 ・玄倉における暮らしについて： ・かつての暮らしの様子、生活圏 ・玄倉の集落空間について： ・既存の地図と実測による図面、土地利用等の状況 | ・青根の集落空間について： ・歴史と沿革、昔の集落・生活圏、現状 ・青根青久和集落と上野田・上青根集落について： ・既存の地図と実測による図面、土地利用等の状況 ・神ノ川について ・青根における暮らしについて： ・生活圏、交通アクセス、交通問題、少子化問題 |

(藤田亜季、鈴木教子、木本恭子、關正貴、栗原伸治、糸長浩司)

(2) 「食の復興」調査

調査は、食と農の面から、丹沢地域の復興をはかる方法を導出することを目的とする。調査の視座として次の諸点を設定した。1)地域の風土の培われた食農の文化的個性を重視し、地域の味を基本とする食文化を復興する。2)コンビニ・ジャンクフード化でなく、本物の味づくりを基本とする。3)地域の農業経営を、システムの組み替えにより活性化をはかる。4)要因分析でなく問題解決手法の開発を重視し、参加型 R&D の手法である地域開発経営実証調査法を軸とする。

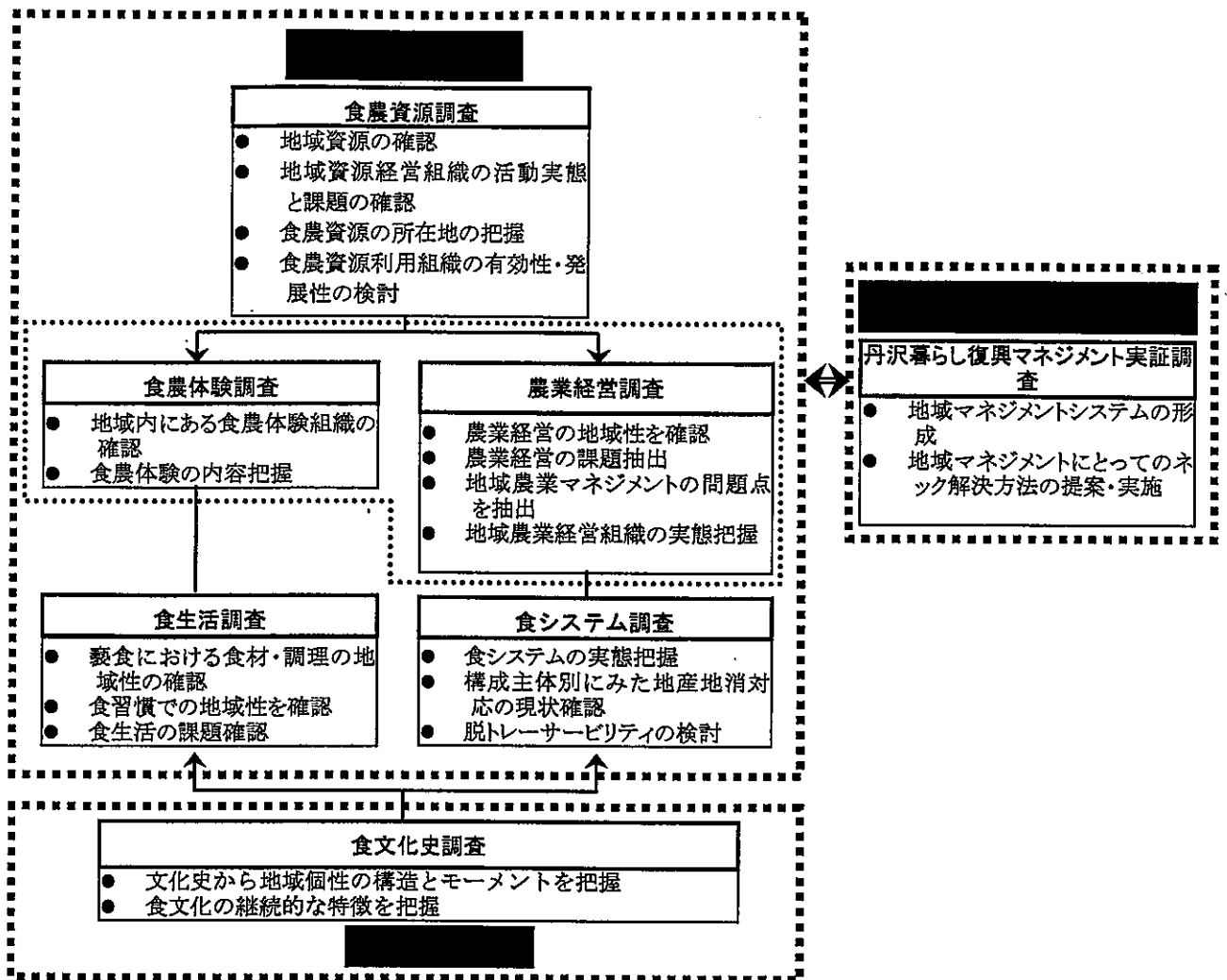
調査は幅広い内容が求められたので、図に示した構造を設定し、実施した。

調査は受け入れ側の都合に沿って随時実施し、下記構造に位置づけた。

1) 食文化史調査

①調査方法

①完新世以後の遺跡・遺物の踏査、②発掘調査報告書等の分析、③食具・聞き書き資料の調査を実施した。



②調査結果

丹沢地域は、縄文式土器が敷き詰められたように出土した大山神社上社周辺をはじめ頂上部まで遺跡が残っている。遺跡からは石製農具が出土し（写真1）、耕地跡が広範囲に広がるなど、縄文アグロフォレストリが盛んであったことが確認された（写真2）。このことは、現在の丹沢の自然は人跡未踏の自然ではなく、“社会化された自然”が基盤になっていることを示している。人と自然との関係を示す歴史資料として、諏訪神社（写真3）が八幡神社を凌ぐ分布密度である点が注目される。「山」を人が管理し、四つ足動物をタブーとした期間も、シカ、イノシシなど動物を食べる長野方面の文化が色濃く入っていた地域とみられる（写真4）。

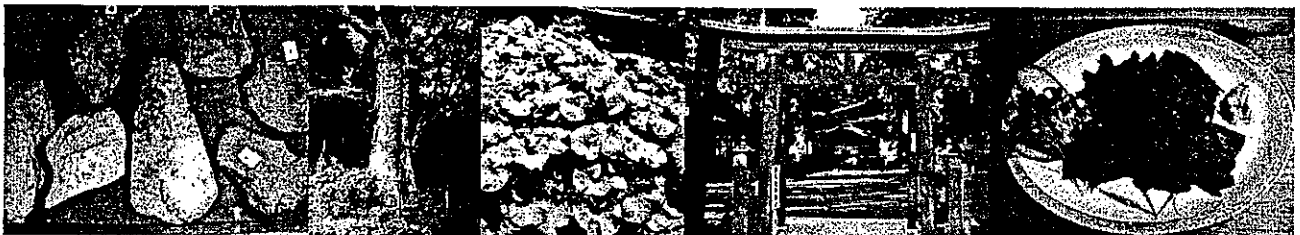


写真1 打製石鋏 写真2 橡・野蕨 写真3 青根の諏訪社 写真4 鹿刺

2) 食生活調査

①調査の方法

生活改良普及員、住民からヒアリング調査を実施。

②調査の結果

夏は、そば、素麺、うどんの消費量が米の消費量を上回るなど丹沢地域は今日なお粉食地域である。ミトリマゼなど麦・雑穀を混ぜたご飯は見られなくなったが、酒饅頭を含め、粉食文化の色彩を今日なお色濃く残している。

3) 食農資源調査 (資料3)

①調査方法

地域全域を概査。松田町寄で農地周辺を踏査。

②調査結果

松田町寄での調査結果は資料1に示した通りである。量的まとまりを持つ資源は無いが、のぶきなど数少ない日本自生の野菜の種類が多くみられる点に特徴がある。少量多品種の食農資源を活かす方法として、0_ラーニングがある。寄地区では市村自然塾など社会的資源もあり、発展しやすい環境にある。

4) 食農体験調査

①調査方法

松田町ミカンオーナー制度、秦野そば研究会でのそば打ちをヒアリング。

②調査結果

松田町ミカンオーナー制度は順調に伸びている。これは、現地に来てミカン狩りを体験してもらうことを優先するサービス方法にある。富士山、箱根、相模湾が一望できる景観の中でのミカン狩りは、身体障害者など弱者の人気の高い。

秦野そば研究会のそば打ちは、丹沢そばを店で食べるだけでなく自分でつくる楽しみを提供したものである。好評で、施設に入りきれない注文がある。そば生産から調理まで一貫した体験を射程にしており、現地で本物の味の食を総合的に楽しめる場づくりによる地域復興が期待できる。

5) 農業経営調査 (資料3)

①調査方法

松田町寄地区で、すべての農地を実査する農地利用現況確認調査、農業経営ヒアリング調査、野生動物の被害調査システム検討のためのプレテスト、を実施。

②調査結果

農地利用現況確認調査の結果、①中津川沿岸の低地で水田の利用再編と都市化に伴う耕作放棄地が、②集落との接点部で野生動物の被害に伴う耕作放棄地化、③山との接点部の畑の耕作放棄地化が認められた。課題として、a. 野生動物の被害対策と、b. 耕作放棄地を0_ラーニングの用地土地として利用する社会システムの整備が重要であることが確認された。

野生動物被害から限界地は拡大し、定年後のリタイア農業であることもあって、経営で

きない農地が多く出てきている。農地法による貸借を行う意思は無いが、返還に問題が生じない貸し付け希望が確認された。

市場の狭隘性を打破するために観光農園を行っている農業経営へのヒアリングの結果、松田山南面と対照的に寄地区は客が減少していた。その原因として、芋掘り、栗拾いだけでは顧客満足を得られないことがあげられた。0_ラーニングプログラムの充実と、食べる楽しみとセットにすることが課題となっている。

6) 食システム調査 (資料4, 5)

①調査方法

地域の味を醸し出すローカルフードシステムの整備を目的に、ステークホルダーの相互関係を捉えることにした。今年度は、①秦野市「東地区農産物直売センター」に荷を出している農家のヒアリング調査と、消費者へのアンケート調査、②直売農産物の消費者でもある「そば処東雲」の消費者へのアンケート調査を実施した。

②調査結果

傾斜地の小圃場区画で行う高齢者の農業経営であり、市場競争力が低いという不利な点を、農業公園で直売所を行うことにより利点に変えることがはかられている。平日と休日で消費者の性格が異なる。セグメントマーケティングを軸としたマーケティングマネジメントが課題となる。

地元食材を多く用いた「そば処東雲」の丹沢そばは、味にこだわって作っている点が評価されている。そば打ち体験も好評だが、施設が狭すぎて注文を断らざるを得ない事態が生じている。規模を拡大して、そば処東雲等をサテライトとした0_ラーニングネットワークシステムの構築をはかることが課題である。

7) 丹沢暮らし復興実証調査

①調査方法

ワークショップを中心に課題を検討し、実証を通して解決方法を開発する。

②調査結果

2004年12月5日に、寄地区自然休養村運営協議会の役員を中心に第1回ワークショップを実施した。地区の意見を反映するためと、検討したことを着実に実行に移すため、自然休養村運営協議会だけでなく自治会等の組織を集合した受け皿を地元で作ることになる。自然休養村に関係する組織を中心に町づくりにかかわる組織が多数作られているが、横の連携が不十分な点が指摘された。

(日暮晃一、堀田志津子)

(3)「水・住の復興」調査

1) 生活圏域調査

①調査方法

モデル地区である山北町玄倉および津久井町青根に関する文献により、両地区の婚姻圏をはじめとする生活圏域について調査した。また、現地調査においても、インタビューによりそれらについての調査をおこなった。

②調査結果

山北町玄倉は、山北町の東部にあり、鍋割山を背に、北は津久井町に接する。大部分は山岳地であり、平坦な場所は少なく、山林が多い。集落は、南を流れる玄倉川と、鍋割山の山麓の間にある南側の傾斜地である。玄倉が属する三保地区は、人口 663 人、世帯数 219 世帯(2005 年 2 月現在)である。住民の生活圏は、開成町や大松田、御殿場、松田、秦野一帯であり、生活圏は御殿場方面と松田、秦野方面の二方向へと広がっている。婚姻圏としても、この一帯とのつながりが強く、さらに道志とのつながりも強かった。かつて、この一帯から道志に女性が嫁いだ場合、道志では「相模の国から嫁が来た」と喜ばれたという。

津久井町青根は、津久井町の南西にあり、袖平山、黍殻山、焼山などの連邦を背に、南は山北町、北は藤野町に接する。大部分は山岳地であり、平坦な場所は少なく、山林・原野が多い。集落は北を流れる道志川沿いと、黍殻山の北西の山麓の間にある北側の傾斜地である。人口 664 人、世帯数 232 世帯(2005 年 2 月現在)である。住民の生活圏は、相模原・八王子へと広がっている。婚姻については、青根内部でおこなわれる場合も多いが、道志から女性が嫁いでくる場合もひじょうに多かった。女性は、「(道志川の)川下に嫁ぐのがよい」と言われていたらしく、青根出身の女性が青野原など川下の集落に嫁ぐケースも多かったという。

2) 集落空間調査

①調査方法

白地図をもとに、道路と住居の実測調査、土地利用調査を現地でおこない、この結果と e-Tanzawa からダウンロードした航空写真により、集落図を作成した。この集落図をもとに、生活空間(人が居住し、おもに生活行為を行う空間)、生産空間(経済的収入や食料などの生活の糧となるものを得る空間)、山間集落ではとくに重要だと考えられる道路(古道)と水路(川)の計4つの要素より、集落空間構成とその系譜について考察した。

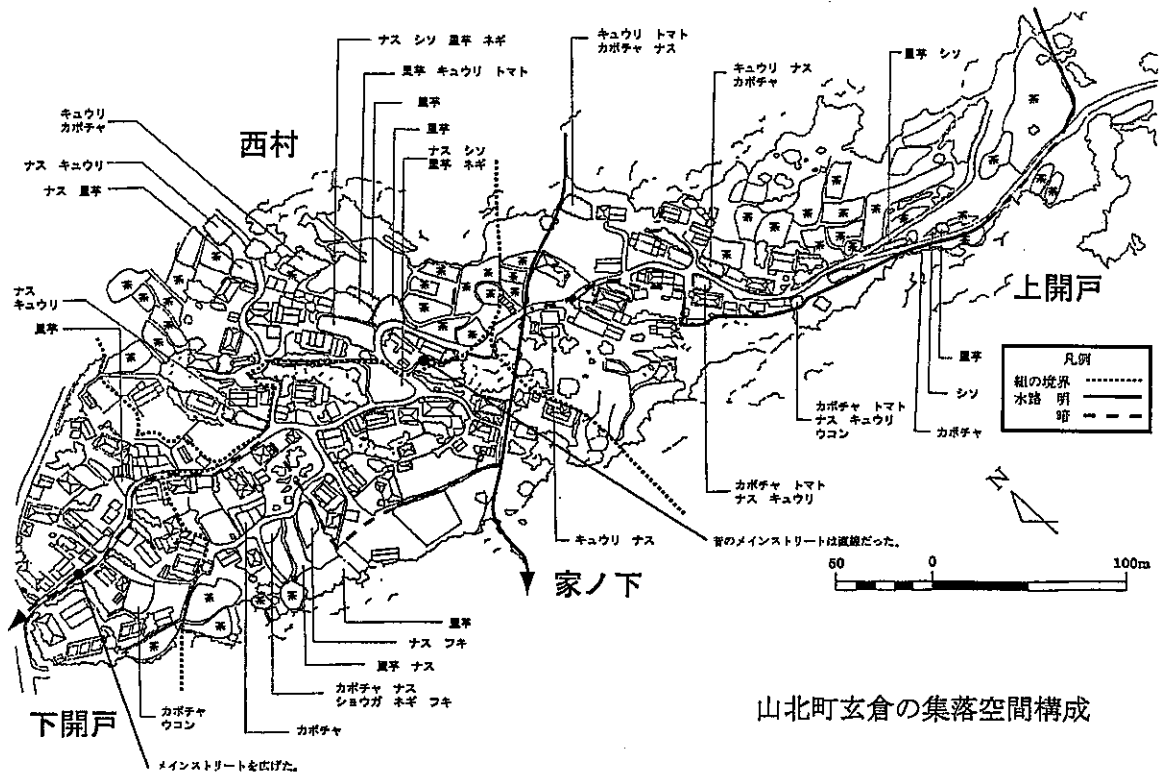
②調査結果

○集落空間構成

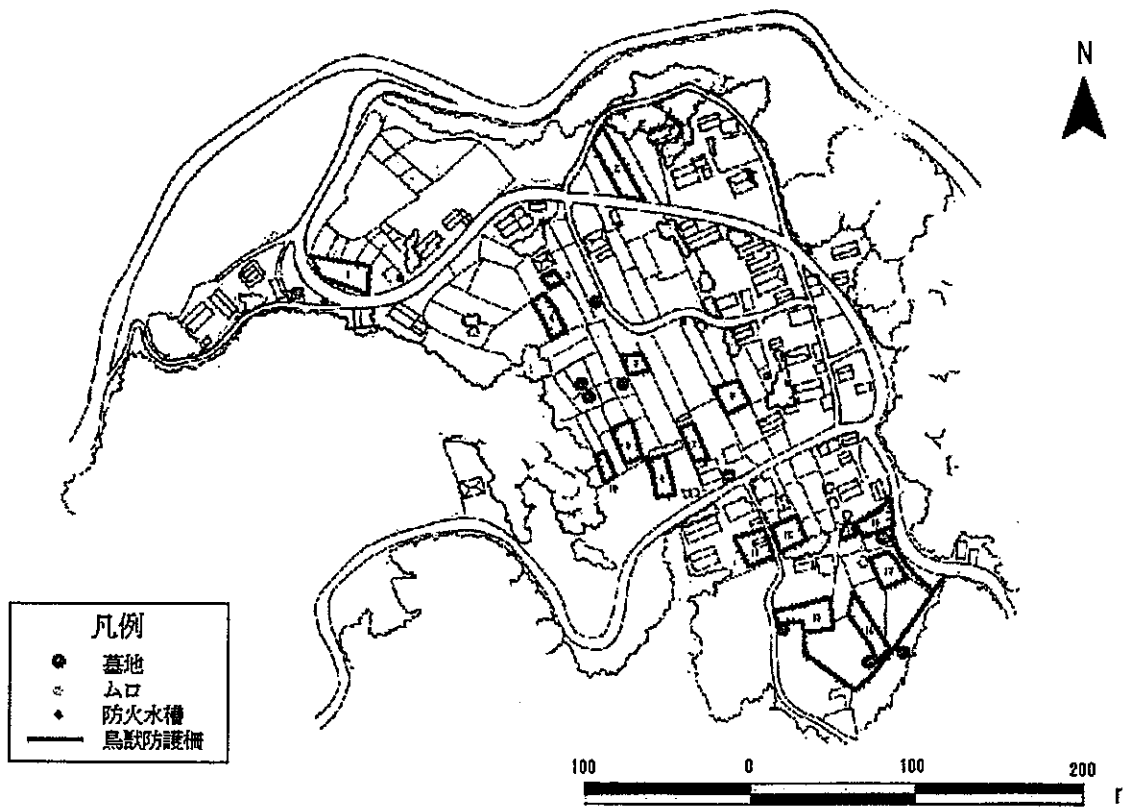
山北町玄倉の集落空間構成としては、以下のことがあげられる。①集落の中心軸は道路である。②道路に沿って水路が流れる。③道路・水路を軸にして、道路・水路、生活空間、生産空間の順で、左右対称に集落空間が構成される。④水路は集落の中心軸に対して、垂直にも交わる。

津久井町青根の音久和の集落空間構成としては、以下のことがあげられる。①集落の中心軸は道路(古道)である。②道路(古道)に沿って水路が流れる。③生産空間を中心として、同心円状に生活空間、道路(古道)・水路、そしてそのまわりに生産空間が点在する。また、上野田・上青根の集落空間構成としては、以下のことがあげられる。①集落の中心軸は道路(古道)である。②道路(古道)に沿って生活空間が存在する。③集落の生産空間には水路(川)が流れている。

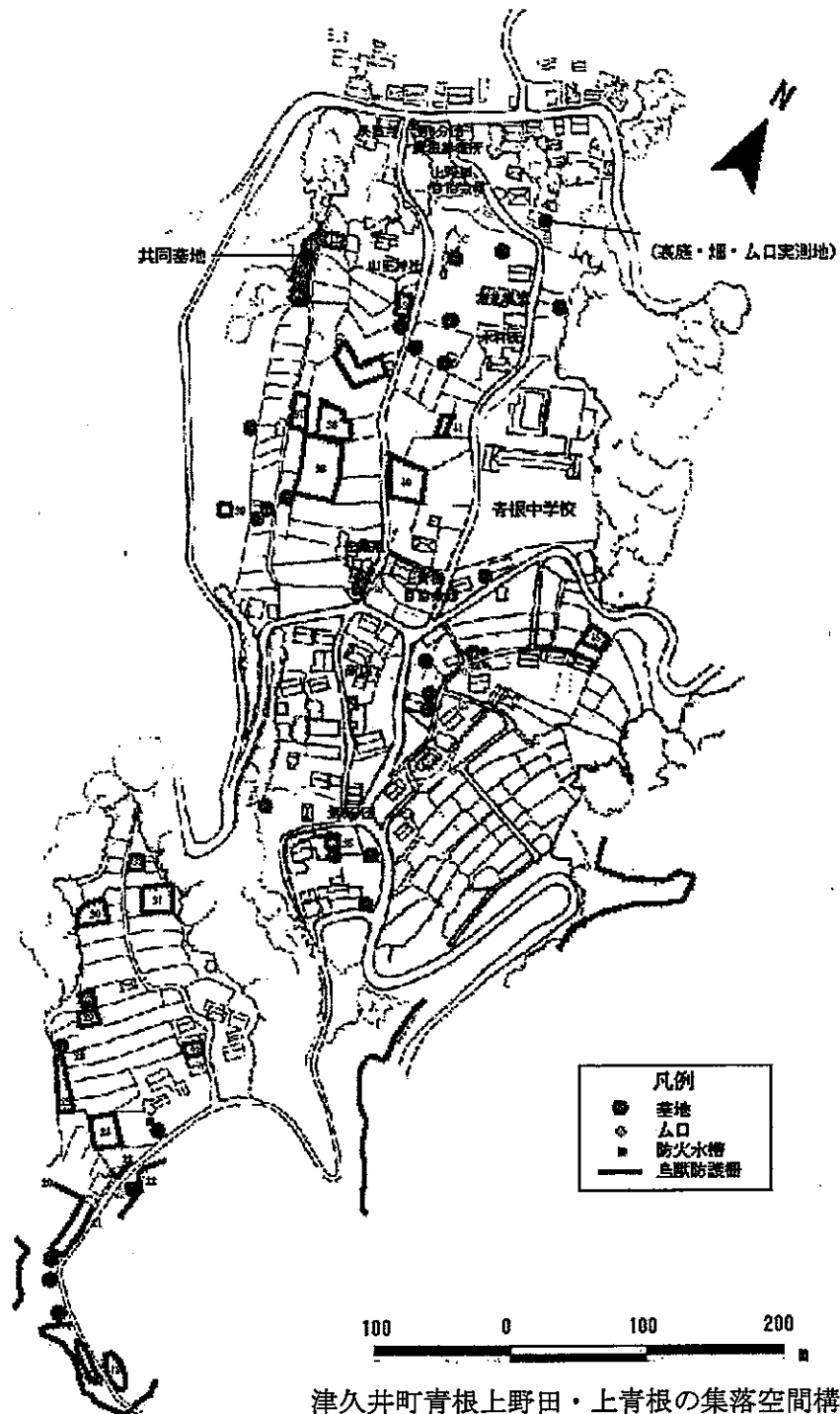
なお、両者の集落空間構成の共通点としては、以下のことが考えられる。①道路を中心軸とする。②中心軸の道路に沿って生活空間が存在する。③古道により集落空間が規定されている。また、中心軸の道路に沿って水路が流れている場合が多く、道路だけでなく、水路によっても集落空間構成が強く規定されている。



山北町玄倉の集落空間構成



津久井町青根音久和の集落空間構成

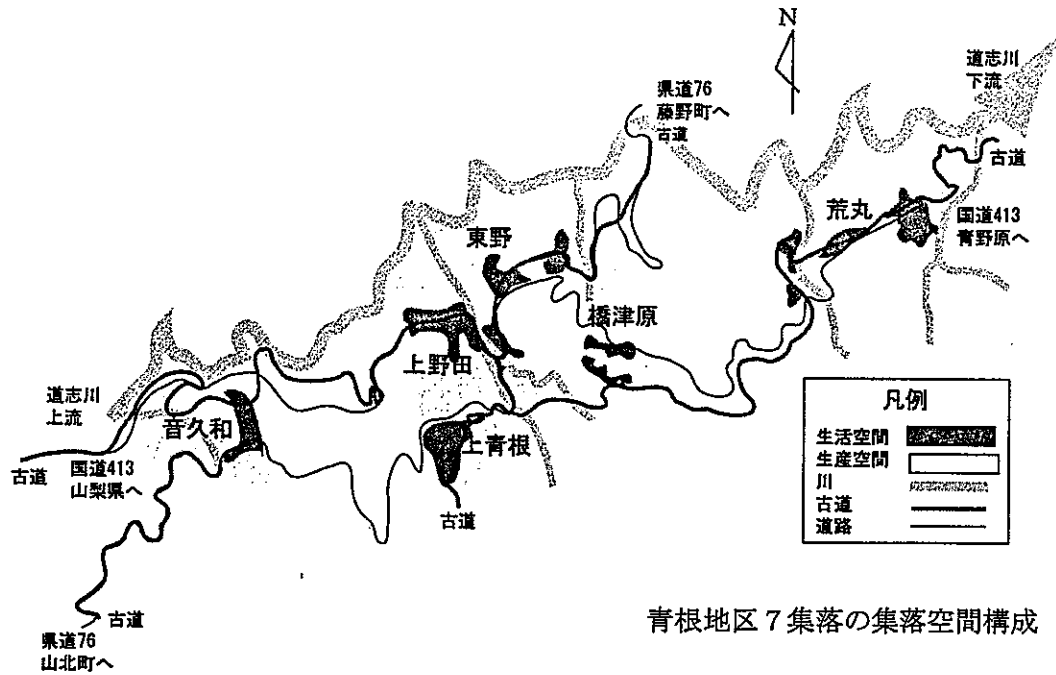


津久井町音根上野田・上青根の集落空間構成

○青根地区の集落空間の系譜

青根地区は、複数の集落が集まってできた地区であり、行政界では西から音久和、上野田（上野+上原）、上青根、橋津原・東野、荒丸の5集落であるが、東野と橋津原、荒井と平丸には個々の生活空間があり、地理的にも離れて存在し、音久和、上野田、上青根、東野、橋津原、平丸、荒井の7つの集落に分かれていると考えられる。

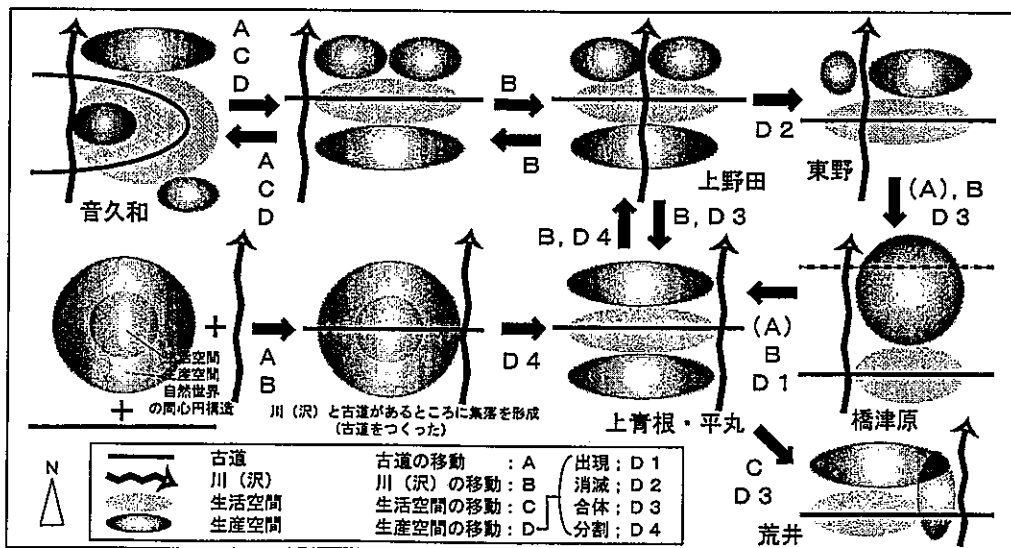
この7つの集落について、2500分の1の白地図をもちいて、上記とおなじく、生活空間、生産空間、道路（古道）、水路（川）の計4つの要素から集落空間構成を把握した。すべての集落が沢に属しており、7つの集落が古道によってつながっている。なお、青根地区にはかつて多くの水車があり、水車は日常的に利用されていたことが文献調査により明らかになっている（資料6）。



青根地区7集落の集落空間構成

青根地区は、落ち武者によって音久和が最初に形成され、その後徐々に東に向かって集落が形成されたと言われている。屋号も、音久和には屋敷に関するものが多いのに対し、そのほかの集落ではサカヤ・カジヤなどが多い。また、「折花姫伝説」があり、青根地区のいたるところに伝説にまつわる場所があるが、伝説の主人公、折花姫の一族については、武田の落ち武者とする説、平家の落ち武者とする説、小田原からきたとする説、小田原へ行く途中とする説など、さまざまである。しかし、伝説にまつわる刀や焼き物なども実在し、現在、津久井町その真相について調査をおこなっている。

集落空間構成のさらなるモデル化をおこなうと、生活空間、生産空間、自然世界という同心円をベースに、古道と川(沢)との関係から、下図のように表現できる。そして古道、川(沢)、生活空間、生産空間の位相により、矢印のような系譜が考えられる。すなわち、上青根・平丸を基本型としつつ、古道をたどって、西へいけばより複雑化し、東へいけばより簡略化されていく。ここで、上青根から上野田、上野田から音久和の矢印を逆にたどれば、西の音久和から徐々に東に集落が形成されていった上述の青根地区の歴史に対応しつつ、古道と古道沿いの生活空間を中心とした集落空間構成の系譜がうかがえる。



青根地区の集落空間の構成モデルとその系譜

3) 住居空間調査

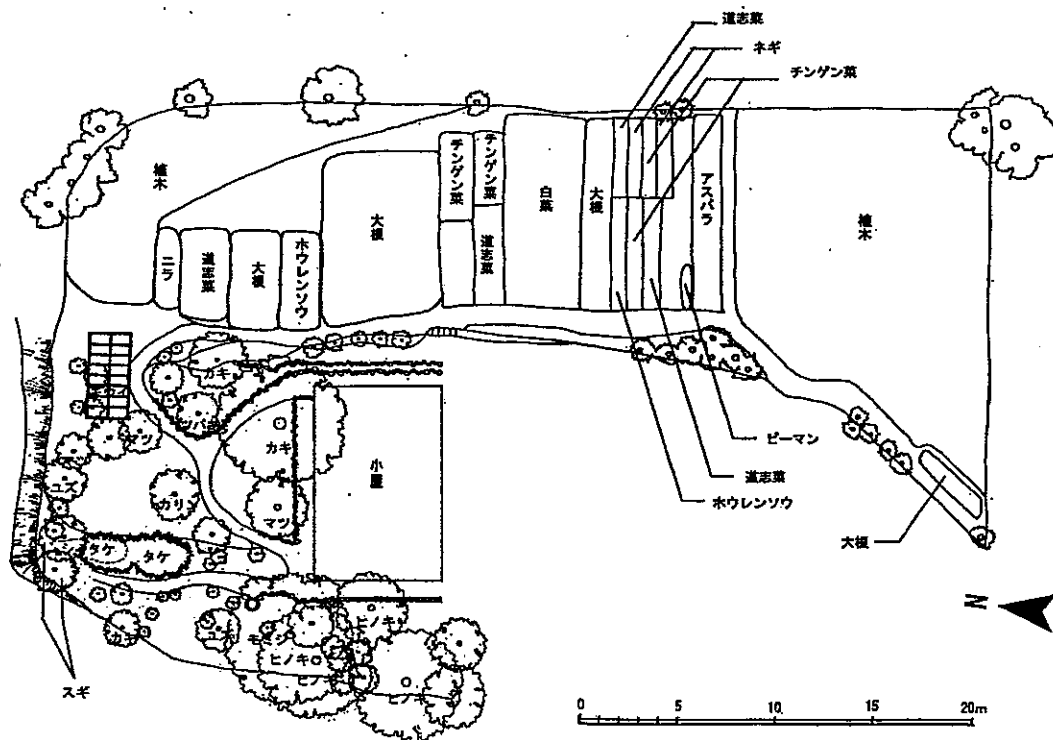
①調査方法

住居の裏庭、菜園、およびムロの実測調査とインタビュー調査により、住居空間のつかい方について把握した。

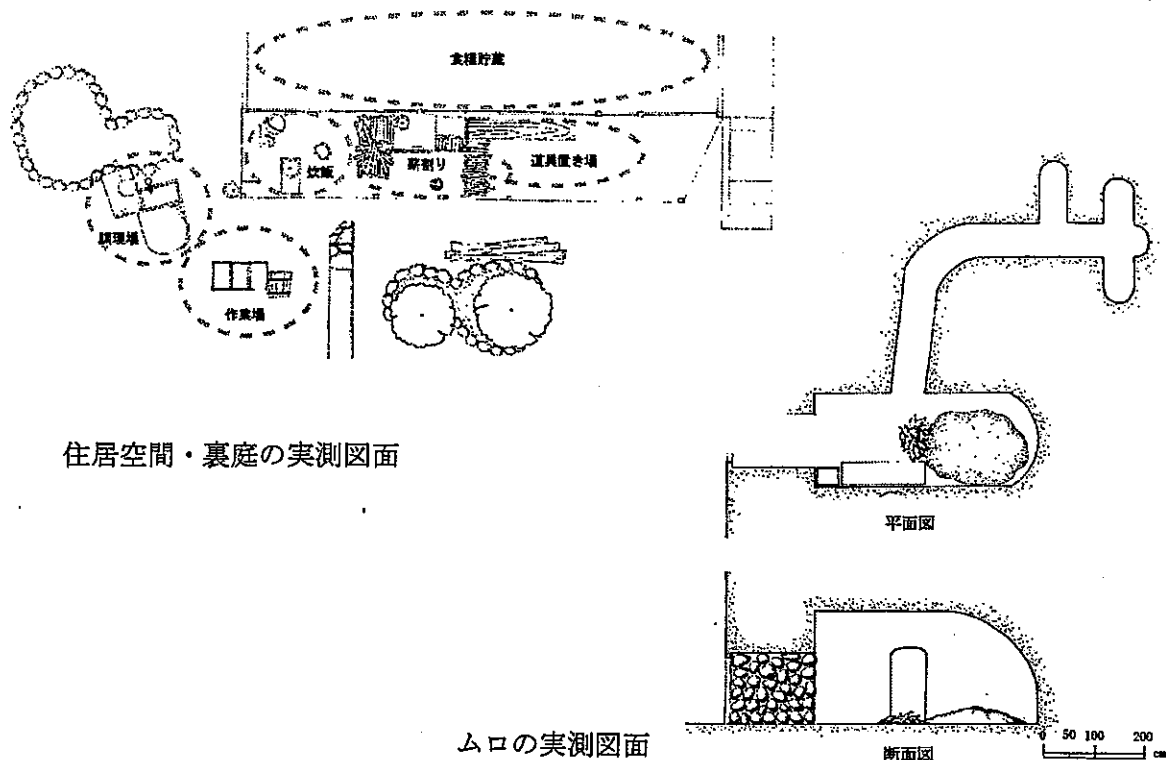
②調査結果

自給自足の補助としての生産物が菜園で多く栽培されている。初冬に実測およびインタビュー調査をおこなったお宅の菜園では、野菜、果物類としては、大根や白菜、道志菜、かも菜、ほうれん草などが栽培されていた。このほか住居からすこし離れてところにある畑では、にんじん、ごぼう、小松菜、春菊、モロヘイヤ、ブロッコリー、瓜、トマト、スイカ、ヤーコン、きゅうり、なす、エンドウなどを栽培している。かつてはトウモロコシもつくっていたが、熊、バクビシン、カラスにやられたため止め、サツマイモは現在つくっていないが、近所の人にもらって、ムロで保存している。これらの野菜を買うことはなく、あまったものは、子どもたちや近所とわけあっており、料理（家庭でつくったもの）の交換という近所づきあいもある。

燃料類の補助として、薪や竹を使用している。薪には山の間伐材、枝打ち、家のまわりの邪魔な木、庭木（虫に食われて枯れたもの）等を使用し、竹は裏庭（北側）の竹林の竹を使用している。竹は1年に5、6本使用しているという。これらを燃料として、裏庭のカマドで、ご飯、赤飯、さつまいも、まんじゅう（酒まんじゅう）、餅などをつくっており、使用後の灰や炭は畑にまいている。



住居空間・菜園の実測図面



住居空間・裏庭の実測図面

ムロの実測図面

(木本恭子、藤田亜季、鈴木教子、栗原伸治、關正貴、糸長浩司、橋本忠美)

(4) 鳥獣被害対策調査

1) 実態調査 (資料7)

①調査方法













モデル地区である津久井町青根の音久和および上野田・上青根集落において、鳥獣被害の防護柵に関する悉皆調査をおこなった。調査項目は、集落における設置場所、柵の材料(構造体と壁面)、柵内でつくられている作物についてで、写真とともに一覧表にし、また番号をつけて集落図と対応させた。

②調査結果

音久和集落では計17箇所、上野田・上青根集落では計28箇所、鳥獣被害の防護柵が確認できた。集落図上でみれば、音久和では、集落中央部にある生産空間に多くの柵がみられる。ここは、かつて桑畑があったところで、養蚕業の衰退と近年の鳥獣被害により、荒地となっているところや畑であっても柵が張られているところが多くなっている。柵は、このほか山際にも多くみられる。また、上青では山際と東西の崖の手前で多くみられ、上野田では上青根側に広がる畑地に大規模なものがみられる。

これら計45箇所の防護柵設置に関する分析の結果、設置場所は約半数が畑地、ついで水田(約20%)が多く、そこで栽培されている農作物(冬季)は、大根、ネギ、リンゴ、白菜の順に多い。防護柵のおもな構造体は、単管パイプ(約55%)、異型鉄筋(約30%)となっており、また壁面はポリエチレン製のネット(約75%)が圧倒的に多い。

青根上青根集落の鳥獣被害防護柵一覧表（一部抜粋）

| 番号 | 集落 | 設置場所 | 柵の材料 | 作物 | 写真 | 番号 | 集落 | 設置場所 | 柵の材料 | 作物 | 写真 |
|----|-----|------|-------------------------------------|-----------------------|---|----|-----|------|---|-----------------------|---|
| 25 | 下裾野 | 水田 | グレーチング 鉄筋 | ネギ |  | 31 | 下裾野 | 水田 | 単管パイプ ネット (ポリエチレン) | リンゴ |  |
| 26 | 下裾野 | 水田 | 単管パイプ ネット (ポリエチレン) | 荒地 |  | 32 | 下裾野 | 水田 | 園芸用支柱 (カラー鋼管) ネット (ポリエチレン) トタン 木の棒 | 大根 チンゲン 菜 里芋 |  |
| 27 | 下裾野 | | 単管パイプ ネット (ポリエチレン) | リンゴ |  | 33 | 下裾野 | 畑地 | 単管パイプ ネット (ポリエチレン) | 大根 チンゲン 菜 ネギ |  |
| 28 | 下裾野 | 水田 | ネット (ポリエチレン) 園芸用支柱 (カラー鋼管) | 大根 チンゲン 菜 |  | 34 | 上青根 | 山 | 金網 鉄筋 | (果の防 護柵) |  |
| 29 | 下裾野 | 畑地 | ネット (ポリエチレン) 単管パイプ | リンゴ |  | 35 | 上青根 | 宅地 | 単管パイプ ネット (ポリエチレン) | リンゴ |  |
| 30 | 下裾野 | 荒地 | グレーチング 単管パイプ | 大根 チンゲン 菜 ネギ |  | 36 | 栗間戸 | 果樹園 | 単管パイプ ネット (ポリエチレン) | リンゴ |  |

(鈴木教子、木本恭子、藤田亜季、栗原伸治、關正貴、糸長浩司)

2) 意識調査 (資料8)

①調査方法

モデル地区である松田町寄地区および津久井町青根地区において、鳥獣被害の意識に関するアンケート調査をおこなった。寄ではJA全会員に対してJA経由での配布・回収を、青根では津久井町青根支所、各自治会経由での配布、郵送による回収をおこなった。

②調査結果

○松田町寄地区

配布枚数 244 枚のうち回収枚数 119 枚である。回答者はほとんどが男性であり、約 80% が 50 代～80 代の高齢者である。被害は平成 10 年頃から増加し、シカ、イノシシ被害が多い。被害は地域全体におよぶが、ついで「山際」が 4 割と高い。96%の農家で被害があり、63%がとともひどく、落花生、トウモロコシ、サツマイモの被害が上位で、これらの栽培を中止している農家も多い。「農業は現在のまま続ける」が約半数を占め、縮小は 3 割である。被害届けは 8 割が提出していない。その理由として、「届けても何もしてくれないから」が多かった。対策は「柵の設置」、「狩猟」(地元の猟友会)であり、対策で被害が減ったのは 8 割である。地域全体での対策必要性は 7 割で、行政への要望は「新しい防護柵の設置」、「有害獣駆除規制の改善」が過半数を占めた。「農地と山野を柵で区別する(当面は)、鳥獣が住みやすい山に(将来的には)」など、鳥獣との共生関係を模索する意見もある。

○津久井町青根地区

総配布枚数は全世帯数の 233 枚、現在のところの回収枚数は 77 枚である。回答者のうち 65%が男性であり、約 9 割が 50～80 代の高齢者である。被害は平成 10 年頃から増加し、シカ、ハクビシン、カラス、イノシシ被害が約 7 割を占める。被害は「山際」が 36%とひどい。農作物の栽培は自給を主とする世帯が 65%で、8 割が被害を受けており、33%がとてもひどいと回答している。トウモロコシ、サツマイモの被害が上位で、これらの栽培を中止している農家も多い。「農業は現在のまま続ける」が 61%を占め、「縮小する」は 17%である。被害届けは 71%が提出していない。その理由として、「届けても何もしてくれない」が多かった。対策は「柵の設置」、「狩猟」（猟友会）が主である。地域全体での対策必要性は約 76%であり、行政に対する要望は「新しい防護柵の設置」、「有害獣駆除規制の改善」が過半数を占めた。

○寄と青根の被害意識の比較

被害は、「とてもひどい」が寄 58%、青根 33%、「さほどではない」が寄で 6%に対し、青根では 30%と、寄よりも青根では被害の度合いは小さい。被害が増加した年はどちらも平成 10 年頃が最も多い回答が得られ、この年に何らかの環境変化が起こったと考えられる。柵の材料の調達には共に「買う」が最も多い回答だが、「山から採る」が寄 31%、青根 12%であった。さらに、地元の山からの木材資源の使用は「使用したい」と考える人が寄 38%、青根 22%と意識の違いがうかがえる。被害届けはどちらもほとんどが提出しておらず、「出しても何もしてくれない」という理由が多かった。他にも「行政への期待はしていない」と読み取れる回答が多数あった。

(鈴木教子、糸長浩司、日暮晃一、栗原伸治)

(5) 津久井町青根地区における魅力・課題に関するワークショップ (資料 9)

①調査方法

「かつて青根地区が農林漁業や多様な行事で『にぎやか』であったころの暮らしを取りもどすために、ワークショップによって地元の方々とともに、地域資源としての歴史、文化等の再生方策、ならびに自然や動植物と共生した（棲み分けをした）地域づくりのイメージを固めてゆき、青根地区の将来像を考えてゆきたい。そのために第 1 回目は、青根地区の過去と現在における状況から、魅力の発見＝『宝探し』をおこない、また課題についても整理してゆく」という趣旨のもと、青根地域振興協議会との共催により、2005 年 2 月 6 日（日）に青根公民館にてワークショップを開催した。

ワークショップでは、

壮年男性、青年から壮年男性、上の集落に住む女性、下の集落に住む女性の 4 グループに分かれていただいたうえで、

A) ラベル討論

◇魅力（赤ラベル）：地区にどんな魅力があるかをラベルに自由に書き込み貼る

◇夢（黄ラベル）：地区がどうなったらよいか、夢をラベルに自由に書き込んで貼る

◇課題（青ラベル）：地区の抱えている課題をラベルに自由に書き込んで貼る

B) 地図討論

チェック項目にしたがって、魅力的な場所や課題の箇所、土地利用のイメージを検討というふたつの作業をおこなった。

なお、ワークショップは 2006 年度にもひきつづき、あと 2 回ほどおこなう予定である。

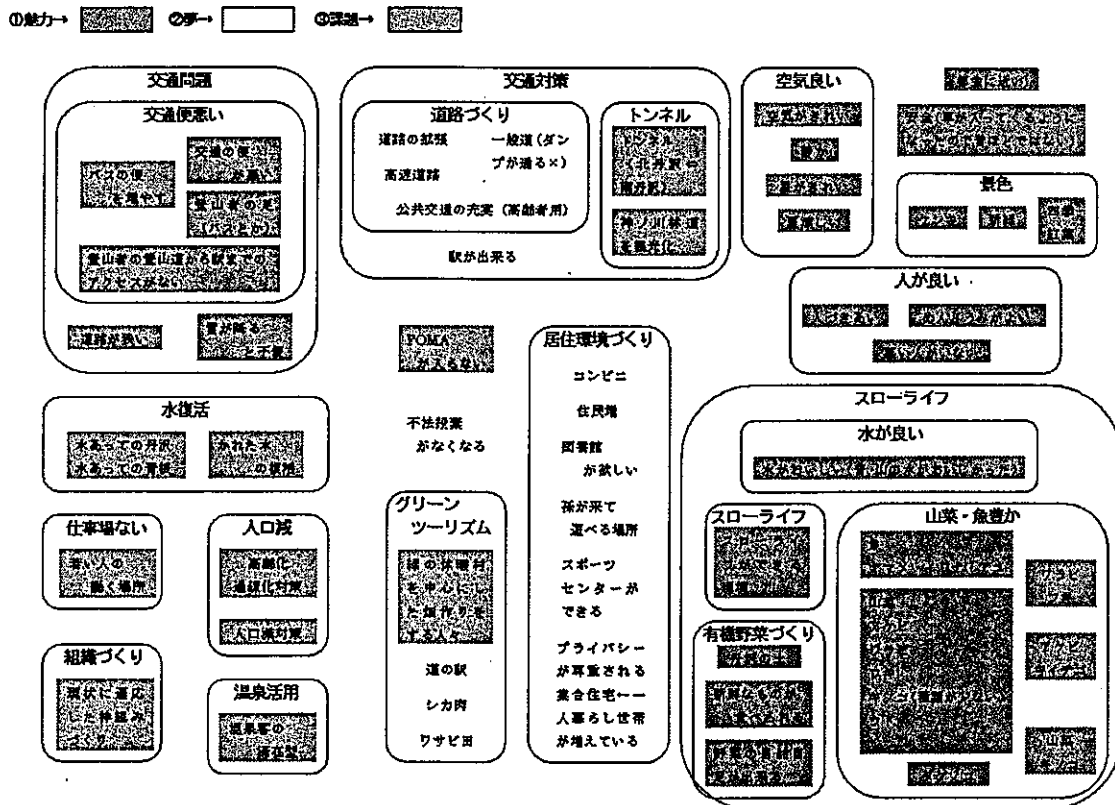
②調査結果

青根地区住民は計 35 名が参加し、地域再生チームからはスタッフ計 15 名が参加した。

作業 A) の結果として、青年から壮年男性グループでの話し合いを例にすれば、魅力としては空気・水・景色などの自然環境の良さと人の良さ、生活環境の良さが挙げられた。夢としては、道の整備をはじめとする交通対策がなされることや、コンビニなどの便利な生活環境づくりが挙げられた。課題としては、交通の便の悪さ、人口の減少などの地区の活力低下、枯れた水の復活などの自然環境の悪化が挙げられた。

作業 B) の結果としては、「宝」となる地域資源が、青根地区全体に点在しており、なかでも、川-集落-山際-山という集落立地の断面構成のなかで、集落から山際にかけての空間で、より多くの地域資源が確認することができた。

以上より、集落から山際にかけてのエリアにおける「スローライフ」等をキーワードとした地域づくりの方向性が提案された。



作業 A) のまとめ (青年から壮年男性グループ)



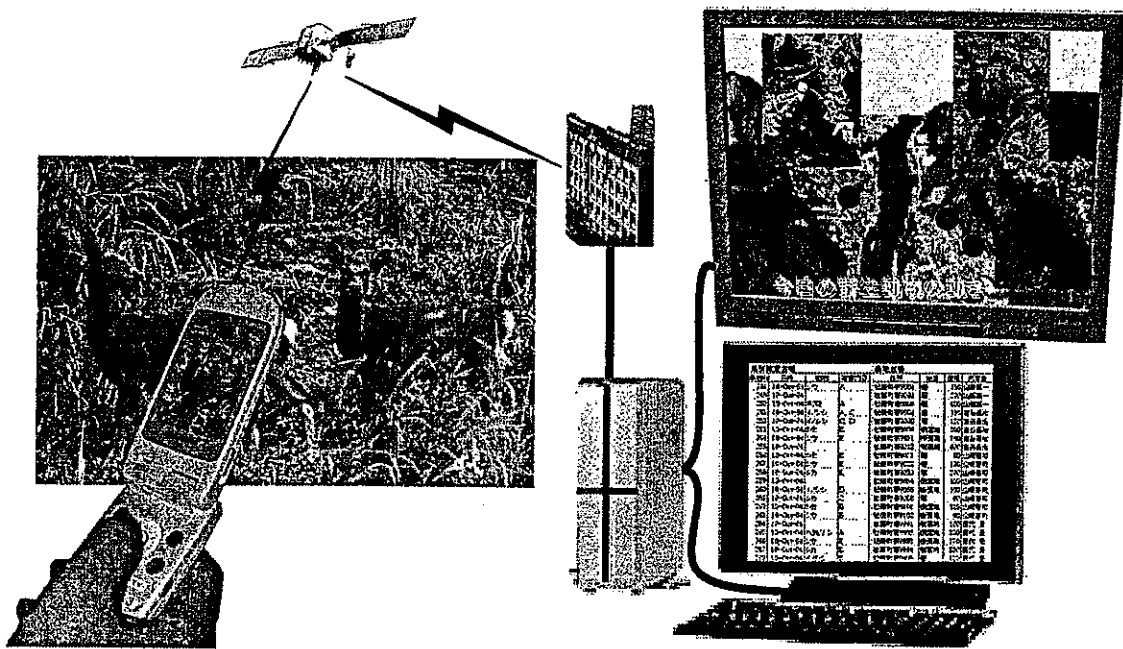
ワークショップの様子 (左から趣旨説明時、話し合い時 2 枚、話し合いの結果の発表時)

(栗原伸治、糸長浩司、關正貴、鈴木教子、木本恭子、藤田亜季
橋本忠美、日暮晃一、堀田志津子、池田寛二、大倉季久)

3. 考察

丹沢は、縄文時代以降人が手の管理により維持されてきた所であり、今後とも人が適正に管理していくことが必要な地域である。現在丹沢地域の里地は、耕作放棄により「山が降りる」現象が顕著に進んでいる。住民が、集落機能が存続できる期間として、松田町寄地区で10年、津久井町青根地区で3～5年とみているように、集落存続の危機に直面している。農業普及センターの職員の中に「山に戻せば良い」という意見も聞かれたが、この発言は、「山が降りる」現象は地域での生活が衰退するだけでなく、荒廃した山林が広がるだけで、縄文時代から続いてきた人による適正な管理を失うことを意味することを理解していない暴言といわざるを得ない。今日生じている「山が降りる」原因として、①農業に対する野生動物の被害と、②地域産業の発展を阻む社会システムをあげることができる。

農業に対する動物の被害問題は、“檻の中の農業”か耕作放棄かの選択を迫られるほど酷くなったのは7年前頃と、新しい問題であることが判明した。被害の酷さは、松田町寄地区の農地はシカ、イノシシの足跡をみない農地は無いと言って過言でないことが如実に示している。しかし、効用の問題から被害届が出されていないため、実態がまったくわからず、対策の見直しと有効な対策の検討が出来ない状況にある。そこで、農業に対する野生動物の被害問題を緊急重点課題とし 1)被害実態の把握調査、2)現在までに行われた被害対策・被害対応の実態調査、3)被害を与えている動物の生態調査、4)関係諸機関を招集し戦略会議を開き、総合対策の検討および速やかな対策の実施、が求められる。日常的に発生する被害実態を把握するために、直ちに次のシステム開発を行う必要がある。



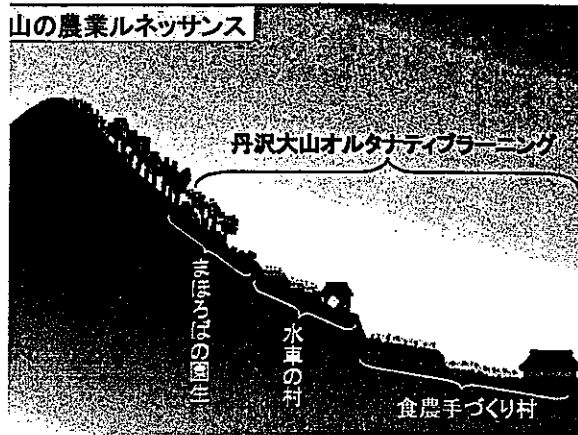
野生動物被害対策システム

これは、①1筆単位に現地調査を行い、台帳を作成するとともに、②GPS 付き携帯電話（カメラ）で被害状況を Web GIS 上に表示させるとともに、③携帯電話からのデータを自動的に被害データベースに登録し、④地域マネジメントシステムに直結する地域空間ポータルへのせる、システムである。携帯電話を活用した農産物のトレーサビリティと農業 GIS のノウハウが蓄積されているので、このシステムは短時間に開発可能である。

こうした、コンピュータシステムに入れる基本台帳として、1筆単位に野生動物の被害から守るために行った自衛策とその効果、柵等の設置の契機、被害にかかわる環境条件と

経営条件、今後の利用意向に関するデータを、現地を実査してデータ整備を行う担当職員を置く必要がある。このデータが、被害を与えている動物の生態を把握する際の傍証データとして活用できると考えられる。

こうして収集されたデータで被害対策を講じることは無論のこと、遊休化が見込まれる農地を把握し、野生動物が隣にいながら被害が軽減される農業システムとディア・ウォッチングなど隣に野生動物がいることを地域復興に



山の農業ルネッサンス構想

活用した地域マネジメントシステム、の整備に活用することが重要である。

社会システムの問題として、シカ料理を地域特産にしようとするとなり法制上の問題が出てくる。野生動物の屠畜場設置の問題とあわせて整備する必要がある。また、農地の耕作放棄地化への対策として、「土地利用調整」のみならず「農業の担い手」や「地域振興」を含めた総合型農業公社を設置し、これをマネジメントの核とするアウトソーシング農業が育つよう制度を整備することが求められる。

里地の農業は、市場の狭隘性、低生産性圃場での少量生産といった問題を抱えている。しかし、「いかに美味しく食べるか」を体験を通して提供した場合、大きな可能性を秘めている。a.丹沢大山食のサミット、b.丹沢大山食フェア、c.お袋の味コンテスト、d.丹沢大山の味料理教室、e.“山”で食べ物探し、からなる「丹沢大山食の文化祭」を開催し、地物と味をアピールする必要がある。

(日暮晃一)

一方、「水・住の復興」の視点からは、モデル地区における水辺空間・親水空間もふくめた生活空間の過去と現在が明らかになりつつある。とくに津久井町青根地区においては、「伝説」もふくめた歴史との対応から、集落空間の平面構成の系譜について明らかにした。また、ワークショップにより地域資源の「発見」=再発見と、それらが点在する断面構成上、重要なエリアが明らかになった。

今後、青根地区における暮らしの再生⇒復興(ルネッサンス)にむけたシナリオを描くにあたっては、この集落空間の平面構成の系譜と断面構成でのポイントをつなげることが、つまりこれらの空間的な連携をはかってゆくことがキーになると考えられる。そのときには当然、現在暮らしのなかでの緊急課題としてあげられる鳥獣被害の問題も関係してくる。

これらのことを念頭に、青根地区ではさらなる文献調査と現地調査をつづけてゆくとともに、ひきつづきワークショップを開催する。第2回目のワークショップでは青根地区の活性化のためのビジョンづくりを、第3回目では青根地区の総合的な保全・活性化計画づくりをおこなってゆく予定である。

また、ほかのモデル地区においてもさらなる調査を継続してゆき、さらに現在作成中の「暮らしの環境歴史年表」を完成させることにより、丹沢大山地域における暮らし再生グループのモデル地区の位置づけ、ならびに地区どおしのつながりがさらに明確になると考えられる。それらのことが、丹沢大山地域全体における暮らし再生⇒復興（ルネッサンス）にむけたシナリオづくりにつながるものと期待している。

（栗原伸治）

4. まとめ

暮らし再生グループでは今年度、「復興（＝ルネッサンス）」をテーマに、「水の復興」、「食の復興」、「住の復興」の3本柱、プラス「大山街道（文化）」（含江ノ島街道）という視点から調査をおこなってきた。

おもな調査内容は、以下の6点にまとめることができる。

- ア. 食文化史調査：遺跡・遺物の踏査、発掘調査報告書等検討
- イ. 地域資源把握、農業経営の広域概査、松田町寄地区で農地・農業者聞き取り・鳥獣被害実施調査、松田町ミカンオーナー制、「秦野市田原ふるさと公園」実査、旧生活改良普及員から地域食文化ヒアリング、「東地区農産物直売センター」等食アンケート調査、直売関係者のヒアリング調査の実施
- ウ. 地域開発経営実証調査としてモデル地区松田町寄地区でWS（2004年12月5日）
- エ. 鳥獣被害実態アンケート調査を松田町寄地区、津久井町青根地区で実施
- オ. モデル集落調査として、山北町玄倉地区で水・住空間・集落空間詳細調査
- カ. 地域再生の総合的課題と再生シナリオ作成のモデル地区として津久井町青根地区を選定し、青根地区振興協議会住民との協働WS実施（2005年2月6日）

また、おもな調査結果は、以下の3点にまとめることができる。

- ア. 丹沢の農と食の復活：(f)縄文遺跡、石製農具の出土、考古土壌層位学的に農耕地の跡が確認され、丹沢の自然は“社会化された自然”である。諏訪神社の分布よりシカ等を食する長野方面の文化の影響が歴史的に強い。(g)麓集落機能の存続は松田町寄で10年、津久井町青根3～5年と住民はみる。原因はa.野生動物被害、b.地域産業発展を阻む社会システムにある。前者の緊急対策はa.被害実態把握調査（GPSの活用等）、b.被害対策・被害対応の実態調査、c.被害動物の生態調査、d.関係諸機関による緊急戦略会議の開催がある。後者の対策は、農地保有合理化事業など「土地利用調整」と地域振興のための総合型農業公社を設置する。(h)里地農業は一部観光農業的展開が始まり、地理的利点を生かした「丹沢大山食のサミット」等のスローフード運動の推進がある。
- イ. 獣被害アンケート結果：松田町寄地区、津久井町青根地区ともに、平成10年頃からの被害が増加し、シカ、イノシシ被害がとくに多い。被害は、寄では地域全体に及び、ついで「山際」が4割と高い。青根でも「山際」は36%と多い。寄では、96%の農家で被害があり、63%がとても酷く、落花生、トウモロコシ、サツマイモの被害が上位で、これらの栽培を中止している農家も多い。「農業は現在のまま続ける」が約半数を占め、縮小は3割である。被害届けは8割が提出していない。一方、青根では、農作物の栽培は自給を主とする世帯が65%で、8割が被害を受けており、33%がとてもひどいと回答している。トウモロコシ、サツマイモの被害が上位で、これらの栽培を中

止している農家も多い。「農業は現在のまま続ける」が61%を占め、「縮小する」は17%である。対策は、寄、青根ともに「柵の設置」、「狩猟」（地元の猟友会）であり、地域全体での対策必要性は7割以上、行政要望は「新しい防護柵の設置」、「有害獣駆除規制の改善」が過半数を占めた。「農地と山野を柵で区別する（当面は）、鳥獣が住みやすい山に（将来的には）」等の鳥獣との共生関係を模索する意見もある。

ウ. 丹沢の水・住・集落の暮らしの復活：(7)「丹沢大山環境歴史年表」（作成中）より北丹沢と南丹沢での相違がみえ、山・川・集落の関係からモデル調査地区を選定した。秦野市大倉・蓑毛は水路等の水文化、農業と蕎麦の食文化、松田町寄では農業と食文化、水文化、鳥獣被害状況、山北町玄倉はセギやミズフネの水文化、住文化、鳥獣被害状況などを把握した。(4)津久井町青根は水路・水車の水文化、農業や鳥獣での食材の調達法・調理法の食文化、鳥獣被害対策用柵の位置と構法、住居・集落の景観・空間構成、自治組織を把握した。また、歴史と対応した集落空間構成とその系譜についても考察した。地域振興会とのワークショップでは、地域の魅力発見と課題・ビジョンの整理をした。少子高齢化、若者の職場不足の課題があり、地域資源を多面的に生かした、山間地の土地を有効活用した「スローライフ」的な暮らしづくりがキーワードとしてあがった。

(※長浩司、日暮晃一、栗原伸治)

5. 引用・参考文献

- 1) 山北町（編）（2003）：山北町史 資料編 近世、山北町
- 2) 秦野市（編）（1982）：秦野市史 第二巻 近世史料1、秦野市
- 3) 秦野市（編）（1987）：秦野市 別巻 民俗編、秦野市
- 4) 秦野市管理部文書課市史編さん担当（1996）：図説 秦野の歴史年表<稿>、秦野市
- 5) 「図説・秦野の歴史」編集委員会（編）（1996）：図説 秦野の歴史、秦野市
- 6) 秦野市教育委員会（編）（1998）：秦野のすまい（1）－農家編－
- 7) 秦野市立桜土手古墳展示館、東海大学校地内遺跡調査団（編）（2003）：
丹沢を仰ぐ縄文遺跡－後・晩期の隆盛－
- 8) 伊勢原町教育委員会（編）（1968）：原本 伊勢原町史年表、伊勢原町
- 9) 津久井町教育委員会、津久井町郷土誌編集委員会（編）（1987）：
津久井町郷土誌、津久井町教育委員会
- 10) 津久井町文化財保護委員会（編）（1992）：つくい町の古道、津久井町教育委員会
- 11) 津久井町文化財保護委員会（編）（1994）：つくい町の地名、津久井町教育委員会
- 12) 津久井町文化財保護委員会（編）（2000）：津久井町の歴史今昔、津久井町教育委員会
- 13) 津久井町史編集委員会（編）（2001）：
ふるさと津久井 第2号、津久井町役場企画政策室
- 14) 津久井町史編集委員会（編）（2002）：
津久井の古地図 ふるさと津久井 第3号（特別号）、津久井町役場企画政策室
- 15) 津久井町教育委員会：つくい町 文化財 歴史地図
- 16) 山口文一（1991）：やまびこー続丹沢山麓雑記一、神奈川新聞出版局

資料編リスト

- 資料1 環境歴史年表
- 資料2 暮らしの概要
- 資料3 食農実態調査
- 資料4 秦野消費者アンケート
- 資料5 そば処消費者アンケート
- 資料6 青根の水車
- 資料7 鳥獣被害防護柵実態
- 資料8 鳥獣被害アンケート
- 資料9 青根 WS

